

# 柏 崎 町

— 新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書 —

2001

柏崎市教育委員会

# 柏 崎 町

— 新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書 —

2 0 0 1

柏 崎 市 教 育 委 員 会

# 柏 崎 町

— 新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書 —

2001

柏崎市教育委員会



## 序

柏崎市の中心部は、湊を中心に発展した歴史ある町とされ、それは昔から自明のこととして知られていました。ところが、不思議なことに遺跡として語られることはなく、いつ頃からどのような町並みとして発展してきたのか、これまでほとんど議論されないまま今日に至っていました。このような状況の中、旧市街地における大規模な再開発事業として、東本町まちづくり事業が実施されることになりました。当該事業に伴う埋蔵文化財の調査は、中世から近世における町並みが、具体的にどのようなようであったかを知る大きなきっかけとなったのです。

しかし、柏崎の旧市街地は、近代・現代においても、地域の中心として生き続け、発展してきました。その結果、これまでの諸開発により、遺跡が残されている区域は僅かとなってしまいました。しかも、調査対象とされた東本町1丁目地内は、湊を中心に発展したとされる柏崎の町にとって、東のはずれに位置していました。ところが、壊れずに残されていた地点を発掘調査したところ、室町時代以降現代まで連続と発展してきた柏崎の歴史が掘り起こされたのです。

これらの成果を報告する本書は、さまざまな制約からささやかとはなっていますが、発掘調査された柏崎市街地の歴史を、初めて報告するものであり、その意味は大きいものと思います。この本書が活用され、地域での歴史理解の一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、このたびの発掘調査が無事終了し、調査報告書として刊行するまでに至れたことは、事業主体であります柏崎東本町A地区市街地再開発組合、並びに施工を担われました植木・阿部・東北工業共同企業体等多くの関係者から得られたご理解とご協力の賜物であります。また、現場作業に直接あたられました柏崎市シルバー人材センターの会員各位および調査員各位におかれましては、暑い夏からみぞれに見舞われた冬まで、時には投光機に照らされながら、夜まで作業を行っていただきました。この柏崎町遺跡の調査は、大変難しい調査ではありましたが、最後まで調査に参加され、努力を惜しまなかった多くの皆様に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成13年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

# 例 言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市東本町1丁目地内に所在する柏崎町遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、柏崎東本町A地区市街地再開発組合から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施したものである。
3. 発掘調査現場作業は、平成11年7月から12月末まで実施し、現場作業にあたっては、社団法人柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けた。整理作業及び報告書作成作業は、調査終了後から平成12年度末まで実施し、柏崎市西本町3丁目喬柏園内遺跡調査室において行った。また、現場作業は、市教委文化振興課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員・調査補助員とし、整理・報告書作成作業は職員(学芸員)を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。調査と整理作業の体制は巻末の抄録とともに記した。
4. 調査によって出土した遺物は、註記に際し遺跡名を「柏崎町」とし、調査地区やグリッド名、遺構名および層序等を併記した。
5. 一部の遺物実測図の作成は柏崎市の委託を受けた株式会社国際航業が、写真実測による図化・トレースを行った。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、全て一括して柏崎市教育委員会(文化振興課遺跡調査室)が保管・管理している。
7. 報告書の執筆は、下記のとおり分担執筆とし、編集は品田が担当した。

第1章・第2章・第3章・第4章第1～2節・第5章第1～2節

・第Ⅷ章第2～3節・図面図版 …………… 品田高志

第Ⅵ章第1～3節・第5節・第Ⅶ章第1節～第3節・第5節・遺構図面図版・遺構写真図版

…………… 中野 純

第Ⅳ章第4節・第Ⅴ章第4節・第Ⅵ章第4節・第Ⅶ章第4節・第Ⅷ章第1節

・遺物図面図版・遺物写真図版・遺物観察表 ……… 伊藤啓雄

第Ⅳ章第3節・第Ⅴ章第3節・遺構図面図版・遺構写真図版・遺構観察表 …………… 平吹 靖

8. 本書記載の図面類の方は、全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
9. 発掘調査から本書作成まで、事業主体者である柏崎東本町A地区市街地再開発組合および工事関係者等から様々なご協力とご理解を賜った。また、この他の方々からも、多大なご助力とご協力、ならびにさまざまな教示等を賜った。記して厚くお礼を申し上げる次第である。

相羽重徳・安藤正美・川又昌延・新沢佳大・高橋 保・鶴巻康志・三井田忠明・水澤幸一

宮田進一・渡辺三四一

植木・阿部・東北工業共同企業体・柏崎東本町A地区市街地再開発組合・柏崎市建設部中心部まちづくり推進室・柏崎市立図書館・柏崎市立博物館・北陸中世考古学研究会・新潟県教育庁文化行政課  
(五十音順・敬称略)

10. 遺構図版で使用したスクリーン・トーンと、インレタの凡例は以下の通りである。



石・礎

■ 陶磁器

▲ 石・礎



鉄 錐

□ 土 器

▲ 鉄 錐

# 目 次

I	調査に至る経緯	1
II	環 境	4
	1 地理的な環境と柏崎砂丘	4
	2 柏崎町遺跡の位置と立地	10
	3 柏崎町遺跡をめぐる歴史的な環境	11
	1) 柏崎平野の古代・中世概観	11
	2) 中・近世の柏崎町	12
III	遺 跡 概 観	18
	1 遺跡の現状と調査区	18
	2 発掘調査の概要	21
	1) グリッドの設定	21
	2) 調査の方法と工程	21
	3) 調査の工程と調査区概観	22
IV	A 1 - I 区の調査	23
	1 調査の経過	23
	2 基本層序と遺構面	24
	3 遺 構	27
	1) 第②面の遺構	27
	2) 第②下面の遺構	30
	3) 第③面の遺構	31
	4) 第③上面の遺構	32
	5) 第③～④面の遺構	34
	6) 第③下面の遺構	35
	7) 第④面の遺構	35
	8) 第④上面の遺構	38
	9) 第⑤～⑥面の遺構	40
	10) 第⑥面の遺構	40
	4 遺 物	41
	1) 土器・陶磁器・瓦器	41
	2) 土製品・瓦	48
	3) 石製品	49
	4) 金属製品	49
	5) 鍛冶関連遺物	50
	5 A 1 - I 区のまとめ	51
V	A 1 - II a 区の調査	53
	1 調査の経過	53
	2 基本層序と遺構面	55

3	遺 構	57
1)	第③面の遺構	57
2)	第④面の遺構	59
3)	第⑤面の遺構	62
4)	第⑥面の遺構	63
5)	第⑦面の遺構	64
4	遺 物	65
5	A1-II a 区のまとめ	69
VI A1-II b 区の調査 .....71		
1	調査の経過	71
2	層序と時期区分	72
3	遺 構	73
1)	第③面の遺構	73
2)	第④面の遺構	74
3)	第⑤面の遺構	76
4)	第⑥面の遺構	77
4	遺 物	78
5	調査区のまとめ	82
VII A1-III 区の調査 .....83		
1	調査の経過	83
2	層序と時期区分	84
1)	層序	84
2)	時期区分	87
3	遺 構	88
1)	第①面の遺構	88
2)	第②面の遺構	89
3)	第③面の遺構	90
4)	第④面の遺構	92
5)	第⑤面の遺構	93
4	遺 物	95
5	調査区のまとめ	102
VIII 調査の成果と課題 .....103		
1	中近世柏崎町における土器・陶磁器の様相と変遷	103
1)	はじめに	103
2)	土器・陶磁器類の組成	103
3)	土師器皿の様相と変遷	104
4)	おわりに	109
2	中近世の柏崎町東部域と遺構群	110
1)	はじめに	110
2)	遺構面の総括と遺構群	110
3)	建物跡群の検討	115
4)	柏崎町の幹線通りと景観	119
5)	おわりに—課題と展望—	120
3	調査の結果とまとめ	121
引用参考文献/123		
調査報告書抄録/巻末		

# 図版目次

## 図面図版

- 図版1 柏崎町遺跡のグリッドと調査区  
 図版2 A1-I区1 全体図1  
 図版3 A1-I区2 全体図2  
 図版4 A1-I区3 全体図3  
 図版5 A1-I区4 基本層序1  
 図版6 A1-I区5 基本層序2  
 図版7 A1-I区6 建物個別図1  
 図版8 A1-I区7 建物個別図2  
 図版9 A1-I区8 建物個別図3  
 図版10 A1-I区9 建物個別図4  
 図版11 A1-I区10 遺構個別図1(石組列1)  
 図版12 A1-I区11 遺構個別図2(石組列2)  
 図版13 A1-I区12 遺構個別図3  
 (第②下・③下面柱穴)  
 図版14 A1-I区13 遺構個別図4(第②上面土坑)  
 図版15 A1-I区14 遺構個別図5  
 (第②・②下面土坑)  
 図版16 A1-I区15 遺構個別図6  
 (第③～④・④上面土坑)  
 図版17 A1-I区16 遺構個別図7(第④上面土坑)  
 図版18 A1-I区17 遺構個別図8  
 (第④・④上面土坑)  
 図版19 A1-I区18 遺構個別図9(第④上面土坑)  
 図版20 A1-I区19 遺構個別図10  
 (第③下・③～④面井戸跡)  
 図版21 A1-I区20 遺構個別図11(第④上面溝跡)  
 図版22 A1-I区21 遺構個別図12  
 (第②・②下面鍛冶炉跡)  
 図版23 A1-I区22 遺構個別図13  
 (第③上・③下・④上面墓坑・鍛冶炉跡)  
 図版24 A1-I区23 出土遺物1(第②・②下面1)  
 図版25 A1-I区24 出土遺物2(第②面2)  
 図版26 A1-I区25 出土遺物3(第③・③上面1)  
 図版27 A1-I区26 出土遺物4(第③上面2)  
 図版28 A1-I区27 出土遺物5(第③下面1)  
 図版29 A1-I区28 出土遺物6  
 (第③上面3 第③下面2)  
 図版30 A1-I区29 出土遺物7(第③面2)  
 図版31 A1-I区30 出土遺物8(第③～④面1)  
 図版32 A1-I区31 出土遺物9(第③～④面2)  
 図版33 A1-I区32 出土遺物10(第④・④上面1)  
 図版34 A1-I区33 出土遺物11(第④・④上面2)  
 図版35 A1-I区34 出土遺物12(第⑤・⑤面)  
 図版36 A1-I区35 出土遺物13(その他)  
 図版37 A1-I区36 出土遺物14(金属製品1)

- 図版38 A1-I区37 出土遺物15  
 (金属製品2 石製品1)  
 図版39 A1-I区38 出土遺物16(石製品2)  
 図版40 A1-IIa区1 全体図1  
 図版41 A1-IIa区2 全体図2  
 図版42 A1-IIa区3 基本層序1  
 図版43 A1-IIa区4 基本層序2  
 図版44 A1-IIa区5 基本層序3  
 図版45 A1-IIa区6 建物跡個別図1  
 図版46 A1-IIa区7 建物跡個別図2  
 図版47 A1-IIa区8 建物跡個別図3  
 図版48 A1-IIa区9 建物跡個別図4  
 図版49 A1-IIa区10 遺構個別図1  
 (第③・④面柱穴・ピット)  
 図版50 A1-IIa区11 遺構個別図2  
 (第③・④面柱穴・ピット)  
 図版51 A1-IIa区12 遺構個別図3  
 (第④・⑤面柱穴・ピット)  
 図版52 A1-IIa区13 遺構個別図4  
 (第⑤・⑥面土坑)  
 図版53 A1-IIa区14 遺構個別図5  
 (第⑤面溝跡・第⑥面井戸跡)  
 図版54 A1-IIa区15 出土遺物1(第①・②面)  
 図版55 A1-IIa区16 出土遺物2(第③面1)  
 図版56 A1-IIa区17 出土遺物3(第③面2)  
 図版57 A1-IIa区18 出土遺物4(第④面1)  
 図版58 A1-IIa区19 出土遺物5(第④面2)  
 図版59 A1-IIa区20 出土遺物6(第④面3)  
 図版60 A1-IIa区21 出土遺物7(第⑤面)  
 図版61 A1-IIa区22 出土遺物8  
 (第⑥・⑥下面ほか)  
 図版62 A1-IIa区23 出土遺物9(石製品・羽口)  
 図版63 A1-IIa区24 出土遺物10(金属製品)  
 図版64 A1-IIb区1 全体図1  
 図版65 A1-IIb区2 全体図2  
 図版66 A1-IIb区3 全体図3  
 図版67 A1-IIb区4 全体図4  
 図版68 A1-IIb区5 基本層序1  
 図版69 A1-IIb区6 建物個別図1  
 図版70 A1-IIb区7 建物個別図2  
 図版71 A1-IIb区8 遺構個別図1  
 (第③・④面柱穴・ピット)  
 図版72 A1-IIb区9 遺構個別図2  
 (第③・④面柱穴・井戸跡)  
 図版73 A1-IIb区10 出土遺物1(第③面1)  
 図版74 A1-IIb区11 出土遺物2  
 (第③面2 第④面1)

図版75 A1-Ⅱb区12 出土遺物3 (第④面2)  
 図版76 A1-Ⅱb区13 出土遺物4 (第④面3)  
 図版77 A1-Ⅱb区14 出土遺物5 (第④面4)  
 図版78 A1-Ⅱb区15 出土遺物6  
 (第④面5 第⑤面1)  
 図版79 A1-Ⅱb区16 出土遺物7 (第⑤面2)  
 図版80 A1-Ⅱb区17 出土遺物8  
 (第①・②面 金属製品1)  
 図版81 A1-Ⅱb区18 出土遺物9  
 (金属製品2ほか)  
 図版82 A1-Ⅲ区1 全体図1  
 図版83 A1-Ⅲ区2 全体図2  
 図版84 A1-Ⅲ区3 全体図3  
 図版85 A1-Ⅲ区4 全体図4  
 図版86 A1-Ⅲ区5 全体図5  
 図版87 A1-Ⅲ区6 基本層序1  
 図版88 A1-Ⅲ区7 基本層序2  
 図版89 A1-Ⅲ区8 基本層序3  
 図版90 A1-Ⅲ区9 遺構個別図1  
 (第②～⑤面土坑)  
 図版91 A1-Ⅲ区10 遺構個別図2  
 (第②面鐵冶炉跡・SX)  
 図版92 A1-Ⅲ区11 遺構個別図3  
 (第②・③面SX)  
 図版93 A1-Ⅲ区12 遺構個別図4  
 (第③面鐵冶炉跡・SX)  
 図版94 A1-Ⅲ区13 遺構個別図5 (第③面SX)  
 図版95 A1-Ⅲ区14 遺構個別図6  
 (第③～⑤面井跡)  
 図版96 A1-Ⅲ区15 遺構個別図7 (第②面溝跡)  
 図版97 A1-Ⅲ区16 遺構個別図8  
 (第②・③面溝跡)  
 図版98 A1-Ⅲ区17 出土遺物1 (第①面1)  
 図版99 A1-Ⅲ区18 出土遺物2 (第①面2)  
 図版100 A1-Ⅲ区19 出土遺物3 (第②面1)  
 図版101 A1-Ⅲ区20 出土遺物4 (第②面2)  
 図版102 A1-Ⅲ区21 出土遺物5 (第②面3)  
 図版103 A1-Ⅲ区22 出土遺物6 (第②面4)  
 図版104 A1-Ⅲ区23 出土遺物7 (第②面5)  
 図版105 A1-Ⅲ区24 出土遺物8 (第②面6)  
 図版106 A1-Ⅲ区25 出土遺物9 (第②面7)  
 図版107 A1-Ⅲ区26 出土遺物10 (第③面1)  
 図版108 A1-Ⅲ区27 出土遺物11 (第③面2)  
 図版109 A1-Ⅲ区28 出土遺物12 (第③面3)  
 図版110 A1-Ⅲ区29 出土遺物13 (第③面4)  
 図版111 A1-Ⅲ区30 出土遺物14 (第③面5)  
 図版112 A1-Ⅲ区31 出土遺物15 (第③面6)  
 図版113 A1-Ⅲ区32 出土遺物16 (第③面1)  
 図版114 A1-Ⅲ区33 出土遺物17 (第④面2)  
 図版115 A1-Ⅲ区34 出土遺物18 (第③面3)

図版116 A1-Ⅲ区35 出土遺物19 (第④面4)  
 図版117 A1-Ⅲ区36 出土遺物20 (第④面5)  
 図版118 A1-Ⅲ区37 出土遺物21 (第⑤面)  
 図版119 A1-Ⅲ区38 出土遺物22 (その他)  
 図版120 A1-Ⅲ区39 出土遺物23 (金属製品1)  
 図版121 A1-Ⅲ区40 出土遺物24 (金属製品2)  
 図版122 A1-Ⅲ区41 出土遺物25 (石製品)

#### 写真図版

図版123 柏崎町遺跡1  
 図版124 柏崎町遺跡2  
 図版125 A1-I区1 a. 南北ベルト層序  
 b. 表土剥ぎ開始 c. 作業風景 d. 石列組  
 e. SKP-33・34  
 図版126 A1-I区2 a. SK-7 b. SK-54  
 c. SX-13 d. 第②面完掘状況  
 e. 第②面完掘状況  
 図版127 A1-I区3 a. 第②下面完掘状況  
 b. SK-117 c. SK-123 b  
 d. SX-105 e. SX-116  
 図版128 A1-I区4 a. 第③面完掘状況  
 b. SK-164 c. SK-166 d. SK-177  
 e. 調査スナップ  
 図版129 A1-I区5 a. 第③上面完掘状況  
 b. SK-201遺物出土状況  
 c. SK-201・202 d. SK-217  
 e. SK-230  
 図版130 A1-I区6 a. SX-215  
 b. SX-209刀子出土状況  
 c. SX-209完掘 d. SD-218・222・223  
 e. 第③～④面完掘状況  
 図版131 A1-I区7 a. SK-287 b  
 b. SE-275 c. SE-275周辺  
 d. SK-289 e. 第③下面完掘状況  
 図版132 A1-I区8 a. SKP-251 a  
 b. SKP-251 b c. SKP-251 c  
 d. SE-252 b e. SE-252 c  
 f. SE-255 g. SX-267 a・b  
 h. SX-268  
 図版133 A1-I区9 a. 第④面完掘状況  
 b. SK-316 c. SX-303 d. SX-304  
 e. SX-305  
 図版134 A1-I区10 a. SX-306 a  
 b. SX-312 c. SX-317 a  
 d. SX-334 e. SX-338  
 f～h. 第④面完掘状況  
 図版135 A1-I区11 a. 第④上面完掘状況  
 b. SK-349 c. SK-361 d. SK-411  
 e. SX-348  
 図版136 A1-I区12 a. 第⑤～⑥面遺構検出状況

- b. SX-500遺物検出状況
- 図版137 A1-I区13 a. 第⑥面完掘状況  
b. 南区西壁崩序
- 図版138 A1-I区14 土器・陶磁器類1・2
- 図版139 A1-I区15 土器・陶磁器類3
- 図版140 A1-I区16 土器・陶磁器類4
- 図版141 A1-I区17 土器・陶磁器類5
- 図版142 A1-I区18 土器・陶磁器類6
- 図版143 A1-I区19 土器・陶磁器類7
- 図版144 A1-I区20 土器・陶磁器類8
- 図版145 A1-I区21 土器・陶磁器類9
- 図版146 A1-I区22 土器・陶磁器類10
- 図版147 A1-I区23 土器・陶磁器類11
- 図版148 A1-I区24 土器・陶磁器類12
- 図版149 A1-I区25 土器・陶磁器類13
- 図版150 A1-I区26 土器・陶磁器類14
- 図版151 A1-I区27 土器・陶磁器類15
- 図版152 A1-I区28 土器・陶磁器類16
- 図版153 A1-I区29 土器・陶磁器類17
- 図版154 A1-I区30 土器・陶磁器類18
- 図版155 A1-I区31 土器・陶磁器類19
- 図版156 A1-I区32 土器・陶磁器類20
- 図版157 A1-I区33 土器・陶磁器類21ほか
- 図版158 A1-I区34 土製品・瓦
- 図版159 A1-I区35 「高田徳利」
- 図版160 A1-I区36 石製品・羽口
- 図版161 A1-I区37 石臼
- 図版162 A1-I区38 銭貨1
- 図版163 A1-I区39 銭貨2
- 図版164 A1-IIa区1 a. 第③面完掘状況  
b. SKP-583 c. SKP-620  
d. SKP-647 e. SKP-658
- 図版165 A1-IIa区2 a. SKP-699  
b. SKP-703 c. SKP-711  
d. SKP-718 e. SKP-737  
f. SX-693 g. SX-694  
h. SD-780 a・b
- 図版166 A1-IIa区3 a. 第④面完掘状況  
b. 第④面南区(SB-11)完掘状況
- 図版167 A1-IIa区4 a. SKP-807~811  
b. SKP-858 c. SK-813  
d. SK-821・822 e. SK-839  
f. SK-857 g. SK-884 h. SD-829
- 図版168 A1-IIa区5 a. 調査スナップ  
b~e. 第⑤面完掘状況
- 図版169 A1-IIa区6 a. 第⑥面南区完掘状況  
b. 第⑥面中央区土坑集中部 c. SK-900  
d. SK-901 f. SE-891・SK-893
- 図版170 A1-IIa区7 a. 第⑦面完掘状況  
b. 調査スナップ c~h. 調査区西壁崩序
- 図版171 A1-IIa区8 土器・陶磁器類1
- 図版172 A1-IIa区9 土器・陶磁器類2
- 図版173 A1-IIa区10 土器・陶磁器類3
- 図版174 A1-IIa区11 土器・陶磁器類4
- 図版175 A1-IIa区12 土器・陶磁器類5
- 図版176 A1-IIa区13 土器・陶磁器類6
- 図版177 A1-IIa区14 土器・陶磁器類7
- 図版178 A1-IIa区15 土器・陶磁器類8
- 図版179 A1-IIa区16 土器・陶磁器類9
- 図版180 A1-IIa区17 土器・陶磁器類10
- 図版181 A1-IIa区18 土器・陶磁器類11
- 図版182 A1-IIa区19 土器・陶磁器類12
- 図版183 A1-IIa区20 石製品ほか
- 図版184 A1-IIa区21 銭貨1
- 図版185 A1-IIa区22 銭貨2
- 図版186 A1-IIa区23 金属製品・羽口
- 図版187 A1-IIb区1 第③面全景
- 図版188 A1-IIb区2 a. 第③面全景(南側)  
b. SKP-2037
- 図版189 A1-IIb区3 第④面全景
- 図版190 A1-IIb区4 第④面全景
- 図版191 A1-IIb区5 第⑤面全景
- 図版192 A1-IIb区6 第⑤面全景
- 図版193 A1-IIb区7 第⑤・⑥面全景
- 図版194 A1-IIb区8 第⑥面全景
- 図版195 A1-IIb区9 土器・陶磁器類1
- 図版196 A1-IIb区10 土器・陶磁器類2
- 図版197 A1-IIb区11 土器・陶磁器類3
- 図版198 A1-IIb区12 土器・陶磁器類4
- 図版199 A1-IIb区13 土器・陶磁器類5
- 図版200 A1-IIb区14 土器・陶磁器類6
- 図版201 A1-IIb区15 土器・陶磁器類7
- 図版202 A1-IIb区16 土器・陶磁器類8
- 図版203 A1-IIb区17 土器・陶磁器類9
- 図版204 A1-IIb区18 土器・陶磁器類10ほか
- 図版205 A1-IIb区19 銭貨
- 図版206 A1-IIb区20 その他の遺物
- 図版207 A1-III区1 第①面調査区全景
- 図版208 A1-III区2 a. 作業風景 b. SX-1037  
c. SX-1038 d. SX-1043 a・b  
e. SD-1033
- 図版209 A1-III区3 第②面調査区全景
- 図版210 A1-III区4 a. SX-1115  
b. SX-1115・1116 c. SX-1117  
d. SX-1122 e. SK-1138 f. SK-1175  
g. SK-1192 h. SD-1144
- 図版211 A1-III区5 第③面調査区全景
- 図版212 A1-III区6 a. 第③面調査区全景  
b・c. 第③面全景 d. SX-1241  
e. SX-1264

図版213	A 1-III区7 a, SX-1272 b~e, SX-1339 f, SE-1239 g・h, SE-1345
図版214	A 1-III区8 第④面調査区全景
図版215	A 1-III区9 a, 第④面調査区全景 b・c, SX-1464 d・e, SX-1470
図版216	A 1-III区10 a, 第④面調査区全景 b, 調査風景 c, SK-1559 d・e, SX-1543
図版217	A 1-III区11 第⑤面調査区全景
図版218	A 1-III区12 a, 第⑤面調査区全景 b, SK-1467 c, SK-1682・1685 d, SK-1697 e, SE-1456・1707
図版219	A 1-III区13 土器・陶磁器類1
図版220	A 1-III区14 土器・陶磁器類2
図版221	A 1-III区15 土器・陶磁器類3
図版222	A 1-III区16 土器・陶磁器類4
図版223	A 1-III区17 土器・陶磁器類5
図版224	A 1-III区18 土器・陶磁器類6
図版225	A 1-III区19 土器・陶磁器類7
図版226	A 1-III区20 土器・陶磁器類8
図版227	A 1-III区21 土器・陶磁器類9
図版228	A 1-III区22 土器・陶磁器類10
図版229	A 1-III区23 土器・陶磁器類11
図版230	A 1-III区24 土器・陶磁器類12

図版231	A 1-III区25 土器・陶磁器類13
図版232	A 1-III区26 土器・陶磁器類14
図版233	A 1-III区27 土器・陶磁器類15
図版234	A 1-III区28 土器・陶磁器類16
図版235	A 1-III区29 土器・陶磁器類17
図版236	A 1-III区30 土器・陶磁器類18
図版237	A 1-III区31 土器・陶磁器類19
図版238	A 1-III区32 土器・陶磁器類20
図版239	A 1-III区33 土器・陶磁器類21
図版240	A 1-III区34 土器・陶磁器類22
図版241	A 1-III区35 土器・陶磁器類23
図版242	A 1-III区36 土器・陶磁器類24
図版243	A 1-III区37 土器・陶磁器類25
図版244	A 1-III区38 土器・陶磁器類26
図版245	A 1-III区39 土器・陶磁器類27
図版246	A 1-III区40 土器・陶磁器類28
図版247	A 1-III区41 土器・陶磁器類29
図版248	A 1-III区42 石臼・茶臼
図版249	A 1-III区43 銭貨1
図版250	A 1-III区44 銭貨2
図版251	A 1-III区45 銭貨3
図版252	A 1-III区46 硯・砥石・刀子ほか
図版253	A 1-III区47 その他の遺物
図版254	調査スタッフ 調査風景・調査スタッフ

## 挿 図 目 次

第1図	柏崎平野の地形分類図と柏崎町の位置/5	第12図	A 1-II a区基本層序と遺構面模式図(1)
第2図	柏崎砂丘ボーリング調査地点/6	第13図	A 1-II a区基本層序と遺構面模式図(2) /54
第3図	柏崎砂丘概念図(試案)/6	第14図	柏崎町遺跡出土土器・陶磁器共存関係図/107
第4図	柏崎砂丘地質柱状図/7	第15図	柏崎町遺跡出土タール等付着土師器皿/107
第5図	刈羽郡城の荘・保と条(概念図)/13	第16図	柏崎町遺跡建物跡配置図(1)/112
第6図	近世後期の柏崎町古絵図/15	第17図	柏崎町遺跡建物跡配置図(2)/113
第7図	近世の柏崎町中心部/16	第18図	柏崎町遺跡建物跡集成図(1)/116
第8図	東本町まちづくり事業地/19	第19図	柏崎町遺跡建物跡集成図(2)/117
第9図	Aブロックと建物配置/19	第20図	建物跡主軸方位グラフ/118
第10図	A 1-I区基本層序と遺構面模式図/25		
第11図	柏崎町遺跡出土中世土師器皿器形分類図/43		

## 表 目 次

第1表	柏崎町略年表/17	第6表	柏崎町遺跡出土土製品観察表/197
第2表	柏崎町遺跡出土土器・陶磁器類出土量(破片数) /105	第7表	柏崎町遺跡出土羽口観察表/197
第3表	柏崎町遺跡建物跡等一覧表/117	第8表	柏崎町遺跡出土銭貨観察表/198
第4表	柏崎町遺跡遺構観察表/125	第9表	柏崎町遺跡出土金属製品観察表/200
第5表	柏崎町遺跡出土土器・陶磁器類観察表/155	第10表	柏崎町遺跡鉄滓出土遺構・地点一覧表/201

## I 調査に至る経緯

**中世柏崎町の風景** 現旧市街地の基となる柏崎の町並みは、中世において漢を中心にして栄えたとされ、近世以降、順次東側へ発展・拡大したとされていた。したがって、これまで考えられていた中世における柏崎の町並みとは、主に西本町側に発展し、東本町側は近世以降の町並みが広がったという認識が一般的であった。現在の柏崎市街地は、鶴川河口付近に港を持ち、その東側一帯に市街地が広がっている。この風景は、港の位置が若干異なっても、かなり古い時代からの景観を受け継いでいるらしいのである。

「九日。入柏崎。々々市場之面三千余家。其外深巷凡五六千戸。」

『梅花無尽蔵』に記された長享2年(1488)10月現在における柏崎の町並である[柏崎市史編さん委1987(No.114文書)]。当時の柏崎町を正確に伝えたと言うより、かなりの誇張を考慮せざるを得ないが、旅人に与えた町並の印象が強く表れている。そして、後に謙信と名を変えの上杉輝虎が出たとされる永禄7年(1564)の制札(写)には、確かに「柏崎町」の字句が見える[柏崎市史編さん委1987(No.257文書)]。事例は少ないが、中世後期一特に戦国期の旧柏崎市街地は、かなり多くの家が建ち並び、それ相応の人口を有する町に発展していたことが、これら記録類からうかがわれるのである。しかし、『梅花無尽蔵』に記された15世紀後半の町並みは、そのまま現代まで引き継がれた訳ではない。

先ほどの上杉輝虎の制札は、興廃した柏崎町の復興を意図したものであり、この年以前からすでに復興策がとられていたことも記されている。興廢の要因は定かでないが、享禄3年(1530)から天文6年(1533)にかけて勃発した享禄・天文の乱などの影響をまともに受けていた可能性が考えられる。16世紀半ば前後の柏崎町とは、実態が不明ながら、かなり興廢していたと見られるのである。

**東本町まちづくり事業** ところで、中世において大きく発展し、町を形成していたとされる柏崎の町跡は、たとえ一時的に興廢しても、考古学的な痕跡は残される。ところが、これまで一度も遺跡として認識されることはなく、また実際に旧市街地から中世の遺物・遺構が発見されたという報告例もなかった。このような状況の中、市街地の中心部に位置する東本町一丁目地内において、延べおよそ4万㎡にもおよぶ東本町まちづくり事業がスタート、平成8年度から本格的に着工されることとなった。中世の柏崎町を探索する考古学的な調査は、この再開事業が端緒となったのである。

このまちづくり事業は、平成3年8月に東本町まちづくり委員会が発足し、基本計画の策定などに着手した。対象となる区域は、東本町1丁目地区(旧本町5・6丁目商店街)であり、本町通りとなる国道沿いの延長約400m区間を対象とした大規模な事業である。基本計画は、さまざまな検討が加えられ、平成5年に策定された。基盤整備の方針は、現本町通りの国道を両側それぞれ3m拡幅して16mにするとともに駐車場を整備し、開発区域を西側からA・B・Cの3ブロックに分け、それぞれ特徴あるまちづくりをしていこうとする構想であり、各ブロックそれぞれの開発主体も別個に担うこととされた。

まず、Aブロックは、柏崎東本町A地区市街地再開発組合が開発主体となり、「周辺の公共公益施設と連携した、商業・住宅・業務・交流・コンベンション機能を有するコミュニティの核を整備し、かつ来街者の利便性を図る駐車場を整備する」ものとされた。Bブロックは、「個店からなる専門店群として整備しなおし、AブロックとCブロックの回遊性の形成を図る」とされ、各個店・商店街振興組合が開発主体であった。Cブロックでは、「大規模商業施設としてショッピングセンターを建設し、これを核に商業基

施設等の整備を行い、楽しく賑わいのある商業の核を形成」することを目指す内容となっていた。事業主体は官民共同の第三セクター、(株) 柏崎ショッピングモールである。

本事業にかかる埋蔵文化財の取扱い等については、基本構想策定後の平成6年度以降において、事務的な協議が行われていた。しかし、当時はいまだ事業の具体的な実施時期が確定していなかったこと、また再開発区域が市街地の中心部にあり、試掘可能な空き地がまったくないこともあって、直ちに調査を実施できる状況にはなっていなかった。このため、もう少し事業が具体化した段階に、試掘場所を検討するなど、あらためてその取扱いを協議することとしていた。

**柏崎町遺跡の発見** 東本町まちづくり事業は、前述したように、平成3年に事業を推進する組織等が設置されるとともに、実施構想等の策定作業が開始された。そして平成8年には、実際の解体作業等が着手され、本格化するに至っていた。試掘・確認調査は、事業主体と同じく工事日程も異なる開発区域の区分にしたがって、A・B・Cの3ブロックに分けて実施することになった。これらの街区は、本町通りに沿いながらA・B・Cの順に配列し、西本町に接する最も西側がAブロック、最も東側にCブロックが位置していた。最初に調査を実施したのは、柏崎町遺跡の中心部から最も離れたCブロックにおいてである。試掘調査は、平成9年5月に実施され、中世後期の土師器皿が検出されたが、西本町から最も遠い地点であったためか、遺構や遺物包含層の確認はされなかった [柏崎市教委1998]。

ところが、平成11年1月12日と同年2月5日に実施されたAブロック地内の試掘・確認調査によって、初めて中世後期の遺物とその包含層が発見され、しかもその上層位を近世の町並み遺構が厚く覆っていることが判明したのである。以後、本集落跡は、中世から近世にわたる柏崎の町並み跡と理解され、平成11年2月15日に「柏崎町遺跡」として、正式に周知化されるに至ったのである [柏崎市教委2000]。

なお、これら一連の調査によって、中世柏崎町の広がり、現在の東本町一丁目の一部まで広がっていたことが確認されたが、その広がりにはBブロックまでほとんど至っていなかったことが確認調査で明らかにされている [柏崎市教委2000]。したがって、中世の柏崎町が、鶴川河口付近の湊を中心にして発展したとすれば、町並みの広がり、東本町一丁目付近までの広大な範囲が想定されることとなったのである。

**A1ブロックの確認調査** 東本町まちづくり事業地内におけるAブロックは、建設される建物の配置によって3小区に分割され、本町通り南側(下町)にA2(棟)とA3(棟)の2ブロック、北側(上町)にはA1(棟)ブロックがセッティングされていた。中世の遺物包含層が最初に確認されたのは、解体工事が先行していたA2・A3ブロックにおいてであった [柏崎市教委2000]。A1ブロックの取扱いについては、A2・A3ブロックと作業日程が全く異なることから、文化財保護法第57条の2に基づく土木工事等の届出についても別扱いとし、平成11年4月1日付け、柏再組第37号の1によりあらためて提出され、同年4月14日付けで県教委宛に進達された。

確認調査等の実務については、工事日程がかなり逼迫していた事情から、文化財保護法上の手続きと並行して進められた。平成11年4月8日、A1ブロックにおける初めての確認調査が実施された。その結果、地下およそ60cm付近という浅いところから中世遺構面が検出され、さらにその上位には18世紀頃の遺構面がしっかり整地されて覆っていることが確認されたのである。また、これら中世・近世の遺構面・遺物包含層が分布する範囲は、本町通り側縁からおおむね25mの幅で連続していることも明らかにされた。ただし、既存構造物によっては、基礎工事が深くまで及んでおり、すでに破壊された区画もあったが、それでも木造住宅の跡地からは良好に検出されたのである。

この調査結果は、これまでA2・A3ブロックで検出されていた中世包含層が、掘削面から2mと深い

深度であったことは大きく相違し、きわめて浅いレベルで検出されたことである。A1ブロック内における工事内容とは、主に建築物と区域外周をめぐる道路であるが、北辺に設定された道路部分については、遺構面や包含層が分布する範囲外にあったことから、本調査対象から除外出来る余地があった。しかし、遺構面の確認レベルが極めて浅かったという調査結果は、建築物の基礎工事に際し、かなりの影響を受ける可能性が高いことを意味するものとなったのである。また、この時の調査では、本調査実施を予想し、遺構面が確認された段階で、それ以上の掘削を中止したため、生活面の把握は不十分なまま調査を終了せざるを得なかった。しかし、下町側では、累積した生活面が何枚も確認されており、たとえ深度を浅く見積もったとしても、5ないし6枚以上の生活面は考慮せざるを得ない。つまり、A1ブロックにおける調査結果は、15世紀から18世紀に至る何枚もの生活面が形成され、その生活面の数だけ対象面積に乗せられることになるため、実際の調査面積は5～6倍となることを意味していたのである。

本発掘調査に向けて この結果を受け、平成11年4月14日の午後、A1ブロックにおける今後の埋蔵文化財の取扱い等の協議が行われ、本発掘調査が必要であることが、当該事業の行政側窓口である中心部まちづくり事業推進室へ伝えられた。そして翌15日には、現地にて施工業者を含めた協議を行い、工事日程と遺跡本発掘調査の具体的な調整を計った。

当該開発事業において、本発掘調査の対象される部分とは、遺構面分布域から外れた道路が除外されたことにより、建築物が直接的な対象となる。ただし、建築物の場合も、建物の平面全体や上屋構造が対象とされるのではなく、包含層や遺構面を損なう基礎工事に関わる部分において、遺物包含層や遺構などに影響を与える場合だけが対象とされる。工事関係者等から提示された該当物件は、建物の基礎となるパイルとそれらを結合させる地中大梁などの地下構造部分のみであった。パイルは一辺3mほどの点、梁は8m間隔であることから幅2mほどのトレンチでの対応として調査が計画された。また、工事の日程と調査期間の整合については、おおむね10月頃までに調査が終了すれば、大きな支障にはならないとされ、調査経費を6月補正予算に計上する関係から、発掘調査期間は6月議会が終了した7月から10月頃までとした。

平成11年4月28日、教文第71号により、県教委から柏崎東本町A地区再開発組合理事長宛に、本発掘調査を実施する旨を記載された通知が出された。本発掘調査は、建物の基礎部分に関わる柱（パイル）と地中大梁部分を対象に実施することとして準備が進められた。調査面積は、おおよそ500㎡、遺構面5枚を仮に想定して、全調査面積およそ2,500㎡と見積もられた。本発掘調査は、平成11年7月5日付け、教文第23号により、文化財保護法第98条の2の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行い、7月13日（火）に調査初日を設定、7月5日から9日までは、部分的な試掘や休憩小屋の設置・機材搬入、重機による表土除去作業等、準備を行った。

ところが、これまで大梁とパイルを対象に調査計画が立てられ、調査経費の予算が議決した直後の6月24日に至って、大梁以外に小梁があり、小梁の深度も遺構面を破壊することが明らかにされた。それからまもなく、現場作業準備に着手していた7月5日において、県道拡幅の工事が、調査区に接して幅4mにわたって実施されることが明らかとなり、これらの調査も追加せざるを得なくなった。これらの急な調査区の変更や追加がなされたことにより、調査の方法はトレンチ調査から面的な調査へ切り替えざるを得なくなった。特に対象面積は、当初の500㎡から1,200㎡に増大し、遺構面を5面とした場合の想定調査面積は、およそ6,000㎡に膨れ上がったのである。このような、調査着手直前における大幅な変更は、発掘調査の現場に大きな混乱を招き、調査期間や経費、あるいは調査員や作業員の員数等、調査体制そのほかすべてにわたる見直しが必要と迫られたのである。

## II 環 境

### 1 地理的な環境と柏崎砂丘

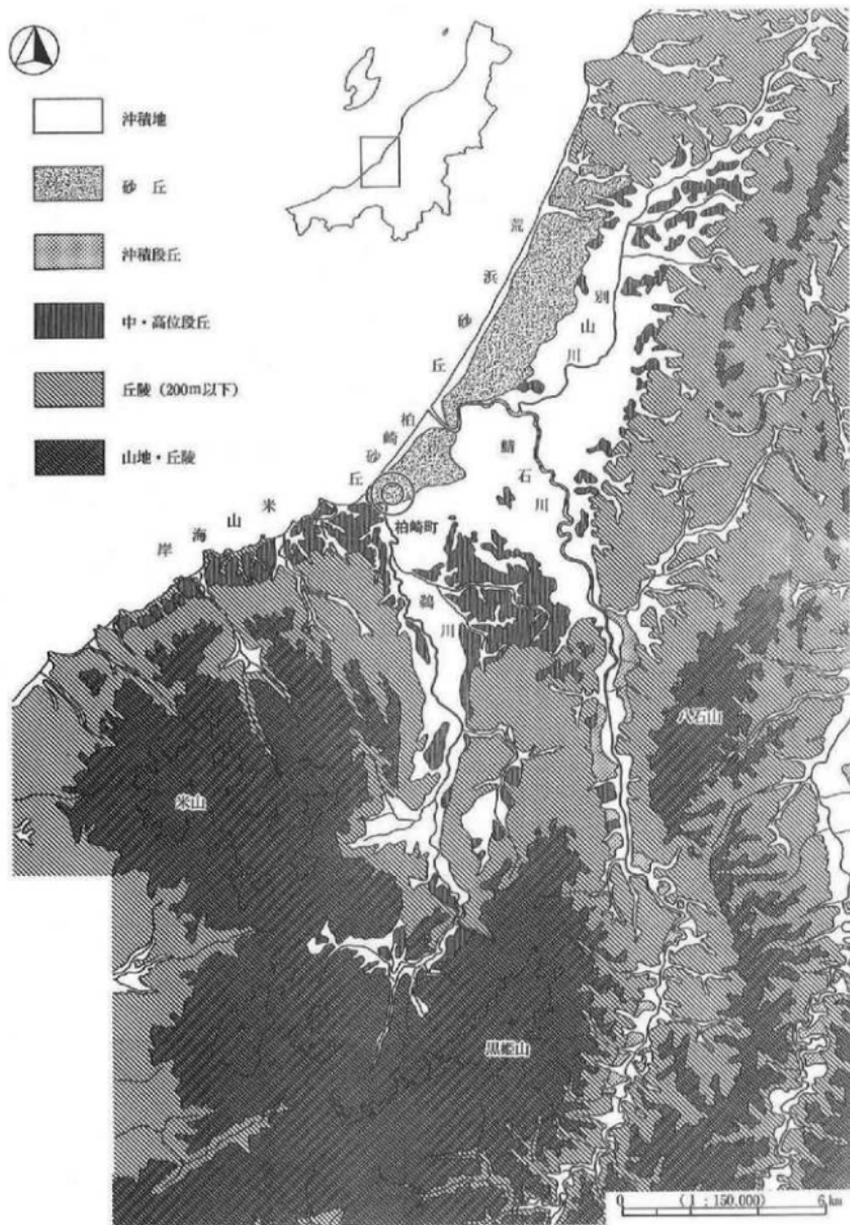
**柏崎平野概観** 柏崎市は、新潟県のほぼ中央部に位置する人口9万人ほどの小都市であり、行政的な地域区分では中越に属している。この中越地方とは、南部の魚沼郡域と信濃川中流域から柏崎平野を含む北部に大きく区分できるが、柏崎平野は北部でも西部に位置することになる。新潟県には、信濃川や阿賀野川などの大河によって形成された広大な新潟平野（越後平野もしくは蒲原平野）と、関川水系に属する高田平野（頸城平野）といった大きな平野が形成されている。柏崎平野は、これら二大平野とは山地や丘陵による分水嶺によって隔された独立平野となっている。

柏崎平野は、鯖石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。この平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部に相当し、米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を個々の頂点として、北流する鶴川と鯖石川によって分割した東部・中央部・西部の三区分で考えることができる。東部は、南南西-北北東方向の背斜軸に沿って椎谷丘陵・曾地丘陵・八石丘陵といった3丘陵が北側から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川や長島川などの鯖石川の支流が南南西方向に流路をとっている。中央部の地形は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度をさげ、沖積地に接する一帯には広い中段段丘が形成されている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊が海岸部まで張り出して断崖を形成し、低位・中位・高位の各段丘の形成が顕著である。米山は、火山ではないが、今もわずかながら隆起していると言われており、東部・中部とは異なった地形的な景観を持っている。市街地が広がる沖積平野部の北西面は、日本海の荒波にさらされ、海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が横たわっている。この砂丘から丘陵部に至る沖積地は、砂丘後背地としてかなり湿地性が強い低地となり、鯖石川や鶴川などの河川による自然堤防の形成が顕著である。

**柏崎砂丘** 日本海に面する柏崎平野の北西側は、冬季に強い北西の季節風と荒波にさらされ、海岸線には砂丘の発達が著しい。昭和20年代の写真には、雪解けとともに降り積もった飛砂が姿を現し、これらの除去が大仕事であったことが記録されており〔柏崎市史編さん委1985〕、砂丘形成が盛んな時期であった。現在、防波堤や砂防対策がほぼ完備されているが、強い季節風に吹き飛ばされてくる飛砂は、今でも海岸道路などに降り積もっている。

柏崎平野における砂丘は、鯨波から宮川までの間に分布し、すべて一括されて「荒浜砂丘」と称せられている〔柏崎市史編さん委1983〕。砂丘を形成する砂丘砂は、荒浜砂丘砂層と命名され、中位に発達した黒色腐植層を境に、下位を荒浜砂丘砂層、上位を荒浜砂丘砂層として区分される。この荒浜砂丘の特徴は、完新世の新砂丘（荒浜砂丘砂層）の下位に番神砂層と呼ばれる古砂丘砂層が存在し、古砂丘砂と新砂丘砂が重層的に堆積する構造にあり、頸城の潟町砂丘とともに「古砂丘型砂丘」といわれている〔岡本1986〕。この古砂丘型砂丘と対称的な砂丘としては、新砂丘のみで構成され、複数の砂丘列が列状に形成される構造をなすもので、日本最大級の新潟砂丘を代表として「新潟型砂丘」と呼ばれている〔岡本前掲〕。

柏崎平野における砂丘は、これまでの研究成果から古砂丘上に新砂丘が形成される二階建構造を特徴とし、新潟砂丘とは好対照とされている。確かに二重構造という基本的な構造は荒浜砂丘の特徴であるが、それは主に鯖石川以北の砂丘においてであり、鯖石川河口から鶴川河口に至る間は、やや趣を違えている。



第1図 柏崎平野の地形分類と柏崎町の位置

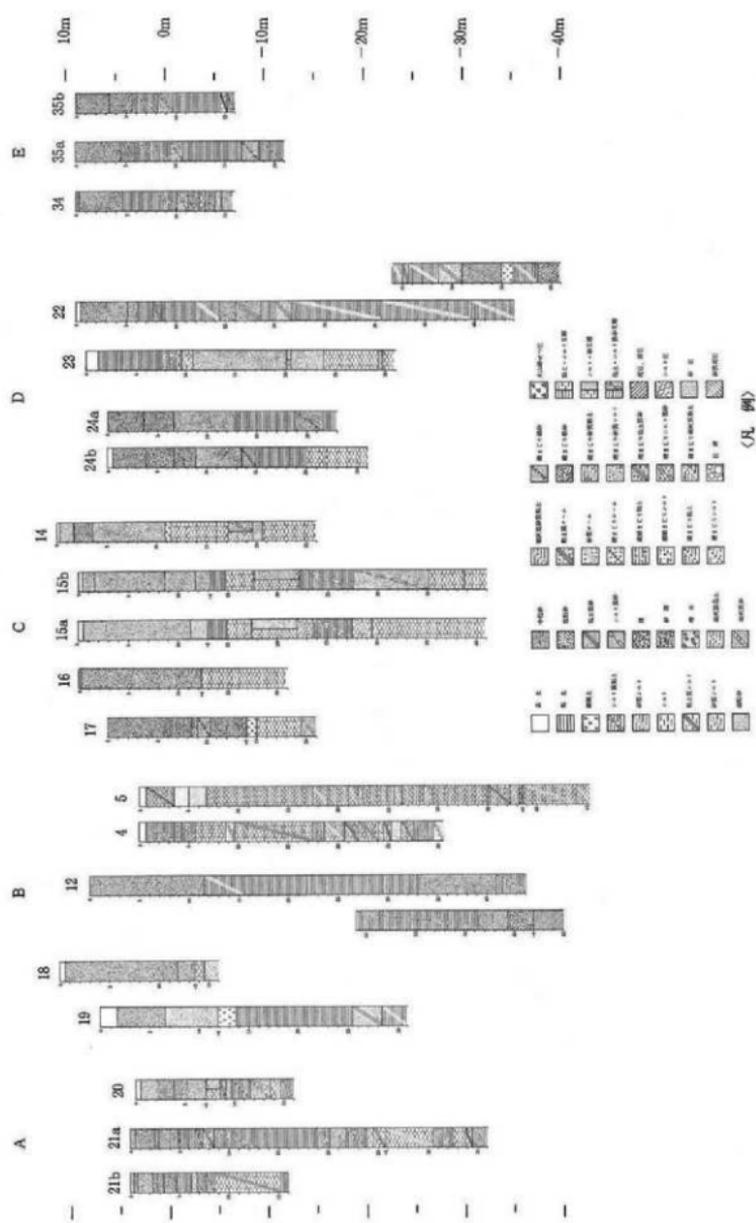


第2図 柏崎砂丘ボーリング調査地点



第3図 柏崎砂丘調査図(試案)

第4図 柏崎砂丘地質柱状図



そこで、今回の報告にあたっては、柏崎平野における砂丘の総括的な名称として「荒浜砂丘」を用いることに特別な異論はないが、鯖石川河口部以北にあって椎谷丘陵の南西部を占める荒浜砂丘と、鶴川河口から鯖石川河口に広がる砂丘を「柏崎砂丘」とし、個別的な名称を付与し、地形を概観したい。

ボーリング地質柱状図 第4図は、柏崎市史の編さんに際して集成された柏崎平野地域のボーリング調査による地質柱状図の内、柏崎砂丘地の事例を抽出し、一部に改変を加え若干整理して集約したものである〔柏崎市史編さん委1983〕。ボーリング調査地点については、第2図に示したとおりであるが、位置関係等からA・B・C・D・E群に便宜的な区分を行った。

当該柱状図は、あくまで地層の性質を表した柱状図であるため、層序名までは明示されておらず、またN値などの詳細なデータ等も記載されていない。このため、新砂丘砂や古砂丘砂の区分、あるいは安田層群の範囲など、にわかに認定することはできない。

東本町一丁目地内A-2ブロック(B地区)では、一部の試掘坑から青灰色を呈するかなり硬くしまった層が掘削中に確認されている。ただし、砂層であれば古砂丘砂層とされる番神砂層、粘土層であれば安田層などの可能性が高くなるが、湧水が激しく、また壁の崩落等により、砂層か粘土層かの性格までは確認できなかった。当該層の確認レベルとしては、標高約3.5m前後で湧水が激しくなり、試掘坑の掘削が中止されていることからすれば〔柏崎市教委2000〕、標高はおおよそ3m前後であった可能性が高い。

柱状図に記された「沖積層とその基盤との境界」〔柏崎市史編さん委前掲〕の位置を見ると、ボーリング位置番号のA群：20、B群：19・18、C群：17・16・15の6地点では、海拔-5m付近に集中していることが図上に示されており、ある程度平坦な地形の存在を示唆している。基盤層の性質としては粘土層やシルト層が主体であり、可能性としては安田層もしくは、米山海岸以外未確認とされる笠島層に対比され得るのかもしれない。当該層の分布範囲は、東側のD群やE群域では検出されておらず、西部となるA群からB群にかけてと、C群域に認められ、両者の中間に位置するボーリング番号13のデータでは、当該層面が確認されていないことから、両者は連続しない可能性がある。また、当該層面が安田層等とすれば、前述のA-2ブロック検出の青灰色層は、番神古砂丘砂層の可能性が高いことになる。このような安田層など更新世に形成された粘土層等の上に古砂丘砂である番神砂層が堆積し、さらにその直上を新砂丘砂がおおう構造は、まさしく荒浜砂丘の特徴とすることができる。

柏崎砂丘の砂丘列 ところで第3図は、市街地一帯に広がる砂丘地について、柏崎市街図(1:2,500)に記された等高線による地形の読み込みと、若干の現地踏査における地形観察等から、砂丘列の認定を行った試案を示している。砂丘内の形状は、大雑把に見ると西本町側を頂点として、東側に開く三角形を呈しているが、細部の観察結果では幾つかの砂丘列が想定可能となった。

結論から述べると、砂丘列は大きく二大別することができる。これらの砂丘列については、内陸側において、おおむね東西を志向する砂丘列を「柏崎砂丘Ⅰ」とし、南西から北東を志向し、現在の海岸線におおむね並行する砂丘列を「柏崎砂丘Ⅱ」と仮称する。

まず、柏崎砂丘Ⅰは、現在の西本町から東本町、そして四谷方面へ抜ける現本町通りに沿うもので、その南側となる内陸部の沖積地は、湿地性の強い沖積地が形成されている。砂丘列は2列に細別できそうで、便宜的に本町通りに沿う内陸側をⅠA列、比角一丁目から松美町にかけての幅が広い砂丘列をⅠB列とする。両者はともに、砂丘東端がよしやぶ川を境に消滅する。よしやぶ川については、現在準用河川として鯖石川に合流するが、かつての鯖石川旧河道に沿って流れているものと考えられ、したがって柏崎砂丘Ⅰは鯖石川の流路によって浸食された可能性が高い。西側については、ⅠA列が西本町側まで延びるが、西

本町一丁目地内で、柏崎砂丘Ⅱと重複する。またⅠb列は、JR越後線東柏崎駅付近から小倉町付近で、Ⅰa列に近接するとともに、柏崎砂丘Ⅱと重複し、その上位を覆われている。

柏崎砂丘Ⅱは、鯖石川の現河口付近から西本町に至る間に分布する。西側はおおむね鶴川河口付近までたどることができるが、北東側については現鯖石川河道もしくは旧河道であるよしやぶ川までとなっている。また、日本海側は、河口部を閉ざされた鯖石川の氾濫原となって侵食を受け、砂丘列が途切れている箇所が認められる。

砂丘列は、4ないし5列と目されるが、最も海岸寄りの第5列については微妙で不明瞭なため、今回は第4列までとし、それぞれ内陸側からa・b・c・d列と呼称したい。Ⅱa列は、諏訪町付近においてⅡb列と重複して不明となっているが、大和町付近から春日までの県道沿いに分布する。現時点では、鯖石川旧河道を流れるよしやぶ川で途絶えているが、橋場町付近まで残存部が延長される可能性がある。Ⅱc列は、諏訪町付近でⅡa列やⅡb列と重複し、桜木町から安政橋付近までたどれる砂丘列である。Ⅱb列については、Ⅱa列とⅡc列に挟まれている砂丘列で、最も北東端となる鯖石川左岸には、幕府旗本安藤氏の陣屋が位置している。Ⅱd列は、国道352号線にそって北園町付近まで認められる砂丘列である。本列が今のところ、最も海岸線よりとなるが、さらに海より新たな砂丘列が存在する可能性が残されている。

ところで、柏崎砂丘Ⅱについて、主に北東側の説明をしたが、西側については、砂丘列が2列しかなく、列数からすれば両端は整合しない。柏崎砂丘Ⅱ西部の砂丘列とは、現本町通りとなる南列と、やや深い谷間を挟んで海側に形成された北列である。北東部における砂丘列との組合せについては、第3図の如く各砂丘列を理解したとすれば、Ⅱa～d列までの4列はすべて西側南列に連続する観が強く、場合によってはⅡd列が北列と組合わさる可能性が認められる程度であるが、それにもわかには決し難いところである。今回は、これ以上の推量に困難であるが、可能性としては、北東端4列すべてが西側南列と組成し、北列は柏崎砂丘Ⅲとして独立し、北東端に仮定した第5列と一連の砂丘列を形成した可能性が残されていることを指摘しておきたい。

**柏崎砂丘の変遷試案** 以上のように、柏崎砂丘は、砂丘列ⅠとⅡに大きく大別され、各砂丘列が重複する西本町側の基部では、古砂丘上に新砂丘砂が堆積した「古砂丘型砂丘」の構造となっている可能性が高い。しかし、東側では列状となった砂丘列が並走し、平面的な分布でも「新潟型砂丘」状を呈し、北東部の荒浜砂丘本体とは様相を異にしていることが明らかである。つまり、「古砂丘型砂丘」と「新潟型砂丘」両者の姿を併せ持つ砂丘、これが「柏崎砂丘」の特徴とすることができる。

ところで、柏崎砂丘の形成史を考える上で特に重要なのは、Ⅰ列とⅡ列における方位の差異である。この差異は、両者の形成が漸移的でなく、一定期間の時間的な差異を伴って形成されたことを意味し、その間は砂丘形成が衰微もしくは収まっていたことを示している。荒浜砂丘では、荒浜砂丘砂層Ⅰの上位に腐植帯が形成されていたが、この事実は一定期間植物が繁茂できる環境があったことを証明しており、柏崎砂丘における事象と符合する。したがって、今後の検証は必要であるが、荒浜砂丘砂層Ⅰと柏崎砂丘Ⅰ、荒浜砂丘砂層Ⅱと柏崎砂丘Ⅱは、それぞれ互いに対比できる可能性が高いことになる。

また、柏崎砂丘Ⅰの形成後、鯖石川は流路を大きく西側に変更し、現在のよしやぶ川に沿って流れ、柏崎砂丘を大きく侵食する。そして、柏崎砂丘Ⅱが形成され始めたころは、鯖石川の流路は、現在よりさらに東側に河口を持っていたと考えられ、その後Ⅱa列の海側を流れながら、Ⅱb・c・d列を侵食し、現在の形状に至った可能性が考えられる。そして柏崎砂丘Ⅱd列の形成後、鯖石川は河口を閉ざされ、南西の鶴川河口付近まで蛇行するとともに、柏崎砂丘Ⅱを海側から侵食したものと考えられる。柏崎砂丘の形成

には、鯖石川と鶴川が大きく作用し、特に各河川の河口部の位置や鯖石川の流路変更は、砂丘形成にとって極めて重要であったとすることができよう。ただし、これらは現在の状況から類推したものに過ぎず、今後更なる検証を必要としていることは言うまでもない。

## 2 柏崎町遺跡の位置と立地

**柏崎町遺跡の位置と範囲** 柏崎町遺跡は、中世の遺物包含層と遺構群が確認されたことにより周知化された遺跡である。中世における柏崎町とは、通説によれば鶴川河口付近の津泊を中心に発展したとされることから、現市街地の西半部である西本町割に中枢部が想定されることになろう。ところが、今回実施された発掘調査地点は東本町地内であり、単純に考えれば予想以上に広がる町域を想定することになる。しかし、実際のところ鶴川河口付近に中世の津泊が遺構として発見され、その存在が証明されているわけではなく、西本町における中世の町並も未確認のままとなっている。つまり、柏崎町遺跡については、柏崎市東本町一丁目地内の本町通り沿いのみが、考古学的に証明されているだけということになってしまう。このような実情からすれば、当面はある程度限定的に考えざるを得ないだろう。

ただし、柏崎町の遺跡が想定される範囲とは、前述の如く東本町一丁目以西の西本町一帯を含む区域であり、これらの範囲については今後も調査対象であることに変わらない。今後、西本町地内等において、中世等の町並みが連続した遺構群あるいは遺物包含層等として確認された段階で、それぞれ個別に遺跡範囲の認定作業を行っていくこととしたい。

**立地と微地形** 東本町一丁目の位置は、前述した柏崎砂丘全体からすれば、中央の西側寄りに所在し、前述した柏崎砂丘列の区分では、Ⅰa列の東端でⅡ西側南列との重複が始まる地点に相当することになる。この西本町から東本町一丁目にかけての砂丘は、砂丘列Ⅰの上に砂丘列Ⅱの砂丘砂が覆い被さることによって、尾根状をなす砂丘稜線の標高が高くなる。そして、砂丘列ⅠとⅡが分かれ始める東本町二丁目東では、徐々に高低差が小さくなり、本町西部とは立地条件に微妙な差異が生じている。

町並みの中軸となる本町通りは、砂丘南向き斜面の中段を通ることになる。今回、柏崎町遺跡の本発掘調査対象となった東本町一丁目上町の調査区をみると、南側に本町通りがとおり、北側となる後背には、砂丘の高い尾根が横たわっている。町並みは、本町通りの両側に形成されるが、斜面上方となる北側を上町、下方となる南側を下町と、それぞれ呼び習わされていた。

中世の柏崎町遺跡が発見されたのは、平成11年1月から4月にかけて実施された第2次試掘確認調査においてである。調査の前半は、主に下町側のB～F地点を対象としたが、2m以上の厚さにわたって、近世の整地層と遺物包含層、およびさまざまな遺構群が数多く確認された。その下位から検出された中世の遺物包含層の深度はかなり深く、湧水によって確認を阻まれることもしばしばであった。

ところが、平成11年4月8日、第2次確認調査の一環として、G地点とH地点が東本町一丁目地内の上町割で初めて調査されたが、G地点では中世遺物を包含する遺構が、調査面となる表土下およそ60cmから検出された【柏崎市教委2000】。これらのことから、柏崎町遺跡の町並は、上町側と下町側で比較的高低差を持つ斜面に形成されていたことが明らかとなり、上町側では裏手の砂丘を削平しながら整地を繰り返し、下町側では盛土しながら整地を繰り返していたことが判明したのである。その範囲についても、下町側については確認に至っていないが、上町側では、現本町通りの道路センターから北へ約30mの範囲に収まるものであり、それ以北では砂丘尾根の斜面がきつくなり、また時代も近現代と新しくなっている。

### 3 柏崎町遺跡をめぐる歴史的な環境

現柏崎の旧市街地一帯に広がる遺跡を、柏崎町遺跡とし、遺跡名に「町」を取り入れた事由は、中世文書等に幾度か柏崎町と記されてきたことを重視したためである。したがって、柏崎町遺跡の探索、つまり試掘・確認調査等は、すべて中世の柏崎町を追い求めていることであった。しかし、中世成立期において、当該地一帯に比角荘が立荘されたこととされており、その前段には古代集落の存在が想定でき、このような歴史的な経緯を考えると、本遺跡の形成過程語る上で古代を抜きにすることはできないであろう。

このため、本節で扱う歴史的な環境については、最初に本地域を包括する形で古代から触れ、中世までを概括的にまとめるとともに、次いで柏崎町を主体にして、中世以降近世・近代までの概要をやや詳述することとしたい。

#### 1) 柏崎平野の古代・中世概観

古代 越後国など古代北陸道の諸国は、それまでの越国を分割することにより成立したが、それは持統4年(690)の庚寅年籍作成段階であった可能性が高い[坂井1983]。成立当初の越後国は、現在の阿賀野川以北の地であり、国域が確定したのは、大宝2年(702)における越中国四郡(蒲原郡・古志郡・魚沼郡・頸城郡)の越後国への分割と、和銅5年(712)に出羽国が分置・独立して以後のことである。

奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頸城郡部や魚沼郡域であった小国町域などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、三島郡和島村の八幡林遺跡の調査成果から島崎川流域でも八幡林遺跡付近に郡衙等の中枢部が想定できるため[和島村教委1994]、柏崎平野の地域とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的にはやや隔たりを感じさせる関係にあった。このような地理的な側面のみは言い難いが、柏崎平野一帯は平安時代を迎えた9世紀初頭頃に、三嶋郡として分置・独立することになったとされている[米沢1976]。

三嶋郡には、「三嶋」「高家」「多岐」の三郷が10世紀に成立したとされる『倭名抄』に記され、また『延喜式』には北陸道の駅として「三嶋駅」と「多太駅」があったとされている。これら二史料に記された記載順や後の荘園分布などを参考とすれば、三嶋郡の各郷は、鶴川流域：三嶋郷、鶴石川中流域・長島川流域：高家郷、別山川流域：多岐郷といった郷域がおおまかに想定できる。

柏崎町遺跡が所在する柏崎砂丘一帯については、地理的な関係からすれば三嶋郷に近い。しかし、中世において比角荘があったとされる地域であり、三嶋郷の大半が鶴川荘に継承されたとすれば、三嶋郷域であったとすることは難しくなる。また、当該地が砂丘地であったことは、砂丘の形成状況との関連を考慮する必要がある。特に、荒浜砂丘で調査された刈羽大平遺跡においては、7世紀末～8世紀初頭と考えられる製塩遺跡を最後に、厚い砂丘に覆われており[柏崎市教委1985]、砂丘の形成が8世紀以降特に著しかったことが考えられ、柏崎砂丘でも居住域や耕地に適していなかった可能性が高い。また、松波から荒浜地内の荒浜砂丘地では、古代遺跡の存在が、遺物の採集等で確認されているが、柏崎砂丘地内では未だその存在を確認しておらず、当該地一帯の古代史については今後に託されている部分が多いのである。

中世 『吾妻鏡』文治2年(1186)3月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として「宇河(鶴川)荘」「佐藤(鶴石)荘」「比角荘」の三荘園が記されている。これら3荘園は、寄進地系荘園として11世紀末から12世紀中葉頃に成立したと考えられ[荻野1986]、これ以後倭名

抄の郡郷名は廃れて、荘園名で呼ばれることになる。

これらの荘園の四至は明確にされていないが、鶴川荘の場合、鶴川という河川名と一致すること、史料に記された地名等が安田付近から藤井まで及ぶこと、そして饒ヶ沖という湖沼により比角荘域と推定されている現柏崎市街地とは地形的にも隔たっていることなどから、鶴川河口付近を除く鶴川流域一帯とその水系内に属する南部丘陵一帯等が、その荘域として推定できよう。

佐橋荘についても、その荘名から鯨石川との関わりが強いことが明らかで、鯨石川中流域と長島川流域が荘域の基本と考えられる。荘園の中核は、柏崎市北条と南条、それに加納などであるが、北鯨石地区や石曾根などを含む南鯨石地区までの範囲を想定することができる。

柏崎町遺跡と最も関わりが深いと考えられる荘園が比角荘である。現在の地名からすれば、現市街地西部に比角地区があること、また親応元年(1350)の「室町将軍家足利義詮御教書」[柏崎市史編さん委1987(No.33文書)]に記された「越後国比角庄袋条」が、市街地南西部の元城町字袋田付近に比定されていることから[村山1990]、現市街地におおむね重なってくるものと考えられる。

比角荘は、『吾妻鏡』によれば文治2(1186)年当時穀倉院領であった[柏崎市史編さん委1987(No.15文書)]。この別当は、中原家と清原家の家職化していたが、その別当であった中原師元が、保元元年(1156)に越後介であったことを勘案し、その立任期を鳥羽院政期と想定している[萩野1983]。比角荘は、『師守記』貞治3年(1364)6月18日条にも穀倉院領と記されていることから[柏崎市史編さん委1987(No.40文書)]、14世紀中葉までは穀倉院領であったことが確かめられ、中原家によって知行されていたことがわかる。しかし、親応元年(1350)の「室町将軍家足利義詮御教書」に、「越後国比角庄袋条地頭職者可為女子東御方分」との裁許が見られるように[柏崎市史編さん委1987(No.33文書)]、比角荘の地頭職は荘内に分割されていた[村山1990]。それは、14世紀中葉段階の「比角庄袋条」に、荘園領主と地頭の両者がいたことも示している。比角荘は、前記『師守記』の貞治3年(1364)を最後に、史料の上では確認されなくなる。このことは、南北朝の動乱の最中、荘園領主側の支配が衰滅し、地頭等の在地勢力の台頭が背景にあったことは間違いないであろう。

これら三荘園により、柏崎平野の鶴川筋と鯨石川筋、そして長島川流域といった地域の大半が網羅されるが、鯨石川最大の支流である別山川流域をカバーすることができない。当該地一帯については、中世後期において、原田保や赤田保などの多くの保名が史料に残されており、国衙領として残存していた可能性が高い。その場合、正和2年(1313)の「源光広和与状写」[柏崎市史編さん委1987(No.29文書)]に記載されているとおり、中世前期では荘園が成立せず、「菟羽郷」と称されていた可能性が考えられる。

しかし、中世において荘園や国衙領などの存在により、地域的な展開の一部を垣間見ることはできても、具体的な実情や中世人の生活は不明とせざるを得ない。特に、柏崎砂丘内における遺跡の発見は少なく、発掘調査された事例は、今回報告する柏崎町遺跡が初めてである。当該地における中世史も、残された古文書や記録類などの史料が乏しいことから中世全般を叙述することは困難であり、考古学的な遺跡調査により、少しずつ明らかにしていかなるを得ないのである。

## 2) 中・近世の柏崎町

中世の柏崎町 「柏崎」という地名は、「かしはさき」と記された建治2年(1276)の日蓮書状が、史料上の初見である[柏崎市史編さん委1987(No.21文書)]。しかし、その記載は地名のみであり、柏崎そのものの姿は見えてこない。中世の柏崎における町場の形成については、永禄7年(1564)に立てられた



第5図 対羽郡城の荘・保と条 (概念図)

上杉輝虎(後の謙信)の制札が、「柏崎町」の再興を意図していた事実からすれば〔柏崎市史編さん委1987(No.257文書)〕、天文9年(1540)の「長尾景重感状写」に「かしわ崎町居屋敷」と記されているように、すでに前提となる町屋敷がそれ以前にあったと考えられる〔柏崎市史編さん委1987(No.210文書)〕。さらに、『梅花無尽蔵』に記された長享2年(1488)の柏崎とは、「市場之面三千余家。其外深巷凡五六千戸。」であった〔柏崎市史編さん委1987(No.114文書)〕。この記載そのものには誇張が含まれていると言わざるを得ないが、15世紀の柏崎とはかなりの市街地をもつ町に発展していた様子を知ることができる。このような僅かな文書から知られる状況は、今回の調査において調査区の最下層から出土した遺構・遺物の時期が、15世紀代であった点と矛盾しない。

柏崎町の16世紀代については、これを物語る資料は少ないが、中でも数度にわたって出された上杉氏の制札が残されており、現在4件が知られている。その内1件は、前述した永禄7年(1564)の輝虎(後の謙信)によるものであるが、その他の3件は天正8年から9年(1580~81)にかけて、謙信の後継者となった景勝によって出されている。

永禄7年の制札〔柏崎市史編さん委前掲(No.257文書)〕には、「先年再興之処」と記されているとおり、この年以前から戦国大名である上杉氏が主体となって再興が進められていたことがわかる。柏崎町が荒廃におよんだ事件について特定されている訳ではないが、享禄3年(1530)から天文6年(1533)頃にかけて勃発した享禄・天文の乱などや、その後の混乱期等が想定されてこよう。そして、制札が出された永禄7年は、上杉謙信が関東管領に就任したあと、関東経略を本格化させる時期に相当するが、そのために物資・人員の調達・輸送等の確保を企図し、交通網の整備と、交通の要衝である都市支配の強化を意図したものと考えられるのである〔市村1990〕。

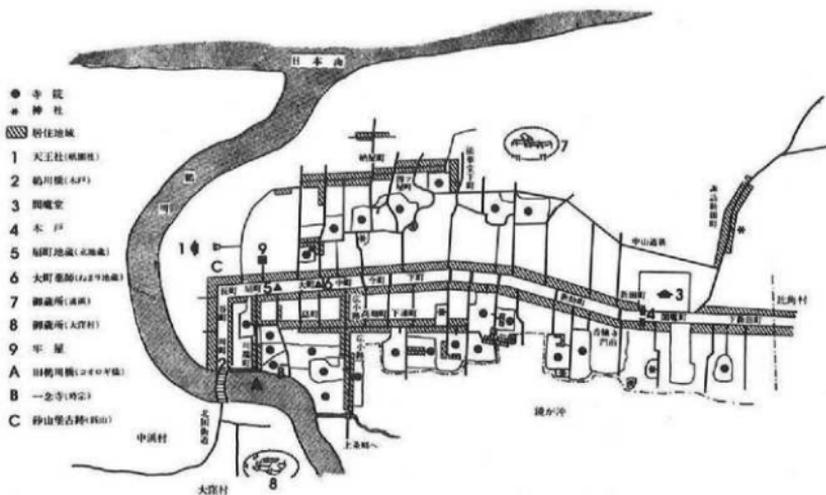
天正8年から9年に出された景勝の制札〔柏崎市史編さん委1987(No.438文書・No.464文書・No.487文書)〕もやはり、天正6年から7年(1578~79)における御館の乱により荒廃した柏崎町を再興する目的を併せ持っていた。しかし、その内容は、治安を維持するため、支配権を強化するというもので、謙信時代よりも一層厳しいものとなっていた。これらについては、『柏崎市史』に詳しいため割愛するが、最後の制札では、ついに上杉氏の直轄(御料所)として代官が置かれるに至り、柏崎町支配がより強化されたことが理解されるのである〔市村前掲〕。

天正12年(1585)、上杉景勝は豊臣政権に服属し、越後における戦国時代は終わりとなる。そして、慶長3年(1598)に景勝が会津に転封されたことにより、上杉氏の柏崎町支配が終わり、ようやく近世を迎えることになる。

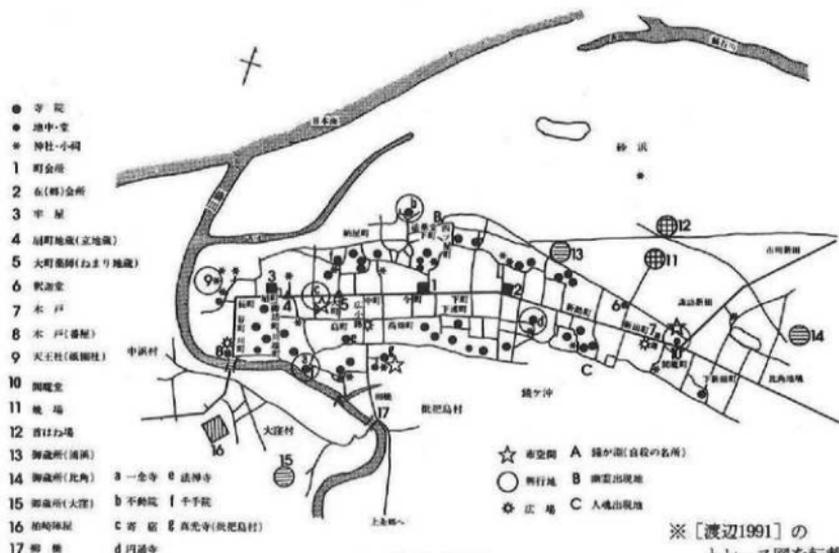
ところで、今回の調査結果を見た場合、出土遺物の時期で問題となる点として、16世紀中葉頃から後半にかけての遺物が少ない点が掲げられる。調査地点そのものは、中世柏崎町の街外れと考えられることから、今回の調査成果が柏崎町のすべてを物語る訳ではないが、新潟県全域の状況でもあり、大きな課題の一つとすることができよう。

絵図から見た近世の柏崎町 近世における町並とは、18世紀後葉に描かれた「寛政古絵図」(1789-1801)により知ることができる。同様な古絵図は、天保期(1830~1844)にも制作されるが、これらに描かれた街路のほとんどが、現市街地におけるそれぞれの道路に対比することが可能である。したがって、現市街地における東西両本町から諏訪町まで、さらに柳橋付近や東西両港町一帯が、近世後期以降現代まで引き継がれた町並であることが確かめられるのである。

ところで、「寛政古絵図」に記された町名等を見ると、貞享3年(1686)頃に書かれたとされる「越後

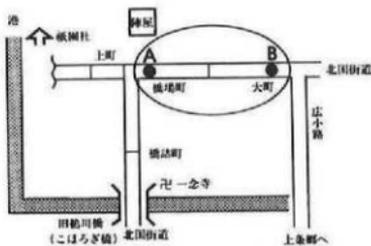


a. 寛政絵図

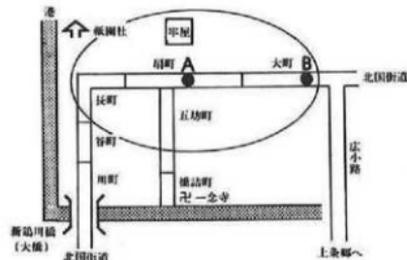


b. 天保絵図

第6図 近世後期の柏崎町古絵図



a. 近世初期の中心地（貞享以前）



b. 近世後期の開所空間

第7図 近世の柏崎町中心部

〔図2189〕から転載

中将光長公御領諸事覚書撰〔柏崎市史編さん委1984（No.2-2-27文書）〕にもその多くが記載されている〔新沢1990〕。また、これより3年ほど前に作成された天和検地帳（1683）でも、これらの町名のほとんどをたどることができるという〔新沢前掲〕。したがって、柏崎町の基礎となり得べき中心街については、すでに17世紀後半まで遡ることが確かめられる。ただし、諏訪町通りに展開した町並については、「寛政古絵図」に「諏訪新田町」と記されているとおり、新しく展開した当時の新開地であった。

また、近世における町中心部については、西の地蔵と東の薬師が両端境を守護した間であり、第7図aの「円内に囲んだ地域を当初の中心地と見ることが最も妥当」と解釈されている〔渡辺1991〕。近世後期とされる第7図bには、長町・谷町・川町の3町が描かれているが、これは貞享元年（1684）に長谷川新五佐衛門という人が、（新）鶴川橋を架けたことにより新たな通りができ、家並みがそろったことから、長谷川氏にちなみ命名されたものといわれている〔新沢前掲〕。したがって、それ以前は、第7図aのように、北国街道が旧鶴川橋（こほろぎ橋）を渡って、陣屋のある橋場町から東に折れ、両側に大町が形成されるとともに、その交差点の西側に上町が位置し、この中心地の東側において、南へ下る道が「上条郷（農村部）との重要な交通路」とされる「広小路」であった〔渡辺前掲〕。

ところで、柏崎の町街の原型については、「長・谷・川三町と扇町の成立した貞享～元禄期」（1684～1703）に求める見解が示されている〔新沢前掲〕。しかし、長・谷・川の3町は、すでに形成されていた町並がさらに拡大したことを示すものであり、それ以前の町並そのものがかなり発展していたことが前提となる。したがって、当該3町の成立とは、近世における柏崎町発展の過程における出来事であり、現市街地の原型はさらに遡るものと見なければならない。ただし、少なくとも寛政古絵図に描かれた町並の基本形は、少なくとも17世紀後半頃までは遡りそうである。

**柏崎町の大火と災害** ところで、今回の調査区では、どこでも厚い焼土層が確認されているとおり、柏崎の旧市街地は、これまで幾たびかの大火に見舞われている。戦国期の兵火等についての具体的な記録はないが、柏崎町遺跡推定範囲内、つまり旧市街地に限定した大火の記録だけでも、江戸時代から明治期にかけて数多く残されている。まず、慶長16年（1611）に大火への対応として、地子免除がなされたという記録があり、この事例が最も古い〔新沢1970〕。その後の記録は一時途絶えるが、19世紀代になって頻発し、文政7年（1824）の「ひとつば火事」、天保15年（1844）の「広小路おとる火事」、嘉永4年（1851）の「八木大火」と続く。明治期に入ると、大火の規模は一段と大きくなり、明治13年（1880）の「酢屋火事」、明治20年（1887）の「大久保屋火事」、明治30年（1897）の「日野屋火事」と、20年足らずの間に3

件の大火に見舞われ、明治44年(1911)にも「桐油屋大火」が発生している。これらの内、東本町一丁目地内に大きな被害をもたらした大火は、大久保屋火事と日野屋火事が大きく、ついで八木大火や酢屋火事でも大きな被害を受けている。

このように19世紀に至って多くの大火に見舞われた要因には、不備な防火体制のほかに、市街地の急速な発展と密集化、そしてその老朽化があった。市街地の拡大としては、一部前述した如く、天和年間(1681~1683)の新助町(現東本町二丁目)の開拓(伝)に始まり、貞享元年(1684)の長谷川三町(現西本町三丁目)、そして享保3年(1718)の諏訪町新田(現諏訪町)、寛政6年(1800)の市川新田(現大和町~春日一・二丁目)と、町域の東西にわたる拡大が続いた。このような新たな街区の開拓は、当然既存街区の過密化を背景としており、隣接し密集する町屋群の連なりは、火災に対する備えを大きく損なうものとなっていたと考えられる。このように、幾たびかの大火を経つつ、柏崎町街区の防火体制は整えられていった訳であるが、罹災後の再建は、町の形成に大きな影響を与えたことは間違いない。

大火以外の災害としては、寛文5年(1665)の寛文大地震と、文政11年(1828)の三條大地震がある。また、洪水としては、たびたび鶴川が氾濫を起しており、その被害も甚大であった。記録上の主な事例としては、貞享4年(1687)と、日野屋火事の後まもなく発生した明治30年(1897)の2例がある。しかし、戦中から現代までの間に、記録写真を残すものだけでも昭和19・20・34・44・52・53年の6回を数えることができるので〔柏崎市史編さん委1985〕、記録以外にもかなり頻発していたことは間違いない。

これらさまざまな災害は、その復旧に伴って整地を繰り返すことになるが、この整地層は、考古学的な調査を行う上で、当時の生活面を確認することができるため、極めて有効となる。しかし、記録に残る中世・近世の大火例は少なく、ほとんどが幕末から明治期となっており、中近世での活用の際には大きな制約を持っている。また、大火以外にも、17世紀中葉の寛文大地震や、下阪を見極めるために三條大地震などは有望となるかもしれないが、水害に伴う洪水層については、冠水範囲の把握ができておらず、数が多すぎることなどの事由から、時期特定が困難かもしれない。

しかし、これら文献上の記録と、調査成果の整合性を追及することは、柏崎町の歴史を探る上で重要であり、今後も記録の抽出と検証をさらに推し進める必要があろう。

年 号	支配・街区形成・災害
永祿7 (1564)	上杉輝虎の柏崎町制札
永祿9 (1566)	上杉輝虎、柏崎町諸役免除
天正8 (1580)	上杉景勝の柏崎町制札
天正9 (1581)	上杉景勝の柏崎町制札
天正9 (1581)	上杉景勝の柏崎町制札
慶長16 (1611)	柏崎町大火、地子免除
寛文5 (1665)	寛文大地震
天和年中 (1681~1683)	新助町開拓(伝)
貞享元 (1684)	鶴川橋架橋 長町・谷町・川町三町でできる 届町陣屋
貞享3~元禄13 (1686~1700)	
貞享4 (1687)	鶴川大洪水(伝)
元禄16~宝永7 (1703~1715)	鶴町陣屋
宝永2 (1705)	柏崎の船数60隻
正徳5~寛保2 (1715~1742)	届町陣屋
享保(1718)	諏訪新田町屋敷開拓
寛保2~明治元 (1742~1868)	大久保陣屋
寛政年中 (1789~1800)	柳橋に新橋架橋
寛政6 (1800)	市川新田町開拓
文政7 (1824)	ひとつば火事
文政11 (1828)	三條大地震
天保8 (1837)	中浜大窪大火
天保15 (1844)	広小路おとみ火事
嘉永4 (1851)	八木大火
明治13 (1880)	酢屋火事
明治20 (1887)	大久保屋火事
明治30 (1897)	日野屋火事
	鶴川大洪水
明治44 (1911)	桐油屋大火

第1表 柏崎町略年表

# Ⅲ 遺 跡 概 観

## 1 遺跡の現状と調査区

遺跡の現況 中近世の柏崎町は、現柏崎市街地の原型であり、遺跡はその範囲内にほぼ収まるものと推定される。集落の形成過程については、古代及び中世前期頃の状況が今のところ不明であるが、今回の発掘調査によって、中世後期、特に15世紀後半以降は現代までほぼ連続的に継続していたことが確かめられている。しかも、当該地一帯が、新潟型砂丘と古砂丘型砂丘双方の特徴を併せ持つ砂丘地であったという特殊な環境から、砂丘形成や飛砂等によって集落域における堆積作用が早く、結果として何層にもわたる文化層を形成しながら展開してきたものであった。このような立地や地理的な環境との関わりについては、すでに第Ⅱ章でまとめたところであるが、大小さまざまな住居等の建築物が、整地と建て替えを繰り返し、それらの累層的な形成の延長線上として、現市街地の町並みが覆うに至ったのであった。

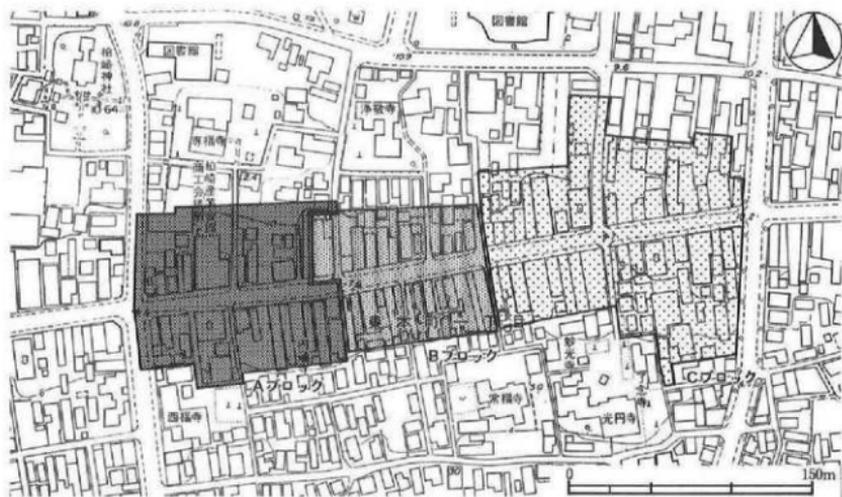
現市街地の状況は、おおむね東西方向に貫く本町通りを軸とする。かつては、鶴川河口側となる西側に本町一丁目があり、東へ順次二丁目、三丁目と続き、八丁目までが設けられていた。この本町通りにおける町名の名残は、市街地形成の過程を物語っているが、現在は、駅前通りを境に東西に分離され、両側へ広がるように町名が付けられている。このような町名区分の変化には、町の経済的な中枢部の変動があり、それまで経済的な中心であった鶴川河口付近の津泊から、鉄道を中心とした経済・運輸を含む体系への変革があり、それら時代的な背景が中心部の転換を行わしめたのである。

東本町まちづくり事業のスタート段階における東本町一丁目地内は、木造家屋などが散在しつつも、地下室などを設けた鉄筋コンクリートの建物などが建ち並ぶ町並みとなっていた。このような鉄筋コンクリート造りの建物は、基礎工事だけでも地下を大きく攪乱しており、文化層等の遺存状況は、概して不良であった。このような実情から、試掘や確認調査だけでなく、本調査対象区域でも、木造等の民家の跡地以外は、調査対象から除外せざるを得なかった。

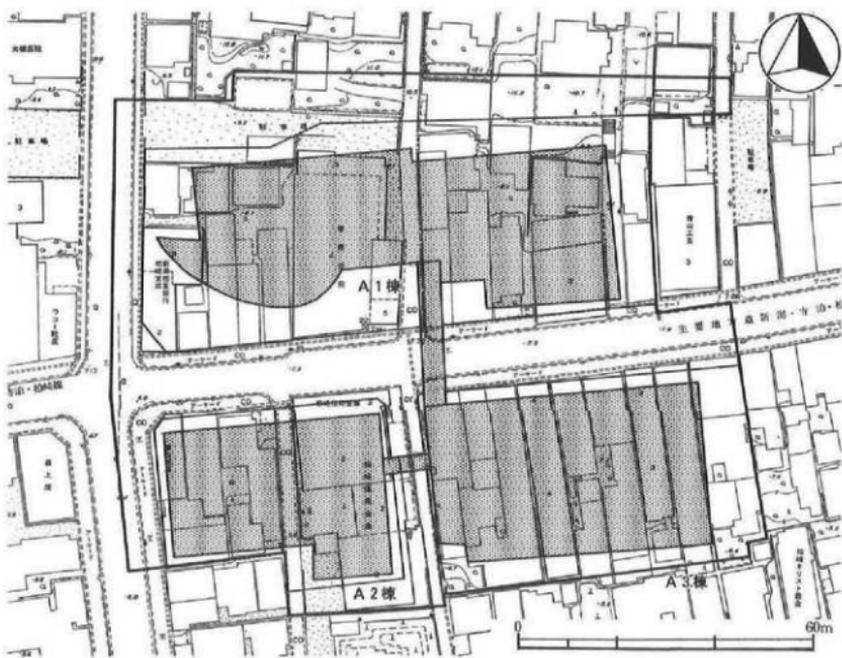
**調査地区の概要** 東本町まちづくり事業用地は、第Ⅰ章でも述べたとおり、事業主体や、目指しているまちづくりの目的によって大きくA・B・Cの3地区に区分されている。

C地区については、平成9年度に初めて、柏崎町遺跡を意識した試掘調査が行われた区域である〔柏崎市教委1998〕。しかし、調査地点（東本町A地点）そのものが、中枢部と目される西本町側とはもっとも離れた東端部に位置し、しかも地下2m付近まで大きく攪乱を受けていた。このためか、戦国期の土師器を採集したものの遺物包含層等の確認には至らず、中世における集落域が存在したとしても、その外縁部である可能性が指摘されたのみであった。

B地区については、A地区での本発掘調査開始後に確認調査が実施された。しかし、隣接するA地区の発掘調査区に最も近い西端付近においても、文化層の形成が乏しく、明確な中世の遺物包含層を把握するには至っていない〔柏崎市教委2000〕。この事実は、密集した中世遺構群が調査されているA地区と大きく異なっており、B地区が中世集落域に近接しつつも、その区域とは明確な境界をもって画されていた可能性が高いことを示すことになる。今回の調査では、調査区の事情から、両者の境界を明確に検出できなかったが、このような極端な変化は、柏崎町の景観を示唆するものとして興味深い。



第8図 東本町まちづくり事業地



第9図 Aブロックと建物配置図

A地区は、平成10年度末から11年度にかけて実施された試掘・確認調査によって、初めて中世柏崎町遺跡の存在が明らかにされた区域である〔柏崎市教委2000〕。このA地区における事業計画では、本町通り南側の斜面下方側に2棟、また北側に1棟の建物を建設することとなっていた。南側2棟とは、市営駐車場棟となる東側のA3棟（モーリエ3）と、西側の業務棟からなるA2棟（モーリエ2）である。A2棟の西半部は、確認調査でB地点とした区域であり、A3棟は同じくC～F地点が該当する。本発掘調査の対象とされたのは、交流棟とされたA1棟（モーリエ1）であり、確認調査地点としては、G・Hの各地点となる。A地区における調査区の呼称については、事業との整合性や混乱を避ける意味で準用することとし、各地区をそれぞれA1地区・A2地区・A3地区とした。

**A2地区とA3地区** 当該両地区における試掘調査は、既存建物の解体や撤去作業の進捗に合わせ、随時実施したものである。平成11年の1月から2月にかけて実施した2回の試掘調査では、それまで全く知られていなかった中世の遺物包含層が初めて確認されるとともに、15世紀から19世紀まで連続と続く文化層の存在も明らかにされた。この結果を受け、当該地一帯を遺跡として周知化することとなり、以後の調査は「柏崎町遺跡」を把握するための確認調査として位置付けられたのである。

当該地区の特徴としては、整然とした層序の形成を掲げることができる。当該地区を観察すると、立地としては砂丘の南側斜面であり、砂丘本来の地形としては比較的傾斜が大きい。また、東本町一丁目地内の本町通りは、直線ではなくやや南側に膨らんだ形状を呈しているが、これは砂丘全体が南側へ微妙に滑っている結果を表している。整然とした層序の形成とは、実は微妙な地盤の沈下やずれを修復した過程を示すもので、町屋の建て替え等において行われる整地に際し、飛砂等で新たに運び込まれた土砂等は、敷地の嵩上げを意図して敷き込まれたと考えられる。このような整然とした整地層の形成は、江戸中期以降において特に顕著となっており、良好な層位的調査の可能性を秘めている。

しかし、17世紀以前では、同じ黒色砂層から、中世土師器などとともに肥前系の陶磁器が検出されており、整地等の頻度はかなり低かったことが予想できる。また、調査の本来的な目的である中世の遺物包含層については、北辺の本町通り沿いで深度70cmほどのところから16世紀末から17世紀初頭と推定される層位が検出されているが、中世遺物包含層の多くは1.5～2m前後、もしくはそれ以上と深く、湧水等によって十分な調査を実施するまでには至っていない。江戸期については、トレンチ調査等によって層位的な調査を数度試みている。特徴的なことについては、概して規模の大きな鍛冶炉の検出があり、その位置が金物屋の跡地であったことなどは、現在までの系譜的な連続性を示す事例となっている。

**A1地区概観** A1棟（モーリエ1）が建てられる区域は、東西約100m、南北約54mほどの範囲である。事業計画では、北辺に幅員6mの区画道路をめぐらせ、南側の本町通りも4mほどの拡幅がなされることから、建物の敷地は、南北およそ40m程に狭くなり、面積も4,065㎡となっている。

平成11年4月8日に実施した確認調査の結果、当該区域一帯における中近世の遺物包含層は、既存の本町通り境界から北側25～30m程でなくなり、それ以北は傾斜を強くした砂山となっていることが判明した。また、銀行や産業会館跡地などは、鉄筋コンクリートの建造物が建てられていたこともあって、基礎工事や地下室等によって大きく損なわれていることも改めて確認することができた。

これらの状況から、調査の対象を本町通り側道路の境界からおおむね25mとし、地区内にある掘乱区域を除外した調査区は、大きく三分割がなされることから、それぞれを東側からA1-I区、A1-II区、A1-III区と呼称することとした。また、II区については、調査日程と下水管が横断するなどの諸事情により東西に二分し、東側をIIa区、西側をIIb区と便宜的に区分して調査を行った。

## 2 発掘調査の概要

### 1) グリッドの設定

A1地区の発掘調査は、当初基礎部分の基礎大梁と、パイル部分を調査することとされていたため、グリッドの設定にあたっては、調査上の利便性を考慮し、大梁の軸に整合させることとした。設定にあたって基準に選定した建造物は、A1棟（モーリエ1）の東部に建設される交流プラザの基礎部分とした。まず交流プラザの北辺基礎杭列のセンターを東西グリッドラインの基準とする。南北については、同じく交流プラザの東側基礎杭列とするが、当該基礎杭はセンターを中心に一辺2mの正方形に設定されることから、センターより1m東側に設定し、基礎杭をすべて包括するようにした。このようにして設定したグリッドラインを基準として、東西、南北それぞれに一辺10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。基準としたグリッドラインの名称は、南北がLライン、東西は2ラインとなる。

大グリッドの名称は、東西がA・B・C……のアルファベットを、南北が1・2・3……の算用数字で表現することとし、グリッドの基準となる杭の位置は北西隅の交点である。小グリッドについては、10mの大グリッドを2m四方25コマに分割し、北辺の西側から①②③④⑤、西辺の北側から①⑥①⑦②となるように配置し、各グリッドの呼称は、B-3③などと表記した。また、各地区の位置は、A1-I区がJ~K-2~4グリッド、A1-II区がG~I-2~4グリッド、A1-III区はB~D-2~4グリッドである。

なお、今回設定したグリッドは、任意であり、国家座標軸とは整合していない。南北グリッドラインの方位については、真北と対比した場合、N-6°-Eである。磁北は、真北より西偏およそ7°であることから、今回のグリッドは、磁北の方位とほぼ同じとなっている。

### 2) 調査の方法と工程

今回実施する柏崎町遺跡の調査は、主たる開発行為が建造物の建設であり、敷地の造成と建物の基礎等の工事によって壊れる部分に限定することを原則として調整した。具体的には基礎杭部分と、大小の地中梁、電線共同溝工事がなされる県道拡幅部分である。基礎杭が穿たれる範囲については、原則最下層までを調査対象としたが、その他は掘削によって壊れる深度までを原則とした。また、間隔が2.6mに過ぎない小梁部分と、県道拡幅域については面調査とし、小梁深度以下の大梁については、交流プラザ側（A1棟東部）の場合、大梁間隔が8.1mであり、トレンチによって発掘を行うこととした。ただし、A1棟西部の学習プラザ側については、変則的で間隔が狭いことから、ほぼ全面調査となった。

調査は、各調査区毎にセクションベルトを設けたが、基本的には大グリッドラインに沿って設定した。発掘作業は、セクションベルトにて把握された層序にしたがって、上層位から順次①遺構確認→②遺構発掘→③記録→④包含層発掘→⑤遺構面の検出という手順を繰り返して、各遺構面を層位的に調査した。また、遺構確認後は、遺構数が予想以上に多いことから、遺構分布の見取り図の作成を行った。また、遺構番号については、各地区すべてを連番とした通し番号とした。

なお、発掘作業にあたっては、上層を覆う碎石や解体時の整地層を除去した面から調査を行ったが、A1-II区については、江戸中期から後期にかけての包含層等遺構面を、重機で段階的に発掘し、以下についてを層位的な発掘を手作業で行った。

### 3) 調査の工程と調査区概観

休憩施設の設置や器材搬入等の諸準備については、7月の6日～7日の両日に行ったが、調査そのものの着手は、下記に記すとおり平成11年7月5日である。調査実施の優先順位は、①A1-I区、②A1-III区、③A1-II区という順序が、事業者側から提示していたため、これらを尊重し優先順位の第一とされたA1-I区から開始することとした。

**A1-I区** まず、本発掘調査の対象となった上町側では、基本層序の把握が不充分であった。このため、7月5日に攪乱区域にトレンチを設定して、層序の確認を行ったが、これが調査の始まりとなった。表土除去は、7月6日～7日に実施し、作業員を動員して本格的な発掘作業は7月13日(火)となった。当該地区の調査は、柏崎町遺跡で初めての本格的な調査であること、また砂丘地であり文化層の数が多いことなどから、調査方法そのものは試行錯誤を繰り返した。本地区の調査終了は、平成11年11月12日となり、調査延べ日数は、80日におよんだ。

調査区は、K-4～L-4の設定した東西セクションベルトにより、調査区を北区と南区に区分した。当初、南北の各区について、それぞれ同じ遺構面で調査を実施する予定であったが、砂丘地形の傾斜が強く、整地総数や包含層の深度に大きな差異があり、南区では調査面数が多くなっている。その結果、北区は5面、南区は6面の調査を行った。調査面積は合計695.8㎡となった。検出遺構総数は、後に攪乱と判断したものを除くと、494基である。

**A1-III区** 8月5日からは、調査班を1班増強し、A1-I区と同時並行で調査に着手した。調査した遺構面は4面で、一部5面まで実施した。調査総面積は、1,395.8㎡で、今回の調査区では最大である。調査は、12月8日まで、延べ77日間の調査となった。検出された遺構総数は、大攪乱が多かったこともあって少なく、建物跡などの復元も極めて難しい状況にある。また、その総数は444基に過ぎず、遺構密度は0.3基/㎡にとどまった。ただし、出土した遺物数量は、3地区全体の半数近くの出土があり、町中核に近いという位置的な実態が反映されたものと考えられる。

**A1-II区** II区の調査は、I区の進捗状況をみながら着手の機会を覗いていたが、平成11年10月12日に至って、ようやく表土除去に踏み切ることができた。本区の調査については、I区とIII区に挟まれた中間ということもあって、江戸期の生活面の一部を重機で掘削し、おおむね江戸中期以前を本調査の対象とした。また、表土剥ぎ段階で、仮設ながら汚水用の下水道管が南北に縦断していることが判明、迂回が困難とされたことから、そのままII区を東西に分かつセクションベルトとした。この段階で、東側をIIa区、西側をIIb区と呼称することとした。

IIa区の調査は、10月26日まで第③面の遺構確認を行った後、しばらくI区の調査に専念したため、再開は11月4日となった。調査は、12月18日まで、延べ42日間実施された。本区の調査は、第③面から第⑦面まで、第⑥面の上下2面を加えて都合6枚の遺構面を調査した。調査延べ面積は414.9㎡、検出された遺構総数は377基となった。

IIb区は、10月13日に一部表土掘削を行い、11月15日～16日にかけて残りの表土を除去した。その後、遺構確認等を11月25日から12月2日まで断続的に行ったが、本格的な調査は、III区の調査班が参入した12月6日からとなった。調査の終了は、工期との関係から短期で実施せざるを得ず、12月17日まで、調査着手から延べ18日間で終了させた。調査した遺構面は第③面から第⑥面までの4面で、調査面積は315.9㎡、検出された遺構総数は述べ241基となった。

## IV A1-I区の調査

### 1 調査の経過

平成11年7月5日、区西側の旧ブラザービル跡地側に試掘坑を設定し、その東側部分を占める当該区の層序を確認する作業を行った。当該作業が、柏崎町遺跡発掘調査の始まりとなった。6日から7日にかけて休憩施設の設置や、器材の搬入を行うとともに、8日からは表土の除去作業を重機にて開始した。

調査を開始する層位については、これまでの試掘データ等で数多くの層序があり、それぞれが遺構面として良好に残されており、層位的な発掘を行わざるを得ないことは明らかであった。当初、柏崎町遺跡は、中世の柏崎町を主眼としてきたものであるが、その上位を覆う近世も、本発掘調査対象とした。しかし、確認された各層序の時期は、必ずしも特定できる訳ではなく、近世と近代の境界も不分明である。このため、本発掘調査の対象としては、引き続き調査を実施することとなっているⅡ・Ⅲ区への応用を考慮して、解体作業等で影響を受けていない最上層位から対象とし、各遺構面の時期を把握しつつ調査を進めることとした。そして表土の除去が終了した平成11年7月13日、作業員を動員しての本格的な調査に着手した。

第①面 表土除去後の面を第①面として精査した。大きな掘乱坑などのほか、セメント造りの水槽状大型遺構が確認された。内容物は、いわゆるゴミで、底は水抜きのためか大胆に穿孔される。ガラス片や鉄屑などの廃棄物層上面は、炉跡状に焼土化が著しいものとなっていた。性格不詳。

第②面 翌14日からは第②面の検出作業を実施した。第①面で露出していた電話番号などの記された徳利が一括出土した遺物だまりは、当該面のものであった。遺物としては中世土師器から20世紀代のものまで千差万別であり、時期の特定には至らないが、町屋の境界を示す石塀の基礎などが検出された。検出された遺構数は意外に多く、遺構分布については21日までに見取り図の作成を行った。遺構の中には、鍛冶炉のような炉跡がいくつか検出され始めた。遺構の完掘作業は、7月29日までに終了したことから、翌30日に完掘写真の撮影を行うとともに、引き続き平面図の作成に着手した。8月4日以降において、平面図の作成が終わった区域から順次、第③面検出のため掘り下げを実施した。

北区第③面・南区第②下面 8月9日、北半部の調査区は、第③面の検出がほぼ終了した。しかし、南半部は第③面との中間に遺構面が検出され、これを第②下面として調査することとし、それぞれの遺構分布については10日までに見取り図の作成を行った。翌11日から遺構発掘を本格化させ、19日までは大半の発掘が終了し、23日に南北各面の完掘写真の撮影に漕ぎ着けた。

南区第③上面 遺構面掘り下げについては、先行する形となった北区を保留とし、8月24日から南区で開始した。ただし、北区と同じ第③面に達するには、30cmと厚いため、20cmほどで掘り下げを進め、これを第③上面とした。当該面の遺構は、26日までに検出、見取り図の作成を終えた。南区第③上面の遺構発掘は、9月3日までに完掘し、全体写真撮影を行った。

北区③～④面・南区③下面 9月6日、南区は第③下面、北区は第④面を目指して掘り下げ作業を開始。ただし、北区では、第③面での未検出遺構が確認されたことから、これらは第③～④面の遺構とした。これら各面の遺構検出は、9月8日までに終了し、見取り図を作成した。遺構の発掘は、大型の井戸遺構等もあって難航し、9月30日ようやく完掘し、全体写真撮影を行うことができた。

北区第④面・南区第④上面 10月1日からは、北区の第④面、南区は第④上面までの掘り下げ作業を実施し、あわせて遺構確認も行った。4日以降は、北区で遺構発掘に着手した。7日は、北区の遺構平面図作成、南区では遺構分布図の作成を行った。遺構の密集度は意外の高く、分布の特徴としては、北側では井戸や土坑墓と考えられる大型遺構が多く、南側では柱穴と考えられるピット類が多く検出されている。遺構の発掘は概して長期化することとなったが、10月26日にはおおむね完掘し、翌27日に全体写真の撮影を行うことができた。その後直ちに、平面図の完成を目指して作業を行い、29日には一部掘り下げに着手した。

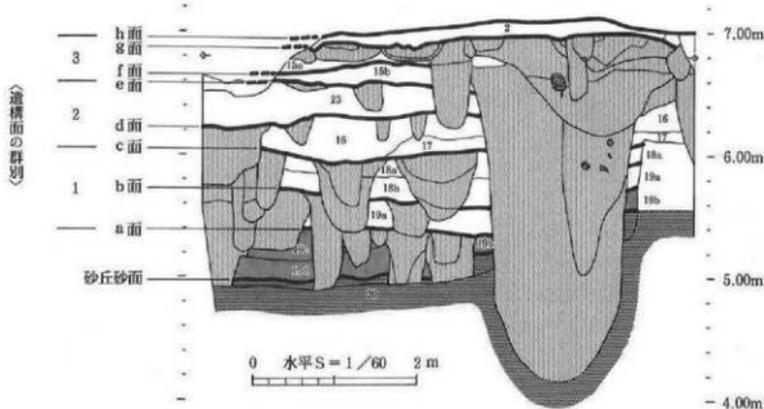
北区第⑤面・南区第⑤面・第⑥面 10月29日、南区から第⑤面の検出作業に着手した。当該面以下については、パイルと地下埋設大梁部分のみの調査に移行し、調査面積の削減を行った。掘り下げについては、当初第④下面の検出を意図していたが、第④上面から掘り込まれた遺構の壁に僅かに残る程度であった。このため、第④下面として独立的に調査を進めることを断念し、第⑤面の検出を急いだ。しかし、第⑤面とした遺構面は、黒褐色砂層であり、遺構覆土との識別が困難であったことから、第⑤面としての遺構調査を断念し、第⑥面の検出作業を行うこととした。11月2日、第⑥面へ向けた掘り下げ中、青磁碗と白磁皿類を合わせて12枚が一括埋設されたSX-500を検出した。北区第⑤面については、11月5日までに掘り下げと遺構検出を終了し、見取り図の作成を終え、南区についても同日に第⑤面の遺構検出を終了した。8日は、北区の遺構の発掘を終了、合わせて完掘写真を撮影する。南区は遺構の確認状況を写真撮影し、合わせて分布図の作成を行ったが、当該面のレベルは工事による掘削面を超えていたことから、遺構の発掘は行わないこととした。その結果、11月12日までに基本層序の実測及び土層註等が終了したことから、本区の調査を完了した。

## 2 基本層序と遺構面

**基本層序断面の概要** I区の基本層序については、①東西は4ラインの南面(K~L-4)、南北については、全体の通しをKラインの東約1.5mを平行するラインの西面、そして③発掘深度が深くなった南区は②としたセクションベルトの東面において、合計3面を対象として層序の図化を行った。しかし、②については、当初当該調査区のメインセクションとすることを意図したものであったが、調査区の境界が町屋の境界とも重なったため、境界溝等の覆土が上層位を覆うこととなり、基本的な層序をすべて把握できなかった。また、①とした東西セクションについても、砂丘斜面の地形変換点に偶然重なってしまい、しかも掘り込まれた無数の遺構群によって、プライマリーな地層がほとんど残されていないありさまであった。このため、当該地区における基本層序、及びそれら層位の時期区分等については、③とした南区の東面を基準にして概観することとした。

**基本層序と遺構面(生活面)** 第10図は、③とした土層断面を模式的に表したもので、水平方向と垂直方向の比率は2:3とした。下層位から順にして各遺構面を設定すると、大きく8層に区分できる。これら各面の呼称について便宜的にa b c...g h面とし、調査した各遺構面との対比を行うことにする。

最下層となるa面は、粘性が乏しくしまりのない砂丘砂(第20層)を基盤とし、その上位を覆う旧表砂層(第19b~19d層)面であり、この上面から遺構が掘り込まれている。発掘調査で認識した遺構面としては、第⑤面に相当し、遺構密度は高い。しかし、後述するように、第⑤面の遺構確認は黒褐色層(第19a層)であり、遺構確認ができなかったことから、これらの遺構には第⑤面に帰属する遺構が相当数含ま



第10図 A1-1区基本層序と遺構面模式図

れていることになる。a面の起伏は、SE-252b井戸跡の南北で高低差が大きく異なる。旧表砂層は、第19c層と第19d層の2層に細分される。両者は基本的に同一層であるが、その性格は、下層位がプライマリーな本来の旧表砂層であり、第19c層とは第19d層を切り盛りした整地層である。

b面は、旧表砂の直上を層厚20cmほどの黒褐色砂層（第19a層）が覆い、これを生活面として、遺構が掘り込まれている。本層は黒色が強く若干の粘性を帯びるが、おそらくa面で営まれた生活行為による汚染等の結果を意味し、これらの表層が整地された可能性が高い。遺構面では第⑤面に相当し、遺構密度は比較的高い。しかし、前述した如く、遺構確認面が遺構覆土と同じ黒色系であり、遺構確認の試みが不成功に終わったため、当該遺構面での遺構調査は行えなかった。遺構面は概して起伏があり、北側ではSE-252b井戸跡を境に一段高くなり、徐々に高度を上げながら、砂丘地形へと連なったものと考えられる。

c面は、b面上位を40cmほどの厚さで覆う暗褐色砂層（第18a層）上面を遺構面とする。この層は、第18b層の整地層と考えられる。遺構面としては、第④上面に相当し、遺構数は多い。遺構面の起伏がやや大きい。水平堆積をなす整地層は南区全体に及んでおり、町屋の奥行きが北側へと拡張している傾向を看取することができる。

d面は、c面上位を約40cmほどのところに位置し、粘性を帯びる黒色砂（第16層）と明褐色粘質砂層（第17層）が覆い、前者を遺構面とする。砂層の色調からすれば、人間の営みにかかる汚染といった可能性も考えられるが、粘性が強いことから、生活面を安定させるため、意図的に粘土分を含ませて整地した可能性も否定できない。遺構数はかなり少なくなっており、この場合、長期に渡って植物が繁茂した環境にあったことも考慮する必要がありそうである。遺構面としては第③下面に相当する。

e面は、d面上をやはり30cmほどの黒褐色砂（第23層）が覆って形成される。若干の粘性を帯びるが、総体的にはさらさらとした砂層で形成される。第③上面の遺構面に相当する。やはり遺構数は少ない。

f面は、極暗褐色砂層（第15b層）上面を生活面とする。層厚はおおむね15cmほどで、やや薄くなる。粘性が強くしまりがあり、焼土や木炭を多く含むことから、火災後の整地層である可能性がある。遺構面としては第②下面に相当する。

g面は、暗褐色の粘性の乏しいさらとした砂層（第15a層）の上面に相当する。遺構数は増加する。遺構面としては第②面に相当するが、掘り込まれた遺構の多くは、焼土や木炭、および礫等を多く含むものであった。h面は、褐色砂礫砂層（第2層）上面を遺構面とするもので、かなり硬くしまった状態にある。再開発直前までは、通路として利用されていた部分である。遺構面としては第①面とし、攪乱層等の除去後の最上層である。

遺構面の大別 I区の南区では、上述のとおり遺構面（生活面）として合計8面を把握することができた。そこで各遺構面について、遺構数や層序の堆積状況から大別を行い、それぞれの年代観について、大まかな対比を行っておきたい。まず、堆積状況からみた最も大きな変化は、e面にある。このe面が形成されるまでは、各生活面が30～40cmほどの堆積や整地層を経て形成されていたことに對し、e面以降h面にかけては、堆積状況が薄くなっており、砂丘形成の状況に大きな変化を認めることができる。このような変化は、柏崎町の展開において大きな意味を有すると考えられる。これとともにc面では、整地される範囲の奥行きに広がりが見られ、また当該面を境に遺構数あるいは密度に大きな変化が看取される。

これらのことを総合すれば、各遺構面は大きく3段階に区分することが妥当である。そこで、a～c面までを第1遺構面群、d～e面までを第2遺構面群、そしてf～h面までを第3遺構面群に区分し、第I区における各遺構面の展開を見極める手立てとしたい。

第1遺構面群と年代観 a面（第④面）は、当該地点における遺跡形成の出発点であり、砂丘の自然地形を利用しつつ比較的狭い小段（小テラス）を造成して、居住空間等を設定したものと考えられる。南区北端には、旧表砂が傾斜をもって認められることからすれば、奥行きは狭く、その北側の上段には、小さな区画がもう一段ほど造成されていた可能性がある。b面（第⑤面）については、遺構面を形成する黒褐色砂層が北側へも連続するため、基本的にはa面の状態がそのまま踏襲されたと考えられる。そしてc面（第④上面）に至って、I区内の上下二段がおおむね連続する一つの町屋に統合され、奥行きを深めたものと考えられる。このc面までの遺構数は多く、当該地点における町並みの展開は順調であったと考えられる。

年代観としては、a面（第⑤面）が古段階に属する出土遺物の年代観から15世紀代、c面（第④上面）については15世紀後半から16世紀後半頃に想定することができる。

第2遺構面群と年代観 d面（第③下面）を形成する砂層は、粘性を帯び概してしまりのある安定した砂層であるとともに、上層位は焼土や木炭を多く含むといった大きな特徴をもっている。このような性格の砂層は、第1遺構面群では認められておらず、極めて特異な存在であるが、焼土や木炭の存在は、火災などの災害を、また、しまりのある安定した地盤の造作は、災害後の復旧等意図的な整地層であることを連想させる。遺構数は、d面とともにe面（第③上面）もいたって少なく、e面が乗る暗褐色砂層そのものも、概してしまりが無い。

各遺構面の年代観については、e面（第③上面）については、出土遺物等からおおむね17世紀代、d面（第③下面）は16世紀から17世紀中頃に想定される。

第3遺構面群と年代観 当該遺構面群の特徴は、各整地層の厚層が薄いことから、降り積もる飛砂などの砂丘砂は、除去されつつ現状をできるだけ維持することが可能な態勢にあったものと見られる。h面（第①面）は明らかに再開発直前までの通路であり、昭和3年（1928）発行の柏崎市街図にも記載されていることから、上限は不明ながらおおむね20世紀代とすることができる。g面（第②面）については、焼土や礫等を多く含む遺構が掘り込まれていることから、柏崎町が大火に見舞われた19世紀末を含むものとみられるが、遺物としてはf面（第②下面）と同様18世紀代が多い。

### 3 遺 構

#### 1) 第②面の遺構

調査当初、表土剥ぎにより最上面として第①面を検出したが、建物等を解体後に整地した現表土面であり、今回の調査対象とすべき遺構は存在しなかった。このため、さらに標高レベルを下げた掘削を行い、遺構確認面としての第②面を検出した。A1-I区においては、この第②面から発掘調査を開始した。

調査面積約150㎡に対し、検出された遺構総数は62基である。よって、1㎡あたり平均約0.4個の遺構が検出された計算になる。I区では東西方向に設定した中央ベルトを挟み、北側を北区（K-2・K-3グリット）、南側を南区（K-4グリット）とした。本面には近現代的な様相を示す遺構類や、実際にガラス・ブリキ・プラスチックといった近現代の廃棄物が覆土内から検出される穴類も多く残存していた。これらは遺構確認後の発掘調査により判明するものが多く、後世の攪乱として一括して扱い、調査の対象となる遺構の中からは除外した。主要な遺構からの出土遺物等によると、本面の年代はおおよそ18世紀代と考えられる。

第②面を特徴づける遺構としては、居住区（町屋）を区画する石組列や溝跡などが挙げられる。これらの主軸方向は、現代における「東本町上町」の町並み同様、東北東-西南西に延びる「本町通り」とほぼする真北-真南方向を基準としている。このことは、正方位を強く意識して区画・建築が行われた結果として捉えられる。つまり、第②面の時期には現在の状況に近い町並が確立されており、今日までその区画性が継承されてきた様相を示すものであろう。建物跡の復元は、おおむね近世後半から現代に至るまでの遺構類が調査面に混在しているため現場段階では困難であったが、後日、計3棟の建物跡が確認された。

遺構の分布をみると、北区は現代の攪乱が混在することもあり、概して希薄な状況である。一方、南区は石組列を挟んで東西で、密度や各遺構の法量が異なる特徴がうかがわれる。石組列の西側では概して小形の柱穴・ピット類が多く検出され、東側は比較的大きな柱穴・土坑が少数検出された。このため、石組列を境界とした東西で異なった建物等が建築されており、それぞれ異なった土地の利用がなされていたものと想定される。

#### a. 建物跡

計3棟の掘立柱建物跡が復元された。南区において石組列を境界とした東側から1棟が、西側には2棟が重複して検出された。何れも調査区外に主体部をもつため、建物全体の規模が把握できるものは存在しなかった。主軸方向は、3棟全てがほぼ真北-真南に統一されており、現代の区画性と合わせて正方位を意識して建てられたものとして捉えられる。

**SB-1 建物跡** 南区西側に存在する。SKP-34・48の2基の柱穴で構成されるが、建物の主体部が調査区外に及ぶため、規模や形態等は全くの不明である。主軸方向はN-2°-Wとなり、ほぼ真北-真南を示す。柱穴の間隔は約2.8mである。詳しい構築時代については不明であるが、柱穴内から寛永通宝が出土しており、ひとまず近世期の所産としたい。

**SB-2 建物跡** 南区西側に存在する。SKP-33・41・51・53の4基で構成される。桁行4間（約7m）以上となるが、主体部が調査区外となるため建物の形態や規模等は不明である。各柱穴の間隔は約1.5~2.2mである。個々の柱穴は法量や深度が比較的浅いことが特徴として挙げられる。主軸方向はN-4

°-Wであり、重複するSB-1同様ほぼ真北-真南方向を向く。何れの柱穴もSB-1の周囲を取り囲むように配列されており、SB-1に付随する庇跡、もしくは塀・欄跡などの可能性も考えられる。

SB-3建物跡 南区東側に存在し、SB-1・2とは間に存在する石組列によって隔てられる。SKP-6、SKP-130(第②下面)の2基で構成されるが、建物跡の北西部のみが調査区内で検出されたに過ぎない。よって、全体の規模は不明である。SKP-130については、第②下面の調査で検出されたものであるが、SKP-6と規模や深度などに類似性が認められたため、同一の建物跡を構成する柱穴として判断した。建物の主軸方向はN-2°-Wを計り、柱穴間の距離は約2.7mである。SB-1と主軸方向や柱穴の間隔がほぼ一致するが、柱穴の規模は一回り小さいものとなる。石組列を境界として存在する、互いに類似した規格をもつ建物と想定される。

#### b. 石組列

調査区内から南北方向に縦断する石組列が2列平行して検出された(西列・東列)。2つは途中で後世の攪乱等によって南北におおむね5つに分断されていたため、便宜的にそれぞれに区分した(SX-17~21)。これらは各町屋の境界をなす一組の塀(石垣)を構成する石組と想定される。一方、一組で1条の水路・側溝跡等を構成する石組とも類推されるが、石列中間部には特徴的な堆積物等は見られなかった。また、石組列は地形本来の傾斜通り、南方になるにつれ低く傾斜していた。主軸はN-2°-Wを指向し、ほぼ真北-真南を示すものと捉えられる。

石組の構造は、切石を連結させた上部構造と、大小の自然礫を配列した下部(基礎)構造のおおむね2つに分けられる。切石は地上に数段積み上げられていた可能性も考えられるが、検出時は一段のみが部分的に残存していた。切石の大きさは、長さ約1m~1.4m、幅約15cm~20cm、高さ約20cm~30cm程度であり、四角柱状を呈するものである。おおむね一定の寸法であり、規格された製品と判断される。石材は明黄褐色を呈し、凝灰岩と推定される。そして、下部には偏平で大形の河原石が整然と敷詰められていた。河原石は平面形が長楕円形のもを中央で半載したものが多く用いられており、長辺約30cm、高さ約10cm~15cm程度のもが多い。石の割れ口は、西列のものは東側に、東列では西側を向け対称的に配列されていた。このため、2列が同時期に構築された可能性が高い。河原石の隙間には小形の礫や破砕礫が充填されているが、検出時は既に崩落・飛散した状態のもが多かった。ただし、北端から検出されたSX-17・18の区間では、下部構造が大形の河原石のみで形成されており、それ以南(SX-19~21)にみられる手法とは異なる特徴がみられた。そして、基礎となるそれぞれの下部構造を完掘すると、周囲が浅い溝状の掘りとなった。また、石組列に挟まれた中間部分もごく浅い掘り込み、もしくは窪みとして捉えられた。遺存状態はおおむね南側ほど低くなる。ほぼ原形を留めるのは北端のSX-17・18部分で、下部構造のみを残すもの(SX-21)、小礫のみが列状に飛散したもの(SX-23)も存在する。

なお、下部構造からおおむね17世紀後半~18世紀の陶磁器が検出されており(SX-18・21)、構築時期をある程度想定できる遺物として捉えたい。

#### c. 柱穴・ピット類

法量の大きい土坑と比較し、相対的に小規模となる穴類をピット類として一括して扱った。全30が基検出された。おおむね南区西端部で集中的に検出され、北区側では小形のピット類が散在する程度であった。法量的には小形のものが多く、建物を構成する柱穴以外にも、杭や欄の跡等が多く混入しているものと考

えられる。法量から柱穴と想定されるものでも、実際に木柱や柱痕を残すものは少なく、建物としての配列が認められるピット類以外に柱穴を抽出することは困難であった。

#### d. 土坑類

柱穴としての特徴や配置が捉えられない、大形の穴類を一括して取り扱った。18基が検出された。平面形態でみると、隅丸方形を呈するものと、円形を呈するものの2種類がみられた。

SK-5 K-4 ⑩グリットに位置し、東半は調査区外に及ぶ。法量は長軸約276cm、短軸は残存値で約84cmと大きい。深度については約16cm程度と浅い。平面形態は隅丸方形を呈し、底面の中央部が楕円状にやや窪んでいた。覆土には大形礫が数点混入していた。

SK-7 K-4 ⑩グリットに位置する。長軸約180cm、短軸約156cm、深度約50cmを計る。平面形態がおおむね方形を呈する土坑であり、底部も同様に方形を呈する。内部から偏平な礫が2つ検出され、内1つは底面中央部に配置されていた。このため、建物を構成する大形の柱穴とも考えられるが、周囲に同規模の遺構が検出されていないため、単独の土坑として扱った。覆土から18世紀頃に比定される肥前系陶磁器が出土しており、遺構の時期をおおまかに示すものと捉えたい。

SK-16a K-4 ④グリットに位置する。SD-62と重複し、その南端部である可能性も考えられるが、深度の違いから別の遺構として扱った。長軸は残存値で約180cm、短軸約140cm、深度約40.5cmとなる。北半が調査用ベルト内に及んでいるため、平面形態は明確でない。

SK-75 K-3 ③グリットに位置する円形を呈する土坑である。長軸約138cm、短軸約115cm、深度は約21cmと比較的浅い。中間部にテラスを有し、底部の面積は狭い。覆土には礫の混入が目立つ。

#### e. 炉跡

SX-13 K-4 ⑩グリットに位置する。完掘時の法量は長軸約130cm、短軸約120cmを計り、深度は約44cmとなる。主軸方向はN-4°-Wを計る。おおむね隅丸方形を呈する鍛冶炉跡であり、底部は楕円形となる。掘り形からみると西側にテラス状の小段が2つみられ、底部の主軸は平面形態の中央よりや東寄りにずれる。炉壁はおおむねレンズ状に構築されており、断面を観察すると炉壁(床面)と焼土が幾重かに折り重なっていることから、炉壁を何度か貼り直して炉を再利用したものと捉えられる。遺構上部となる炉床面からは陶器灯明皿が伏せた状態で出土した。時期はおおむね17世紀後半頃に比定される。

SX-54 K-4 ②グリットに位置する。長軸約86cm、短軸約67cm、深度約19cmを計る。楕円形を呈する鍛冶炉跡である。主軸方向はおおむね真東-真西となる。粘土で構築された炉壁が良好に残存しており、表面には被熱による激しい色調の変化がみられた。上部からは17世紀後半に比定される陶器灯明皿、および寛永通宝が出土した。また、炉内でサンプル採取した覆土からは鍛造片が検出された。

#### f. 溝跡

SD-62 K-3 ⑩グリット他に所在する。法量は、長軸約346cm、短軸約142cmの長楕円形状を呈し、深度は約36cmである。長軸方向はおおむね真北-真南を示している。覆土から遺物の出土がみられず、焼土や砂利等の混入も確認されなかった。

SD-79 K-3 ③グリットに位置する。長軸約313cm、短軸約54cm、深度は約18cmと浅い。切り合い関係から、西側に存在する石組列・SX-18よりも古い遺構として捉えられる。長軸方向はおおむね真

北-真南を示し、石組列にほぼ平行する。

## 8. その他

第②面には近現代の遺構類が残存しており、遺構全体図にも記載しているため、以下に簡単に記述する。SX-1はK-②グリット他に位置する漆喰製の箱形遺構である。法量は長軸約375cm、短軸約148cm、深さ約93cmである。本確認面で掘りあげることができず、以下の調査面まで残存することとなった。内部にはブリキや陶磁器類が大量廃棄されていた。SX-76は現代の井戸跡であり、円形の枠はコンクリート製で、直径約90cmであった。なお、現代の下水管が北区西側に埋設されており、埋設された方向は石組列と共通し、真北-真南を基準として南北方向に延びるものであった。

このように、第②面ではおおむね近世から現代に至るまでの遺構類が入り交じって検出され、そのほとんどの主軸が現本町通りとほぼ直交し、真北-真南を基準として構築されていることが明らかとなった。

## 2) 第②下面の遺構

第②下面は1区における南半・南区のみの調査区となる。調査区周辺における本来の地形は、北から南に向かって緩やかに傾斜していた。このため、南側になるにつれ堆積層や整地層が厚くなることから、南区は北区よりも調査面を多く設定した。本面では調査面積51㎡に対して遺構は29基検出された。よって、遺構密度は1㎡あたり約0.6基が検出されたことになる。また、遺構内外から出土した遺物の所属時期によると、本面の時期はおおむね18世紀に収まるものと捉えられる。

遺構の分布状況としては、西側に溝跡となるSD-101が調査区を縦断し、その東側に掘立柱建物跡1棟を含む柱穴群がみられ、西側には小ピットが主に検出された。

### a. 建物跡

SB-4 調査区東端に所在する。SKP-117・123b・125の3基で構成される掘立柱建物跡であるが、主体部が調査区外となるため正確な規模や形態等は不明である。検出部分の梁行は3間(約5.5m)以上であり、各柱穴間は約2.3mを計る。主軸方向はN-5°-Wとなり、ほぼ真北を基準として建築されたものと捉えられる。個々の柱穴の平面形は、隅丸方形もしくはそれに近い円形を呈する。SKP-117・123bの各大きさは1mを超える大形のものであり、2つの柱穴の底面には角礫が配置されていた。礫は建物の主軸もしくは短軸に沿うように配置され、礎石として柱の下に埋設されたものと考えられる。各柱穴の大きさや間隔、そして礎石の存在からも大規模な建物跡が想定される。柱穴内から初期伊万里や中世土師器が検出されているが、構築年代の目安となる遺物とは考えにくい。

### b. 柱穴・ピット類

19基が検出された。特に密集する地点はみられず、ほぼ全域に散在して検出された。全体に法量の小きなものが目立ち、SB-4を構成する柱穴以外に直線的配列を示すものは確認できなかった。

### c. 土坑

6基が検出された。法量は何れも1m以下、深度は50cm以下となり、比較的小規模なものに限られる。内3基が南東部分に固まって検出されている。

#### d. 鍛冶炉跡

SX-105 K-4 ㉑グリットに位置する。長方形を呈する箱形炉であり、粘土により形成された外枠（炉壁）が巡っていた。大幅に攪乱を受けていたため、炉床や炉壁などの上部構造はほとんど残存していなかった。法量は推定で約180cm×約90cm程度となる。炉床以下には鉄滓（塊形鍛冶滓）が密に敷き詰められており、保温用に構築された炉の下部構造として捉えられる。

SX-116 K-4 ㉒グリットに位置し、方形を呈する鍛冶炉跡である。上部はかなりの攪乱を受けたと判断されるが、残存する法量で長軸約106cm、短軸約70cmを計る。下部には複数の自然隙が検出された。また、炉内から寛永通宝1点が出土しており、炉床面直上からはムシロ状の繊維が検出された。

#### e. 溝跡

SD-101 調査区の北端から南端までに及ぶ溝状遺構である。検出位置が上面となる第②面で検出された石組列跡の下部構造にはほぼ一致し、何らかの関係も想定される。平均幅は約120cmであり、深度はおおむね15程度と浅い。形態は幅・深度ともにほぼ一定値を保つ遺構であり、全体としては南に向かって緩やかな傾斜をもっている。主軸方向はほぼ真北-真南を計り、SB-4建物跡の主軸とも一致することから、人為的に構築された区画溝や排水溝と推定される。

### 3) 第③面の遺構

第③面は北区のみの調査区となる。面積96㎡に対し検出遺構数は37基であり、密度は0.4基/㎡となる。遺構密度が比較的低く、北半は特に散在している。また、他の調査面と比較して遺構どうしが重複するものは極めて少ない。調査区南西部に延びる建物跡SB-5の一部が検出されているが、主体部は南区側・第③上面となるため、第③上面に記載した。本面の時期は、出土遺物からおおむね17世紀と判断される。

分布をみると、北側には比較的大きな土坑、南側には小形のピット類が、そして南西部には南北に伸びる溝跡が主に検出された。

#### a. ピット類

29基が検出され、おおむね南半に集中してみられた。法量的にも小さなものが占めていた。

#### b. 土坑

7基の土坑が北半部にほぼ集中して検出された。

SK-164 K-3 ㉓グリットに位置する。長軸約128cm、短軸約110cm、深度約120cmを計り、平面形態はおおむね円形を呈する。側面がほぼ直角に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は概して締まりに乏しく、サラサラした砂が主体であった。17世紀代に比定される肥前系陶器が出土している。

#### c. 溝跡

SD-151 中央西側で検出され、さらにその南方にも伸びていた。位置的には第②面で検出された石組列にはほぼ一致するものである。幅は1.8m程度であり、ほぼ平均的な幅を保っている。主軸方向はほぼ真北を示す。深度は13cmと浅い。内部からはピットが数基検出され、その切り合い関係から比較的古い

ものと想定されるが、遺物は18世紀頃に比定される陶磁器や中世土師器が出土している。形態的な特徴や出土遺物の時期から、第下面で検出されたSD-101の北半部である可能性が高い。

#### 4) 第③上面の遺構

南区のみの調査範囲となる。調査面積46㎡に対して29基の遺構が検出され、密度は0.6基/㎡となる。遺構の主な種別としては、まず建物跡2棟(SB-5・6)が発見された。何れも北側の調査区(第③面)まで及ぶ大きな掘立柱建物跡であり、真北-真南を基準として建てられた長屋(町屋)と想定される。また、特筆すべき遺構として長楕円形の墓塚(SX-209)が1基検出された。SB-6内部に位置するが、建物跡を構成する各柱穴と墓塚より出土した遺物の時期を比較すると、建物跡よりも墓塚の方が新しいと判断される。西側には南北にのびる溝跡が4条重複して検出された。何れも深度が一定ではなく複雑であった。この溝内から礎石が直線状、ほぼ等間隔で検出され、柱穴下部に配置された礎石として捉えられた。しかし、溝跡のプラン確認時、発掘時には柱穴として把握することはできず、後日建物跡として復元された(SB-5)。本面の時期は、出土遺物からおおむね17世紀代に収まるものと判断される。

分布の状況は、溝跡を挟んだ東側にビットや土坑が散在する程度に捉えられ、第③面の状況に類似するものである。

##### a. 建物跡

2棟の掘立柱建物跡が検出された。両者とも北区の第③面にも及んでいるが、占有面積や所在柱穴数から本面の遺構とした。建物跡は2棟とも南側調査区外にも及ぶ大形のものとなる。

SB-5 調査区西端に存在し、主体部は西側調査区外に及ぶ。検出された柱穴は6基であり、内5基には平坦な河原石が礎石として埋設されていた。しかし、遺構確認時に発見された柱穴は2基(SK P-132・182)だけで、その他の柱穴は溝跡群(SD-222・223)の中から礎石のみが検出されたものである。これらは、遺構確認段階で柱穴として検出することができず、発掘中に礎石の存在により柱穴と判断されたため、本来の形態や覆土などについては全くの不明である。SK P-132は上面となる第下面で検出された柱穴であり、本来の柱穴の規模に近いものものと考えられる。SK P-182は北区・第面で検出されたが、SK P-132と比較するとかなり深度が浅く、下部のみが残存していたものと考えられる。

桁行6間(約11.7m)以上の規模となるが、梁間の規模は不明である。建物跡の大半が調査区外となるため、本来の規模は推定不可能である。柱穴の間隔は約2.1~2.4mとなる。主軸方向はN-3°-Wとなり、真北-真南を基準として建築された建物跡と想定される。

SB-6 SB-5の東側に約1.5m離れて位置する。SK P-143・147・232・251c ii・251の5基の柱穴により構成される。SK P-143・147は第面・北区で検出されたものであり、SK P-251c ii・251 b iiiは本面の下面となる第③下面で検出された柱穴である。主軸方向はN-4°-Wとなる。SB-5と主軸がおおむね一致し、同時期性が強いものと想定されたため、本面の遺構として取り扱った。検出部分から梁行4間(約10m)以上、桁間2間(約4m)以上の規模となるが、主体部は調査区南東側にあるため、本来の規模は不明である。個々の柱穴の規模は60~90cmと比較的大きい。SK P-251c iiから出土した遺物から、おおむね16~17世紀の建物跡と考えられる。

##### b. 溝跡

SA-19 SB-5・6の間に存在した、両建物跡の境界を為す直線状の柵列である。4基以上のピットにより構成されると考えられるが、調査区南方まで及び正確な規模は不明である。発掘時に遺構として検出されたのはSKP-233だけであり、下部からは礎石が検出された。加えて、ピット下部に配置されたと考えられる礎石が、溝跡(SD-218)内部より2つ検出され、その後柵列として配列を検討・復元した。規模は約6.7m以上となる。主軸方向はN-0.5°-Wとなり、SB-5・6同様、真北-真南を意識したものと判断される。個々のピットの法量はSB-5・6のものよりやや小さく、礎石の規模もSB-5の柱穴に用いられた礎石より一回り小さなものが配置されている。

#### c. 柱穴・ピット類

総数14基と概して少なく、分布として捉えることは困難であった。

#### d. 土坑

集中することなく、全体に点在して計8基が検出された。

SK-217 K-4⑨グリットに位置する。長軸約157cm、短軸約97cmとなり、深度は約15cmである。平面形態は楕円形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを計る。覆土には粘土ブロックや灰・炭化物の混入が目立った。

SK-230 K-4⑩グリットに位置する。全体の1/4程度が検出され、おおむね楕円形を呈するものと推定される。法量は残存値で長軸約140cm、短軸約120cmであり、深度は約21.5cmである。覆土は炭化物・粘土粒が主体的にみられる。おおむね17世紀後半に比定できる肥前系磁器が検出されている。

SK-201 K-4⑤グリットに所在する。長楕円形を呈し、西側半分が検出された。法量は残存値で長軸約122cm、短軸約57cm、深度は約84cmである。上部の覆土には焼土粒と小砂利が多く含まれていた。焼煎鍛冶滓と羽口の破片が出土し、鍛冶炉跡の可能性も考えられる。

SK-202 K-4⑤・⑩グリットに所在し、SK-201の南側に近接する。東側部分は調査区外となる。法量は残存値で長軸約137cm、短軸約49cmとなり、深さは約23.5cmである。覆土上部からは肥前系の陶磁器片が多く検出された。

#### e. 墓塚

調査区東寄りの位置から大形の墓塚1基が検出された。

SX-209 K-4⑨・⑩グリットに所在する。長軸約330cm、短軸約90cmを計る長楕円形を呈する。深度は約52cmであり、横断面はおおむねカマゴコ状である。主軸方向は真北-真南を示し、遺体を北枕に配し埋葬したものと想定される。また、下部からは刀子2振と、銭貨2枚(紹聖通寶他)が検出されており、副葬品と考えられる。覆土は砂層と粘土層が折り重なって堆積しており、最下層は炭化物を主体とする黒色粘土が広がっていた。また、17世紀代で捉えられる白磁と肥前系陶器も出土している。

#### f. 溝跡

中央や西寄りの位置に、数条に切り合う溝跡群が検出された。遺構検出時および、セクション観察の際、覆土の色調や混入物等により4つに分割した。

SD-218a・218b・222・223 何れも南北方向に主軸をもつ。幅は約50cm~70cm、深度は各溝跡に

より異なり約10cm～40cm程度となる。SD-222内部からは、柱穴の下部に配置された礎石がほぼ一定間隔で検出された。このため、溝と重複して存在した柱穴の位置を示すものと捉えられる。遺物としてはSD-218aから16世紀末～17世紀初頭に比定される肥前系陶器が、SD-222からは17世紀後半の唐津陶器等が検出された。なお、新旧関係は218b→218a・222、223→222となる。

#### g. 鍛冶炉跡

SX-215 K-4 ㉔に位置する。楕円形を呈し、長軸約105cm、短軸約68cm、深度約21cmを計る。主軸方向は、おおむね真東-真西を示す。外側には砂を混入させた粘土による厚い炉壁が構築されており、中心部には被熱した砂が充満していた。

#### 5) 第③～④面の遺構

北区のみの調査区となる。調査面積約90㎡に対して36基の遺構が確認され、遺構密度は0.4基/㎡となる。特筆すべき遺構として、大規模な掘立柱建物跡が1棟復元された他、大形の井戸跡1基と土坑等が検出されている。検出された遺構は、後述する調査面・第③下面の遺構と時期的に近いものと考えられる。本面の時期は、出土遺物からおおよそ16世紀後半～17世紀中頃と捉えられる。

分布としては南側中央付近にピットがやや集中し、その周囲に大形の井戸や土坑が間隔を空けて点在する。平面的には井戸跡と建物跡が重複するが、切り合い関係から建物跡の方が新しい遺構として捉えられる。このため、井戸跡が存在する時期は当時の居住域からは若干離れた区域にあり、その後改めて居住域に変化したものと考えられる。なお、北東部において大形の廃棄土坑(SX-198)を発掘したが、第②面で検出された攪乱である。覆土からは主に近現代の遺物が検出され、底面は砂丘砂まで達していた。

#### a. 建物跡

SB-7 北区(本面)東南部から南区(③下面)東側等に所在する大規模な掘立柱建物跡である。SKP-251a i・251b ii・251c iii(第③下面)・SKP-119・282・288b・289・290、SKP-407・421(第④上面)の計10基と、推定される3基の計13基により構成される。建物を構成する柱穴が、本面の他に第③下面(南区)・第④上面(南区)と複数面にまたがるものとなる。規模は桁行6間(約14m)以上、梁間3間(約5m)以上となるが、大半が調査区外まで及ぶため正確な規模は不明である。建物西側にはやや規模の小さな柱穴で構成される底部分が存在する。主軸方向はN-2°-Wを計る。SKP-289、407から出土した陶磁器類から、16～17世紀の建物跡と捉えられる。

#### b. 柱穴・ピット類

23基が検出されており、南側中央部にやや集中してみられた。おおむね南北に列を成すような傾向が看取され、欄等を形成していた可能性も考えられる。

SKP-289 K-3 ㉔グリッドで検出された。SB-7を構成する柱穴である。長軸約83cm、短軸約60cm、深度約66cmで、楕円形を呈する。覆土には炭化物が多く含まれており、中世土師器が出土した。

#### c. 土坑

9基が検出された。北西部分(K-3 ㉔・㉕グリッド付近)と南西部分(K-㉖・(22)グリッド付近)

の2ヵ所には、複雑に切り合う大形の土坑群が検出されている。

SK-287b K-3②・③グリットに所在し、SK-164の他複数の土坑と切り合っていた。長軸約100cm、短軸約93cm、深度約175cmを計る。遺構下部から寛永通宝と、17世紀前半頃の肥前系陶器片が出土している。覆土は全体に黄色粘土粒が多量に混入し、かなりの粘性が認められた。

#### d. 井戸跡

SE-275 K-3グリット他に所在する。平面形態はおおむね円形を呈し、法量は長軸約400cm、短軸約325cmを計る大形の井戸跡である。下部中央に木製の井戸枠(曲物)が検出されたが、その時点でこれ以上の掘削は危険と判断されたため、以下は発掘できなかった。よって、深度は井戸枠検出レベルとなる約233cmまでを確認した。遺物は17世紀前半頃に比定される肥前系陶器が出土している。

#### f. 溝跡

SD-281 K-3⑬グリットに所在し、SE-275西側に近接する。このため、井戸に付随する可能性も考えられる溝跡である。長軸約380cm、短軸約62cm、深度は約37cmを計る。主軸はおおむね南北方向を指向する。覆土からは中世土師器が出土している。

### 6) 第③下面の遺構

南区のみの調査範囲となる。調査面積約50㎡に対して、検出遺構数は計29基となる。よって、遺構密度は0.6基/㎡となる。おおむね第③～④面で検出された遺構とはほぼ同時期のものと考えられ、出土遺物からおおむね16～17世紀中頃に判断される。特筆すべき遺構としてSE-252bと、SE-252cがまず挙げられ、2基の井戸は切り合った状態で検出されている。また、鍛冶炉跡も2基検出されており、北側となる第③～④面にまたがる建物跡(SB-8)が1棟復元された。

分布状況としては、中央部に複雑に切り合う柱穴群が存在し、西側には2つの井戸跡、東側には鍛冶炉跡が存在する。比較的遺構密度の高い南区としては、空白地が目立つことが本面の特色といえる。

#### a. 建物跡

SB-8 北区(第③～④面)にまたがる掘立柱建物跡である。主体部が本面(南区側)に存在するため当該面の遺構として扱った。SKP-251a iii・251c iv、SKP-273・288a(第③～④面)の4基の柱穴と、推定される3基の柱穴との計7基で構成される。桁棟5間(約11m)以上、梁間2間(約3.6m)以上の規模が確認できるが、建物の東南部が調査区外に及ぶため、正確な規模は不明である。柱穴間の距離は約2.0～2.2m程度となる。個々の柱穴の法量は50～60cm程度の比較的小さいものとなる。主軸方向はN-3°-Wを示す。SKP-251aの出土遺物から、おおむね16～17世紀の建物と考えられる。

#### b. 柱穴・ピット類

18基が検出された。調査区中央部付近でおおむね3ヵ所に集中して検出された。これらは、遺構検出時にSKP-251a・251b・251c群とした複雑に切り合うピット群であり、調査当初から新旧関係をもつピット群と判断された。主にSB-6・7・8を構成する柱穴群となる。発掘時において覆土の色調などから、SKP-251aは更に～の3つ、SKP-251bはi～iiiの3つ、SKP-251cはi～ivの4つに

それぞれ分割した。SKP-251aからは16世紀前半の中世土師器と陶器が、SKP-251cからはほぼ同時期の肥前系陶器が検出された。また、これ以外にはSKP-252aから17世紀に比定される肥前系陶器が出土している。

#### c. 土坑

5基が検出された。調査区の南東部の集中的に検出され、何れも長軸50~60cm程度の大きさである。

#### d. 井戸跡

3基が北西部の狭い範囲にまとまって検出された。

SE-255 K-4 ㉒グリットに位置し、西半部は調査区外となる。長軸約262cmを計り、深度は約194.5cm(標高約6.405m)となる。遺物は16世紀前半に比定される青磁の皿類等が出土している。

SE-252b K-4 ㉑グリットに位置し、東側半分が検出された。SE-252cと重複し、古い方の井戸跡である。法量は長軸約180cm、深度は約210cm(標高約6.395m)を計る。覆土は、やや締まりに乏しい砂層が、おおむね凸レンズ状に堆積していた。16世紀後半に比定される青磁の碗や、16世紀中~後葉に比定される中世土師器が出土している。

SE-252c K-4 ㉑グリットに位置し、SE-252bよりも新しい井戸跡となる。法量は長軸約200cmを計り、深度約170cm(標高約6.07m)まで発掘した。井戸の下部には曲物(井戸杵)が検出された。曲げ物は更に深くまで及んでいたが、作業上の安全等を考慮し完掘は行わなかった。

#### f. 鍛冶炉跡

3基が近接して検出された。

SX-267a K-4 ㉕グリットに位置する。SX-267bと重複する鍛冶炉跡であり、西側に位置する。bより古いものとなる。おおむね円形を呈する。長軸約27cm、短軸約26cmで、深度は約22cmとなる。

SX-267b K-4 ㉕グリットに位置し、SX-267aの東側に重複する。遺存状態が不良で、本来の形態は不明である。法量は推定で長軸約38cm、短軸約37cm、深度は約43cmである。炉壁は比較的薄く、被熱により上部が灰白色に変色していた。

SX-268 K-4 ㉙に位置する。平面形態は楕円形を呈し、法量は長軸約127cm、短軸約84cmを計る。主軸方向はほぼ真東-真西方向を指向していた。粘土による炉壁が構築されており、遺構上面にはムシロ状の繊維が付着していた。遺物として中世土師器片が検出されている。

#### 7) 第④面の遺構

北区のみ調査区となる。調査面積約87㎡に対し、45基の遺構が検出された。遺構密度は0.5基/㎡となる。ピット類と土坑(墓塚を含む)のみが検出された。特筆すべき遺構として、墓塚と推測される土坑が多数確認され、数基からは骨片や複数の古銭が検出されている。その多くは楕円形を呈し、真北-真南、もしくは真東-真西を指向する傾向が看取された。また、墓塚同士はかなり重複が激しく、数カ所に集中して検出されている。そして、墓塚とその他の遺構が切合う場合、ほとんどが墓塚の方が古い遺構と判断された。このため、墓塚であった地区が居住域もしくは居住域周辺部に変化する様相がうかがえる。遺構出土の遺物から、本面の時期はおおむね16世紀代の範囲で捉えられる。

遺構の分布、とりわけ墓墳においては、数カ所のブロックを為すように捉えられた。しかし、これは本面が前面で発掘された大形遺構により、調査面の多くの部分が失われていたことも少なからず影響すると考えられる。そのため、本来は更に多くの遺構がほぼ全体広がっていたものと想定される。

#### a. ビット類

13基が検出された。他の調査面と比較し、かなり少ない数といえる。しかし、南北方向に小規模なビットが列を為すようにみられ、欄跡が存在した可能性も想定される。

#### b. 土坑

17基が検出された。集中することなく分布している。墓墳に重複するものも多くみられ、それらは概して墓墳よりも新しく形成されている。法量の小さいものや、深度の浅いものを客観的に土坑と判断したが、その中に墓墳が含まれる可能性も比定できない。

SK-309 K-2㉔グリットに位置する。重複する墓墳SK-306bよりも新しい。長軸約80cm、短軸約72cmで円形を呈し、深度は約25.5cmを計る。覆土は暗褐色～黒色を呈し、締まりに乏しかった。

SK-316 K-3㉔グリットに位置する。重複する墓墳SK-317aよりも新しい。長軸約96cm、短軸約81cmで楕円形を呈し、深度は約35cmである。

SK-335a K-3㉓・㉔グリットに位置する。重複する墓墳SK-333bよりも新しい。長軸約140cm、短軸約130cmで円形を呈する。墓墳の可能性もあるが、深度が約19cmと浅いため土坑とした。

SK-337 K-3㉔グリットに位置する。長軸約100cm、短軸約85cmで円形を呈し、深度は約16.5cmとなる。墓墳の密集地点から検出され、墓墳・SX-333bよりも新しい。

#### c. 墓墳

大形の穴となる土坑の中から、墓墳としての特徴がうかがえるものをひとまず墓墳として扱った。計15基が想定された。重複が激しく、遺構発掘中に下部から新たな墓墳が検出されることも多かった。形態は楕円形を呈するものが主体である。主軸はおおむね真北-真南を指向するものが多いが、真東-真西を示すものも少なくなかった。

SX-303 K-2㉓グリットに所在する。長軸約162cm、短軸約145cm、深さ約46cmで、円形を呈する。上部から初期伊万里と研石が検出された。覆土には炭化物の混入が目立った。

SX-304 K-2㉓グリットで検出された。長軸約80cm、短軸約60cm、深度は約14.5cmとなる。比較的浅いことから、上部は検出時において既に失われていたものと考えられる。北半がやや深く円形に掘り込まれていた。主軸方向はほぼ真北-真南を指向する。覆土は炭化物を含み、確認面と比較してかなり暗色を呈していた。

SX-305 K-2㉔グリットに位置する。法量は長軸約98cm、短軸約86cmであり、楕円形を呈する。深度は約38.5cmである。主軸はN-5°-Wを指向する。覆内から15世紀後葉～16世紀中葉に比定される青磁の碗類と、中世土師器が検出された。

SX-306a K-2㉔グリットに位置する。複数の遺構と切り合っていたため本来の規模は不明であるが、推定で長軸約159cm、短軸約137cmとなる。主軸方向はほぼ真北-真南を示す。

SX-312 K-3㉔グリットに位置する。長軸約151cm、短軸約94cm、深度約39cmを計り、楕円形

を呈する。主軸方向はほぼ真西-真東を指向する。

SX-317a K-3④グリットに位置する。長軸約278cm、短軸約245cm、深度約92cmを計る。おおむね楕円形を呈し、本面で最も大きな墓墳となる。主軸はN-60°-Wを指向する。覆土下層から古銭5枚が検出された。その他中世土師器も検出された。

SX-317b K-3④グリットに位置する。SK-317aと重複し、覆土の切り合いからSK-317aよりも新しいと判断される。長軸約157cm、短軸約90cm、深度約64.5cmを計り、楕円形を呈する。主軸方向はN-86°-Wとなり、ほぼ真東-真西を指向する。覆土最下層から骨片が検出されている。

SX-322 K-3⑩グリットに位置する。推定法量は長軸約120cm、短軸約77cmとなり、深度約24.5cmを計る。遺存度が低い、主軸は真北-真南を指向するものと想定される。

SX-323 K-3⑩グリットに位置する。他の遺構に大幅に切られ遺存度は低い。推定法量は長軸約102cm、短軸約93cm、深度は約28cmとなる。覆土は炭化物を多く含み、おおむね黒褐色を呈していた。主軸は真北-真南を指向するものと想定される。

SX-333a K-3⑬グリットに位置する。重複するSK-333b・cよりも新しい。長軸約122cm、短軸約116cmで円形を呈し、深度は約70cmとなる。

SX-333b K-3⑬グリットに位置する。推定法量は長軸約300cm、短軸約185cmであり、深度は上部を大きく失っていたため約12.5cmとなる。真北-真南を指向する大形の墓墳と考えられる。

SX-333c K-3⑭・⑮グリットに位置する。SK-333a・bよりも古い墓墳である。長軸約145cm、短軸約93cmで楕円形を呈する。深度は約58cmとなる。主軸はおおむね真東-真西を指向する。

SX-334 K-3⑯グリットに位置する。長軸約186cm、短軸約127cm、深度約55cmを計る。東端にはテラス状の小段がみられた。主軸はN-86°-Eとなり、おおむね真東-真西を指向するものと捉えられる。覆土から中世土師器が検出されている。

SX-335b K-3⑲グリットに位置する。長軸約120cm、短軸約80cmで楕円形を呈し、深度約44cmとなる。主軸はN-13°-Eとなり、おおむね真北-真南を意識したものと捉えられる。

SX-338 K-3⑳グリットに位置する。長軸約130cm、短軸約95cmで楕円形を呈し、深度約34.5cmを計る。主軸はN-46°-Eを指向する。覆土はおおむね黒褐色を呈しており、小砂利の混入が目立つ。遺物として中世土師器が検出された。

## 8) 第④上面の遺構

南区のみの調査区となる。調査面積約50㎡に対し、84基の遺構が検出された。遺構密度は1.7基/㎡と非常に高い値を示す。遺構どうしが激しく重複しており、次々と遺構が構築されていった状況として捉えられる。確認面と遺構の覆土が近似したものが多く、遺構を識別することが非常に困難であった。主な遺構として南側から建物跡2棟が復元されている。遺構内からは中世土師器の出土が目立つ。遺物の主体時期から、本面の所属時期はおおよそ15世紀後半～16世紀後半と考えられる。

分布としては、東側にピット類が密集しており、西側は土坑が多く確認された。

### a. 建物跡

2棟の孤立柱建物跡が復元された。この2つがA1-I区で検出された中で最も古い建物跡となる。

SB-9 調査区南西部に位置する。SKP-368・389・400・405・408・413の6基で構成され、桁行

2間(約2.4m)、梁間3間(4.6m)以上の規模となる。しかし、主体部が調査区外の南側となるため、正確な規模や形態については不明である。柱穴間の距離は約2.2m~2.4mとなる。主軸方向はN-4°-Wと想定され、おおむね真北-真南を意識して建てられている。柱穴は何れも中~小規模程度で、建物自体も大きなものではなかったと推定される。SKP-405・408からは16世紀中~後葉に比定可能な中世土師器が出土している。

SB-10 調査区南東部に位置し、SB-9と若干重複する。SKP-359・379・385の3基で構成されるが、大半は調査区外に及ぶため正確な規模等は不明となる。主軸方向はN-4°-Wを指向し、SB-9と同方向を示す。柱穴の法量が小規模であり、小形の建物跡と考えられる。遺物の出土に乏しく、SKP-359から中世土師器が検出されただけであるが、ひとまず16世紀代の建物と捉えたい。

#### b. ビット類・柱穴

56基が検出された。法量の小さなものが主体であった。内9基は前述したSB-9・10を構成する柱穴である。また、数基からは中世土師器が出土している。

#### c. 土坑

25基が検出された。隅丸方形の形態を呈するものが目立った。

SK-349 K-4④・⑨グリットに位置する。長軸約82cm、短軸約75cmで楕円形を呈し、深度は約34.5cmとなる。覆土はレンズ状に堆積しており、下部には粒状の炭化物が大量に含まれていた。中世土師器が出土した。

SK-350 K-4⑩グリットに位置する。長軸約96cm、短軸約95cmで円形を呈する。深度は約55cmとなる。覆土には黄色粘土粒が大量に含まれており、中世土師器が出土している。

SK-361 K-4⑧・⑬グリットに位置し、SK-357と重複する。長軸約152cm、短軸約70cmでおおむね楕円形を呈し、深度は約105.5cmとなる。覆土は粘土粒を多量に含み、色調はオリブ褐色から暗褐色を呈していた。中世土師器や、文字の判別不能な古銭が出土している。

SK-403 K-4⑪・⑭グリットに位置する。長軸約124cm、短軸約103cmでおおむね隅丸方形を呈し、深度は約62cmとなる。主軸はおおむね真北-真南を示す。中段部にはテラスが形成されており、底部も隅丸方形を呈する。覆土は暗褐色を呈していた。

SK-411 K-4⑯グリットに位置する。長軸約160cm、短軸約115cm、深度約106.5cmとなる。覆土が確認できると酷似しており、正確な平面形態は捉えられなかった。特筆すべき遺物として、下層から渡来銭6点が検出されている。また、炭化物が多く含まれた上層からは、鉄滓や羽口、礫が出土している。その他にも中世土師器が多く出土している。

SK-422 K-4⑰グリットに位置する。前面で検出された井戸跡・SE-252bに重複する。長軸約166cm、短軸は残存値で約80cmとなり、楕円形を呈する。深度は約67cmとなる。中段部に途中でテラスがみられ、底部は隅丸方形を呈している。覆土中層部は粘土粒と炭化物が多量に含まれ、内部から鉄滓と礫数点が検出された。その他、覆土内から15世紀代に比定される青磁の皿類と中世土師器が検出された。

SK-427 K-4⑱に位置する。前面で発掘した井戸跡のSE-252cに重複する。法量は残存値で長軸約222cm、短軸約84cmとなり、深度は約72cmとなる。底部からは小ビットが数基検出された。覆土からは粘土粒と炭化物が多く含まれており、色調はおおむね暗褐色から黒褐色を呈していた。遺物は14世紀

後半以降に比定される白磁の皿類と中世土師器が検出されている。

#### d. 鍛冶炉跡

3基が検出された。SX-401・404は、上下に重複する方形の炉跡であるが、何れも他の遺構に切られ極めて遺存状態が悪く、詳細な調査は行えなかった。

SX-348 a K-4④・⑩グリットに位置する。遺存状態が低く、西端と東半部を欠く。長軸は残存値で約150cm、短軸約83cmとなり、長楕円形を呈する。深度は約13cmとなる。炉床以下が薄く残存していた。炉床下の砂は激しい被熱により赤褐色に変化していた。15世紀中葉～後葉の珠洲焼が出土した。

#### 9) 第⑤～⑥面の遺構

南区の調査最終面となる。前面(第④上面)から大幅に掘り下げたため、第⑤～⑥面の遺構が混在する。調査面積約46㎡に対し、遺構検出数は126基となり、遺構密度は2.7基/㎡となる。しかし、調査としては遺構検出を実施したのみで、原則的には遺構発掘を実施していないため、本来の遺構数を上回る数値と言える。ただし、遺構検出時に遺物が確認された埋納土坑1基については発掘調査を実施している。出土遺物から本面の主体時期はおおむね15世紀代の範疇と捉えられる。

#### a. 埋納土坑

SX-500 (SX-3099) 完形の磁器が複数検出された埋納土坑である。量量は遺物が収まる程度の小規模なもので、長軸約23cmの円形ピット状を呈していた。深度は約30～40cm程度であり、第⑥面から掘り込まれていた。遺構の覆土は粘性に乏しい黒褐色砂であり、これよりやや明色の覆土となる土坑・SK-3098の中央に切り合って存在した。出土遺物の中には煤が明確に付着するものが確認された。

青磁の碗2点と、白磁の小杯5点・小皿5点、計12点出土している(図版12、351～362)。製作年代は何れもおおむね15世紀後半の所産と考えられるものである。出土状態としては碗2点と小皿3点の計5点が遺構の中央に伏せて重ねられており、その脇に他の小杯・小皿が立てかけるように並べられ埋納されていた。重ねられた白磁と、並べられたものでは外観や質が微妙に異なるものであり、意図的に分離されて埋納された可能性が高い。重ねられた5点の順番は、下から355・354・352・353・351となっていた。

#### 10) 第⑥面の遺構

A1-1区における最終調査面となる。北区南半のみの範囲となる。本調査面の遺構確認面は新期砂丘砂上面であり、これ以下に遺構は存在しないこととなる。調査面積は約30.1㎡と狭く、遺構は17基が検出された。遺構密度は0.6基/㎡となる。遺構の種別は中～小形の土坑(2基)・ピット類(15基)のみに限定される。検出された遺構の多くは、覆土が確認面となる明褐色砂丘砂よりも若干暗色を呈する程度で、確認面と識別するのが困難であった。調査区が狭小であり、検出されたピットから建物等を復元することは不可能であった。検出遺物は、SKP-460から15世紀代の陶器片が出土し、遺構外からは中世土師器や15世紀後半頃に比定される陶器が主に検出された。よって、本面の主体時期は遺物の時期からおおむね15世紀後半頃と捉えられる。

遺構はK-4・グリットと、K-4・⑨グリット付近の2ヶ所にやや集中した分布域をもつが、規則的な配列としては捉えることは不可能である。

## 4 遺 物

今回の調査では、4調査区全体で整理箱約100箱分の遺物が出土している。その内容は、土器・陶磁器類（約80箱）、木製品（約1箱）、石製品（約5箱）、金属製品（約2箱）、銀冶関連遺物（約12箱）などである。しかし、出土量で主体となるのは土器・陶磁器類であり、鉄滓などを除けばそれ以外はさほど多くはない。したがって、土器・陶磁器以外の遺物の報告は本章にて全体の概要を集約する程度とし、第V～VII章では土器・陶磁器類のみの報告とする。

### 1) 土器・陶磁器・瓦器

出土遺物において、量的にも主体となるのは、土器・陶磁器・瓦器である。また、陶磁器などの製作年代を求めることによって、遺構の営まれた時期や土層が形成された時期などを考察することができる。

本節では、A1-I区出土遺物を説明するが、事前に4調査区全体の概要を説明し、分類を試みることにしたい。

#### a. 柏崎町遺跡出土土器・陶磁器・瓦器の概観と分類

本遺跡出土の土器・陶磁器・瓦器は、中～近世に生産・消費された製品を主体とする。おもに食膳（供膳）・調理・貯蔵などの道具として使用されたものが多いが、一部の陶磁器や瓦器には調度品として扱われたものもあったと思われる。これらのうち、土器とされるのは素焼きの皿・小皿を中心とする土師器である。また、陶磁器としては、おもに中国や朝鮮を産地とする貿易陶磁器、瀬戸・美濃窯や珠洲窯などで生産された国産陶器などがある。そして、近世になるとこれらの土器・陶磁器は肥前地方で作られた陶磁器にかわっていく。

#### i) 貿易陶磁器

ほとんど中国で生産された製品が多く、一部に朝鮮の製品を含む。内容は、青磁・白磁・青花があるが、破片が大半である。以下、今回出土した貿易陶磁器についての概要を述べるが、分類や年代などについての全般的なこととして、横田ほか1978・小野1985・山本1995・續1995などの文献を参考にした。

**青 磁** [上田1982] 龍泉窯系の製品と思われるものが大半を占める。碗および盤・稜花皿が出土している。盤は少量であるが、碗は分類が可能である。ただし、全体の器形を把握できるものが少ないため、文様系統や施文方法などによる分類に限られた。B-I類・B-III類・B-IV類・B-IV'類・C-II類・E類が確認される。B-I類は少数であり、B-III類やB-IV類などが主体であるため、おおむね15世紀～16世紀前半の年代が考えられる。

**白 磁** [森田1982] 白色釉を施したものであるが、陶器質・磁器質の両者がみられる。小皿・小杯が確認され、D群として分類される内湾する皿や八角杯が多い。皿の高台は挟入が主で、輪高台は少数である。このほか、類とされる皿やピロースクタイプのものが1点確認された。全体的な年代観としては、15世紀前半～16世紀前半頃が想定される。

**青 花** [小野1982] 中国、特に景德鎮で生産された染付を「青花」とし、肥前系を中心とする近世磁器の染付とは区別しておきたい。器種としては皿が多く、特に口縁部が端反りで、体部外面に牡丹唐草などの文様を施したB<sub>1</sub>群が中心である。碗では、口縁部が直縁のC群や底部が優頭心型となるE群があ

る。これらから、15世紀後半～16世紀後半の時期が想定される。また、漳州窯系の製品も若干含まれる。

**朝鮮産陶磁器** 碗・皿が数点出土しているが、全体の器形を把握できるものはない。いずれも李朝期の所産と思われる。

## ii) 国産陶磁器

中世の国産陶器は、珠洲の製品を中心とし、瀬戸美濃・越前などがさほど多くはないが伴っている。近世では、肥前系陶磁器が大半を占め、越中瀬戸などの製品が少量含まれる。なお、各窯製品の名称については、「珠洲焼」・「越前焼」あるいは「珠洲窯製品」などと呼称する場合があるが、今回は単に「珠洲」・「越前」などとしておきたい。

**瀬戸美濃** [藤澤1991・1993・1996] 現瀬戸市を中心に、愛知・岐阜県域に分布する諸窯の製品である。今回の報告では、瀬戸窯および美濃窯の製品を区別せず、「瀬戸美濃」とする。内容は、窯で生産された、いわゆる古瀬戸（特に後期：14世紀後葉～15世紀後葉）の製品と大窯（15世紀後葉～17世紀後葉）の製品が多い。器種としては、天目茶碗が多く見受けられ、鉢皿・丸皿・仏瓶のほか、袴腰形香炉・卸目付大皿などが伴う。

**珠洲** [岡岡1994] 石川県珠洲市に分布し、中世を通して操業された須恵器系窯の製品である。北陸地方の中世遺跡からは普遍的に出土する国産陶器であり、本遺跡からもやはり珠洲窯の製品がもっとも多く出土している。しかし小片が多く、全体の器形を把握できるものはない。器種は、甕・壺・播鉢がある。図化の際には、製作時期を特定できる口縁部を伴った破片を中心とした。形態の変遷を追いやすい播鉢の口縁部からみると、主体となるのは第V～VI期（14世紀後葉～15世紀後葉）の製品である。

**越前** [小野1989など] 越前窯は、現在の福井県に所在する瓷器系の陶器窯で、中世六古窯のひとつに数えられる。越後では15世紀後半以降からその製品がみられるようになる [岩田1997]。今回の調査では、播鉢や甕もしくは壺の破片が若干出土しているが、小片が多いため、図化にあたっては、播鉢の口縁部を伴う破片が中心となった。

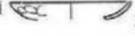
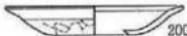
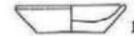
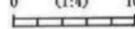
**肥前** [九州近世陶磁学会2000]<sup>1)</sup> 佐賀県を中心に分布する肥前系諸窯では、16世紀後葉に陶器、17世紀前葉に磁器の生産が開始される。調査区からは、16世紀後葉～17世紀前半頃の陶磁器が定量出土しており、17世紀段階で陶磁器類の大半を占めるようになる。また、18世紀の陶磁器をみると、「くらわんか手」と呼ばれる波佐見（長崎県）で生産された日用品が多い。肥前系陶磁器は、大橋康二氏を中心として編年がまとめあげられているが、波佐見については編年が異なるため、中野雄二氏の編年（九州近世陶磁学会2000所収）を参考とする。

**越中瀬戸** [宮田1997] 越中瀬戸窯は、富山県に所在する瀬戸・美濃系大窯の陶器窯である。16世紀末に生産が開始されて19世紀に至るが、越中以外にも製品が流通するのは17世紀段階である。今回の調査では、皿・壺などが若干出土している。

**その他** 以上のほかに、近世では須佐唐津の播鉢や関西系諸窯の碗などが含まれている。いずれも若干であるが定量見受けられる。

## iii) 土師器

皿・小皿を主要器種とする中世の土師器は、古代の土師器との混同を避けて「中世土師器」などと称することがある。しかし、今回の調査では古代の土師器は出土しておらず、一部に近世に製作時期を求められる土師器皿も含んでいる。また、今回の資料からでは、土師器を含めた土器・陶磁器様相において中世と近世とを時期区分するのは難しい。そこで、ここでは時代名を冠せず、単に「土師器」としておきたい。

A 類	Aa類  1782	Ac類  1533	Ae類  115
	Ab類  2004	Ad類  1885	
B 類	Ba類  678	Bb類  1040	
		Bc類  1861	0 (1:4) 10cm 

第11図 柏崎町遺跡出土中世土師器Ⅲ器形分類図

**器形分類** 土師器Ⅲは、製作技法によって大きくA・Bの2類に分類される。

A類は、「手づくね成形」と呼ばれる、回転台を用いずに成形されたものである。A類は、京都における技法の影響を受けているもので、中世後期の土師器Ⅲは、中世前期と区別して一般に「京都系第2波」と呼ばれている。体部外面には指頭圧痕を遺す。口縁部の形態によってa～c類への細分を試みた。Aa類は、体部が上半でやや外反し、口縁部は端部に向かって薄くなるものである。Ab類は、Aa類よりも体部の外反が強く、屈曲といえるようなものである。器壁はAa類のように薄くはならない。Ac類は、口縁部付近で器壁がやや厚くなり、口縁端部が浅くなって、断面三角形をなすものである。Ad類は、口縁端部を上方に積み上げるもので、Ac類からのヴァリエーションと考えられるものが多いが、一部にAa類やAb類に近いと思われるものもあったが、ひとまずAd類としてまとめることとした。Ae類は、体部がおおむね内湾して口縁部に至るものを一括した。また、小片が多く、口径などの法量復元は不確かなものがあるため、器形と法量との関係についての検討はここでは留保しておきたい。

B類は、「ロクロ成形」と呼ばれる、回転台を用いて成形されたものである。底部外面には回転台からの切り離しの痕跡として回転糸切り痕が残っている。形態により、a～cの3類に細分した。Ba類は、口径が大きく、器高が低いものである。Bb類は、径3～4cmほどの底部から外傾した体部が直線的に立ち上がり、口縁部がやや内側を指向するものである。Bc類は、底部が比較的厚く、安定し、体部も器壁が厚く、器高がやや低いものである。そしてBd類は、Bc類に似るが、体部が薄いものである。これらの形態分類と法量との相関関係は、Ba類は口径14cm、器高2.5cm前後、Bc類は口径10cm前後、器高2.5cm前後となる程度であり、さほど明瞭ではない。

**胎土分類** 胎土による分類は、胎土中の粒子などを観察することによって試みることにした。1類は、全体的にやや粗めの胎土で、褐色土粒・白色砂粒などが多く混じり、微細な雲母粒がわずかに含まれる。2類は、白色系のやや柔らかな胎土で、わずかに雲母粒などが含まれるものである。3類は、1・2類よりも多くの粒子が混じり、海綿骨針などを含むものである。4類は、その他とした。おおまかには、胎土2類はⅢA類に限られるといった傾向があるが、器種・形態と胎土との相関関係については今後の課題としたい。

#### iv) 瓦器 [水澤1999]<sup>21)</sup>

調査区全体から、数点ほど出土している。風炉Ⅳ類・円形浅鉢Ⅲ類・円形小型鉢Ⅲ類・深鉢Ⅰb類などがある。全体としては、14世紀末～16世紀頃までの製品がみられ、焼成が良好であることが特徴的である。なお、製作地を明らかにできるものはない。

## b 各面の概要

それでは、各調査面ごとに概要を述べていく。ただし、ここでは製作時期を特定することができる陶磁器を中心とし、全体の概要を述べる程度とする。個々の資料については、遺物観察表を参照されたい。

### i) 第②面 (図版1・2)

第②面からは多くの陶磁器類が検出されているが、大半は近・現代に属するもので占められている。また、SX-3のように鉄文字徳利といわれる中瓶9点がほぼ完形の状態で出土する例もあるが(図版159)、これ以外の陶磁器類で遺存状態が良好なものはなく、破片資料が圧倒的である。したがって、第②面の出土遺物については、比較的遺存度が高く、製作時期が近世(おもに18世紀以前)と考えられるものに限ることとした。

遺構外出土をも含めて概観すると、図化できた陶磁器類は肥前系の製品が多く、若干の越中瀬戸の陶器(1)などが含まれている。17世紀に製作されたと思われる陶磁器もややあるが(3・5・8・9など)、口縁部内面に四方禪文を配した碗類(17・33・34)や波佐見窯の皿類(28・31)など、18世紀以降の製品が多い。また、手づくね成形である土師器皿A類の小片も出土しているが、これらの陶磁器との一括性は低いと思われる。

### ii) 南区第②下面 (図版1・2)

南区第②下面の出土遺物についても、全体的には第②面と同様に近・現代の製品が多い。同じく、おもに18世紀以前の製品を図化した。肥前系の青磁皿(18)、内面に同心円文を持つ甕(25)、シ章州窯系の皿(20)など、16世紀末～17世紀中葉の陶磁器も稀に出土している。

### iii) 北区第③面 (図版3・7)

全体的にみると、陶器・磁器ともに碗類・皿類が多く、瓶類・壺類・甕類などは胴部片がわずかに出土する程度で、形態の把握できるものはごく一部に限られた。

SD-151では肥前系を中心とした比較的まとまった量の陶磁器が出土している。ただし、陶器では胎土目の皿(50)・砂目の皿(49)・京焼風の碗(51)があり、製作時期にはやや幅がある。磁器では灰落とし(53)や灯明受皿(磁器質、52)などがあるが、小片が多い。土師器皿A類(55・56)や器種不明の瓦器(57)が伴う。

このほか、62・66・69などの文様は17世紀、特に後半期(第期)の特徴を持っている。また、SK-164では肥前系摺鉢の口縁部片が2点出土しているが、17世紀中葉(59)、17世紀後葉(60)の形態的特徴を有している[安藤1999]。ただし、香炉(58)は18世紀の所産と思われる。

次に、遺構外出土の陶磁器類をみる。時期は、碗・皿類が主体である。181・182・185などの初期伊万里や183などは17世紀前半の特徴を持つ。また、186・189～188などは、18世紀の特徴を持っている。陶器には、碗類・皿類・鉢類・摺鉢類がある。皿類には、胎土目(191)や蛇の目軸刺ぎ(192)などがある。碗は、京焼風のものも多く、呉器手形のもの(194～196)や内面に山水画文を施したものもある。前者は17世紀後半、後者は18世紀前半であろう。また、鉢類には刷毛目装飾がなされている。

土師器は5点を図化した。図化できなかった小片も含め、確認されたものはすべて手づくね成形のA類であった。203・206では、内面のなで上げ方向がみられたが、いずれも「の」の字方向である。

以上のような陶磁器類の特徴から、北区第③面出土の陶磁器類は、18世紀前半を含むが、17世紀(特に後半)を中心とする時期と考えられる。

#### iv) 南区第③上面 (図版3・4・6)

南区第③上面では、SD-218a・SD-222・SD-223・SD-209などからまとまった量の陶磁器類が出土している。

SD-218aからは、青花・珠洲・肥前が出土している。70はⅢE群に分類され、16世紀後葉に比定される。肥前陶器は、Ⅲ(73・74)・Ⅴ(82・83)が第期(16世紀末～17世紀初頭)と考えられる。土師器は、ⅢA類・B類がそれぞれ少量伴っている。本遺構全体としては16世紀末～17世紀初頭の年代観が想定されよう。SD-222では、珠洲・瀬戸美濃・肥前・須佐唐津が出土している。珠洲や瀬戸美濃は15世紀の所産と思われるが、量的な主体はやはり肥前系の陶磁器である。87はイゲ塚のⅢで17世紀前半、91は17世紀後半に生産された須佐唐津の摺鉢である。本遺構の陶磁器全体としては17世紀代といえるよう。SD-223では、96が18世紀とやや製作時期が下るものの、陶器Ⅲ(98～101)は17世紀前半頃を主体としている。SD-209では、111は17世紀前半、112は17世紀後半と思われるので、17世紀代といった時期幅でとらえられよう。

遺構外出土の陶器をみると、内面の見込みに胎土目痕(171)、砂目痕(172・173)があり、やはり17世紀前半頃に製作された製品が多い。磁器では、167が17世紀中葉の所産と思われるが、166は18世紀における波佐見窯の製品である。

以上のことから、南区第③上面では、17世紀代に製作された陶磁器が主体であるが、一部に18世紀の製品も伴っているといえる。

#### v) 南区第③下面 (図版5・6)

南区第③下面では、おもに井戸跡からやや多くの陶磁器類が出土している。ただし、陶磁器の内容は、青磁・珠洲・肥前などが混在しており、陶磁器類の一括性については懐疑的な遺構もある。これらの遺構の中には、遺物検出後に複数の遺構が重複していたことが判明する場合があります。陶磁器は重複したそれぞれの遺構に分類できる可能性がある。また、上層で検出された南区第③上面に比べて、土師器の出土量が多く、遺存率も高くなるという変化がみられる。

SE-255では、青磁・珠洲・肥前・土師器といった中・近世の遺物が出土している。青磁桜花Ⅲ(121)は15世紀前葉～16世紀後葉、珠洲摺鉢(133)は15世紀後半に比定される。肥前は、陶器Ⅲ類が17世紀前半頃に比定される。陶磁器類からは、この2時期が想定される。土師器は、A類(122・123)・B類(124)がみられる。SE-252も16世紀前半頃と考えられるが、48(SE-252b出土)などは17世紀前半頃に比定される。土師器もやはりA類(136～142)・B類(143・144)がみられる。SKP-251aでは、土師器ⅢA類(149～151・153・154)・肥前仏飯器(152)・同鉢(155)・須佐唐津摺鉢(156)が出土している。本遺構も複数重複しており、土師器と肥前・須佐唐津との一括性はない可能性がある。

遺構外出土の陶磁器類は既して少なく、図化が可能であったのもわずかに4点のみにすぎない。その内容は、初期伊万里の小Ⅲ(177)や見込に砂目痕を持つ小Ⅲ(178)など、いずれも17世紀前半における肥前系の製品である。

遺構外出土の陶磁器を含めると、珠洲は15世紀段階の摺鉢が出土しているが、その量はわずかである。青磁からは、桜花Ⅲなどが示すようにおおむね15世紀前葉～16世紀後葉の年代観が得られるが、おそらく土師器がこの年代に近いと想定される。ただし、重複する遺構からは肥前窯を中心とした17世紀代(特に前半)の陶器も定量出土している。これらの点から、南区第③下面出土の陶磁器類について時期を特定すれば、おおむね16世紀～17世紀前半と考えられよう。

vi) 北区第③～④面 (図版8・9)

おもにSX-198・SKP-199・SK-287・SD-281・SE-275などから比較的多くの陶磁器類が出土している。

SX-198からは、肥前系磁器が多く出土している。208は19世紀の所産と思われるが、その他は、おおむね18世紀代の製品と考えられる。SKP-199では、挿鉢および土師器皿などが出土している。挿鉢は、213・214が肥前、215・216は備前の製品である可能性がある。前者は口縁形態などから17世紀代、後者は流通時期などから17世紀後半の所産であろうか。土師器は若干出土しているが、中世陶器などは確認されていない。SK-287の出土遺物は、肥前系陶磁器で占められる。見込み蛇の目軸刺ぎされた皿(222)・京焼風の碗(225)などは17世紀後半に比定されるが、224などは18世紀前半の可能性もある。SD-281の出土遺物も肥前系陶磁器によって占められる。碗(220)の装飾技法などから18世紀代に比定される。SE-275では、瀬戸美濃(230)・備前(238)・土師器(240)を除くと大半が肥前系の陶器である。製作時期のわかるものとしては、胎土目痕のある皿(232・233、16世紀末～17世紀前半)があるが、本遺構出土陶磁器の年代としては、ひとまず17世紀代を想定しておきたい。

その他の遺構・遺構外からは、青磁や珠洲も散見されるが、やはり肥前系陶磁器が多く出土している。肥前系陶磁器の製作時期は、253が18世紀後葉～19世紀中葉であるほかは、258・260など、17世紀代のものが量的には多い。また、土師器A類も定量と伴っている。

北区第③～④面の出土遺物の時期は、全体として16世紀も一部に含みつつ17世紀代と考えられる。ただし、上層で検出された第③面よりも17世紀前半の遺物が多いことを考慮すれば、17世紀前半前後が中心のであったと想定されよう。

vii) 北区第④面 (図版10・11)

北区第④面から検出された遺物では、上層まででは多数みられた肥前系陶磁器の量が少なく、かわって土師器の占める割合が大きくなった。北区第④面での出土量は少ないが、本報告書では青磁1点、瀬戸美濃1点、珠洲1点、土師器16点、肥前2点を図化した。肥前を除くと、陶磁器類は中世的な様相を呈している。

珠洲は、遺存するのが壺の底部片のみであるため、年代の特定で参考にできるのは、青磁(263)と瀬戸美濃(272)である。263は、青磁蓮弁文碗の口縁部～体部で、B-IV'類に分類される。272は、瀬戸御目付大皿の口縁部の可能性があり、形態からは後期新段階に属すと思われる。両者からは15世紀後葉～16世紀中葉頃の年代観が得られるので、北区第④面の出土遺物全体としては、15世紀後半～16世紀頃を想定しておきたい。

土師器は、図化した16点中13点が皿A類で、3点が皿B類である。皿A類の法量は、口径13.5～15cmの大(264・266・275・347・12～13cmの中(271・348)・8～10cmの小(265・267～269・276・277・349)のおおむね3法量によって構成されている。法量大および中は、今回A2類とした、体部に弱い稜線を持ち、口縁端部のつまみ上げが不明瞭で丸く仕上げられる形態となっている。法量小は、口縁端部がやや強くナデられることによって先端が薄くなる断面三角形形状となったり、端部内面が窪んだ形態となっている。皿B類は、底径から分類すれば、大(270・273)・小(350)の2法量がある。ただし、全体の器形を把握できるのは350のみとなった。

肥前は、中碗(345)・中皿(346)が出土しているが、ともに18世紀前半の所産と思われる。遺構外からの出土であり、第④面には偶発的に紛れ込んだ可能性が高い。

#### vi) 南区第④上面 (図版10・11)

青磁1点、白磁2点、朝鮮磁器1点、瀬戸美濃2点、珠洲7点、土師器54点、土製品1点を図化した。北区と同様に、南区でも第④上面になると、肥前系陶磁器は激減し、かわって土師器が増加する。

285は、青磁の稜花皿である。小片であるが、腰折れして外反する器形がうかがえる。内面に劃花文が施される。15世紀前葉～16世紀前葉と思われる。299は、白磁皿の底部片である。高台は露帯で削りだしによるD群に分類される。14世紀後半以降にみられる型式である。309は、白磁皿の口縁部～底部片である。口縁部が外反するE-2群(小野1985のC群)・A類に分類されるが、底部内面が蛇の目状に軸葉が描き取られているのが特徴的である。15世紀後葉～16世紀前葉と思われる。301・333は、瀬戸美濃の緑釉小皿である。口径や器高の変化などから、301は後IV期(15世紀中～後葉)、333は後III期(15世紀前葉)と思われる。296・327は珠洲権鉢の口縁部、328は胴部、329は胴部下半～底部、295・330は壺の口縁部、331は壺もしくは壺の胴部である。口縁部の形態がわかる権鉢296・327、壺295・330などから、いずれも第VI期頃(15世紀中～後葉)に比定できる。以上の陶磁器から推測される年代観をもとにすれば、第④上面の出土遺物はおおむね15世紀前葉～16世紀前葉といった時期を中心とすると思われる。ただし、肥前陶器皿である288は16世紀後葉～17世紀初頭に比定されるが、土師器皿A類などと共存して出土している。このことから考えれば、第④上面の時期的な下限は16世紀後葉にも至る可能性がある。しかし、16世紀中葉～後葉の遺物はほかにみられないことから、ひとまず指摘にとどめておきたい。

土師器は、中世の陶磁器と共存する例がある。SK-305・SK-335a・SK-442・SK-427・SK-374・SK-376・SK-401などでは、上述のように陶磁器の年代がおおむね把握できるので、土師器、特に皿A類の形態の変遷を追う上では参考になる出土例といえよう。皿A類は、口径に基づけば3法量が確認される。すなわち、小8～10cm前後、中11～13cm、大13.5～14.5cm前後である。小片の口径復元がやや不確かな場合があるため、法量大は中・小に比べると少量である。また、大・中などで口縁端部を上方につまみ上げる1類が若干みられるが、口縁端部の形態では1類よりも暖味な2類が主体的である。

344は、内耳土鍋である。胴部は外傾して立ち上がり、頸部でさらに外側へ屈曲する。「耳」と呼ばれる把手はその内面に伏される。

#### ix) 南区第⑤～⑥面 (図版12)

南区第⑤～⑥面では、検出遺構の発掘には至らなかった上、遺構外からも遺物はさほど出土しなかったため、全体的に出土量は少ない。ただし、K-4グリッドの壁面に検出されたSX-500では、計12点の青磁・白磁が完形の状態でも出土している。内容は、青磁碗(351・352)・白磁皿(353～357)・白磁環(358～362)である。これらは、下から355・354・352・353・351の順で、青磁碗と白磁皿がすべて逆位で重ねられ、351の上や周囲をやはり逆位の白磁環が取り囲んでいた。青磁碗は2点とも無文のE類で、高台内・疊付および底部内面には軸葉がない。白磁皿は5点とも高台は露胎で、挟り込みがあり、底部内面には重ね焼きの痕跡がある。356は高温で焼成されたものと思われるが、他は356に比べれば幾分か白濁気味である。ただし、いずれもD類に分類できよう。白磁環とした5点は、あまり類例のない形態である。体部は内湾して立ち上がり、358・361は底部が肥厚している。皿と同様に高台は露胎で、挟り込みがあるため、やはりD群として分類されよう。なお、351～355・359～361の高台内には「三」を□で囲んだ「三」という墨書がみられる。また、青磁碗2点の内面には煤が楕円形状に付着している。出土状況をも加味すれば、火を用いた祭祀的な行為で用いられたことが想定される。無文の青磁E類や白磁D群などから、これらの時期は15世紀後半前後と考えられる<sup>31)</sup>。

#### x) 北区第⑤面 (図版12)

わずかに青磁3点、白磁1点、土師器1点を図化した。363は、青磁碗の口縁部片で、外面に便化した雷文帯を有するC-Ⅲ類と思われる。15世紀後葉～16世紀前葉であろうか。366・367は、青磁碗の底部片で、いずれも底部内面には界線を伴うスタンプ文が施される。366は草魚文、367は草花文である。ただし、366は全面に施釉後、底部外面の釉薬が蛇の目状に削り取られているのに対し、367は高台内面の途中まで釉薬が施されている。ともに15世紀前後の所産である。364は、白磁皿の口縁部～体部片である。器形などから、D群に分類される可能性がある。全体的にみると、北区第⑤面の遺物はおよそ15世紀代に属すと思われる。

#### xi) 北区第⑥面 (図版12)

青磁1点、白磁2点、珠洲4点、土師器5点を図化した。遺構出土の陶磁器は少なく、図化できた12点はすべて遺構外出土である。

371は、青磁碗の口縁部～体部で、幅の広い片桐彫の菊蓮弁を持つ。B-類で、13世紀末～14世紀初頭と思われる。366は、白磁皿である。体部は内弯し、口径に比して器高が低い。高台は露胎で、挟り込みはないが、SX-500と同様にD群に属すと思われる。なお、高台内に墨書があるが判読はできなかった。372は、白磁碗である。いわゆるピロースタイプで、口縁端部が外反する。14世紀代の所産である。373～375は珠洲の播鉢の口縁部片、376は珠洲の壺の底部片である。形態から、373は15世紀中～後葉、374・375は14世紀後葉～15世紀前半と思われる。これらから、北区第⑥面出土陶磁器が属す時期をまとめると、青磁や白磁からは14世紀頃、珠洲からは15世紀頃という年代が考えられる。ただし、青磁や白磁の出土量や第⑤面からのつながりなどを考慮に入れると、15世紀(おそらく前半)頃を主体とすると思われる。

土師器は、図化した5点中4点がロクロ成形による皿B類である。第⑤面の土師器はあまり判然としませんが、第④面と比較すれば、皿A類とB類の量比が逆転していることになる。出土量が少ないものの、当該期の土師器の様相として理解することができるとと思われる。

#### xii) その他 (図版13)

検出面の特定できなかった土器・陶磁器を一括する。図化は、ある程度の器形を把握できるものに限定了。385は瓦器香炉、386～388は土師器皿A類、389は波佐見産の中碗、390は肥前磁器の中皿である。

## 2) 土製品・瓦 (図版13)

382は、神仏を据えた小型の土製による堂塔で、泥塔の一種であろうか。上部の先端を欠損しているので、当初の長さは11cmほどあったと思われる。塔は1層のみで、基壇上にエンタシス状に膨らんだ堂身が設けられ、内部に阿弥陀如来らしき立像が安置される。像は壇上にあり、高さ3.3cmとなる。堂の上の傘部は緩やかに広がり、相輪を戴く。宝輪は3輪まで遺存するが、その上位の宝珠などは欠損する。背部が平坦で、下部端面に径0.4～0.5cm、深さ1.2cmの円錐形状の穿孔がある。そのため、壁などに据えられ、下から固定されていたものと思われる。胎土はおおむね緻密であるが、雲母や石英と思われる微細な粒子がやや混じる。第④上面K-4㊦グリッド出土である。383は、土製の人形で、上部を欠損するが、「学問の神様」菅原道真(天神)の座像であろう。やはり下部には穿孔がある。SK-411出土である。

391は、平瓦の破片である。第⑤面K-4㊦グリッドから発見されたが、中世に比定される調査面においては唯一の出土である。

### 3) 石製品

出土した石製品は、粉挽臼・茶臼・硯・砥石・石鉢などである。報告は概要を述べるにとどめるので、詳細は観察表を参照されたい。

**粉挽臼** 4調査区において計7点確認されているが、凝灰岩を用いたものが多い。出土状況としては、16～17世紀代の土坑や溝跡等から出土例がある。ただし、上臼・下臼がセットで出土した例はない。747などはSKP-699柱穴の底部から出土しているように、根石などに転用されている可能性がある。

**茶臼** A1-I区第面から上臼の破片が1点出土している。凝灰岩製と思われる。

**砥石** 可能性のある物を含めても粗砥は少なく、大きさや形態から仕上砥・中砥と考えられるものが多い。ただし、大きさから仕上砥と考えられるものでも、中砥のように中央がややくびれているなど、仕上砥・中砥の識別が難しいものがある。材質は、頁岩や凝灰岩が多く用いられている。

**石鉢** A1-I・III区から口縁部や底部の破片が出土している。特に、475には内・外面に炭化物が付着しており、使用形態の検討材料になると思われる。

**硯** 形態の把握できる6点を図化した。産地を特定できるものはないが、476は、仕上砥などに用いられる鳴滝石になるが、明らかではない。

**その他・礫** 470は、新潟県では出土例が稀なバンドコの蓋である可能性がある<sup>4)</sup>。そのほか、加工のみられない礫も多く出土しており、何らかの機能があっただと思われるが、今回の報告では割愛したい。

### 4) 金属製品

金属製品としては、銭貨・刀子・煙管・鉄釘・鏝などがある。4調査区内から出土した金属製品についてここで概観しておきたい。なお、金属製品についても個々の詳細は観察表を参照されたい。

**銭貨** 全体で、計約200点出土した。調査区別の内訳は、A1-I区67点、A1-II a区40点、A1-II b区22点、A1-III区77点である。この中で、銭文が判読できたもののうち、近世以前の銭貨は計158点である。中国銭貨の場合、横鋳銭との識別は難しいが、兵庫埋蔵銭調査会の研究〔永井編1994・1998〕に基づいて分類すると、北宋銭78点(49.4%)、南宋銭3点(1.9%)、明銭29点(18.4%)、唐銭5点(3.2%)、金銭1点(0.6%)、前蜀(五大十国)銭1点(0.6%)、日本銭41点(25.9%)となる。

銭種別の組成について、時期ごとの詳細な変遷を追うことは困難であるが、寛永通寶(1636年初鑄)の出現がひとつの画期になると思われる<sup>5)</sup>。各調査区において、寛永通寶が出土した最も下層の検出面をみると、A1-I区では第④上面(419)、A1-II a区では第④面(775・776)、A1-II b区では第⑤面(1229)、A1-III区では第④面(2200)である。ただし、遺構外出土遺物は、整地に関わる攪乱が伴っている可能性があるため、遺構出土の寛永通寶を確認すれば、A1-I区では第③上面SD-233(434)および第③～④面SK-287(437)、A1-II a区では第④面SX-735(776)、A1-II b区では第③面SKP-2037(1238)・SK-2111(1239)、A1-III区では第①面SK-1044(2247・2248)・SD-1057(2249)・SX-1032(2250)となる。遺構出土の寛永通寶をみる限り、初鑄年と陶磁器からみた各面の年代観とは矛盾がない。次に、個別の遺構をみると、A1-I区第④上面SK-411では判読できた銭貨には寛永通寶が含まれていないが、A1-II a区第③面SKP-631出土銭貨はすべて寛永通寶(1期、古寛永)である。六道銭などでみられる、渡来銭から寛永通寶への交替期(17世紀中葉)〔鈴木1988〕前後の様相として考えることができよう。

**刀子** 可能性があるものも含めると全体で11点出土している。錆が付着しているため、当初の形態

復元は推測によるところが大きい。出土地点をみると、A1-I区第③上面・第③下面・第④上面、A1-III区第③面の遺構に集中している。特に、SX-209では下層部分から2点出土している。また、SX-1339では、鍛冶関連遺物も出土しており、その出土状況は注目される。陶磁器の年代観からすれば、全体的には16~17世紀に多いといえよう。

**煙管** 金属製である雁首・吸口が出土している。4調査区で、雁首6点、吸口5点が確認されている。遺構出土分に限れば、A1-I区の第④上面・第③下面・第③~④面・第②下面の遺構から出土しており、16世紀以降の所産とみられる。

**鉄釘** 錆や砂の付着が著しく、形態を把握できたものは少ない。出土量が多いのはA1-I・IIa区であるが、15世紀段階の遺構と思われるSKP-838からも出土している。

**鏝** 全体で、4点出土している。計約200点の銭貨が出土している。鉄釘と同様に錆・砂の付着が著しく、正確な形態が不明瞭なものもある。SX-198は、破片が2点出土している。

**その他** 以上のほか、各1~2点であるが、切羽(462)・釣針状金具(463)・鉄鍋(1244)・小柄の箱(2222)などがある。これらの製品はおもに17~18世紀段階の遺構等から出土している。

## 5) 鍛冶関連遺物

金属製品としては、銭貨・刀子・煙管・鉄釘・鏝などがある。4調査区内から出土した金属製品についてここで概観しておきたい。

**羽口** 全体で、約20点出土している。すべて破片のみで、全体を明らかにできるものはない。先端部や基部付近では異なるが、おおむね外径10cm、内径2.5~3cmのものが多く、A1-IIa区では一部15世紀段階の検出面から出土しているが、多くは16~17世紀段階の遺構等に伴っている。

**埴塀** A1-IIb区から完形1点が出土している(1243)。小型の碗形をなし、体部外面には指頭圧痕が多くみられる。

**鉄滓** 今回の調査では、比較的大量の鉄滓が出土している。時間的な制約もあって、詳細な観察や報告はできなかったため、ひとまず重量で把握することとした。出土量は、A1-I区約91.5kg、A1-IIa区11.7kg、A1-IIb区14.0kg、A1-III区25.1kgである。

特に出土量の多い(1kg以上)遺構をみると、SK-411・SK-422・SK-305・SK-334・SK-201b・SK-233・SX-105・SK-770・SKP-2037・SE-1456・SKP-1432・SD-1303a・SX-1241・SX-1339などがある。羽口と同様に16~17世紀段階の遺構等に多く伴っている。特に、SK-422では、4層から4kgほど出土しているほか、羽口も検出されている。また、SX-1339でも羽口が伴っており、これらは当該地における鍛冶の生産活動を示す痕跡と考えられる。

## 註

<sup>1)</sup> 明銭の出現をもうひとつの画期として設定することも可能と思われるが、4調査区とも15世紀段階の調査面積は小さく、出土量も少ないため、ここでの検討は留保しておきたい。

<sup>2)</sup> 瓦器については、水澤幸一氏に実現していただき、多くの御教示を賜った。

<sup>3)</sup> 水澤幸一氏から実見の上、御教示を得た。

<sup>4)</sup> 水澤幸一氏からの御指摘による。

## 5 A1-1 調査区のみまとめ

**調査区** 調査区域の東端に位置する1区は、柏崎町の遺跡範囲でも東端に位置付けられる可能性が高い。この点は、Bブロックで実施した試掘調査において、遺物包含層の延長がほとんど確認できなかったことからうかがうことができる。しかしながら、当該調査区で検出された遺構数は多く、密度が高いとともに遺物包含層、特に生活面として把握される遺構面の累積は、15世紀から現代までほぼ連続と続いていた。したがって、そのすぐ東側で遺構および遺物包含層がほとんどなくなるという結果とは、大きなギャップをもっていることになる。Bブロック以東の調査結果については、道路傍が対象とされ、かつ構造物の設置等による攪乱が多いこと、そして試掘できる個所が限定され、その発掘面積が狭小であったことなど、十分な調査とは言い切れない。しかし、一つの結果として得られた事実であり、これらの再確認等については、柏崎町の変遷や展開を追う上では、今後明らかにしなければならない課題といえる。

**層序と遺構面** 基本層序の検討から知ることのできた生活面は、旧表砂層のa面から最上層のh面まで8面である。各遺構面の時期は、15世紀代から20世紀代までにわたり、大きく3群にまとめることができた。第1・第2遺構面群とした5枚の遺構面は、それぞれの整地層が厚く、各々40cm程の厚さで造成され、5枚の遺構面を形成するまでに1.2mに達している。これに対し、上層を覆う第3遺構面群は、層厚40cmで3枚の遺構面が形成されたものであった。これらの差異は、第1・第2遺構面まで砂丘砂の供給が著しく、町並みの変動が大きかったことがうかがわれるとともに、第3遺構面群に至ると、町並みが安定するとともに、現状を維持する機能が充分働いていたとみることができるといえる。

また、各遺構面群には、それぞれ特徴があり、第1遺構面群（a面：第④面・b面：第⑤面・c面：第④面）の各面における遺構密度は高い。これに対し、整地層の堆積状況が近似する第2遺構面群（d面：第④下面・e面：第③上面）では、遺構密度が低くなるとともに、それまで高低差により数段に分かれていた敷地は統一され、奥行きを深くした区画へと変化した。特にその基盤をなしたのは、粘性としまりを有する整地層（第16・17層）であり、遺構面としてはd面となる。第3遺構面群については、前述のとおりであるが、下部の2面（f面：第②下面・g面：第②面）では、境界溝の両側がともに町屋であったが、最上層となるh面（第①面）では路地に変化しており、これは昭和3年（1928）以前のこととなる。

**遺構面の概要**【第①面】 石組列や雨水排水管等の溝跡により、通路と町屋部分の区画が明示され、通路中央には、水槽状のセメント造りの施設が掘り込まれていた。また、北区第②面検出としたSX-3なども本面段階の所産に該当し、高田徳利形の中瓶9点がほぼ完形で一括出土した。これらには酒屋の屋号と電話番号が記されたものであった。

【第②面】 石組列を境に、町屋が東西に分割され、それぞれに建物跡や柵列等が配置されるが、北側の奥は遺構が少なく閑散としている。礫や焼土、木炭が多く散在し、これらを充滿した廃棄土坑が確認される。また、鍛冶炉が東西両町屋から1基づつ確認されている。遺物としては、18世紀以前のものが多少出土したが、遺構面の時期としては近代であり、焼土層等は何れかの柏崎町大火に伴うものと考えられる。

【第③（上）面】 北区③面と南区③上面を便宜的に一括する。石組列の下部に、柵列や数度の改修を受けたと考えられる溝跡が数条存在し、これらが町屋の境界を示す。東西に区分された町屋には、南北に長い建物跡が確認される。また、東町屋には、刀子が安置された墓坑が検出されている。出土遺物の様相としては、主に肥前系の陶磁器が多く、时期的な主体は17世紀から18世紀前半代頃となる。

【第③（下）面】北区③～④面と、南区③下面を便宜的に一括する。町屋を区切る境界はなく、一つの屋敷であった可能性が高い。南北に長い大型の建物跡が確認されているが、この西側と北側に大型の井戸が4基以上存在する。また、建物内には鍛冶炉が1基確認されていることから、鍛冶職人の住居であった可能性が高い。出土遺物の様相としては、中世から近世の遺物が混在しており、おおむね16世紀から17世紀の所産と考えられる。ただし、北区③～④面は、同③面よりも17世紀前半の遺物が多くっており、主体的な時期は17世紀前半としておきたい。

【第④面】掘乱や大型井戸の掘り込みのため、かなり多くの遺構面が失われていた。調査区南端付近には、建物跡やそれらの柱穴が多く分布するが、中央付近から北側には、土坑墓が集中しており、やや特異な状況を示していた。なお、これら北半の墓坑群は、砂丘砂層上面検出であり、最下層に相当する遺構群となることから、部分的には第⑤面以下の遺構が含まれている可能性を否定できない。

出土遺物の様相としては、上層位で多かった肥前系陶磁器は激減し、土師器の出土量が勝っていることを特徴とする。時期的には、15世紀前半から16世紀末ないし17世紀初頭までの遺物が見られるが、16世紀中葉から後葉はかなり少なくなっていることから、主体的時期は15世紀後葉から16世紀前半を中心していると考えることができる。

【第⑤面・第⑥面】第⑤面は遺構の検出作業ができず、第⑥面において両面の遺構確認を行った。ピットが多量に検出されていることから、頻繁に建て替えがなされた多くの建物跡が存在していると考えられる。当該面は、本調査区の最下層であり、遺跡形成当初から高密度で遺構が築かれたことを示している。なお、当該両遺構面は、斜面下方となる南半部のみで検出されたもので、北半区第④面最下層とした墓坑群との時期的な関連については、検討の余地を残している。

特徴的な遺物としては、SX-500出土一括遺物と泥塔が特筆される。前者は、第⑤面からの掘り込みで理解される小土坑から出土したもので、青磁碗2点、白磁小皿5点、白磁小杯5点の計12点が伏せたまま重ねた状態で出土した。意図的に埋納・埋設したことは明らかで、青磁碗2個の内面には灰の水溶液が乾燥したような付着物があることから、何らかの儀式が伴っていたと考えられる。泥塔も第⑤面包含層から出土したが、遺構に伴って出土したわけではないため、出土状況から解釈を加えることはできなかった。

町割と建物跡 I区において、それぞれの建物跡等が指向する方位については、各遺構面での差異はほとんどなく、対象となる11例の平均方位はN-2.2°-Wであった。近代～現代の現町割に伴う方位を、第②遺構面検出の石垣基礎基部とし、その方位であるN-2°-Wを基準に比較すると、ほぼ整合していることになる。ただし、第⑤～⑥面については、建物跡等が復元されておらず、c面である第④遺構面までしか遡ることはできない。しかし、第④遺構面の時期を15世紀後半～16世紀後半程度と見積もれば、15世紀後半以降現代まで同じだったとは言いきれないとしても、柏崎町はその初期の頃より、規格性を持った町割がなされていた可能性を意味していることになる。なお、次章で述べるII区では、建物跡等の方位に変遷が認められることから、現代に通じる町割区分が、柏崎町成立当初から本町通り全体に及ぶ統一的な町づくりの結果であるとするのは難しく、別の解釈を必要としている。

I区の町割は、第④面から第③下面もしくは第③～④面までの各遺構面では、境界区分を示す溝跡などは認められず、町屋が分割されたのは、第③上面(e面)以降となる。その後は第②面までは継続するが、最上面である第①面では調査区の西辺が通路となって、さらに分割される。第②面の西端にある溝状の落差みは、通路西側に近年埋設された雨水排水管の埋設溝である。近代以降を除外すれば、町割の画期は、第③上面と第③下面の段階、つまり17世紀代と言うことになる。

## V A1-II a 区の調査

### 1 調査の経過

II a 区の調査は、I 区の進捗状況を見ながら機会を窺ってきたが、10月12日に至ってようやく表土除去に着手できた。表土の除去作業は、翌13日も継続し、当初通路確保のため西側の一部を除いたII区全体に及ぼす予定であった。しかし、調査区中央を南北に横断する形で仮設の下水管が敷設されており、費用の問題から移設が困難とされたことにより、これを土層観察用のセクションベルトとして活用することとし、東西をそれぞれa区とb区に分割して調査を実施することとしたものである。

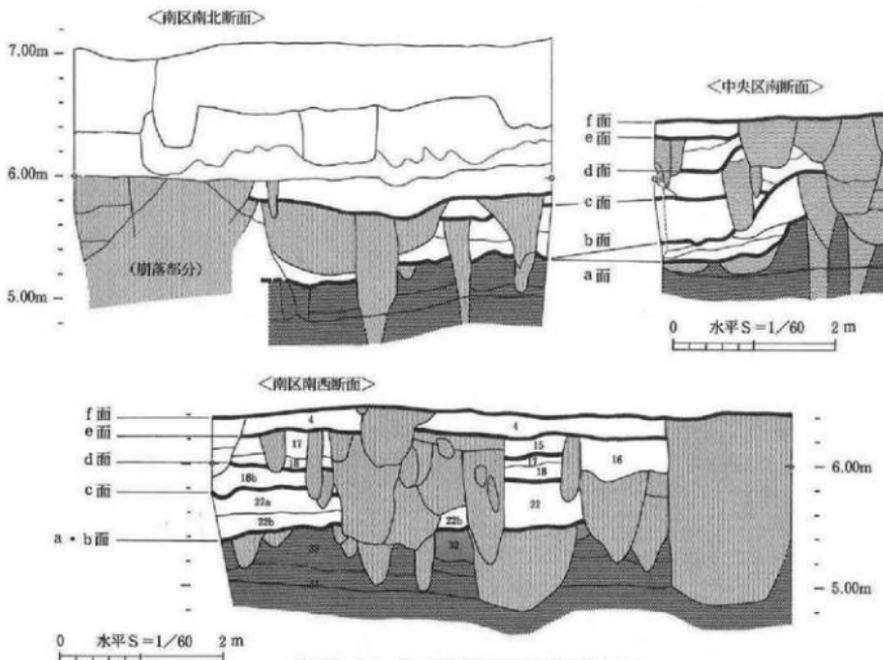
表土の除去深度については、I 区の状況からおおむね近世後期までの層位を重機により除去することとし、おおむね1mほどを掘削した。その方法については、重機による掘削ではあるが、層位を区分して3枚に分け、出土遺物については分層して取り上げ、各層位の時期を判定しながら進めた。その結果、第③面に至って17世紀代の遺物が確認されるようになったことから、この第③面から調査対象とすることとした。

10月14日からは、調査区壁の整形及びグリッド杭の打設を行って、一時中断とした。調査の再開は、10月19日からで、北側からジョレンがけ作業を開始、遺構確認を進めたが、これらの作業は、26日の遺構分布図の作成まで続いた。このあとしばらくI区の調査を行ったため、作業を再び中断し、11月4日から遺構発掘の着手とともに再開した。

第③面 当該面の標高は、工事で全面掘削が及ぼされる小渠部分をすでにクリアしていたため、大渠・基礎杭及び道路拡幅部の範囲に限定することとした。遺構発掘は、11月15日の完掘状況の全体写真撮影まで続けた。遺構は、ピット・土坑類のほか、近現代の擾乱その他が多い。石臼を転用した柱基礎材を埋設した大型の柱穴があり、建物跡の把握に努めたが、町屋と主軸方位を違えるなど、確証をもてるものを見出すには至らなかった。

第④面 完掘の早かった南区では、第③面の遺構平面図が終了していたことから、11月16日より第④面に向けた掘り下げ作業を開始した。17日も南区での掘り下げ作業を継続し、あわせて遺構確認も行った。しかし、冬型が強まり、雨あられの天候となり、遺構プランの線や白色スプレーも流され、水溜りとなって幾度となく同じ作業が繰り返された。遺構発掘が進むと、柱穴底面に礎石を持つ大型柱穴が、町屋の方位に沿って検出され、大規模な建物跡の存在が想定されるようになった。掘り下げ作業は19日に終了、遺構分布の見取り図の作成も終えることができ、直ちに遺構発掘に着手する。25日、南区の遺構発掘が終了し、完掘状況の写真撮影を行うことができた。遺構平面図の作成が終了した南区は、早期の調査終了を要望されていた道路拡幅部であった。このため、11月30日、中央・北区の遺構調査が未了という状況であったが、第⑤面に向けた掘り下げ作業を先行して実施することとし着手した。12月4日、中央区の遺構発掘と並行して進めていた平面図等の作成も、ほぼ終了した。北区の終了は、8日となり、平面図の作成をようやく終えた。

第⑤面 第⑤面の調査は、すでに南区から掘り下げ作業を行い、順次中央区へと進めていた結果、両区については12月6日までに遺構分布図の作成も終えることができ、直ちに遺構発掘を開始した。12月9

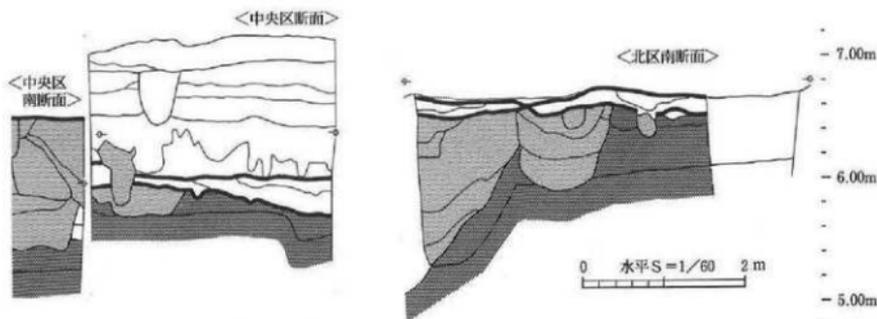


第11図 A1-II a区基本層序と遺構面模式図(1)

日、前日に第④面の調査が終了したばかりの北区を含め、遺構の完掘まで漕ぎ着けた。その後完掘状況の写真撮影を行うこととし、南区から順次清掃を行い、各区個別に写真の撮影実施した。

**第⑥面** 12月10日、第⑤面の遺構平面図が終了次第、第⑥面までの掘り下げ作業を行い、おおむね終了。北区は、砂丘砂上面となる最下層までの発掘が終了した。11日は、降雨が激しく、遺構確認ができないため、中央区の遺構発掘を行う。南区では、第⑥面が黒色砂面であったことから、遺構の確認ができなかったため、さらに15cmほどの掘り下げを行い、これを第⑥下面とした。13日は、氷雨が降りしきる中での調査となった。中央区では、基礎杭部分の調査を進めていたが、井戸覆土内の掘削となって壁が崩落、極めて危険と判断、発掘作業を中止した。南区では、遺構確認を終了させ、直ちに見取り図を作成した。しかし、当該面の標高が5.35m/seaに達し、工事掘削面をクリアしたことから、遺構の発掘は基礎杭部分とセクション図作成のため必要となったトレンチ内のみに限定した。14日、南区では遺構の発掘と平面図作成を急ぎ、中央区では遺構検出状況の写真撮影を行う。15日、中央・北区では基本層序の断面図を作成、南区では遺構平面図の実測とレベルングを行い、その終了後第⑦面の検出作業に着手した。

**第⑦面** 第⑦面への掘り下げ作業は、雨の降りしきる16日も継続、おおむね終了した。しかし、翌17日には、激しい氷雨により壁が崩落、埋没しており、朝から復旧作業となった。しかし、面積が狭く、遺構も小規模であったことから、なんとか遺構の発掘から平面図の作成作業まで、すべて終わることができた。残る作業は、基本層序等の土層柱であり、作業員は本日までとし、撤収作業を行った。18日は朝から雪が降る生憎の天候であったが、残る作業すべてを終了させ、II a区の調査完了とした。



第12図 A1-IIa区基本層序と遺構面模式図(2)

## 2 基本層序と遺構面

**基本層序断面の概要** IIa区の基本層序については、①メインセクションとしてIIb区との境界をなす南北ベルトの東壁とし、②東西については南区の北壁に設定した。各断面の多くは、砂丘砂までの図化に成功している。しかし、①とした南北メインセクションについては、当該調査区が表土の除去を第③面とした18世紀代まで重機で掘り下げ、その下面については、パイルと地中大梁部分に限定したことにより、調査区内が北区・中央区・南区の3小区に分割されてしまった。また、調査区の東西両側となる南北ラインのベルト設定位置が、偶然にも町屋の境界と重なったため、西側は境界溝の掘削により、上層位の層序が確認できない事態となり、東側も旧ブラザービルの攪乱によって基本層序を確認できる断面を得ることができなかった。このため、南北面については、調査区を連続させた基本層序の観察ができず、特に、北区南半部と中央区南半部は、セクション面が調査区の中央付近に設定せざるを得ず、結果として不連続となっている。そこで今回は、南北ラインについては、各小区における個々のセクション面を合成して連続させ、概観することとした。

**基本層序と遺構面(生活面)** 第11図と第12図は、I区と同様に水平方向と垂直方向の比率を2:3とした模式図である。ただし、南北の通し断面については、レイアウトの都合で、南北断面模式図の北区北部を割愛してある。

まず、南北断面から見ていくと、断面の軸は前述の如く2列を合成したもので、連続性を追及するには不都合がある。また、IIb区境の断面は、上層位が境界溝覆土の関係で表出しておらず、他も第③面まで全体を掘り下げている関係で東西断面を含め、この上層位を確認できない。このような事情から、全体を把握するには制約が大きい。南北断面については、地山砂層となる砂丘砂の存在から旧地形の類推に活用するとともに、各遺構面の重複等を検証するための参考に用い、土層断面上に現れた生活面と、調査を行った各遺構面との対比は、主に南区北壁の東西断面にて行うこととした。

南北断面からうかがえる砂丘砂層は、おおむね南・中央・北区の各区ごとに階段状を呈している。したがって、本来の地形は、砂丘南側の緩斜面であり、その斜面を切り盛りしながら平坦地を造成したものであった。IIa区の南北断面からすれば、少なくとも3段のテラスが確認され、下段側を高くすることにより、奥行きを広げて町屋の拡張が行われたことが理解できる。

東西断面にて観察可能な遺構の掘り込み面は、合計5枚である。ただし、最下層については、南北断面の南区から中央区南部への連続を検討すると、中央区で2枚に分かれており、合計6枚となることが判る。そこでこれら掘り込み面を各時期の生活面とし、下層位から便宜的にa～f面として設定した。

なお、以下において、基本層序と各遺構面の概要を述べるが、全体を対象とするには整合性を図り難いため、主に南区と中央区南部の土層断面から概観する。各砂層番号については、注釈がない場合は南区東西断面である。

最下層となるa面は、南区ではb面とともに1枚で、地山砂層となる砂丘砂層（第33・34層）上面に位置する。砂丘砂層上面は、起伏が認められ、一部に旧表砂層（第32層）が残る。中央区南部の状況は、砂丘砂層がカッティングされ、平坦地が造成されたもので、a面段階で造成された面が、b面でも踏襲されたものと考えられる。b面は、再堆積砂層（中央区南第32～34層）の上面において、一部認められるだけである。遺構面との対比を行えば、a面には南区第⑥面と中央区第⑥下面が該当するが、南区第⑦面は遺構そのものが浅く、遺物も少ないところをみると、すべて第⑥面の掘り残し、もしくは砂丘砂上面の凹凸とみられる。b面については、中央区で調査された第⑤（上）面が該当する。

c面は、a・b面上を覆う40cmあまりと厚い暗褐色砂層（第22層）上面に形成されていたもので、中央区のテラスとの高低差は小さくなる。木炭や焼土などが含まれるが、しまりは弱い。遺構面としては、第⑤面が相当する。

d面は、南区東西断面において確認されたものであるが、調査では遺構面として把握することができず、調査されなかった生活面となる。このd面は、同じ南区にあっても東側と西側では遺構面を形成する砂層が異なり、両者を整合させることは容易でない。この点については、第⑤面段階において南北に走る溝跡が検出されていることから、両者が別個の町屋として存在し、整地する段階に若干の時間差、もしくは高低差があった可能性を考慮せざるを得ないようである。

e面は、黄色系を呈し概してしまりのある粘質砂層の上面に形成されていた。遺構面としては第④面に相当するが、d面での層位的な段差の影響があり、東側では第15層とした炭化物や焼土を多く含んだ黒色層上面がe面となっている。実は、東側の層位的な状況は、I区におけるd面とe面の状況に近似しており、特に粘質砂層の存在は、両者の時期的な並行関係を見極める上で重要となりそうである。

f面は、重機で表土とともに掘削して検出した調査面で、遺構面としては第③面となる。遺構面は、黒褐色砂層（第4層）上面となるが、この上層位には第2焼土層が形成されていた。

重機で掘削した上層位については、最上部の攪乱や盛砂層などの下面に検出される焼土層面（第1焼土面）を第①面とし、また薄い整地層数枚で構成される粘質砂層を第②面とした。

遺構面の年代観 第①面は大火の痕跡と考えられることからおおむね近代に、第②面は出土遺物によれば18世紀後半頃から19世紀代となる近世後期と目される。そして第③面については、第2焼土層の下面に設定した。出土した陶磁器類に17世紀代のものが含まれるようになったことから、本面から発掘調査の対象とすることとしたものである。

本地区における中世と近世の境界は、出土遺物の様相から見ると、第④面から第⑤面の中間となる。この両者間には、調査において認識できなかったd面が存在することから、d面からe面までの間に西暦1600年という年代を与えることができそうである。第⑤面の遺物は、おおむね15世紀～16世紀末であり、第⑥面には15世紀前半の中世土師器が含まれており、それぞれの年代観を示すものと考えられる。

### 3 遺 構

#### 1) 第③面の遺構

A1-IIa区では、先立って調査したA1-I区の結果を参考とし、近現代的な遺構類の多く残る第①・②面の調査は行わなかった。そして、第③面を遺構確認面の最上面とし、本面より発掘調査を開始した。IIa区では東西方向のセクションベルトを兼ねる2つの保存区を挟み、北からそれぞれ北区・中央区・南区とした。確認面は、現表土からおおむね1m程度掘り下げられており(標高約6.7m)、近現代的な遺構類はほとんど残存していなかった。しかし、北区と中央区からはかなり大規模となる現代の擾乱が2つ確認された。両者とも瓦礫等を含む覆土が地山層(新期砂層)まで達しており、この部分は調査着手当初から調査の対象から除外した。出土遺物の主体時期はおおむね17世紀後半～18世紀前半となる。

調査面積約169㎡に対して遺構は117基検出され、遺構密度は0.7個/㎡となる。主な遺構の種類として掘立柱建物跡1棟とそれを構成する柱穴群が挙げられる。中央区・南区で検出された柱穴は、径が1mを超える大形のもの占め、底部から礎石と思われる平坦な大形自然礫が検出される点で共通する。各柱穴の深度や礎石の大きさ・形態においても類似性が強く、1棟の建物としての配列、規模をほぼ完全に復元することができた。

遺構の分布としては、中央区および南区では前述した通り建物跡1棟とピットが多く検出された。一方、北区では主に大小の土坑が検出された程度で、遺構は希薄な状況であった。

#### a. 建物跡

調査区面積が狭く、さらに幾つかに分割されているため、実際には建物跡の一部分だけが検出された。しかし、検出された柱穴の配列から大形の掘立柱建物跡1棟(SB-11)を推定復元することができた。建物跡を構成する柱穴は法量が1mを超えるものが占め、他の柱穴群とは法量的にも明確に分離することができた。柱穴内からは時期の特定可能な遺物等の出土が少なかったが、大まかな時期を想定した。

SB-11 中央区から南区にかけて検出され、西端部はIIb区(第③面)に及ぶ。SKP-583・620・647・658、SKP-699・703・711・720・737・751・755・781(第④面)、SKP-2033(IIb区・第③面)の計13基が確認されたが、建物全体を復元した結果、計20基の柱穴で構成される大規模な掘立柱建物跡と想定される。また、13基の柱穴は本遺構確認面だけで全てを検出することができず、次の確認面となる第④面で改めて検出されたものも多く含まれる。これは、本来の砂丘堆積層(旧地表面)が平坦ではなく、複雑な傾斜・起伏の中で部分的に凹凸や傾斜が存在するため、平面で設定した一つの遺構確認面上では完全に遺構を検出できなかったものと考えられる。また、発見された14基の柱穴の内、底部に礎石が残存するものは6基存在した(SKP-583・620・647・658・699・737)。

全体像は外周と内周の2組の柱穴列をもち、四面底の付く建物と想定される。ただし、建物跡の中心部が未発掘区となり、更に内側に柱穴列が存在した可能性がある。建物外周の規模は、桁行2間(約8.2m)梁間3間(約8.2m)の正方形を呈する。総面積は約67㎡となる。全調査区を通してもかなり大規模な建物跡の一つと判断される。一方、内周の規模は桁行2間(約5.2m)、梁間3間(約4.4m)となり、東西にやや長い。柱穴列は内外周とも左右(東西)対称となる構造が読み取れる。ただし、西側の構造は未発掘区に反んでいるため、全体像は推定である。柱穴の法量は内周と外周のものがほぼ同規模となっているが、礎石の大きさは内周のものの方が格段に大きい。これは、柱自体の法量や上屋の荷重を反映するもの

と考えられる。このため、内周の柱穴列は建物本体を支えるもの、外周の柱穴列は縁側や庇などを支えるものと想定される。各柱穴の間隔は約1.6～5.2mであり、東西ではその配置・間隔が対称となる。主軸方向はN-3°-Wとなり、建物の軸がほぼ真北-真南を意図しているものと判断される。

このように、SB-11は柱穴の間隔・規模や並びなどからも、町屋と判断される建物跡の形態とは大きく異なり、特殊な役割をもつ建物跡と考えられ、前述した内周と外周の各柱穴列を、それぞれ内陣と外陣とすることができれば、寺院の仏堂という可能性を持つことになる。また、柱穴の配列や主軸方向からは、本町通り（南方）に開口を向ける荘厳な建物が想定される。そして、各柱穴からの出土遺物としては、SKP-620から17世紀後半に比定される肥前系磁器と中世土師器が、SKP-647からは17世紀後半の陶磁器及び中世土師器が出土している。さらに、SKP-703からは17世紀初頭の陶器小皿が出土した。これら遺物の主体的時期から、おおむね17世紀代の建物跡と考えたい。

#### b. 柱穴・ピット類

計75基が検出された。大形のものにはSB-11を構成する柱穴であるが、それ以外の建物跡の配列は明確に把握できなかった。しかし、SB-11の東側には1列のピット群が南北方向に隣接して並んでおり（SKP-552・597・655・661、SK-541）、場の境界をなす柵列とも考えられる。出土遺物の所属時期から、SB-11とはほぼ同時期に存在したものと捉えられる。SB-11を構成する柱穴は個別に記録を取ったため、以下にそれぞれ記載した。

SKP-583 I-3㉔グリットに所在し、SB-11の内周部北西に位置する。法量は長軸約110cm、短軸約97cmでおおむね円形を呈し、深度は約69cmである。底面には長軸約70cm、短軸約55cm、厚み約30cmの扁平な大形河原石が礎石として配置されていた。礎石はほぼ真北-真南に長軸が向けられていた。覆土最上部は黄色粘質砂で蓋状に覆われており、遺構確認時は炉跡と思われていた。中層部では粘土粒と炭化物が多く混入しており、下層部は確認面の土層と類似していた。柱痕については確認できなかった。遺物は17世紀前半の陶磁器類が検出された。

SKP-620 I-4㉕グリットに所在し、SB-11の内周部南西に位置する。法量は長軸約130cm、短軸約115cmで円形を呈し、深度は約71cmである。底面にはSKP-583とはほぼ同規模の礎石が配置されており、長軸も同様に真北-真南を指向していた。覆土は黄色粘土粒と炭化物が多く含まれていた。17世紀後半に比定される肥前系磁器と中世土師器が出土している。

SKP-647 I-4㉖グリットに所在し、SB-11の外周部を構成する。法量は長軸約140cm、短軸約125cmで、おおむね円形を呈する。深度は約82cmである。底面には長軸約40cm、短軸約30cmの河原石が礎石として配置されていた。覆土は黄色粘土粒と炭化物の混入が目立った。17世紀後半に比定可能な中世土師器と陶磁器の出土がみられた。

SKP-658 I-4㉗・㉘グリットに所在し、SB-11の外周部南西に位置する。法量は長軸約128cm、短軸約98cmで楕円形を呈し、深度は約85.5cmである。底面には長軸約30cm、短軸約17cmの小振りの扁平礫が礎石として配置されていた。

#### c. 土坑

全40基が検出され、北区に主体的に見られた。

SK-513 I-3㉙グリット他に位置する。検出時の現存値で長軸3m以上、深度約1mにも及び性

格不明の大形土坑である。主軸方向はほぼ北-南を示す。17世紀後半に比定可能な陶器の小杯などが少量出土しており、おおむねその頃の遺構として捉えたい。

SK-674 H-4⑩・I-4⑩グリットに位置する。SB-11の南側からSK-675と重複して検出されたが、覆土の特徴等から同一遺構の可能性も考えられる。現存する規模は長軸で約170cmを計り、不整形な平面プランを呈する。深度は約87cmとなる。下層では覆土と調査面の土層との判別がつかず、第④面の調査で完掘をみた。上層は焼土が主体的にみられ、災害後に整地のため形成された廃棄土坑と考えられる。覆土から磁器や中世土師器等が出土しているが、所属年代は不明瞭である。

## 2) 第④面の遺構

調査面積約100㎡から遺構89基が検出され、遺構密度は0.9基/㎡となる。第③面よりもやや密度が高いこととなる。中区・南区からは、SB-11を構成する大形の柱穴が検出され、第③面で検出された柱穴を補足するものとなる。さらに、SB-11にほぼ重なるようにして掘立建物跡1棟(SB-12)が復元され、他にも3棟の建物跡が検出されている。また、南区から鍛冶炉跡と墓塚跡と推定される穴が2基近接して検出された。両者とも主軸方向と形態に共通性がみられたが、覆土の特徴に相違がみられた。北区からは性格不明の溝跡と大形土坑が検出された。本調査面で検出された建物跡、土坑、炉跡等の遺構の特徴として、何れも真北-真南を意識して構築されている。また、出土遺物からみる第④面の時期は、おおむね16世紀後半～17世紀後半の幅を有するものと考えられる。

分布の特徴としては、南側に建物跡やピットが多く見られ、鍛冶炉跡も検出された。一方、北側には性格不明の大形土坑が目立った。これは前面の第③面の特徴と類似したものである。

### a. 建物跡

4棟の掘立建物跡が復元され、内1棟は完全な規模で復元された(SB-12)。全面を通して最も多い棟数となり、本面の時期に頻繁な建物の建設が行われた状況として捉えられる。各建物の主軸はおおむね真北-真南を指向するが、内1棟(SB-13)は北北東-南南西を向いており、特異性が伺える。

SB-12 中区から南区にかけて存在し、建物西端部は若干Ⅱb区にかかる。前面で検出されたSB-11とほぼ同位置に重複する掘立建物跡である。構成する柱穴は計14基が想定されるが、実際に検出されたのは、SKP-626(第③面)、SKP-710・719、SKP-882(第⑤面)、SKP-2226(Ⅱb区・第④面)の5基のみとなる。検出時の柱穴は概して浅く、上面の建物跡となるSB-11を構成する柱穴によって破壊されたものがほとんどであった。このため、建物全体の残存率は極めて低いものとなった。

推定規模で、梁行4間(約13.3m)、桁間3間(約11.2m)となり、総柱造りの掘立建物跡と考えられる。建物の総面積は約150㎡と、全調査区を通して最大の規模となる。各柱穴間の距離は約4m～4.5mである。個々の柱穴の規模は最大のもので1m以上となるが、SB-11の柱穴と比較すると相対的に一回り小さなものとなる。また、柱穴内部から礎石は検出されていない点でSB-11の柱穴の特徴と異なる。個々の深度については何れも20cm以下と比較的浅い。主軸はN-1°-Eと、ほぼ真北-真南を基準に建築されており、SB-11と主軸を共にする建物跡と判断される。柱穴の間隔は約2.6m～3.7mを計り、東西で対称となる配列を示す。さらにSB-11と同様、東西に配された柱穴群の中央部分が若干広くなっており、間口が木町通りに面する南側に存在した建物と推定される。建物を構成する柱穴の多くはSB-11を構成する各柱穴と重複し、北側部分だけ若干はみ出す規模となる。これらの特徴から、SB-11が建

替えられる直前までに、ほぼ同位置に存在した建物跡と推定される。柱穴から出土した僅かな遺物から、建物の年代はおおむね17世紀代と捉えられる。

SB-13 調査区東側から検出され、さらに調査区外にも及ぶ。建物を構成する柱穴は調査区内で8基が想定されたが、実際にはSKP-718・723・733・734の4基のみが発見された。桁行5間(約8.6m)以上、梁間2間(約3.6m)以上の規模となり、主軸はN-19°-Eを計る。本面で検出された他の建物跡(SB-12・14・15)と比較するとかなり軸のずれがみられ、特異な方角を示すものとして捉えられる。柱穴の間隔は約1.6~1.7mとなり、個々の規模は大きなもので1mを超える。SKP-718から17世紀前半に比定される肥前系陶器と中世土師器が出土しており、その頃の建物跡と捉えられる。

SB-14 調査区南区からIIb区・④面の南側にかけて所在する。建物は両区のさらに南方にものびている。建物を構成する柱穴は、SKP-691・702・717・722、SKP-2207・2217・2247(IIb区・④面)の7基が検出された。桁行1間(約3.6m)以上、梁間5間(約13.3m)の規模が想定され、東西に長軸を向ける建物跡と考えられる。間口を本町通り側(南側)に向けるものと仮定すると、主軸はN-2°-Eとほぼ真北-真南を指向すると判断される。各柱穴の間隔は約2.5~2.9mとなり、法量は最大で約104cmとなる。SKP-702からおおむね17世紀代に比定される青花皿が、SKP-717から中世土師器が出土している。よって、おおまかに16~17世紀代の建物跡と捉えたい。

SB-15 調査区南区からIIb区・④面の南側にかけて所在する。建物を構成する柱穴は、調査区内で6基が想定されるが、実際に検出されたのはSKP-700・705、SKP-831(⑤面)、SKP-2320(IIb区・④面)の4基である。桁行2間(約3.8m)以上、梁間3間(約5.6m)の規模が想定される。各柱穴の間隔は約1.8m~2.2mとなり、個々の柱穴の規模は30~50cm程度と比較的小さい。主軸方向はN-1°-Eを指向する。構成柱穴から遺物の出土がなく、建物の時期は不明である。

## b. 柱穴・ビット類

遺構総数の主体を占める61基が検出された。大形のものではSB-11・12を構成する柱穴であり、法量的にもまとまりをもつグループとして捉えることができる。SB-13・14・15を構成する柱穴はおおむね中程度の大きさとなり、その他の小形のビットは法量が様々で配列等もつかめなかった。SB-11を構成する柱穴は個々に記録を行ったため、以下に個別記載した。

SKP-699 H-4⑩グリットに所在し、SB-11の外周部を構成する柱穴である。法量は長軸約128cm、短軸約103cmで円形を呈し、深度は約85.5cmである。底面から径約30cmの石臼(上臼)が検出され、礎石として転用されていたものと捉えられる。覆土には黄色粘土粒と炭化物が多く含まれていた。

SKP-703 H-4⑩グリットに所在し、SB-11の内周部を構成する。法量は推定で長軸約135cm、短軸は約99cmとなり、楕円形を呈する。深度は約59cmである。礎石は検出されなかった。覆土は黄色粘土粒と炭化物が多く含まれており、特に下層では炭化物の混入が目立った。16世紀末~17世紀初頭に比定される肥前系陶器が検出されている。

SKP-711 I-4⑥グリット所在し、SB-11の内周部を構成する。法量は推定で長軸約158cm、短軸約140cmとなり、やや不整な円形を呈する。深度は約73cmである。建物を構成する柱穴の中でも最も大形となる。14世紀中葉~16世紀初頭に比定される青磁の碗や、中世土師器が出土している。

SKP-737 I-3⑬グリットに所在し、SB-11の外周部北東に位置する。法量は長軸約147cm、短軸約100cmで楕円形を呈し、深度は約64cmである。底面には長軸約34cm、短軸約30cmの偏平な河原

石が配置されていた。覆土には黄色粘土粒と炭化物が混入していた。17世紀前半～後半の肥前系陶磁器が出土している。

SKP-781 I-4 ㊸グリットに所在し、SB-11の内周部を構成する。新しいビット・土坑に切られ遺存度は低い。法量は推定で長軸約120cm、短軸約108cmとなり、おおむね円形を呈するものと判断される。深度は約37.5cmと比較的浅く、底部中央が円形に窪んでいた。中世土師器数点が出土している。

#### c. 土坑

24基が検出され、北区に多く認められる。

SK-761 I-3 ㊸グリットに位置し、法量は長軸約102cm、短軸は残存値で約50cmとなり、概略隅丸方形を呈する。深度は約60cmを計る。底面は平坦であり、中央には小ビットが確認された。覆土は全体に炭化物と粘土粒を多く含むものであった。17世紀後半～18世紀後半に比定される肥前系の磁器が数点出土している。

SK-770 I-2 ㊸グリットに位置し、SK-761の南西に近接する土坑である。法量は長軸約136cm、短軸約105cmで楕円形を呈し、深度約38.5cmである。楕円形を呈する。覆土は炭化物を少量含み、全体に締まりに乏しい。

#### d. 鍛冶炉跡

SX-693 I-4 ㊸グリットに位置する鍛冶炉跡であり、炉床以下が検出された。法量は長軸約85cm、短軸約72cmで楕円形を呈し、深度は約14cmである。主軸はほぼ真北-真南を指向する。砂を混入させた粘土で炉床が構築されていた。炉床上部は炭化物と灰を多く含み、色調は黄赤灰色を呈する。下部は黒褐色を呈しており、全体に硬く締まっていた。炉床以下は半凸レンズ状に窪んでおり、炭化物と粘土粒を含む砂層が堆積していた。粘性・締まりが認められた。

#### e. 溝跡

SD-780 北区西側H-2 ㊸・㊸グリットに位置する。溝跡の一部のみが検出され、全体の規模等は不明であるが、北から南へ流れる小規模な流路と考えられる。覆土の特徴からa・bの2つに分けた。深度はbの方が深く、約63.5cmである。平面形や底面が不整形であり、自然流路跡と考えられる。17世紀頃に比定される陶器摺鉢等が出土している。

#### f. その他

SX-694 I-4 ㊸グリットに位置し、鍛冶炉跡SX-693の南側に近接する。法量は長軸約102cm、短軸約90cmであり、深度は約24cmである。上部は隅丸長方形を呈し、下部は円形状に窪む形態を呈する。形態や法量が類似するSX-693との関連性も想定される遺構である。主軸方向はN-5°-Eとなり、SX-693同様はほぼ真北-真南を向く。覆土上層は激しく被熱した砂が堆積しており、中層・下層からは灰と小骨片が多く検出されている。特に最下層からは骨が粉末状のものとして多量に検出された。下面中央には半球状の窪みが形成されており、激しく被熱した粘土で覆われていた。骨片の存在から墓塚の可能性も考えられる。

### 3) 第⑤面の遺構

調査区はおおむね前面通りであるが、北区については調査範囲を西側だけに限定した。これは北区東側が前面の発掘で遺構が途絶え、全体に新时期砂層が露出していたためであり、遺構確認は改めて行わなかった。調査面積約67.3㎡に対し、遺構は71基が検出された。よって、遺構密度は1.1基/㎡となる。主な遺構としては、獨立柱建物跡1棟が復元されている。

また、南区からは南北に延びる溝跡が検出された。出土した遺物はおおむね15世紀～16世紀末の幅で捉えられる。遺構の分布状況としては中央区南側以南からは柱穴・ピット類と土坑が多く検出され、北側からは土坑が僅かに検出されただけであった。

#### a. 建物跡

SB-16 調査区南半からⅡb区南半にかけて検出された。Ⅱa区で復元された建物跡では最も古い時期のものとなる。建物を構成する柱穴は15基以上が想定されるが、実際に発見されたのはSKP-806・840・846・858、SKP-2324・2328(Ⅱb区・第⑤面)の6基である。個々の柱穴の法量は径70程度、深度は50～70cm程度である。各柱穴の間隔は約1.9m～2.2mとなる。梁棟4間(約6.6m)、桁行5間(約10m)以上の規模となり、東西に長い掘立柱建物跡となる。間口を本町通り側(南側)に向けるものと仮定すると、主軸方向はN-10°-Eとなり、前面で検出された複数の建物跡の主軸とは若干異なるものとなる。SKP-840とSKP-846の2つの柱穴から中世の遺物が出土しており、SKP-846内では15世紀後葉～16世紀前半に比定される遺物が出土している。このため、大まかに16世紀代の建物跡と考えたい。

#### b. 柱穴・ピット類

46基が検出された。調査区南半に集中して検出された。第③・④面で検出されたような大形で礎石を配置する柱穴はみられなかった。中程度のピットが南区に多く、中央区では小ピットが主体であった。やや大きな柱穴もみられ、建物跡(SB-16)1棟が復元された。

SKP-807・808・809 I-4⑩・⑪グリットに位置する、複雑に切り合うピット群である。覆土の切り合いから、SKP-808よりもSKP-807・809の方が新しいと判断される。覆土は何れも炭化物を少量含み、色調はおおむね暗褐色～黒褐色を呈する。SKP-808・809からは中世土師器がそれぞれ検出されている。

SKP-846 H-4⑫グリットに位置し、SB-16を構成する柱穴である。法量は長軸約75cm、短軸約65cmで円形を呈し、深度は約75cmである。覆土から15世紀後葉に比定される瀬戸美濃焼の大皿の他、中世土師器、16世紀前半の珠洲焼摺鉢も出土している。

SKP-858 I-4⑬グリットに位置し、SB-16を構成する柱穴である。法量は長軸約74cm、短軸は推定で約65cmとなり、円形を呈する。深度は約33cmである。覆土は3層に区分された。1・2層は暗灰黄褐色砂で、2層の方が若干明色であった。3層は暗オリーブ褐色砂である。

#### c. 土坑

23基が検出された。ピット類と同様に南側から多く検出されたが、北側にも僅かに存在した。

SK-813 I-4⑭グリットに位置する。法量は長軸約80cm、短軸約70cmで楕円形を呈し、深度は約64cmである。覆土からは多くの炭化物・小骨片が検出され墓塚の可能性が高い。遺物は中世土師器が

出土している。

SK-821 I-4㉔グリットに位置する。西側に存在するSK-822と重複する小土坑である。法量は残存値で長軸約58cm、短軸約54cmである。深度は約46.5cmとなる。覆土の切り合いからSK-822より新しいと判断された。覆土は黒色粘土粒を包含し、全体に褐色から暗褐色を呈する。

SK-822 I-4㉗グリットに位置する。前確認面の遺構に切られ、一端を大きく欠く。残存値で長軸約104cm、短軸約68cm、深度は約60.5cmとなる。平面形は楕円形を呈する。覆土から骨片が少量検出され、墓塚の可能性も考えられる。遺物は中世土師器が数点出土している。

SK-839 I-4㉕グリットに位置する。法量は長軸約92cm、短軸約70cmで楕円形を呈し、深度は約31cmとなる。西側に重複するSKP-838に切られる。

SK-857 I-4㉚グリットに位置する。法量は長軸約96cm、短軸は残存値で約75cmとなり、楕円形を呈する。深度は約64cmである。覆土全体に粘土粒・炭化物を多く含む。遺物としては、15世紀中葉に比定される珠洲焼の播鉢と、白磁の皿が出土している。

SK-876 H-3㉑・㉒グリットに所在する。法量は長軸約83cm、短軸約64cmで、隅丸長方形を呈する。深度は約46.5cmを計る。主軸方向はN-2°-Wとほぼ真北-真南を指向する。覆土は炭化物が混入し、全体に暗色であったが締まりに乏しいものであった。

#### d. 溝跡

SD-829 南区の西寄りに存在し、南北方向に軸を向ける溝跡である。長軸510cm以上、幅約140cm、深度はおおむね20cm前後となる。多くのビットに切られ、本面でも古い時期に存在した遺構と判断される。覆土は黄色粘土粒を多く含む全体に粘性が認められるが、締まりは乏しい。遺物は中世土師器や15世紀後葉に比定可能な瀬戸美濃焼の仏花瓶、14世紀後葉～15世紀前葉の青磁碗等が出土している。

#### 4) 第⑥面の遺構

中央区と南区のみの調査区となる。調査面積約73.5㎡に対し、遺構は90基検出され、遺構密度は1.2基/㎡となる。ただし、南区については遺構確認終了後、工事掘削レベル内となる部分だけを限定発掘した。特筆すべき遺構としては、II a区で唯一となる井戸跡が1基検出された。本面の時期は、出土遺物からおおよそ15世紀代と捉えられる。

分布状況としては、北区では大形の井戸跡・土坑が主体となり、南区ではビット類が多く検出された。よって、南区が居住域に含まれる可能性が高いと想定されるが、一部の遺構の発掘にとどまったため建物跡の復元は不可能であった。

#### a. ビット類

66基が検出された。内60基が南区で検出されている。小形のビットが主体を占め、明確な配列や建物の構成を復元することはできなかった。覆土は遺構確認面より若干暗色となる黒褐色を呈するものがほとんどで、おおむね粘性・締まりに乏しかった。一つのビットとして遺構確認したものでも、実際に発掘すると、覆土の酷似するビットが重複していたものも複数みられた。

## b. 土坑

23基が検出された。中央区に比較的多くみられ、かなり大形のものも存在した。

SK-893 H-3⑬・⑭グリットに位置する。SE-891に重複する。長軸約210cm、短軸は現存値で約120cmとなり、楕円形を呈する。深度は約46cmとなる。底面は長軸で約150cmと広く、おおむね平坦であった。覆土は炭化物を含み、黒褐色を呈していた。

SK-900 I-3⑳に位置する。楕円形を呈する土坑である。SK-901・902と重複するが、覆土の切り合いから3基の中で最も古いものとして捉えられる。法量は長軸約86cm、短軸約61cmで楕円形を呈し、深度は約45.5cmである。

SK-901 I-3㉑・㉒に所在する。法量は長軸約61cm、短軸約48cmで、楕円形を呈する小土坑である。深度は約61cmとなる。覆土の切り合いからSK-900よりも新しいと判断される。遺物は17世紀前半に比定される肥前系陶器が出土した。

SK-902 I-3㉓・㉔に所在する。法量は長軸約92cm、短軸約77cmで、形態は不整な楕円形を示す。深度は約58.5cmであり、底面に小ビットを有する。覆土は炭化物を多く含み全体に黒色を呈する。SK-901よりも新しい。

SK-911 I-4③・⑧グリットに位置し、中央区から南区にかけて所在する性格不明の大形土坑であり、南区側のみを発掘した。推定法量は長軸約460cm、短軸約160cmで、形態は長楕円形を呈する。深度は発掘した南端部で約44cmを計る。主軸はおおむね真北-真南を指向するものと判断される。覆土から15世紀頃の青磁碗と、中世土師器が出土している。

## c. 井戸跡

SE-891 H-3⑪・⑫他に所在する。法量は現存値で長軸約580cm、短軸約370cmとなり、おおむね円形を呈する大形の井戸跡と考えられる。深さ約91cmまで発掘し、ややならかな傾斜で底面に向け落ち込む様子が確認された。しかし、かなりの深度が想定されたため、これ以下の掘削は断念した。覆土2層目まで検出した。1層は炭化物を含み黒褐色を呈し、2層は砂丘砂より若干暗色な暗褐色を呈していた。覆土上層からは18世紀頃に比定される肥前系磁器、及び白磁皿等が出土している。

## 5) 第⑦面の遺構

A1-II a区最下部の調査面であり、南区北東部分のみの狭い調査区となる。I-4⑦・⑧・⑫・⑬グリットの範囲に収まる。遺構確認面は新期砂丘砂上面に該当するため、これ以下に遺構は存在しないこととなる。確認面の平均標高は約5.0mである。調査面積は約5.5㎡であり、遺構はビットのみ8基が検出された。このため、遺構密度は1.5基/㎡となる。

検出されたビットは、法量30cm程度の円形を呈し、深度は20cm以下のものがほとんどであった。性格としては、砂丘面の凹凸もしくは上層位面の掘り残しの可能性を持つ。覆土は何れも炭化物を僅かに含み、色調は確認面よりもやや暗色となる暗褐色を呈していた。粘性・締まりともに乏しかった。調査区が狭小であり、分布や配列まで捉えることは不可能といえるが、調査区外を含め建物等が存在した可能性も十分考えられる。遺構内出土の遺物は見られないが、遺構外から出土した僅かな遺物から、本調査面とした砂丘面の時期はおおむね15世紀代と捉えられる。

## 4 遺 物

本調査区では、整理箱約15箱分の遺物が出土している。その内容は、土器・陶磁器類（約10箱）、石製品（約2箱）、金属製品（約1箱）、鍛冶関連遺物（約2箱）などである。すでに、土器・陶磁器類以外は第IV章において概観しているので、AⅠ-Ⅱa区・Ⅱb区・Ⅲ区（第V・VI・VII章）の出土遺物については、土器・陶磁器類のみの報告としていきたい。

土器・陶磁器類は、第IV章での分類等をもとにして説明する。また、土鍾などの土製品もここに加えた。同じように、遺構の検出面別、そして出土遺構別に記載していくが、個々のデータについては、観察表を参照されたい。

### i) 第①・②面（図版54）

第Ⅱa区では、第①・②面に相当する面から複数の焼土面が確認されている。これらの焼土面は、層序の区分においてある程度有効であると考えられるので、遺物は焼土面ごとに取り上げている。特に第2・3焼土面では比較的まとまった量の陶磁器類が検出されているので、器形の把握できるものを中心として図化することとした。

第2焼土面 図化が可能であったのは、磁器3点、陶器1点の計4点にすぎないが、完形率が高い。磁器の3点は、法量が異なるものの、いずれも丸形の中碗に分類できる。また、一部を欠損するのみで、全体の器形・文様を把握することができる。体部、特に底部が肥厚している器形は、波佐見の特徴である。501・502は、外面の梅樹文や内面の四方禪文、見込みの二重圏線およびコンニャク印判五弁花文などから、18世紀後半～19世紀初頭の所産と考えられる。503は、外面にコンニャク印判菊花文が施されており、18世紀後葉～19世紀初頭と思われる。陶器は、注口の上位に耳があるため、土瓶と判断される。製作地は肥前で、製作年代は17世紀末～19世紀中葉と思われる。

以上のことから、第2焼土面から出土した陶磁器の中心的な年代は、18世紀後半前後と想定することができよう。

第3焼土面 磁器皿5点、磁器碗2点、陶器皿1点、陶器播鉢1点を図化する。505～508は、波佐見産で、高台径が大きい深皿と呼ばれる製品で、全体的に体部が肥厚している。4点とも文様が類似しており、外面は蛇行した唐草文、高台内には一重圏線および「福福」の裏銘が施されている。内面の文様にはヴァリエーションがあるが、口縁部から見込みの二重圏線までの区画内に文様、圏線の中央にコンニャク印判五弁花文を施すという共通した構図である。18世紀後半～19世紀初頭の所産であろう。509は、いわゆる初期伊万里の小皿で、17世紀前葉の製品である。510は、鉄絵のみられる肥前陶器の小皿で、16世紀末～17世紀初頭と思われる。511は、波佐見産の碗であり、外面にはコンニャク印判による装飾がなされる。18世紀後半と思われる。512は、小碗で、17世紀後半の製品と考えられる。513は、波佐見産の小碗で、わずかに梅樹文が確認できる。17世紀末～18世紀後葉と思われる。514は、須佐唐津の播鉢である。17世紀後半であろうか。515は、肥前陶器の中皿である。見込みには砂目痕があり、口縁端部の形態は溝縁状であり、17世紀前半と考えられる。

これらの陶磁器類から、第3焼土面出土陶磁器の主体となる年代は、第2焼土面と同様に18世紀後半頃が想定されよう。しかし、509・510・512・514・515など、17世紀に遡る陶磁器を定量含んでいることにも注意しておきたい。

ii) 第③面(図版55・56)

SKP-620・SKP-647・SK-674・SKP-655などから、比較的まとまった量の陶磁器類が出土している。主体は肥前の陶磁器であるが、一部に波佐見の製品が含まれる。土師器も出土しているが、全体の一部に過ぎず、小片が多い。

SKP-620 土師器3点、肥前磁器1点を図化した。肥前磁器は小皿であるが、文様や釉薬などにより、17世紀後半の所産と考えられる。土師器は、3点ともA類とした手づくねの皿で、体部外面には指頭圧痕がみられる。

SKP-647 肥前磁器2点、肥前陶器2点、土師器1点を図化した。肥前磁器の520は小皿、521は中碗である。17世紀後半の年代が考えられる。肥前陶器522は中碗、524は壺である。522の所属磁器は不明であるが、524の内面には同心円文の当て具痕があり、16世紀末～17世紀初頭の製品であることがわかる。土師器の523は、B類としたロクロ成形の皿である。口径が大きく、器高が低い。

SK-674 肥前磁器1点、土師器4点を図化した。肥前磁器の529は青磁の中碗である。土師器525～528はすべて皿A類である。

SKP-655 磁器2点、陶器1点を図化した。530は、内外面に青磁釉の施された皿である。531は、小皿で、口縁部内面に半菊花文を持つ。この2点は生産地・年代は不明となった。532は、播鉢の口縁部片で、肥前産である。口縁部の形態から17世紀中葉の所産と思われる。

その他の遺構 そのほか、落ち込みなどを含む遺構出土の土器・陶磁器としては、磁器14点、陶器8点を図化した。ほとんどが肥前系である。533・534は、2点とも磁器中碗である。533は丸形、534は筒形を呈する。製作時期はおそらく17世紀後半と思われる。535は、珠洲の播鉢で、15世紀後半の所産である。肥前磁器の536とともに出土しているが、混入と思われる。537は、磁器で、半球形の皿である。口縁部内面に四方禪文を持つので、18世紀の所産であろう。538・539・541は、波佐見産の中碗と思われる。体部外面には、17世紀の一般的な文様である雪輪草花文が施されている。539は、中皿である。さほど肥厚していない器壁から、17世紀末～18世紀前半の所産と思われる。541は、いわゆる陶胎染付の中碗である。同じく17世紀末～18世紀前半の所産と思われる。540は、肥前陶器の中碗で、17世紀後半の所産である。542は、肥前陶器の小皿で、内面の鉄絵装飾から、16世紀末～17世紀初頭と思われる。543は陶器の壺、544は陶器の瓶であるが、産地・年代とも不明である。545は、肥前陶器の中鉢で、刷毛目装飾が施されている。18世紀前半前後の所産である。546は、肥前陶器の播鉢である。口縁形態から17世紀中葉と考えられる。547～554は肥前磁器である。547・548は、中碗で、ともに四方禪文を持ち、548の体部外面には○×文がみられる。18世紀前葉～後葉の製品である。549は、小碗で、見込みに二重圓線および中央の文様を持つ。18世紀末～19世紀初頭である。550・551も小碗で、体部外面に丸文を持つ。18世紀前半の所産である。552・553は、詳細が不明となった。554は、蓋で、18世紀の製品に多い。

遺構外 図化が可能であったのは、磁器9点、陶器5点、土師器1点、土製品1点である。磁器はすべて肥前系と考えられるが、555・556・559は、波佐見の製品と思われる。陶器もほとんどは肥前系と考えられるが、565・568は越中瀬戸の可能性もある。570は、手付きの焙烙と考えられる。製作地・年代は不明である。

小 結 第③面の土器・陶磁器類は、一部の混入されたものを除けば、所属時期はおおむね17～18世紀に及ぶ。ただし、柱穴や土坑などから出土した陶磁器が17世紀代に、遺構外から出土したものが18世紀代に多い傾向があるが、ここでは指摘にとどめておきたい。

### iii) 第④面(図版57~59)

第④面は陶磁器の全体量が多い。また、量的には依然として近世陶磁器が主体であるが、第面と比較すれば、中世陶磁器や土師器の量も多くなっている。

SX-735 SX-735a・SX-735bが重複しているが、新旧関係は明らかではなく、出土遺物にはその識別ができない遺物も含まれている。図化が可能な磁器はなく、陶器9点、土師器7点を報告する。572は、朝鮮(李朝)産の皿である。574は、肥前の大鉢で、刷毛目装飾から18世紀の所産と思われる。575は、肥前の搦鉢である。18世紀と思われる。578は、肥前の皿である。口縁形態から、17世紀前葉の可能性がある。579は、瓶類と思われる。産地は不明であるが、軸葉の色調は黄瀬戸を思わせる。580は、肥前の中碗である。16世紀末~17世紀前半の製品である。596は、肥前の小皿である。同じく16世紀末~17世紀前半の製品である。597は、瀬戸美濃の卸目付大皿と思われる。口縁形態により、製作時期は15世紀後葉と推測される。土師器はすべて皿A類で、B類は確認されなかった。

SKP-711 586は、青磁碗C類である。14世紀中葉~16世紀初頭と思われる。587・588は、土師器皿A類である。

SK-718 589は、肥前の小皿で、製作時期は17世紀前半と思われる。590は、瓶であるが、製作地や年代は不明である。591・592は、土師器皿A類で、ともに小皿である。

SK-727 磁器1点、陶器5点、土師器1点を図化した。時期を特定できる陶磁器をもとにすれば、17世紀前葉~中葉と推定できる。土師器は皿B類である。

SK-782 陶器の年代は、おおむね17世紀前半前後に比定できる。土師器は、皿A類である。

SK-761 磁器4点を図化した。すべて肥前系である。615・616は波佐見の製品であり、17世紀後葉~18世紀後葉の所産と思われる。

SD-780 陶器3点、磁器1点を図化した。619は、搦鉢であるが、産地は備前の可能性もある。621は初期伊万里の小皿で1610~1650年代、622は中碗で1580~1650年代である。619が16世紀の可能性もあるので、16世紀末~17世紀前半頃を想定しておきたい。

SK-759 磁器2点、陶器3点、土師器2点を図化した。623は、肥前陶器の小皿で16世紀末~17世紀初頭であるが、625などは時期を特定することはできない。土師器は、皿A・B類が各1点ある。

その他の遺構 581~583は肥前磁器の小皿である。581・582は17世紀前半、583は17世紀後半と思われる。585は、瀬戸美濃の天目茶碗である。586・598・599は、肥前陶器の小皿で、16世紀末~17世紀前葉と思われる。636は、肥前磁器の中碗である。器形や文様から18世紀の製品と思われる。630は、青磁軸の施された蓮弁文碗である。ただし、中国製ではなく、国産陶器の可能性が高い。634は、珠洲で、所属時期は不明である。土師器は、皿A・B類があるが、B類は1点のみとなった。

遺構外 磁器12点、陶器6点、青磁1点、土師器8点を図化した。磁器はほとんどが肥前であるが、639・643は波佐見産と思われる。638などはやや時期が下るが、大半は17世紀の所産といえる。陶器では、越中瀬戸の可能性のある649以外はやはり肥前である。時期も裏654が16世紀末~17世紀初頭である以外はほとんど17世紀に属すと思われる。土師器は、皿A類7点、B類1点である。A類は、大小の法量分化が明瞭である。

小 結 第④面出土の陶磁器をみると、574・575・636など、18世紀の製品と思われるものもあるが、量的に主体であるのは、17世紀前半を中心とした16世紀後葉~17世紀後葉であると考えられる。土師器は少量の皿B類を伴うものも、主体はA類の小皿である。

iv) 第⑤面 (図版60)

上層の第④面までとは異なり、中世陶磁器が増加し、遺構内で土師器と供伴する例が多くなっている。

SD-829 青磁1点、瀬戸美濃3点、土師器3点を図化した。青磁碗664はやや古相であるが、瀬戸美濃665は褐釉の尊式花瓶で、形態から後期新段階(15世紀後葉)と思われる。666は瀬戸美濃の卍皿で、667も卍皿などの皿類と思われる。668は、土師器皿B類、669・670はA類である。

SK-857 珠洲(671)・白磁(672)を図化した。おおむね15世紀後半を示すと思われる。

SKP-838 土師器皿A・B類を各1点図化した。

SKP-846 瀬戸美濃1点、越前1点、土師器1点を図化した。瀬戸美濃675は、口縁形態から卸目付大皿で、15世紀後葉と目される。越前676は、罎鉢で、口縁形態から16世紀前半の所産であろう。土師器677は、皿A類である。

SK-815 3点の土師器を図化した。679は皿A類、678・680は皿B類である。少量ではあるが、B類がA類よりも多い。ただし、SK-808・SK-822・SK-850では、各2点の土師器皿を図化したのが、すべて皿A類である。

SK-873 肥前陶器1点、土師器1点を図化した。肥前陶器691は、16世紀末～17世紀初頭の製品である。土師器690は、皿B類である。

SK-868 肥前陶器2点を図化した。697は中碗、698は大鉢と思われる。16世紀末～17世紀前半頃の所産であろうか。

SK-834 陶器1点、土師器8点を図化した。陶器699は瓶類であるが、製作地や年代は不明である。土師器は、皿A類が5点、B類が3点である。

遺構外 青磁2点、土師器6点を図化した。青磁の年代観は、ひとまず15世紀頃としておきたい。土師器は、皿A類4点、B類2点である。

小 結 第⑤面出土の陶磁器をみると、15世紀の製品が多いが、越前や初期段階の肥前の製品も一部に認められる。したがって、年代的には大きく15～16世紀に位置付けておきたい。土師器の様相は、第⑤面と比べると量的にも多くなり、定量のB類が含まれていることがわかる。

v) 第⑥面 (図版61)

計10点を図化した。SE-891では4点を図化したのが、うち3点は18世紀以降の肥前系磁器である。719は白磁皿であるが、SE-891の所属時期を示すものであろうか。第⑥面には肥前系磁器がやや多く、近世後期の時期に属するものもある。中世の土器・陶磁器類としては、719のほかに724・725がある。724は土師器皿A、725は珠洲の壺で14世紀後葉～15世紀前半の所産である。

vi) 第⑥下面 (図版61)

青磁2点、珠洲1点、土師器7点を図化した。青磁・珠洲からおおむね15世紀前半の時期が想定される。土師器は、皿A1点、皿B6点であり、第⑥面までとは組成が逆転する。

vii) 第⑦面 (図版61)

第⑦面から出土した陶磁器類としては、青磁736が図化できたのみであった。さほど明瞭ではないが、内面に刺花文が施されている。15世紀の所産であろうか。

viii) その他 (図版61)

出土面が特定できなかった陶磁器類を一括する。土師器(737)、青磁(738)、肥前陶器(739)、肥前磁器(740～742)がある。

## 5 A1-II a 調査区のみまとめ

調査区 II a 区は、今回の調査区の中央にあって、やや I 区寄りに位置する。当初 II b 区とともに一括して調査する予定であったが、中央に排水管が埋設されていたこと、調査期間の圧縮を企図し 2 班で調査せざるを得ない事情などにより、東側を II a 区、西側を II b 区と分離して実施したものである。I 区および III 区とは、それぞれ距離を多くことから、遺構や遺物の状況にはそれぞれ若干の相違がある。

また、調査の実施にあたっては、第①～②面までの生活面を重機により除去したため、遺構の調査は第③面から実施した。しかも、第③面以下については、大架施工や基礎杭の打設により壊される部分のみに調査範囲を限定したため、調査区全体を見極めるには不十分となった。

層序と遺構面 基本層序で確認することのできた遺構面は、a～f までの合計 6 面である。調査で遺構を把握した遺構面は 5 面であり、両者の対比は、a 面・b 面：第④面、c 面：第⑤面、d 面：未設定、e 面：第④面、f 面：第③面となる。調査で実施した第⑦面については、検出された遺構が浅く、遺物もほとんど出土していないことから、砂丘砂層面の凹凸もしくは第⑥面での掘り残し遺構の可能性が高く、第⑦面の取扱いについては、第⑥面に一括して捉えることとする。また、d 面については、調査段階で認識に至っておらず、遺構面としては調査されなかった。

遺構面の概要 [第①・②面] 第①・②面については、前述したように重機で掘削し、遺構面としては調査されていないこと、さらに基本層序断面においても、位置的な問題から良好に捉えることができなかったものである。しかし、これら 2 面は、焼土や木炭を多く含み、重機による掘削でも容易に各面の把握が可能であったことから、出土遺物については層位的な取り上げを行った。出土遺物については、報告に際して近世の所産である陶磁器類を掲載したが、出土遺物の大半は近現代における瓦礫の類であり、各遺構面の年代観とすることができる。これら瓦礫や焼土・木炭層の存在は、19世紀から20世紀初頭に頻発した柏崎町大火の跡を示すものであり、当時の火災層とその整地層であったと判断される。しかし、嘉永4年(1851)の八木大火から明治30年(1897)の日野屋火事まで、被災したと考えられる大火は46年間に4度を数えることから、各々を特定するまでには至らなかった。

[第③面] 第②面の火災層を除去して検出した遺構面である。遺構の発掘作業は当該面から実施したため、瓦礫を多く含む攪乱坑も多いが、大型の柱穴やピットのほか、井戸跡と考えられる大型の落込みが検出されている。建物跡の復元については、第④面検出の柱穴と合成することにより、寺院本堂と同形式の建物跡1棟が確認された。

出土遺物の傾向としては、遺構内からは17世紀代、遺構外では18世紀代と、それぞれ时期的な偏りが指摘されているが、遺構面としてはおおむね18世紀代前後の時期に比定し得るものである。ただし、遺構内については大型建物の創建期を、また遺構外については存続時期の下限を示唆している可能性があり、再度吟味する必要がある。

[第④面] 柱穴が多く検出され、建物跡も4棟を復元することができた。建物跡の主軸方位は、I 区とは異なって、一定しておらず、大きく3つの方位にまとめることができる。この点については、後述するが、町割が統一されていく過程、つまり変遷を示している可能性が高い。調査区の北東辺は、南部を除くと大型遺構が集中する。また、鍛冶炉と考えられる炉跡が検出されており、手工業者の居住が想定できる。

出土遺物については、近世陶磁器が主体という点は、上位の各遺構面と同じであるが、中世陶器や土師

器類の出土量が増加している点が、様相の相違点として指摘できる。遺構面の年代観について、出土遺物の年代幅からみると、16世紀後葉から17世紀後葉までが視野に含まれることになるが、おおむね17世紀前半を中心とした年代観で捉えることとしたい。

【第⑤面】 北部は、砂丘斜面の上方となって砂丘砂が露出しており、検出される遺構数は激減し、南部に遺構が集中する。建物跡は1棟を復元することができたが、これと主軸方位を違える溝跡を跨ぐ。この溝跡については、南北を指向する方位から町屋を区画する境界溝の可能性が高いが、分割された敷地に見合う町屋の建物跡は確認できなかった。

出土遺物の様相としては、中世陶磁器が増加し、遺構内で土師器と供伴する事例が多くなる。遺構面の年代観は、肥前系の製品を含むことから、16世紀末ないし17世紀前半までを考慮せざるを得ないが、これらは遺構内からの出土例であり、上層位の遺構が含まれた可能性を否定できない。したがって、当該面については、おおむね16世紀代（前半）を中心とした年代観で捉えられるのではないかと考えられるが、今回の調査成果のみでは限定し難いかも知れない。

【第⑥面・第⑦面】 第⑦面は、第④面の掘り残し遺構、もしくは砂丘砂上面の凹凸の可能性が高く、第⑥面に一括する。北区の遺構はなく、中央区では大半が大型井戸のプランに飲み込まれ、やや大型の土坑が目立つ。南区ではピット群が集中するが、建物跡の復元に至らなかった。

中央区については第⑥面として調査され、若干の遺物を掲載したが、これらには18世紀以降の肥前系陶磁器が含まれている。これら時期が新しい遺物群は、おそらく大型井戸などに紛れた混入品の疑いがあり、井戸跡の年代観を物語るものとしても、遺構面の年代観とすることはできない。遺構面の年代観としては、第⑥面下とした南区の年代観、つまり15世紀前半前後を想定しておきたい。この第⑥面下については、青磁や珠洲とともに土師器が多く出土しているが、ロクロ成形の製品が多くなっており、第⑥面以上の層位でA類とした手づくね成形の製品が卓越している様相とは異なっていた。

町割と建物跡 II a区を中心にして把握された建物跡は、7棟である。これらが指向する主軸方位をみると、大きく3つに区分できる。第一は、おおむね南北を指向する4棟で、東西の振れ方で二細分することができる。これらは、現在の町割に近似した方位をとるもので、第③面と第④面で検出されている。第二は、真北より東へ約10度振れる方位を指向する3棟で、これらのうち1棟が第⑤面、ほかは第④面で復元された。第三としては、東へ19度振れる1棟で、第④面の検出となる。当該事例は、僅か1棟であることから、認定した建物跡の復元に問題を残すが、現状では否定も難しい。

II a区においては、町割に関する遺構として、第⑤面の溝跡（SD-829）と第④面の柵列（SA-20）がある。前者は南区、後者は北区を主体に位置するが、指向する方位が近似しており、これら二者が境界を意識し、柵列が溝跡を踏襲して設けられていた可能性を示している。

町屋の境界を示す遺構の存在は、第③面では確認されておらず、寺院の仏堂と思われる建物跡1棟のみ復元されている。また、復元された建物跡の多くが、溝跡や柵列を跨いで構築されており、このことから、II a区内では、町屋の分割がなされたのは一時的であり、大半の時期は同一町屋として活用されていたと考えることができそうである。建物跡のプランを見ると、I区では南北に長い建物跡が主体と見られることに対し、このII a区では東西に長くなる建物跡が多い。これらについては後述するが、施設の目的や居住者の性格等は、I区と趣を違えていた可能性が高い。また、当該地区に寺院があったとされる伝承や記録類はなく、出土した遺物群を見ても、寺院跡の存在を積極的に証左できる状況は得られていない。これら検証等は、今後の課題とせざるを得ない。

## VI A1-Ⅱb区の調査

### 1 調査の経過

柏崎町遺跡A1-Ⅱb区の調査は、A1-Ⅰ・Ⅲ区が調査中の平成11年11月15日に着手し、一部併行して進められ、12月17日に現場作業を終了した。実際の調査日数は延18.5日であり、調査員・調査補助員延67人、作業員延119.5人を要した。本区の面積はおおよそ220㎡で、下層では圧縮したものの、調査面数は第①面から第⑥面までであったため、調査実面積は約315.9㎡となった。

**第①～②面の調査** 11月15日、A1-Ⅱa区の調査が進む中、重機による本区の表土剥ぎに着手する。表土は、終了したA1-Ⅰ区の埋め戻しに用いた。表土剥ぎは遺物を回収しながらの作業となったが、焼土層を目安とした第①・②面を順次検出させ、層的な遺物の取り上げを目指した。翌16日、第②面終了後、第③面を検出させた。この段階で、本区は一旦調査を中断してA1-Ⅱa区の調査に集中した。

25日、本区第③面を遺構確認した。29日、土層観察のため、3カ所に東西方向のサブトレンチを発掘したが、雨足が強く、作業は難航した。翌12月1日は、久々に雨の降らない日で、この機に第③面の遺構確認をさらに精査し、2日までに見取図を作成した。その後、本区の調査はまたしばらく中断した。

**第③～⑥面の調査** 第③面以下については、休日を返上した延13日間が費やされ、応援の市建設部都市計画課職員を含めた調査員・補助員延58人、作業員延111人が調査にあたった。12月に入ってからの再開であり、期間中は日が射すことはあまりない悪天候続きで、雪やみぞれが降りしきる毎日であった。

A1-Ⅲ区の調査も終盤にさしかかった12月6日、一部のメンバーを割いて本区の本格的な発掘調査に着手した。調査区は、ベルトによって3分割し、北側から1区・2区・3区と小区を設定したが、遺構の発掘は3区から順次進めていった。7日、遺構発掘を継続したが、攪乱も著しかった。

8日、調査進度を早めることを図り、調査区全体ではなく、1～3区の小区単位で遺構発掘と下層までの掘り下げを進めていくこととした。9日、遺構発掘は終了したが、1・2区は平面図を作成中となったが、撮影・作図も終えた3区は即第④面までの掘り下げを始め、10日には1・2区も掘り下げに着手した。11日、第④面の遺構確認をした後、すぐ発掘に取りかかる。また、この日から投光機3台を導入し、夕方でも撮影ができるように備えた。投光機は、早速その威力を発揮したが、それでも光量不足であったため、フィルムも今までのISO100からISO400として感度を高めることとした。12日は日曜日であったが、調査員のみで撮影や実測等を行う。13日、2区は第④面の遺構発掘中であったが、1・3区は第⑤面まで掘り下げ、遺構確認を行った。

14日、2区も第④面が発掘、図化作業に入り、1・3区では第⑤面の遺構確認が終了した。第⑤面は当該事業で掘削の及ばない深度にあり、以後の調査面積をさらに圧縮させていった。3区では第⑤面の遺構が発掘する。また、調査員が夜まで現場に残り、投光機の下で図化作業を可能な限り進めたので、日中は掘る作業に専念した。15日、2区も第⑤面への掘り下げと遺構確認に着手した。1区は第⑤面の遺構が発掘、夕方は3区の平面図を作成した。16日、2区も第⑤面が発掘、3区は第⑥面への掘り下げ、遺構確認・発掘が終了した。以上で、おもな発掘作業を終えたことになる。17日、図面を完成させる一方、撤収作業に取りかかる。20日、A1-Ⅱa区とともに撤収作業を行って現場作業は完了となった。

## 2 層序と時期区分

### 1) 層 序

A1-II b区における基本層序は、調査区の東西方向に設定したAベルト南壁とBベルト南壁の2ヶ所で観察を行った。これらのセクション・ベルトの設定は、第③面までの掘削が終了した後に行ったため、現表土や第①面及び第②面に相当する層の堆積は反映されていない。調査区の北側に位置するセクション・ベルトをAベルトとし、南側に位置するセクション・ベルトをBベルトとした。なお、基本層序の名称は、ローマ数字大文字を使用し、算用数字によって呼称した遺構覆土と区別した。層序の細分にはアルファベット小文字を用い、ローマ数字の後に付して、「第Ⅲc層」等と表記した。

第Ⅰ層は第Ⅰa層～第Ⅰb層に細分された。第Ⅰa層は暗褐色粘質砂層で、第③面の遺構確認面に相当する。炭化物及び焼土、地山土、小砂利を多量に含む。第Ⅰb層は、Aベルトの西端付近にのみ認められる暗褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土、地山土、小砂利を多量に含む。第Ⅰa層よりも若干暗色である。

第Ⅱ層は第Ⅱa層～第Ⅱd層に細分された。当該地の整地層に相当し、第Ⅱc層及び第Ⅱd層は局地的にのみ認められた。第Ⅱa層は暗灰色粘質砂層で、第④面の遺構確認面に相当する。炭化物を多量、焼土及び地山土、小砂利を少量含む。第Ⅱb層は暗褐色粘質砂層で、第Ⅱa層が不明確な地点では、第⑤面の遺構確認面とした。炭化物を少量、焼土及び地山土、小砂利を微量に含む。第Ⅱc層は黄色粘質砂層で、Aベルト西端付近とBベルト東端付近にのみ認められる整地層である。地山土を主体とする混合土で、暗褐色粘質砂が少量混合する。炭化物及び焼土を少量、小砂利を微量に含む。第Ⅱd層は、Aベルトの西端付近にのみ認められる暗褐色粘質砂層で、整地層に相当する。炭化物及び焼土、地山土を多量、小砂利及び砂丘砂を少量含む。特に炭化物と焼土は部分的に層位状をなし、極めて多い状況である。

第Ⅲ層は細分されなかった。暗褐色粘質砂層で、地山土を多量、炭化物及び焼土を少量含む。

第Ⅳ層は第Ⅳa層～第Ⅳb層に細分された。第Ⅳa層は黄褐色粘質砂層で、砂丘砂を主体に暗褐色粘質砂が混ざった混合土である。Aベルトの西側付近とBベルトの東側付近において、部分的な堆積が認められ、炭化物及び焼土を少量含む。第Ⅳb層は第⑤面の遺構確認面に相当する。暗褐色粘質砂層で、炭化物がブロック状となって、極めて多く含まれる。また、焼土及び地山土を少量含む。

第Ⅴ層は細分されなかった。暗褐色粘質砂層で、炭化物を少量、地山土を微量、砂丘砂を多量に含む。

第Ⅵ層は黄褐色砂層で、当該地の砂丘砂層に相当する。第⑥面の遺構確認面である。

### 2) 時期区分

A1-II b区の発掘調査は第③面から開始し、第①面及び第②面については未発掘のまま掘削を行った。そのため、第①面と第②面の帰属時期等についての詳細は不詳であるが、隣接するA1-I区やA1-III区の様相等から、概ね近世～現代に相当するものと考えられる。

第③面の遺構確認面として把握された層位は、第Ⅰa層である。出土遺物の所属時期等により、概ね16世紀末～17世紀に比定することができる。第④面の遺構確認面は第Ⅱa層及び第Ⅱb層である。第③面との重複時期が著しいが、概ね16世紀～17世紀前半に比定可能である。また、第⑤面の遺構確認面は第Ⅳb層で、概ね15世紀～17世紀前半に比定できる。第⑥面は砂丘砂層に相当する第Ⅵ層を遺構確認面とするが、時期判断の可能な遺物等が皆無なため、詳細な時期は不明となった。

### 3 遺 構

A1-IⅡb区からは、第①面から第⑥面までの遺構確認面が把握され、そのうち第③面～第⑥面の発掘調査を実施した。各面ともにピット類や土坑類を主体とし、井戸跡も目立つ存在であった。

#### 1) 第③面

第③面から検出された遺構は、ピット類と土坑類を主体に、溝跡も確認された。検出された遺構は、ピット類40基、土坑類34基、溝跡4基の総数78基である。また、ピット類の配列により、建物跡1棟も推定復元されている。調査原因となった土木工事等の影響が及ばない地点は、未発掘とする方針であったため、調査区を虫食い状に調査することとなった。そのため、第③面において、実際に発掘調査を実施した面積は約142.1㎡となった。遺構の分布は、調査区内のほぼ全域に認められるが、中央付近から南端付近にかけて、特に集中する傾向が認められた。また、G-3グリッド～G-4グリッドの東端付近と、調査区の東端付近には、南北方向に走る溝跡が認められ、当該地区を区画していた溝である可能性が考えられる。本面から検出された遺構は、他地区や他面との区別を明確にするため、2000～2100番台の遺構番号を使用した。なお、推定復元された建物跡については、A1-I区から連続番号が付けられたため、この限りではない。

#### a. 建物跡

第③面において、ピット類の配列状況等の検討に基づいて推定復元された建物跡は、SB-17の1基である。

SB-17 調査区の南半に相当するG-3グリッド、G-4グリッド、H-3グリッド及びH-4グリッドの4つにまたがって位置していた。SKP-2001・2027・2037・2052・2070の5基で構成されていたと考えられる。また、規模は桁行約9.8m×梁間約8.0mを測り、調査によって検出されなかった柱穴があった可能性も想定される。主軸はN-6°-Wであり、概ね真北方向を指向して構築されたと考えられる。

#### b. ピット類

SKP-2001・2008・2009・2010・2011・2012・2014・2027・2029a・2029b・2031・2032・2033・2037・2038・2040・2042・2051・2052・2053・2054・2057・2058・2061・2062・2063・2064・2065・2066・2067・2068・2069・2070・2071・2072・2083・2089・2107・2108・2109の40基が検出された。調査区のほぼ全域に分布するが、最も多く検出されたのは調査区の北西に相当するG-3グリッドである。平面規模の長径は、最小約19cm～最大約150cmである。また、深度も最小約7.5cm～最大約63.5cmで、それぞれの差異が著しく認められる。

SKP-2037 H-4グリッドに位置し、楕円形を呈する。SKP-2038との切り合い関係が認められ、土層観察等により、本遺構のほうが古い所産であることが把握された。推定復元されたSB-17を構成する柱穴の一つで、長径約140cm×短径約115cmで、深度は約77.0cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し、焼土等を少量含んでいた。また、底面には礎石と考えられる礎が配置され、覆土中からは寛永通寶が出土した。

SKP-2051 H-3 ㊦グリッドに位置する。円形を呈し、長径約40cm×推定短径約36cmで、深度は約32.5cmを測る。褐色粘質砂及び暗灰色粘質砂を覆土としていた。

SKP-2052 H-3 ㊦グリッドに位置し、円形を呈する。SKP-2117との切り合い関係が認められ、本遺構のほうが新しい所産であることが把握された。推定復元されたSB-17を構成する柱穴の一つで、推定長径約92cm×短径約90cmで、深度は約71.5 cmを測る。

### c. 土坑類

SK-2002・2013・2015・2016・2022・2023・2024 a・2024 b・2025・2026・2028・2030・2035・2036・2039・2043・2047・2048・2056・2059・2060・2073・2076・2077・2078・2080・2091・2100 a・2100 b・2110・2111・2112・2116・2117の34基が検出された。調査区のほぼ全域に分布するが、調査区中央付近の西側に相当するG-3グリッドや、調査区の南東側に相当するH-4グリッドに集中して認められた。平面規模は、最小約32cm～最大約222cmである。また、深度は最小約3.0cm～最大約116.5cmであった。

SK-2116 H-3 ㊦グリッドに位置し、不整形を呈する。SKP-2053・2054及びSKP-2117との切り合い関係が認められ、これらの遺構の中で、本土坑が最も古い所産であることが把握されている。推定長径約132cm×推定短径約72cmで、深度は約54.5cmを測る。

SK-2117 H-3グリッドに位置し、不整形を呈する。SKP-2052との切り合い関係が認められ、本土坑のほうが古い所産であることが、土層観察等により把握された。推定長径約115cm×推定短径約112 cmを測る。

### d. 溝跡

SD-2006・2007・2045・2055の4基が検出された。調査区のほぼ全域に分布する。また、G-3グリッド～G-4グリッドの東端付近と、調査区の東端付近には、南北方向に走る溝跡が認められ、土地を区分するための区画溝等であった可能性が考えられる。

## 2) 第④面

第④面からはピット類と土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等の遺構が検出された。ピット類31基、土坑類29基、井戸跡2基、溝跡7基、性格不詳遺構1基の総数70基が検出された。また、ピット類の配列等の検討により、建物跡1棟も推定復元された。第③面と同様に、調査原因となった土木工事等の影響が及ばない地点については、調査の対象外とした。そのため、第④面の発掘調査面積は、約97.3㎡となった。遺構の分布状況も、第③面の状況に類似しており、調査区の中央付近から南端付近にかけて、特に集中する傾向が認められた。溝跡はG-4グリッド及びH-4グリッドから検出され、南北方向に走っており、区画溝等と考えられる。本面から検出された遺構は、他地区や他面の遺構との区別を明確にするため、2200番台の遺構番号を使用した。なお、推定復元された建物跡については、A1-I区からの連続番号を付したため、この限りではない。

### a. 建物跡

第④面において、ピット類の配列状況等の検討に基づいて推定復元された建物跡は、SB-18の1基であった。

**SB-18** 調査区の南半に相当するG-3グリッド及びG-4グリッドにかけて位置するが、調査区外にまで延長していると考えられる。そのため、調査区の範囲外にも、本建物跡を構成する柱穴が分布していると想定された。調査区内において、本建物跡を構成する柱穴は、SKP-2237・2231・2229bの3基であった。検出された部分の規模は、桁行約7.8m×梁間約3.0mを測る。主軸はN-9°-Eであり、概ね真北方向を指向して構築されたと考えられる。

#### b. ビット類

SKP-2202・2207・2210・2211・2212・2217・2218・2220・2221・2226・2227c・2227d・2229b・2231・2232・2233・2234・2235・2237・2239・2240・2242・2247・2263・2270・2271・2272・2273・2274・2275・2286bの31基が検出された。調査区のほぼ全域に分布するが、西半に相当するG-3グリッド及び南端に相当するH-4グリッドから、最も集中して検出された。平面規模は最小約26cm～最大約104cmで、深度は最小約4.0cm～最大約75.0cmを測る。

#### c. 土坑類

SK-2201・2203・2205・2208・2214・2224・2227a・2227b・2229a・2230・2236・2238・2241・2243・2246・2248・2249・2259・2260・2261・2262・2268・2269・2276・2277・2281・2285・2286a・2287の29基が検出された。調査区のほぼ全域に分布が認められたが、東半付近に最も集中する様相を呈していた。また、平面規模は最小約34cm～最大約170cmであった。深度は最小約7.0cm～最大約97.0cmを測った。

SK-2246 H-3㊸グリッドに位置し、楕円形を呈する。長径約130cm×現存部分の短径約34cmで、深度は約60.0cmを測る。

SK-2285 G-3㊸グリッドに位置し、楕円形を呈する。SD-2283及びSK-2286aとの切り合い関係が認められ、これらの遺構の中で、本土坑が最も新しい所産であることが把握されている。現存部分の長径は約112cm、現存部分の短径約60cmで、深度は約37.0cmを測る。

SK-2286a G-3㊸グリッドに位置していた。平面形態は、楕円形を呈する。SK-2285及びSKP-2286bとの切り合い関係が認められ、これらの遺構中、本土坑が最も古い所産であることが、土層観察等によって把握されている。現存部分の長径は約105cm、現存部分の短径は約22cmで、深度は約15.5cmを測る。

#### d. 井戸跡

SE-2258・2267の2基が検出された。H-2グリッド及びH-4グリッドに分布し、いずれも調査区の東端に位置していた。

SE-2258 H-4㊸グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、現存部分の長径は約160cm、現存部分の短径は約110cmで、深度は約119.5cmを測る。

SE-2267 H-2㊸・㊹グリッドに位置し、円形を呈すると考えられる。現存部分の長径は約204cm、現存部分の短径は約192cmである。また、深度は約132.0cmを測る。

#### e. 溝跡

SD-2204・2206・2209・2213・2216・2244・2283の7基が検出された。これらはG-4グリッド及びH-4グリッドを主体に分布し、主軸は概ね南北方向を指向していることから、土地の区画溝等であったと考えられる。調査区内における現存規模は、最小のものが約46cm、最大が約310cmであった。また、深度は最小約18.0cm～最大約55.5cmを測った。

#### f. その他

性格不詳の遺構等が1基検出された。SX-2215であり、H-4②グリッドに認められた。SK-2214及びSD-2216との切り合い関係が認められ、本遺構はSK-2214よりも古く、SD-2216よりも新しい所産であることが、土層観察等の結果把握された。平面形態は不整形を呈していた。規模は推定約220cm×約150cmで、深度は約31.0cmであった。

### 3) 第⑤面

第⑤面からはピット類や土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等が検出され、遺構種別の観点からは、第③面や第④面と同様の傾向が窺える。ピット類33基、土坑類34基、井戸跡2基、溝跡6基の総数75基が検出された。第⑤面の発掘調査面積は、約67.0㎡と小規模になった。また、遺構確認面において状況を把握した後、未発掘とした遺構もあった。このような調査の方針は、本面の深度等が既に土木工事等の影響が及ばない深さに達した部分が増加したことに伴い、調査の対象外となった地点も多くなったための措置である。調査範囲が狭くなったこともあり、調査区のほぼ全域から遺構が検出されたが、特に南端付近では密集度が高い傾向が認められた。溝跡は調査区に対して斜行するものも数基みられたが、概ね南北方向を指向していた。なお、本面から検出された遺構は、他地区や他面の遺構との区別を明確にするため、2300番台の遺構番号を使用した。

#### a. ピット類

SKP-2304・2306・2309・2313・2314・2321・2322・2323・2324・2325・2328・2329・2331・2332・2333a・2333b・2334a・2334b・2335・2336・2337b・2338・2339・2342b・2342c・2344・2345・2349・2363b・2366・2369・2370・2380の33基が検出された。調査区のほぼ全域に分布が認められたが、西半に相当するG-3グリッド及び南端に相当するH-4グリッドに最も集中する傾向がみられた。平面規模は最小約16cm～最大約85cmで、発掘を行ったものの深度は最小約5.0cm～最大約48.5cmを測る。

#### b. 土坑類

SK-2303・2305・2308・2311・2312・2316・2318・2319・2320・2327・2330・2337a・2341・2342a・2343・2346・2347・2348・2360・2362・2364・2365・2367・2368・2371・2372・2373・2374・2375・2376・2377・2378・2379・2381の34基が検出された。調査区のほぼ全域にわたって分布が認められたが、特に東半に相当するH-3グリッド及びH-4グリッドに集中する傾向がみられた。また、平面規模は最小約30cm～最大約164cmであった。発掘を行ったものの深度は、最小約10.5cm～最大約57.5cmを測った。

### c. 井戸跡

SE-2353・2363 a の2基が検出された。いずれも調査対象外とした地点にまで遺構範囲が及んでいたため、今回の発掘調査では、その一部が検出されたのみである。

SE-2263 a H-3 ㊸・㊹グリッドに位置する。SKP-2363 b との切り合い関係が認められ、土層観察等により、本井戸跡のほうが新しい所産であることが把握された。調査区内からは遺構の一部が検出されただけであるため、平面形態や規模等の詳細は不明であるが、円形もしくは楕円形の形態を呈していると考えられる。また、検出された部分の規模は、長径約340cm×短径約140cmであった。深度は約67.5cmを測るが、今回発掘を行ったのが遺構壁面に近い部分であったため、本遺構の深度はさらに深いものと推定された。

### d. 溝跡

SD-2301・2302・2310・2315・2317・2326の6基が検出された。いずれもG-4グリッド及びH-4グリッドに分布し、調査区に対して若干斜行するものが認められるものの、概ね南北方向を指向する様相が看取された。調査区内における規模は、最小約96cm～最大約280cmで、深度は最小約9.5cm～最大約49.5cmを測る。

## 4) 第⑥面

第⑥面は本地区における最終面で、ピット類や土坑類を主体とする遺構が認められた。検出された遺構の内訳は、ピット類5基、土坑類10基、溝跡2基、性格不詳遺構1基の総数18基である。第⑤面と同様に、調査対象外とした地点が多くなったため、第⑥面の発掘調査面積は約9.5㎡と極めて小規模になった。なお、本面から検出された遺構は、他地区や他面の遺構との区別を明確にするため、2400番台の遺構番号を使用した。

### a. ピット類

SKP-2402・2405・2408・2411・2416の5基が検出された。H-4グリッドに集中する分布傾向が認められたが、これは実際に第⑥面の調査を行った地点が、実質的には元来の調査区の南端に限定されたことに起因すると考えられる。平面規模は最小約20cm～最大約44cmで、深度は最小約10.0cm～最大約34.0cmであった。

### b. 土坑類

SK-2406・2409 a・2409 b・2410・2412・2413・2414・2417・2418・2419の10基が検出された。G-4グリッド及びH-4グリッドから集中的に検出されたが、第⑥面の調査を行った地点が、実質的には当該グリッドに限定されることに起因すると考えられる。平面規模は最小約30cm～最大約66cmで、深度は最小約9.0cm～最大約31.0cmを測る。

### c. 溝跡

SD-2404・2407の2基が検出された。いずれもH-4グリッドに分布していたが、これは第⑥面の調査地点が、実質的に元来の調査区の南端に限定されたことによるものと思われる。調査区内において検出

された規模は、SD-2404が約70cm、SD-2407が約40cmであった。また、深度はSD-2404が約34.0cm、SD-2407が約3.5cmを測った。

#### d. その他

性格不詳の遺構等が1基検出された。SX-2415がこれに相当し、G-4⑩・⑪グリッドに位置する。SK-2414及びSK-2419との切り合い関係が認められ、本遺構はSK-2414よりも新しく、SK-2419よりも古い所産であることが、土層観察等によって把握された。平面形態は不整形を呈していた。平面規模は現存部分の長径が約184cmで、現存部分の短径が約180cmであった。また、深度は約27.5cmを測った。

## 4 遺物

本調査区では、整理箱約14箱分の遺物が出土している。その内容は、土器・陶磁器類（約10箱）、石製品（約2箱）、金属製品（約1箱）、鍛冶関連遺物（約1箱）などである。ここでは、土器・陶磁器・土製品・漆器の概要を説明するが、それ以外は第四章での概要を参照されたい。

### i) 第①・②面（図版80）

第①・②面では、A1-IIa区のように複数の焼土面が確認された。しかし、その中で図化が可能であったのは、第1焼土面出土の磁器2点にすぎない。1211・1212は、波佐見産のいわゆる深皿である。製作時期は18世紀後半～19世紀前半と思われる。ただし、第1焼土面では陶磁器のほかには瓦礫等も多く含まれていた。したがって、第1焼土面および第①・②面は、A1-IIa区と同様に近代以降の所産と考えられるのである。

### ii) 第③面（図版73・74）

第③面出土土器類は、大半が肥前系の陶磁器で占められる。一部に中世の陶磁器が混じるが、製作時期が隔絶しており、混入と思われる。また、土師器は少なく、破片の大きさも小さい。そのほか、漆器や瓦器が散見される。図化にあたっては、中世のものや、器形をある程度把握できるものを中心とした。

SD-2055 青花1点、磁器8点、陶器4点、瓦器2点、漆器1点を図化した。1001は、端反り口縁や界線からB<sub>1</sub>群に分類される。本遺構出土遺物のうち、中世の所産と思われる陶磁器は1001のみとなった。磁器は肥前系が多いが、1006は漳州窯の製品である可能性がある。肥前磁器は、いずれも17世紀前半に製作されたものが多いようである。陶器も肥前系が多いが、製作時期がわかるのは小皿1010のみとなった。やはり17世紀前半と思われる。1012および1015は瓦器と思われる。製作時期は不明である。1242は、漆器碗の体部下半から底部の破片である。高台は部分的に遺存するが、形態は不明瞭で、製作時期などの特定は困難である。

SD-2007 磁器5点、陶器5点、土師器3点を図化した。磁器はいずれも肥前系である。1020は、17世紀前半の皿であるが、ほかは17世紀後半の所産である。また、1019は波佐見産の五寸皿で、見込みを蛇の目軸刺ぎされる。やはり17世紀後半の製品と思われる。陶器は、1022・1023が瀬戸美濃、1021・1024・1025が肥前である。1022は、天目茶碗である。底部・高台付近を欠損するため、製作時期の特定は難しいが、口縁部の形態や器厚は大窯期のものに類似する。1023は、底部内面を露胎させる内禿皿である。2点とも16世紀後半の製品と思われる。肥前陶器では、1021が17世紀後半～18世紀前半、1024が16世紀末～17世紀初頭、1025が18世紀後半～19世紀中葉と思われる。土師器は、3点ともA類とした手づくね成形の皿

で、いずれも小片である。

SKP-2001 青花1点、陶器6点、土師器1点を図化した。1029は、小片であるが、釉調などから青花の皿と思われる。高台の形態や内面から、B群に分類した。陶器はすべて肥前系である。1030～1033は、鉄絵装飾や胎土目などから、16世紀末～17世紀初頭の皿と思われる。1035・1036は、17世紀後半の大碗・中碗であろうか。1034は、土師器皿B類である。底部の器壁が厚く、本遺跡からは他にこのような形態の土師器皿は出土していない。

SKP-2052 磁器1点、陶器5点を図化した。1041～1045は肥前系の陶磁器と思われる。1044には胎土目痕、1041には砂目痕が遺るので、これらは17世紀前半頃の皿と考えられる。ただし、1046は須佐唐津の播鉢で、17世紀後半の所産と思われる。

SK-2116 貿易陶磁器2点、肥前陶器2点、土師器1点を図化した。1047は李朝期の皿で、16世紀と思われる。見込みおよび高台には砂目痕がある。1048は、青磁碗である。蓮弁文の形態から16世紀と考えられる。肥前陶器は17世紀の所産である。土師器1051は、皿A類の小片である。

SD-2006 陶器3点を図化した。1052・1054は肥前である。1053は釉調から志野茶碗と推測される。いずれも16世紀末～17世紀初頭の製品である。

その他の遺構 落ち込みなどを含む遺構出土の土器・陶磁器としては、白磁1点、珠洲1点、肥前系などの磁器5点、肥前陶器6点、土師器7点を図化した。1055は、漳州窯の皿と思われる。その他の肥前系陶磁器は、1066・1067が17世紀前半、1063(小皿)・1065(大碗)・1070(播鉢)が17世紀後半～18世紀と考えられる。土師器は、皿A類が5点、B類が2点である。

遺構外 図化が可能であったのは、磁器7点、陶器8点、土師器3点である。1071・1072は、同一個体と思われる中鉢である。製作地は肥前系と思われるが、検討の余地がある。1074は、見込みを蛇の目軸剥ぎされた小皿で、波佐見産と考えられるが、時期の特定は避けた。1076は、内外面の文様に崩れがみられるので、ひとまず18世紀後葉～19世紀中葉の皿と考えた。1077は、長方形のいわゆる角皿である。高台内銘の「富貴長春」から17世紀末～18世紀後葉の製品と考えた。1078は、2点の肥前陶器小皿である。釉薬により、互いの高台部分で窯着したのと思われる。この状態のまま搬入されたものなのか、流通の状況の一端を示す資料と思われる。肥前陶器は、ほとんどが17世紀前半の所産と思われる。土師器は、皿A類が2点、B類が1点である。

小 結 第③面の土器・陶磁器類は、肥前系の陶磁器によって大半が占められる。一部の混入された可能性があるものを除けば、おおむね16世紀末～17世紀前半から17世紀後半にかかる時期に属するものが多い。土師器皿は少量の小片が出土している程度である。皿A類と皿B類との比率はおおよそ3:1ほどである。

### iii) 第④面(図版75～78)

第④面では、第③面と比較すると遺物が出土した遺構は少なく、各遺構からの出土量も少ない。陶磁器は同じく肥前系が多いが、遺構外から中世の陶磁器が若干出土している。また、第③面よりも土師器の量が多い。

SE-2267 磁器・陶器・瓦器を各1点図化した。磁器・陶器は肥前である。1091は、小杯であるが、製作時期の特定は難しい。1092は、中皿の小片であるが、17世紀後半の所産であろうか。1093は、瓦器で、口縁部のみが遺存する。円形浅鉢ならば、16世紀の所産であろうか。

SK-2214 陶器1点、土師器4点を図化した。1098は、播鉢の底部片である。播り目は体部とは連続

せず、底部では×字に交差する。製作時期も特定できないが、製作地は越前であろうか。土師器はすべて皿A類である。推測される口径からは、3法量(1099・1100、1101、1102)がうかがえる。

SK-2208 白磁1点、陶器1点、土師器4点を図化した。1103は、白磁皿D群であるが、1104は、肥前陶器であるため、製作時期が異なる。土師器は、1106～1108が皿A類、1105が皿B類である。1105は底部の破片であるが、外面に横位のケズリの痕跡がみられる。周辺遺構の出土遺物から推測すると、本遺構の所属時期に近いのは1104である可能性が高い。

SX-2215 土師器2点、越前1点を図化した。1111は、越前の播鉢であるが、遺存するのが体部下半のみであるので、製作時期などは特定できない。

その他の遺構 青磁1点、磁器2点、陶器7点、土師器8点を図化した。1118は、青磁碗で、外面の蓮弁文からB-II類とした。14世紀後葉～15世紀前葉である。磁器は2点ともSD-2204出土で、肥前系である。1094が17世紀後半、1095が17世紀前半と思われる。陶器はいずれも肥前系であり、1096・1112・1114・1119は16世紀末～17世紀前半の範疇にあり、播鉢1120は17世紀中葉と目される。土師器は1117以外すべて皿A類である。

遺構外 肥前磁器9点、肥前などの近世陶器13点、白磁2点、瀬戸美濃1点、越前1点、珠洲1点、土師器8点、土製品2点(同一個体)を図化した。

肥前磁器は、1130・1134～1136が17世紀後半、1133が17世紀前半と思われるほか、蓋1131・1132は18～19世紀の所産と思われる。近世の陶器は、1149が産地不明である以外は、すべて肥前産と思われる。小皿1137～1140は、16世紀末～17世紀前葉であるが、小皿1141は17世紀後半と思われる。大鉢1143・片口1148は、刷毛目装飾であることから17世紀末～18世紀後葉以降である。碗類はいずれも全体の器形がわからないため、製作時期の特定は避けた。1142は、貫入のみられる釉薬から志野茶碗である可能性がある。1152は珠洲の壺、1150は越前の播鉢と思われる。土師器は、図化した8点中5点が皿A類、3点が皿B類である。土製品1089・1090は、同一個体と考えられ、七輪の口縁部・体部と思われる。1089の外面には雷文および龍の文様が印刻されている。1090の透かしの脇には銘があり、「博多/利三郎」と読める。博多からの商品流入がうかがえる。

小 結 第④面の遺構から出土した陶磁器をみると、SK-2208やSX-2215では白磁D群や越前など、16世紀に属するものが多くみられる。その一方で、SD-2204やSE-2258では17世紀前半の肥前陶磁器などが中心である。他の遺構から出土した陶磁器も、16世紀～17世紀前半が主体である。遺構外から18世紀以降の製品も含まれていることから注意は必要であるが、第④面の主体となる時期はおおむね16世紀～17世紀前半頃と考えておきたい。土師器は、第③面と比較すれば、出土量が多くなり、全体に占める割合もやや大きい。また、遺構からも定量出土している。皿A類とB類の割合は約4:1であり、やはりA類の方が主体的である。

#### iv) 第⑤面(図版78・79)

調査面積が少ないこともあり、第⑤面において遺物がまとまって出土している遺構は、SE-2363 a・SK-2303・SD-2302にほぼ限られる。

SE-2363 a 青磁1点、肥前磁器1点、土師器2点を図化した。1161は、青磁碗である。蓮弁文の形態はB-IV類であり、15世紀後葉～16世紀と思われる。土師器は2点とも皿A類である。肥前磁器1162は、内面が無釉であるので瓶と思われる。混入であろうか。

SK-2303 土師器3点を図化した。皿A類2点、皿B類1点である。

SD-2302 珠洲の播鉢2点を図化した。口縁形態からV期と思われるので、14世紀後葉～15世紀前半であろう。

その他の遺構 青磁・珠洲・土師器を各1点図化した。青磁碗1170は、蓮弁文の形態からB-IV'類に分類されるので、16世紀の所産と思われる。1172は、珠洲の播鉢で、やはりV期（14世紀後葉～15世紀前半）と思われる。土師器は皿A類である。

遺構外 青磁2点、白磁2点、瀬戸美濃2点、珠洲2点、越前2点、肥前磁器3点、肥前陶器3点、土師器6点、その他3点を図化した。

1186は、青磁盤である。内面には縦位の丸彫りが施される。1189・1190は白磁皿D群である。ただし、高台に挟りはない。また、1190の高台内には墨書がある。1187は、瀬戸美濃の丸碗と思われる。体部外面には鈎の手状の蓮弁文が施されており、大窯1期（15世紀後葉～16世紀前葉）の所産と思われる。1193は、瀬戸美濃の天目茶碗であるが、大窯期の所産であろうか。1198・1199は、珠洲の播鉢である。口縁形態からVI期（15世紀後葉）の所産と思われる。1200・1202は、越前の播鉢である。1200の口縁形態から、15世紀後半であろうか。肥前陶器の小皿をみると、1195は17世紀前半、1196は16世紀末～17世紀前葉である。肥前磁器1191～1193は、製作時期の特定が難しいが、17世紀後半以降と思われ、他の陶磁器とは時期差がみられる。土師器は、皿A類4点、皿B類2点である。

小 結 少量であるが、遺構から出土した陶磁器をみると、主体は中世の製品であり、その所属時期は15～16世紀の範疇で捉えられる。遺構外出土の陶磁器をみても、やはりほとんどが中世の製品であり、遺構出土の陶磁器とはさほどの時期差がみられない。ただし、何らかの混入とも考えられるが、若干の肥前系陶磁器も出土している。これらの製作時期は、I期やII期など、16世紀末～17世紀前半が中心のようである。したがって、第⑤面の下限については単に16世紀ではなく、17世紀前半頃にもやや下がる可能性を考慮する必要がある。

#### V) その他 (図版80)

所属する面が不明確となった土器・陶磁器類を一括する。青花1点、珠洲1点、その他の陶器3点、肥前磁器2点、土師器5点、瓦器1点を図化した。1173は、青花の皿で、B<sub>1</sub>群に分類される。15世紀後半～16世紀前半である。1178は、珠洲の播鉢で、VI期（15世紀後半）と思われる。1174は、肥前磁器の小皿で、17世紀前半と思われる。1175・1176は、肥前磁器の碗である。製作時期はおそらく17世紀後半であろうか。1177は、産地不明の陶器である。内面は無軸であるから、瓶類であろうか。製作時期は不明である。1178は、珠洲の播鉢で、VI期（15世紀後半）の所産と思われる。1179は、播鉢であるが、製作地は越中瀬戸であろうか。1181～1184は土師器皿A類、1185は土師器皿B類である。1180は、瓦器で風炉IV類に分類される。底部の一部のみであるが、2条の突線とその間の文様帯がみられる。脚部は遺存していないが、接続部分の痕跡がある。焼成は良好である。製作地の特定は難しいが、14世紀末～16世紀前半の所産と思われる。

1213～1220は、本調査に先行する試掘調査において出土した遺物である。試掘調査でのH地点がA1-Ⅱb区内にあることから、ここで触れておきたい。1219は、珠洲の播鉢で、VI期（15世紀後半）と思われるが、これ以外は肥前の陶磁器である。1213・1214は、ピット状遺構から出土しており、1213は17世紀後半、1214は17世紀前葉～中葉であろうか。1216は16世紀末～17世紀前葉、1217・1218は17世紀末～18世紀後葉である。

## 5 調査区のまとめ

AⅠ-Ⅱb区では、第①面から第⑥面までの遺構確認面が把握された。第①面及び第②面については、近現代の所産であったため、重機による掘削と合わせて、遺物の取り上げ作業のみを行った。したがって、実質的には第③面から第⑥面までの発掘調査を実施したこととなる。ここにあらためて各面における成果の概要を整理し、調査区のまとめとしたい。

第①・②面 複数の境土面が確認され、明治期以降の近現代を主体時期とする。また、18世紀後半から19世紀前葉の所産と思われる遺物も数点検出された。

第③面 概ね16世紀末から17世紀に比定可能で、ビット類と土坑類を主体に、溝跡等が検出された。ビット類40基、土坑類34基、溝跡4基の総数78基である。また、ビット類の配列により、建物跡1棟も推定復元されている。調査区のほぼ全域に遺構の分布が認められたが、中央付近から南端付近にかけて、特に集中する傾向がみられた。南北方向に走る溝跡も確認され、当該地区の土地区画をしていたと考えられる。

遺物は大半が肥前系の陶磁器で占められ、混入と思われる中世の陶磁器が一部に認められた。土師器は少なく、他に漆器や瓦器等が散見された。

第④面 16世紀から17世紀前半の所産と考えられる。ビット類と土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等の遺構が検出された。ビット類31基、土坑類29基、井戸跡2基、溝跡7基、性格不詳遺構1基の総数70基である。また、ビット類の配列等の検討により、1棟の建物跡が推定復元された。遺構の分布状況は、第③面に類似しており、調査区の中央付近から南端付近にかけて、特に集中している傾向が認められた。南北方向に走る溝跡も、第③面と同様に認められ、区画溝等であったと考えられる。

出土した陶磁器は、第③面と同じく肥前系が多いが、遺構外から中世の陶磁器も若干出土している。また、土師器の出土量も多くなっている。第③面との重複期間が大きいが、相対的には若干古い時期の遺物が多い傾向がみられた。

第⑤面 15世紀から17世紀前半に比定できる。ビット類や土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等が検出された。遺構種別ごとにみると、ビット類33基、土坑類34基、井戸跡2基、溝跡6基の総数75基が検出されている。本面では土木工事等の影響が及ばない深さに達した部分が増加したため、遺構確認面において状況を把握した後、未発掘のまま現状保存した遺構もあった。調査区のほぼ全域から遺構が検出されたが、特に南端付近では密集度が高い傾向が認められた。また、溝跡は概ね南北方向を指向していた。

遺物は中世の陶磁器を主体に、土師器や珠洲等がみられる。また、肥前系統磁器も若干出土している。中世の製品が主体となる傾向は、第③面や第④面とは明らかに異なる傾向であり、本面以下が中世に帰属する可能性が高い。

第⑥面 本地区における最終面であり、検出された遺構は、ビット類や土坑類を主体とし、他に溝跡等が認められた。ビット類5基、土坑類10基、溝跡2基、性格不詳遺構1基の総数18基である。時期判断の可能な遺物等が皆無の状況であったが、第⑤面の様相から推定すると、中世の範疇である可能性が高いであろう。第⑤面よりも、さらに土木工事等の影響が及ばない部分が多くなったため、発掘調査面積は約9.5㎡と極めて小規模になった。他面に比べて、遺構や遺物が極端に少ないことは、調査面積に起因すると考えられる。

## VII A1-Ⅲ区の調査

### 1 調査の経過

A1-Ⅲ区の発掘調査現場作業は、平成11年8月5日から12月8日まで、延べ76.5日間で実施した。

調査初日と2日目には、調査員3名とバック・ホウ1台によって、表土の掘削作業を行った。先行して実施していたA1-I区における状況を参考にしながら作業を進め、調査第3日目、週明けの8月9日には第①面までの掘削が終了した。この日からは発掘作業員による作業も開始し、順次ジョレンがけ等を行って、遺構確認をしていった。第①面は比較的時期が新しいことから、不慣れな様相に調査員、作業員ともに戸惑いながらの調査となった。極めて現代に近いと思われる落ち込みがかなり多く認められ、どのような遺構としての認識していくのか、という根本的な問題が壁となり、調査員の間で打ち合わせが絶えることはなかった。また、遺構確認の際に、土層色調の判別が困難であったり、数ヶ月前まで建っていた建物の基礎やガス・上下水道設備等、あるいは建物の解体時に埋められた夥しい瓦礫等が大きな障害となった。そのため、盆休みを挟んだとはいえ、第①面の発掘が終了したのは、調査開始から1ヶ月弱が経った9月1日になってからであった。その日には全景写真の撮影を行い、遺構平面図の作成に着手した。

9月3日には第①面の平面図作成作業等が終了し、引き続き第②面までの掘削を開始した。表土掘削はバック・ホウによって行ったが、第①面以下の土層中には遺物も多く包含されているため、今後の掘削は人力によって行うこととなった。そのため、第①面の調査時にも行く手を阻んだ夥しい瓦礫等の山に、今回も苦しめられることとなり、ジョレンや唐鍬の刃は次々と欠け、柄は折れ、移植ゴテは曲がり、調査員や作業員の手のひらは、次第に潰れたマメだらけになっていった。折りしも残暑の季節と重なり、疲労困憊した作業員の間には不満も募り始め、ここに至って現場運営上の大きな山場を迎えることとなった。しかし、9月24日には何とか第②面までの掘削を終了し、遺構の発掘作業へと移った。第①面の発掘を経験したためか、第②面は想定よりも早く進捗し、10月8日には最終的な平面図の作成まで終了した。

同日中には第③面までの掘削に着手したが、次第に瓦礫等も少なくなり、前回の掘削を経験した後ということもあって、10月18日には掘削が終了。第③面の発掘作業に着手した。第③面では直径が4m近くにも及ぶ大形の井戸跡(S E-1217)や、底面には鉄製刀子が埋設し、その上に椀形滓を含む鉄滓を敷き詰めて炉床を形成した鍛冶炉(S X-1339)等が検出され、より慎重な発掘方法で対応する必要が生じた。また、この頃から雨天の日が多くなり、調査区の壁面が崩れる等の被害も出て、復旧作業を行いながら調査を進めていくこととなった。悪天候の日には発掘作業を中止し、遺構平面図の作成や測量等に専念しながら徐々に進捗を図り、11月2日には第③面の発掘が終了した。この日は朝から雨天であったが、降雨の合間を縫って全景写真を撮影し、第④面までの掘削作業に着手した。

第④面への掘削を開始した頃からは、ますます雨天の日が多くなり、晩秋から初冬へと移り変わる季節の不安定な気候を実感しながらの作業となった。いよいよ好天よりも雨天のほうが多くなり、調査を進めるためには、雨の中でも作業を強行するしかなかった。11月8日には第④面までの掘削を終了したが、連日の雨によって確認面の状況が悪く、遺構の確認作業がほとんどできない状況が続いた。しかし、11月10日には晴天に恵まれ、遺構確認を無事終了。翌11日からは遺構発掘作業に着手した。しかし、一時的に天

候が回復する日はあったものの、全般的には雨天続きであったため、特に記録写真の撮影には多大な影響が生じ始めていた。調査区全体をある程度清掃して撮影が可能になる間、好天が維持される見込みが低く、さらに完掘した遺構の壁面が雨水により崩落する危険性も極めて高いと考えられたのである。そのため、調査区全体を6区域に分割して発掘を行い、完掘した区域ごとに随時写真撮影をする等の対応を余儀なくされた。11月19日には第④面の発掘が終了し、即時第⑤面への掘削作業に着手した。

第⑤面の調査は、調査原因となった土木工事等の影響が及ばない部分については、発掘を行わない方針となったため、面積的にはかなり縮小され、11月22日には第⑤面の検出作業を終了することができた。しかし、この頃にはみぞれが降る季節となっており、降水量も増して、連日のように調査区が水没していった。11月29日には、調査区南側の壁面が崩落。そこに接する歩道の制溝も陥没した。作業を一時的に中止し、この応急処置にあたったが、いつまた崩落するかわからない状況が続いた。12月6日からは部分的に砂丘面への掘削を行ったが、遺構の分布等は認められず、この面の調査は不要と判断されるに至った。そして、12月8日、ついに第⑤面の発掘調査を終了し、A1-Ⅲ区の発掘調査現場作業が完了した。

## 2 層序と時期区分

### 1) 層 序

A1-Ⅲ区における基本層序は、調査区の南北方向に設定したAベルト西壁と、東西方向に設定したBベルト北壁、Cベルト北壁及びDベルト北壁の4ヶ所で観察を行った。しかし、実際の堆積状況には、地点ごとで若干の差異が認められ、観察を行ったセクション・ベルトのすべてで層序の統一的把握をすることはできなかった。したがって、セクション・ベルトごとで、層序の名称が異なる結果が生じ、本地区における複雑な堆積状況が如実に現れる結果となった。セクション・ベルトの設定は、第①面までの掘削終了後に行ったため、現表土等の堆積は基本層序に反映されていない。また、調査区の東西方向に設定したB～Dベルトは、北側から南へ向かってB→C→Dとした。なお、基本層序の名称は、ローマ数字大文字を使用し、算用数字によって呼称した遺構覆土と区別したが、現在の覆土と考えられる層序は第0層とした。層序の細分にはアルファベット小文字を用い、ローマ数字の後に付して、「第Ⅱb層」等と表記した。

Aベルト・Bベルト 第0層は現代の覆土と考えられ、第0a層～第0d層に細分された。第Ⅰ層は第Ⅰa層～第Ⅰd層に細分された。第Ⅰa層は黒褐色粘質砂層で、第①面の遺構確認面に相当する。炭化物を多量、焼土を少量含んでいた。第Ⅰb層及び第Ⅰc層は暗褐色粘質砂層で、炭化物や焼土、地山土等を含む。第Ⅰd層は黄褐色粘質砂層である。砂丘砂を主体とする混合土で、炭化物及び焼土を少量含む。

第Ⅱ層は第Ⅱa層～第Ⅱd層に細分され、第Ⅱa層～第Ⅱc層は暗褐色粘質砂層である。それぞれ炭化物や焼土等を含むが、包含量の差異によって区分された。また、第Ⅱd層は褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量、地山土を少量含む。

第Ⅲ層は第Ⅲa層～第Ⅲf層に細分された。暗褐色粘質砂層もしくは黒褐色粘質砂層と褐色粘質砂層が、交互に堆積する整地層である。第Ⅲa層は黒褐色粘質砂層で、第②面の遺構確認面に相当する。炭化物を多量、焼土及び地山土を少量含む。第Ⅲb層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量含む。第Ⅲa層の堆積が認められない地点では、本層を第②面の遺構確認面とした。第Ⅲc層は褐色粘質砂層で、炭化物を微量、小砂利を少量含む。第Ⅲd層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を多量、焼土を微量、小砂利を少量含む。第Ⅲe層は褐色粘質砂層で、炭化物及び小砂利を少量、焼土を微量含む。第Ⅲf層は黒褐色粘質砂層

である。炭化物を多量、小砂利を少量、焼土を微量含んでいた。

第Ⅳ層は暗褐色粘質砂層である。調査区の南端のみ認められた整地層で、細分はされなかった。炭化物及び焼土を多量に含む。

第Ⅴ層は第Ⅴa層～第Ⅴj層に細分された。第Ⅲ層と同様に、暗褐色粘質砂層もしくは黒褐色粘質砂層と褐色粘質砂層の交互堆積が顕著な整地層である。第Ⅴa層は暗褐色粘質砂層で、第③面の遺構確認面に相当する。炭化物及び地山土を少量、焼土を微量に含む。第Ⅴb層は褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量に含む。第Ⅴc層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び地山土を少量、焼土を微量に含む。第Ⅴd層は褐色粘質砂層で、炭化物を少量、焼土を微量に含む。第Ⅴe層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を微量に含む。第Ⅴf層は褐色粘質砂層で、炭化物を微量に含む。第Ⅴg層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び小砂利を微量に含む。第Ⅴh層は褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量、地山土を少量含む。第Ⅴi層は黒褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を少量含む。第Ⅴj層は褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量、地山土を少量含んでいた。

第Ⅵ層は第Ⅵa層～第Ⅵb層に区分された。第Ⅵa層は暗灰色粘質砂層で、第④面の遺構確認面に相当する。炭化物を少量、焼土を微量に含む。第Ⅵb層は灰黄色粘質砂層で、炭化物を少量、地山土を多量に含んでいた。

第Ⅶ層は第Ⅶa層～第Ⅶd層に細分された。第Ⅶa層は褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を多量に含んでいた。第Ⅶb層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を多量に含む。第Ⅶc層はにぶい黄色粘質砂層で、第⑤面の遺構確認面に相当する。炭化物及び焼土を少量、地山土を多量に含む。第Ⅶd層は灰黄色粘質砂層で、地山土を多量に含む。第Ⅶc層の堆積が認められない地点では、本層を第⑤面の遺構確認面とした。

第Ⅷ層は黄褐色砂層で、砂丘砂層に相当する。しかし、本層上面においては遺構や遺物等は皆無の状況であった。そのため、砂丘の上に整地等を行った後、木遺跡が営まれ、「町」が形成されていったと想定することが可能である。

Cベルト 第0層は現代の攪乱と考えられる層で、第0a層～第0c層に細分された。第1層は第①面の遺構確認面に相当し、第1a層～第1c層に細分された。第1a層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び地山土を多量、砂丘砂を少量含む。第1b層は黒褐色粘質砂層で、炭化物を多量、地山土及び砂丘砂を少量含む。第1c層は暗褐色粘質砂層で、炭化物、地山土及び砂丘砂を少量含む。

第Ⅱ層は第Ⅱa層～第Ⅱf層に細分された。第Ⅱa層及び第Ⅱb層は暗褐色粘質砂層で、それぞれ炭化物や焼土等を含むが、包含量の差異によって区分された。第Ⅱc層は黒褐色粘質砂層である。第②面の遺構確認面に相当し、炭化物を多量、地山土及び砂丘砂を少量含んでいた。第Ⅱd層及び第Ⅱe層も同様に黒褐色粘質砂層であるが、炭化物や焼土等の包含量の多寡によって区別された。第Ⅱf層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を微量、地山土及び砂丘砂を少量含んでいた。

第Ⅲ層は第Ⅲa層～第Ⅲd層に細分された。第Ⅲa層は黒褐色粘質砂層で、第③面の遺構確認面に相当する。炭化物を多量、地山土を微量に含む。第Ⅲb層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を少量、地山土を多量に含む。第Ⅲc層は褐色粘質砂層で、砂丘砂を主体に暗褐色粘質砂が混ざった混合土である。第Ⅲd層は暗灰色粘質砂層で、炭化物及び地山土を多量に含む。また、腐植有機物が多く、粘性がやや強かった。

第Ⅳ層は局地的にのみ認められ、暗色系の層と明色系の層が交互堆積した整地層である。第Ⅳa層～第Ⅳe層に細分された。第Ⅳa層は黄褐色粘質砂層で、炭化物を微量、地山土を多量に含む。第Ⅳb層は暗褐色粘質砂層で、地山土を少量含む。第Ⅳc層は黄褐色粘質砂層で、暗褐色粘質砂が少量混合する。第Ⅳ

d層は黒褐色粘質砂層で、炭化物、地山土及び砂丘砂を少量含む。第IV e層は灰黄色粘質砂層で、暗褐色粘質砂が少量混合していた。

第V層は第IV層よりもやや広範囲に認められる整地層で、暗色系と明色系の交互堆積が顕著である。第V a層～第V d層に細分された。第V a層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を微量、地山土を多量に含む。第V b層はにぶい黄色粘質砂層で、暗褐色粘質砂を主体に砂丘砂が少量混合したものである。第V c層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を多量、地山土を少量含む。第V d層は褐色粘質砂層で、炭化物を微量に含む。

第VI層は第VI a層～第VI c層に細分された。第VI a層は黒色粘質砂層である。暗褐色粘質砂に極めて多量の炭化物が含まれた層で、炭化物層とも呼べる程の様相であった。第VI b層は暗灰色粘質砂層で、炭化物及び地山土を少量含む。また、腐植有機物を多く含み、粘性がやや強い。第VI c層は暗褐色粘質砂層で、炭化物及び地山土を少量含んでいた。

第VII層は第④面の遺構確認面に相当する。第VII a層～第VII b層に区分された。第VII a層は暗褐色粘質砂層で、暗褐色粘質砂を主体に砂丘砂が多量に混合したものである。第VII b層は褐色粘質砂層で、砂丘砂を主体に暗褐色粘質砂が少量混合したものである。

Dベルト 第0層は現代の擾乱と考えられる層で、第0 a層～第0 g層に細分された。第I層は第I a層～第I d層に細分された。第I a層は暗褐色粘質砂層で、第①面の遺構確認面に相当する。炭化物及び地山土を多量、焼土を少量含む。第I b層は暗褐色粘質砂層で、第I a層の堆積が認められない地点では、本層を第①面の遺構確認面とした。炭化物、焼土及び地山土を少量含む。第I c層及び第I d層も暗褐色粘質砂層で、炭化物や焼土等の包含量により区分された。

第II層は第II a層～第II c層に細分された。第II a層は黒褐色粘質砂層で、第②面の遺構確認面に相当する。炭化物及び焼土を多量、地山土を少量含む。第II b層及び第II c層は暗褐色粘質砂層で、炭化物や焼土等の包含物の多寡によって区分された。

第III層は第III a層～第III g層に細分された。第III a層は黄褐色粘質砂層で、炭化物を微量、地山土を多量に含む。第III b層～第III e層は暗褐色粘質砂層で、炭化物等の包含量の差異によって区分された。第III f層は黒褐色粘質砂層で、炭化物を少量含む。第III g層は暗褐色粘質砂層で、腐植有機物を多量に含み、粘性がやや強かった。

第IV層は第IV a層～第IV d層に細分された。第IV a層は暗褐色粘質砂層で、第③面の遺構確認面に相当する。炭化物及び地山土を少量含む。第IV b層は暗褐色粘質砂層で、炭化物を少量含む。第IV c層も同様に暗褐色粘質砂層で、炭化物を少量、焼土及び地山土を微量に含む。第IV d層は黒褐色粘質砂層で、炭化物及び焼土を微量に含んでいた。

第V層は暗褐色粘質砂層で、包含物の差異等により第V a層～第V d層に細分された。第V a層及び第V b層は、第④面の遺構確認面に相当する。第V a層は炭化物及び地山土を少量含み、第V b層は炭化物を多量、地山土を少量含んでいた。また、第V c層は炭化物を微量、第V d層は炭化物を微量、地山土を少量含んでいた。

第VI層は第VI a層～第VI b層に細分された。第VI a層は暗灰色粘質砂層で、第⑤面の遺構確認面に相当する。砂丘砂を主体に、暗灰色土が混合したものである。炭化物を少量、地山土を微量に含む。第VI b層は褐色粘質砂層で、砂丘砂に近似した漸移層的な層である。炭化物を少量含んでいた。

第VII層は明褐色砂層で、砂丘砂層に相当する。しかし、遺構や遺物等は検出されず、本層においては遺跡の存在を確認することはできなかった。Aベルト及びBベルトにおける第VII層の様相と同様であり、砂

丘上に整地し、遺跡が営まれていったことを示唆していよう。

## 2) 時期区分

本地区における基本層序は、観察を行ったセクション・ベルトによって、若干の差異が認められたため、それぞれに独自の層位番号を付した。そのため、発掘調査を実施した第①面～第⑤面までの鏡層を対比し、ある程度の対応関係を把握するとともに、それぞれの面あるいは層位の時期比定を行うことが必要である。

第①面の遺構確認面として把握された層は、Aベルト及びBベルトでは第Ⅰa層、Cベルトでは第Ⅰa層～第Ⅰc層、Dベルトでは第Ⅰa～b層であった。また、それぞれの色調は、黒褐色、暗褐色～黒褐色、暗褐色を呈しており、比較的近似していた。遺物の出土状況等から、第①面については概ね19世紀以降の時期に比定することが可能である。

第②面の遺構確認面と判断された層は、Aベルト及びBベルトでは第Ⅲa層～第Ⅲb層で、暗褐色～黒褐色を呈する粘質砂層。Cベルトでは第Ⅱc層で、黒褐色粘質砂層。Dベルトでは第Ⅱa層で、黒褐色粘質砂層であった。比較的近似した色調を呈しており、これらの層を対比することが可能であろう。第②面については、出土遺物などによって、概ね17世紀後半～18世紀の時期に相当すると考えられる。

第③面の遺構確認面は、Aベルト及びBベルトでは、第Ⅴa層の暗褐色粘質砂層。Cベルトでは、第Ⅲa層の黒褐色粘質砂層。Dベルトでは、第Ⅳa層の暗褐色粘質砂層であった。第①面や第②面と同様に、暗褐色や黒褐色を呈し、互いに近似した様相となっている。第③面については、概ね17世紀を主体とし、一部に16世紀を含む時期に比定することができる。

第④面の遺構確認面として把握された層は、Aベルト及びBベルトでは、第Ⅵa層の暗灰色粘質砂層である。また、Cベルトでは第Ⅶa層の暗褐色粘質砂層及び第Ⅶb層の褐色粘質砂層。Dベルトでは第Ⅴa層の暗褐色粘質砂層であった。このような状況から、第④面に至って、各地点ごとの層に差異が著しくなったことが認められるのである。本地区では砂丘上に整地を行い、遺跡が営まれていたことが、層序の把握から確認されている。第④面において各地点ごとの差異が顕著であるのは、おそらく地点ごとに随時整地が行われたことに起因すると考えられる。ほぼ全域がほぼ同時に整地されるようになったのは、第③面以降の時期であり、第④面以前の時期には、必要な場所にその都度整地がなされていた可能性があると思われる。第④面については、若干の時期幅があるものの、概ね15世紀～17世紀に比定可能であり、本地区が「町」として大きく発展する以前の様相が示唆されているのである。

第⑤面の遺構確認面として把握された層は、Aベルト及びBベルトでは、第Ⅶc層～第Ⅶd層で、にぶい黄色粘質砂層～灰黄色粘質砂層である。Cベルトにおいては、第⑤面の遺構確認面に相当する層は確認されなかった。Dベルトでは、第Ⅵa層の暗灰色粘質砂層が相当する。第④面と同様に、各地点ごとにおける層序の差異が顕著である。第⑤面については、概ね15世紀に比定することが可能であり、このような層序のあり方は、遺跡の形成過程を考察する手掛りとなる。

以上のように、第①面～第⑤面までの各発掘面には、上面から下面に向かって徐々に時期が遡るという傾向が、ある程度認められる。しかし、相当の時期で重複することも事実であり、調査面や層位区分等によっては明確に分離し得ない。そのような意味では、曖昧な調査結果になったともいえるが、このような様相が生じた事由は、本地区が単純に時期区分できない程、極めて漸移的かつ連続的に変遷したためと考えられるのである。

### 3 遺 構

A1-Ⅲ区からは、第①面から第⑤面までの遺構確認面が検出され、発掘調査を実施した。各面ともにピット類や土坑類を主体とするが、特に第①面においては、炉跡も目立つ存在となっていた。また、性格不明遺構も多く認められ、全体的には判然としない状況であった。

#### 1) 第①面

第①面からは土坑類を中心に、ピット類や炉跡、溝跡等の遺構が検出された。発掘調査面積は約572.0㎡で、ピット類4基、土坑類15基、炉跡4基、廃棄土坑3基、溝跡5基、性格不詳遺構等3基の総数34基が検出された。これらの分布は、C-3グリッド南半からC-4グリッドにかけて集中しており、遺構分布域の北端と東端は溝によって区画がなされていた。また、炉跡も検出されたが、その分布は溝による区画内の北半に偏っていた。このような状況から、第①面の遺構は、概して南側を通る道路を指向し、溝による区画内に構築されたと考えられるのである。溝による区画内の北半には、炉跡が集中しているが、これらは南側に道路に面した町屋の裏に相当すると想定できよう。なお、他地区や他面との区別を明確にするため、本面から検出された遺構には1000番台の番号を使用した。

##### a. ピット類

SKP-1002・1021・1025・1042の4基が検出され、調査区の南西に相当するC-4グリッドに集中して認められた。平面規模はそれぞれ約26cm、約25cm、約44cm、約44cmであり、44cm程度が2基、25～26cm程度が2基と二区分される。一方、深度はそれぞれ約15.0cm、約42.5cm、約33.5cm、約13.5cmとなり、平面規模の大きさに比例しない傾向がみられる。

##### b. 土坑類

概ね西半に相当するC-3～4グリッドに分布し、SX-1008・1009・1011・1015・1016・1017・1018・1019・1034・1044・1053・1054・1061・1064・1066の15基が検出された。平面規模は約36～385cmであり、深度も約9.5～67.0cmと規則性に欠けていた。

##### c. 炉 跡

4基の炉跡が検出され、概ね西半に相当するC-3～4グリッドに分布していた。

SX-1030 C-4⑩グリッドに位置し、方形を呈する鍛冶炉跡である。長径約97cm、短径約84cmで、深度は約20.0cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し、全体に焼土や炭化物等を少量含んでいた。

SX-1037 C-4⑩グリッドに位置する。形態は方形を呈し、長径約127cm、短径は約126cmである。また、深度は約46.5cmを測る。壁面には粘土を巡らせて外枠を形成し、その内部には焼土や炭化物等を多量に含む砂が堆積していた。

SX-1043a C-3③グリッドに位置し、SX-1043bとの切り合い関係が認められる。SX-1043bよりも古い所産であるが、それ程の時期差は感じられず、ほぼ連続した時期に営まれていたと思われる。形態は楕円形を呈し、長径約125cm、現存部分の短径約90cm、深度は約44.0cmを測る。覆土はレンズ状

の堆積状況を呈し、焼土や炭化物等を多量に含んでいた。

SX-1043b C-3@グリッドに位置し、SX-1043bとの切り合い関係がみられる。SX-1043aよりも新しいが、ほぼ連続した時期に営まれたと思われる。楕円形を呈し、長径約154cm、短径約131cm、深度は約33.5cmを測る。

#### d. 廃棄土坑

SX-1026・1032・1040の3基が検出された。調査区の南西に相当するC-4グリッドに集中して認められた。平面規模はそれぞれ約253×147cm、約370×110cm、約308×110cmで、比較的近似していた。一方、深度はそれぞれ約152.0cm、約51.0cm、約35.0cmで、差異が著しい。建築廃材が廃棄されたものもあり、これらは概ね近現代の所産と思われる。

#### e. 溝跡

SD-1001・1003・1007・1033・1057の5基が検出された。遺構分布域の北端と東端を区画するように分布しており、区画溝としての性格が看取される。また、調査区南端にも、北と東を走る溝がL字形に配置されており、比較的小規模な区画がなされていたと考えられる。

#### vi. その他

性格不詳の遺構等が3基検出された。SX-1020・1038・1039であり、調査区の南西に相当するC-4グリッドに認められた。それぞれ長方形、円形、不整形を呈し、規模や深度等も多彩である。比較的新しい時期の所産と思われる、概ね近現代に相当する可能性が高い。

### 2) 第②面

第②面からはビット類及び土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等が検出された。発掘調査面積は約307.9㎡で、ビット類23基、土坑類30基、井戸跡2基、溝跡3基、性格不詳遺構等5基の総数63基の遺構が検出された。ほぼ全面に遺構が認められたが、調査区の東西端で分布がやや稀薄な状況であった。D-2～4グリッドの西端には、溝跡が南北に縦走しており、その西側のC-3～4グリッドを走る溝跡とともに、本地点を区画していたと考えられる。特に東側の溝跡は、第①面において遺構分布域の東端を区画していた溝と、概ね同じ位置であり、当該地点に構築された町屋の区割りには、大きな差異が生じていない。また、土坑類は調査区南端と北半に集中し、中央付近では稀薄であった。井戸跡は調査区中央付近の西寄りに顕著に認められ、ビット類は井戸跡分布域の南側隣接地点に密集しているという傾向が看取された。なお、他地区や他面との区別を明確にするため、本面から検出された遺構には1100番台の番号を使用した。

#### a. ビット類

SKP-1120・1129b・1133・1134・1135・1145・1146・1153・1159・1160・1161・1162・1164・1165・1166・1167・1168・1169・1170・1171・1172・1173・1174の23基が検出された。調査区の西半に相当するC-3～4グリッドに集中して認められたが、特にC-3グリッドへの密集度が高い。平面規模の長径は、最小約13cm～最大約43cmである。また、深度も最小約7.5cm～最大約91.0cmで、それぞれの差異が著しく認められる。

#### b. 土坑類

SK-1102・1106・1108・1109・1112・1114・1118・1126・1127・1128・1129a・1132・1136・1137・1138・1139・1140・1141・1142・1143・1147・1152・1175・1178・1179・1180・1186・1187・1189・1192の30基が検出された。調査区のほぼ全域に分布が認められた。平面規模の長径は、最小約42cm～最大約400cmで、深度は最小約9.0cm～最大約113.0cmである。そのため、それぞれの差異が著しく認められ、性格についても多様であったと考えられる。

SK-1138 C-4⑧グリッドに位置する。平面規模は約86cm×約86cmで、方形を呈する。深度は約21.0cmを測る。覆土には焼土等が微量に含まれていた。

SK-1192 D-3⑥・⑦グリッドに位置し、楕円形を呈する。長径約170cm、短径約135cm、深度約74.5cmを測り、比較的大形の土坑である。覆土はレンズ状堆積を呈し、礫等を包含していた。また、覆土中より古銭（銅貨）が出土したが、欠損が著しく種類を特定するには至らなかった。

#### c. 井戸跡

SE-1155・1156の2基が検出され、C-3グリッドに分布する。平面規模はそれぞれ現存約174cm×現存96cm、約210cm×現存90cmである。また、深度はそれぞれ約28.5cm、約155.0cmであった。

#### d. 溝跡

SD-1110・1125・1144の3基が検出された。D-2～4グリッドの西端と、C-3～4グリッド中央付近を南北に縦走り、本地点を区画していたと考えられる。

SD-1125 D-3～4グリッドに位置し、現存部分の長さは約1312cm、幅は約316cmを測る。また、深度は約42.5cmと比較的深い。上面の攪乱の影響が著しいが、覆土は概ねレンズ状の堆積状況を呈し、焼土等を含んでいた。

SD-1144 C-3～4グリッドに位置する。現存部分の長さは約488cm、幅は約148cmで、深度は約13.5cmである。覆土は第1～15層にまで分層され、少しずつ埋まっていた様相が看取された。

#### e. その他

性格不詳の遺構等が5基検出された。SX-1113・1115・1116・1117・1122であり、調査区の北東に相当するD-2～3グリッドに認められた。それぞれ楕円形、楕円形、不整形、長方形、楕円形を呈し、規模や深度等も多彩であった。

### 3) 第③面

第③面からはピット類や土坑類を主体に、炉跡や井戸跡等の遺構が検出された。発掘調査面積は約252.3㎡で、ピット類38基、土坑類51基、炉跡1基、井戸跡2基、溝跡8基、性格不詳遺構等9基の総数109基が検出された。遺構分布域は、第②面よりも若干東西に広がっていた。明確な区画溝は検出されなかったが、溝跡の延長上を境界とし、遺構が分布する様相が看取された。また、西側の溝跡に沿って平石が配置されているのも特徴的であり、明確な区画こそ検出されなかったものの、土地の区画自体は、概ね第①面及び第②面と同様であるといえよう。ピット類や土坑類は、このような区画内のほぼ全域に分布するが、

特に東側に密集し、さらに北半と南半でもある程度のまとまりを認めることができる。また、井戸跡はD-3グリッドから検出され、比較的大形のものやコンクリート製の井戸枠が遺存するものがみられた。なお、他地区や他面との区別を明確にするため、本面では1200～1300番台の遺構番号を使用した。

#### a. ビット類

SKP-1207・1221・1222・1224・1225・1228・1235・1236・1246・1248・1255・1256・1258・1259・1260・1262・1265・1274・1275・1279・1280・1286・1288・1290・1292・1293・1294・1295・1307・1311・1319・1320・1323・1324・1333・1334・1335・1338の38基が検出された。調査区のほぼ全域に分布するが、西半に相当するC-3～4グリッドに最も集中して認められた。また、平面規模の長径は最小約14cm～最大約55cmで、深度は最小約3.5cm～最大約60.0cmであった。

#### b. 土坑類

SK-1209・1211・1216・1219・1223・1231・1232・1237・1238・1240・1244・1247・1249・1250・1251・1254・1257・1261・1263・1266・1270・1271・1273・1276・1277・1278・1281・1282・1283・1285・1287・1289・1296・1297・1298・1308・1309・1310・1312・1314・1315・1316・1317・1318・1322・1326・1327・1329・1340・1341・1342の51基が検出された。調査区のほぼ全域に分布が認められたが、特に西半に相当するC-3～4グリッドへの集中が著しかった。また、平面規模の長径は最小約26cm～最大約155cmで、深度は最小約5.5cm～最大約66.5cmであった。

#### c. 炉跡

本面から検出された炉跡は1基のみで、調査区の北西端付近に相当するC-2㊸・㊹グリッドに位置していた。

SX-1339 円形を呈し、長径約115cm、短径約110cm、深度約71.0cmを測る。底面には鉄製の刀子が埋設されており、その上を黒色粘質砂で約30cm埋めた後、椀形滓を含む鉄滓を敷き詰めて炉床を形成し、鍛冶炉として使用していたと考えられる。また、断面形態は刀子の埋設部分から、その上の黒色粘質砂部分までの規模が小さくなっている。これらの状況から、鍛冶炉の造営にあたって、まず刀子を埋納する儀式等を行い、粘質砂で覆った上で、鉄滓を敷いた炉を形成したものと推定される。なお、覆土内からは中世土師器が出土しており、本遺構は中世の所産であると思われる。

#### d. 井戸跡

SE-1217・1239の2基が検出された。D-2～3グリッドに分布する。

SE-1217 D-2～3グリッドにかけて位置する。平面規模は長径約392cm、現存部分の短径は約355cmである。また、深度は約143.5cmを測るが、底面までは発掘を行わなかった。石製の井戸枠も残存しており、直径は約65cmであった。この井戸枠は短く切断したものを数段重ねたもので、その切り口は近現代の工作機械等で切断したものと思われ、本遺構も近現代の所産と考えられる。

SE-1239 D-3㊸グリッドに位置する。平面規模は長径約165cm、短径約147cmである。深度は約108.0cmを測るが、底面までは発掘を行わなかった。中心にコンクリート製の井戸枠（ヒューム管）が設置されていることから、本遺構の所属時期は少なくとも昭和の後半期に比定可能と考えられる。

#### e. 溝跡

SD-1226・1245・1303 a・1303 b・1305・1306・1313・1332の8基が検出された。概ねC-3グリッドに集中して分布するが、明確に区画をなすものは認められなかった。

SD-1226 D-3②・③グリッドに位置する。現存長約477cm、幅約103cmで、深度は約52.0cmである。覆土の堆積状況から、溝が埋まっていく過程で、少なくとも2度掘り返されたことが窺える。すなわち、第5層まで埋まった段階で、第3～4層部分を掘り返し、その後第1～2層部分を掘り返して、小規模な溝を形成したことが認められるのである。

SD-1303 a・1303 b・1305・1306 C-3～4グリッドに位置する。それぞれに切り合い関係が認められ、SD-1303 bが最も新しく、次いで1303 a及び1305が新しい。さらに、1305よりも1306の方が古い。1303 aと1305・1306との新旧関係は不明である。また、SD-1303 b内には平石が配置されており、1305からは永楽通寶が出土した。したがって、これらの溝群は中世の帰属する可能性が高いと考えられる。

#### f. その他

性格不詳の遺構等が9基検出された。SX-1220・1241・1242・1264・1267・1268・1269・1272・1291であり、調査区の中央付近に相当するC-3～D-3グリッドに最も多く分布していた。

### 4) 第④面

第④面からはビット類や土坑類を主体に、溝跡等の遺構が検出された。発掘調査面積は約177.7㎡で、ビット類73基、土坑類56基、溝跡9基、性格不詳遺構等8基の総数146基が検出された。遺構の分布域は、調査区の東半と北端にほぼ二分される。溝跡は概ね南側を通る道路に対して、直行若しくは平行する方向で検出されたが、厳密には若干曲線を描いていた。ビット類等の分布の方向性もやや北北東-南南西を指向しており、第①面～第③面までとは、やや土地区画の主軸に差異が生じている。このことは、当該地の土地区画の基準となり得る南側道路の主軸が、第④面においては若干異なっていたことを示唆するものであろう。また、ビット類は東半の遺構分布域に多く認められ、北端の分布域には比較的大形の土坑類が密集するという傾向もみられた。なお、他地区や他面との区別を明確にするため、本面から検出された遺構には1400～1500番台の番号を使用した。

#### a. ビット類

SKP-1404・1407・1412・1419・1422・1423・1432・1434 b・1439・1447・1466・1467・1468・1469・1471・1474・1475・1478・1480・1483・1485・1487・1488・1489・1490・1491・1494・1495・1499・1500・1502・1503・1506・1511・1512・1514・1515・1519・1520・1526・1527・1528・1529・1531・1532・1533・1534・1535・1542・1546・1548・1550・1552・1553・1555・1556・1560・1561・1562・1567・1571 b・1571 c・1572・1573・1574・1575・1581・1582・1583・1585・1586・1590・1591の73基が検出された。調査区のほぼ全域に分布するが、最も集中していたのは、調査区の南側に相当するC-4グリッドである。平面規模の長径は最小約19cm～最大約126cmで、深度は最小約7.0cm～最大約47.0cmであった。

#### b. 土坑類

SK-1402・1403・1405・1406・1408・1411・1413・1415・1416・1417・1433・1434a・1435・1438・1443・1444・1445・1449・1450・1457・1458・1461・1462・1465・1473・1477・1479・1481・1482・1484・1486・1496・1497・1504・1505・1509・1513・1521・1525・1537・1538・1539・1540・1541・1545・1551・1558・1576・1577・1578・1579・1580・1584・1587・1588・1589の56基が検出された。ほぼ全域に分布するが、特に調査区の西半に相当するC-2～4グリッドに集中して認められた。また、平面規模の長径は最小約28cm～最大約130cmで、深度は最小約8.0cm～最大約59.0cmであった。

SK-1457・1458 D-3⑥グリッドに位置する。切り合い関係が認められ、SK-1457が古く、SK-1458が新しい。SK-1457の平面規模は、現存長径約70cm×短径約85cmで、形態は楕円形を呈する。深度は約34.5cmを測る。SK-1458の平面規模は、長径約100cm×現存短径約75cmで、円形を呈する。また、深度は約32.0cmを測る。

#### c. 溝跡

SD-1401・1420・1452・1453・1454・1455・1549a・1549b・1557の9基が検出された。調査区の北側に相当するC-2グリッド、東半に相当するD-3グリッド、南側に相当するC-4グリッドに分布しており、西半からは検出されなかった。

#### d. その他

性格不詳の遺構等が8基検出された。SX-1463・1464・1470・1522・1543・1544・1554・1559であり、調査区の北側に相当するC-4グリッドに最も多く分布していた。

### 5) 第⑤面

今回の発掘調査原因となった建物建設の工法との兼ね合いにより、第⑤面は工事等の影響が及ぶ地点に限定して調査を行った。具体的には、南側を通る道路の拡幅部分、建物の主柱が建てられる地点に対して、発掘を行ったのである。そのため、第④面の調査が終了した段階で、位置及び深度が工事等の影響を受けないことが明確な部分については、第⑤面までの掘削を行わなかった。また、第⑤面において、遺構確認が終了した段階で、検出深度から工事等の影響を受けないと判断されたものについては、遺構の記録を残した上で、発掘を行わなかった。したがって、本面においては工事等の影響により湮滅する遺構に限定して、発掘調査を行ったものである。

第⑤面からはビット類や土坑類を主体に、井戸跡や溝跡の遺構が検出された。発掘調査面積は約85.9㎡で、ビット類45基、土坑類32基、井戸跡2基、溝跡6基、性格不詳遺構等6基の総数91基が検出された。調査区域の北側に比較的大形の井戸跡が認められ、その南側にビット類や土坑類等が分布する様相が看取された。しかし、他の調査面に比べて、極端に発掘面積が縮小したため、詳細な分布傾向等は不明とせざるを得ない。なお、他地区や他面との区別を明確にするため、本面から検出された遺構には1600～1700番台の番号を使用した。

#### a. ビット類

SKP-1601・1602・1603・1611・1614・1617・1629・1630・1631・1641・1642・1643・1644・1645・

1646・1650・1651・1652・1653・1654・1655・1656・1657・1658・1659・1661・1662・1663 a・1672・1673・1674・1675・1676・1677・1678・1679・1680・1681・1683・1684・1686・1689・1690・1698・1709・1710・1711の45基が検出された。C-3～4グリッド及びD-3～4に分布するが、調査区の北側に相当するC-2グリッドからは検出されなかった。また、最も分布が集中していたのは、D-3グリッド及びC-4グリッドであった。平面規模の長径は最小約14cm～最大約80cmで、深度は最小約7.0cm～最大約45.5cmであった。

#### b. 土坑類

SK-1612・1613・1616・1618・1619・1621・1622・1623・1624・1625・1626・1627・1628・1632・1634・1637・1638・1647・1649・1663 b・1664・1665・1671・1682・1685・1687・1688・1692・1694・1695・1696・1697の32基が検出された。C-3～4グリッド及びD-3～4に分布するが、調査区の北側に相当するC-2グリッドからは検出されなかった。また、最も分布が集中していたのは、調査区の南側に相当するC-4グリッド及びD-4グリッドであった。また、平面規模の長径は最小約42cm～最大約200cmで、深度は最小約18.5cm～最大約47.5cmであった。

SK-1647・1649 D-3 ㊸・㊹グリッドに位置する。切り合い関係が認められ、SK-1647が古く、SK-1649が新しい。SK-1647の平面規模は、長径約116cm×短径約96cmで、形態は楕円形を呈する。深度は約47.5cmを測り、覆土中に焼土を少量含んでいた。また、SK-1649の平面規模は、長径約53cm×短径約49cmで、形態は円形を呈し、深度は約18.5cmを測る。

SK-1682 C-4 ㊸グリッドに位置し、楕円形を呈する。SKP-1681及び1683との切り合い関係が認められ、本土坑はSKP-1681より古く、SKP-1683よりも新しい。平面規模は長径約68cm、短径約62cmで、深度は約39.0cmである。また、覆土中には焼土を多量に含んでいた。

SK-1685 C-4 ㊸グリッドに位置する。SKP-1686及びSK-1688との切り合い関係が認められ、本土坑はSK-1688より古く、SKP-1686よりも新しい。平面規模は約92cm×約82cmで、深度は約22.0cmを測る。また、平面形態は円形を呈する。

SK-1687 C-4 ㊸グリッドに位置し、円形を呈する。SKP-1686との切り合い関係が認められ、本土坑はSKP-1686よりも新しい。規模は約52cm×約45cmで、深度は約30.0cmである。

SK-1694 C-4 ㊸グリッドに位置する。SK-1695との切り合い関係が認められ、土層観察等の結果、本土坑のほうが古いことが判明した。平面形態は円形を呈し、規模は約42cm×約33cm、深度は約27.0cmであった。

SK-1696・1697 C-4 ㊸グリッドに位置する。切り合い関係が認められ、SK-1696が古く、SK-1697が新しい。SK-1696は楕円形を呈し、平面規模は長径約76cm、現存短径約61cmで、深度は約32.0cmを測る。また、SK-1697は楕円形を呈し、規模は長径約84cm、現存短径約62cmで、深度は約36.0cmであった。

#### c. 井戸跡

SE-1456・1707の2基が検出された。ともに第④面の時期に帰属する可能性があるが、判然としなかったため、第④～⑤面としたものである。そのため、特にSE-1456については、第④面で使用した1400番台の遺構番号が付されることとなってしまった。

SE-1456 C-3~D-3グリッドにかけて位置する。SE-1707との切り合い関係が認められ、本井戸跡のほうが古い所産である。平面規模は長径約635cm、短径約590cmである。また、深度は約81.0cmを測るが、底面までの発掘は行わなかった。平面形態は方形に近い不整形を呈していた。

SE-1707 C-3グリッドに位置する。SE-1456との切り合い関係が認められ、本井戸跡のほうが新しい所産であることが判明している。平面規模は長径約165cm、現存短径約150cmである。また、深度は約69.0cmを測るが、底面までの発掘は行わなかった。平面形態は、円形を呈していた。

#### d. 溝跡

SD-1605・1610・1620・1633・1635・1636の6基が検出された。調査区の南側に相当するC-4~D-4グリッドに分布していた。いずれも遺構確認を行っただけで、未発掘のままである。

#### e. その他

SX-1604・1607・1608・1609・1615・1639が6基検出された。いずれも性格不詳で、調査区の北側に相当するC-4グリッドに最も多く分布していた。

## 4 遺物

本調査区では、整理箱約45箱分の遺物が出土している。その内容は、土器・陶磁器類（約35箱）、石製品（約10箱）、金属製品（約6箱）、醸造関連遺物（約12箱）などである。第IV章と同様に、以下では種別に説明する。

### i) 第①面（図版98・99）

第①面からは、瓦礫やタイルなどが多く出土しているので、所属時期は近～現代といえる。ただし、若干であるが、近世に遡るような土器・陶磁器類が出土しているので報告する。

SD-1032 磁器2点を図化した。製作時期の特定は難しいが、18世紀以降の所産であろう。

SX-1020下層 土師器2点を報告する。器壁の薄い皿A類である。合せ口の状態で出土しており、陶衣皿と報告される事例に類似する。ただし、腐朽のためか、中の土砂を洗浄したものの、特に遺物は確認されなかった。

SD-1001 青花1点、磁器5点、陶器5点、土師器1点を図化した。1509は、青花の皿B<sub>1</sub>群と思われる。15世紀後半～16世紀前半の所産である。1510は肥前磁器の小皿、1511～1513は肥前磁器の皿である。17世紀前半～後半の製品を取り上げた。1515は、漳州窯の製品である可能性が高い。1514は、肥前陶器の小皿で、16世紀末～17世紀初頭と思われる。1516は、須佐唐津の播鉢と推測される。1517・1518は、甕の体部片である。1517は16世紀末～17世紀初頭、1518は17世紀前半以降の製品であろう。1520は、土師器皿A類である。

SX-1043 陶器1点、磁器5点を図化した。1521は、見込み蛇の目軸刺ぎの皿で、17世紀後半～18世紀前半の所産と思われる。1522は、肥前磁器の五寸皿で、17世紀後半の製品と思われる。1523・1524は、波佐見産の中碗で、同一類体の可能性がある。17世紀後半～18世紀前半の製品であろう。1525は、肥前磁器の中碗で、17世紀後半～18世紀中葉の所産と思われる。1526は、瓶である。17世紀後半～18世紀中葉の製品であろうか。

その他の遺構・遺構外 磁器3点、陶器8点、土師器1点を図化した。いずれも中世もしくは17世紀の製品を中心に掲載した。

小 結 第①面出土遺物には17世紀以前の製品が比較的多く含まれていた。しかし、出土遺物の大半は、近年まで存在していた建物などに関連した瓦礫やコンクリートなどの破片である。ここで報告した土器・陶磁器類は、19世紀以降の諸開発によって、地下から浮上して混入したものと考えられる。

ii) 第②面 (図版100~106)

第②面出土土器類は、大半が肥前系の陶磁器で占められる。中世の陶磁器も含まれるが主体的ではない。土師器はまとまって出土した遺構もあるが、全体的には少なく、破片の大きさも小さい。

SD-1110 陶器5点、土師器2点を図化した。1533・1534は、土師器皿A類である。1535~1538は、肥前系の挿鉢と思われる。製作時期は18世紀以降であろうか。1539は、越中瀬戸の製品で、壺形の陶器である。口縁部を欠損する。

SX-1116 土師器12点を図化した。すべて皿A類である。Aa類・Ab類・Ac類・Ad類が存在しており、一括性は低いと思われる。

SX-1115 磁器2点、陶器5点、土師器2点を図化した。1559は土師器皿A類、1560は土師器皿B類である。1561は、肥前磁器の五寸皿で、17世紀後葉~18世紀後葉の製品である。1562・1563は、蛇の目軸刺ぎされた小皿で、内外面には銅緑軸が施される。17世紀後半~18世紀前半の製品である。1564は、内面が無軸で、香炉もしくは灰吹と思われる。1565は、陶器の中碗であるが、器形に類例をみない。1566も中碗であるが、製作時期の特定はできなかった。1755は、越中瀬戸の匣鉢である。体部は上半でやや膨らむが、口縁部は上方を指向する。本遺構は深度20cmに満たない土坑であるが、出土遺物の一括性は高いと考えられる。

SK-1118 磁器3点、陶器3点、土師器3点を図化した。1567は、磁器の中碗であるが、肥前における17世紀後半の製品であろうか。1568は、瀬戸美濃の天目茶碗である。16世紀後半の製品であろうか。1569は、肥前系磁器で、19世紀の中碗と思われる。1570は、肥前磁器の中碗であるが、詳細な時期等は不明である。1571は、蛇の目軸刺ぎの小皿で、内外面には銅緑軸が施される。17世紀後半~18世紀前半の製品である。1572は、壺である。肩部には耳が付される。

SD-1125 青磁4点、磁器1点、陶器2点を図化した。1576は、おそらく肥前陶器の鉢と思われるが、詳細は不明である。1577・1578・1580・1581は、青磁碗である。口縁部が遺存する1577は、蓮弁文から16世紀の所産と思われる。他の3点は底部片のみとなったため、時期は不明であるが、1578の底部内面には刺花文がみられるので、15世紀の所産であろうか。1579は、17世紀後半~18世紀前半の小皿である。1582は、肥前磁器の小碗で、17世紀前葉の製品と思われる。

SD-1144 青磁4点、磁器1点、陶器1点、土師器9点を図化した。1587・1588は、青磁盤である。1587は、体部内面に4目1単位、見込み部分に横位の丸彫りが施されている。1589は、青磁の菱花皿である。内面は底部の中心部分には軸がなく、外面は高台の壘付けを超えて施軸されるものの、高台内は無軸である。16世紀前半頃の所産であろうか。1590は、青磁碗である。1591は、産地不明の陶器中碗である。1592は、肥前磁器の小碗で、17世紀前葉の製品であろうか。1593~1601は土師器皿である。1599がB類である以外は、すべてA類である。特に、1600・1601は、溝床面から合せ口の状態で出土している。肥厚した口縁部、内側に折り返された端部、内面の「2」の字ナデ、見込みの圓線状のナデなど2点とも形態は近似している。16世紀前半頃の所産であろうか。

陶磁器は青磁や肥前が混在している上、1593～1598にはそれぞれ形態差がみられるので、出土遺物の一括性は低いと考えられる。

SK-1178下層 磁器1点、陶器1点、土師器3点を図化した。1610は、瀬戸美濃の天目茶碗である。14世紀後葉～15世紀前葉の製品と思われる。1611は、肥前磁器の大碗で、製作時期は17世紀後半と思われる。土師器皿3点はすべてA類である。

SK-1187 陶器1点、土師器1点、瓦器1点を図化した。1617は、瓦器であるが、器種は不明である。体部外面には、上下2種のスタンプ文が施されている。1618は、肥前陶器の中碗である。内外面の刷毛目文様から17世紀後半の製品と思われる。1619は、土師器皿A類である。口縁部外面がナデによって段状になり、端部が内側に折り返される。

SX-1195 (攪乱) 磁器2点、陶器5点、土師器1点を図化した。1622は、内外面に銅緑釉が施された小皿で、見込みは蛇の目軸割ぎされる。肥前系であり、17世紀後半～18世紀前半の製品と思われる。1623は、肥前陶器の小皿で、製作時期は16世紀末～17世紀初頭と考えられる。1624は、瀬戸美濃の天目茶碗である。後期段階の製品と目されるので、14世紀後葉～15世紀後葉と思われる。1625は、肥前陶器の小皿であるが、詳細は不明である。1626は、小皿であるが、漳州窯の製品である可能性が高い。1627は、土師器皿A類であるが、今回の調査では他に類例がない。1628は、肥前磁器の中碗と思われる。製作時期は17世紀後葉～18世紀後葉であろうか。1629は、肥前陶器の碗と思われるが、詳細は不明である。

SX-1195 (攪乱) 青磁1点、磁器1点、陶器3点、土師器2点を図化した。1630は、青磁碗で、外面の文様から15世紀後葉～16世紀の所産と思われる。1631は、肥前陶器で、瓶類の口縁部と思われる。1632は、肥前磁器の皿であるが、詳細は不明である。1633・1634は、土師器皿A類の小片である。1635は、肥前陶器の小片で、17世紀前葉以降の所産と思われる。1636は、肥前陶器の中碗である。17世紀後半の製品であろうか。

SK-1192 磁器1点、土師器5点を図化した。土師器はすべてA類であるが、いずれも小片である。1643は、肥前の青磁染付である。17世紀後葉～18世紀後葉の所産と思われる。

その他の遺構 青磁1点、磁器7点、陶器14点、土師器11点を図化した。1558は、底部の小片のみであるが、14世紀後葉～15世紀前葉の所産と思われる。これ以外は、ほとんど肥前系の陶磁器が多いが、所属時期は17世紀から19世紀に及んでおり、まとめることはやや困難である。

遺構外 図化が可能であったのは、青花3点、白磁1点、漳州1点、朝鮮1点、瀬戸美濃4点、珠洲4点、越前3点、土師器25点、そして陶器21点、磁器36点、瓦器1点である。

1657～1659は、青花の皿である。3点ともB類と思われるので、15世紀後半～16世紀前半の所産と思われる。1660は、李朝陶器の碗である。雜釉が施され、内面に砂目痕が遺る。1661は、漳州窯の製品である。16世紀前葉頃の所産と思われる。1662は、瀬戸美濃の折縁深皿である。後Ⅱ期（14世紀後葉～15世紀前葉）の製品であろうか。1663は、瀬戸美濃の天目茶碗である。大窯3～4段階（16世紀後半～17世紀初頭）の製品と思われる。1664は、白磁の皿D群である。高台には挟りがある。1665は、瀬戸美濃の端反皿で、大窯4段階（16世紀～17世紀初頭）の製品と思われる。1666・1667は珠洲の壺、1669・1670は珠洲の播鉢である。すべてV期（14世紀後葉～15世紀前）の製品に比定される。1668・1671・1672は、越前の播鉢である。1668が15世紀後半、1671・1672が16世紀の製品であろう。土師器は、皿A類が22点、皿B類が3点である。皿A類において、1600・1601のように口縁端部を内側に折り返すのは、1677・1678・1685・1686・1689・1690・1695などである。内面のなで上げの痕跡が確認できた1677・1685は、2点とも「2」

の字である。

肥前陶器は、鉄絵装飾(1698)・胎土目(1702)などの小皿は16世紀末～17世紀初頭の製品であるが、大半の小皿には砂目痕があり、これらは17世紀前葉の製品と思われる。碗は中碗が多く、特に京焼風呉器手碗は完形率が高い状態で出土している。1707は、台付皿に分類できようか。詳細は不明である。陶器の製作時期は、おおむね17世紀頃にまとまるが、磁器には波佐見産(1741・1742・1746・1747)が含まれるなど、18～19世紀の製品もみられる。なお、1756は、越中瀬戸の匣鉢である。また、1754はひとまず瓦器に分類したが、器種などは不明である。

小 結 貿易陶磁器や土師器など、中世の遺物は図化するように努めたが、やはり出土量が多いのは肥前系の陶磁器である。遺構から出土した中世の陶磁器類は、肥前系陶磁器と共存するなど、一括性には疑問があり、所属時期を決定付ける資料とするには難がある。一括性が高いと評価できるのはSX-1115などに限られるが、出土遺物は18世紀前半頃の時期を示している。第②面の所属時期をこの前後と考えれば、おおむね17世紀後半～18世紀頃に推測できるであろう。

### iii) 第③面(図版107～112)

第③面出土の土器・陶磁器類は、第②面に比べると土師器の出土量が多くなっている。依然として肥前系陶磁器も出土しているが、珠洲などの中世陶器も多い。出土状況としては、1遺構から多くの遺物が出土する例は少なく、数点の破片が出土している程度である。また、破片の大きさもさほど大きくはない。

SE-1217 青花1点、青磁1点、珠洲1点、肥前磁器2点、肥前陶器8点、越中瀬戸1点、土師器1点を図化した。1760は、青花碗のE群に形態が類似するので、16世紀後葉の所産と思われる。1761は、青磁碗である。体部の蓮弁文からB-IV類(15世紀後葉～16世紀)に分類される。1762は、珠洲の甕で、V期(14世紀後葉～15世紀前半)の所産と思われる。1763・1764は、肥前系の時期であるが、製作年代などは不明である。1765は、肥前陶器で、天目風の中碗である。1766は、肥前の京焼風呉器手碗で、17世紀後半もしくは18世紀前半の製品である。1767は小杯、1768は向付、1769は壺形の製品である。1770・1771は、肥前陶器の大鉢である。高台の形態から、おもに17世紀後半の所産であろうか。1773は、越中瀬戸の匣鉢と思われる。

SKP-1228 瀬戸美濃2点、珠洲1点、土師器4点を図化した。1777は、瀬戸美濃の製品である。口縁部のみに灰釉が施されているので、卸皿と思われる。口縁形態は後Ⅲ期(15世紀前葉)の製品に類似する。1778は、珠洲の搦鉢である。1779～1782は、土師器の皿で、すべてA類である。2法量がみられる。1783は、瀬戸美濃の卸皿である。施釉部分は遺存しない。

SE-1239 肥前磁器2点、肥前陶器2点を図化した。1784は、肥前陶器の小皿で、17世紀前葉の所産である。1785は陶器の中碗、1786・1787は磁器の角皿・小碗であるが、詳細は不明である。このほかに1788があるが、筒もしくは壺形を呈した陶器の露胎部分であろうか。

SX-1264 土師器4点を図化した。いずれも小片である。

SD-1303 a 陶器4点、土師器3点を図化した。1810・1811・1814・1815は肥前陶器である。1811は16世紀末～17世紀初頭、1815は17世紀前葉の製品と思われる。1812・1816は土師器皿A類、1813は土師器皿B類である。

SD-1305 青磁1点、瀬戸美濃1点、越中瀬戸1点、肥前陶器2点、土師器1点を図化した。1817は、越中瀬戸の丸皿と思われる。16世紀末～17世紀初頭の製品と目される。1818は、青磁碗であるが、高台部分のみが遺存する。1819は、土師器皿A類である。1820は、肥前陶器の小皿で、16世紀末～17世紀前葉の

製作と思われる。1821は、瀬戸美濃の仏花瓶である。1822は、関西系の中碗と目される。

C-3④(SX-132B) 磁器5点、陶器5点を図化した。1823は、肥前磁器の小皿である。製作時期は17世紀後半と思われる。1824は、波佐見産の中碗と考えられる。17世紀後葉～18世紀前半の製品と思われる。1825～1827は、肥前系の磁器と思われるが、詳細は不明である。1825は18世紀の所産であろうか。陶器は、製作地や年代が特定できないものが多い。1831・1832は肥前系で、前者は17世紀前半の小皿、後者は17世紀後半の京焼風呂器手碗であろう。

その他の遺構 落ち込みなどを含む遺構出土の土器・陶磁器としては、珠洲6点、越前1点、その他の陶器12点、磁器1点、土師器32点、瓦器3点を図化した。珠洲は、VI期(15世紀後葉)の播鉢が多い。その他の陶器としては、17世紀段階の肥前も散見されるが、1864のように製作地不明の壺(瓶)も存在する。土師器は、皿A類が27点、皿B類が5点である。1866・1867は、瓦器の深鉢1b類の破片と思われる。

遺構外 図化が可能であったのは、青花2点、青磁7点、白磁1点、朝鮮1点、瀬戸美濃4点、珠洲9点、越前4点、越中瀬戸2点、肥前などのその他の陶器19点、磁器7点、土師器38点である。

1868は、青花の皿B群で、15世紀後半～16世紀前半の所産と思われる。1934は、青花碗C群(15世紀後葉～16世紀中葉)と思われる。1869は、青磁綾花皿である。所属時期は16世紀前半頃であろうか。1870は、端反形態の皿である。15世紀前半頃と思われる。1871は、青磁碗で、外面に線描蓮弁文があるので、B-IV類(15世紀後葉～16世紀)に分類できる。1873～1875は、青磁碗の底部片である。前2者には内面に劃花文が施されている。1876は、李朝期の朝鮮陶器碗である。1877は、白磁皿D群と思われる。1878～1881は、瀬戸美濃の製品である。1878は卍皿で、後II期(14世紀後葉～15世紀前半)、1789は端反皿で、大窯期2～3段階(16世紀前半～後葉)の所産と思われる。1880は筒形香炉である。後IV期(15世紀中葉～後葉)の製品であろうか。1881は天目茶碗である。後IV期新(15世紀後葉)の所産と思われる。1882は、瓦器で、ひとまず円形小型鉢と分類した。用途としては香炉であったと思われる。焼成は良好である。上下2段にスタンプによる文様帯がみられる。土師器は、皿A類が31点、皿B類は7点である。皿A類には、1885のような形態は少なく、口縁端部は折り返さず、肥厚させて内面に段を作り、先端を薄くするものが多い。皿B類は2法量みられる。1921～1924・1929は珠洲の播鉢、1925～1928は珠洲の壺である。製作時期を特定できるものとしては、1923が14世紀前半～中葉、1921・1922・1924が15世紀後葉である。1930～1933は、越前の播鉢で、いずれも16世紀の製品と思われる。

1935～1941は、肥前系の磁器である。波佐見産などもあり、おおむね18世紀前半前後の製品を中心とする。1942は、萩の製品である可能性がある。1943は、越中瀬戸の小皿である。灰釉と褐釉の掛け分けがみられる。1962は、越中瀬戸の播鉢である。1945～1962は、大半が肥前系の陶器である。製作時期は、17世紀後半前後を中心とする。

小 結 第②面と比較すれば、第③面の土器・陶磁器類には土師器の占める割合が大きい。また、遺構外出土陶磁器には青磁や瀬戸美濃などといった中世の陶磁器が多くなっている。しかし、遺構から出土した陶磁器には珠洲や越前を確認できるが、17世紀を中心とする肥前系陶磁器が依然として含まれている。これらのことから、第③面の所属時期は、一部に16世紀を含むものの、17世紀を中心とした時期を想定しておきたい。

#### iv) 第④面(図版113～117)

第④面では、調査面積の圧縮化に伴って土器・陶磁器類の出土量は減少していく。遺構出土の陶磁器に肥前系が含まれる例が少なくなり、全体的には中世の陶磁器や土師器が大半を占めるようになる。

SX-1470 青磁3点、白磁5点、珠洲などの陶器18点、土師器2点、瓦器1点を図化した。1964～1966は、青磁碗である。1964は、口縁形態が直縁のE類(15～16世紀)と思われる。1965は、わずかに遺存する蓮弁文からB-II類(14世紀後葉～15世紀前葉)と考えられる。1967～1970は、白磁皿D群である。高台の遺存する1967・1970には決りがない。1971は、小片であるが、八角杯と思われる。1972・1973は、土師器皿B類である。1974は、瓦器の風炉類・深鉢類の破片と思われる。1975は、越前の壺の底部であろうか。1976～1993は、珠洲である。1976～1978は搦鉢、1979・1982・1993は壺、1980・1981は壺、1983～1992は壺もしくは甕である。1981はVI期(15世紀後葉)であるが、1976・1979・1980はV期(14世紀後葉～15世紀前半)の所産と思われる。

SE-1456 青磁1点、珠洲3点、肥前陶器4点、土師器14点、瓦器1点を図化した。1999は、瓦器であるが、器種は不明である。口縁外面にはスタンプ文がみられる。土師器は、皿A類が8点、B類が6点である。肥前陶器が含まれることから、陶磁器の一括性は低いと思われる。

SK-1402 土師器7点を図化した。すべて皿A類であるが、形態にヴァリエティがある。

その他の遺構 青磁1点、白磁1点、瀬戸美濃1点、珠洲2点、その他の陶器4点、磁器1点、土師器9点を図化した。中世の陶磁器は、おおむね15世紀頃の製作と思われる製品が多いが、SD-1453などは珠洲と肥前が伴出しており、注意を要する。土師器は、皿A類が7点、皿B類が2点である。皿A類では、口縁部をと外側に屈折させるもの(2035など)がある。また、端部を折り返すもの(2035など)などがある。

遺構外 図化が可能であったのは、青花3点、青磁5点、白磁4点、朝鮮1点、瀬戸美濃5点、珠洲19点、越前1点、越中瀬戸1点、肥前陶器5点、肥前系磁器2点、土師器44点、瓦器1点である。

2044～2046は、青花皿B群(15世紀後半～16世紀前半)である。2047は青磁桜花皿、2048～2052は青磁碗である。2051はC-II類(14世紀後葉～15世紀前葉)、2052はB-IV類(15世紀後葉～16世紀)である。2054～2056・2058は、白磁皿のD群である。高台にはすべて決りがない。2057は、李朝の陶器碗である。2059～2062・2066・2067は、瀬戸美濃である。2059は緑釉小皿で後IV期新段階(15世紀後葉)、2060は後I～III期(14世紀後葉～15世紀前葉)にみられる筒形容器、2061は後期(14世紀後葉～15世紀後葉)の筒形香炉であるが、詳細な時期は不明である。2062は底部を欠損するが、卸目付大皿と思われる。後期古段階の所産であろうか。2066・2067は天目茶碗である。前者は後IV期古段階(15世紀中葉)、後者は大窯の2段階(15世紀前葉～中葉)の製品と思われる。2063～2065・2071は、16世紀末～17世紀初頭の肥前陶器である。2069・2070は、波佐見産の磁器中碗で、17世紀後葉～18世紀後葉の製品である。2072は、越中瀬戸の搦鉢と思われる。2073は、瓦器の円形浅鉢と推定される。2074～2084は珠洲の搦鉢、2086～2091は珠洲の壺、2092・2093は珠洲の壺である。2087はIV期(14世紀前葉～中葉)、2074・2075・2078・2079・2086・2089はV期(14世紀後葉～15世紀前半)、2076・2077・2080～2082・2088はVI期(15世紀後葉)の製品である。2085は、越前の搦鉢で、16世紀の所産である。土師器は、皿A類が32点、皿B類が12点である。皿A類には、口縁部がほぼ直線的に立ち上がるもの(2100・2102など)と外側に屈折するもの(2094・2097など)が多い。端部を内側に折り返すものは少数といえる。皿B類には、体部が底部から明瞭に屈曲するもの(2126～2131)と緩やかに立ちあがるもの(2132～2137)とがある。

小 結 第④面の遺構から出土した土器・陶磁器類としては、青磁や瀬戸美濃・珠洲などがある。しかし、SE-1470のように近世の陶磁器を含まない遺構があるのに対し、SE-1456やSE-1453のように肥前陶器も出土する遺構がある。これらの肥前陶器はおおむね17世紀の製品であるため、第④面の所属

時期は、おおむね15～17世紀にわたる可能性がある。ただし、16世紀に比定される陶磁器類は非常に稀薄である。16世紀における本区での生業がやや薄れたのか、木製品などの陶磁器に代わる製品が多用されたのかは推測の域を出ないが、食器などを構成する遺物の組成として注意しておきたい。

#### v) 第⑤面 (図版118)

第⑤面は、さらに調査面積が半減するため、遺物の出土量もわずかになる。まとまった量の陶磁器が出土した遺構もSE-1707などに限られた。

SE-1707 白磁1点、瀬戸美濃1点、土師器3点、その他の陶器2点を図化した。2138は、白磁小杯で、高台内に墨書がみられる。2144は、瀬戸美濃の天目茶碗である。後IV期新段階(15世紀後葉)の製品であろう。2139～2141は、土師器皿で、すべてA類である。2142・2143は、製作地不明の陶器片で、近世の所産である可能性が高い。

SKP-1673 珠洲1点を図化した。播鉢の底部片である。

遺構外 図化が可能であったのは、白磁2点、瀬戸美濃2点、珠洲5点、越前1点、肥前などのその他の陶器4点、土師器3点となった。2147・2148は、白磁皿で、D群に分類される。前者の高台には袈りがあるが、後者にはない。2150・2151は、瀬戸美濃の製品である。2150は卸目付大皿と思われるが、14世紀後葉～15世紀後葉の所産であろうか。2151は卸皿で、後IV期新段階(15世紀後葉)の製品と思われる。2152～2155は、珠洲の播鉢である。口縁形態から、2152はV期(14世紀後葉～15世紀前半)、2153は期VI(15世紀後葉)の所産と思われる。2156は、越前の播鉢で、16世紀の製品であろう。2157は、頸部の短い壺形の陶器である。器形の類例が無いために断定はできないが、胎土や静止糸切りによる底部切離しの痕跡から、珠洲の製品に近いと思われる。2149・2162・2163は近世の陶器である。前2者は肥前と思われる。2158～2160は、土師器皿A類である。いずれも小片にすぎない。

小 結 第⑤面の土器・陶磁器類は、白磁や珠洲から15世紀という年代観が得られる。しかし、SE-1707に近世の可能性のある陶器が含まれるなど、後代の落ち込みなどに伴って遺物が混入したと考えられよう。ここでは、第④面とのつながりなども考え、第⑤面の所属時期はひとまず15世紀頃を想定しておきたい。

#### vi) その他 (図版119)

帰属する調査面が不明なものや、試掘調査の際に出土した土器・陶磁器類をまとめる。2178は、青磁碗で、D類(14世紀～15世紀前葉)に分類されよう。2166は、瀬戸美濃の卸皿である。後IV期新段階(15世紀後葉)の製品と思われる。2164・2177は、珠洲の播鉢である。前者はV期(14世紀後葉～15世紀前半)、後者はVI期(15世紀後葉)と思われる。2168は、土師器皿B類である。その他に図化したものは、おおむね肥前系の陶磁器となった。2169は肥前陶器の小皿、2170は天目茶碗である。いずれも17世紀前半の製品であろう。2172～2174・2176は、肥前磁器の皿で、いわゆる初期伊万里の製品である。17世紀前葉の所産である。2175は、同じく肥前磁器の皿で、17世紀前葉～後半の製品と思われる。2179・2180は、肥前磁器の中碗である。前者は17世紀前葉、後者は17世紀後半の製品であろう。2165は、播鉢である。製作地はやはり肥前の可能性がある

2181・2182は、土鍾と思われる。A1-IIa区SK-629でも1点出土している(793)、全体では3点得られたことになる。2187は、珠洲の壺もしくは甕の銅部片を砥石に転用したものである。表面はかなり磨耗している。

## 5 調査区のまとめ

A1-Ⅲ区においては、第①面から第⑤面までの遺構確認面が把握され、各面ごとに発掘調査を行った。ここでは、あらためて調査成果の概略を述べ、調査区のまとめをしたい。

第①面 概ね19世紀以降の時期に比定することが可能である。土坑類を中心に、ピット類や炉跡、溝跡等の遺構が検出された。ピット類4基、土坑類15基、炉跡4基、廃棄土坑3基、溝跡5基、性格不詳遺構等3基の総数34基である。これらの分布は調査区南半に集中しており、遺構集中区域の北端と東端には、溝による土地区画がなされていた。また、炉跡は溝による区画内の北半に偏って認められる状況であった。これらのことから、溝によって区画された町屋の奥の方に、炉が構築されていたと考えられる。

近世に遡る土器や陶磁器類も若干出土したが、出土遺物の主体は瓦礫やタイル等、近現代の所産のものであった。これらは、近代以降の諸開発等によって攪乱され、面に混入したと考えられる。

第②面 17世紀後半から18世紀の時期に相当すると考えられる。ピット類及び土坑類を主体に、井戸跡や溝跡等が検出された。ピット類23基、土坑類30基、井戸跡2基、溝跡3基、性格不詳遺構等5基の総数63基である。ほぼ全面に遺構の分布が認められたが、調査区の東西端でやや稀薄な状況もみられた。調査区の南北に縦走する溝跡等もあり、土地区画を意図して築かれたと推定された。第①面における区画溝と概ね同じ位置にあることから、町屋の区割り自体に、大きな変化は生じなかったと考えられる。

遺物の大半は、肥前系陶磁器であった。また、中世陶磁器もみられたが、少量であった。

第③面 概ね17世紀を主体とし、一部で16世紀を含む時期に比定することができる。ピット類や土坑類を主体に、炉跡や井戸跡等の遺構が検出された。ピット類38基、土坑類51基、炉跡1基、井戸跡2基、溝跡8基、性格不詳遺構等9基の総数109基である。遺構の分布域は、第②面よりも若干東西に広がり、明確な区画溝は検出されなかった。しかし、西側の溝跡に沿って、平石が配置されている状況が認められ、土地の区画自体は、概ね第①面や第②面と同様であったと考えられる。

出土した遺物は、依然として肥前系陶磁器が主体である。しかし、珠洲等の中世陶器も多く認められ、全体に占める土師器の割合が増加する傾向もみられた。

第④面 15世紀から17世紀に比定可能である。ピット類や土坑類を主体に、溝跡等の遺構が検出された。ピット類73基、土坑類56基、溝跡9基、性格不詳遺構等8基の総数146基である。遺構の分布域は、大きく調査区の東半と北端に二分され、第①面から第③面までの土地区画のあり方とは、様相を異にしている。土地利用の観点からは、大きな画期として捉えることができよう。

また、出土遺物は中世の陶磁器や土師器が主体となり、肥前系陶磁器が減少する傾向が認められた。但し、16世紀に比定可能な陶磁器が極めて稀薄であることは、注意が必要な点である。

第⑤面 概ね15世紀に比定することができる。本面においては、土木工事等の影響が及ばない部分が生じたため、それらを未発掘のままとして調査を行った。そのため、実際に発掘をした面積は、約85.9㎡と比較的小規模になった。検出された遺構は、ピット類や土坑類を主体に、井戸跡や溝跡がみられた。ピット類45基、土坑類32基、井戸跡2基、溝跡6基、性格不詳遺構等6基の総数91基である。調査区域の北側には、大形の井戸跡が認められ、その南側にピット類や土坑類等が分布する様相を呈していた。

出土した遺物は、白磁や珠洲等であった。しかし、調査面積が狭いことから、遺物出土量も極めて少量となり、全体的な様相を把握することは難しい状況であった。

## Ⅷ 調査の成果と課題

### 1 中近世柏崎町における土器・陶磁器の様相と変遷

#### 1) はじめに

柏崎町遺跡は、中世後期からの営みが確認され、市街地として現在に至っている。中世の柏崎町は、鶴川右岸（東側）の現・西本町地内を中心に成立し、近世から東本町地内へと発展していったと漠然と考えられてきた。しかし、平成10年度に東本町地内の試掘調査によって15世紀の遺物が発見されたことにより、中世段階の物証を得ることができ、中世後期では東本町まで開発が進んでいたことが想定されたのである[柏崎市教委2000]。

すでに、越後国柏崎町は文献史料によって中世からその存在が知られている。具体的な史料としては、長享2年（1488）に柏崎を訪れた万里集九の記録『梅花無尽蔵』や延徳3年（1491）の冷泉為広による『越後下向日記』などがある。そして、これらの史料から中世の柏崎は町人集団が支配する港湾都市であった可能性が指摘されている[矢田1997]。

今回の調査でも、やはり15世紀以降の土器・陶磁器類が大量に出土した。中世の陶磁器としては、青花・青磁・白磁などの貿易陶磁器、瀬戸美濃・珠洲などの国産陶器がある。これまで柏崎平野で実施されてきた中世遺跡の出土遺物に比べれば、調査面積が大きいことにも理由があるが、特に貿易陶磁器や瀬戸美濃の出土量は柏崎町遺跡が群を抜くといってもよい。また、肥前系陶磁器を中心とした近世の遺物も多く、柏崎町における陶磁器の消費量を示すものと思われる。

ここでは、第Ⅳ～Ⅶ章にて報告してきた土器・陶磁器類について出土量を確認し、組成の特徴について触れる。次に、第Ⅳ～Ⅶ章ではあまり触れられなかった土師器について、様相や変遷を考察する。

#### 2) 土器・陶磁器類の組成

第3表は、遺物の出土量を調査区別・調査面別に集計したものである。表中の数値は、接合作業を経た破片の数量であり、即個体数を表すものではないことを断っておく。

表をみると、青磁や白磁といった中世の貿易陶磁器と近世の肥前陶磁器とが混在している状況が確認される。特に16～17世紀に比定される遺構面において顕著である。各々の製作時期からは、各遺構面が営まれていた時期に両者の使用が並存していたとは考えにくい。I期（16世紀末～17世紀初頭）の肥前陶器も定量出土しているが、これ以降は肥前が陶磁器の主体となっていったと思われる。貿易陶磁器と肥前陶磁器とがこのような混在して出土していることは、当該地がたびたび整地あるいは建物の再建などが頻繁に行われ、当時から地中が攪乱を受けていたこと想定させる。しかしその一方で、各地区とも15世紀に比定される調査面からは、肥前陶磁器がそれほど多く出土していない。銭貨の出土状況からはさほどの攪乱が見受けられないことなどからも（第Ⅳ章）、15世紀段階の文化層は遺存状態が比較的良かったとも考えられる。ただし、土師器ⅢA類などの破片が上層からも出土していることや、16世紀の陶磁器が15世紀や17世紀の陶磁器に比べて稀薄なことは、次項で述べる土師器Ⅲの変遷についての検討を困難なものにしている。

ところで、中世、特に15～16世紀における越後国の土器・陶磁器組成については、水澤幸一氏が中世遺跡の調査成果をもとに検討を試みている〔水澤1997〕。検討した遺跡は、牧目館跡（岩船郡神林村）・江上館跡（北蒲原郡中条町）・宝積寺館跡（新発田市）・三貫梨遺跡（長岡市）・坪ノ内館跡（新井市）といった中世城館と考えられる遺跡である。水澤氏は、陶磁器の種別（産地）・器種についてそれぞれ個体数を求めており、本報告においてもそれを做すべきであるが、今回は時間的な制約もあり、種別の破片数を提示するにとどめた。ただし、水澤氏の研究成果と第3表とを比較すると、指摘できる事項が若干あるためここで触れておきたい。

水澤氏の土器・陶磁器は、まず特殊品と日用品に分類される。特殊品とは、青白磁（梅瓶など）・白磁壺・黄褐釉壺・青磁盤・青磁瓶・天目茶碗（中国・瀬戸美濃）・青花・朝鮮陶磁器・土師器（手づくね・ロクロほか）・瓦質風炉・信楽壺などである。前掲の5城館跡には中国産の天目茶碗や青磁瓶さらに瀬戸美濃の特殊な器種が1個体以上出土している。本遺跡の特殊品としては、青花・瀬戸美濃の天目茶碗・土師器などが多く出土しているが、中国産の天目茶碗や青磁瓶・青白磁などは出土していない。これは、本遺跡が城館跡ではなく、町屋跡であるという遺跡の性格による違いに起因する現象であると思われる。この仮説に対する検証は、今後数量データに基いた検討を深めていくことで行っていきたい。

### 3) 土師器皿の様相と変遷

陶磁器からみると、16世紀はやや稀薄な部分があるが、調査区付近は15世紀から展開してきた様相をうかがうことができる。今回の調査では、陶磁器のみならず土師器も大量に出土しており、これまで資料数が不足していた柏崎平野における中世後期の土師器皿の変遷がある程度追えるのではないかと考えられる。本報告書では、紙幅の都合もあるので、ここでは概略にとどめ、今後の研究材料としておきたい。

#### a. 一括資料の抽出

まず、年代を特定できる陶磁器と土師器が共伴する遺構一括資料を抽出する必要がある。すでに前章までも触れてきたように、同一遺構内において珠洲や肥前など、製作年代に隔りがあるような陶磁器片の共伴例が少なくなく、遺構の構築段階あるいは発掘段階における異時期の遺物の混入があったと思われる。一括資料の抽出にあたっては、井戸跡や複雑に重複する柱穴などは避け、おもに土坑などの出土資料において、陶磁器の所属年代がある程度限定されるものを対象としてみた。その結果、抽出された資料は、SK-305・SK-374・SK-376・SK-422・SK-427・SD-829・SKP-846・SK-873・SK-1298・SX-1470の各遺構から出土した資料である。このほか、層位的な遺物の取り上げが行われたA1-I区の南区16層についても対象とした。

#### b. 一括資料の概要

抽出した一括資料を概観すると、全体の器形を把握できる遺物はごくわずかであり、小片が多いことが指摘される。土師器の変遷を求めるための資料としてはやや不安が残るが、年代特定には必要な資料と思われる。ここでは陶磁器をもとに、所属時期を確認しておきたい。

SK-305（A1-I区第④面）出土土器・陶磁器は、青磁（263）・珠洲・越前が各1点、土師器2点（264・265）である。所属時期を特定できる陶磁器は263（B-IV類；15世紀後半～16世紀）のみである。土師器皿は2点ともA類（手づくね成形）である。264は、体部が直線的で、外面は口縁部が横ナデ



される。内面は全体が横ナデされるが、口縁部で弱い稜線がみられ、端部は幾分か薄くなる。265は、体部が内湾し、口縁部外面が強くナデられることによって体部と画され、口縁部が外反するようになる。また、端部は軽く摘み上げられる。

SK-374 (A1-I区第④面) 瀬戸美濃1点(301)、土師器1点(302)が出土している。瀬戸緑釉小皿301は、古瀬戸後Ⅳ期(15世紀中葉～後葉)に属すると思われる。土師器皿302は、A類で、体部の指頭圧痕などによって口縁部がやや外反する器形になっているが、基本的には264のように直線的であると思われる。やはり、口縁部内面には軽い稜線を持ち、端部ほど薄くなっていくので断面は三角形状である。

SK-376 (A1-I区第④面) 青磁1点・瀬戸美濃1点(303)・土師器8点(304)が出土している。青磁は皿の小片である。303は、瀬戸袴腰形香炉で、法量から古瀬戸後Ⅳ期(15世紀中葉～後葉)と推測した。土師器は、識別不明を除くと、A類6点、B類(ロクロ成形)1点となる。うち凶化が可能であった304は、体部は直線的であるが、口縁部が肥厚し、端部が摘み上げられて内面が小さな溝縁状になる。

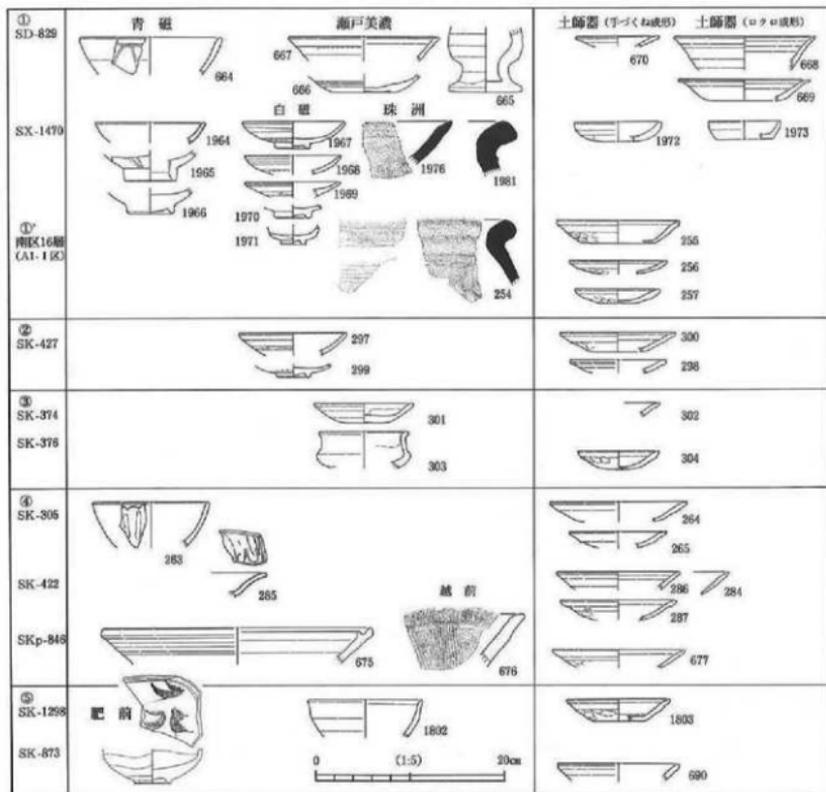
SK-422 (A1-I区第④面) 青磁2点(285)、珠洲2点、越前3点、土師器8点(284・286・287)が出土している。小片が多く、所属時期を推測できるのは、稜花皿285(16世紀前半)のみとなった。土師器皿はすべてA類である。284は、体部が直線的であるが、口縁部下が強くナデられて起伏が生じている。口縁端部の摘み上げはみられない。286・287とも口縁形態に類似する部分があるが、286は端部がやや厚く、内面の横ナデが強い。287は、284よりもナデが強い。

SK-427 (A1-I区第④上面) 白磁2点(297・299)、土師器2点(298・300)が出土している。白磁は2点ともD群(15世紀頃)の皿と思われる。高台が遺存する299には挟りが無い。土師器皿は2点ともA類である。298は、口縁部が端部まで厚くなっているが、基本的には302などと同様と思われる。300は、265などと同様と思われるが、ナデがより強調されている。

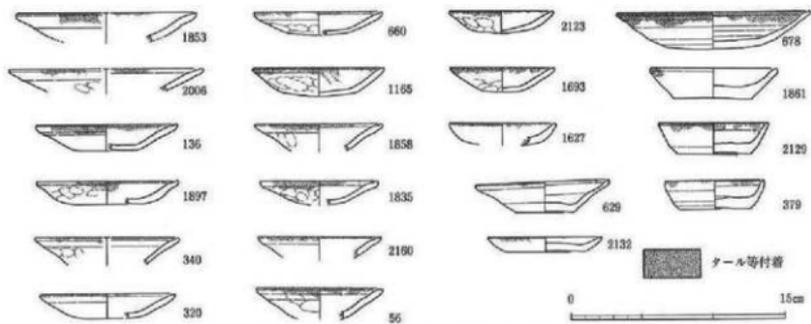
南区16層(A1-I区 図版6) 珠洲1点(254)、土師器3点(255～257)が出土している。254は、V期(14世紀後葉～15世紀前半)の甕と思われる。土師器は3点とも皿A類である。255は、体部がおおむね直線的であるが、体部上半は強い横ナデによって口縁部と画される。ただし、284・287とは異なり、口縁部と体部との境界には段差が生じている。また、口縁端部は摘み上げられており、見込み部分には沈線状のナデがみられる。256は、体部がやや内湾する。口縁部の横ナデはさほど強調されない。257は、体部の立ち上がりが緩やかで、口縁部が肥厚する。

SD-829 (A1-II a区第⑤面) 青磁5点(664)・白磁1点・瀬戸美濃3点(665～667)・珠洲1点・土師器10点が出土している。青磁碗664は、B-II類(14世紀後葉～15世紀前葉)の文様似る。白磁はおそらくD群の皿と思われる。瀬戸仏花瓶665は古瀬戸後期の所産と思われるが、遺存しているのが下半部のみであるため、製作年代を特定することは難しい。瀬戸卸皿667は古瀬戸後Ⅲ期(15世紀前葉)の口縁形態に類似する。したがって、本遺構出土陶磁器の所属年代は15世紀前葉頃とすることができる。土師器は、識別できたものとしては4点が皿B類、1点が皿A類である。B類の668は、体部の立ち上がりがやや急で、外反した形態である。同じくB類の669は、口縁部が外側に折れた形態をなす。A類の670は、体部の立ち上がりが緩やかな小皿である。

SKP-846 (A1-II a区第⑤面) 瀬戸美濃1点(675)、越前1点(676)、土師器1点(677)が出土している。瀬戸折縁深皿675は、後期新段階(15世紀後葉)の製品である。越前播鉢676は、口縁形態から、おそらく16世紀前半の所産と思われる。両者にはやや時期幅があるが、出土遺物のうち、675のみが被熱しているため、675よりも時期は下る可能性がある。したがって、ここでは16世紀前葉～中葉として



第14図 柏崎町遺跡出土土器・陶磁器共伴関係図



第15図 柏崎町遺跡出土タール等付着土師器皿

おきたい。677は、ⅢA類である。外面の横ナデや口縁端部の形態は255などに類似するが、それぞれの技法はあまり強調されず、結果的に表面はおおむね平坦である。

SK-873 (A1-IIa区第⑤面) 肥前陶器3点(691)、土師器1点が出土している。肥前陶器小皿691は、内面に鉄絵装飾や胎土目痕が見られることから、I-2期(16世紀末~17世紀初頭)の製品と思われる。他の2点もこの時期の製品と考えられる。690は、口縁部の小片であるが、ⅢA類と思われる。口縁部は厚いが、体部までに器厚の差異はあまりみられないと考えられる。

SK-1298 (A1-Ⅲ区第③面) 瀬戸美濃(1802)、土師器(1803)が各1点出土している。瀬戸天目茶碗1802は、大窯における4段階(16世紀末~17世紀初頭)の製品と推測される。1803は、ⅢA類で、口縁部外面および見込部分が幅の広い沈線状にやや強くナデられる。

SX-1470 (A1-Ⅲ区第③面) 青磁・白磁・珠洲・越前・土師器・瓦器が出土しているが、近世以降の陶磁器などは混入していない。青磁や白磁は全体の器形を把握できるものが少ないが、467~469は白磁D群の皿なので、15世紀頃が想定される。なお、白磁皿で高台が遺存するものには、挟りは確認できなかった。珠洲では、播鉢1976、壺1979、甕1980・1981はV~VI期の製品が中心である。また、1975は、越前の壺と想定される。以上から、全体的には15世紀前半~後半としておきたい。土師器皿は、A類(1972)・B類(1973)が各1点出土している。1972はA類ではあるが、いわゆる「京都系第2波」と呼ばれるものではなく、京都系第1波が在地化されたものに系譜が求められると思われる。1973は、体部が明瞭に屈曲して立ち上がり、幾分か内弯する。

### c. 土師器皿の変遷

前項にあげた各遺構・地点をおよその時期別にグループ化したのが第14図である。まとめてみると、①SD-829・SX-1470・南区16層は15世紀前半、②SK-427は15世紀前半~後半、③SK-374・SK-376は15世紀中葉~後半、④SK-305・SK-422・SKP-846は15世紀後半~16世紀中葉、⑤SK-1298・SK-873は16世紀末~17世紀初頭に属す陶磁器と共存しているといえよう。ただし、これらの年代は陶磁器の製作年代を重視したものに過ぎず、陶磁器の耐久を考えれば、土師器の所属時期はやや下る可能性がある。特に、南区16層出土物は、出土状況に位置的・層位的なまとまりがあるとしても、包含層出土であることを考えれば、若干の時期差があることを否定することはできない。出土している陶磁器が食膳具や調理具ではなく、珠洲の甕(254)のみであることもある程度の誤差が生じさせている可能性がある。したがって、このような問題点から①ではSD-829・SX-1470と南区16層を区別するため、後者を①'としておきたい。そして、①'の時期は、②とほとんど重複するが、下限を15世紀後半くらいまでを考えておく。なお、これらの各グループは、ある程度の重複期間があるものの、おおむね①→⑤と変遷すると考えられる。そして、SD-829(旧)→SKP-846(新)、SK-374(旧)→SK-376(新)といった遺構の新旧関係があるが、矛盾するものではない。

それでは、第14図によって土師器皿の変遷をみてみたい。①では、すでにA類が出土しているが、主体はB類である。しかも、1972のようにA類で中世後期に主体となる京都系第2波に属さないものも含まれている。しかし、B類は①'も含め、②~⑤では出土していないことから、15世紀後半段階ですでに主体はA類に移っていることをうかがうことができる。SD-829とSX-1470とでは同じB類でも形態が異なるが、若干の時期差によるためか、皿の用途や遺構の性格によるためなのか、ここで明らかにすることはできない。

次に、①よりも下限がやや下る可能性がある①'の土師器は、京都系第2波の手づくね成形土師器が当該地に定着した頃の形態を表していると思われる。前述のように①'の性格上、15世紀のどの段階で定着したのかを特定することはできないが、すでにA類を主体としている②・③をもとにすれば、15世紀中葉～後葉頃と推測することができる。また、口径13cm前後の皿にはAc類が多いが(255など)、②～⑤では確認されていない。また、口径8～10cmの皿にはAd類が多いが(257・304など)、やはり④～⑤では確認されていない。該期の形態的な特徴と思われる。

④の土師器皿をみると、口縁部が肥厚するものは少なくなり、端部の積み上げもさほど明瞭ではなくなる。しかし、やはりナデによって口縁端部内面がやや窪むものが多い。外面では、口縁部と体部とを面すナデが継続するが、そのナデの幅はやや広めで、段状にはならない。

⑤では、資料がさらに制約されるが、口縁部などにみられる調整などについては、④からはさほどの変化はみられない。ただし、肥前陶器の皿と共伴する690などは、全体的に厚手の作りとなる。近世初期の段階における在地化をうかがうことができよう。

以上、簡単ではあるが、土師器皿の変遷を触れてみた。土師器をはじめ、陶磁器の出土量は多いものの、土師器の変遷を追うに足る遺構一括出土資料の少なさを否定することはできない。今後の資料の増加により、今回の検討を補っていくこととしたい。

#### d. 付着物

最後に、土師器皿にみられた使用の痕跡について若干野述べておきたい。出土した土師器皿には、タールなどが付着しているものが一部に観察されている。今回図化した土師器の中では、第15図の21点にタールの付着が認められた。土師器は小片が多いため、全体的にはどのようにタールが付着していたかはわからないが、678などは波状を描いて口縁部全体に付着している。また、1165などをみると、外面は口縁部全体に付着しているのに対し、内面では斜方向の線状に付着している。これらは、おそらく灯明皿として用いられた痕跡と思われる。

タールなどの付着物があった土師器皿が、土師器皿全体に占める割合は約3%である。皿A類・B類ともに確認されており、灯明皿が出土した遺構は15～16世紀にわたる調査面のみみられるため、器種や時期による特定はできなかった。

#### 4) おわりに

以上、柏崎町遺跡から出土した土器・陶磁器類について若干の検討を行ってきた。本遺跡からは大量の土器・陶磁器類が得られたものの、出土状況は必ずしも良好なものではなく、一括資料の不足などといった制約がある。また、調査面ごとにもはっきりとした時期差をみることも困難であった。このほか、土器・陶磁器類以外にも石製品や金属製品・銀冶関連遺物といった多くの資料が出土しているにもかかわらず、今回は概要を触れる程度の報告になってしまった。

冒頭でも述べたように、中世から近世の柏崎町は、城館跡や一般的な集落跡などとは性格をやや異にする町屋であることがうかがえられる。本報告書に掲載してきた遺物は、いずれも15世紀から現在に至るまでに人々が営んできた生業の痕跡である。今後はさらに検討を深めていくこととし、一地域に成立した柏崎町の様相を明らかにしていきたい。

## 2 中近世の柏崎町東部域と遺構群

### 1) はじめに

柏崎の旧市街地は、中世において湊を中心にして栄え、東へと発展したとされる。そして、町の中心は、湊のある鶴川河口付近から西本町にあり、東本町側への展開は、江戸時代になってからというのが大方のイメージであった。

このようなイメージは、残された町名や絵図面などからすれば、柏崎の町並みが発展する過程として、大筋で間違いなさそうである。しかし、鶴川河口が湊として栄え始めた頃、現在の東本町側が全くの無人であったと考えるのは、あまりにも短絡的であり、見方としては一面的とせざるを得ず、具体性が乏しいまま語られてきたのではないだろうか。その証拠という訳ではないが、これまで柏崎の町並みを、中世遺跡として認識することがなかったことが、まさにその実態を証明しているように感じられる。ところが、東本町まちづくり事業に伴って実施された一連の発掘調査は、中世から近世における柏崎の町並みを、直接的にわれわれの眼前に見せつけたのであり、これまで僅かな古文書に頼ってきた中世柏崎町が、具体性を持つ遺構・遺物で語ることを可能としたのである。この点に、当該調査の大きな意義があり、柏崎町の歴史を紐解く画期をなすものとして評価することができるであろう。

ただし、調査地点は、これまで近世に開発されたと考えられていた東本町の一角であり、中心部と目される湊からは遠く離れた区域が対象とされた。このため、調査された地点がもつこれらの限界性は自ずと内包されており、後述するように柏崎町全体を語るには不十分である。しかし、中世柏崎町のはずれとされる東本町ではあるが、発見された遺構群の検討を通し、中世から近世に至る柏崎町の検証を行うことは、決して無意味ではなく、柏崎町の歴史を具体的に解明していく足掛かりとして位置付けることができよう。

そこで本節では、今回調査された区域における調査結果——特に検出された遺構を対象として、幾つかの検討を試みたい。検討する内容等については、まず調査された各遺構面について、それぞれの年代観を基に総合することにより幾つかの遺構面に整理し、各遺構の種類ごとの様相や分布・配置を把握し、調査成果を概観したい。検討に際しては、井戸、土坑墓、建物跡のほか、鍛冶炉などの主要遺構を主な対象とするが、特に建物跡については集成を行い、主軸の指向する方位等を検討し、本町通りの想定や町割などにも言及したいと思う。

また、これらの調査成果やデータのもつ意味とともに、調査地点の属性的な限界性などといった問題点を提示し、今後に向けた課題を考えることとしたい。そして最後に、今回の調査で得られた成果から、中近世における柏崎町の景観等を時代的な変遷を考慮しつつ述べ、柏崎町における都市空間等を含めたまとめを行いたい。なお、この考察においては、建物跡が復元できたⅠ・Ⅱ区を対象とし、遺構群の様相を把握することができないⅢ区については、検討の対象として除外せざるを得ず、とりえず保留する。

### 2) 遺構面の総括と遺構群

遺構面の総括 柏崎町遺跡は、砂丘の南斜面に形成された集落遺跡である。立地からくる特性として、季節風の風下となる砂丘斜面ため、生活面を覆う土砂の堆積が早く、結果として文化層を多く形成したことにある。今回の調査状況を見ると、第Ⅰ区は攪乱層を除去した第①面から第⑥面まで都合8枚、第Ⅱ区は上層位2枚を重機で除去したが、それでもa区で5枚、b区で4枚の遺構面を検出して調査が行われた。

各遺構面の時期は、Ⅰ区は15世紀代から現代まで、またⅡ区は15世紀代から18世紀前半頃までにおよんでいる。したがって、各調査区によって、調査された遺構面数は異なるが、少なくとも15世紀から18世紀までは、それぞれ同じ時期の生活面が面的・同時に存在していたことになる。

また、建物跡を構成する柱穴の検出面は、全て同一遺構面で検出されたわけではなく、幾つかの遺構面にわたる柱穴を抽出することによって、一棟の建物跡として認識された事例が多い。これは、本来の生活面に起伏や不規則な傾斜があり、全く平坦な地形となっていない場合でも、実際の発掘作業では一律的・便宜的に平坦な面と仮定して調査していること、および上位の遺構等が重複することによって隠されてしまい、検出に際して見落とされたものがあつたことに起因すると考えられる。したがって、建物跡の復元にあたっては、上下各層における柱穴の配置を参考にしながら設定したものである。

そこで本稿では、調査された各遺構面をそのまま隣接各区と短絡的に対比することを避け、幾つかの遺構面を総括することによって、遺構分布の概要を把握することとした。その作業にあたっては、各遺構面の時代を遺物によりある程度把握し、おおむね同じ時期となる遺構面を複合せた。その結果、第16図～第17図のとおり、4面の生活面として復元した。ただし、建物跡が復元されなかったり、調査範囲が狭く、全体を把握することができなかった下層部の遺構面については、第Ⅴ遺構面として一括し、総括遺構面の作成を行わなかった。

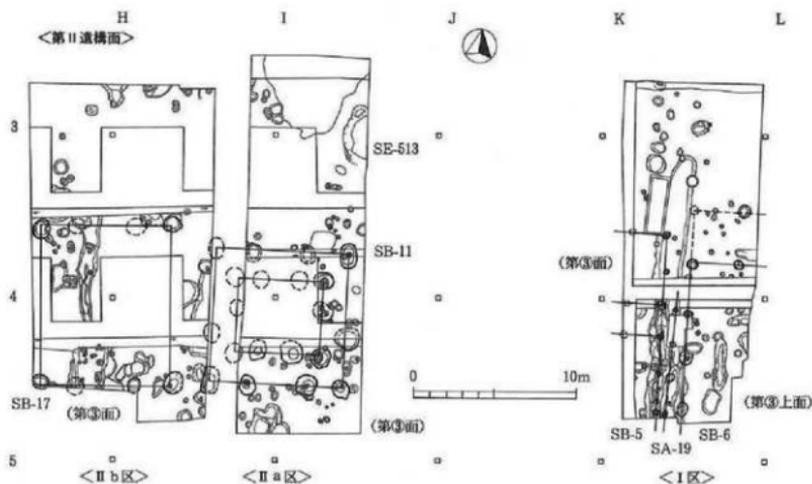
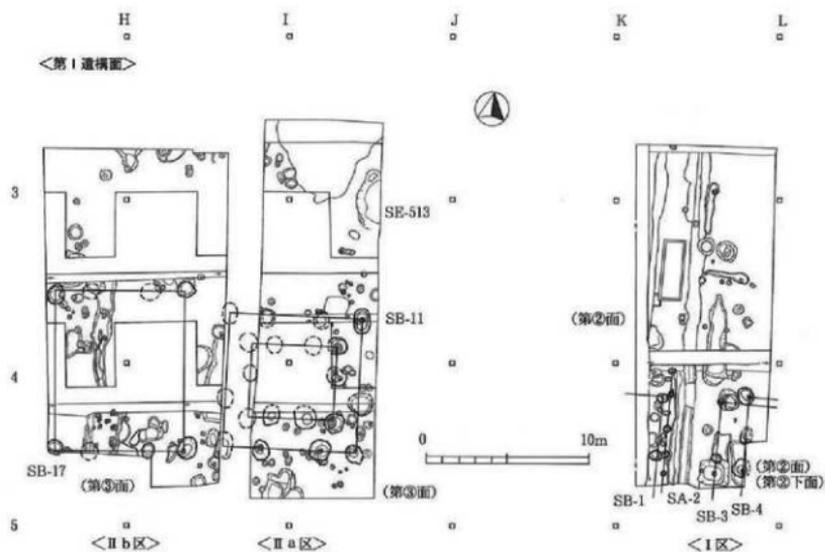
**第Ⅰ遺構面** Ⅰ区は第②面と南区第②下面、Ⅱ区は第③面で構成した。出土遺物から見た各遺構面の年代観は、Ⅰ区がすべて18世紀代、Ⅱa区は17世紀後半～18世紀前半で、Ⅱb区は17世紀代である。この場合、Ⅱ区側がやや古くなるため、Ⅰ区については、次ぎの図に示したとおり17世紀代とされる第③面を考慮する必要があるが、当該面については、おおむね17～18世紀頃の状況とすることができる。

確認された遺構総数は、それほど多くない。Ⅰ区では、南北に走る溝によって町屋が区分され、東西それぞれの屋敷地に建物跡や柵列が配されている。建物跡の位置は、各調査区の南半に集中し、北側での遺構数はやや閑散とする。Ⅰ区東西の町屋では、それぞれに碗形滓などが出土した鍛冶炉が確認されている。井戸跡については、Ⅱa区北部で検出されているSE-513程度であり、調査区域ではほとんど検出されなかった。また、墓坑についても、明確な事例はなかった。

注目されるのは、Ⅱ区で検出されたSB-11建物跡である。柱穴配置から復元された間取りは、二重構成をなし、形式的には寺院本堂にみられる内陣と外陣の構造に近似する。したがって、当該地に寺院が建立された可能性が指摘できる。この建物跡の東側には未調査区域が横たわるが、仮に仏堂とすれば、庫裏などの建物が想定されることになる。また、Ⅰ区については、東西双方の町屋に鍛冶炉が伴うことから、鍛冶職人の住居であった可能性が指摘できよう。

なお、Ⅱa区で検出されたSB-17建物跡については、やや主軸方位が他と若干異なっており、検出された柱穴数が少ないことから、検討の余地が若干残されている。しかし、Ⅰ区・Ⅱ区ともに、各建物跡や町屋の境界溝が指向する方位はほぼ同じであり、統一的な町割の存在を想起させる。

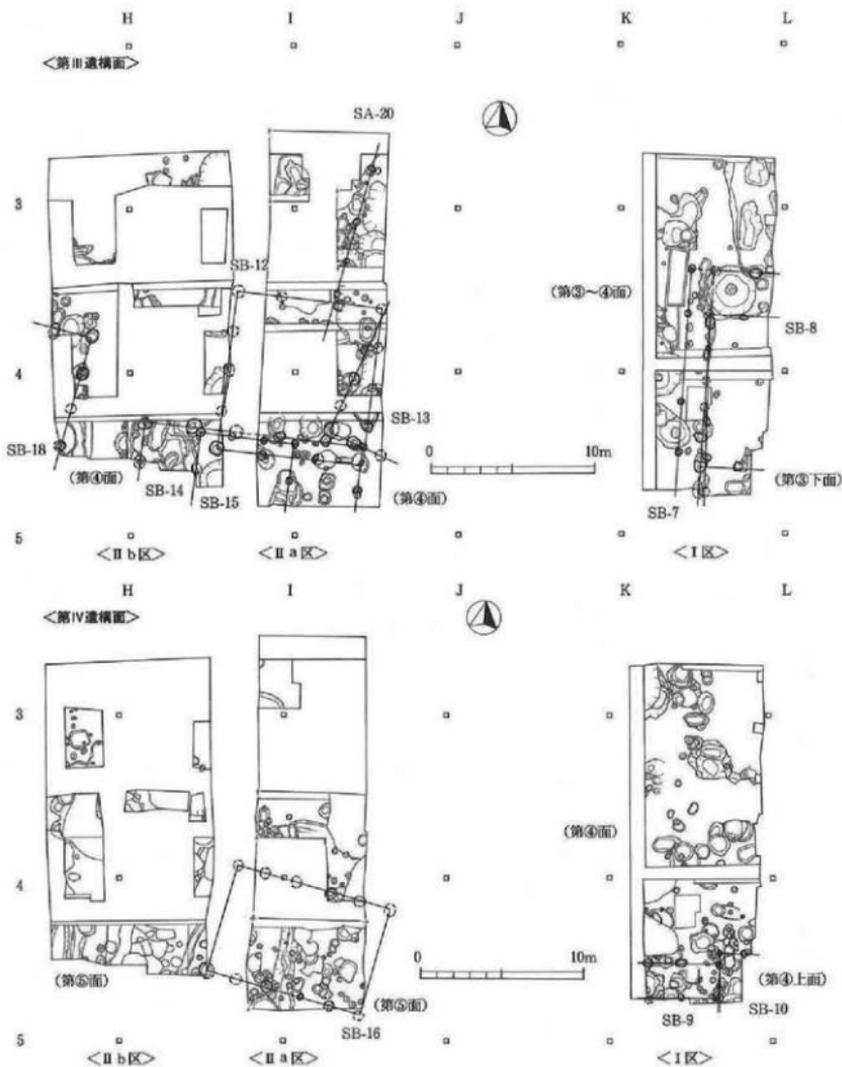
**第Ⅱ遺構面** Ⅱ区については、第Ⅰ遺構面と同じであるが、Ⅰ区は北区第③面と南区第③上面とした。前述したように、Ⅰ区の第③面、第③上面の時期は、おおよそ17世紀代であり、Ⅱa区第③面が17世紀後半から18世紀前半とやや新しいとしても、総体的にはおおむね17世紀代でまとめることができる。特に、寺院本堂の可能性が高いSB-11建物跡については、各柱穴の検出面が第③面と第④面で、後者の事例がやや多いことからすれば、遺構面として総括した場合は、時期的に古い第Ⅱ遺構面との関わりが強くなる。また、柱穴内から出土した遺物は、16世紀前葉の中世土師器を主体としていたが、僅かに17世紀初頭の唐



第16図 柏崎町遺跡建物跡配置図①

津が伴っており、本堂の建設時期は17世紀初頭以降と判断される。したがって、当該建物跡については、17世紀前葉に建立され、18世紀代にかかる時期まで存続していた可能性が指摘できる。

I区における検出遺構の状況は、第I遺構面と同じく中央を南北に走る溝跡により町屋が分割され、その東西に建物跡(SB-5・6)を復元することができた。また、町屋の境界溝内には、これとほぼ同じ



第16図 柏崎町遺跡建物跡配置図(2)

方位を指向する柵跡(SA-19)が存在しており、前後関係は明らかにし得ないが、溝や柵列によって町屋が区分されていたことを示唆する。町屋内の状況については、東町屋では、おおむね南北を指向する方位で、溝状をなす墓坑1基(SK-209)が検出され、刀子などが出土したほか、鍛冶炉と考えられる土坑2基(SX-201・215)が確認されている。この東町屋については、建物跡と土坑墓が重複することに

なるが、両者の時期的な関係は明らかにし得ず、建物跡と2基の鍛冶炉との関係も不明である。しかしながら、鍛冶炉が検出されていない西町屋はともかく、東町屋については鍛冶職人の住居が想定できそうである。

**第Ⅲ遺構面** 各調査区の遺構面とそれぞれの時期は、I区南区が第③下面で16世紀から17世紀中葉頃、北区の第③～④面で16世紀後半から17世紀中頃、II区は第④面で、a区が16世紀後半から17世紀後半、b区が16世紀前後と想定される。したがって、当該面の総合的な時期は、16世紀から17世紀と大まかに設定できる。

各地区の遺構状況を見ると、I区では、町屋を区切る溝跡がなくなる。この場合、SB-7建物跡西側の底部分の柱列が、境界を示す柵列に該当する可能性が考慮されるため、町割区画の有無を決定付けることはできない。しかし、I区西側に井戸跡群が検出されていることを考えると、町屋の境界はなかった可能性が高いのではないだろうか。

遺構群の配置については、I区で2棟の建物跡(SB-7・8)が検出され、II区では建物跡5棟と1列の柵跡と数多く復元することができた。特にII区での復元例が多く、最大3回の重複がある。これら建物跡群の主軸方位については、大きく3方位にまとめることができる。この点については、事項で述べたいが、町屋や本町通りの状況と、これらの推移など変遷観との関わりが考えられる。

井戸跡は、I区の西寄りに多く検出され、またII区a区東側北部にも大型土坑が存在することから、両者の中間区域に集中していた可能性が指摘できる。また、I区の南区からは、鍛冶炉と考えられる炉跡2基(SX-267b・268)が検出されており、第I・第II遺構面へと引き継がれる鍛冶職人が居住していた可能性が高く、この場合、鍛冶職人の住居は当該遺構面の時期である16世紀代頃から18世紀代頃まで、連続と続いていた可能性を示している。

**第IV遺構面** 当該遺構面を構成するのは、I区では南区の第④上面と北区の第④面、II区の第⑤面である。遺物から見た時期は、I区北区が16世紀代、南区では15世紀後半から16世紀後半である。II区は、a区が15世紀から16世紀末、b区が15世紀代であり、総体としては15世紀から16世紀の状況を示すものと考えられる。当該面の北部では、遺構検出面が砂丘砂となって、最下層に達する。

検出された遺構は、建物跡や墓坑のほか、ピット・土坑類と性格不詳の溝跡などがある。ただし、第Ⅲ遺構面から数多く穿たれた井戸群により、遺構面の多くが攪乱を受けており、遺構のすべてを把握できる状況にはない。

建物跡は、II区の1棟(SB-16)と、I区南端の2棟(SB-9・10)である。復元された建物跡が指向する主軸方位は、両地区でそれぞれ大きく異なっているが、I区では第I遺構面以下はほぼ同じ方位を指向している。墓坑の検出は、I区で特に多く、北半で検出された遺構の大半が墓坑と考えられる土坑類で占められていた。したがって、当該遺構面の段階では、調査区域東端となるI区は、墓域を形成するやや特異なエリアが形成されていたと考えられる。

**第V遺構面** 第IV遺構面より下位で検出された遺構面すべてを一括して、第V遺構面とする。発掘された面積が狭く、建物跡も復元できなかったことから、総括図は作成しなかった。該当する遺構面としては、I区の北半がすでに砂丘砂となる最下層に達していたことから、南半の第⑤～⑥面、中央部分の第⑤面・第⑥面となる。また、II区a区では、第⑥面・第⑦面が該当するが、両地区それぞれ各遺構面の出土遺物は、全て15世紀代に収まるものとなっている。

検出された遺構は、ピット・土坑類を主体とし、その密度は、南半部に限定されるとはいえども、意外

に高く、特にⅠ区南区の第⑤～⑥面は、2枚の遺構面を一括したためか、かなりの高密度であった。

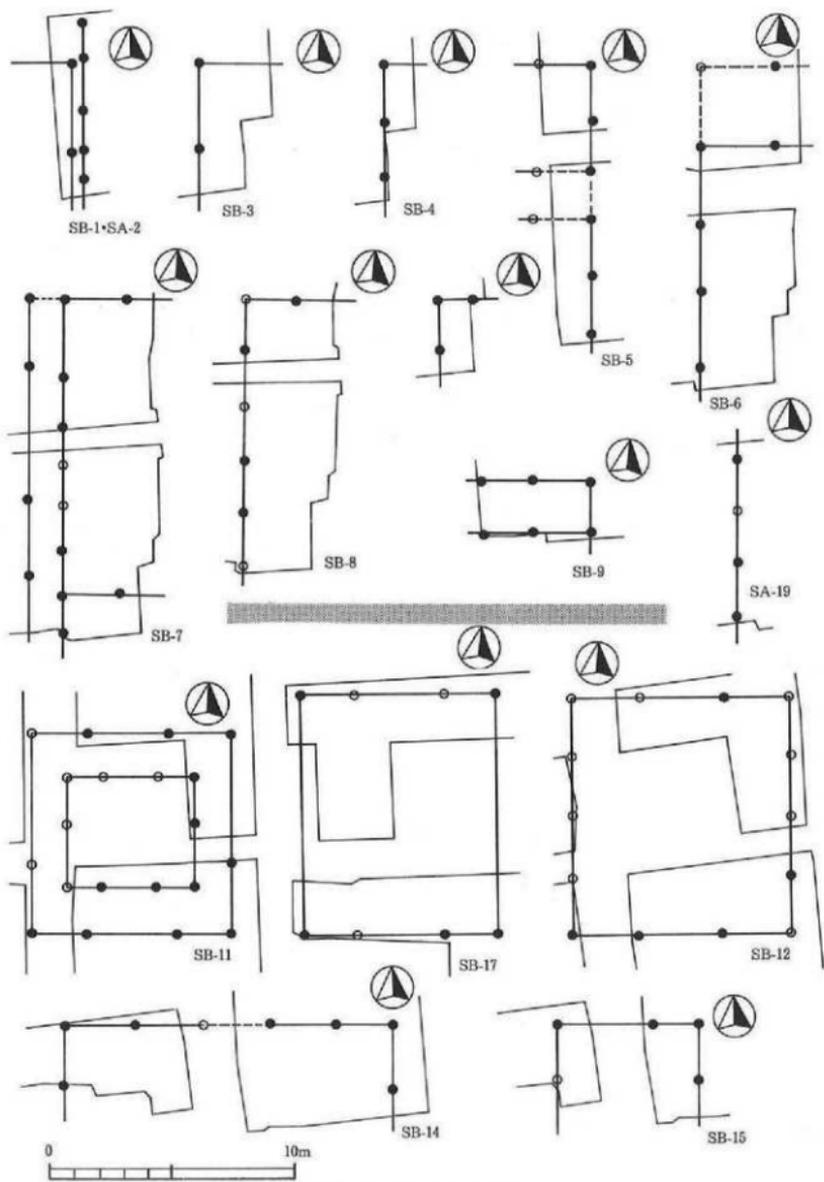
### 3) 建物跡群の検討

柏崎町遺跡における今回の調査区からは、建物跡17棟、欄列3列が復元された。これらは、状況が不明なⅢ区を除くⅠ区とⅡ区において把握されたものであるが、両地区の調査面積が狭く、建物跡全体を検出できた事例は、3棟と少ない。しかも、これら3棟の実情とは、未調査区域における柱穴の想定により漸く復元をなし得たもので、全貌をある程度正確に把握された事例は、厳密にみればSB-11建物跡1棟に過ぎない。このような実情を抱えては、たとえ町並みの復元を試みても、砂上に樓閣を建てるに等しい。このため、今回はこれらの検討は留保し、集成して看取できた幾つかの特徴を大まかに指摘するに留め、主に各建物跡が指向する主軸方位を手掛かりとして、これらに一定の法則性を見出し、柏崎の町並み形成史の一端を類推することとしたい。

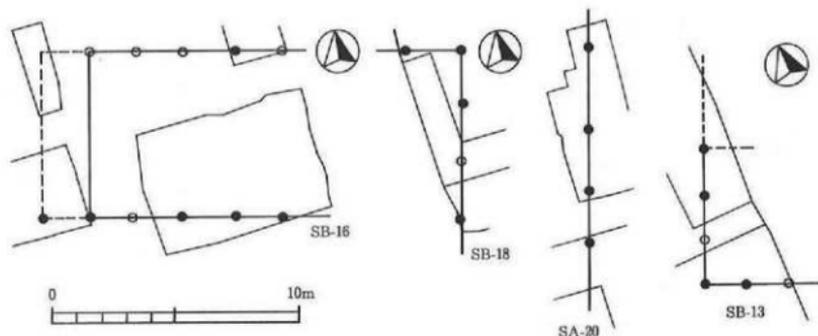
**集成と概要** 第18図～第19図は、各建物跡と欄列を一括した集成図である。一瞥して窺われるように、一方の隅もしくは1辺が把握されたのみの建物跡が大半であり、一部に欄列の可能性を否定できない事例や、あるいは欄列が建物跡の一部であることもあり得る状況となっている。

まずⅠ区の建物跡を見ると、北辺についてはある程度把握されているが、南側が調査区外へ延びる形勢にあって、規模を明らかにできない事例が多いことに気付く。また、柱穴が配置する南北列については、2～3間程度までしか確認されていない事例も少なくないが、5間以上の可能性をもつ細長いプランが想定される建物跡が4例(SB-5・6・7・8)存在する。これらは、現柏崎の旧市街地、特に本町通りに間口を持つ民家や商家に特徴的な町屋の可能性が高いことを示唆する。これらは、第Ⅱ・第Ⅲ遺構面で把握された建物跡であり、遺構面の時期としては、16世紀から17世紀の所産となり、各建物の柱穴から出土した遺物からも同様な結果が得られているが、新しい遺物の時期を採用すれば、おおむね17世紀に集約されることになる。したがって、遅くとも17世紀段階には、東本町の一角に町屋形式の民家が建ち並んでいた可能性が高いとすることができよう。

このようなⅠ区の状況に対し、Ⅱ区の建物跡は、南北に長くなる可能性を見せる建物跡が一部に認められるが(SB-18)、ほとんどは方形に近い(SB-11・12・17)、東西に主軸を取る建物跡(SB-14・16)が多いことを特徴としている。このような建物跡群の意味については、容易に明らかにできないであろうが、仏堂形式の柱穴配置を見せるSB-11建物跡の存在が示唆的なのではないだろうか。すでに前述した如く、SB-11建物跡については、寺院の本堂だったのではないかと指摘してきたが、民家が想定される区の様相と大きく異なる実態は、この想定を裏付ける一つの事由になり得るのではないかと考えるのである。しかも、SB-11建物跡は、検出された遺構面からすれば、Ⅱa区の第③面と第④面であり、18世紀代に近接する上層位で検出されたものである。しかも、柱穴から出土した遺物の多くは、16世紀代の中世土師器であり、最新遺物の唐津によって、おおむね17世紀初頭以降に建てられた可能性が高いことが示されている。つまり、寺院本堂の建立は、17世紀以降の結果であり、それ以前となる15・16世紀については、後世に寺院本堂建立へと引き継がれる有力な存在が住居していた可能性を示唆するものではないだろうか。今回の調査成果のみでは、結論つけることは困難であるが、明らかに民家、町屋とは異なる建物が建てられていたエリアであることは間違いがない。後述する如く、当該地一帯は、柏崎の町中核から距離を置く東のはずれである。換言すれば、柏崎の町並みでは、東側の出入口にあたる。このような「場」は、町の境界にも相当することから、何らかの実行力を持つ施設、あるいは境界守護の親的な機



第18图 柏崎町遺跡建物跡集成图(2)



第19図 柏崎町遺跡建物跡集成図(1)

番号	遺構名	遺構種別	地区	柱穴検出遺構面	主軸方位	群別	遺物の年代観	備考
1	SX-19/20/21	石組列	I	②	N-2°-W	A1群	近代	
2	SB-1	遺跡跡	I	②	N-1°-W	A1群		
3	SA-2	柵跡	I	②	N-1°-W	A1群		建物跡?
4	SB-3	建物跡	I	②・②下	N-1°-W	A1群		
5	SB-4	建物跡	I	②下・③	N-2°-W	A1群		
6	SB-5	建物跡	I	②下・③	N-3°-W	A1群		
7	SB-6	建物跡	I	③・③上・③下・③~④	N-3°-W	A1群	16世紀~17世紀	
8	SB-7	建物跡	I	③~④・③下・④上	N-2°-W	A1群	16世紀~17世紀	
9	SB-8	建物跡	I	③~④・③下	N-4°-W	A1群	16世紀~17世紀	
10	SB-9	建物跡	I	④上	N-3°-W	A1群		
11	SB-10	建物跡	I	④上	N-4°-W	A1群	16世紀	
12	SA-19	柵跡	I	③上	N-0.5°-W	A1群		
13	SB-11	建物跡	II	③・④	N-3°-W	A1群	17世紀初~前半	
14	SB-17	建物跡	II	③	N-5.5°-W	A1群	17世紀後半	
15	SB-12	建物跡	II	④・⑤	N-1°-E	A2群	17世紀代	
16	SB-14	建物跡	II	④	N-2°-E	A2群	16世紀末以降	
17	SB-15	建物跡	II	④・⑤	N-1°-E	A2群		
18	SB-16	建物跡	II	⑤	N-10°-E	B群	16世紀後半	
19	SB-18	建物跡	II	④	N-10°-E	B群	15世紀末~16世紀初	
20	SA-20	柵跡	II	④	N-10°-E	B群		
21	SB-13	建物跡	II	④	N-19°-E	C群	17世紀前半	

第3表 柏崎町遺跡建物跡等一覧表

能をもつ施設などが、存在した可能性が高いのではないだろうか。今後の検討課題の一つとしたい。

**主軸方位による分類** 第4表は、建物跡・柵列20例の主軸方位を、南北を基準にして計測した結果であり、これらの方位をグラフにまとめると、第20図のようになる。そこでまず第20図によって、各事例が指向する方位を確認すると、大きく3グループに分類することができる。これら3群は、便宜的にそれぞれA・B・C群と呼称する。

まずA群は、おおむね真北を指向する建物跡と柵列で、I区のすべてとなる11例と、II区の5例を合わせ、16例を数えることができる。この数字は、全体の80%を占めており、本遺跡の大きな特徴とすることができる。各主軸方位における東西の振れ幅は、西へ5.5°から東へ2°であり、平均はN-1.94°-Wと

なる。この平均値は、第4表に示したように、近代の所産で町屋を区切る石脚の基礎と考えられる石組列(SX-19・20・21)の指向するN-2°-Wとほぼ同じである。この石組列が指向する方位は、現在につながる町屋の区画方位を示すものであり、したがって前述した本道跡の特徴とは、現在につながる町屋区画に整合するものとする事ができる。

これらA群について、事例数が多いことから細分を試みると、東西のいずれを指向しているかを視点とすれば、西側を指向するA1群は13例となり、平均値はN-2.69°-Wとなる。また東を指向するA2群は3例で、平均値はN-1.33°-Eとなり、各群は3°ほどの誤差を生じる。後者となるA2群の3例は、すべてII区である。

B群は、N-10°-Eを指向するII区の建物跡2棟(SB-16・18建物跡)と櫛列1基(SA-20櫛跡)である。重複関係は、SB-16とSA-20が可能性を持つのみで、確実に重複する事例はない。この点は、柱穴出土遺物の時期が示す15世紀末から16世紀にかけての古い時代に、II区周辺で統一的に整備された結果を示している可能性が考慮される。

C群は、SB-13建物跡とした1棟である。事例が少ないことから、認識の可能性を否定できない。

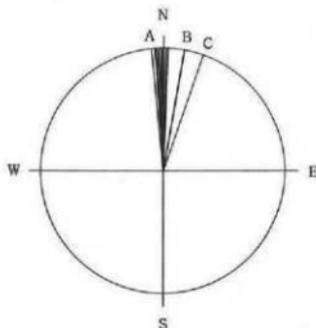
**主軸方位と変遷** さて、大きく3類に分類した各建物跡等について、それらが検出された遺構面と、柱穴内から出土した遺物によって示される年代観を検討し、変遷的な状況の有無を確認したい。

まずA群についてであるが、すでに前述した如く、現代の町割と共通する近代の石組列(SX-19・20・21)は、N-2°-Wの方位を指向しており、この方位を指向する本群は、近代に近い年代観で捉えることができる。また、N-2°-Wの方位は、現在の町屋の区画方位を示し、基準線となる本町通りに直交して設定されたものである。したがって、当該方位への指向は、現町並形成に向けた統一への流れと受け止めることができるため、A群は柏崎町形成史にとって大きな画期を示すことになる。

そこで、現在の区画に最も近い方位を指向するA1群の建物跡・櫛列を見てみたい。まずI区検出の11例はすべて本群に分類されてしまい、変遷等を追うことはできない。ある程度の年代観を示せるのは第4表のとおり4例だけであるが、いずれも遺物量が少なく、時期を特定することは難しい。しかし、第④上面検出のSB-10建物跡は、細片ながら中世土師器のみが出土しており、遺構面の年代観を合わせると、16世紀でも前半代に限定できる可能性を持っている。したがって、I区では16世紀以降、建物の主軸方位は変化することがなかった可能性が高くなる。

II区のA1群2例は、SB-11建物跡が17世紀初頭から前半、SB-17は17世紀後半となり、遺構検出面も上位となる。これらに対しA2群3例のうち、遺物が検出された2例では、SB-12建物跡が17世紀前半、SB-14建物跡は16世紀末以降であり、前述のA1群の時期に近接した年代観となっている。したがって、II区におけるA群の多くは17世紀代の所産とした年代観で捉えることがほぼ妥当と考えられ、この段階となる17世紀前半頃には、N-2°-Wへの方位的指向と、都市整備が行われていた可能性が高いことになる。

B群は、II区の3例だけであり、A群と比すればかなり少ない。指向する方位はいずれもN-10°-E



第20図 建物跡等主軸方位

であり、誤差がほとんどないことを特徴とする。これら3例の内、2棟の建物跡は、SB-18建物跡が第④遺構面、SB-16建物跡が第⑤遺構面と検出遺構面が異なり、両者は10mの距離を隔てながら方位をそろえている。遺物から見た各建物跡の年代観は、16世紀後半代(SB-16建物跡)と15世紀末～16世紀初頭(SB-18建物跡)とされており、同じ遺構面検出のA2類より年代観が古く位置付けられている。

C群唯一の事例となるSB-13建物跡は、N-19°-Eと大きく東に振れ、第④遺構面から検出されたもので、年代観は17世紀前半代となる。重複関係を見ると、A2類の3棟と重複もしくは近接しており、少なくともSB-15建物跡を除けば同時存在の可能性はない。両者の前後関係は、A2群が現代に連なる方位とすれば、C群はA群より古く位置付けられる必要がある。また、このC群であるSB-13建物跡は、B群のSB-16建物跡とも重複しており、両者の関係は、建物跡の年代観からすれば、SB-13建物跡を新しく認定することになる。したがって、これら3群の関係からすれば、B群→C群→A群と言う流れとなるが、この場合Ⅱ区の建物跡主軸方位は、かなり変動が大きかったことになる。しかし、ある程度の町並みが成立し、砂丘斜面の立地とすれば、道路などの路線が大きくうねることは考えにくく、C群であるSB-13建物跡をB群からA群の中間へ挿入することに躊躇せざるを得ない。このため、C群の存在については、とりあえず保留とし、SB-13建物跡の可否も前述のとおり今後の検討に委ねたい。

さて、以上の検討をまとめると、C群を保留した場合、少なくともB群からA群への流れは間違いがなく、A群の建物跡等が建ち並び景観の成立は、現在の本町通りの景観に近い状況を想定することができる。このような柏崎の町並み形成に関わる画期は、A2群であるSB-14建物跡の16世紀末以降、あるいはSB-11建物跡の17世紀初～前半という年代観からすれば、おおむね17世紀初頭頃に通る可能性が高いのではないだろうか。今回の調査では、これ以上の言及は難しいが、消去法的に求められた現段階での年代観として指摘しておくことにしたい。

#### 4) 柏崎町の幹線通りと景観

東本町1丁目東部における15世紀以降の遺跡範囲は、平成11年度に行われた確認調査等の成果から、現本町通りの南側にも広がっていたことが確認されている。遺構の存在が確認されているのは、主に17・18世紀以降であり、16世紀以前については確認された範囲や位置が限定されているため、明確ではない。しかし、確かな遺跡の広がりが認められること、さらに確認された包含層や遺構確認面等の層位は顕著な高低差があることが確認されている。

本町通りもしくはこれに類する道路の存在は、今回の調査区域において具体的に検出されていない。したがって、その存在を考古学的に証明することはできないが、現本町通りの南北では高低差が大きいことから、中位において東西を貫く道路の存在は必要不可欠であり、調査区域で検出された建物跡の並び方も東西道路の存在を肯定する。つまり、今回の調査区南側に東西を貫く道路の存在が想定されるのであり、それは現本町通りの位置と重なってくるのである。

現在の姿を元に過去を類推することは、先入観の支配により真実を見誤ることになりかねないため、現に慎まねばならないが、前項での建物跡やその主軸方位等の検討を踏まえれば、17世紀以降は大きく異なる景観が想定できそうである。このことは、現市街地の景観は、17世紀にその原型がほぼ形成され、その後の展開は、その延長線上にあることを意味する。したがって、想定されるこの道路は、現在の本町通りと同じ意味を持っていた可能性も高いことになる。

ところで問題は、16世紀以前の姿である。Ⅱ区から検出された建物跡群は、16世紀末まで主軸方位が一

定せず、順次指向する主軸方位を変えていた。この変化の背景となった要因は明らかにし得ないが、砂丘形成における飛砂の動向、砂丘下の基盤は軟弱な柏崎層という沖積層であることからくる地盤沈下など、さまざまな自然的営利による地形変化が想定されるのではないだろうか。道路は自然地形の変化に合わせて、その位置やルート等法線に僅かな変更を行ったとしても不思議ではない。

また、I区における第④面～第⑥面の遺構状況を見ると、建物跡のプランは北側の一部を漸く検出し得たのみであったことに対し、II区ではSB-16建物跡のように南辺まで把握できていることは、基準となる道路が直線ではなかったことが理解できる。したがって、16世紀以前におけるこの道路は、ルートのには大まかに定まっていたとしても、直線道路として都市計画の中に厳格に位置付けられた道路ではなく、一般集落内における道路と大きな大差がなかったのではないだろうか。

このように考えてみると、16世紀以前と17世紀以降とでは、東本町側に形成された集落の位置付けが大きく異なってくる。つまり、16世紀以前は、西本町に発展した柏崎町の隣接地として集落形成がなされたが、それは柏崎町の中としての位置付けではなかったことになる。ただし、地形的には一連の砂丘地であり、類似した町並が断続的に形成されていた可能性は否定できない。そして、17世紀において、それまでの幹線道路は、西本町側の大通りと連続する直線的な都市計画道路として整備されることによって、名実ともに柏崎町に組み入れられたと考えられるのである。

ただし、I区における建物跡の主軸方位は、遅くとも16世紀以降現代まで大きな変化がないことから、計画的な都市づくりがなされていた可能性も残されている。したがって、上述の見解は、東本町の一面に対して実施した僅かな調査結果から類推したものであり、今後の調査や検討と合わせ、再度吟味したい。

## 5) おわりに—課題と展望—

柏崎町は、中世以降、鶴川河口付近の湊を中心にして発展した。これが一般的な認識であった。確かにこの通説は間違いではなかったが、今回実施された発掘調査によって、東本町1丁目地内においても、15世紀以降密度の濃い集落が形成されていたことが判明した。現在の鶴川河口から調査区までおよそ1km、『梅花無尽蔵』に記された「市場之面三千余家。其外深巷凡五六千戸。」は決して誇張ではなかったことになる。確かに、今回発掘調査が実施された調査区では、集落形成当初となる15世紀以降、検出された遺構密度は濃い。しかし、町の中心部であったとされる西本町側での発掘調査は一切行われておらず、鶴川河口付近から連続的に町並みが連なっていたという確実な保証はまだない。したがって、中世柏崎町の実態については、調査事例を増やし、今後慎重な検討が必要とされることは言うまでもないことである。

また、今回の調査では、15世紀から16世紀前半頃までと、17世紀以降は、遺構密度及び遺物量がともに多い。しかし、越後国主である上杉氏が支配力を直接及ぼしていた16世紀中頃から末葉にかけては、遺物量が乏しい結果となっている。ただ、遺構そのものは、幾つかの建物跡が復元されたことにより、それほど違和感はないが、遺物面からみた場合、この状況が顕著となっている。このような様子については、柏崎町全体の実情であったのか、あるいは東本町側の局地的な場面であったのか、中世柏崎町全体を理解する上では、湊の確認作業とともに西本町側での詳細な発掘調査が不可欠な事項とすることができよう。

今後へ向けた大きな課題としては、以上の他に古代末期成立とされる比角荘の実態解明がある。この課題は、今回の調査ではまったく得ることができなかった古代後期から中世前期における空白期を押えることにつながる。解決の鍵は、おそらく湊の位置の確認やその周辺部での調査にあると考えられ、中世における地方都市のあり方は、戦国期以前における柏崎町の再発見がさらに重要とされる所以である。

### 3 調査と成果のまとめ

#### 1) 調査概観

柏崎町遺跡の発掘調査は、柏崎市の旧市街地再開発事業である東本町まちづくり事業に伴って実施された。当該事業に伴う関連調査は、平成9年5月の東本町1丁目A地点を端緒に、平成11年1月～4月に実施した試掘・確認調査が実施されることになった。これら一連の調査によって、中世の遺構・遺物が確認されたことから、柏崎町遺跡として周知され、平成11年8月～12月において、柏崎東本町A地区市街地再開発事業組合が実施する事業地の内、A1ブロックに対し本発掘調査が実施されたものである。

発掘調査区域には、既設建造物により大きく攪乱を受けた箇所があり、また新設建造物による破壊を免れる箇所を除いて本調査対象としたため、調査区は若干の距離を隔てながら3区に分割されることになった。最も東側をⅠ区とし、西側へⅡ区、Ⅲ区と設定し、各地区の呼称はA1-Ⅰ区等とした。本発掘調査の着手は平成11年7月5日、撤収を除いた調査業務の現場作業終了は同年12月18日となった。

柏崎町遺跡は、柏崎砂丘に立地し、今回調査を実施した東本町1丁目地内は、砂丘地の南側斜面に位置し、冬場の強い季節風では風下に相当する。このような環境は、砂丘形成に伴う砂丘砂の堆積を早くしており、集落形成段階における遺構面を数多く累積させる結果となっている。発掘区における状況を見ると、Ⅰ区では遺構面6枚、面積695.8㎡、Ⅱa区は、遺構面延べ6枚、面積414.9㎡、Ⅱb区は遺構面4枚、面積315.9㎡、Ⅲ区では遺構面延べ5枚、面積1,395.8㎡、調査区全体では2,822.4㎡を調査した。なお、Ⅱ区の両区は近世後期以降の遺構面を重機で除去し、掘削工事が実施される部分のみを調査したものであり、面的な調査の実施までは至っておらず、建物の基礎以外となる工事区域には、遺物包含層とともに各遺構面が残されている。

#### 2) 調査成果の概要

今回の発掘調査は、中近世における柏崎町に対して実施されたはじめての発掘調査であったが、これは柏崎市の旧市街地においても同じである。中世における柏崎町は、鶴川河口付近にあった湊を中心に栄えたといわれているとおり、遺跡の範囲としては西本町の鶴川寄りを中心と目され、今回調査によって東本町1丁目地内まで及ぶことが判明した。しかし、中世を主とする柏崎町遺跡の範囲は、今回調査したA1-Ⅰ区の東側、つまりBブロック域では、遺構・遺物が極めて希薄であり、Ⅰ区において検出されている2m近い遺物包含層も確認できなかった。この結果を尊重すれば、遺跡の範囲はA1-Ⅰ区を東の限りとすることになる。

以下、調査成果の概要をまとめたいが、西本町側が未調査のため一切不明なことから、今回は調査区域となった東本町1丁目地内の状況に限定してまとめてみたい。

前述したように柏崎町遺跡は、砂丘砂の堆積が早く、各期の遺構面が累積していることを大きな特徴とする。今回の調査では、上層位を一部重機で除去しているが、各遺構面を個々に検出し、分層発掘として実施した。これら遺構面については、上下関係の各層を検討し、第Ⅰ～第Ⅴ遺構面まで5枚に総括した。

集落の時期については、15世紀代から現代まで、ほぼ連続的に形成されていたことがまず確認された。15世紀代から16世紀にかけては、当該地点における集落形成初期にあたるが、遺構密度はその当初から濃く、遺物出土量も15世紀後半以降増加する。16世紀中葉から後葉にかけては、遺物の出土量は減少するが、

建物跡等の遺構は継続的に造営されている。17世紀になると遺構・遺物とも最大限に密度を濃くし、18世紀以降へと連続する。また、建物跡の主軸方位は、Ⅰ区とⅡ区において、 $N-2^{\circ}-W$ におおむね統一される。このことから、建物の造営に関わる基準として、幹線的な道路の存在を想定することができる。この点は、16世紀代まで、Ⅱ区において建物跡の主軸方位が一定せず、道路そのものも自然地形に沿うかたちで存在し、一般的な集落に近い状況にあったと考えられる。

しかし、これら建物跡の主軸方位が一定し、すべて同じ方位を指向するようになった現象の背景には、直線的な道路整備を考慮する必要がある。この場合、西本町における通りの延長として直線道路が整備され、両者が一体的な町に再整備された可能性が高いことを示唆する。したがって、これらの変化がうかがえる16世紀末から17世紀前葉頃が、当該調査区域における大きな画期であったと考えられる。

集落を構成する遺構群等の様相については、建物跡・土坑墓・井戸・鍛冶炉等で大まかな概要がうかがえる。まず、土坑墓は第Ⅳ遺構面のⅠ区において集中しており、概して面的な広がりをもつことから墓地等が形成されていた可能性が高い。井戸は、第Ⅲ遺構面において特に多く検出されているが、集中するのはⅠ区であり、やや西寄りに偏っていることがうかがえる。Ⅱ区については、第Ⅱ遺構面の北東隅に分布が認められることから、Ⅰ区からⅡ区にかけての中間にまとまっていた可能性がある。鍛冶炉は、Ⅰ区において第Ⅲ遺構面から第Ⅰ遺構面まで、建物跡とともに検出されており、鍛冶職人等の居住が類推できる。したがって、Ⅰ区においては、町屋であった可能性が高いことになるが、鍛冶炉の存在に限れば、Ⅰ区の南側となる本町通りの反対側でも幾つか検出されており、鍛冶職人等が集中していた街区が存在した可能性が考えられる。

建物跡の様相については、Ⅰ区において南北に長い町屋形式の建物跡が主体であることに對し、Ⅱ区では東西に長い建物跡が多く、相対的に規模が大きいという特徴が見出されている。特に、第Ⅱ遺構面からは、寺院本堂と同じ形式の建物跡も確認されており、両地区では建物跡の様相が大きく異なっている。このため、Ⅰ区では当初から町屋が建てられるエリアであったが、Ⅱ区ではその当初から趣を違え、一般的な民家(町屋)とは異なる施設の存在、もしくは在地における有力者等の居宅などが想定できそうである。

なお、Ⅲ区については、遺構の様相を把握できず、今回の検討からは保留せざるを得なかったが、遺物の出土量は、他の調査区より格段に多くなっていた。したがって、さまざまな疑問点は残るが、西本町側に集落の本体、すなわち柏崎町の中心部が広がっている可能性を示唆する結果が得られている。

今後の課題としては、すでに前節でも述べたように、柏崎町中心部と考えられている西本町側における発掘調査の実施、そして溪の存在やその位置を確認することなどが掲げられる。今後、柏崎遺跡の実態解明に対しては、調査事例を増やし、データを蓄積しつつ検討を深めていくことが必要である。

〔引用参考文献〕

- 市村清貴 1990『戦国争乱と柏崎』『柏崎市史』中巻 柏崎市史編さん委員会編
- 岩田 隆 1997『越前国における陶磁器の流通』北陸中世土器研究会編『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 大嶋康二 1993『肥前陶磁』（考古学ライブラリー55）ニュー・サイエンス社
- 荻野正博 1983『越後国中世在園の成立』『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 荻野正博 1986『荘園と国衙領』『新潟県史』（通史編 原始・古代）新潟県
- 小野正敏 1982『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1989『戦国から近世へ、越前陶の生産の実態—平等岳ノ谷窯跡群の調査より』『北陸における越前陶の諸問題』（第2回北陸中世土器研究会資料）北陸中世土器研究会
- 柏崎市教育委員会 1985『羽羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5号）柏崎市教育委員会
- 柏崎市教育委員会 1998『柏崎市の遺跡Ⅵ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第29巻）
- 柏崎市教育委員会 2000『柏崎町遺跡—第2次試掘確認調査—』『柏崎市の遺跡Ⅸ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第33集）
- 柏崎市史編さん委員会編 1983『柏崎の地質』（柏崎市史資料集地質篇）柏崎市
- 柏崎市史編さん委員会編 1985『明治・大正・昭和（写真資料）下巻』（柏崎市史資料集 近現代篇3下）柏崎市
- 柏崎市史編さん委員会編 1987『柏崎の古代中世史料』（柏崎市史資料集古代中世篇）柏崎市
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 坂井秀彦 1983『歴史的背景と栗原遺跡の性格』『栗原遺跡—第6次発掘調査概報—』新潟県教育委員会
- 品田高志 1998『中世の柏崎町と市街地の形成』『柏崎市の遺跡Ⅵ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第29巻）柏崎市教育委員会
- 新沢佳大 1970『柏崎編年史』上巻 柏崎市
- 新沢佳大 1990『近世郷村と柏崎町の成立』『柏崎市史』中巻 柏崎市
- 新宿区内藤町遺跡調査会編1992『東京都新宿区 内藤町遺跡』第Ⅱ分冊〈遺物編〉東京都建設局・新宿区内藤町調査会
- 鈴木公雄 1988『出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通』『社会経済史学』53—6
- 田中照久 1994『越前窯の歴史』『越前古陶とその再現—九谷御土の記録—』出光美術館
- 續 伸一郎 1995『中世後期の貿易陶磁器』中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 永井久美男編 1998『近世の出土銭Ⅱ—分類図版編—』兵庫埋蔵財調査会
- 藤澤良祐 1991『瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 瀬戸市 歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1993『瀬戸・美濃大窯の編年』瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史陶磁Ⅳ 瀬戸大窯の時代』瀬戸市
- 藤澤良祐 1996『中世瀬戸窯の動態』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム 古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—資料集』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 三井田忠明 1990『大火と消防』『柏崎市史』下巻 柏崎市史編さん委員会編
- 水澤幸一 1997『瓦器、その城館的なもの—北東日本の事例から—』北陸中世土器研究会編『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 水澤幸一 1999『瓦器、その城館的なもの—北東日本の事例から—』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 宮田進一 1997『越中瀬戸の変遷と分布』北陸中世土器研究会編『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 村山教二 1990『中世における柏崎市域』『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん委員会編
- 森田 勉 1982『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 矢田俊文 1997『文書・日記が語る北陸中世北陸のムラとマチと流通—』北陸中世土器研究会編『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 山本信夫 1995『中世前期の貿易陶磁器』中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米沢 康 1976『古代北陸道の伝馬制について』『信濃』第28巻第5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980『大宝2年の越中四郡分割をめぐって』『信濃』第32巻第6号 信濃史学会
- 和島村教育委員会 1994『八幡林遺跡』（和島村埋蔵文化財調査報告書第3集）
- 渡辺三四一 1991・1992『マチの民俗空間とその変容（上・下）—近世後期以降の柏崎町（市）を例に—』『柏崎市立博物館館報』No.5・6 柏崎市立博物館

# 調 査 体 制

- 調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一  
 総括 小林清緒 (文化振興課長)  
 管理・庶務 猪爪一郎 (文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長)  
 調査担当 品田高志 (文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査・学芸員)  
 調査員 中野 純 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員)  
 伊藤啓雄 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員)  
 平吹 靖 (文化振興課埋蔵文化財係学芸員)  
 横田忠義 (文化振興課埋蔵文化財係工務員)  
 渡辺富夫 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託)  
 帆刈敏子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託)  
 徳間香代子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託：～平成12年3月)  
 村山幸子 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託：～平成12年1月)  
 調査補助員 黒崎和子 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)  
 大野博子 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)  
 月橋香奈子 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)  
 高橋恵美 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室：平成12年2月～係嘱託)  
 現場事務員 竹井 一 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)  
 現場作業スタッフ 石川征治・植木房吉・上野 昇・大園信一・大橋 勇・大矢 昇・大矢忠男・  
 金子弘栄・駒形武雄・吉川富夫・五位野務・小林辰雄・小林 勉・塩浦 正・  
 中沢時春・野村 直・本間正敏・吉野徳三・若月哲夫・渡辺 茂  
 (柏崎市シルバー人材センター会員：五十音順)  
 整理作業スタッフ 吉田正樹 (文化振興課埋蔵文化財係嘱託：平成12年4月～)  
 萩野しげ子・吉浦啓子・片山和子・小林 薫 (文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かしわざきまち							
書名	柏 崎 町							
報告書名	新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	品田高志・中野 純・伊藤啓雄・平吹 靖							
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-23-5111 内線365							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		㎡	
かしわざきまち 柏崎町遺跡	にいがたけんかしわざき 新潟県柏崎市 かしわざきまち 東本町1丁目	15205	697	37度 22分 00秒	138度 33分 25秒	19990713～ 19991218	約2,822㎡	市街地再開発事 業に伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
柏崎町遺跡	集落跡	中世～近世	掘立柱建物跡・柱穴 土坑・鍛冶炉・墓壇 井戸・溝		中世土師器・珠洲焼 青花・青磁・白磁 近世陶磁器		中世柏崎町以降の市 街地 中世～近世の町屋跡	

**第4表 柏崎町遺跡遺構觀察表**

遺跡名	調査地区	遺跡位置	調査年度	調査方法	調査人員	調査期間	面積(㎡)		調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容						
							調査面積	調査長さ												
A1-1区 遺跡名	調査地区	遺跡位置	調査年度	調査方法	調査人員	調査期間	調査面積	調査長さ	調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容						
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容
															調査結果	調査内容	調査時期	調査場所	調査者	調査内容









品番	品名	単位	数量	原価	標準原価	差額	備考	仕入	業者	新年度	品名	品番	単位	数量	原価	標準原価	差額	備考
1	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...



































地区	自治会	町	丁目	番	号	面積(㎡)	用途	権利関係	築年	取引価額	標準価格	評価額	備考
1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112	1112
1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122	1122
1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132	1132
1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142	1142
1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152	1152
1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162	1162
1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172	1172
1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182	1182
1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192	1192
1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202	1202
1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212	1212
1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222	1222
1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232	1232
1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242	1242
1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252	1252
1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262	1262
1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272	1272
1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282	1282
1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292	1292
1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302	1302
1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312	1312
1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322	1322
1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332	1332
1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342	1342
1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352	1352
1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362	1362
1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372	1372
1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382	1382
1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392	1392
1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402	1402









登錄號碼	商標圖樣	類別	申請人姓名	代理人	申請日期	註冊日期	有效期限	備註
1001		1	...	...	...	...	...	...
1002		1	...	...	...	...	...	...
1003		1	...	...	...	...	...	...
1004		1	...	...	...	...	...	...
1005		1	...	...	...	...	...	...
1006		1	...	...	...	...	...	...
1007		1	...	...	...	...	...	...
1008		1	...	...	...	...	...	...
1009		1	...	...	...	...	...	...
1010		1	...	...	...	...	...	...
1011		1	...	...	...	...	...	...
1012		1	...	...	...	...	...	...
1013		1	...	...	...	...	...	...
1014		1	...	...	...	...	...	...
1015		1	...	...	...	...	...	...
1016		1	...	...	...	...	...	...
1017		1	...	...	...	...	...	...
1018		1	...	...	...	...	...	...
1019		1	...	...	...	...	...	...
1020		1	...	...	...	...	...	...
1021		1	...	...	...	...	...	...
1022		1	...	...	...	...	...	...
1023		1	...	...	...	...	...	...
1024		1	...	...	...	...	...	...
1025		1	...	...	...	...	...	...
1026		1	...	...	...	...	...	...
1027		1	...	...	...	...	...	...
1028		1	...	...	...	...	...	...
1029		1	...	...	...	...	...	...
1030		1	...	...	...	...	...	...
1031		1	...	...	...	...	...	...
1032		1	...	...	...	...	...	...
1033		1	...	...	...	...	...	...
1034		1	...	...	...	...	...	...
1035		1	...	...	...	...	...	...
1036		1	...	...	...	...	...	...
1037		1	...	...	...	...	...	...
1038		1	...	...	...	...	...	...
1039		1	...	...	...	...	...	...
1040		1	...	...	...	...	...	...
1041		1	...	...	...	...	...	...
1042		1	...	...	...	...	...	...
1043		1	...	...	...	...	...	...
1044		1	...	...	...	...	...	...
1045		1	...	...	...	...	...	...
1046		1	...	...	...	...	...	...
1047		1	...	...	...	...	...	...
1048		1	...	...	...	...	...	...
1049		1	...	...	...	...	...	...
1050		1	...	...	...	...	...	...
1051		1	...	...	...	...	...	...
1052		1	...	...	...	...	...	...
1053		1	...	...	...	...	...	...
1054		1	...	...	...	...	...	...
1055		1	...	...	...	...	...	...
1056		1	...	...	...	...	...	...
1057		1	...	...	...	...	...	...
1058		1	...	...	...	...	...	...
1059		1	...	...	...	...	...	...
1060		1	...	...	...	...	...	...
1061		1	...	...	...	...	...	...
1062		1	...	...	...	...	...	...
1063		1	...	...	...	...	...	...
1064		1	...	...	...	...	...	...
1065		1	...	...	...	...	...	...
1066		1	...	...	...	...	...	...
1067		1	...	...	...	...	...	...
1068		1	...	...	...	...	...	...
1069		1	...	...	...	...	...	...
1070		1	...	...	...	...	...	...
1071		1	...	...	...	...	...	...
1072		1	...	...	...	...	...	...
1073		1	...	...	...	...	...	...
1074		1	...	...	...	...	...	...
1075		1	...	...	...	...	...	...
1076		1	...	...	...	...	...	...
1077		1	...	...	...	...	...	...
1078		1	...	...	...	...	...	...
1079		1	...	...	...	...	...	...
1080		1	...	...	...	...	...	...
1081		1	...	...	...	...	...	...
1082		1	...	...	...	...	...	...
1083		1	...	...	...	...	...	...
1084		1	...	...	...	...	...	...
1085		1	...	...	...	...	...	...
1086		1	...	...	...	...	...	...
1087		1	...	...	...	...	...	...
1088		1	...	...	...	...	...	...
1089		1	...	...	...	...	...	...
1090		1	...	...	...	...	...	...
1091		1	...	...	...	...	...	...
1092		1	...	...	...	...	...	...
1093		1	...	...	...	...	...	...
1094		1	...	...	...	...	...	...
1095		1	...	...	...	...	...	...
1096		1	...	...	...	...	...	...
1097		1	...	...	...	...	...	...
1098		1	...	...	...	...	...	...
1099		1	...	...	...	...	...	...
1100		1	...	...	...	...	...	...





分類コード	品名	仕様	規格	単位	数量	価格	最低在庫	納期	備考
390	K-4	紙		箱	6.6	5.56	5.56		
400	K-3	紙		箱	20.3	0.6	8.1		
410	K-2	紙		箱	19.5	0.6	9.0		
420	K-1	紙		箱	22.8	10.6	4.0		
430	K-10	紙		箱	11.6	7.9	12		
440	K-11	紙		箱	11.6	11.9	11.9		
450	K-12	紙		箱	13.2	4.6	4.1		
460	K-13	紙		箱	12.9	5.0	4.4		
470	K-14	紙		箱	11.8	9.8	4.0		
480	K-15	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
490	K-16	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
500	K-17	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
510	K-18	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
520	K-19	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
530	K-20	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
540	K-21	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
550	K-22	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
560	K-23	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
570	K-24	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
580	K-25	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
590	K-26	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
600	K-27	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
610	K-28	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
620	K-29	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
630	K-30	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
640	K-31	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
650	K-32	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
660	K-33	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
670	K-34	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
680	K-35	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
690	K-36	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
700	K-37	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
710	K-38	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
720	K-39	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
730	K-40	紙		箱	11.2	11.2	11.2		
740	K-41	紙		箱	11.2	11.2	11.2		



登録番号	品名	規格	材質	寸法	重量	用途	備考	製造国	規格	分類	製造年	型式
114	上土	SX-200	鋼板	100	4.6	1.0	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
115	上土	SX-P-220	鋼板	100	4.6	1.0	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
116	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
117	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
118	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
119	上土	SX-P-210	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
120	上土	SX-P-201	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
121	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
122	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
123	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
124	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
125	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
126	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
127	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
128	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
129	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
130	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
131	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
132	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
133	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
134	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
135	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
136	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
137	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
138	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
139	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
140	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
141	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
142	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
143	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
144	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
145	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
146	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
147	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
148	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
149	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		
150	上土	SX-P-205	鋼板	100	3.6	2.1	1.0	50Y17/100	鋼板	鋼		

登録商標名	出工場名	製造原料	原料	成分	保存	製造年代	備考
150番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 上層部 1	細 A a	9.6	4.2	1.7	5 Y T / 3 C 3 A 糖
151番下	S K P - 251 b	(S B - 7・S B) 上層部 2	細 A c	6.6			2 2 Y T / 2 C 2 A 糖
152番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 中層部	細	7.1			1.2 2 3 Y T / 1 糖
153番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 上層部 2	細 A a				2 2 1 0 Y T / 2 C 2 A 糖
154番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 上層部 2	細 A a				1.3 1 0 Y T / 1 糖 (9)・1 0 Y T / 2 C 2 A 糖 (10)
155番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 中層部	細 B	26.0			2 2 2 3 Y T / 1 糖
156番下	S K P - 251 a	(S B - 7・S B) 中層部	細 B	26.0			1 0 糖 / 2 糖
157番下	S K P - 251 c 1	中層部	細 B				4 2 7 3 Y T / 1 糖
158番下	S K P - 251 c	(S B - 6・S B) 上層部 2	細 A c	9.6			1.5 1 0 Y T / 2 C 2 A 糖
159番下	S K P - 251 c	(S B - 6・S B) 上層部 1	細 A b	8.1			1.6 1 0 Y T / 2 C 2 A 糖
160番下	S K P - 251 c	(S B - 6・S B) 中層部	細 A 低			4.2 6	1.6 5 Y T / 4 C 2 A 糖
161番下	S K - 269	中層部	細 B	11.6	8.6	4.7	6.2 7 5 Y T / 4 C 2 A 糖
162番下	S K - 269	上層部 1	細 A b			2.2	7 5 Y T / 2 C 2 A 糖
163番下	S K P - 264	中層部	細 B			5.2	2 3 5 Y T / 1 糖
164番下	S K - 270	中層部	中層部	14.1	5.5	3.6	2 2 Y T / 1 糖
165番上	K - 4 ①	中層部	中層部	11.6			1 0 Y T / 2 糖
166番上	K - 4 ②	中層部	中層部	12.6			5 2 2 3 Y T / 1 糖
167番上	K - 4 ③	中層部	細 B			5.6	1.3 2 1 0 Y T / 1 糖
168番上	K - 4 ④	中層部	細 B	2.6			6.2 2 3 Y T / 1 糖
169番上	K - 4 ⑤	中層部	細 B			6.4	6.1 2 1 0 Y T / 1 糖
170番上	K - 4 ⑥	中層部	中層部	12.6	10.3	11.7	1 0 Y T / 2 C 2 A 糖
171番上	K - 4 ⑦	中層部	中層部	12.6	4.5	3.5	1 0 Y T / 1 糖
172番上	K - 4 ⑧	中層部	中層部	13.4	4.6	3.4	7 5 Y T / 2 C 2 A 糖 / 2 糖 / 3 糖
173番上	K - 4 ⑨	中層部	中層部			5.6	2.6 2 3 Y T / 1 糖
174番上	K - 4 ⑩	中層部	中層部	12.6			2.1 1 0 Y T / 4 C 2 A 糖
175番上	K - 4 ⑪	中層部	中層部	11.6			3.2 2 3 Y T / 4 C 2 A 糖
176番上	K - 4 ⑫	中層部	中層部	31.6			12.2 2 3 Y T / 1 糖



番号(調査年度)	出土状況	調査箇所	遺物	口縁	器体	器高	器径	器底径	器厚	器重	器の位置	調査年度	調査地	調査者
2143(9-0)SKP-199		SB-1 陶器	磁器	楕円	楕円						7.5YR5/4暗黒	17世紀中期		
2143(9-0)SKP-199		SB-1 陶器	磁器	楕円	楕円						4.3N4/黄緑	16世紀		
2143(9-0)SKP-199		SB-1 陶器	磁器	楕円	楕円						5Y5/オリーブ	16世紀		
2173(9-0)SKB-199		SB-1 土器器1	磁器	1	楕円						1.710YR7/4C.オリーブ			
2143(9-0)SKP-199		SB-1 土器器1	磁器	1	楕円						1.72YR8/4C.オリーブ			
2143(9-0)SKP-199		SB-1 土器器1	磁器	1	楕円						2.010YR8/7暗黒			
2143(9-0)SKP-199		SB-1 土器器1	磁器	1	楕円						10C5Y6/暗黒	V期	1780~1880年代	
2203(9-0)SD-281		磁器	磁器	楕円	小楕	6.5	3.4	5.8			2.8Y6/灰白			
2213(9-0)SD-281下瓶底-3④		磁器	磁器	瓶	瓶						5.24Y7/黄黒			
2213(9-0)SK-287b		磁器	磁器	小楕	小楕	4.2	4.2	3.6			7.6C5Y7/1暗黒			
2213(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	4.2	4.2	3.1			7.5YR5/1暗黒			
2243(9-0)SK-287b		磁器	磁器	瓶	瓶	8.0	8.0				1.50C5Y6/灰白			
2243(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	4.8	4.8				2.210YR7/暗黒			
2243(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	9.8	9.8				2.25C5Y6/灰白			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	4.6	4.6				3.50C5Y6/灰白			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	10.0	10.0				3.47C5Y6/1暗黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	12.7	12.7				3.510R5/小赤黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	14.2	14.2				3.210YR5/1暗黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	5.6	5.6				4.82Y6/灰白			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	4.2	4.2				1.26Y7/1暗黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	小楕	小楕	4.4	4.4				2.8Y7/1灰白			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	6.6	6.6				3.210YR6/1暗黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	5.6	5.6				2.24Y6/1C.オリーブ			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	17.2	17.2				3.15Y6/1灰			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	瓶	瓶	9.6	9.6				8.110R5/4暗黒			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	楕円	楕円	34.6	34.6				5Y6/オリーブ黄O.V. R.400 R.400			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	楕円	楕円	6.6	6.6				4.210Y7/2C.オリーブ			
2273(9-0)SK-287		磁器	磁器	上楕円	上楕円	6.6	6.6				1.410YR8/4暗黒			
2273(9-0)SK-287a		土器器1	磁器	1	楕円	10.8	10.8				5.24Y7/灰白			
2273(9-0)SK-287a		土器器1	磁器	1	楕円	13.0	13.0				1.47Y7/2C.オリーブ			
2273(9-0)SK-287a		土器器1	磁器	1	楕円	13.0	13.0				1.410Y7/2C.オリーブ			
2413(9-0)SKP-296		内器	磁器	楕円	楕円	12.2	12.2				2.85C6/黄			
2413(9-0)SKP-296		土器器1	磁器	1	楕円	11.1	11.1				1.71Y7/2C.オリーブ			
2413(9-0)SKP-299		土器器1	磁器	1	楕円	8.4	8.4				1.47Y7/5C.オリーブ			
2413(9-0)SK-293		陶器	磁器	小楕	小楕	6.6	6.6				2.81Y7/3暗黒			
2503(9-0)SK-293		土器器1	磁器	1	楕円	7.5	7.5				1.62Y7/3暗黒			
2513(9-0)SK-293		土器器3	磁器	3	楕円	8.2	8.2				0.87Y7/2C.オリーブ			

番号	品名	規格	単位	数量	備考	納入	品名	規格	単位	数量	備考
245①	SK-P-235	両面 肥田	個				4.0	10Y100/300高機			
245②	SK-P-278	両面 肥田	個				3.0	5Y100/140高機			
254	SK-P-148	両面 肥料	袋			8.2	4.0	10Y100/300高機			
305	SK-P-148	上層部 2	個	13.0	7.7	2.4	5Y100/140高機				
206	SK-P-148	上層部 2	個	10.4			1.5	1Y107/140高機			
257	SK-P-148	上層部 2	個	9.0	3.7	1.6	10Y107/300高機				
356①	SK-3-30	両面 肥料	個	17.4			2.0	5Y107/140高機・1Y107/300高機(高)			
356②	SK-3-30	両面 肥料	個				1.5	1Y107/140高機			
356③	SK-3-30	両面 肥料	個	13.4			6.0	10Y107/300高機			
361①	SK-3-30	上層部 2	個	14.0			2.0	10Y107/300高機			
361②	SK-3-30	上層部 2	個	10.4	3.8	2.8	1.5	1Y107/140高機(高)			
365①	SK-305	両面 肥料	個	12.0			4.0	1Y108/140高機・1Y107/300高機(高)			
364①	SK-305	上層部 1	個	14.2			2.0	1Y107/300高機			
364②	SK-305	上層部 1	個	10.0			1.0	1Y108/高機			
367①	SK-317	上層部 1	個	18.0	9.4	2.4	10Y107/140高機				
367②	SK-317	上層部 1	個	10.0			1.5	1Y107/140高機・1Y107/300高機(高)			
368①	SK-317	上層部 1	個	9.0			1.5	1Y107/140高機			
368②	SK-317	上層部 1	個	7.6			1.0	1Y107/140高機			
370①	SK-317	上層部 3	個	6.0			1.0	1Y107/140高機			
371①	SK-317#	上層部 1	個	12.4	5.6	3.1	1.5	1Y107/140高機			
372①	SK-325#	両面 肥料	個				2.0	10Y108/140高機			
372②	SK-325#	上層部 3	個				1.0	1Y107/140高機			
374①	SK-325#	両面 肥料	個				3.0	1Y107/140高機			
374②	SK-325#	上層部 1	個	13.6			2.0	1Y107/140高機			
376①	SK-328#	上層部 2	個	10.2			1.5	10Y107/140高機			
377①	SK-326	上層部 1	個	9.4	2.5	1.4	10Y108/140高機				
378①上	SK-411	上層部 1	個	11.4			1.4	10Y108/高機			
378①下	SK-411	上層部 1	個	10.2			1.5	10Y107/140高機			
380①上	SK-411	上層部 2#	個	9.4	3.0	1.4	1Y108/140高機				
381①上	SK-411	上層部 1	個	9.0			1.5	10Y107/140高機			
382①上	SK-411	上層部 3	個	7.2	2.1	1.0	10Y108/140高機				
383①上	SK-411	上層部 4	個				7.4	10Y108/140高機			
384①上	SK-422#	上層部 1	個				2.0	1Y107/140高機			
385①上	SK-422	両面 肥料	個				2.0	1Y107/140高機			
386①上	SK-422#	上層部 1	個	11.4			1.5	1Y107/140高機			
387①上	SK-422#	上層部 1	個	12.4			2.0	10Y108/140高機			
388①上	SK-P-403	両面 肥料	個	14.0			1.7	1Y107/140高機			
389①上	SK-P-403	上層部 1	個	14.0	7.4	2.1	10Y108/140高機				

品名	出上先	流通形態	産地	産地/加工	数量	口徑	直径	高さ	新式	原産地	農士の位置	輪巻の位置	規格	分類	生産年	備考
290(上)	S K P - 405			土曜日	1	皿A b	14.0			2.0	2.5YB/4E.白			良		
291(上)	S K P - 406			土曜日	1	皿A b	13.0			1.5	1.0YB/4E.白			良		
292(上)	S K P - 407			土曜日	1	皿A b	12.0			1.5	1.0YB/4E.白			良		
293(上)	S K P - 408			土曜日	1	皿A b	12.0			1.5	1.0YB/4E.白			良		
294(上)	S K P - 409			土曜日	1	皿A c	9.6			1.3	1.0YB/4E.白			良		
295(上)	S K P - 410			土曜日	1	皿A b	10.0			1.4	1.0YB/4E.白			良		
296(上)	S X - 348			陶器	特殊	特殊				5.7	5B6/7.白			式表	V期	1300~1400年代
297(上)	S X - 349			陶器	特殊	特殊				6.3	2.0YB/7.白			良	D群	15世紀
298(上)	S K - 477			土曜日	皿	皿A d	11.0			2.0	2.0YB/7.白			良	D群	15世紀
299(上)	S K - 478			土曜日	皿	皿A d	11.0			1.4	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
300(上)	S K - 479			土曜日	皿	皿A d	11.0			1.4	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
301(上)	S K - 480			土曜日	皿	皿A d	11.0			2.3	2.3Y/7.白			良	D群	15世紀
302(上)	S K - 481			土曜日	皿	皿A d	10.0			3.0	3.0Y/7.白			良	D群	15世紀
303(上)	S K - 482			土曜日	皿	皿A d	10.0			2.5	2.5Y/7.白			良	D群	15世紀
304(上)	S K - 483			土曜日	皿	皿A d	10.0			1.5	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
305(上)	S K - 484			土曜日	皿	皿A d	10.0			1.5	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
306(上)	S K - 485			土曜日	皿	皿A b	11.0			1.3	2.0YB/7.白			良	D群	15世紀
307(上)	S K - 486			土曜日	皿	皿A c	8.6			1.0	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
308(上)	S K - 487			土曜日	皿	皿A c	8.6			1.7	1.7YB/4E.白			良	D群	15世紀
309(上)	S K - 488			土曜日	皿	皿A c	10.0			4.0	4.0Y/7.白			良	D群	15世紀
310(上)	S K - 489			土曜日	皿	皿A c	14.0			2.0	2.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
311(上)	S K P - 307			土曜日	皿	皿A b	14.4			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
312(上)	S K P - 308			土曜日	皿	皿A b	12.0			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
313(上)	S K - 307			土曜日	皿	皿A b	11.0			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
314(上)	S K - 308			土曜日	皿	皿A b	11.0			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
315(上)	S K - 309			土曜日	皿	皿A b	8.6			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
316(上)	S K P - 317			土曜日	皿	皿A b	11.0			1.0	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
317(上)	S K - 304			土曜日	皿	皿A c	8.6			1.4	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
318(上)	S K - 304			土曜日	皿	皿A b	8.1			1.3	1.3YB/4E.白			良	D群	15世紀
319(上)	S K P - 300			土曜日	皿	皿A a	10.0			1.5	1.5YB/4E.白			良	D群	15世紀
320(上)	S K P - 351			土曜日	皿	皿A b	8.6			1.7	1.7YB/4E.白			良	D群	15世紀
321	南37 B 南島ビット			土曜日	皿	皿A d	10.0			2.0	2.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
322	南37 B 南島ビット			土曜日	皿	皿A d	8.6			1.4	1.4YB/4E.白			良	D群	15世紀
323(上)	S K - 302			土曜日	皿	皿A d	9.6			4.6	4.6Y/7.白			良	D群	15世紀
324(上)	S K P - 303			土曜日	皿	皿A d	9.6			2.5	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
325(上)	S K - 303第2期			土曜日	皿	皿A d	6.6			1.0	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
326(上)	S K - 303			土曜日	皿	皿A c	8.6			1.0	1.0YB/4E.白			良	D群	15世紀
327(上)	S K - 4			土曜日	皿	皿A c	8.6			1.3	1.3YB/4E.白			良	D群	15世紀

品目	出仕品名	高倉名	種類	形状	寸法	重量	口数	原産地	製造者	製法	備考
339	339(上)上 K-4①	陶器	鉢	楕円					4.10YB/灰(赤)・NS/灰	良	寛文15代
339	339(上)上 K-4②	陶器	鉢	楕円	11.0				7.2 10YB6/黒灰	良	
339	339(上)上 K-4③	陶器	鉢	楕円					2.1 N/A/灰	良	
339	339(上)上 K-4④	陶器	鉢	楕円					5.2 3.5Y4/灰(灰)	良	
339	339(上)上 K-4⑤	陶器	鉢	楕円	10.0	3.7	2.8		2.8 3Y6/灰(赤)・3Y7灰	良	18世紀
339	339(上)上 K-4⑥	陶器	鉢	小皿	10.8	5.2	2.2		2.2 3Y6/白台	良	18世紀中葉
339	339(上)上 K-4⑦	土師器	鉢	圓	14.5	7.2	2.5		7.2 YB7/灰(赤)・1.3Y7灰	中々良	18世紀後半
339	339(上)上 K-4⑧	土師器	鉢	圓	13.6	6.4	2.3		7.2 YB7/白(赤)	中々良	
339	339(上)上 K-4⑨	土師器	鉢	圓	14.5				1.2 10YB7/白(赤)	中々良	
339	339(上)上 K-4⑩	土師器	鉢	圓	12.4				2.4 10YB7/白(赤)	中々良	
339	339(上)上 K-4⑪	土師器	鉢	圓	13.6	8.6	2.0		10YB7/白(赤)	良	
339	339(上)上 K-4⑫	土師器	鉢	圓	14.2				10YB7/白(赤)	良	
339	339(上)上 K-4⑬	土師器	鉢	圓	10.2	5.2	1.4		1.2 10YB7/白(赤)	良	
340	340(上)上 K-4⑭	陶器	鉢	楕円小皿	10.5	4.5	2.0		2.3 YB7/黒灰	良	15世紀中葉—16世紀
340	340(上)上 K-4⑮	土師器	鉢	圓	14.0	6.0	2.4		7.5 YB8/4色灰	良	
340	340(上)上 K-4⑯	土師器	鉢	圓	11.2	5.6			7.5 YB8/白(赤)	良	
340	340(上)上 K-4⑰	土師器	鉢	圓	11.2	5.6			7.5 YB8/白(赤)	良	
340	340(上)上 K-4⑱	土師器	鉢	圓	11.2	5.6			1.1 10YB7/灰(赤)	良	
340	340(上)上 K-4⑲	土師器	鉢	圓	9.8				1.2 10YB7/白(赤)	良	
340	340(上)上 K-4⑳	土師器	鉢	圓	7.7	4.6	1.8		10YB7/白(赤)	良	
341	341(上)上 K-4㉑	青磁	高足	圓	12.5	4.8	5.7		7.2 YB8/黒灰	良	高台内服部 内皿ス
341	341(上)上 K-4㉒	青磁	高足	圓	12.2	4.3	5.7		10YB7/白台	良	高台内服部 内皿ス
341	341(上)上 K-4㉓	白磁	高足	圓	9.9	4.8	2.6		2.8 YB/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉔	白磁	高足	圓	10.2	4.8	2.6		2.8 YB/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉕	白磁	高足	圓	9.6	4.7	2.7		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉖	白磁	高足	圓	9.6	3.6	2.3		5Y7/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉗	白磁	高足	圓	8.0	3.8	2.5		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉘	白磁	高足	圓	8.0	3.8	2.4		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉙	白磁	高足	圓	7.8	3.8	2.5		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉚	白磁	高足	圓	7.9	3.8	2.2		2.8 YB/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉛	白磁	高足	圓	8.0	3.1	2.4		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉜	白磁	高足	圓	8.0	3.5	2.4		10YB8/白台	良	高台内服部
341	341(上)上 K-4㉝	青磁	包袋	圓	15.2				7.5 5Y7/白台	良	14世紀後半—15世紀前期
341	341(上)上 K-4㉞	陶器	肥前	小皿	11.0				1.8 YB8/白台	良	15世紀





番号	原簿名	市井誌	新集名	巻数	部数	冊数	口数	延年	高内尺	巻尺	厚尺	重量	数上の位置	題名	編者の地	編成	分類	編年	発行年代	備考
545	1-2巻( SX -318)	海防	記	27.0										1818/11月版	貞	西期	1718~1780年代	計中紀中葉		
546	1-2巻( SX -319)	海防	記	8.2	3.5	5.8							3.1018/4月版	貞	西期	1718~1780年代				
547	1-3巻( SX -318)	海防	記	8.2										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
548	1-3巻( SX -318)	海防	記	8.1	4.0	8.4								1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
549	1-3巻( SX -318)	海防	記	8.1										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
550	1-2巻( SX -318)	海防	記	18.1										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
551	1-2巻( SX -318)	海防	記	11.5										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
552	3巻( 300頁・新装ワレシヤ)	海防	記	8.5										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
553	1-2巻( SX -318)	海防	記	11.5	6.5	10.5								1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
554	1-2巻( SX -318)	海防	記	10.0										1807Y/11月版	貞	西期	1718~1780年代			
555	1-3	海防	記	18.7	8.4	13.5								1807Y/11月版	貞	V-1 葉	1808~1780年代			
556	1-3	海防	記	14.2	6.0	4.2								5037/1葉より2葉	貞	V-2-2 葉	1780~1810年代			
557	1-4	海防	記	18.1	8.1									1807Y/11月版	貞	II-2 葉	1808年			
558	1-3	海防	記	18.1	5.4	0.5	3.0	5.3						1807Y/11月版	貞	II-1 葉	1810~1820年代			
559	1-3	海防	記	18.1	3.6	5.3								1807Y/11月版	貞	V 期	1808~1860年代			
560	1-3	海防	記	18.0	4.5	7.9								507/11月版	貞	V 期	1808~1860年代			
561	1-3	海防	記	12.0										1807Y/11月版	貞	III 期	1809~1860年代			
562	1-3	海防	記	7.9										1807Y/11月版	貞	III 期	1809~1860年代			
563	1-3	海防	記	12.0										1807Y/11月版	貞	III 期	1809~1860年代			
564	1-3 ( SX -684)	海防	記	33.6	9.8	2.8								2.5Y78/7月版	貞	I-2 葉	1814年編-1816年代			
565	1-3	海防	記	11	2.0	1.0								1807Y/11月版	貞	I 期	1809~1860年代			
566	1-3	海防	記	10.8	3.2	3.1								1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
567	1-3	海防	記	12.0										1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
568	1-3	海防	記	12.0										1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
569	1-4巻( SX -645)	海防	記	11.8										1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
570	1-4巻( SX -645)	海防	記	11.8										1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
571	SX -728	海防	記	13.6										2.5Y78/7月版	貞	I-2 葉	1814年編-1816年代			
572	SX -728	海防	記	10.8										1807Y/11月版	貞	I 期	1809~1860年代			
573	SX -728	海防	記	8.9										1807Y/11月版	貞	V 期	1780~1860年代			
574	SX -728	海防	記	20	14.0	8.5								2.5Y78/7月版	貞	V 期	1780~1860年代			
575	新装5巻( SX -728 )・新装2巻( 1-4 )・新装1巻( 1-3 )	海防	記	18.4	12.0	10.8								2.5Y78/7月版( 外 ) 3.1018/4月版( 内外 )	貞	V 期	1780~1860年代			
576	SX -728	海防	記	9.0										1.5.18Y78/7月版( 外 )	貞	III 期	1809~1860年代			
577	SX -728	海防	記	9.0										2.5Y78/7月版( 外 )	貞	III 期	1809~1860年代			
578	SX -728	海防	記	9.9										3.1Y78/7月版	貞	III 期	1809~1860年代			
579	SX -728	海防	記	9.9										2.5Y78/7月版	貞	III 期	1809~1860年代			
580	SX -728	海防	記	11.2										3.10Y78/7月版( 外 )	貞	I-1 葉	1809~1860年代			
581	SX -779	海防	記	11.2										1.0Y78/7月版	貞	I-1 葉	1809~1860年代			
582	SX -779	海防	記	11.2										2.5Y78/7月版	貞	I-1 葉	1809~1860年代			



番号・源名	出上地区	産地名称	産別	製小工種	製種	口ばい	戻	選別	原産地	製法	分類・製法	時期年代	備考
800①	S D - 780	角造	肥田	肥田*	中種	13.5	4.5	5.10YR/2C-A11黄	10YR8/2.5白	戻	初期	1610~1650年代	肥田伊万郎
811①	S D - 780	角造	肥田	肥田	中種	5.8	2.3	10YR10/1C-A11黄	10YR8/2.5白	不選	初期	1610~1650年代	肥田伊万郎
823①	S D - 780	角造	肥田	肥田	中種	4.7	3.2	5YR8Y/1黄	7.5YR/1灰	戻	1~2期	1580~1650年代*	
835①	S K - 789	角造	肥田	肥田	中種	5.0	3.0	7.5YR8/1黄	7.5YR/1灰	戻	1~2期	1600年頃~1610年代	肥田伊万郎「X」
844①	S K - 789	角造	肥田	肥田	中種	4.6	1.9	10YR10/1C-A11黄	7.5YR8/1黄	戻			
856①	S K - 789	角造	肥田	肥田	中種	4.6	2.6	5YR8Y/1灰	7.5YR8/1黄	戻			
869①	S K - 789	角造	肥田	肥田	中種	8.6	4.1	10YR10/2C-A11黄	7.5YR/1灰	戻			
877①	S K - 789	角造	肥田	肥田	大種	13.1	2.7	7.5YR8/1C-A11黄	7.5YR8/1C-A11黄	戻			
888①	S K - 789	土壌部 2	土壌部	肥田	肥田	13.0	1.8	7.5YR8/1C-A11黄	7.5YR8/1C-A11黄	戻			
895①	S K - 789	土壌部 3	土壌部	肥田	肥田	9.8	4.0	2.7.5YR8/1黄	10YR8/1灰	戻			
899①	S K - 789	土壌部 4	土壌部	肥田	中種	14.1	4.1	10YR10/1黄	10YR8/1灰	戻			
899②	S K - 789	土壌部 2	土壌部	肥田	肥田	8.4	1.7	7.5YR7/1C-A11黄	10YR8/1灰	戻			
900①	S K - 789	土壌部 1	土壌部	肥田	肥田	10.0	1.1	1.5.10YR/2C-A11黄		戻			
923①	S K P - 692	土壌部 1 *	土壌部	肥田	肥田	8.0	2.7	5YR10/1C-A11黄		戻			
934①	S K P - 722	土壌部 2 *	土壌部	肥田	肥田	8.6	3.7	5YR6/1C-A11黄 + 3E/2R(P)		戻			
935①	S K P - 753b	土壌部 1 *	土壌部	肥田	中種	11.2	4.0	4.2.5YR1/1黄	10YR8/1黄	戻			
936①	S K - 779	角造	肥田	肥田	中種	11.2	4.0	8.5N3/1黄	10YR8/1黄	戻			
957①	I - 2①	角造	肥田	肥田	中種	10.0	5.2	5YR/1灰	10YR8/1黄	戻			
938①	II - 4①	角造	肥田	肥田	中種	10.8	4.1	2.5YR/1灰	10YR8/1黄	戻			
939①	II - 4①	角造	肥田	肥田	中種	11.6	4.5	10YR8/1灰	10YR8/1黄	戻			
940①	I - 2①	角造	肥田	肥田	中種	8.5	4.0	2.5YR/1灰	2.6YR8/1灰	戻			
941①	II - 3①	角造	肥田	肥田	中種	8.6	2.6	7.5YR/1灰	10YR8/1黄	戻			
942①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	13.5	4.6	2.5YR/1灰	10YR8/1黄	戻			
943①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	14.0	5.3	5YR/1灰	7.5YR/1灰	戻			
944①	I - 3①	角造	肥田	肥田	中種	6.0	4.0	1.6Y7/1灰	10YR8/1黄	戻			
945①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	13.0	4.9	10YR8/2C白	7.5YR/1灰	戻			
946①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	14.6	6.6	2.5Y7/1灰	7.6YR8/1黄	戻			
947①	II - 4①	角造	肥田	肥田	中種	13.8	4.5	10YR8/2C-A11黄	5YR/2C-A11黄	戻			
948①	II - 4①	角造	肥田	肥田	中種	11.8	4.1	10YR8/1C-A11黄	5YR/2C-A11黄	戻			
949①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	10.7	6.5	2.5YR/1C-A11黄	7.5YR2/2灰	戻			
950①	I - 2①	角造	肥田	肥田	中種	14.1	4.0	7.5YR/1灰	10YR8/1黄	戻			
951①	I - 4①	角造	肥田	肥田	大種	7.5	3.3	3.5N/1黄	10YR7/1黄	戻			
952①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	5.9	3.0	7.5YR/1黄	5YR/2C-A11黄 + 3YR8/2黄	戻			
953①	I - 2①	角造	肥田	肥田	大種	4.6	16.1	10YR8/1灰	7.5YR2/1黄	戻			
954①	I - 4①	角造	肥田	肥田	中種	14.6	2.2	2.5YR/1灰	2.5YR/1C-A11黄	戻			
955①	S K P - 787	土壌部 4	土壌部	肥田	中種	14.6	2.2	2.5YR/1C-A11黄	2.5YR/1C-A11黄	戻			
956①	I - 2①	土壌部 1	土壌部	肥田	中種	14.6	2.2	2.5YR/1C-A11黄	2.5YR/1C-A11黄	戻			
958①	I - 2①	土壌部 2	土壌部	肥田	中種	13.0	7.1	10YR8/2C-A11黄		戻			



番号/種別	出上地区	所属地	産地	産地内	口径	長さ	厚さ	重量	出上	出上年代	備考	
697a	SX-822	土師窯 4	土師窯 4	土師窯 4	11.1	3.6	2.4	7.5YR6/1 灰黄緑	土師窯 4	1500~1610年代*	見	
697b	SX-808	陶器 肥前	陶器 肥前	陶器 肥前	11.1	4.3	6.0	2.5YR6/2 灰黄緑	2.5YR6/2 灰黄緑	1期*	見	
697c	SX-808	陶器 肥前	陶器 肥前	陶器 肥前	30.8			3.5YR6/1 黄緑			見	
699	肥前窯 (SX-827・828・830)	陶器 肥前	陶器 肥前	肥前窯 (SX-827・828・830)	14.6			2.5YR6/1 黄緑			見	
700a	江-4 ① (SX-834)	土師窯 3*	土師窯 3*	土師窯 3*	14.8			2.5YR6/1 黄緑			見	
700b	江-4 ② (SX-834)	土師窯 3*	土師窯 3*	土師窯 3*	4.0	3.0		7.5YR6/1 灰黄緑			見	
700c	江-4 ③ (SX-834)	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	4.0			2.5YR6/1 黄緑			見	
700d	江-4 ④ (SX-834)	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	14.0			2.5YR6/1 黄緑			見	
701a	江-4 ⑤ (SX-834)	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	11.4			1.5YR6/1 黄緑			見	
701b	江-4 ⑥ (SX-834)	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	10.0			1.5YR6/1 黄緑			見	
701c	江-4 ⑦ (SX-834)	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.0			1.5YR6/1 黄緑			見	
701d	江-4 ⑧ (SX-834)	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.1	0.6		1.5YR6/1 黄緑			見	
701e	江-4 ⑨ (SX-834)	青磁 肥前	青磁 肥前	青磁 肥前	13.4			2.5N6/1 灰白	10YR6/2 黄緑	14世紀後半~15世紀前半	見	
701f	江-4 ⑩ (SX-834)	青磁 肥前	青磁 肥前	青磁 肥前	12.0			3.5N7/1 灰白	7.5YR6/2 灰白	15世紀	見	
710a	江-4 ⑪	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	14.0			2.5YR6/1 灰黄緑			見	
710b	江-4 ⑫	土師窯 3	土師窯 3	土師窯 3	1.4			1.5YR6/1 黄緑			見	
710c	江-4 ⑬	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	10.0			1.5YR6/1 黄緑			見	
710d	江-4 ⑭	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.8			1.5YR6/1 黄緑			見	
710e	江-4 ⑮	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.0	2.1	1.8	1.5YR6/1 黄緑			見	
710f	江-4 ⑯	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.1			1.5YR6/1 黄緑			見	
710g	江-4 ⑰	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	8.1			1.5YR6/1 黄緑			見	
716a	SE-881	磁器 肥前	磁器 肥前	磁器 肥前	14.2	7.2		3.5YR6/1 灰白	2.6Y7/1 黄白	9~7世紀	見	
716b	SE-891	磁器 肥前	磁器 肥前	磁器 肥前	10.7			3.5YR6/1 灰白	10Y6/1 灰白	V-2~3期 1700~1810年代	見	
716c	SE-881	白磁 泉佐良	白磁 泉佐良	白磁 泉佐良	10.0			1.5YR6/1 黄緑	N8/1 灰白	V期 1700~1800年代	見	
716d	江-2 ①②③ (SX-892)	磁器 肥前	磁器 肥前	肥前窯 (SX-892)	10.5			2.5YR6/1 灰白	7.5YR6/1 灰白	D群 15世紀	見	
721a	江-2 ④⑤ (SX-892)	磁器 肥前	磁器 肥前	肥前窯 (SX-892)	11.1	8.1		2.5YR6/1 灰白	10Y6/1 灰白	前期 1600~1100年代	見	
721b	江-2 ⑥⑦ (SX-892)	磁器 肥前	磁器 肥前	肥前窯 (SX-892)	11.1			4.5Y7/1 黄緑	10Y6/1 灰白	II-2 前期 1000~1050年代	見	
721c	SX-891	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	10.0			1.5YR6/1 黄緑	10Y6/1 灰白	V期 1000~1050年代	見	
721d	江-1 ①	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	10.0			2.5YR6/1 灰黄緑	2.5Y6/1 黄緑	前期 1010~1050年代	見	
725a	江-4 ①	陶器 肥前	陶器 肥前	肥前窯 (SX-892)	11.0			6.5Y6/1 黄緑		V期 1300~1400年代	見	
725b	江-4 ②	陶器 肥前	陶器 肥前	肥前窯 (SX-892)	4.9			6.5Y6/1 黄緑	10Y6/1 灰白	15世紀*	見	
727a	SE-911	土師窯 1	土師窯 1	土師窯 1	10.0			1.5YR6/1 黄緑			見	
727b	SE-911	土師窯 2	土師窯 2	土師窯 2	14.0			2.5YR6/1 灰黄緑			見	
728a	SX-D-876	土師窯 3	土師窯 3	土師窯 3	9.0	5.6	2.1	2.5YR6/1 黄緑			見	
728b	SX-D-890	土師窯 3	土師窯 3	土師窯 3	9.0	5.6	2.1	2.5YR6/1 黄緑			見	
728c	江-1 ①	陶器 肥前	陶器 肥前	肥前窯 (SX-892)	11.0			2.5N7/1 灰白	10Y6/2 黄白	10Y6/2 黄白	9~7世紀	見
731a	江-4 ①	土師窯 4	土師窯 4	土師窯 4	6.6			2.5YR6/1 灰黄緑			9~7世紀	見
732a	江-4 ②	土師窯 3	土師窯 3	土師窯 3	6.2	6.6	2.2	10YR6/2 灰黄緑			見	

品名/商標	品名/商標	原料成分	規格	用途	製造国	製造会社	製造年代
150番下 目-1番	土屋製 3	12.5	8.4	2.6	7.5YR7/2R1.5A黄褐色		
174番下 目-4番	土屋製 3		5.5		1.0YR7/2R1.5A黄褐色 1.0YR7/2R1.5A黄褐色		
152番下 目-1番	陶器 灰黒	黄			2.0Y2Y/1R		1800~1840年代
797	土屋製 3	12.5	8.4	4.5	3.0N/2R6白	7.5Y5/2R4.5	
798	陶器 赤	13.1	8.5	1.5	5.0YR7/4R1.5A	5Y5/2R4.5	15世紀後半~16世紀前半
799	陶器 赤	13.1	8.5	4.2	2.0YR7/4R1.5A	5Y5/2R4.5	15世紀後半~16世紀前半
740	目-1番	13.4	8.1	2.0	1.0YR7/2R1.5A	10YR7/1R1.5A	1600~1690年代
741	目-2番	14.8	8.4	4	3Y7/1R6白	10YR7/1R1.5A	1600~1690年代
742	アラゲ・黒丸	16.3	17.2	4.4	2.5Y5/1R6白	10YR7/1R1.5A	1600~1690年代
785	S.K-608	土庫			5Y1R6/1R1.5A		

A.1 - B.6区

品名/商標	品名/商標	原料成分	規格	用途	製造国	製造会社	製造年代
1001番	土屋製 3	13.5	13.5	3.7	3.0YR7/1R6白	5G7/1R6白	15世紀後半~16世紀前半
1002番	土屋製 3	小瓶			5Y5/1R6白		1610~1690年代
1003番	土屋製 3	小瓶			5Y7/1R6白		
1004番	土屋製 3	大瓶			N7/6R6白		
1005番	土屋製 3	小瓶	13.5	2.5	N7/6R6白	10R6/1R6	
1006番	土屋製 3	中瓶	13.2	1.1	2.5YR7/4R1.5A黄褐色 1.0YR7/2R1.5A	10Y7/1R6白	
1007番	土屋製 3	小瓶	13.6	2.2	2.5Y7/1R6白	5.0Y7/1R6白	1610~1690年代*
1008番	土屋製 3	小瓶	12.3	2.2	2.5Y7/1R6白	10Y7/1R6白	1610~1690年代*
1009番	土屋製 3	小瓶	14.3	3.0	2.0YR7/1R6白	5.0Y7/1R6白	1600~1690年代
1010番	土屋製 3	中瓶	14.7	2.0	3.0Y7/1R6	5Y5/2R4.5	1600~1690年代
1011番	土屋製 3	灯台受皿	5.6	2.5	10R6/1R6	7.5Y3/1R6	受皿口徑 6cm
1012番	土屋製 3	灰黒			5Y7/1R6白		
1013番	土屋製 3	灰黒	10.8	6.1	10Y7/1R6白		
1014番	土屋製 3	灰黒	11.2	6.2	2.5YR6/4R1.5A黄褐色		
1015番	土屋製 3	瓦			4.5Y2YR/6R		
1016番	土屋製 3	瓦	10.0	6.1	10YR6/2R6黄褐色 2.5Y3/1R6黄褐色(内)		
1017番	土屋製 3	灰黒	10.3	4.0	10YR6/2R6	5Y5/1R6白	1600~1690年代
1018番	土屋製 3	灰黒	10.3	3.2	2.5YR/1R6白	10YR7/1R6白	1600~1690年代*
1019番	土屋製 3	灰黒	10.3	2.2	2.1Y5Y/1R6白	10YR7/1R6白	17世紀後半*
1020番	土屋製 3	灰黒	10.3	4.2	2.1Y5Y/1R6白 1.0Y7/2R1.5A黄褐色	4.5Y7/2R6	1600~1690年代
1021番	土屋製 3	灰黒	13.9	1.8	2.5Y2Y/1R6白	10YR7/1R6白	1600~1690年代
1022番	土屋製 3	灰黒	12.0	4.5	10YR7/2R6黄褐色 5Y5/1R6白	5Y5/1R6白	1600~1690年代*
1023番	土屋製 3	灰黒	12.0	4.5	10YR7/2R6	7.5Y3A/6	1550~1590年
1024番	土屋製 3	灰黒	11.0	5.4	10YR7/2R6	10Y7/2R6	1550~1590年
1025番	土屋製 3	灰黒	16.0		10YR7/2R6		1604年頃~1610年代

品目・項目名	品目・項目名	数量	重量	成分	年代	備考
1029③ S D-2007	丸鉢	1口	10.8	4.2 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1700～1800年代	
1030③ S D-2007 1区	土師器 鉢	皿A B	6.9	3.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1031③ S D-2007 1区	土師器 2	皿A B	12.0	1.6 SiO <sub>2</sub> /87 / 31.2 SiO <sub>2</sub> 炭素	1800～1800年代	
1032③ S D-2007 1区	土師器 3	皿A D	12.0	1.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 32.6 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1033③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 鉢	皿	6.2	1.5 SiO <sub>2</sub> /87 / 41.6 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1034③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 小皿	小皿	13.2	2.2 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1035③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	11.8	1.8 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1036③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	10.2	2.2 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1037③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	4.1	2.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1038③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	4.1	2.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1800～1800年代	
1039③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	皿B C	11.4	2.8 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	9～9世紀	
1040③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	丸鉢	12.2	5.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1600～1600年代	
1041③ S K P-3001	S B-11 付在 土師器 肥田	中皿	11.8	3.8 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1042③ S K-2059	土師器 2	皿A C	13.2	2.1 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1043③ S K-2059	土師器 4	皿B	6.8	6.0 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1044③ G-4重 (S X-2005)	土師器 1	皿A B	10.4	1.6 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1045③ G-4重 (S X-2005)	土師器 4	皿B B	8.8	4.0 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1600～1600年代	
1046③ S K P-2053	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	11.8	4.3 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1047③ S K P-2053	S B-11 付在 土師器 肥田	大皿	14.0	4.3 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1048③ S K P-2053	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	12.6	1.8 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1049③ S K P-2053	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	4.0	1.8 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1050③ S K P-2053	S B-11 付在 土師器 肥田	小皿	20.6	2.7 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	9～9世紀	
1051③ S K-2116	丸鉢 土師器	皿	3.8	2.1 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	16世紀	
1052③ S K-2116	丸鉢 土師器	皿	14.1	3.6 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	16世紀	
1053③ S K-2116	丸鉢 土師器	中皿	11.1	2.7 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	17世紀前半	
1054③ S K-2116	丸鉢 土師器	小皿	10.2	2.6 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	16世紀	
1055③ S K-2116	丸鉢 土師器	皿A B	12.6	1.6 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.0 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	16世紀	
1056③ S D-2008 2区	丸鉢 土師器	小皿	11.4	4.5 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1057③ S D-2008 2区	丸鉢 土師器	中皿	7.8	3.9 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1058③ S D-2008 <5>	丸鉢 土師器	小皿	4.4	2.1 SiO <sub>2</sub> /86 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1059③ H-4重 (S X-2004)	丸鉢 土師器	中皿	14.1	4.0 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1060③ H-4重 (S X-2004)	丸鉢 土師器	中皿	14.6	2.3 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1061③ S K-2059	丸鉢 土師器	中皿	14.1	1.7 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1062③ S K-2059	丸鉢 土師器	大皿	11.5	2.5 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	
1063③ S K-2059	丸鉢 土師器	中皿	14.6	4.0 SiO <sub>2</sub> /87 / 42.2 Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 炭素	1800～1800年代	



番号	品名	規格	製造国	原料	成分	用途	備考
1109④	S K - 2214	神楽	神楽	前作/新法・新1/1 前作/新法・新1/1 前作/新法・新1/1	良		
1099④	S K - 2214	神楽	神楽	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1100④	S K - 2214	土曜	土曜	1.4/1.4/1.4/1.4/1.4/1.4	中～良		
1101④	S K - 2214	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1102④	S K - 2214	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1103④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1104④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1105④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1106④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1107④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1108④	S K - 2208	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	中～良		
1109④	S X - 2215	土曜	土曜	1.2/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1110④	S X - 2215	土曜	土曜	1.2/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1111④	S X - 2215	土曜	土曜	1.2/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1112④	S D - 2206	土曜	土曜	1.7/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1113④	S D - 2206	土曜	土曜	1.7/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1114④	S K - 2206	土曜	土曜	1.7/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1115④	S K - 2206	土曜	土曜	1.7/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1116④	S D - 2216	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1117④	S D - 2216	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1118④	S D - 2206	土曜	土曜	2.1/2.1/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1119④	S K P - 2225	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1120④	S D - 2204	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1121④	S K P - 2207	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1122④	S K P - 2218	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1123④	S K P - 2221	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1124④	S K P - 2210	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1125④	S K P - 2223	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1126④	H - 4 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1127④	H - 3 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1128④	G - 2 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1129④	H - 3 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1130④	G - 4 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1131④	G - 2 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1132④	G - 2 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1133④	G - 4 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1134④	S K - 2227	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代
1135④	G - 4 ④	土曜	土曜	1.0/1.7/2.1/2.1/2.1/2.1	良	1～2期	1585～1600年代

番号	品名	規格	重量	寸法	材質	製造	備考
1150	台-2	鋼板	16.2	3.0	10718/10718/16白	10718/10718/49-7灰	1600~1800年代
1151	台-3	鋼板	10.8	3.8	10718/20白	10718/20白	1800年代~1900年代
1152	台-4	鋼板	12.6	5.1	10718/20白	10718/20白	1800年代~1900年代
1153	台-4	鋼板	10.6	3.6	7.5Y186/7に白(鋼板)・2.5Y186/7に白(鋼板)・2.5Y186/4に白(鋼板)	10718/20白	1800年代~1900年代
1154	台-4	鋼板	11.6	4.8	10718/20に白(鋼板)	10718/20に白(鋼板)	1800年代~1900年代
1155	台-4	鋼板	5.2	2.6	10Y186/20鋼板	2.5Y186/20鋼板・10Y186/20鋼板	1800~1900年代
1156	台-4	鋼板	6.8	3.6	10Y186/20白	2.5Y186/20白	1800~1900年代
1157	台-4	鋼板	12.9	3.0	10Y186/20鋼板	2.5Y186/20鋼板	1800~1900年代
1158	台-2 (S X -2076)	鋼板	4.6	4.3	10Y186/18白	10Y186/18白	
1159	台-4	鋼板	4.8	8.2	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1160	台-4	鋼板	5.8	4.4	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1161	台-3	鋼板	12.2	5.2	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1162	台-3	鋼板	20.6	4.8	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1163	台-2	鋼板	10.0	6.3	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1164	台-2	鋼板	12.6	4.8	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1165	台-2	鋼板	11.2	6.5	10Y186/18鋼板	10Y186/18鋼板	
1166	台-3	鋼板	10.2	2.4	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1167	台-3	鋼板	16.6	2.4	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1168	台-4	鋼板	12.6	2.4	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1169	台-4	鋼板	12.4	8.3	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1170	台-4	鋼板	8.3	3.1	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1171	台-4	鋼板	14.2	3.0	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1172	台-4	鋼板	8.3	3.0	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1173	台-4	鋼板	10.2	2.6	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1174	台-4	鋼板	9.6	3.3	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1175	台-4	鋼板	22.2	6.8	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1176	台-4	鋼板	22.8	14.0	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1177	台-4	鋼板	15.6	3.0	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	
1178	台-4	鋼板	15.6	3.0	10Y186/20鋼板	10Y186/20鋼板	

番号	産地	産種	産場	産期	産量	単位	特徴	備考
1170	上北地区	青丘 砂抜畑	粗	12.6	7.4	2.40YR/7/灰白	2.60Y7/7黄キヨ-7灰	B 1 級 19世紀後半～19世紀前半
1174	G-2 巻	鹿野 鹿野	小巻	7.2	1.2	2.12YR/7/灰白	100YR/11極黄緑	B-2 巻 1600～1650年代
1175	G-2 巻	鹿野 鹿野	小巻	3.6	4.8	2.8N/7/極白	907/11弱紫	
1176	東本町干地区表層	鹿野 鹿野	大巻	13.2		5.2L5YR/7灰白	10YR8/4極黄緑	
1177	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗巻	11.0		6.2L5YR/7灰白	2.5YR8/3c2.4L赤間	不明
1178	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗巻			3.7.2.5YR/1灰(赤)・NS/0		
1179	鹿野 鹿野	越中巻	粗巻	9.2		1.6.10YR8/4極黄緑		
1180	A-Ceト	瓦源	鹿野			NS/7弱灰・NS/9弱・NS/9弱灰		
1181	G-2 巻	土師部 2	粗Aa	14.6	8.0	2.8YR7/4c2.4L赤間		
1182	G-2 巻	土師部 1	粗Aa	14.0	7.4	10YR8/4c2.4L赤間		
1183	G-2 巻	土師部 1	粗Ab	14.8	2.2	2.10YR8/4c2.4L赤間		
1184	G-2 巻	土師部 1	粗Aa	9.6	2.1	10YR8/4極黄緑		
1185	G-2 巻	土師部 1	粗Ba	13.0		2.10YR7/2c2.4L赤間		
1186	G-2 巻	青紐 鹿野	粗	18.6		2.4.3N/7/極白	10YR/2キヨ-7灰	
1187	G-2 巻	鹿野 鹿野	大巻	16.0		2.10YR7/7/灰白	10YR/7キヨ-7灰	
1188	H-4 巻	青紐 鹿野	粗	6.8	4.8	2.5.5.5/7(灰赤)・2.5YR/7灰	90YR/1キヨ-7灰	
1189	H-4 巻	白根 鹿野	粗	9.8		2.10YR8/3極黄緑	7.8YR/7灰白	
1190	G-2 巻	白根 鹿野	粗	10.6		10YR/7/極白	10YR/7灰白	
1191	G-2 巻	鹿野 鹿野	越中巻	10.2	4.2	2.8.10.5(赤赤)・7.5YR/7灰	90YR/1キヨ-7灰	
1192	G-2 巻	鹿野 鹿野	小巻	16.2		NS/7弱灰・NS/7弱灰	50YR/1弱キヨ-7灰	
1193	G-2 巻	鹿野 鹿野	小巻	11.4	4.4	2.2.2.5YR/7/灰白	100YR/11極灰	
1194	G-2 巻	鹿野 鹿野	大巻	11.4	4.8	2.10YR7/7/灰白	7.8YR/7弱黄	
1195	G-2 巻	鹿野 鹿野	小巻		5.1	2.7.5Y/7/極白	50YR/7灰白	
1196	H-2 巻	鹿野 鹿野	小巻		8.2	2.2.2.5Y/7(赤赤)・4.5YR/7灰	10Y/7/灰白	1600年頃～1800年代
1197	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗			4.6.5YR/7粗灰	1-2 巻	
1198	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗	32.2	7.0	2.5YR/7(灰赤)・NS/0	5YR8/7弱黄	
1199	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗巻			2.5YR/7灰	ヤ中巻	1600～1800年代
1200	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗巻			2.5YR/7(灰赤)・7.5YR/7灰	粗巻	1400～1470年代
1201	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗巻			2.5YR/7(灰赤)・2.5YR/7灰	粗巻	
1202	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗巻			2.5YR/7(灰赤)・7.5YR/7灰	粗巻	
1203	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗巻			7.5YR/4c2.4L赤間・NS/0	粗巻	
1204	G-2 巻	鹿野 鹿野	粗巻		8.5	2.2.2.5Y/7(灰赤)	粗巻	18世紀～
1205	東本町干-1 トロフオ 下層	土師部 1	粗Aa	9.0		6.5YR/1(灰赤)・7.5YR/7灰		表1 中の白石泥を多く含む。内面の厚積層無し。
1206	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗Aa	14.2		1.2.10YR8/2c2.4L赤間		
1207	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗Ac	15.0		1.10YR8/4(極紫)・10YR7/粗		
1208	H-4 巻	鹿野 鹿野	粗Aa	13.8		2.10YR7/2c2.4L赤間	ヤ中巻	

番号/産地	品名	産地	品種	口径	体長	体高	産年	産月	産日	飼料	飼育期間	産後	分選	産法	取引年代
1200◎	片一(急)	土師郡	中	3.5						173Y7/7/有					
1210◎	G-2急	土師郡	1	4.8						95Y7/17/有					
1211◎	第1種小	徳野	一般改良小	11.5						107Y8/1/無					1700~1810年代
1212◎	第1種中	徳野	一般改良中	13.5						50Y8/1/有					1700~1810年代
1213	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.6						23Y8/1/有+1802/1					試製産出
1214	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.6						23Y8/1/有					試製産出
1215	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.6						23Y8/1/有					試製産出
1216	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.6						23Y8/1/有					試製産出
1217	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	11.4						23Y8/1/有					試製産出
1218	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.8						23Y8/1/有					試製産出
1219	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.8						23Y8/1/有					試製産出
1220	徳本町1-1トレンチ S	徳野	中	10.8						23Y8/1/有					試製産出
1242	SD-2005 3区	徳野	小	7.2						23Y8/1/有					試製産出
1243◎	片一(急)	土師郡	中	3.5						23Y8/1/有					試製産出

A1-甲区

番号/産地	品名	産地	品種	口径	体長	体高	産年	産月	産日	飼料	飼育期間	産後	分選	産法	取引年代
1301◎	SD-1001	徳野	中	21.5						23Y8/1/有					
1302◎	SX-1002	徳野	中	11.6						27.0Y8/1/有					1700
1303◎	SX-1003	徳野	中	6.6						1.110Y8/1/有					
1304◎	SX-1007	徳野	中	11.4						23Y8/1/有					
1305◎	C-4急 (SX-1040)	徳野	中	11.4						23Y8/1/有					
1306◎	C-4急 (SX-1040)	徳野	中	11.6						23Y8/1/有					
1307◎	SX-1007下	徳野	中	9.9						23Y8/1/有					
1308◎	SX-1007下	徳野	中	8.1						23Y8/1/有					
1309◎	SD-1001	徳野	中	6.6						1.23Y8/1/有					
1310◎	SD-1001 3区	徳野	中	3.0						1.83Y8/1/有					
1311◎	SD-1001 3区	徳野	中	12.9						2.45Y8/1/有					
1312◎	SD-1001 3区	徳野	中	12.0						1.23Y8/1/有					
1313◎	SD-1001	徳野	中	20.6						23Y8/1/有					
1314◎	SD-1001	徳野	中	14.0						2.10Y8/1/有					
1315◎	SD-1001 3区	徳野	中	16.0						2.45Y8/1/有					
1316◎	SD-1001 2区	徳野	中	11.2						2.45Y8/1/有					
1317◎	SD-1001 1区	徳野	中	11.2						2.45Y8/1/有					
1318◎	SD-1001	徳野	中	11.6						2.45Y8/1/有					
1319◎	SD-1001 3区	徳野	中	12.6						2.45Y8/1/有					
1320◎	SX-1002A+C+D	徳野	中	12.6						23Y8/1/有					1800~1700年代

番号/原形名	品名	製造者	製法	成分	規格	用途	製造年代
1522①	SX-1043	電器 磁器	式守窯	15.6	2.10Y7R/0R白	5GYR/1R白	1650~1660年代
1523①	SX-1043	磁器 磁胎-散灰豆中焼		11.3	7.5Y7R/2R赤	7.5Y7R/2R赤	1660~1740年代
1524①	SX-1043	磁器 磁胎-散灰豆中焼		6.5	6.1 7.5Y7R/2R赤	7.5Y7R/2R赤	1660~1740年代
1525①	SX-1040A+S+C・D①	磁器 磁胎-散灰豆中焼		11.3	4.6 2.1GYR/0R白	7.5Y7R/2R赤	1660~1740年代
1526①	SX-1043	磁器 磁胎		10.3	3.6 6.1 2.1GYR/0R白	7.5Y7R/1R白	1660~1750年代
1527①	C-4④(SX-1066)	磁器 磁胎	皿	13.5	5.6 2.1GYR/0R白	10Y7R/1R白	1660~1760年代
1528①	SX-D-1021	磁器 磁胎	小皿	9.1	3.9 1.0Y7R/0R赤	10Y7R/0R赤	1620~1660年代
1529①	SX-1066	磁器 磁胎	小皿	6.3	1.8 1.7Y7R/1R白	3Y7R/1R白	1610~1650年代
1530①	C-7⑦(SX-1022)	磁器 磁胎-散灰豆中焼		4.2	3.10Y7R/1R白	5Y7R/1R白	1600~1770年代
1531①	C-7⑦(SX-1022)	磁器 磁胎	小皿	10.7	2.4 2.3Y7R/1R赤	7.5Y7R/1R赤	1590年代~1595年頃
1532①	SD-1027	陶器 磁胎	大瓶?	12.2	11.2 3.0 7.5Y7R/4E赤	切掛焼	1650~1760年代
1533①	SX-D-1026	陶器 磁胎	磁鉢	6.6	5.4 3.5Y7R/0R赤		1300~1470年代
1534①	SD-1110 2R	土器器2		4.6	2.1 7.5Y7R/4E赤		
1535①	SD-1110 2R	土器器1	皿A-d	13.6	2.1 7.5Y7R/2R赤		
1536①	SD-1110 2R	陶器 磁胎	磁鉢	10.3	6.0 7.5Y7R/1R赤		16世紀
1537①	SD-1110 1R	陶器 磁胎	磁鉢	17.4	8.2 7.5Y7R/2R赤		16世紀~
1538①	SD-1110 1R	陶器 磁胎	磁鉢	11.4	6.3 10Y7R/2R赤	7.5Y7R/0R赤	
1539①	SD-1110 1R	陶器 磁胎	磁鉢	11.4	8.1 10Y7R/2R赤		
1540①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	12.6	7.4 5Y7R/0R赤		17世紀
1541①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	13.2	2.0 10Y7R/3E赤		
1542①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	13.5	1.8 10Y7R/3E赤		
1543①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	11.3	2.4 10Y7R/2R赤		
1544①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	12.6	1.1 7.5Y7R/2R赤		
1545①	SX-1116・D-2②	土器器2	皿A-a	12.6	1.8 10Y7R/3E赤		
1546①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-d	12.6	1.8 10Y7R/3E赤		
1547①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a		1.1 10Y7R/2E赤		
1548①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-c		1.1 10Y7R/3E赤		
1549①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-a	8.2	1.2 2Y7R/0R赤		
1550①	SX-1116・D-2②	土器器2	皿A-a	8.7	1.7 2Y7R/4E赤		
1551①	SX-1116・D-2②	土器器2	皿A-a	8.7	1.7 2Y7R/4E赤		
1552①	SX-1116・D-2②	土器器1	皿A-d	8.6	1.3 10Y7R/3E赤		
1553①	SX-1117	土器器1	皿B-d	6.4	2.5 7Y7R/0R赤		
1554①	SX-1117	土器器1	皿B-a	6.6	0.8 10Y7R/4E赤		
1555①	SX-1122 1R	陶器 磁胎	小皿	15.6	1.1 7.5Y7R/4E赤		
1556①	SX-1122 2R	陶器 磁胎	小皿	6.9	3.2 2Y7R/3R赤		
1557①	SX-1122 2R	陶器 磁胎-散灰豆中焼		4.7	1.3 2Y7R/3R赤		
1558①	SX-1129	青磁 磁胎	小皿	4.7	2.0 7Y7R/1R白		
1559①	SX-1115	土器器1	皿A-a	9.2	2.0 7Y7R/1R白		
1560①	SX-1115 瓶・4	土器器1	皿B-a	7.1	1.6 7Y7R/0R赤		







集約期(昭和)	出土品名	集約品名	表層/表下層/表上層/表下層	口徑	底径	高径	底面形状	出土位置	出土状況	出土層	出土年代
1974②	D-2②	土師器 4	面ア	2.5				10YR6/1(灰黄色(黄))・ 1.5YR7/1(赤褐色(赤))・ 5YR7/1(赤褐色(赤))			
1975②	D-4②	土師器 4	面ア	2.6				0.5YR7/1(赤褐色(赤))			
1976②	D-4②	土師器 4	面ア	17.6				1.5YR7/1(赤褐色(赤))			
1977②	D-2②	土師器 2	面ア	14.9	7.2	2.2		7.5YR7/4(赤褐色)			
1978②	D-1②	土師器 1	面ア	12.4				2.5YR7/2(赤褐色)			
1979②	D-2②	土師器 2	面ア	12.6				10YR7/2(赤褐色)			
1980②	D-2②	土師器 2	面ア	12.6	6.5	2.2		10YR7/2(赤褐色)			
1981②	C-2②	土師器 2	面ア	12.0				2.5YR7/1(赤褐色)			
1982②	D-4②	土師器 4	面ア	14.2				1.5YR7/1(赤褐色(赤))・ 7.5YR7/4(赤褐色)			
1983②	D-2②	土師器 2	面ア	10.8				7.5YR7/4(赤褐色)			
1984②	D-2②	土師器 2	面ア	11.2	5.6	2.2		1.5YR7/2(赤褐色)			
1985②	D-1②	土師器 1	面ア	11.2				1.5YR7/2(赤褐色)			
1986②	D-2②	土師器 2	面ア	10.6				1.5YR7/2(赤褐色)			
1987②	D-2②	土師器 2	面ア	10.6				1.5YR7/4(赤褐色)			
1988②	D-3②	土師器 2	面ア	11.9				2.5YR7/2(赤褐色)			
1989②	D-4②	土師器 4	面ア	9.6				2.5YR7/2(赤褐色)			
1990②	D-4②	土師器 4	面ア	9.2				3.5YR7/4(赤褐色)			
1991②	D-3②	土師器 3	面ア	9.2				1.5YR7/2(赤褐色)			
1992②	D-2②	土師器 2	面ア	10.1				1.5YR7/2(赤褐色)			
1993②	D-4②	土師器 4	面ア	7.4	1.8	1.7		2.5YR7/4(赤褐色)			
1994②	D-2②	土師器 2	面ア	6.8	3.7			1.5YR7/2(赤褐色)			
1995②	D-1②	土師器 1	面ア	5.0				1.5YR7/2(赤褐色)			
1996②	D-2②	土師器 2	面ア	6.8				1.5YR7/2(赤褐色)			
1997②	D-1②	土師器 1	面ア	6.0	3.2	1.2		7.5YR7/4(赤褐色)			
1998②	B-1②	陶器	中皿	15.0				1.5YR7/2(赤褐色)			
1999②	D-1②	陶器	小皿	6.7	4.6	2.8		3.5Y7/赤白			
2000②	D-2②	陶器	小皿	12.0	4.1	3.2		赤/白			
2001②	D-2②	陶器	中皿	13.0				赤/白			
2002②	A-ベルト 2 区画	陶器	中皿	3.8	2.4	2.4YR5/4(赤褐色)		2.5YR7/1(赤褐色)			
2003②	D-2②	陶器	小皿	10.6	4.4	3.2		3.5YR5/6(赤褐色)			
2004②	D-2②	陶器	中皿	10.6	4.8			1.5YR7/2(赤褐色)			
2005②	D-1②	陶器	中皿	14.2	4.4			1.5YR7/2(赤褐色)			
2006②	A-ベルト 2 区画	陶器	中皿	8.1	2.1	1.5YR7/4(赤褐色)		赤/白			
2007②	C-1②	陶器	中皿	11.7	6.2	2.2		赤/白			
2008②	D-2②	陶器	中皿	9.6	5.6	2.5YR7/1(赤褐色)		赤/白			
2009②	D-2②	陶器	中皿	8.1	2.2	赤/白		赤/白			



番号	型名	形式	製造国	製造者	口径	銃身長	高	重	動作	弾薬	備考
1161	C-2	中銃	中国	南京	4.7	3.5	NS/96口径	18078/140口径	1906~1930年代		
1162	D-1	中銃	中国	南京	4.6	3.5	NS/96口径	25078/147口径			
1163	D-2	小銃	中国	南京	5.2	4.3	NS/96口径	18078/140口径			
1164	D-3	小銃	中国	南京	4.2	6.1	10Y18/21口径	517口径			
1165	C-1	小銃	中国	南京	7.4	6.6	3.578口径	7.62口径			
1166	D-4	小銃	中国	南京	11.6	6.6	10Y18口径	7.62口径			
1167	D-5	小銃	中国	南京	11.5	4.8	2.578口径(80%) 3.577口径(90%)	5077口径 NS口径			
1168	D-6	小銃	中国	南京	13.8	13.1	1.578口径	7.5口径			
1169	D-7	小銃	中国	南京	13.0	8.0	2.577口径	7.5口径			
1170	D-8	小銃	中国	南京	6.3	1.8	1.578口径	NS口径			
1171	D-9	小銃	中国	南京	6.5	10.8	5.0口径	7.5口径			
1172	D-10	小銃	中国	南京	5.8	1.5	NS口径	10Y18口径			
1173	D-11	小銃	中国	南京	10.0	10.0	3.578口径	2.5口径			
1174	D-12	小銃	中国	南京	7.0	3.0	NS口径	NS口径			
1175	D-13	小銃	中国	南京	11.6	3.8	4.4口径	10Y18口径			
1176	D-14	小銃	中国	南京	4.6	2.8	2.578口径	7.5口径			
1177	D-15	小銃	中国	南京	8.0	2.5	2.577口径(80%) 3.577口径(90%)	NS口径			
1178	D-16	小銃	中国	南京	12.7	2.0	2.0口径	517口径			
1179	D-17	小銃	中国	南京	11.2	2.8	3.7口径	7.5口径			
1180	D-18	小銃	中国	南京	9.0	2.8	2.5口径	7.5口径			
1181	D-19	小銃	中国	南京	8.1	2.8	10Y18口径	7.5口径			
1182	D-20	小銃	中国	南京	14.0	2.7	10Y18口径	517口径			
1183	D-21	小銃	中国	南京	13.2	1.4	10Y18口径	517口径			
1184	D-22	小銃	中国	南京	9.0	3.0	4.8口径	NS口径			
1185	D-23	小銃	中国	南京	9.0	1.8	10Y18口径	10Y18口径			
1186	D-24	小銃	中国	南京	6.8	2.0	10Y18口径	10Y18口径			
1187	D-25	小銃	中国	南京	13.2	1.8	2.5口径	7.5口径			
1188	D-26	小銃	中国	南京	14.0	1.8	10Y18口径	10Y18口径			
1189	D-27	小銃	中国	南京	5.7	2.8	2.5口径	7.5口径			
1190	D-28	小銃	中国	南京	11.6	5.8	3.0口径	10Y18口径			





品名	製造者	品名	規格	口徑	長さ	重量	貯蔵	製造の品名	製造の品名	状況	分類	単位	備	
1867	S X-K-1204	土脚部 4	直径φ 4	10.0	8.0	2.1		10Y18/10鋼板		良				
1868	S X-K-1204	土脚部 4	直径φ 4	9.0	6.4	2.2		10Y18/10鋼板・45Y18/10鋼		良				
1869	S X-K-1203	土脚部 3	直径φ 3	8.1	5.1	1.7		5Y18/74C-20鋼		良				
1870	S X-K-1201	土脚部 4	直径φ 4	6.6				10Y18/10鋼		良				
1871	S D-1245・C-20	地脚 配管	直径φ 20	5.6				7.5Y18/1鋼		良				
1872	S X B-1288	瓦葺	200	23.0				10Y18/10鋼(黒)・10Y18 45Y18/74C鋼(黒)・ 10Y18/74C鋼(赤)・ 7.5Y18/10鋼(赤・内) 2.5Y18/74C鋼(赤)・ 10Y18/10鋼(赤・内) 10Y18/10鋼		良			10~16世紀	
1873	S X B-1293	瓦葺	120	12.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1874	S X-K-1208 4区	瓦葺	120	12.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1875	C-30	竹1 炊飯籠	直 120	12.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1876	C-40	竹2 炊飯籠	直 107	10.7				2.5Y18/1鋼		良				10~16世紀
1877	C-20	竹3 炊飯籠	直 90	8.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1878	C-40	竹4 炊飯籠	直 90	8.0				5Y18/74C-20鋼		良				10~16世紀
1879	C-20	竹5 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1880	C-20	竹6 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1881	C-20	竹7 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1882	C-20	竹8 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1883	C-40	竹9 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1884	C-20	竹10 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1885	C-20	竹11 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1886	C-20	竹12 炊飯籠	直 85	7.5				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1887	Aベネト2区南上層	土脚部 2	直径φ 16.0	16.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1888	C-20	土脚部 2	直径φ 16.0	16.0				7.5Y18/74C-20鋼(黒) 7.5Y18/74C-20鋼(赤) 10Y18/10鋼(赤)		良				10~16世紀
1889	D-20	土脚部 2	直径φ 14.0	14.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1890	C-20	土脚部 2	直径φ 14.0	14.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1891	Aベネト2区南上層	土脚部 1	直径φ 14.0	14.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1892	C-40	土脚部 1	直径φ 14.0	14.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀
1893	D-20	土脚部 1	直径φ 11.0	11.0				2.5Y18/74C-20鋼		良				10~16世紀
1894	D-40	土脚部 1	直径φ 10.0	10.0				2.5Y18/74C-20鋼		良				10~16世紀
1895	Aベネト4区	土脚部 1	直径φ 10.0	10.0				2.5Y18/74C-20鋼		良				10~16世紀
1896	C-40	土脚部 1	直径φ 10.0	10.0				10Y18/10鋼		良				10~16世紀



品名・規格	品名	規格	重量	寸法	材質	製造の国	規格	分類	製造	取付形式	備考
1934◎	C-2◎	円形	18.6	4.4	4.4	10YV/18G白	10YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1935◎	C-2◎	円形	21.2	4.4	4.4	7.5YV/18G白	7.5YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1936◎	D-2◎	円形	5.6	2.8	2.8	3N/3G白	3N/3G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1937◎	D-2◎	円形	13.1	4.0	4.0	3N/3G白	3N/3G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1938◎	C-2◎	円形	4.5	2.4	2.4	10YV/18G白	10YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1939◎	C-2◎	円形	11.5	3.2	3.2	3.2YV/18G白	3.2YV/18G白	円	V-1-2型	1500~1650年代	
1940◎	C-4◎	円形	4.5	4.8	4.8	4.8YV/18G白	4.8YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1941◎	C-4◎	円形	12.0	5.6	5.6	5.6YV/18G白	5.6YV/18G白	円	V-2型	1500~1650年代	
1942◎	C-2◎	円形	8.5	3.4	3.4	10YV/18G白	10YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1943◎	C-2◎	円形	14.0	5.5	5.5	5.5YV/18G白	5.5YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1944◎	D-2◎	円形	16.6	2.4	2.4	2.4YV/18G白	2.4YV/18G白	円	1-2型	1500~1650年代	
1945◎	D-2◎	円形	4.8	2.8	2.8	2.8YV/18G白	2.8YV/18G白	円	1-2型	1500~1650年代	
1946◎	C-2◎	円形	4.8	1.8	1.8	1.8YV/18G白	1.8YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1947◎	D-2◎	円形	6.5	3.0	3.0	3.0YV/18G白	3.0YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1948◎	D-4◎	円形	4.8	3.0	3.0	3.0YV/18G白	3.0YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1949◎	D-2◎	円形	7.2	3.2	3.2	3.2YV/18G白	3.2YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1950◎	D-2◎	円形	6.8	2.8	2.8	2.8YV/18G白	2.8YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1951◎	Aベ&T-3区	円形	10.8	4.4	4.4	5YV/18G白	5YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1952◎	C-2◎	円形	18.8	4.8	4.8	10YV/18G白	10YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1953◎	D-4◎	円形	11.6	4.0	4.0	2.8YV/18G白	2.8YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1954◎	C-2◎	円形	4.6	6.2	6.2	6.2YV/18G白	6.2YV/18G白	円	1500~1650年代	取付なし	
1955◎	D-2◎	円形	5.0	2.8	2.8	2.8YV/18G白	2.8YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1956◎	D-2◎	円形	34.8	3.2	3.2	3.2YV/18G白	3.2YV/18G白	円	V-1型	1500~1650年代	
1957◎	D-2◎	円形	32.2	7.0	7.0	7.0YV/18G白	7.0YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1958◎	C-2◎	円形		4.4	4.4	4.4YV/18G白	4.4YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1959◎	C-2◎	円形		3.0	3.0	3.0YV/18G白	3.0YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1960◎	D-2◎	円形	35.6	6.2	6.2	6.2YV/18G白	6.2YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1961◎	C-2◎	円形	14.0	10.2	10.2	10.2YV/18G白	10.2YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1962◎	D-2◎	円形	6.6	1.8	1.8	1.8YV/18G白	1.8YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1963◎	C-2◎	円形	12.0	2.8	2.8	2.8YV/18G白	2.8YV/18G白	円	17世紀後半	取付なし	
1964◎	SX-1470	円形	11.6	2.1	2.1	10YV/18G白	10YV/18G白	円	15~16世紀	取付なし	
1965◎	SX-1470	円形		3.2	3.2	3.2YV/18G白	3.2YV/18G白	円	B-2-B型	14世紀後半~15世紀前半	
1966◎	SX-1470	円形	5.0	2.7	2.7	2.7YV/18G白	2.7YV/18G白	円			
1967◎	SX-1470	円形	10.7	3.4	3.4	3.4YV/18G白	3.4YV/18G白	円	D形		
1968◎	SX-1470	円形	10.0	2.3	2.3	2.3YV/18G白	2.3YV/18G白	円	D形		
1969◎	SX-1470	円形	10.0	1.8	1.8	1.8YV/18G白	1.8YV/18G白	円	D形		
1970◎	SX-1470	円形	4.0	1.3	1.3	1.3YV/18G白	1.3YV/18G白	円	D形		

製法・原料	商品名	規格	製法	原料	口味	風味	成分	糖度	水分	保存	製造	販売	備考
1971④	SX-1470	白糖	炭酸糖	八木林	血え	5.6	3.8	2.8	2.1	7.5YV/100g/100g	1970~1408代	中中品	
1972④	SX-1470	土曜面	4		血え	5.6	3.8	2.8	2.1	7.5YV/100g/100g	1970~1408代	中中品	
1973④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1974④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1975④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1976④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1977④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1978④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1979④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1980④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1981④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1982④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1983④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1984④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1985④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1986④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1987④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1988④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1989④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1990④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1991④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1992④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1993④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1994④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1995④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1996④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1997④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1998④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
1999④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2000④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2001④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2002④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2003④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2004④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2005④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2006④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2007④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2008④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		
2009④	SX-1470	土曜面	1		血え	7.6	5.7	1.9	7.5YV/142.5g/100g	1970~1408代	中中品		



番号・種別	上江原江	標名	標高	経緯	標高	形状	内容	設置年	設置者	備考
2005④	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑤	C-4⑤	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑥	A-6①・2 尻花	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	管内側に埋没
2005⑦	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑧	A-6①・2 尻花	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	管内側に埋没
2005⑨	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑩	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑪	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑫	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑬	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑭	C-6①・2 東	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑮	D-3③	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑯	C-3③	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑰	C-2②	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑱	D-4④・C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑲	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005⑳	C-2②	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉑	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉒	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉓	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉔	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉕	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉖	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉗	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉘	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉙	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉚	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉛	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉜	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉝	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉞	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㉟	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊱	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊲	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊳	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊴	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊵	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊶	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊷	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊸	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊹	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊺	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊻	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊼	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊽	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊾	D-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	
2005㊿	C-4④	菅沢 湯	10.8	135°14'40"E	36°45'40"N	110	湯	1947	自治体	

番号・種別名	出土地区	所在地	形状	口径	底径	高さ	容量	重量	出土層	出土年代	備考
2004①	C-4④	鹿野 陸部	罐	17.1		7.0	10YR/1(灰赤)・10R/1(赤)				
2005①	C-4④	鹿野 陸部	罐				8.0YR/1(灰赤)・2C1A1(赤)				16世紀前半
2006①	C-4④	鹿野 陸部	罐				8.5YR/1(赤)				V層
2007①	C-4④	鹿野 陸部	罐				8.5YR/1(赤)				IV 2層
2008①	C-4④	鹿野 陸部	罐				10.5YR/1(赤)				V層
2009①	D-3③	鹿野 陸部	罐				10.5YR/1(赤)				V層
2010①	D-3③	鹿野 陸部	罐				5Y2/1(黄)				V層
2011①	D-3③	鹿野 陸部	罐				5Y2/1(黄)				V層
2012①	D-3③	鹿野 陸部	罐				5Y2/1(黄)				V層
2013①	D-3③	鹿野 陸部	罐				5Y2/1(黄)				V層
2014①	D-4④	鹿野 陸部	罐	14.6		11.2	5.5YR/1(黄赤)・5YR/1(黄赤)				9-9不具
2015①	D-4④	鹿野 陸部	罐	11.2		11.2	5Y2/1(黄)				
2016①	C-3③	土師部 1	土師部 1	14.6	14.6	7.4	2.1	10YR/1(灰赤)			
2017①	C-3③	土師部 1	土師部 1	16.0	16.0	9.2	2.4	7.5YR/1(灰赤)			
2018①	C-3③	土師部 1	土師部 1	14.8			2.7	8YR/1(灰赤)			
2019①	C-3③	土師部 1	土師部 1	15.7			2.7	8YR/1(灰赤)			
2020①	D-4④	土師部 1	土師部 1	14.0			2.4	7.5YR/1(灰赤)			
2021①	D-4④	土師部 1	土師部 1	15.2			1.5	10YR/1(灰赤)			
2100①	C-4④	土師部 1	土師部 1	14.2	6.8	2.2	7.5YR/1(灰赤)				
2101①	C-4④	土師部 2	土師部 2	16.8			1.8	10YR/1(灰赤)			
2102①	D-4④	土師部 1	土師部 1	15.5	6.5	2.5	7.5YR/1(灰赤)				
2103①	C-4④	土師部 1	土師部 1	13.1			1.8	7.5YR/1(灰赤)			
2104①	C-4④	土師部 2	土師部 2	13.2			2.4	8YR/1(灰赤)			
2105①	C-4④	土師部 2	土師部 2	11.6			2.7	8YR/1(灰赤)			
2106①	C-4④	土師部 2	土師部 2	12.6	5.5	2.6	2.4	8Y2/1(黄赤)・7.5YR/1(灰赤)			
2107①	C-4④	土師部 2	土師部 2	11.5			7.5YR/1(灰赤)				
2108①	C-4④	土師部 1	土師部 1	11.8	6.0	1.6	1.9	7.5YR/1(灰赤)			
2109①	C-3③	土師部 1	土師部 1	12.2			10YR/1(灰赤)				
2110①	C-3③	土師部 1	土師部 1	12.2			1.7	8YR/1(灰赤)			
2111①	C-3③	土師部 2	土師部 2	11.8			1.8	8YR/1(灰赤)			
2112①	C-3③	土師部 2	土師部 2	10.6			1.8	10YR/1(灰赤)			
2113①	A-6⑥	土師部 1	土師部 1	6.8	3.1	2.0	7.5YR/1(灰赤)				
2114①	A-6⑥	土師部 2	土師部 2	9.4	3.8	1.9	7.5YR/1(灰赤)				
2115①	C-4④	土師部 1	土師部 1	9.8			1.7	10YR/1(灰赤)			
2116①	C-4④	土師部 1	土師部 1	9.7	5.2	1.8	7.5YR/1(灰赤)				
2117①	C-4④	土師部 2	土師部 2	9.2			1.3	10YR/1(灰赤)			
2118①	C-2②	土師部 1	土師部 1	10.0			1.5	10YR/1(灰赤)			
2119①	C-3③	土師部 1	土師部 1	10.0			1.4	10YR/1(灰赤)			
2120①	D-4④	土師部 2	土師部 2	10.0			1.3	10YR/1(灰赤)			

番号	所在地	所属	設計	設計者	土質	基礎	口径	原状	透水性	要路	透水性	構造	竣工	調査	調査の時期	調査	分層・層位	調査年代	備考
2121	⑤ A-ベト 2区画	土庫型	1	土庫型	8.4	4.6	1.8												
2122	⑤ D-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.9		1.6												
2123	⑤ C-1 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.6	2.6	1.6												
2124	⑤ C-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.4	2.4	1.7												
2125	⑤ C-3 ⑤ (S X - 1421)	土庫型	1	土庫型	7.6														
2126	⑤ D-1 ⑤	土庫型	1	土庫型	10.6	7.6	2.7												
2127	⑤ D-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	9.5	6.5	2.8												
2128	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.9	5.4	2.1												
2129	⑤ D-3 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.7	6.8	2.2												
2130	⑤ C-5 ⑤	土庫型	2	土庫型	8.0	5.8	1.6												
2131	⑤ D-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.6	5.8	1.6												
2132	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.6	6.6	1.6												
2133	⑤ D-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.1	5.6	1.2												
2134	⑤ D-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.4														
2135	⑤ D-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.8														
2136	⑤ D-4 ⑤	土庫型	2	土庫型	8.4														
2137	⑤ D-3 ⑤	土庫型	2	土庫型	5.4														
2138	⑤ S E - 1707 西 3 区	土庫型	1	土庫型	3.8														
2139	⑤ S E - 1707 西 3 区	土庫型	1	土庫型	10.4														
2140	⑤ S E - 1707	土庫型	1	土庫型	13.8														
2141	⑤ S E - 1707 西 3 区	土庫型	1	土庫型	17.2														
2142	⑤ S E - 1707 西 3 区	土庫型	1	土庫型	17.2														
2143	⑤ S E - 1707 西 3 区	土庫型	1	土庫型	17.2														
2144	⑤ S E - 1707	土庫型	1	土庫型	11.8														
2145	⑤ C-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	12.4														
2146	⑤ S X P - 1673	土庫型	1	土庫型	15.2														
2147	⑤ C-1 ⑤	土庫型	1	土庫型	8.6														
2148	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	10.6														
2149	⑤ C-3 ⑤	土庫型	1	土庫型	4.6														
2150	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	4.6														
2151	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	11.2														
2152	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	10.6														
2153	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	10.6														
2154	⑤ C-4 ⑤	土庫型	1	土庫型	11.2														
2155	⑤ C-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	16.6														
2156	⑤ C-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.2														
2157	⑤ D-2 ⑤	土庫型	1	土庫型	7.2														







## A1-Ⅱ区

番号	調査地	出土地点	銭名	書体	背面	国	初年	備考
2183 ②		C-4 ②	崇寧通寶	篆書		北宋	1038	
2183 ③		C-4 ④	□元元	篆書				
2191 ①		A-ベルト4区	祥符通寶			北宋	1009	
2192 ①		D-4 ②	天聖元寶			北宋	1023	
2193 ①		S K P-1480	崇寧元寶		真書	北宋	1034	
2194 ①		D-3 ②	崇寧通寶	篆書		北宋	1038	
2195 ①		C-3 ②	治平元寶	篆書		北宋	1054	
2196 ①		S X-1479	熙寧元寶		真書	北宋	1055	
2197 ①		D-4 ②	元祐通寶	行書		北宋	1056	
2198 ①		S X-1543	聖*宋*元寶			北宋	1101	
2199 ①		S X-1483	政和通寶	篆書		北宋	1111	
2200 ①		D-4 ②	寛*永*通寶			日本	1636	
2201 ①		A-ベルト4区	工工工					
2202 ①		D-4 ②	工工通					
2203 ①		S X-1543	工工通*寶					
2196 ②		S X-1479	開元通寶紀地銭		草*下月	唐	845	
		S X-1483						写真のみ
2206 ①		S X-1264	淳化元寶	草書		北宋	990	
2207 ①		A-ベルト4区	祥符元寶			北宋	1009	
2208 ①		D-4 ②	祥符元寶			北宋	1009	
2209 ①		D-2 ②	治平元寶	真書		北宋	1054	
2210 ①		D-3 ②	熙寧元寶			北宋	1055	
2211 ①		A-ベルト4区	元豊通寶	行書		北宋	1078	
2212 ①		C-2 ②	元豊通寶	篆書		北宋	1078	
		C-3 ②						
2213 ①		D-2 ②	元豊*通寶	行書		北宋	1078	
2214 ①		C-4 ②	元祐元寶	篆書		北宋	1101	
2215 ①		A-ベルト4区	慶元通寶			南宋	1135	
2216 ①		S X-1298	慶元元寶折二銭		二	南宋	1260	
2217 ①		D-3 ②	洪武通寶		一銭	明	1368	
2218 ①		S X-1296	永樂通寶			明	1408	
2219 ①		S D-1208 ①	永樂通寶			明	1408	
2220 ①		A-ベルト4区	永樂通寶			明	1408	
2221 ①		D-3 ②	永樂通寶			明	1408	
2222 ①		D-3 ②	寛永通寶			日本	1636 1期	
2223 ①		A-ベルト4区	寛永通寶			日本	1686 2期	
2204 ①		C-2 ②	開元通寶			唐*南唐	821*960	
2205 ①		D-3 ②	開元通寶			唐*南唐	821*960	
2224 ①		C-ベルト裏	□元元寶 また日□元 寶					
2225 ①			□元元寶*					
		S K P-1256						写真のみ
		S X-1491						写真のみ
		C-2 ②						写真のみ
		C-3 ②						写真のみ
		D-2 ②						写真のみ
		D-3 ②						写真のみ
2226 ①		S D-1125 3区	祥符通寶			北宋	1009	
2227 ①		S D-1125	天禧通寶			北宋	1017	
2228 ①		C-4	崇寧通寶	分書		北宋	1038	
2229 ①		D-4 ②	熙寧元寶	真書		北宋	1055	
2230 ①			元豊通寶	篆書		北宋	1078	
2231 ①		S K-1140 1区	元祐通寶	篆書		北宋	1086	
2232 ①		D-3 ②	元祐通寶	行書		北宋	1086	
2233 ①		A-ベルト4区	政和*通寶*	篆書		北宋	1111	
2234 ①		D-3 ②	大定通寶			金	1178	
2235 ①		C-3 ②	寛永通寶			日本	1636 1期	
2236 ①		D-3 ②	寛永通寶			日本	1636 1期	
2237 ①		D-4 ②	寛永通寶			日本	1636 1期	
2238 ①		A-ベルト4区	寛永通寶			日本	1697 3期	
2239 ①		A-ベルト4区	寛永通寶			日本	1697 3期	
2240 ①		C-3 ②	寛永通寶			日本	1697 3期	
2241 ①		C-4 ②	寛永通寶			日本	1697 3期	

番号	調査地	出土地点	銭名	書体	背面	国	初年	備考
2242 ①			熙寧(元)通寶	真書				
			寶					
2243 ②		S K-1180	工工通					
2244 ②		S D-1125	工工通			唐*南唐	821*960	
			(開*元*通*寶)*					
			通*寶)					
			S K-1129					写真のみ
			S K-1190					写真のみ
			C-3					写真のみ 十銭
2245		S K-1017	天聖元寶			北宋	1023	
2246		G-1 トロン *第9期	聖元元寶			北宋	1034	試煉31
2247		S K-1044	寛永通寶			日本	1636	1期
2249		S D-1607	寛永通寶			日本	1636	1期
2250		S X-1032	寛永通寶			日本	1697	3期
2248		S K-1044	寛永通寶			日本	1697	3期
2251		D-4	太平通寶			北宋	976	
2252		西2区	元祐*通寶	行書		北宋	1086	
2253		庵土	洪武通寶			明	1368	
2254		表面探集	寛永通寶 西文銭			11歳 日本	1768	試煉35
			C-2 Dサブトレン *庵土層下					写真のみ 十円

第9表 柏崎町遺跡出土金属製品観察表

## A1-I区

番号/調査品	出土地点	類別	備考
432 ㊦①	SX-198	瓦	
494 ㊦	K-4㉔	剣	
483 ㊦①④	SX-198	瓦	
④⑤⑥	SX-198	瓦	
484 ㊦①④	S K-293	埴管	埴管
485 ㊦②③	S K P-251 a	埴管	1〜B不明、埴管
44 ㊦	S K-439	埴管	埴管
㊦②	S K-265	埴管	埴管
486 ㊦②	S K P-117	埴管	埴口
496 ㊦④	S K P-405	埴管	埴口
497 ㊦②	K-4㉔②	埴管	埴口
462 ㊦	K-4 ㊦②サ卜レ	埴管	
483	南区16層	約状金属	
499 ㊦	K-4 ㊦	約状金属	
㊦②	SX-1	鉄釘	
㊦	S K-7	鉄釘	
㊦	K-4㉔	鉄釘	
㊦	S K P-11	鉄釘	
㊦	S K-173	鉄釘	
㊦	K-2㉔	鉄釘	
㊦①④	SX-280	鉄釘	
㊦①④	S K P-199	鉄釘	
㊦上	S D-219 a	鉄釘	
㊦上	S D-222	鉄釘	
㊦上	S D-223	鉄釘	
㊦上	S D-223	鉄釘	
㊦下	S K P-251 c	鉄釘	1〜B不明
㊦下	S F-203下層	鉄釘	a・b・c有
㊦	S K-262	鉄釘	
㊦	S K-262	鉄釘	
㊦	K-2㉔	鉄釘	
㊦	S K-317	鉄釘	a・b有
㊦	S K-317	鉄釘	a・b有
㊦	K-3㉔	鉄釘	
㊦上	SX-348	鉄釘	
㊦上	SX-348	鉄釘	
㊦上	S K P-263	鉄釘	
㊦上	S K P-271	鉄釘	
㊦上	S K P-406	鉄釘	
㊦上	K-4㉔	鉄釘	
㊦上	S K P-263	鉄釘	
㊦上	K-4㉔	鉄釘	
㊦	K-4㉔	鉄釘	
㊦	K-4㉔	鉄釘	
487 ㊦上	SX-269	刀子	
458 ㊦下	S K P-251 a	刀子	1〜B不明
499 ㊦上	S D-220・K-3㉔	刀子	
460 ㊦上	SX-269 第3層上層	刀子	
464 ㊦上	S K-291	刀子?	
㊦②	K-4㉔	刀子?	
①	S D-29		
①	S D-62		
①	K-2㉔ 黒色ガラス蔵人箱		
㊦	SX-1 中央ベルト		
㊦	S K-72		
㊦	S K-72		
㊦	K-4㉔		
㊦下	K-4㉔		
㊦下	SX-165		
㊦下	S K P-123 b		
㊦	K-3㉔		
㊦	K-3㉔		
㊦	S K P-122		
㊦①④	SX-198		
㊦上	S D-222		
㊦上	S K P-235		
㊦上	K-4㉔		
㊦下	S K P-251 c		
㊦下	S K P-251 c		
㊦下	S K P-251 c		
㊦下	K-4㉔		
㊦	K-3㉔		
㊦上	S K P-260		
㊦上	S K-411		
㊦上	K-3㉔		
㊦上	S K-411		
㊦	K-4㉔		
㊦	K-4㉔		
㊦	3区西 K-3㉔		
	K-2㉔		
	南区19層銅皿ビッド		

## A1-IIa区

番号/調査品	出土地点	類別	備考
804 ㊦	I-4㉔	埴管	埴口
㊦	S K-513	鉄釘	
㊦	S K P-532	鉄釘	
㊦	S K P-557	鉄釘	
㊦	H-2㉔	鉄釘	
㊦	H-3㉔	鉄釘	
㊦	S K P-629	鉄釘	
㊦	S K P-647	鉄釘	
㊦	S K-674	鉄釘	
㊦	S K P-707	鉄釘	
㊦	S K P-711	鉄釘	
㊦	S K-723	鉄釘	
㊦	S K P-727	鉄釘	
㊦	S X-728 b	鉄釘	
㊦	H-4㉔	鉄釘	
㊦	S K P-658	鉄釘	
㊦	I-4㉔	鉄釘	
㊦	I-4㉔	鉄釘	
㊦	I-4㉔	鉄釘	
㊦下	I-4㉔	鉄釘	
㊦	H-3㉔サ卜レ(中間)	鉄釘	
	埋点不明	鉄釘	
	埋点不明	鉄釘	
㊦	I-3㉔サ卜レ	鉄釘	
792 ㊦	I-3㉔	刀子	
803 ㊦	I-4㉔	刀子*	
㊦	H-4㉔		
㊦	S K P-629		
㊦	S K-505		
㊦	S X-728 b		
㊦	I-3(23)		
㊦	H-4㉔		
㊦	S K P-818		
㊦	S D-829サ卜レ I-4㉔		
	I-3㉔サ卜レ		

## A1-IIb区

番号/調査品	出土地点	類別	備考
1303 ㊦	H-13	埴管	埴管
1304	G-4㉔	埴管	埴管
1307 ㊦	G-3㉔	鉄釘	
1308 ㊦	I-4㉔	鉄釘	
㊦	I-4㉔	鉄釘	
1306 ㊦	I-4㉔	刀子*	
1244 ㊦	S K-2117		
1301 ㊦	H-3㉔		
1302 ㊦	S K-2069		
1305 ㊦	H-4㉔		
1309	G-3㉔		
1310	G-3㉔		
1311	G-3㉔		
1312 ㊦	I-4㉔		
1313 ㊦	S K P-2001		
1314 ㊦	S D-2055 2区		
㊦	H-2㉔		

## A1-III区

番号/調査品	出土地点	類別	備考
2318 ㊦	C-ベルト東	瓦	
㊦	D-2㉔	埴管	埴口
2280 ㊦	C-ベルト西	小杭	
2311 ㊦	S E-1456	鉄釘	
2312 ㊦	C-4㉔	鉄釘	
2313 ㊦	C-ベルト東	鉄釘	
2314 ㊦	SX-1196 7区	鉄釘	
2315 ㊦	SX-1196 7区	鉄釘	
2316 ㊦	A-ベルト4区	鉄釘	
㊦	SX-1049	鉄釘	
㊦	C-2㉔ 中間層	鉄釘	
㊦	S D-1306	鉄釘	
2255 ㊦	S K-1277	刀子	
2256 ㊦	S X-1539	刀子	
2257 ㊦	C-4㉔	刀子	
2310 ㊦	S E-1217 1・2区		
	C-3㉔ 小7㉔		
㊦	C-2㉔ 中間層		
㊦	D-2㉔		
㊦	A-ベルト4区		
㊦	C-4㉔		
㊦	C-ベルト東		
㊦	C-ベルト東		
㊦	SX-1429		

第10表 柏崎町遺跡跡跡出土遺構・地点一覧表

A1-I区

調査面	出土地点	遺量(㎡)	備考
①	K-4①	301	
②	K-4②	205	
③	K-4③	191	
④	K-4④	83	
⑤	K-4⑤	821	
⑥	S K-3350	30	
⑦	S K P-3003 南6面	58	
⑧	K-4⑥	83	
⑨	K-4⑦	142	
⑩	K-4⑧	29	
⑪	K-4⑨	142	
⑫	K-4⑩	38	
⑬上	K-4⑪	195	
⑬上	K-4⑫	874	
⑬上	K-4⑬	295	
⑬上	S K-319	121	
⑬上	S K-320	74	
⑬上	S K-361	128	
⑬上	S K-376	168	
⑬上	S K-411	11,290	
⑬上	S K-422	1,721	
⑬上	S K-422 4層	3,954	
⑬上	S K-422 6層	1,130	
⑬上	S K-428	107	
⑬上	S K P-347	85	
⑬上	S K P-351	150	
⑬上	S K P-359	97	
⑬上	S K P-367	62	
⑬上	S K P-373	114	
⑬上	S K P-375	46	
⑬上	S K P-387	34	
⑬上	S K P-390	344	
⑬上	S K P-393	44	
⑬上	S K P-394	36	
⑬上	S X-348	186	
⑭	K-3①	87	
⑭	K-3②	366	
⑭	K-3③	55	
⑭	K-3④	320	
⑭	K-3⑤	609	
⑭	K-4①	87	
⑭	S K-303	378	
⑭	S K-303	341	
⑭	S K-305	1,136	
⑭	S K-305 b	41	
⑭	S K-308	10	
⑭	S K-312	524	
⑭	S K-313	32	
⑭	S K-316	45	
⑭	S K-317	2,691	
⑭	S K-317 a	407	
⑭	S K-333 a	9	
⑭	S K-333 a・b	11	
⑭	S K-334	3,476	
⑭	S K-336	85	
⑭	S K-337	309	
⑭	S K-338	87	
⑭	S K P-318	110	
⑭下	K-4⑬	41	
⑭下	K-4⑭	62	
⑭下	K-4⑮	56	
⑭下	S E-252	327	
⑭下	S E-252 基下層	333	
⑭下	S E-252 南東半分	233	
⑭下	S E-252 下層	522	

調査面	出土地点	遺量(㎡)	備考
⑭下	S E-253 b	221	
⑭下	S K P-251 a	83	
⑭下	S K P-251 c	35	
⑭下	S K P-251 c 1	110	
⑮上	K-4⑯	372	
⑮上	K-4⑰	149	
⑮上	S D-222	352	
⑮上	S D-223	242	
⑮上	S D-223 (K-4⑱)	15	
⑮上	S K-201	14,437	
⑮上	S K-201 b	3,966	
⑮上	S K-202	562	
⑮上	S K-203	10,791	
⑮上	S X-300 北下層	107	
⑮上	S X-300 南5層	114	
⑮上	S X-300 南下層	32	
⑮上	S X-315	21	
⑮～⑯	S K-283 a	22	
⑮～⑯	S K-287 b	74	
⑮～⑯	S K P-109	325	
⑯	K-2	270	
⑯	K-4	70	
⑯	K-4	281	
⑯	S D-151	479	
⑯下	S K P-123 b	449	
⑯下	S X-105	16,882	
⑰	K-2①	90	
⑰	K-3	325	
⑰	S D-62	64	
⑰	S D-82	169	
⑰	S K-1②	169	
⑰	S K-7	253	
⑰	S K P-47	942	
⑰	S X-13 上層	15	
	K-3⑥	687	
	K-4⑲	1,204	
	南K16層	1,620	
	南K18 4層	127	
	南K18 4層版込ビット	38	
	南K18 5層	121	
	南K18 5層版込ビット	99	
	南28-29層	104	
	南41層	186	
合計		91,493	

A1-IIa区

調査面	出土地点	遺量(㎡)	備考
⑰	I-4①	259	
⑰	S E-891	15	
⑰	I-3②	166	
⑰	I-4	352	
⑰	S K-822	61	
⑰	I-3③	222	
⑰	I-3④	80	
⑰	I-3⑤	92	
⑰	I-3⑥	135	
⑰	I-4②	183	
⑰	I-4③	219	
⑰	I-4④	214	
⑰	S D-789	286	
⑰	S K-718	173	
⑰	S K-759	77	
⑰	S K-770	1,323	
⑰	S K-782	728	
⑰	S K P-692	23	
⑰	S K P-699	378	

調査面	出土地点	量積(㎡)	備考
④	S K P-700	157	
④	S K P-703	240	
④	S K P-705	124	
④	S K P-711	513	
④	S K P-713	36	
④	S K P-715	80	
④	S K P-717	33	
④	S K P-720	181	
④	S K P-721	197	
④	S K P-723	29	
④	S K P-727	505	
④	S K P-749	115	
④	S K P-781	378	
④	S X-894	14	
④	S X-725	135	
④	S X-725 a	100	
④	S X-725 b	946	
④	H-4②	47	
④	H-4③	116	
④	I-3	280	
④	I-3②③	90	
④	I-3④⑤	22	
④	I-4②	78	
④	I-4③	25	
④	I-4④⑤	122	
④	S K-513	553	
④	S K-591	245	
④	S K-651	28	
④	S K-652	742	
④	S K P-625	194	
④	I-3⑥ オブトレ上	70	
合 計		11,717	

#### A1-II b区

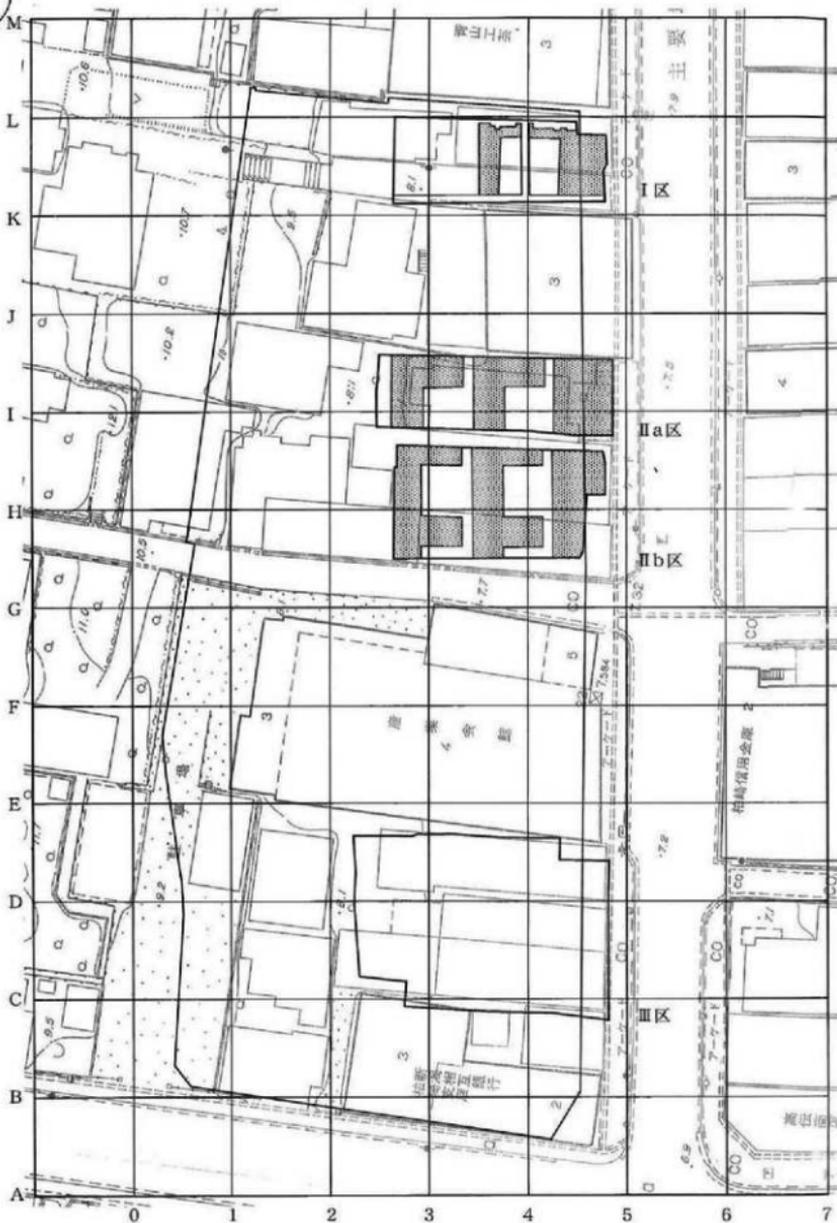
調査面	出土地点	量積(㎡)	備考
④	G-3②	718	
④	G-4②	199	
④	G-4③	748	
④	G-4④	21	
④	H-4②	324	
④	H-4③	1,174	
④	H-4④	480	
④	H-4⑤	53	
④	I-4②	77	
④	S K P-2328	23	
④	G-3③	638	
④	G-4①	71	
④	H-4①	257	
④	I-4①	119	
④	S K-2277	305	
④	S K P-2331	714	
④	S K P-2332	92	
④	G-4④	139	
④	I-3	1,945	
④	S D-2265 2区	124	
④	S K-2316	265	
④	S K-2335	194	
④	S K P-2337	4,076	
④	S K P-2354	171	
	G-3④	531	
	G-4⑤	149	
	H-2② オブトレ	107	
	I-4① オブトレ	226	
合 計		13,992	

#### A1-III区

調査面	出土地点	量積(㎡)	備考
④	C-3②	303	
④	Aペルト2区	80	
④	Aペルト2区南	53	
④	C-4②	43	
④	C-4③	121	
④	Cペルト西	109	
④	Cペルト東	22	
④	D-3②	230	
④	S E-1456	2,500	
④	S E-1456 南区	124	
④	S K-1415	611	
④	S K-1424	72	
④	S K P-1432	1,353	
④	S X-1470	717	
④	S X-1470ペルト	273	
④	C-3④	44	
④	C-4④	73	
④	Cペルト東	527	
④	S D-1303 a	1,425	
④	S K-1277	265	
④	S K-1281	112	
④	S K-1308	347	
④	S K-1317	55	
④	S K P-1328	467	
④	S K P-1323	279	
④	S X-1241 4区	1,424	
④	S X-1339	8,979	
④・⑤	上層Aペルト2区北	314	
④	C-4⑤	301	
④	C-4⑥	43	
④	D-3③	200	
④	D-3④	863	
④	S D-1144 a下	446	
④	S K-1140 1区	74	
④	S K-1175	76	
④	S X-1043 A-4	268	
	廃土	890	
	廃土 中	383	
合 計		25,111	

#### 地区不明

調査面	出土地点	量積(㎡)	備考
		14,900	

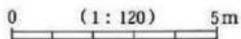
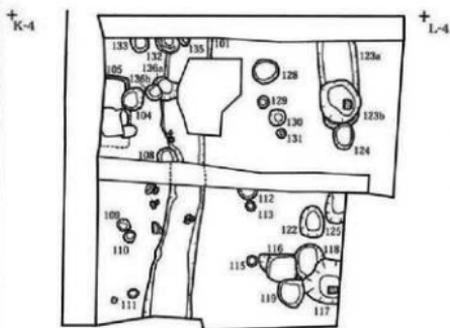
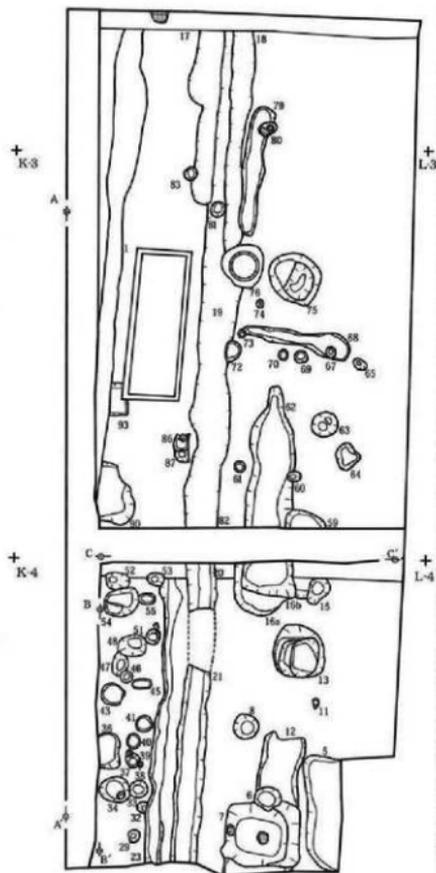




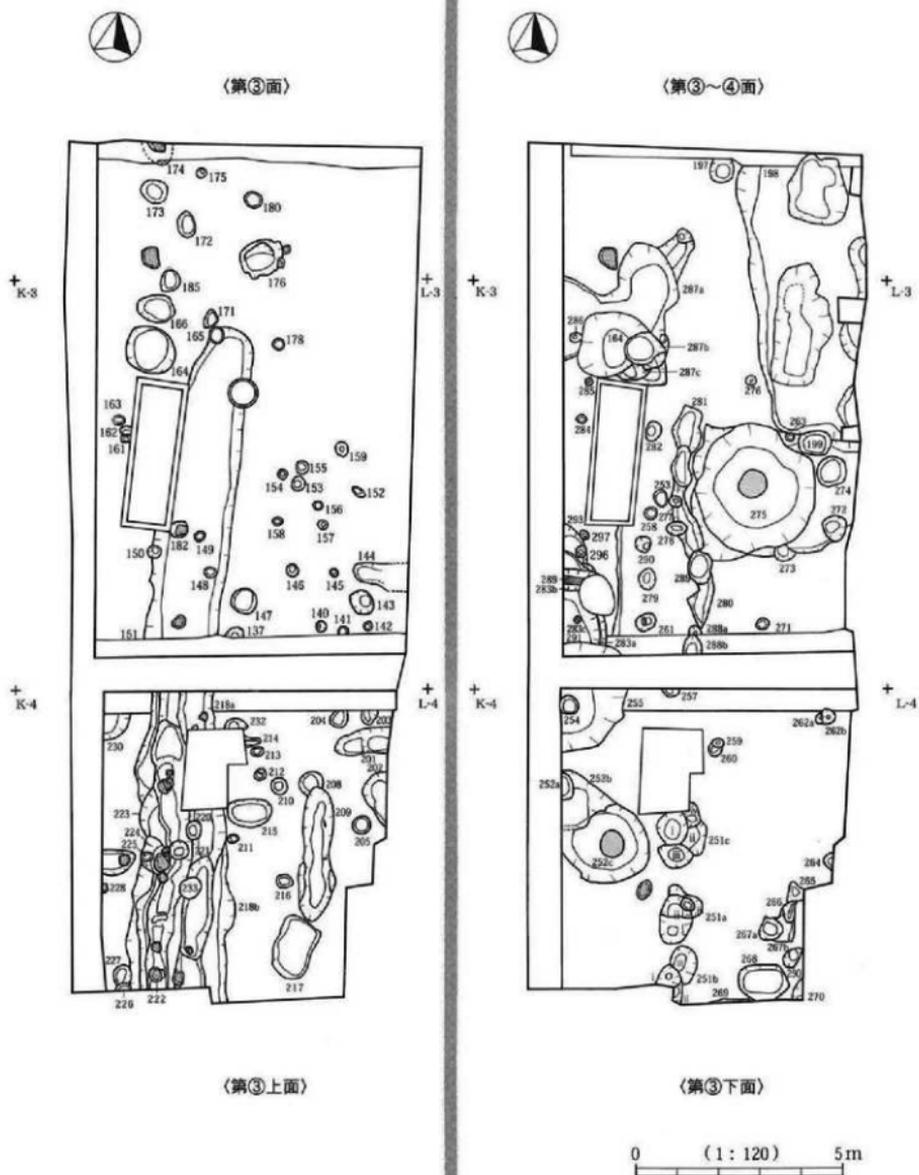
〈第②面〉



〈第②下面〉



A1-I区全体図 1



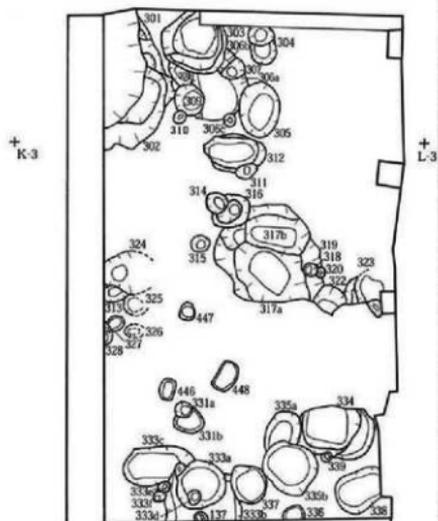
A1-I区全体図 2



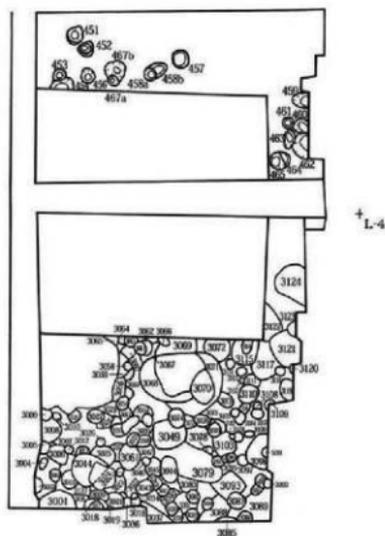
(第④面)



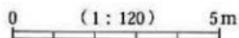
(第⑥面)



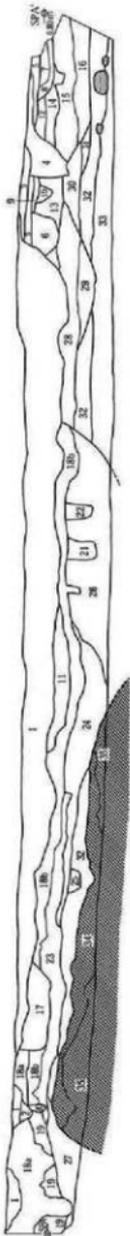
(第④上面)



(第⑤～⑥下面)



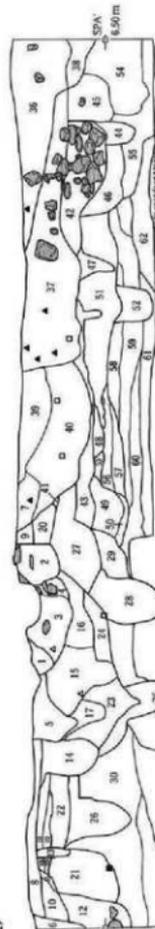
(南北ベルト西壁)



- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 1 埋没土層  | 16 埋没土層 | 30 埋没土層 |
| 2 埋没土層  | 17 埋没土層 | 31 埋没土層 |
| 3 埋没土層  | 18 埋没土層 | 32 埋没土層 |
| 4 埋没土層  | 19 埋没土層 | 33 埋没土層 |
| 5 埋没土層  | 20 埋没土層 | 34 埋没土層 |
| 6 埋没土層  | 21 埋没土層 | 35 埋没土層 |
| 7 埋没土層  | 22 埋没土層 |         |
| 8 埋没土層  | 23 埋没土層 |         |
| 9 埋没土層  | 24 埋没土層 |         |
| 10 埋没土層 | 25 埋没土層 |         |
| 11 埋没土層 | 26 埋没土層 |         |
| 12 埋没土層 | 27 埋没土層 |         |
| 13 埋没土層 | 28 埋没土層 |         |
| 14 埋没土層 | 29 埋没土層 |         |
| 15 埋没土層 | 30 埋没土層 |         |

0 3m  
(1:60)

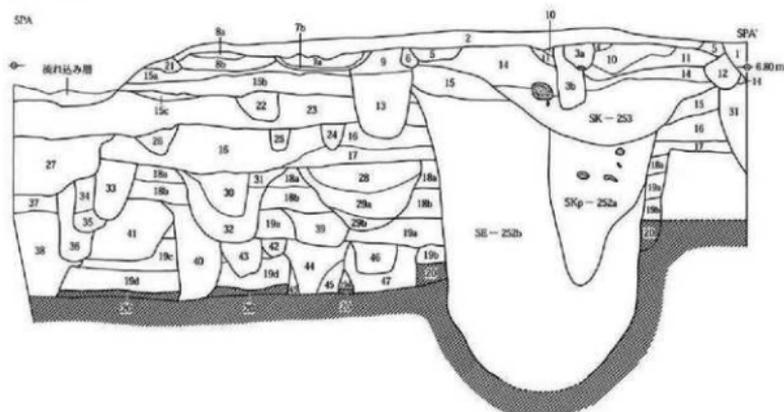
(東西ベルト南壁)



- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 1 埋没土層  | 16 埋没土層 | 31 埋没土層 |
| 2 埋没土層  | 17 埋没土層 | 32 埋没土層 |
| 3 埋没土層  | 18 埋没土層 | 33 埋没土層 |
| 4 埋没土層  | 19 埋没土層 | 34 埋没土層 |
| 5 埋没土層  | 20 埋没土層 | 35 埋没土層 |
| 6 埋没土層  | 21 埋没土層 | 36 埋没土層 |
| 7 埋没土層  | 22 埋没土層 | 37 埋没土層 |
| 8 埋没土層  | 23 埋没土層 | 38 埋没土層 |
| 9 埋没土層  | 24 埋没土層 | 39 埋没土層 |
| 10 埋没土層 | 25 埋没土層 | 40 埋没土層 |
| 11 埋没土層 | 26 埋没土層 | 41 埋没土層 |
| 12 埋没土層 | 27 埋没土層 | 42 埋没土層 |
| 13 埋没土層 | 28 埋没土層 | 43 埋没土層 |
| 14 埋没土層 | 29 埋没土層 |         |
| 15 埋没土層 | 30 埋没土層 |         |

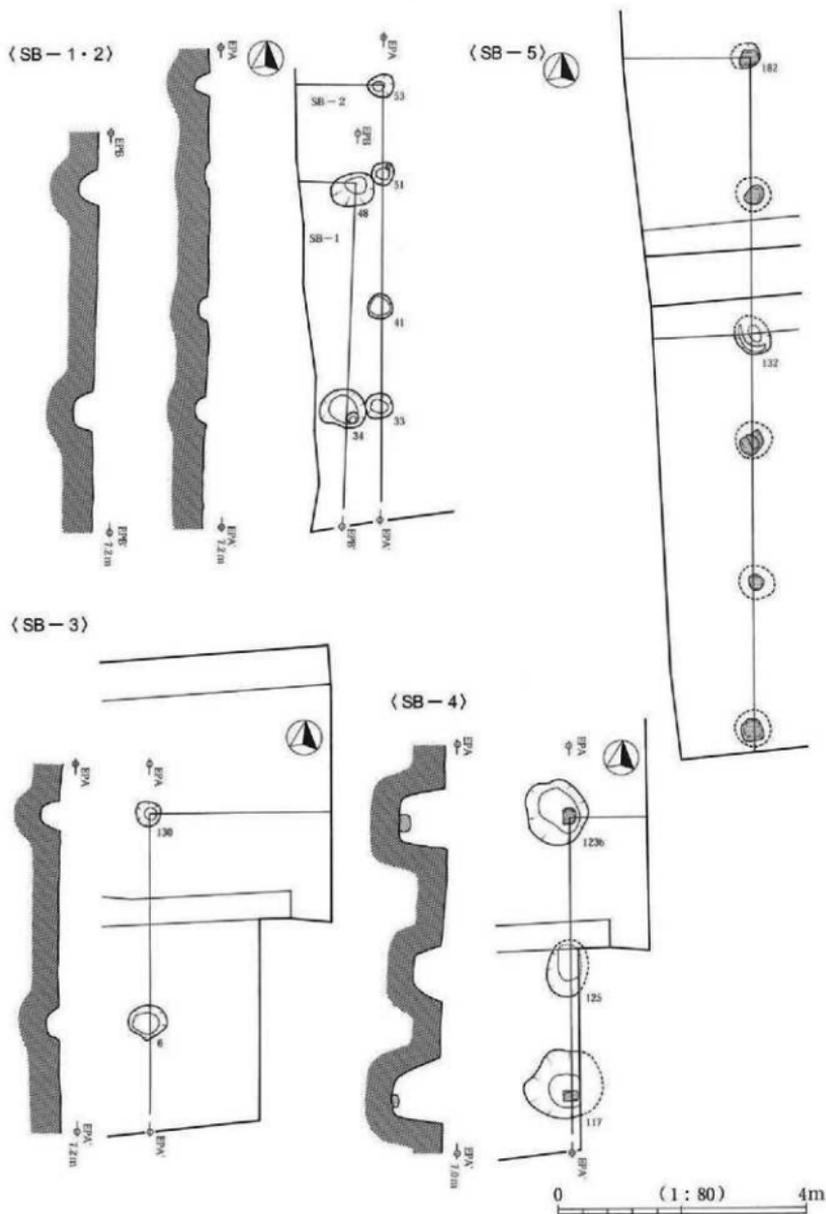
0 3m  
(1:40)

(南区西壁)



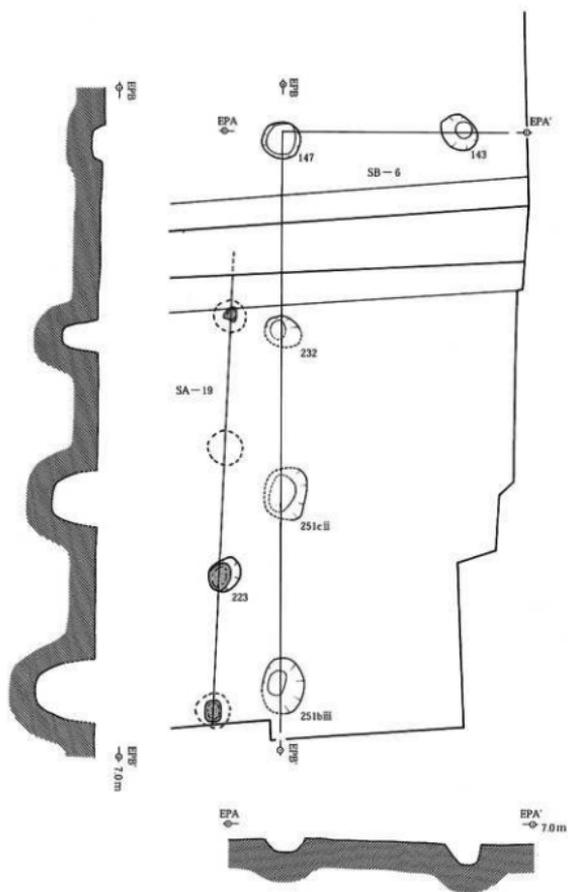
- |                           |                           |                          |
|---------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色砂礫：現代の水溜管理設備         | 19a 黒褐色砂                  | 39 褐色砂                   |
| 2 褐色砂礫                    | 19b 暗褐色砂                  | 40 褐色砂                   |
| 3a 褐色砂礫：焼土・炭化物多量に含む       | 19c 褐色砂                   | 41 黒褐色砂                  |
| 3b 暗褐色砂：焼土・炭化物・黄色粘土粒多量に含む | 19d 褐色砂：cより若干明色           | 42 暗褐色砂                  |
| 4 暗褐色砂：焼土・炭化物多量に含む        | 20 赤褐色砂                   | 43 暗褐色砂：黄色粘土粒・焼土・炭化物少量含む |
| 5 赤褐色砂                    | 21 暗灰色粘質砂：粘土粒・灰・炭化物を多量に含む | 44 暗褐色砂                  |
| 6 暗赤褐色砂：焼土・砂礫多く含む         | 22 褐色砂                    | 45 褐色砂                   |
| 7a 白色・黒色粘土                | 23 暗褐色砂                   | 46 暗褐色砂                  |
| 7b 黄褐色粘土                  | 24 明褐色砂                   | 47 褐色砂                   |
| 8a 黄褐色粘土                  | 25 暗暗褐色砂                  | (SK-253)                 |
| 8b 黄褐色粘土                  | 26 褐色砂                    | 遺構掘削区参照                  |
| 9 暗暗褐色砂                   | 27 褐色砂：赤褐色砂と黒褐色砂の混合砂      |                          |
| 10 暗褐色砂：焼土・炭化物多量に含む       | 28 褐色砂                    |                          |
| 11 オリーブ褐色粘質砂：最下部は明褐色粘質砂   | 29a 黒褐色砂                  | (SK-252a)                |
| 12 暗褐色砂礫：砂利を多量に混入する       | 29b 暗褐色砂                  | 遺構掘削区参照                  |
| 13 暗褐色砂                   | 29c 暗褐色砂：黄土粘土粒主体          |                          |
| 14 明赤褐色砂                  | 30 暗褐色砂                   |                          |
| 15a 暗褐色砂                  | 31 黒褐色砂：炭化物・焼土多く含む        | (SE-252b)                |
| 15b 暗暗褐色砂                 | 32 褐色砂                    | 遺構掘削区参照                  |
| 15c 黒褐色砂                  | 33 暗赤褐色粘土：暗赤褐色焼土と暗褐色砂の混合土 |                          |
| 16 黒色砂                    | 34 褐色砂                    |                          |
| 17 明褐色粘質砂：灰褐色粘土ブロックを多く含む  | 35 暗褐色砂：焼土・炭化物多く含む        |                          |
| 18a 暗褐色砂                  | 36 褐色砂                    |                          |
| 18b 褐色砂：aよりやや明色           | 37 黒褐色砂                   |                          |
|                           | 38 暗褐色砂                   |                          |

0 (1:40) 2m



A1-I区建物跡個別図1

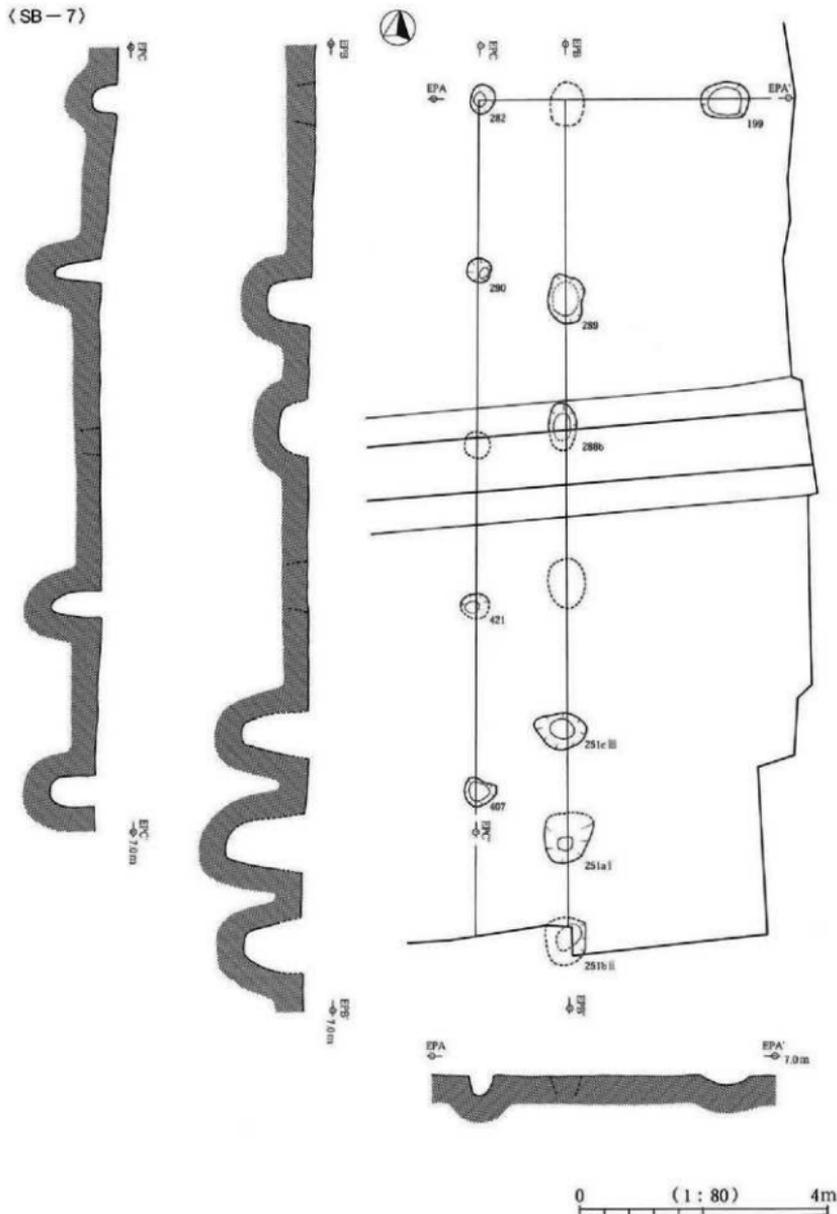
(SB-6・SA-19)



0 (1:80) 4m

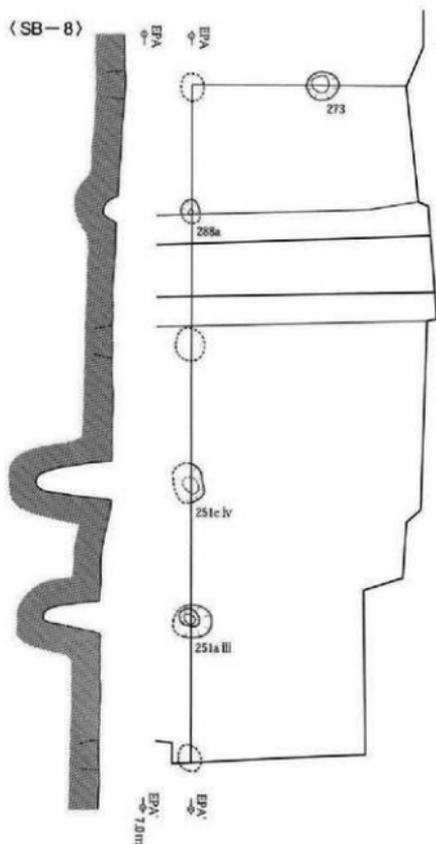
A1-I区建物跡個別図 2

&lt;SB-7&gt;

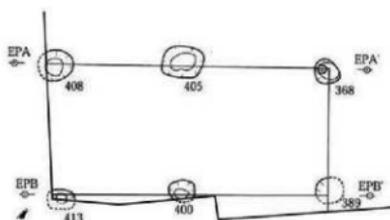


A1-I区建物跡個別図 3

(SB-8)



(SB-9)



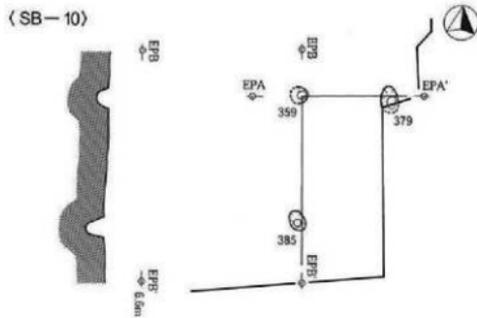
EPA → 6.6m



EPB → 6.6m



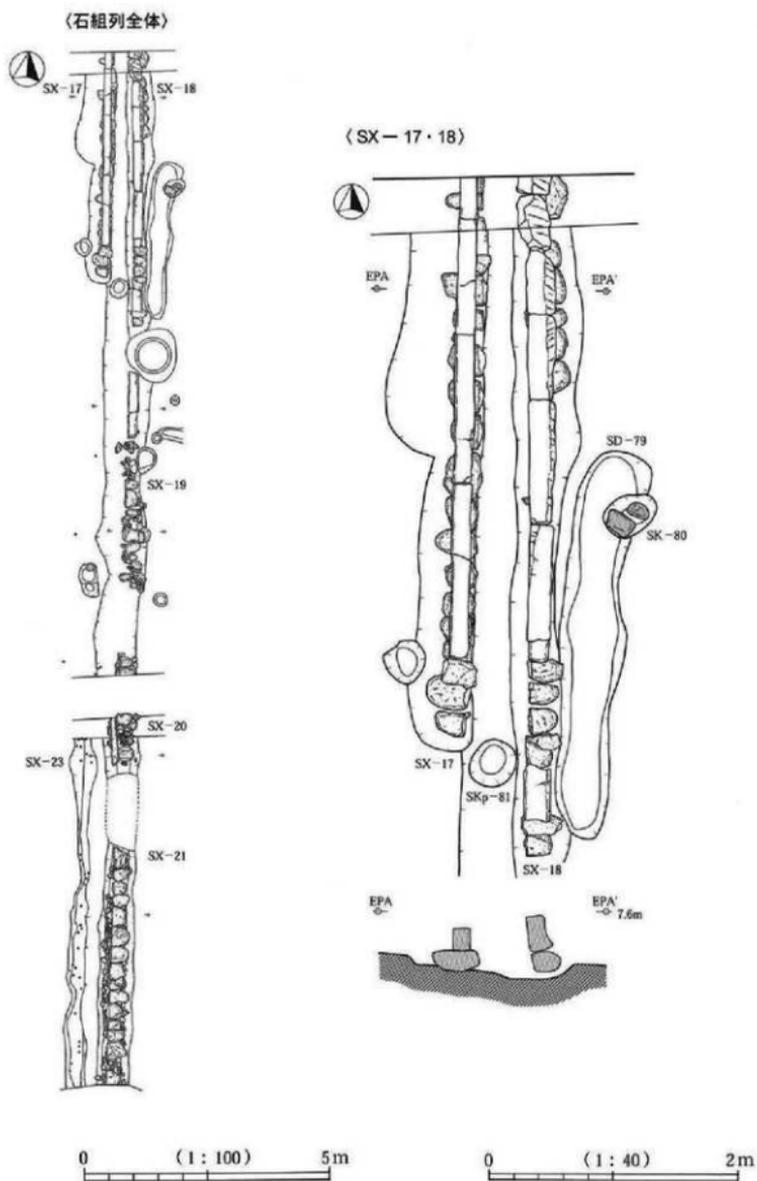
(SB-10)



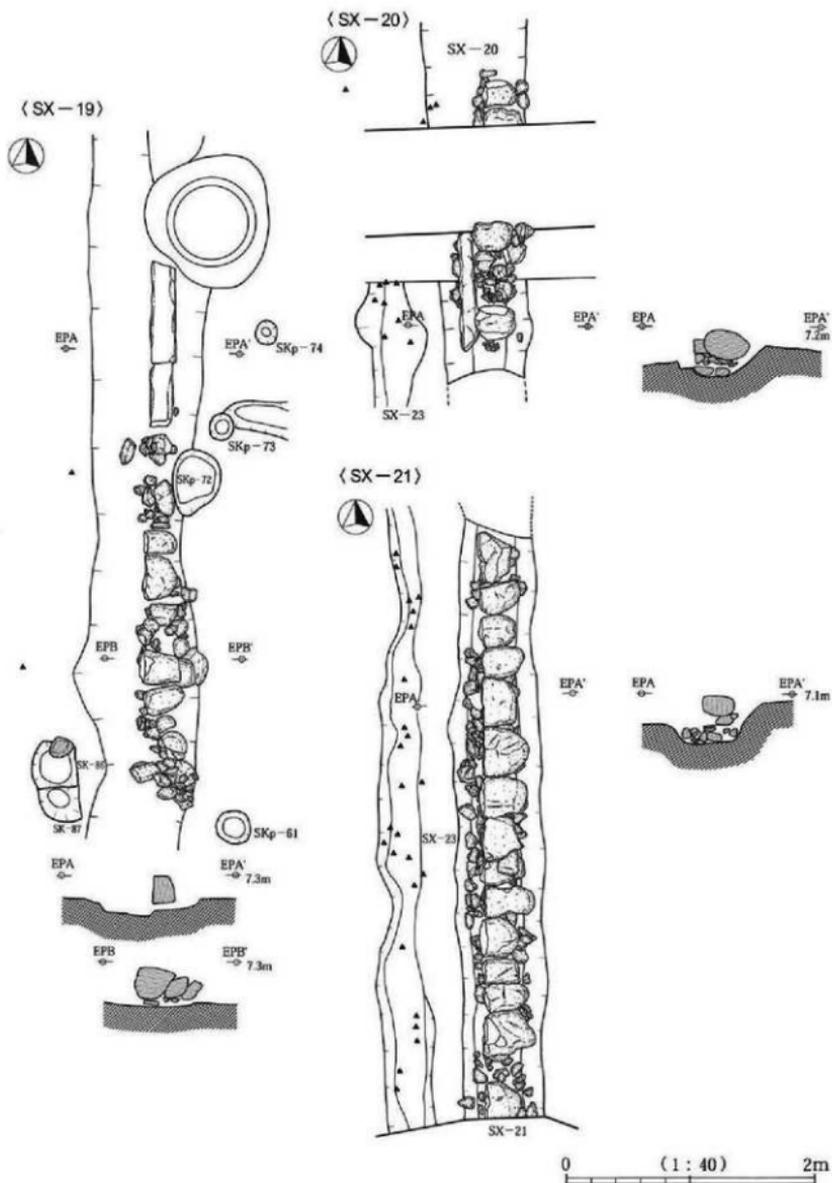
EPA → 6.6m



0 (1:80) 4m

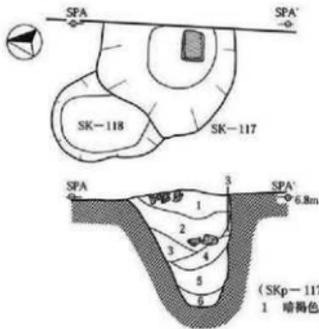


A1-1区遺構個別図1 (第2面石組列1)



A1-I区遺構個別図2 (第2面 石組列2)

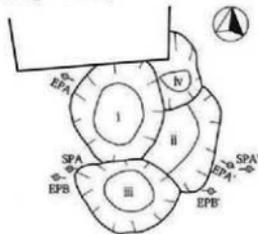
〈SKp-117〉



(SKp-117)

- 1 暗褐色砂：炭化物・暗赤褐色粘土粒・黄色粘土粒多量を含む
- 2 暗褐色砂：炭化物・暗赤褐色粘土粒多量を含む
- 3 黒褐色砂：炭化物・暗赤褐色粘土粒を含む
- 4 暗赤褐色砂：炭化物・暗赤褐色粘土粒多量を含む
- 5 黒褐色砂：黄色粘土ブロック含む
- 6 黒褐色砂：炭化物・暗赤褐色粘土粒多量を含む

〈SKp-251c〉

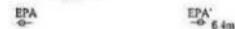
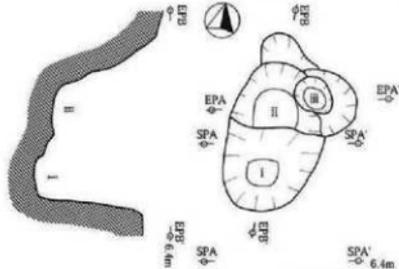


(SKp-251c III)

- 1 暗褐色砂：黄色粘土粒多量を含む
- 2 暗褐色砂：Iより若干明色
- 3 暗褐色砂



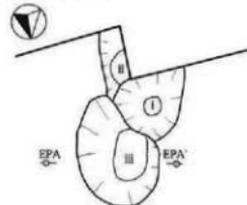
〈SKp-251a〉



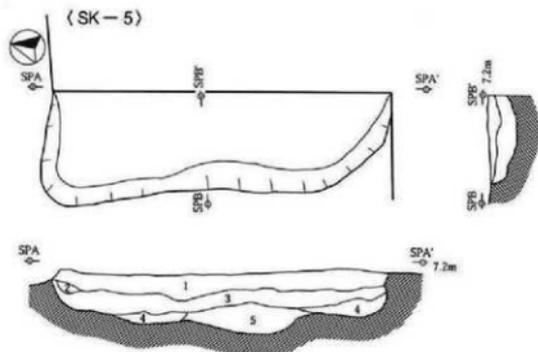
(SKp-251a)

- 1 暗褐色砂：黒も暗色、黄色粘土粒多量を含む
- 2 暗褐色砂：黄色粘土粒多量を含む
- 3 暗褐色砂：黄色粘土粒含む
- 4 暗褐色砂

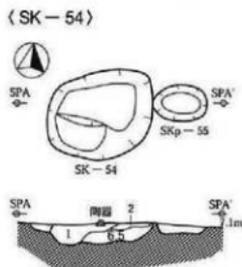
〈SKp-251b〉



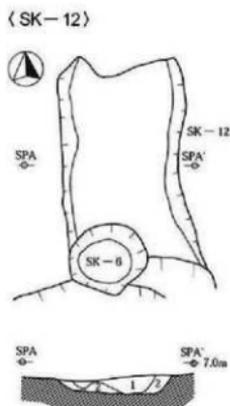
0 (1:40) 2m



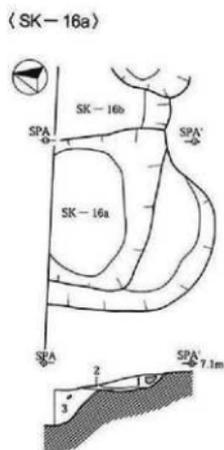
- (SK-5)
- 1 黒褐色砂：暗赤褐色焼土粒を含む
  - 2 黒色砂：焼土粒多量を含む
  - 3 暗褐色砂：焼土粒を含む
  - 4 褐色砂：黄色粘土ブロック多量を含む
  - 5 黒褐色砂：1と同質



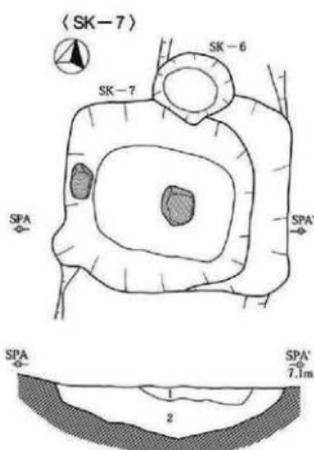
- (SK-54)
- 1 暗赤褐色砂：暗赤褐色焼土粒多量を含む
  - 2 暗褐色砂：1と同質
  - 3 暗オリーブ褐色砂



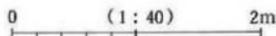
- (SK-12)
- 1 褐色砂
  - 2 褐色砂：炭化物・焼土粒大量を含む



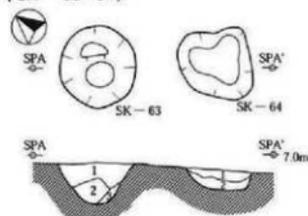
- (SK-16a)
- 1 暗赤褐色粘質砂：暗赤褐色焼土粒を主体
  - 2 褐色砂
  - 3 暗赤褐色粘質砂：1と同質



- (SK-7)
- 1 暗褐色砂：暗赤褐色焼土粒を含む
  - 2 暗赤褐色砂：暗赤褐色焼土粒を主体とし、小礫を多量を含む



〈SK-63・64〉



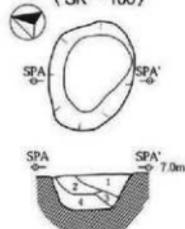
(SK-63)

- 1 黒褐色砂：炭化物多量に含む
- 2 暗褐色：炭化物含む
- 3 暗褐色

(SK-64)

- 1 黒褐色砂：炭化物多量に含む
- 2 暗褐色砂

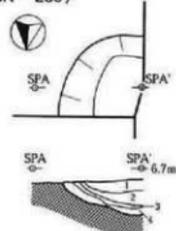
〈SK-166〉



(SK-166)

- 1 黄色砂：小砂利・炭化物多量に含む
- 2 暗褐色砂
- 3 赤褐色砂
- 4 暗褐色砂：小砂利・炭化物・焼土粒含む

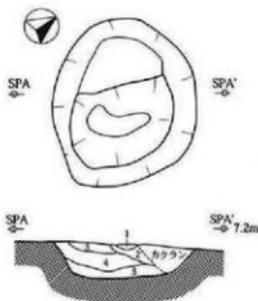
〈SK-230〉



(SK-230)

- 1 暗褐色粘質砂：暗赤褐色焼土粒含む
- 2 オリーブ褐色砂
- 3 暗オリーブ褐色砂：黄色焼土粒含む
- 4 黒褐色：暗灰色粘土粒・暗赤褐色焼土粒含む

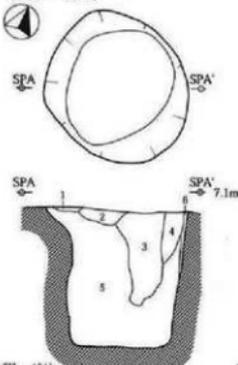
〈SK-75〉



(SK-75)

- 1 黄褐色砂
- 2 暗褐色
- 3 褐色砂：黄色粘土ブロック多量に含む
- 4 暗褐色砂：3より粘土少ない
- 5 黒褐色砂

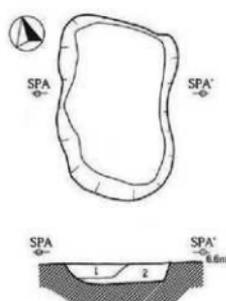
〈SK-164〉



(SK-164)

- 1 黒色粘土：炭化物多量に含む
- 2 褐色砂
- 3 褐色砂：小砂利・焼土少量含む
- 4 黄色砂
- 5 暗褐色砂
- 6 暗褐色砂

〈SK-217〉



(SK-217)

- 1 暗赤灰色粘質砂：灰・黄色粘土ブロック多量に含む
- 2 暗灰色粘質砂：灰多量に含む

〈SK-201・202〉



(SK-201)

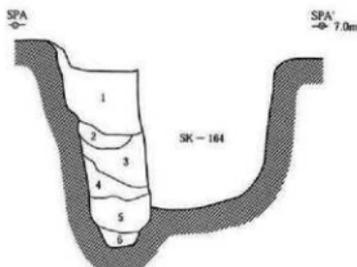
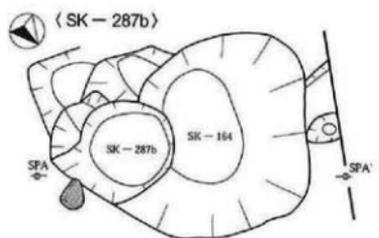
- 1 灰黄褐色砂：小砂利・焼土粒多量に含む
- 2 褐色砂：1に類似
- 3 褐色砂
- 4 褐色砂：3とはほぼ同質

(SK-202)

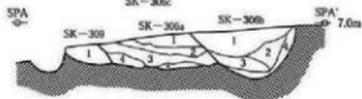
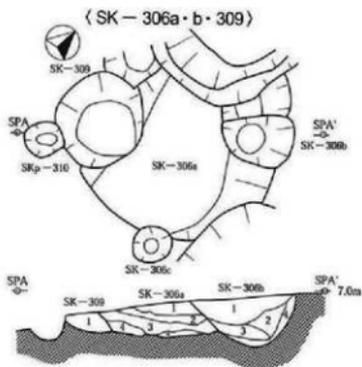
- 1 褐色砂
- 2 褐色砂：1よりもやや明色

A1-1区遺構個別図5 (第②面 第②下面 土状)

0 (1:40) 2m

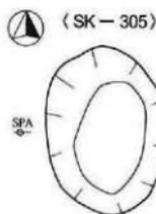


- (SK-287b)
- 1 暗褐色砂：黄色粘土粒・黒褐色粘土粒・炭化物含む
  - 2 黒褐色粘質砂：黄色粘土粒多量に含む
  - 3 暗褐色粘質砂：黄色粘土粒・炭化物含む
  - 4 暗黄褐色粘質砂
  - 5 黄褐色粘質砂：黄色粘土粒・陶器器含む
  - 6 オリーブ褐色砂



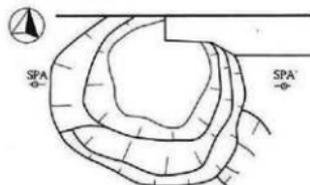
- (SK-306a)
- 1 暗褐色砂
  - 2 褐色砂
  - 3 暗褐色砂
  - 4 明赤褐色砂
- (SK-306b)
- 1 暗褐色砂
  - 2 暗褐色砂：1・3よりも褐色
  - 3 暗褐色砂
  - 4 明褐色砂

- (SK-309)
- 1 黒褐色砂

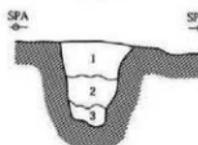
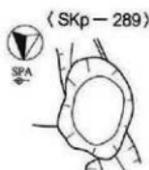


- (SK-305)
- 1 暗褐色砂
  - 2 黒褐色砂
  - 3 濃い赤褐色砂

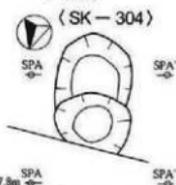
(SK-303)



- (SK-303)
- 1 暗褐色粘質砂
  - 2 黒褐色砂
  - 3 暗褐色砂：炭化物含む
  - 4 暗褐色砂
  - 5 褐色砂

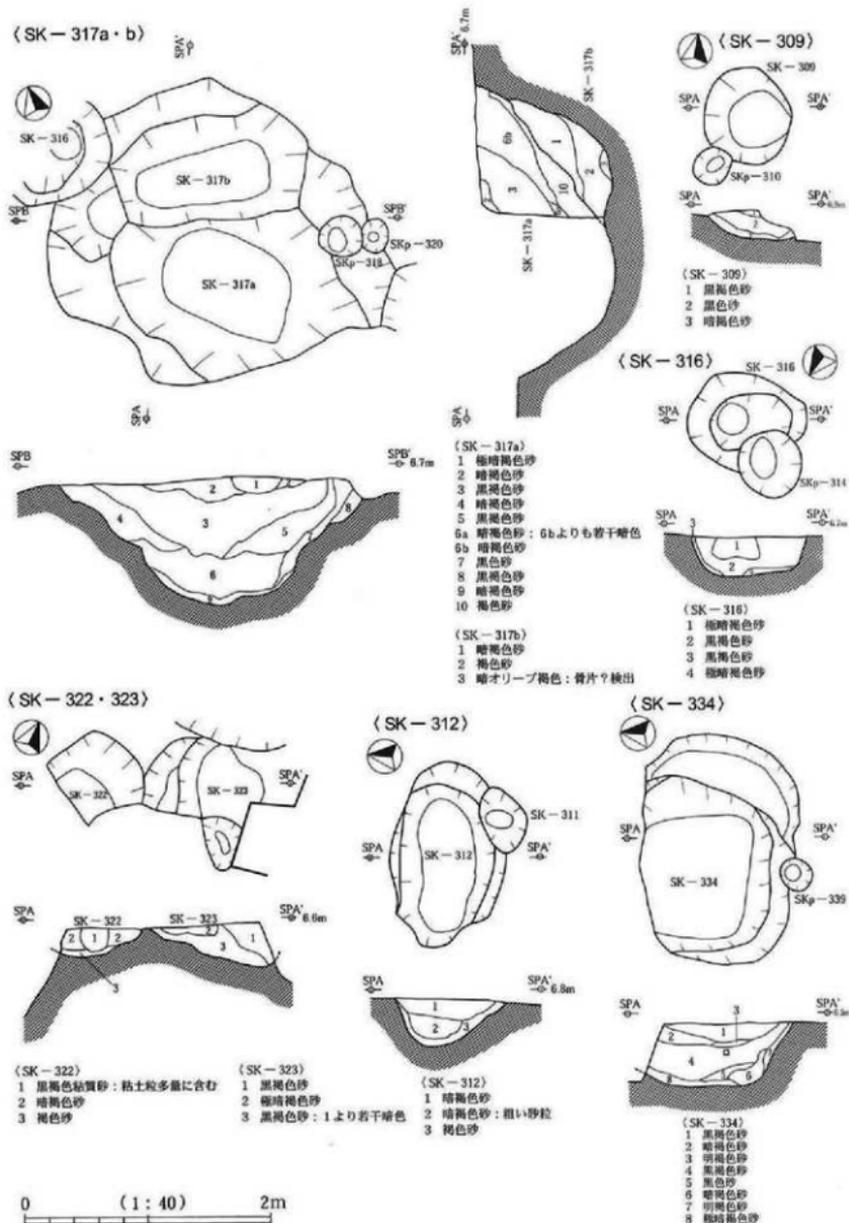


- (SKp-289)
- 1 暗オリーブ褐色砂
  - 2 黒褐色砂：炭化物含む
  - 3 暗褐色砂

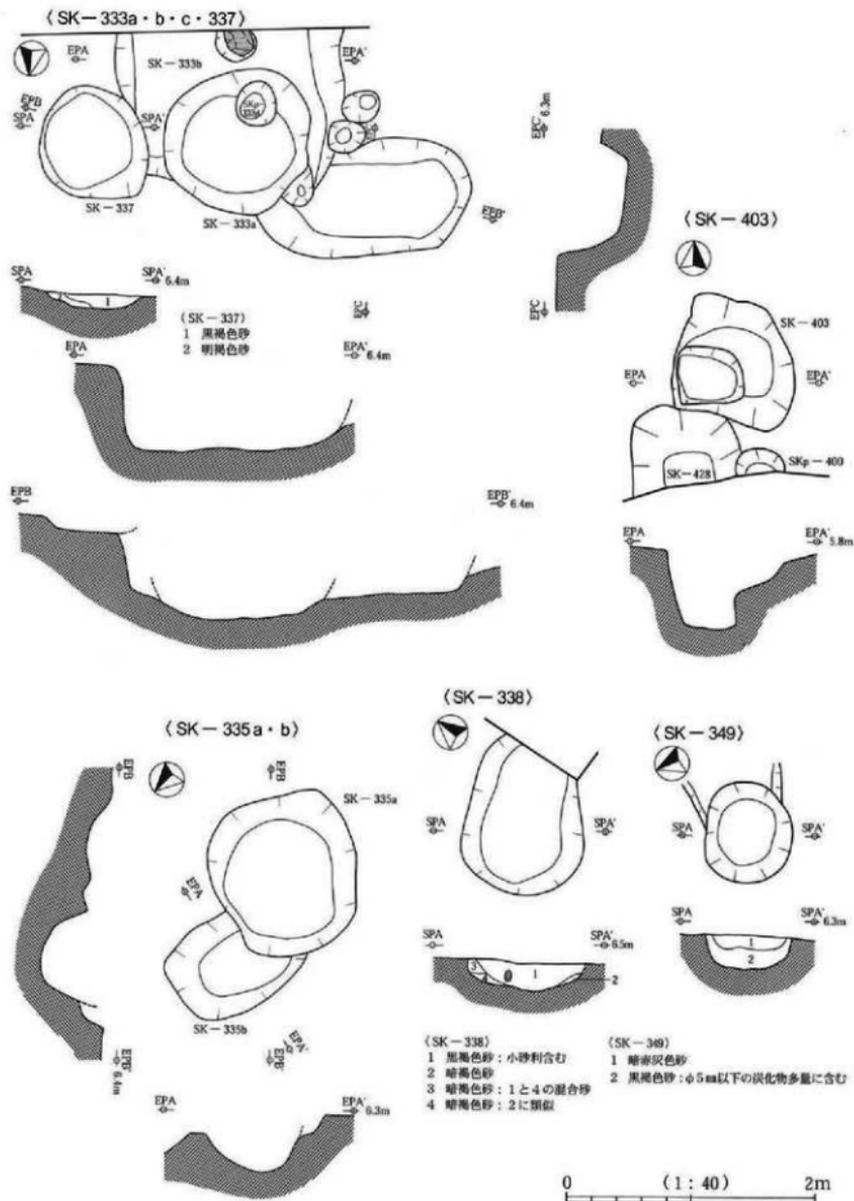


- (SK-304)
- 1 黒褐色砂
  - 2 暗褐色砂

0 (1:40) 2m

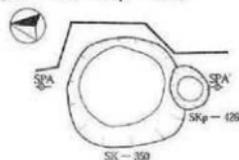


A1-I区遺構個別図7 (第3面 土坑)



A1-1区遺構個別図8 (第④面 第④上面 土坑)

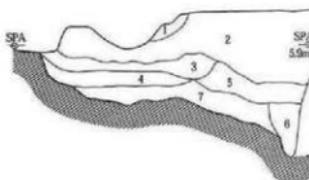
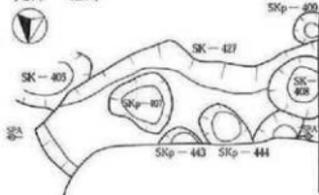
(SK-350・SKp-426)



- (SK-350)  
 1 暗オリーブ褐色砂；黄色粘土粒多量に含む  
 2 オリーブ褐色砂；黄色粘土粒多量に含む  
 3 暗灰褐色砂；黄色粘土粒多量に含む

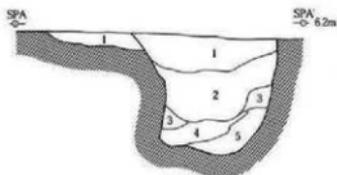
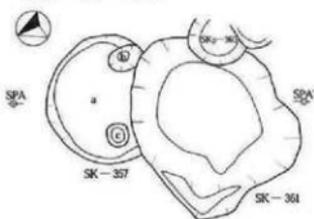
- (SKp-426)  
 1 暗褐色砂；炭化物多量に含む  
 2 暗赤灰色砂

(SK-427)



- (SK-427)  
 1 黄色砂  
 2 暗赤褐色砂；粘土粒、炭化物含む  
 3 暗灰褐色砂；粘土粒、心1m程度の炭化物含む  
 4 オリーブ褐色砂；粘土粒、炭化物多量に含む  
 5 暗赤灰色砂  
 6 黒褐色砂；炭化物多量に含む  
 7 暗褐色砂；粘土粒、炭化物多量に含む

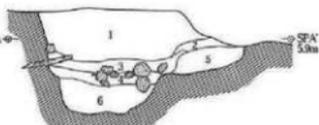
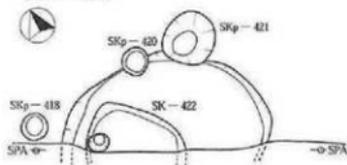
(SK-357・361)



- (SK-357)  
 1 オリーブ褐色砂；灰黄色～褐色粘土粒多量に含む

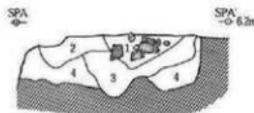
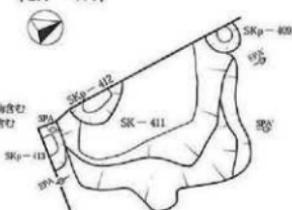
- (SK-361)  
 1 暗褐色砂；灰黄色～褐色粘土粒多量に含む  
 2 暗オリーブ褐色砂；灰黄色～褐色粘土粒多量に含む  
 3 オリーブ褐色  
 4 暗灰褐色砂粒質砂；灰黄色～褐色粘土粒多量に含む  
 5 暗褐色砂

(SK-422)



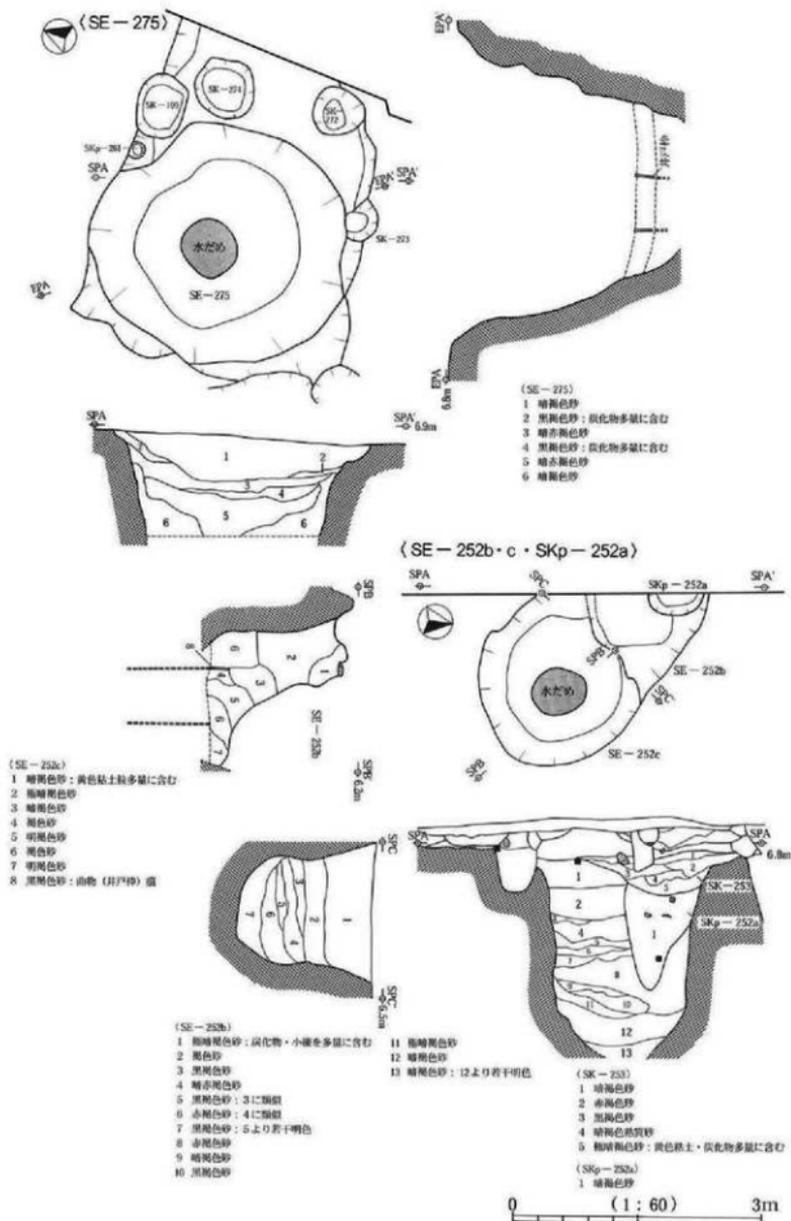
- (SK-422)  
 1 暗オリーブ褐色砂；粘土粒、炭化物含む  
 2 暗褐色砂；1より炭化物多い  
 3 黒褐色砂；鉄、鉄滓混入  
 4 黒色砂；粘土粒、炭化物多量に含む  
 5 暗オリーブ褐色砂  
 6 黄褐色砂

(SK-411)



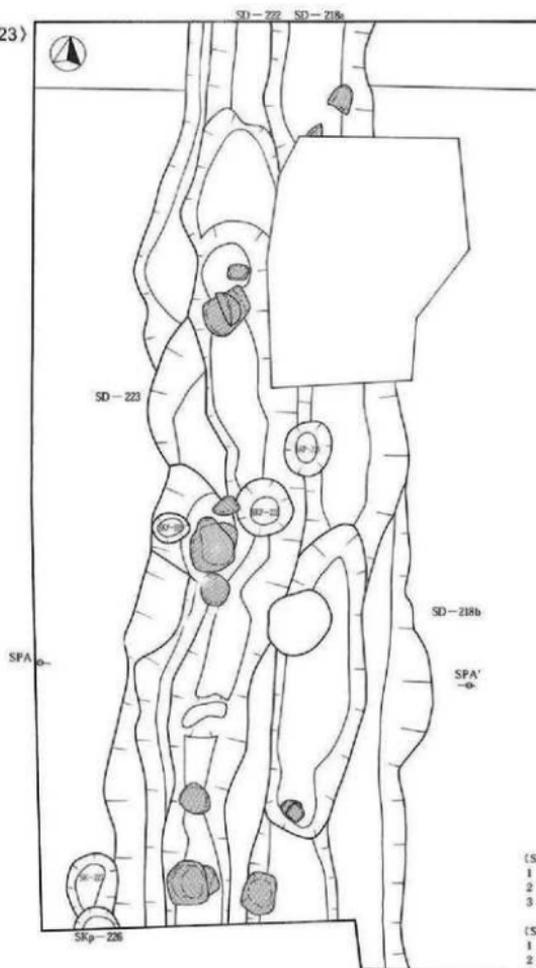
- (SK-411)  
 1 黒色砂；炭化物多量に含む  
 2 黒褐色砂；炭化物多量に含む  
 3 暗褐色砂  
 4 暗赤灰色砂

0 (1:40) 2m



A1-I区遺構個別図 10 (第③下面、第③~④面 井戸跡)

(SD-218・222・223)



(SD-218a)

- 1 褐色砂
- 2 明褐色砂
- 3 明褐色砂

(SD-218b)

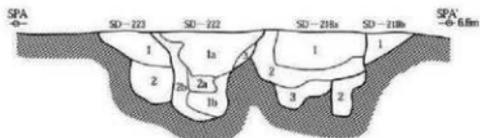
- 1 暗褐色砂
- 2 暗褐色砂：1に類似

(SD-222)

- 1a 黒色砂
- 1b 黒色砂：1aよりやや明色
- 2a 明褐色粘質砂
- 2b 褐色砂
- 3 明褐色砂

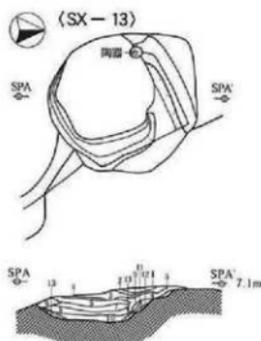
(SD-223)

- 1 暗褐色砂
- 2 黒褐色砂



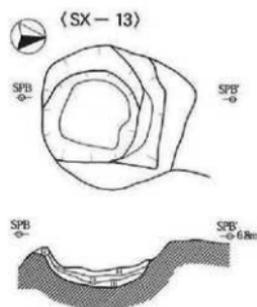
0 (1:40) 2m

A1-I区遺構個別図 11 (第③上面、溝跡)

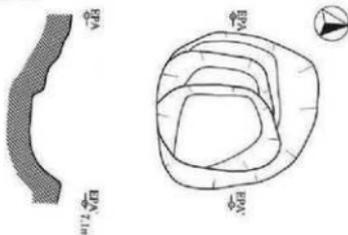


(SX-13)

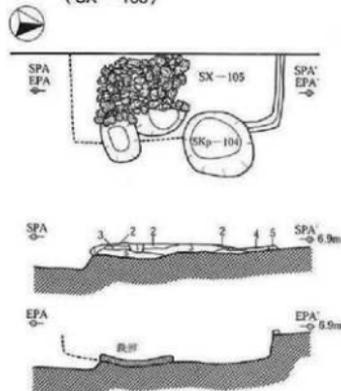
- |             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 1 灰褐色砂      | 11 暗褐色粘土                |
| 2 褐色粘土：砂混入  | 12 黄土                   |
| 3 褐色砂       | 13 暗褐色粘土                |
| 4 赤褐色粘土：砂混入 | 14 灰褐色粘土                |
| 5 灰褐色土：砂混   | 15 暗褐色粘土：砂混入、灰・炭化物多量に含む |
| 6 灰褐色砂      | 16 赤褐色砂                 |
| 7 灰褐色粘土     | 17 暗褐色粘土                |
| 8 灰白色粘土     |                         |
| 9 灰黄色粘土     |                         |
| 10 赤褐色粘土    |                         |



(SX-13) (完掘)



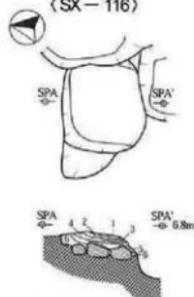
(SX-105)



(SX-105)

- |                      |
|----------------------|
| 1 暗赤褐色砂              |
| 2 黄土                 |
| 3 暗褐色粘質砂             |
| 4 暗赤褐色粘質砂：灰・炭化物多量に含む |
| 5 黄土                 |
| 6 褐色砂：灰混入            |

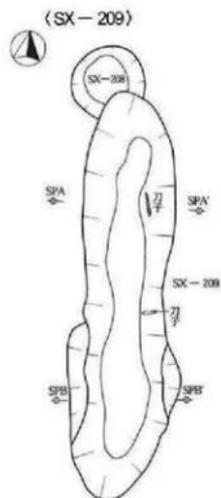
(SX-116)



(SX-116)

- |                     |
|---------------------|
| 1 赤褐色粘質砂            |
| 2 暗褐色粘質砂：灰・炭化物多量に含む |
| 3 暗褐色粘質砂：灰多量に含む     |
| 4 黄土                |
| 5 暗褐色粘質砂：灰多量に含む     |
| 6 暗褐色粘質砂：灰・炭化物多量に含む |

0 (1:40) 2m

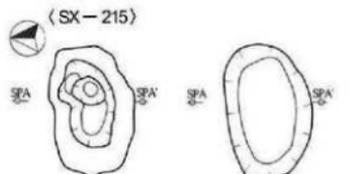


- (SX-209)
- 1 赤褐色砂・中間に赤い粘土層あり
  - 2 暗褐色粘土
  - 3 黒褐色砂
  - 4 褐色砂
  - 5 黒色粘土; 結核の強い炭化物層、刀子出土

(SX-268)

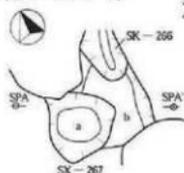


- (SX-268)
- 1 暗灰色粘質砂; 灰多量に含む、上面に膜層付着
  - 2 灰白色粘土
  - 3 灰色粘土
  - 4 暗灰色粘質砂; 炭化物含む、2と3の混合砂



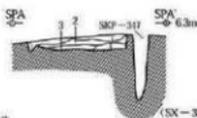
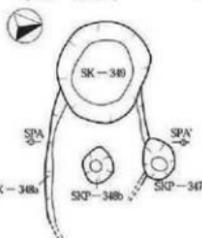
- (SX-215)
- 1 粘褐色砂
  - 2 赤褐色砂
  - 3 粘褐色砂
  - 4 暗赤褐色粘質砂層

(SX-267a・b)



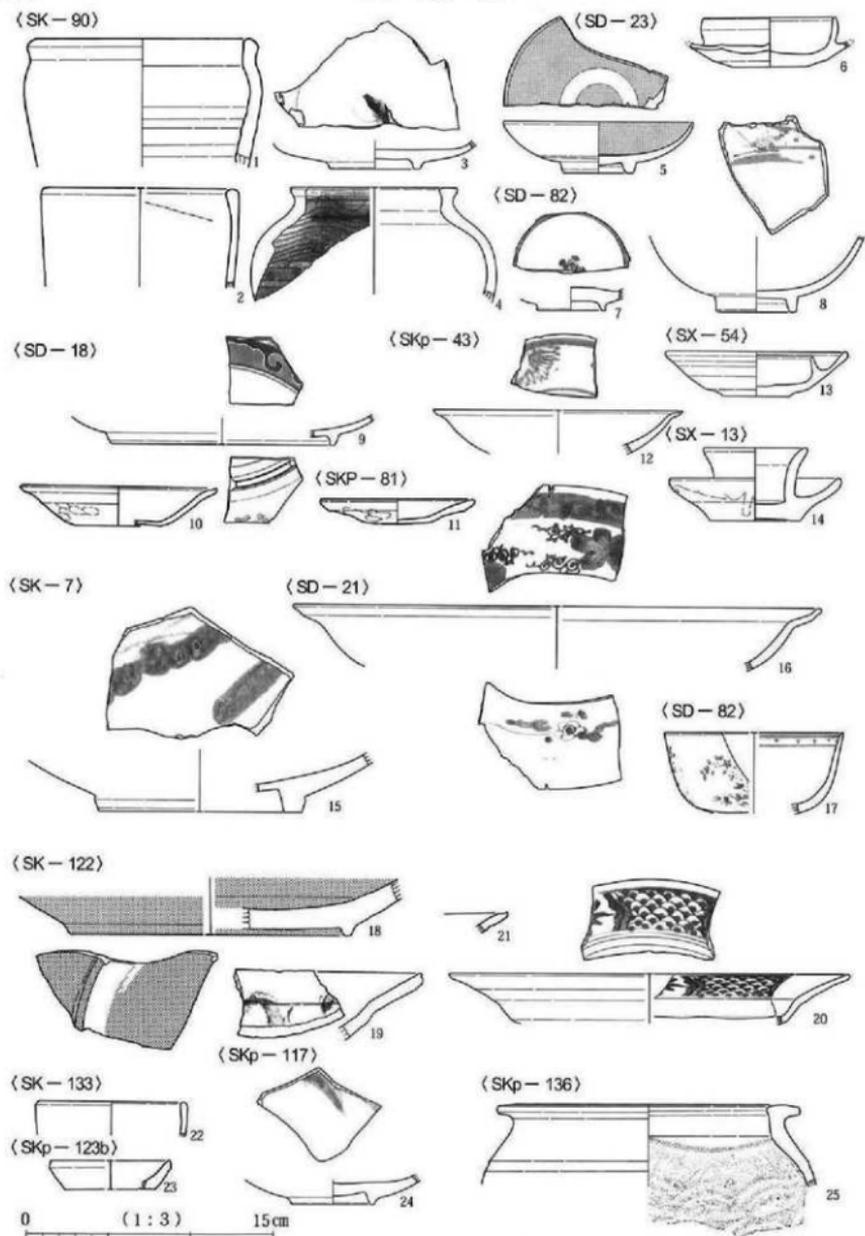
- (SX-267a)
- a 灰白色粘土
  - b 赤褐色粘土
- 2 暗灰色粘質砂
  - 3 褐色砂
  - 4 灰白色粘土
  - 5 暗灰色砂; 3と4の混合砂

(SX-348a)

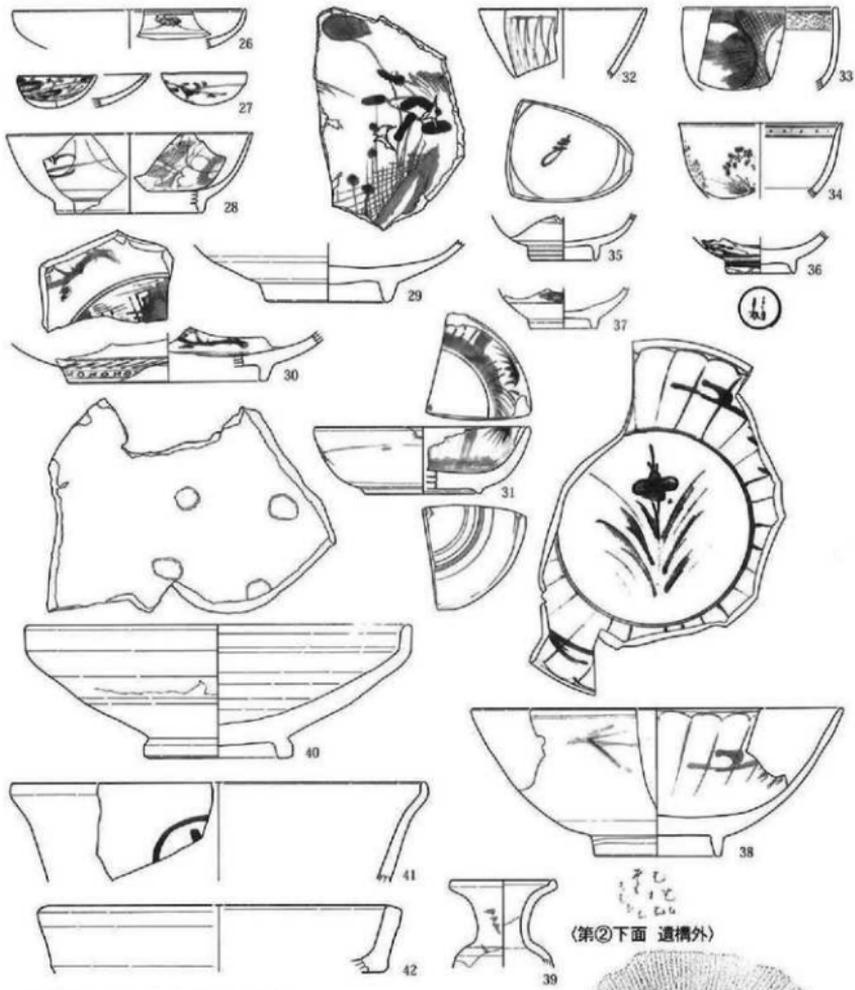


- (SX-348)
- 1 暗赤褐色砂; 黄色粘土粘着付
  - 2 暗黄褐色粘土; 硬くしまる、9枚
  - 3 暗赤褐色砂; 炭質した砂
  - 4 黄褐色砂; 3に混在

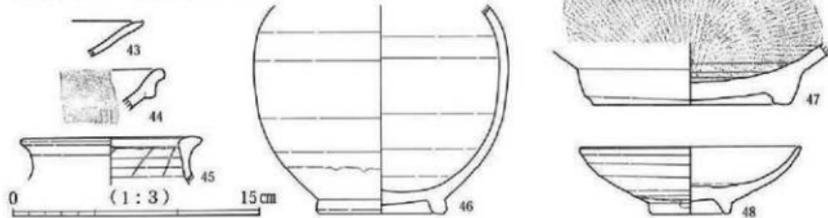
0 (1:40) 2m



〈第②面 遺構外〉



〈第②下面 K-4⑧⑬(SX-102)〉

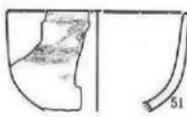


〈第②下面 遺構外〉

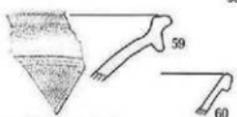
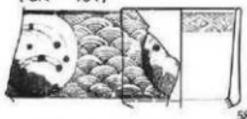
0 (1:3) 15cm

出土遺物 2 (第②面・第②下面 2)

(SD-151)



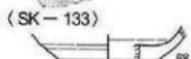
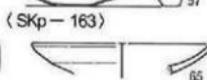
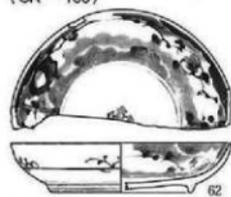
(SK-164)



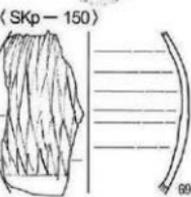
(SK-166)



(SKp-148)

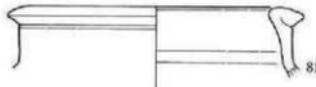
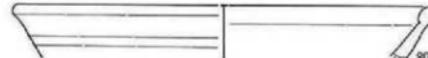
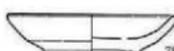
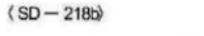
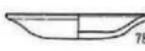


(SK-133)



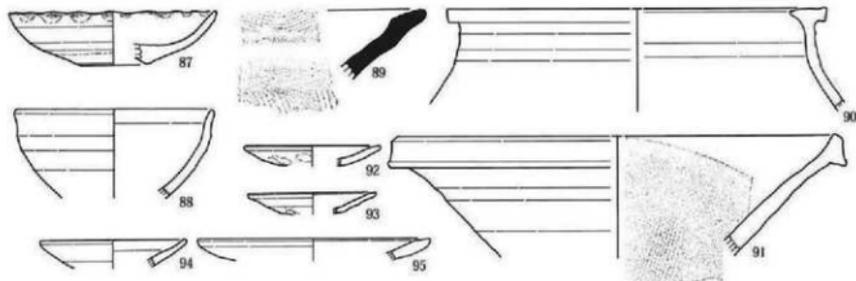
(SK-173)

(SD-218a)

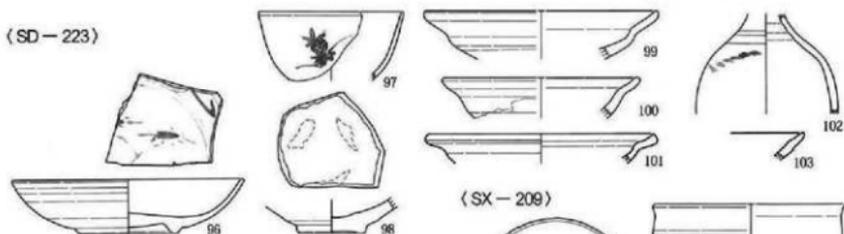


0 (1:3) 15cm

(SD-222)

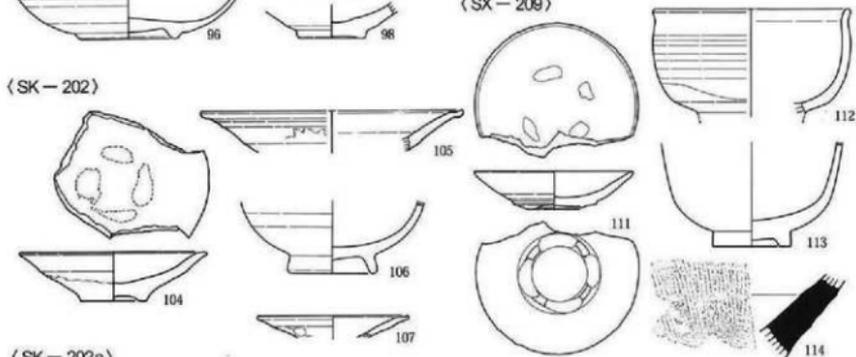


(SD-223)

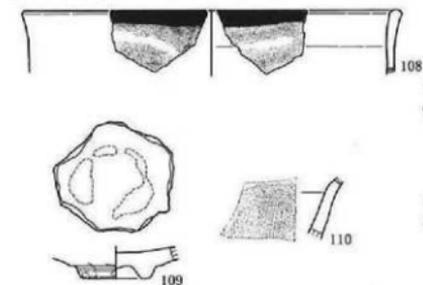


(SX-209)

(SK-202)



(SK-202a)



(SK-230)



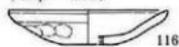
(SX-215)



(SKp-228)



(SKp-205)

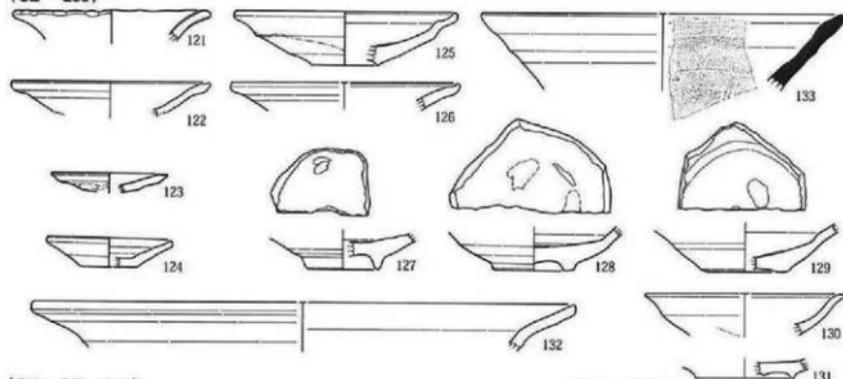


(SK-201)

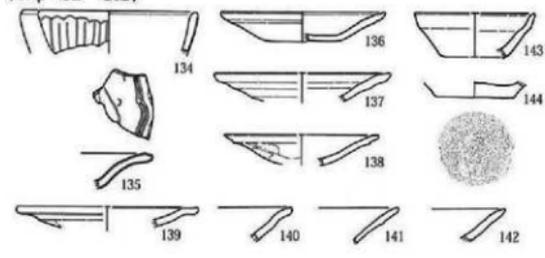


0 (1:3) 15cm

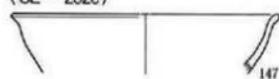
(SE-255)



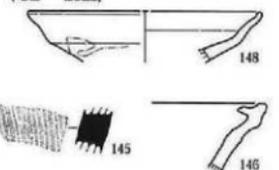
(SKp-SE-252)



(SE-252c)



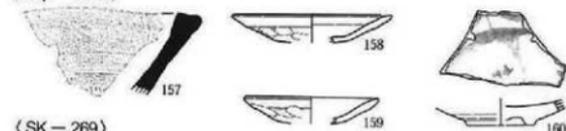
(SE-252b)



(SKp-251a)



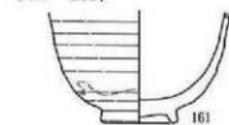
(SKp-251c)



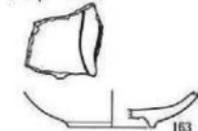
(SK-270)



(SK-269)



(SKp-254)

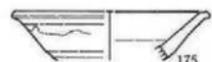
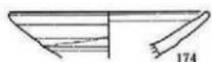
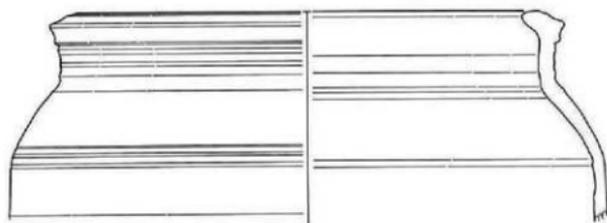
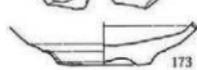
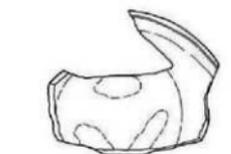
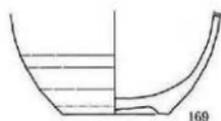
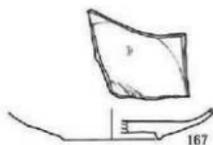
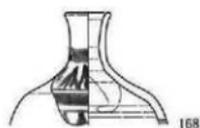
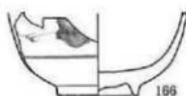


(SK-268)

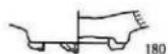
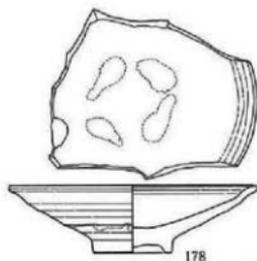


0 (1:3) 15cm

〈第③上面 遺構外〉

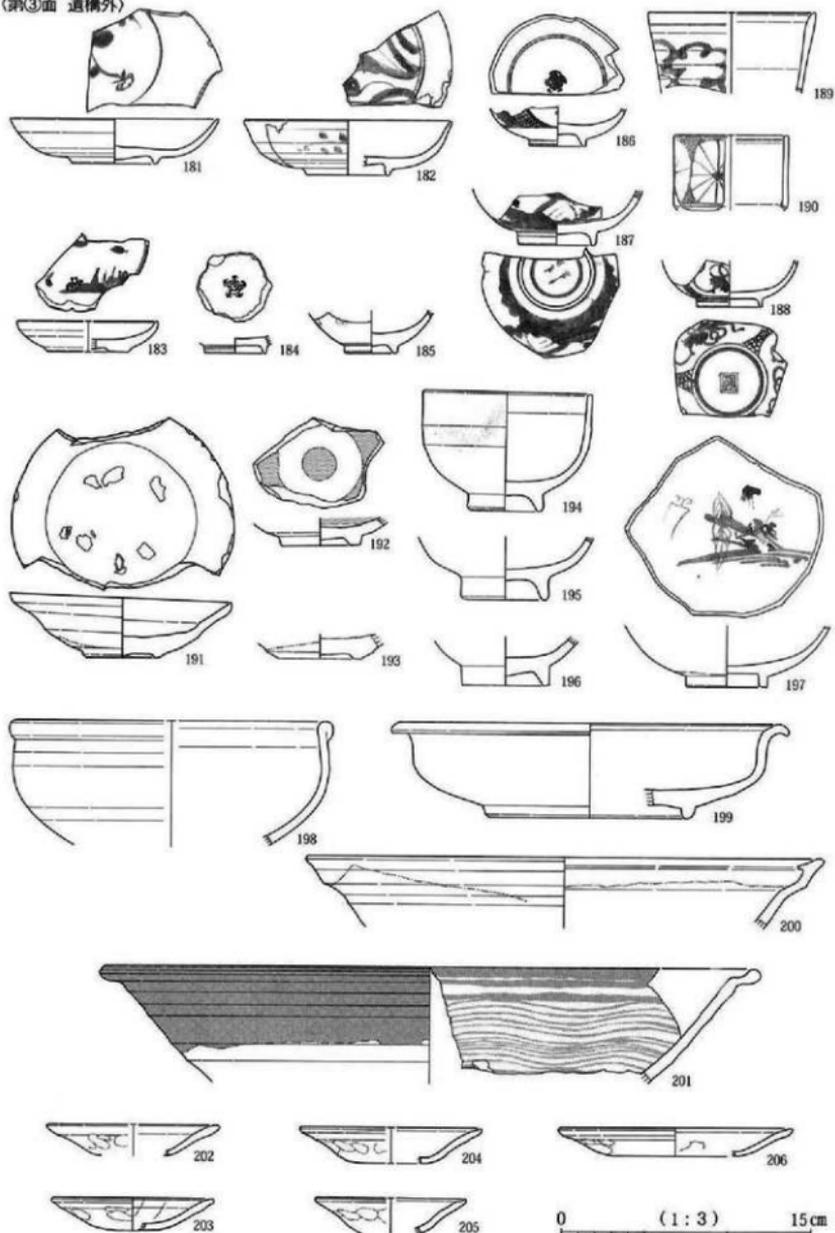


〈第③下面 遺構外〉



0 (1:3) 15cm

(第3面 遺構外)

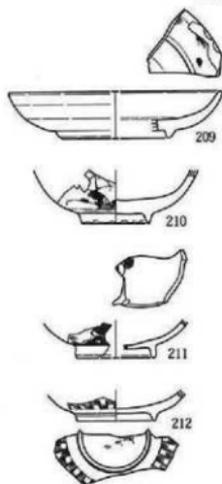
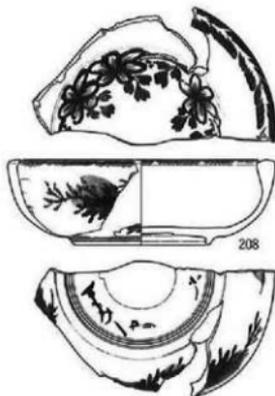
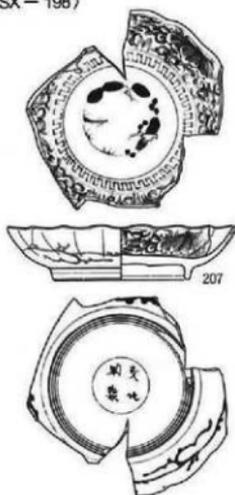


出土遺物 7 (第3面 2)

(SX-198)

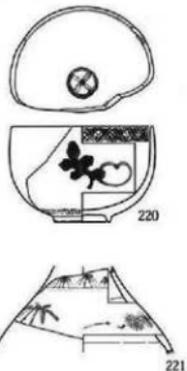
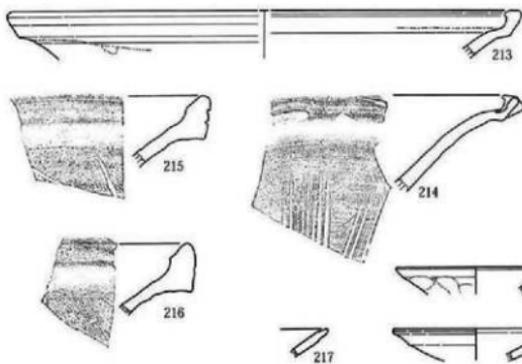
A1-I区 30

图版 31

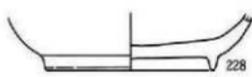
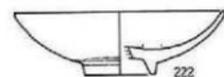


(SXp-199)

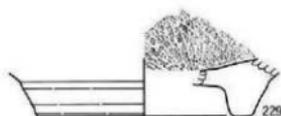
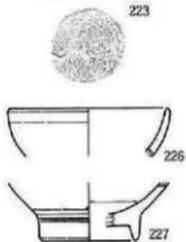
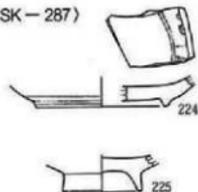
(SD-281)



(SK-287b)

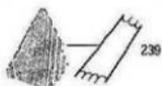
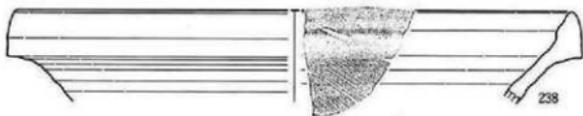
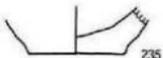
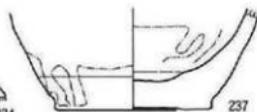
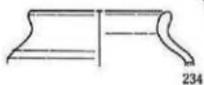
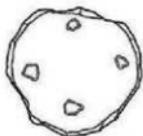
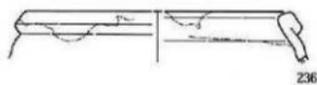
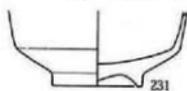


(SK-287)



0 (1:3) 15cm

(SE-275)



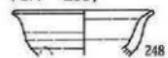
(SK-283a)



(SKp-286)



(SK-293)



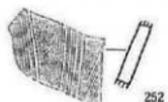
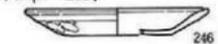
(SKp-263)



(SKp-278)



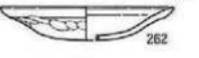
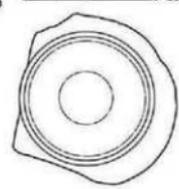
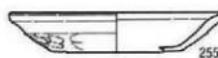
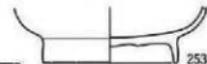
(SKp-289)



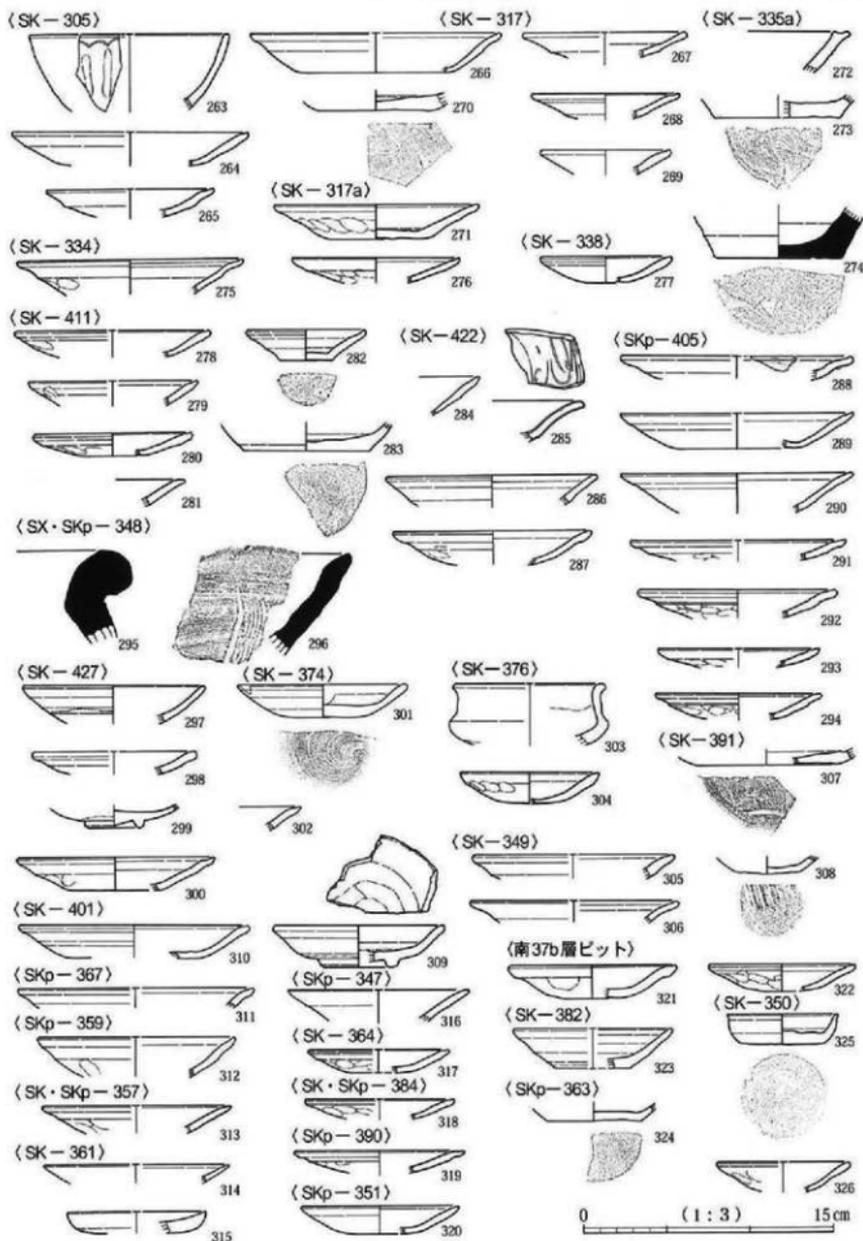
(遺構外)



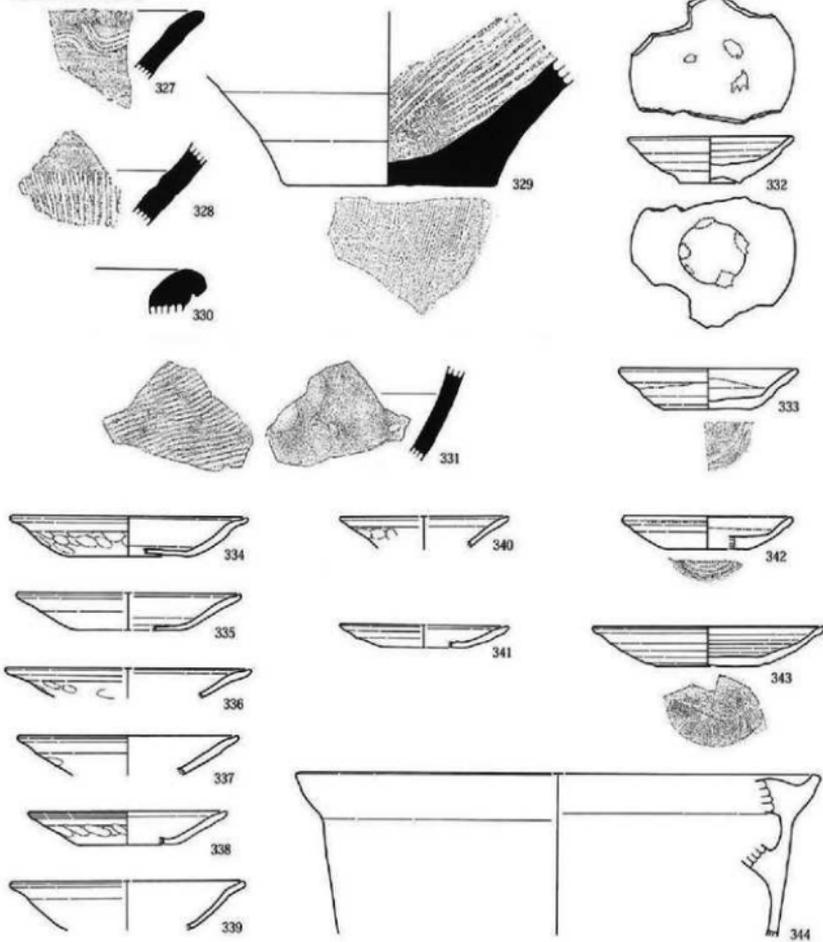
(南16層)



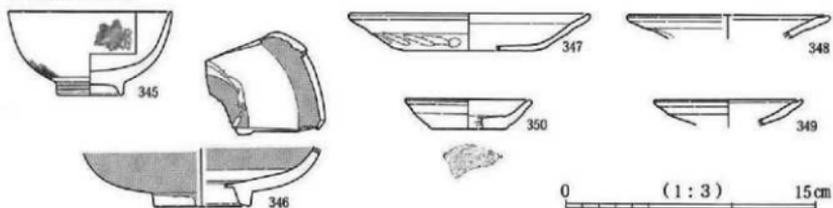
0 (1:3) 15cm



(第④上面 遺構外)

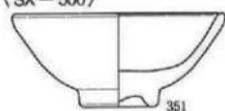


(第④面 遺構外)

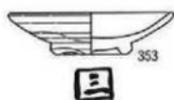


0 (1:3) 15cm

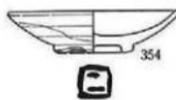
(SX-500)



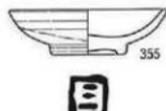
351



353



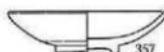
354



355



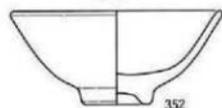
356



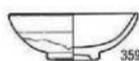
357



358



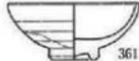
352



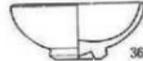
359



360



361



362

(第⑤面 遺構外)



363



364



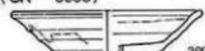
365

(SKp-460)



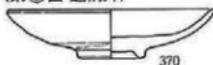
368

(SK-3008)



369

(第⑥面 遺構外)



370

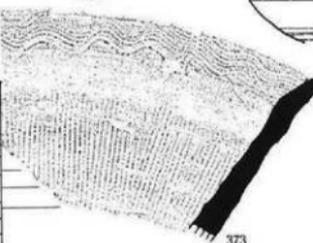


371



372

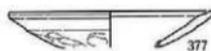
(第⑥面 遺構外)



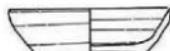
374



375



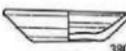
377



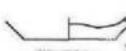
378



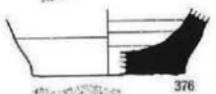
379



380



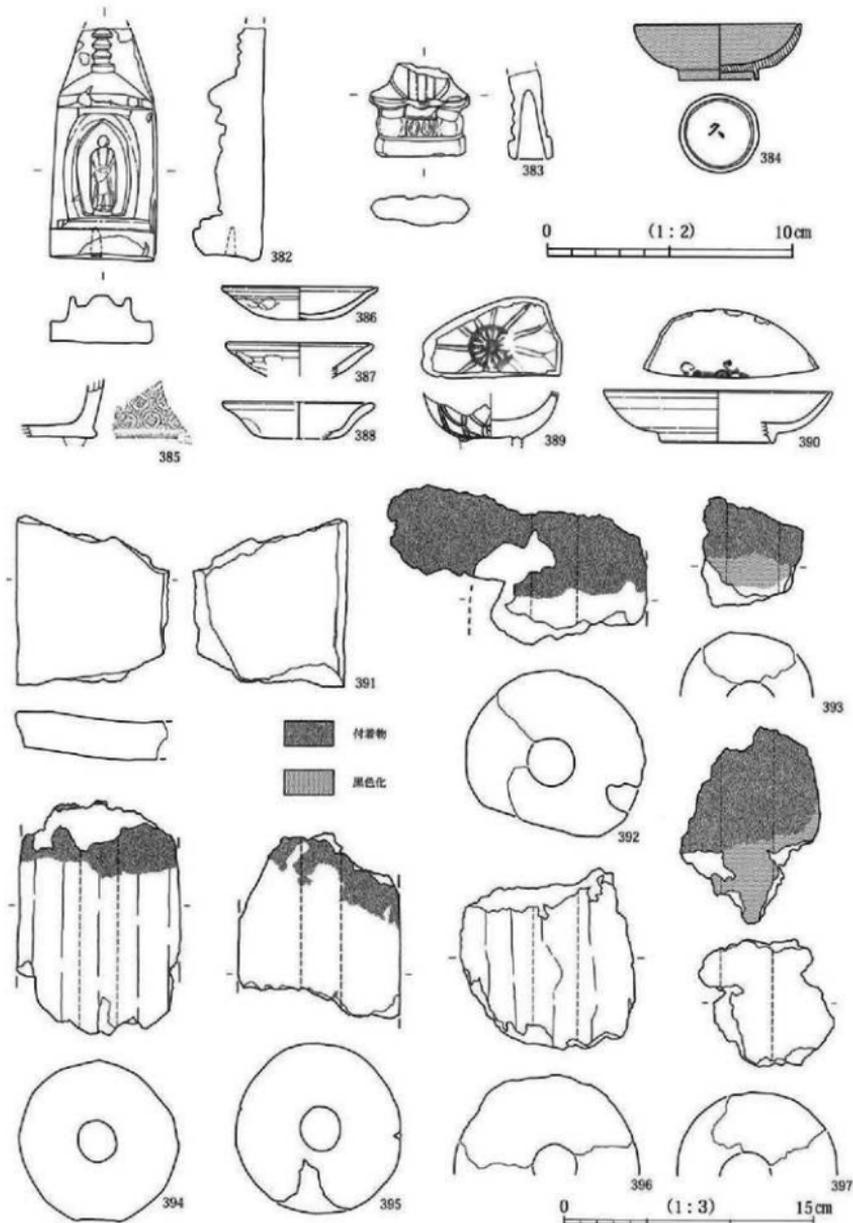
381



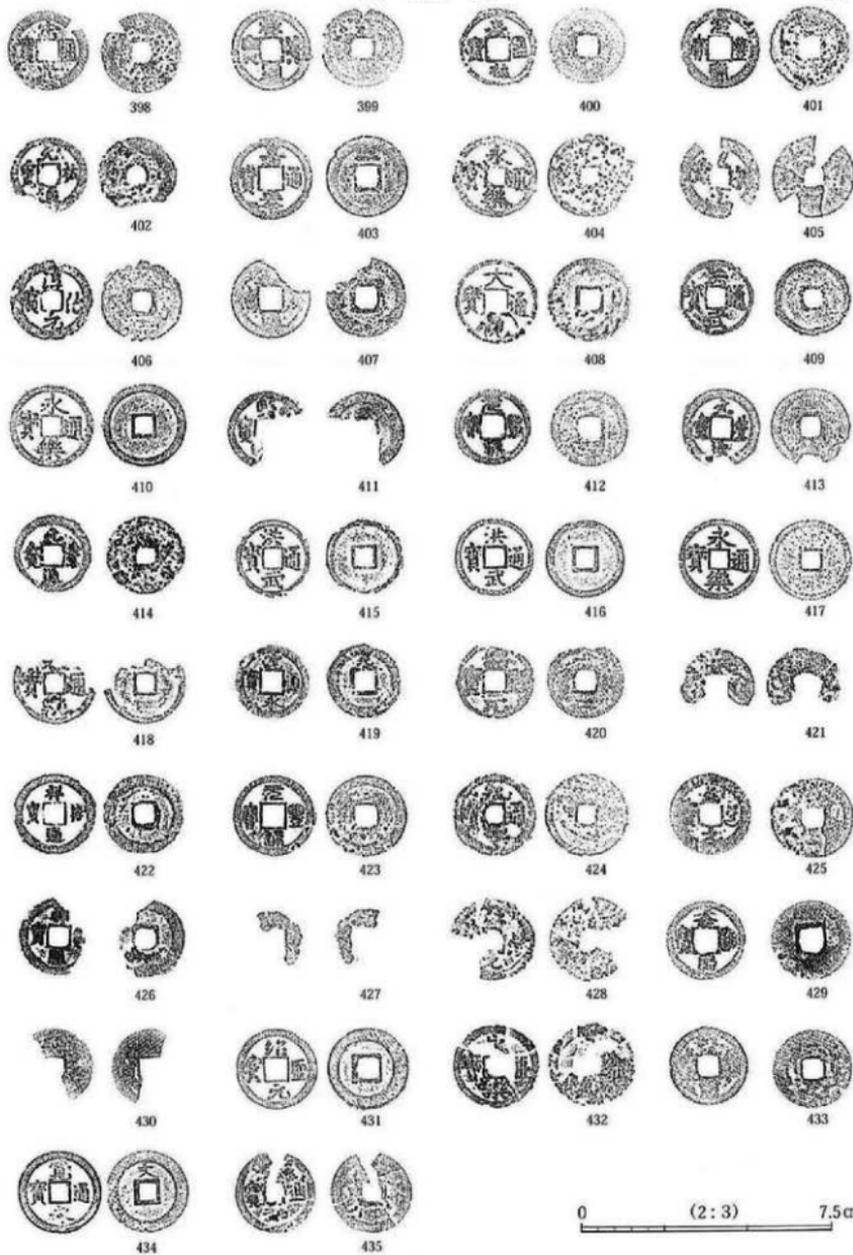
376



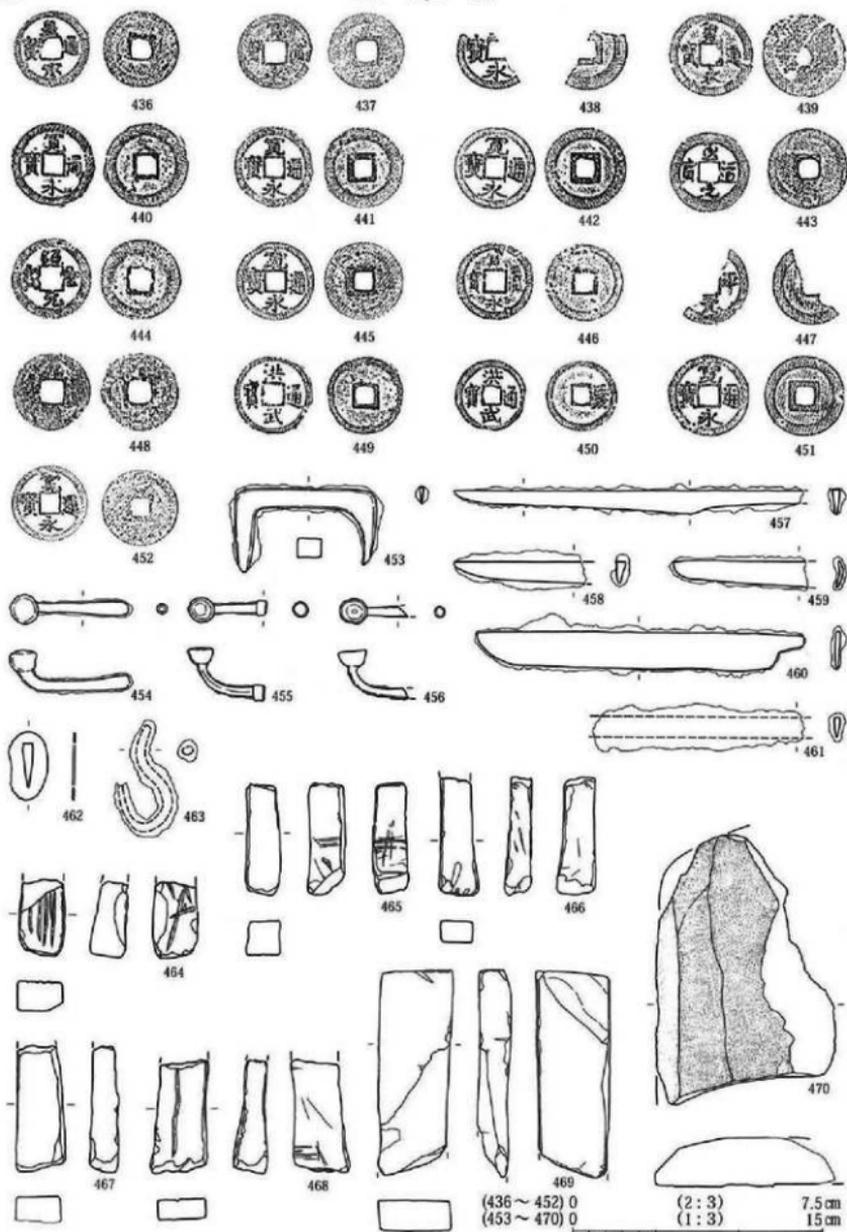
0 (1:3) 15cm



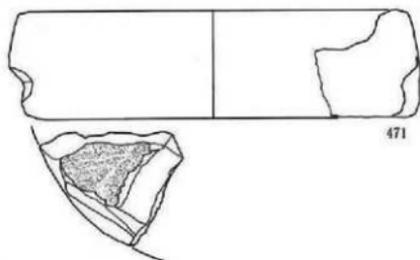
出土遺物13 (その他)



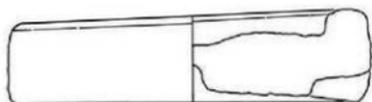
出土遺物14 (金屬製品)



(436 ~ 452) 0  
 (453 ~ 470) 0  
 (2 : 3) 7.5 cm  
 (1 : 3) 15 cm



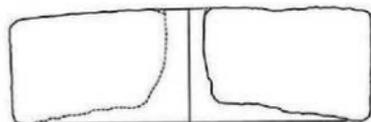
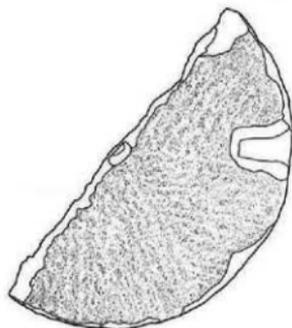
471



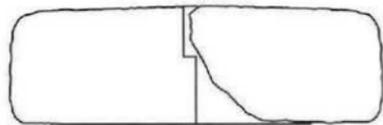
472

0 (1:4) 15cm (471~474)

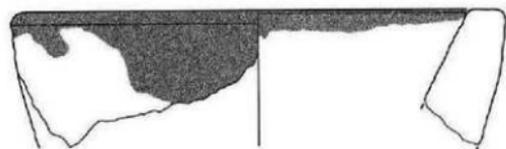
0 (1:3) 15cm (475~476)



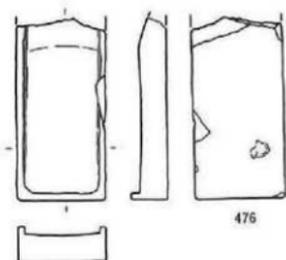
473



474



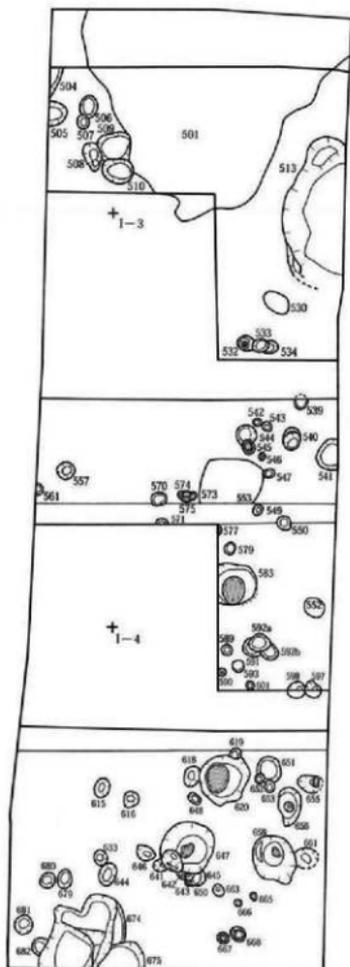
475



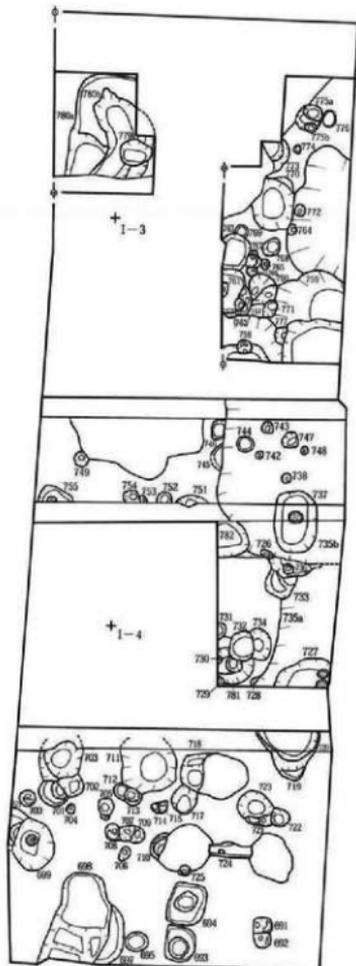
476



〈第③面〉

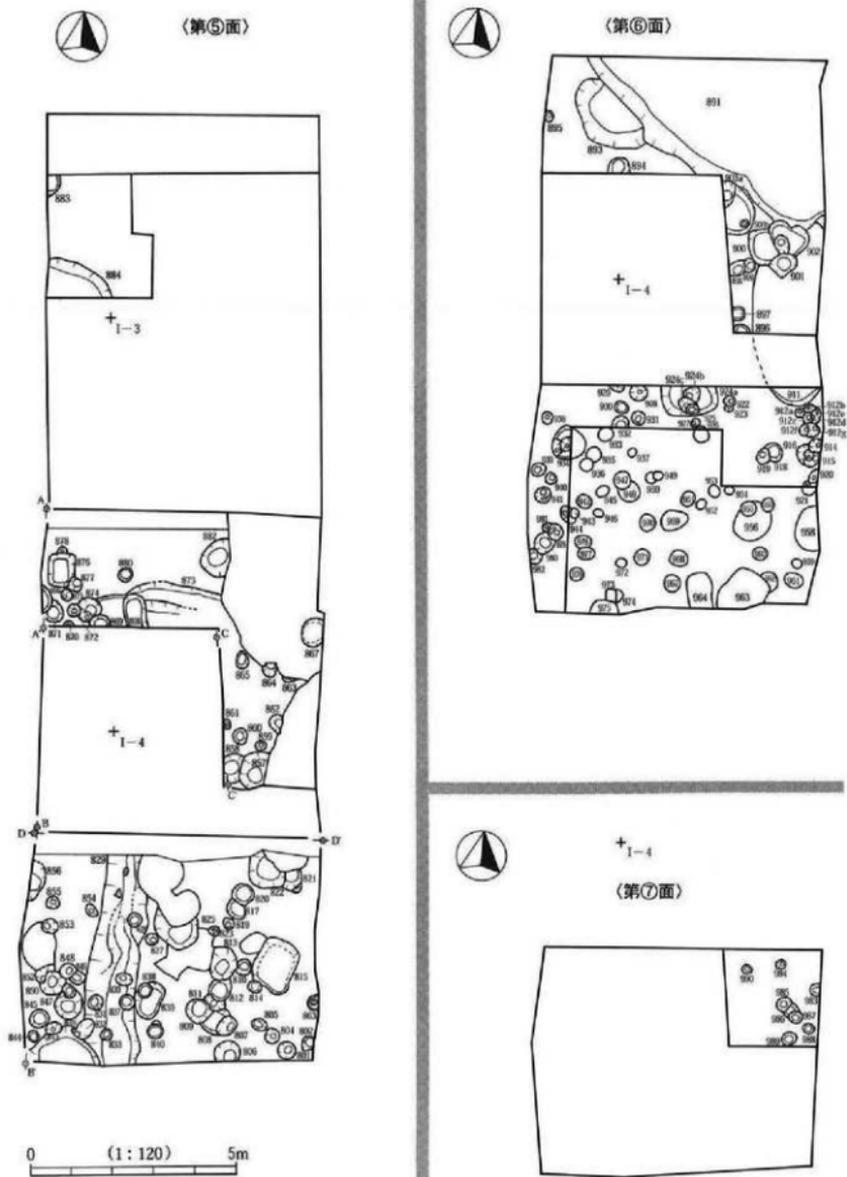


〈第④面〉



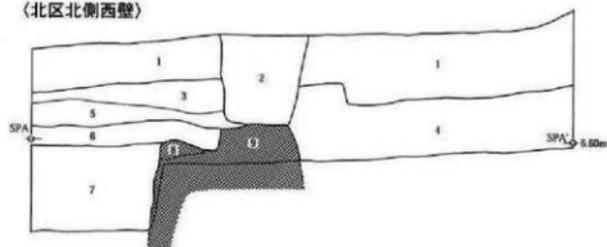
0 (1:120) 5m

A1-IIa区全体图1



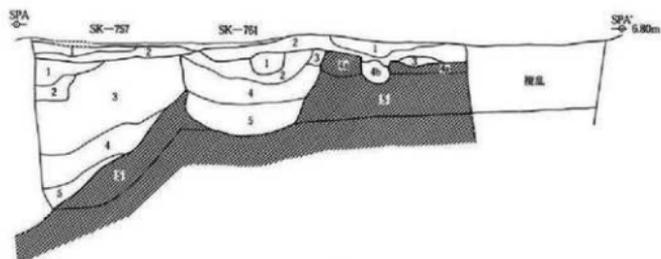
A1-lla区全体図2

〈北区北側西壁〉



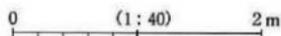
- 1 黒褐色砂：砂利多量に含む
- 2 黒褐色砂：小砂利多量に含む、外周に木桶めぐる
- 3 黒褐色粘質砂：砂利多量に含む
- 4 褐色砂：小砂利多量に含む
- 5 暗褐色砂
- 6 暗褐色砂
- 7 黒色砂
- 8 暗赤褐色砂
- 9 明褐色砂：砂丘砂

〈北区南側西壁〉

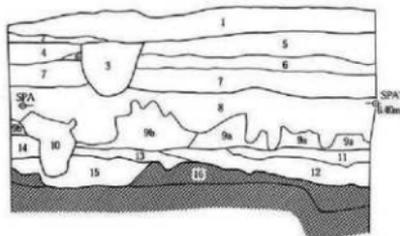


- 1 黒褐色砂
- 2 暗褐色粘質砂
- 3 暗褐色砂
- 4a 明褐色砂：粒子の粗い砂丘砂、粘性・締まりなし
- 4b 暗赤褐色砂：4a多く混入する
- 5 暗褐色砂：粒子の粗がり砂丘砂、粘性・締まりなし

- |          |          |
|----------|----------|
| (SK-757) | (SK-761) |
| 1 暗褐色砂   | 1 褐色砂    |
| 2 赤褐色砂   | 2 明褐色砂   |
| 3 暗褐色砂   | 3 黒褐色砂   |
| 4 褐色砂    | 4 暗褐色砂   |
| 5 明褐色砂   | 5 黒褐色砂   |

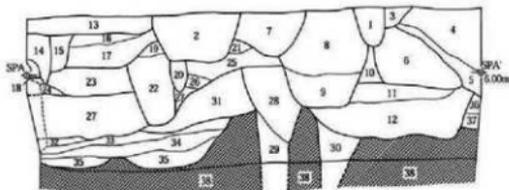


(中央区北側西壁)



- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色砂：礫・砂利・焼土多量に混入      | 9a 褐色砂：粗い砂丘砂が混入           |
| 2 白色粘土                   | 9b 黒褐色砂                   |
| 3 暗褐色砂                   | 10 暗褐色砂                   |
| 4 暗褐色砂：焼土・小砂利を多量に含む      | 11 褐色砂：9aより若干明色           |
| 5 暗褐色砂                   | 12 黒褐色砂：黒色砂と褐色砂の混合砂       |
| 6 暗褐色砂：赤褐色砂が混入し、やや明色を呈する | 13 黒褐色砂：12に類似するが砂丘砂の混入率高い |
| 7 暗褐色砂：黄色粘土粒・焼土・木炭多量に含む  | 14 黒褐色砂：炭化物少量含む           |
| 8 暗灰色粘質砂：焼土・木炭多量に含む      | 15 黒褐色砂：14よりやや暗色          |
|                          | 16 明褐色砂：粒子粗く、締まりなし        |

(中央区南側西壁)

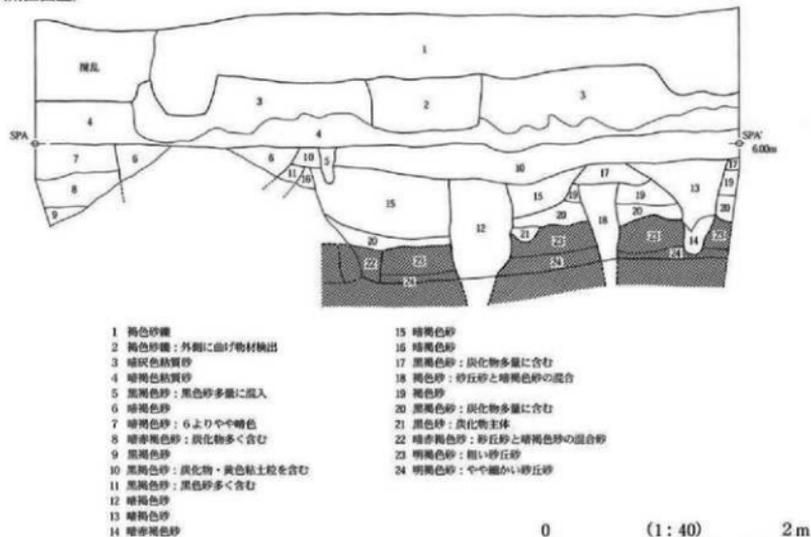


- |                          |                       |                   |
|--------------------------|-----------------------|-------------------|
| 1 黒褐色砂：焼土・炭化物多量に含む       | 19 黒褐色砂               | 30 褐色砂：砂丘砂混入      |
| 2 暗褐色砂：黄色粘土ブロック多く含む      | 20 黒褐色砂               | 31 暗褐色砂：炭化物・焼土粒含む |
| 3 黒褐色砂：黄色粘土多く含む          | 21 暗褐色砂：19とほぼ同質       | 32 褐色砂：砂丘砂混入      |
| 4 黒褐色砂：炭化物多量に含む          | 22 暗褐色砂：黄色粘土粒・炭化物含む   | 33 暗赤褐色砂          |
| 5 黒色粘土：炭化物多量に含む          | 23 暗褐色砂：黄色粘土粒・炭化物含む   | 34 褐色砂            |
| 6 暗褐色砂                   | 24 暗褐色砂               | 35 暗赤褐色砂          |
| 7 黒褐色砂：黄色粘土・焼土・炭化物やや多く含む | 25 暗褐色砂：黄色粘土粒含む、23に類似 | 36 黒褐色砂           |
| 8 黒褐色砂：粘土・焼土・炭化物を多量に含む   | 26 暗褐色砂：23と近似         | 37 暗赤褐色砂          |
| 9 暗褐色砂：粘土・焼土・炭化物を多量に含む   | 27 暗褐色砂：炭化物含む         | 38 明褐色砂：粒子の粗い砂丘砂  |
| 10 暗褐色砂                  | 28 暗褐色砂：炭化物含む         |                   |
| 11 明赤褐色粘土                | 29 暗赤褐色砂：27と砂丘砂の混合砂   |                   |
| 12 暗赤褐色砂                 |                       |                   |
| 13 黒褐色砂：粘土粒・炭化物多量に含む     |                       |                   |
| 14 暗褐色砂                  |                       |                   |
| 15 暗褐色砂：焼土・炭化物やや多く含む     |                       |                   |
| 16 黒褐色砂                  |                       |                   |
| 17 黒褐色砂：焼土・炭化物多量に含む      |                       |                   |
| 18 黒色砂                   |                       |                   |

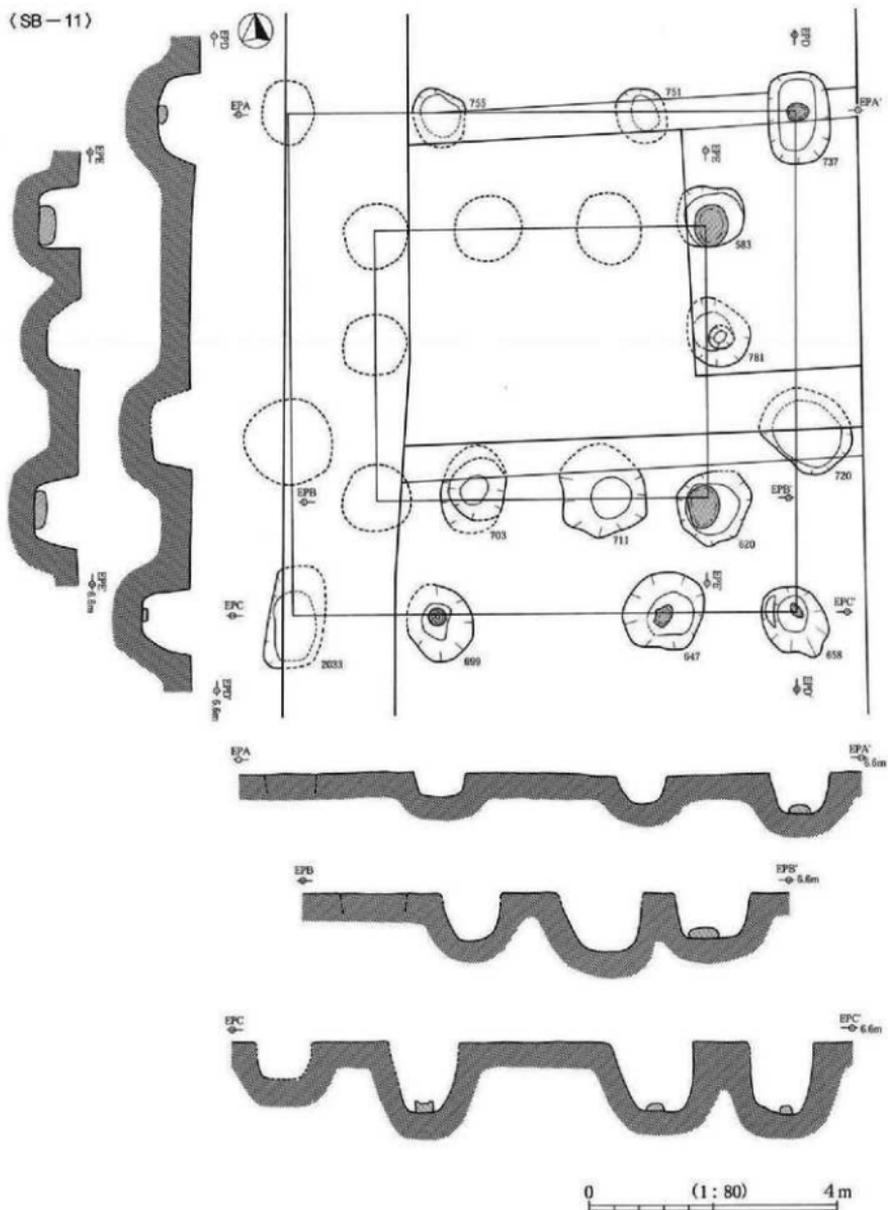
0 (1:40) 2m



〈南区西壁〉

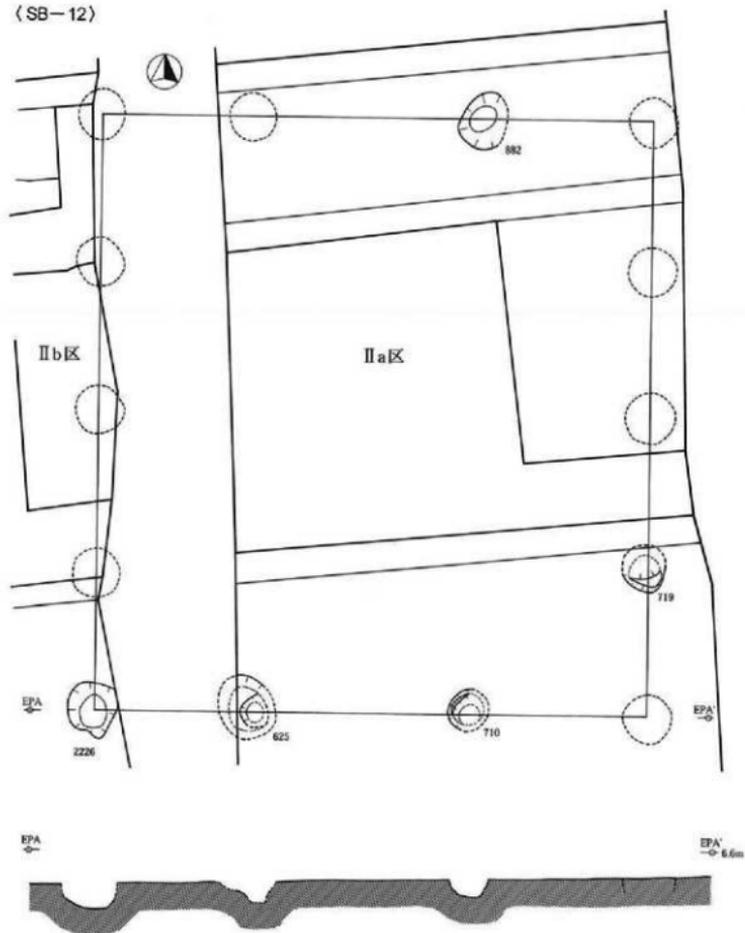


(SB-11)

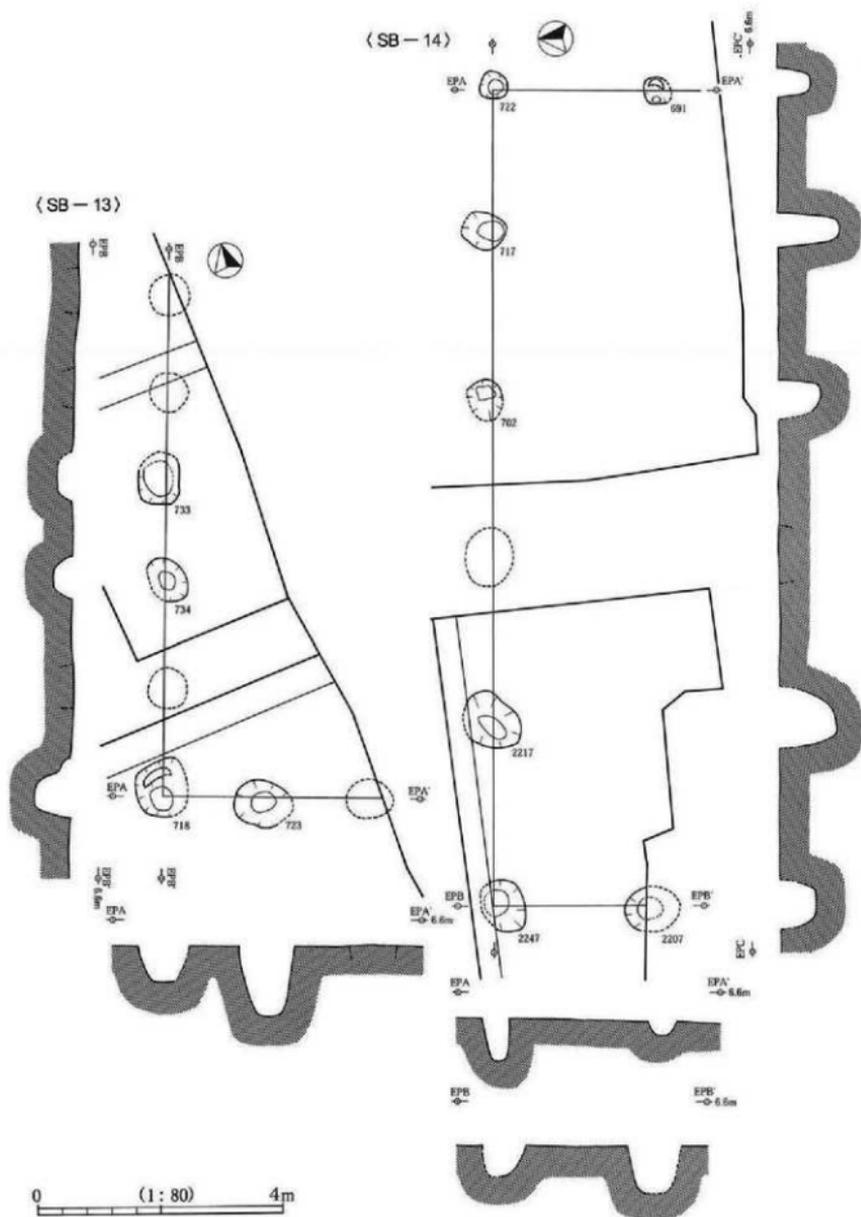


A1- IIa区建物跡個別図 1

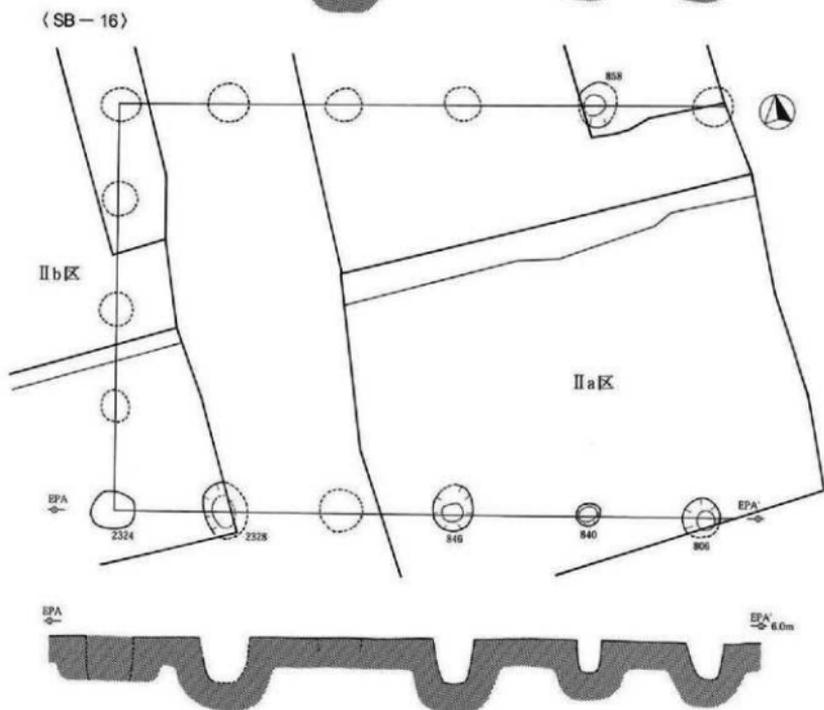
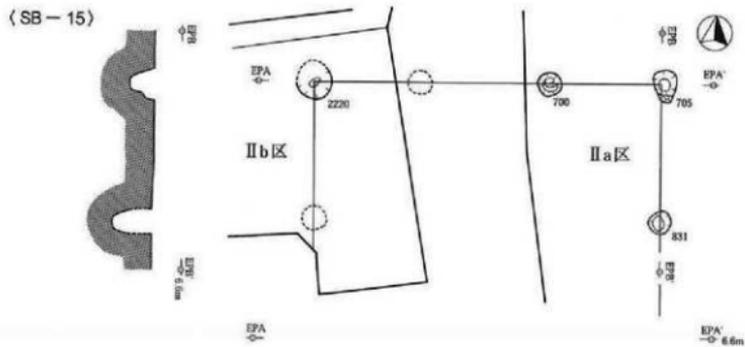
(SB-12)



A1-Ⅱa区建物跡個別図 2



A1- IIa区建物跡個別図 3

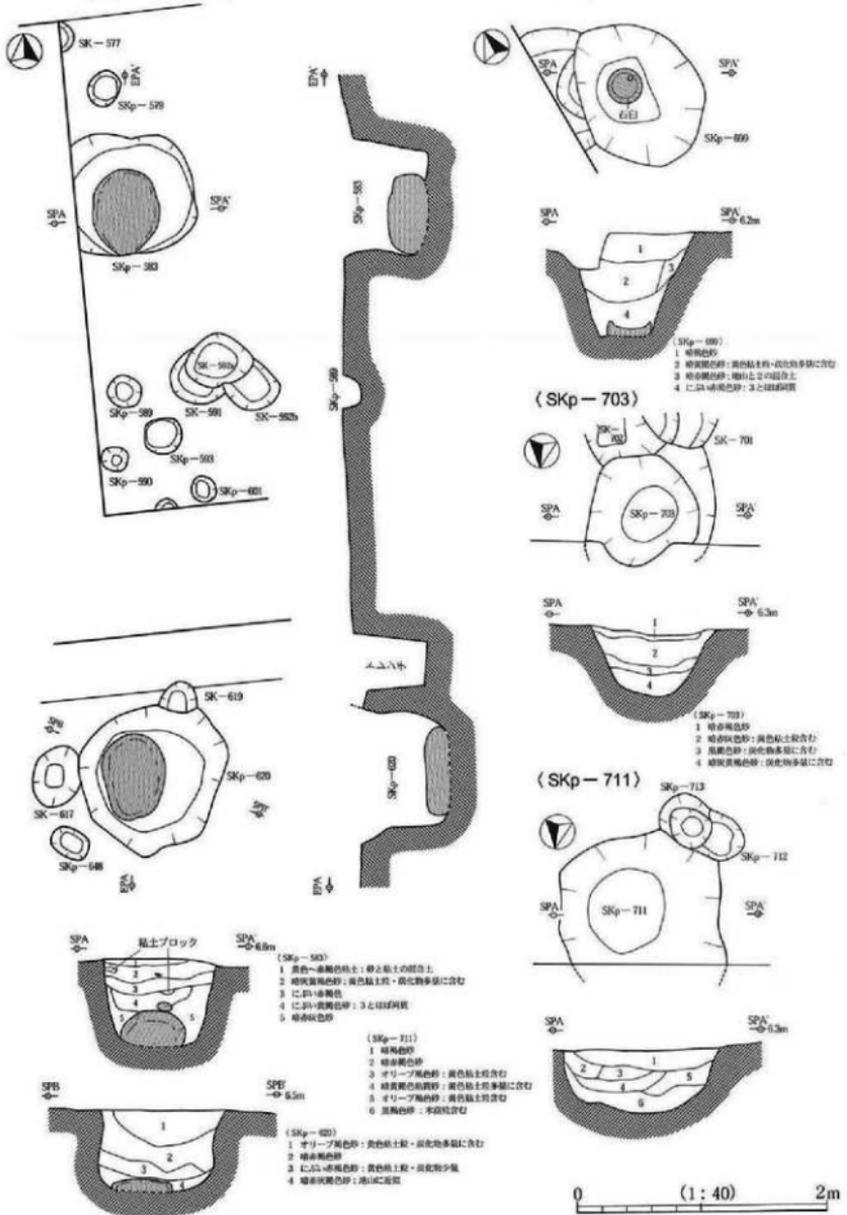


0 (1:80) 4m

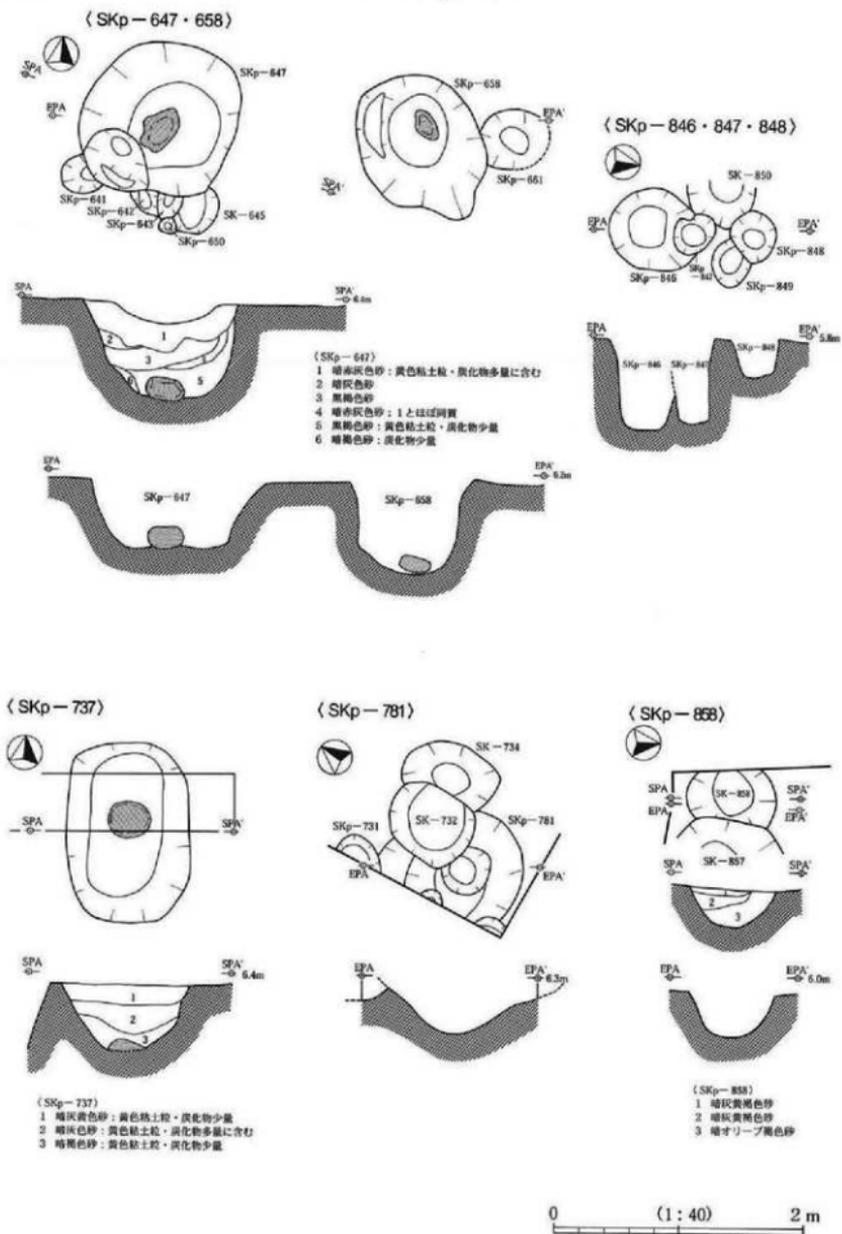
A1-IIa区建物跡個別図 4

(SKp-583・620)

(SKp-699)

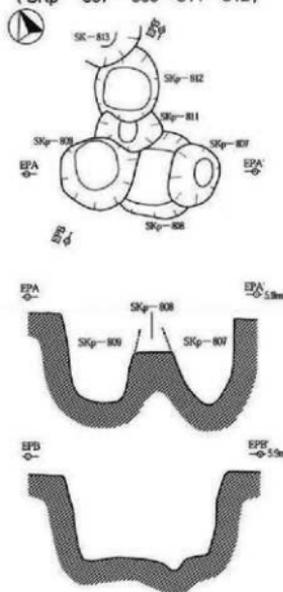


A1-IIa区遺構個別図1(第3面・第4面 柱穴・ピット)

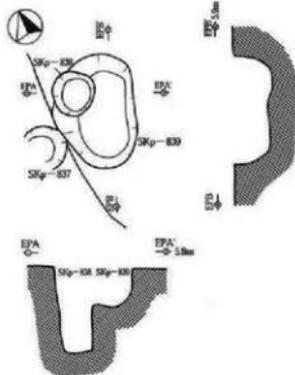


A1-IIa区 区構個別図 2 (第3層~第5層 柱穴・ピット)

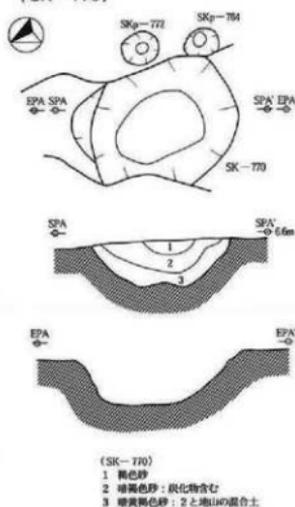
〈SKp-807~809・811・812〉



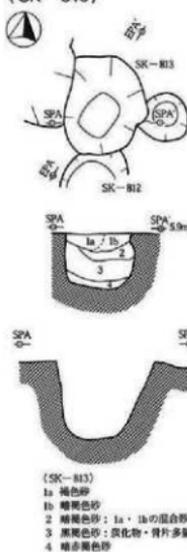
〈SKp-838・839〉



〈SK-770〉



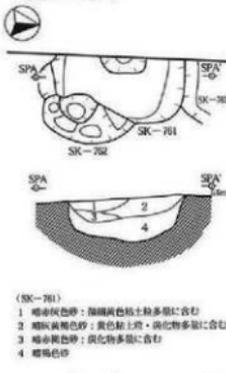
〈SK-813〉



〈SX-693〉

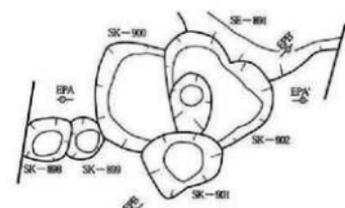


〈SK-761〉

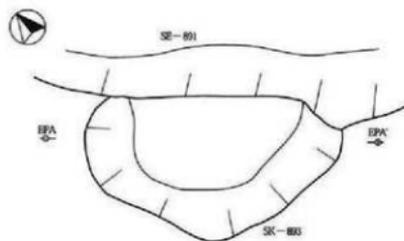


0 (1:40) 2m

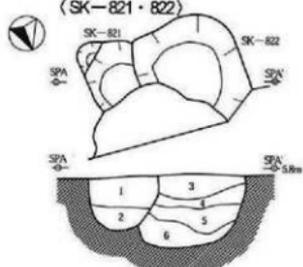
(SK-900・901・902)



(SK-893)



(SK-821・822)



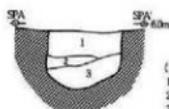
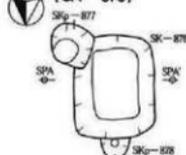
(SK-821)

- 1 増層色砂：黒色黄色粘土多量に含む
- 2 増層色砂：1よりやや明色

(SK-822)

- 1 増層色砂：黄色・黒色粘土含む
- 2 層色砂：黄色・褐色粘土多量に含む
- 3 増層色砂
- 4 増層色砂：地山層多く混入

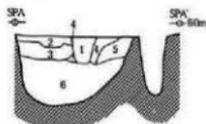
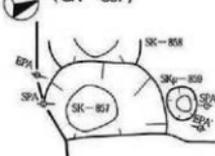
(SK-876)



(SK-876)

- 1 増層色砂
- 2 黄褐色砂
- 3 増層色砂：炭化物多量に含む

(SK-857)

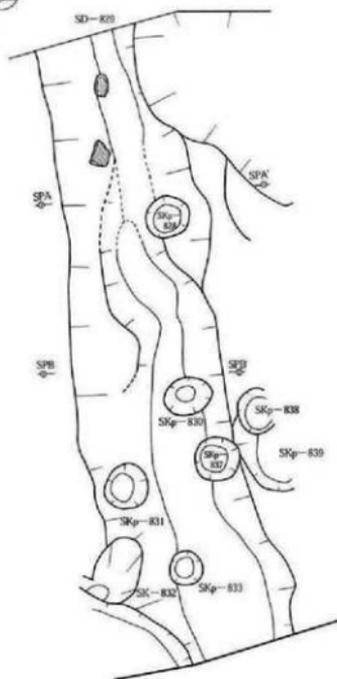


(SK-857)

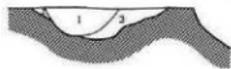
- 1 増層色砂
- 2 二土層増層砂：黄色粘土多量、炭化物多量に含む
- 3 層色砂：黄褐色粘土、炭化物多量に含む
- 4 二土層増層砂：黄色粘土多量、炭化物多量に含む
- 5 層色砂：黄褐色粘土、炭化物多量に含む
- 6 増層色砂

0 (1:40) 2 m

▲ (SD-829)



SPA SPA  
5.0m



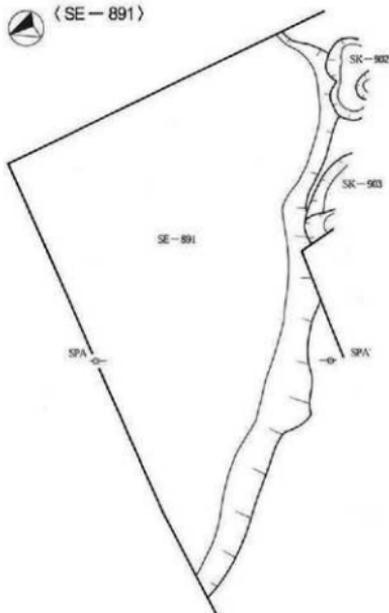
SPB SPA  
5.0m



(SD-829)

- 1 暗赤リズ色砂：黄色粘土粒含む
- 2 暗赤黄褐色砂：黄色粘土粒大量に含む
- 3 灰黄褐色砂：黄色粘土粒大量に含む

▲ (SE-891)



SPA SPA  
5.0m



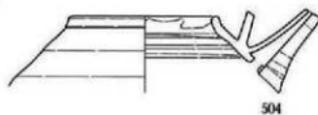
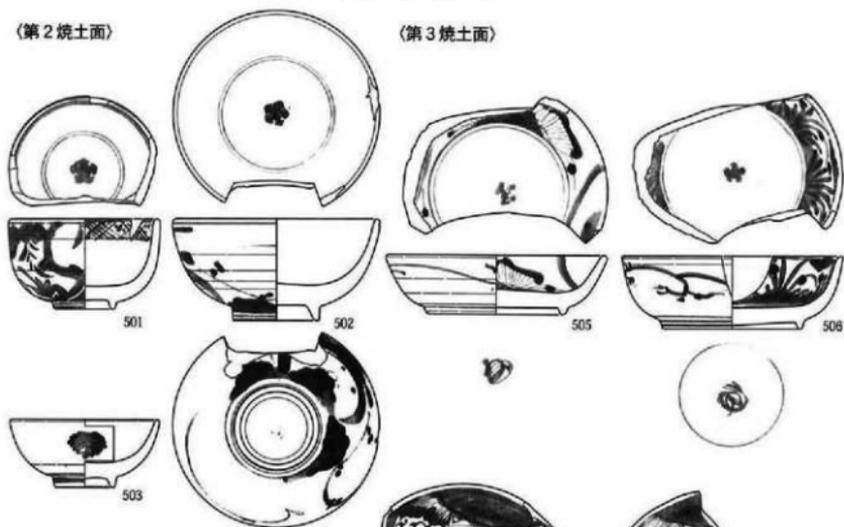
- (SE-891)
- 1 黒褐色砂：炭化物含む
  - 2 暗褐色砂

829 0 (1:40) 2m  
891 0 (1:60) 3m



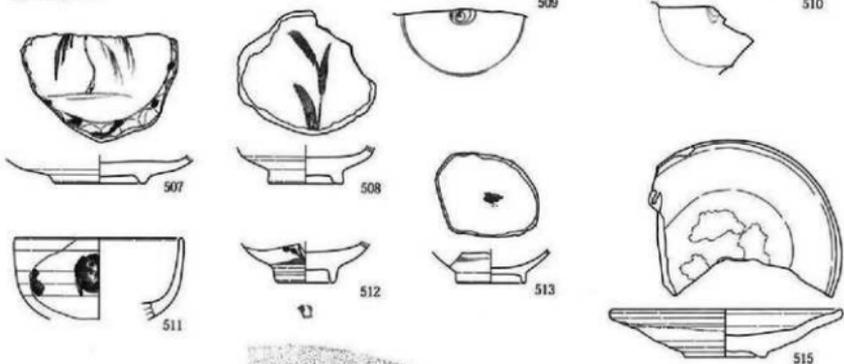
〈第2焼土面〉

〈第3焼土面〉



504

〈第3焼土面〉



507

508

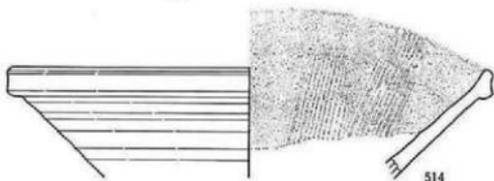
512

513

511

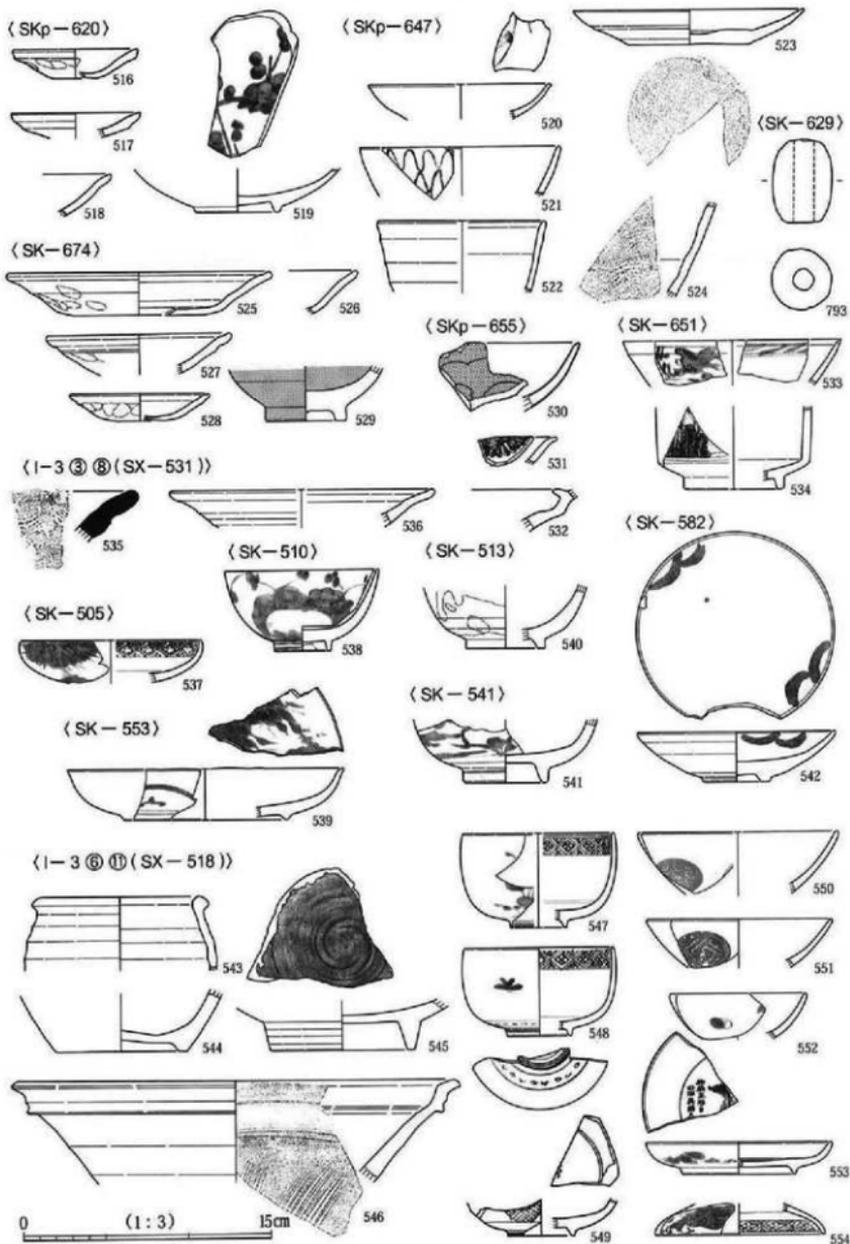
514

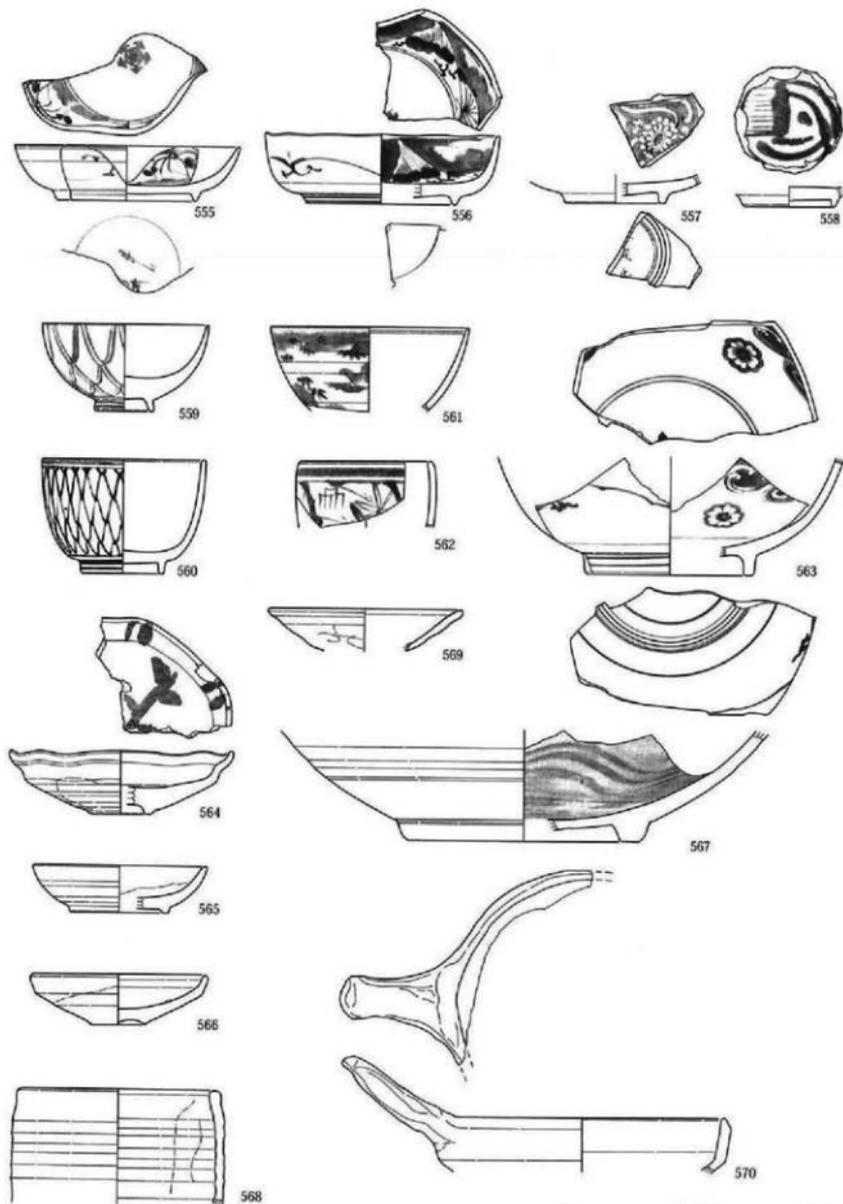
515



514

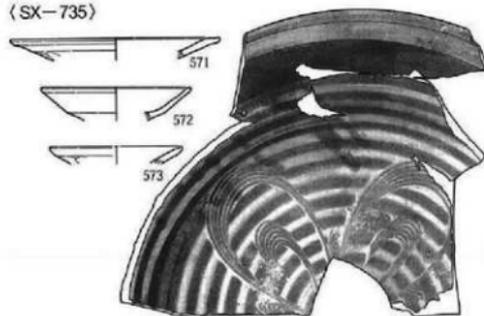
0 (1:3) 15cm



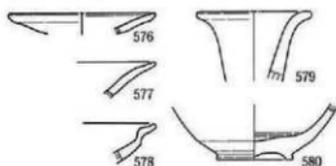


出土遺物 3 (第3圖2)

&lt;SX-735&gt;



&lt;SX-735a&gt;



&lt;SK-770&gt;



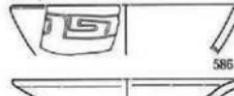
&lt;SKp-702&gt;



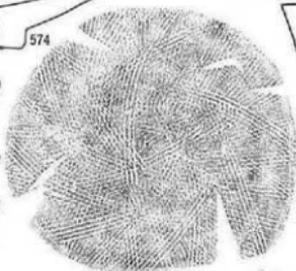
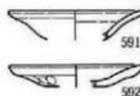
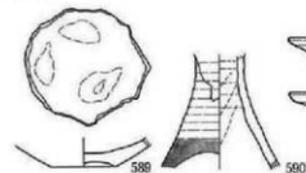
&lt;SKp-720&gt;



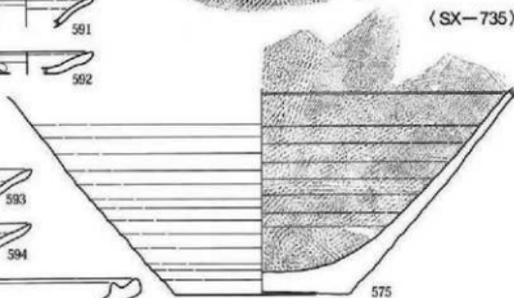
&lt;SKp-711&gt;



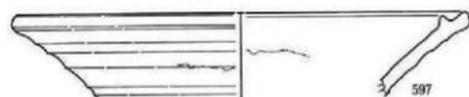
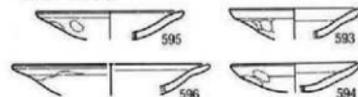
&lt;SK-718&gt;



&lt;SX-735&gt;



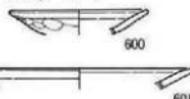
&lt;SX-735b&gt;



&lt;SKp-703&gt;



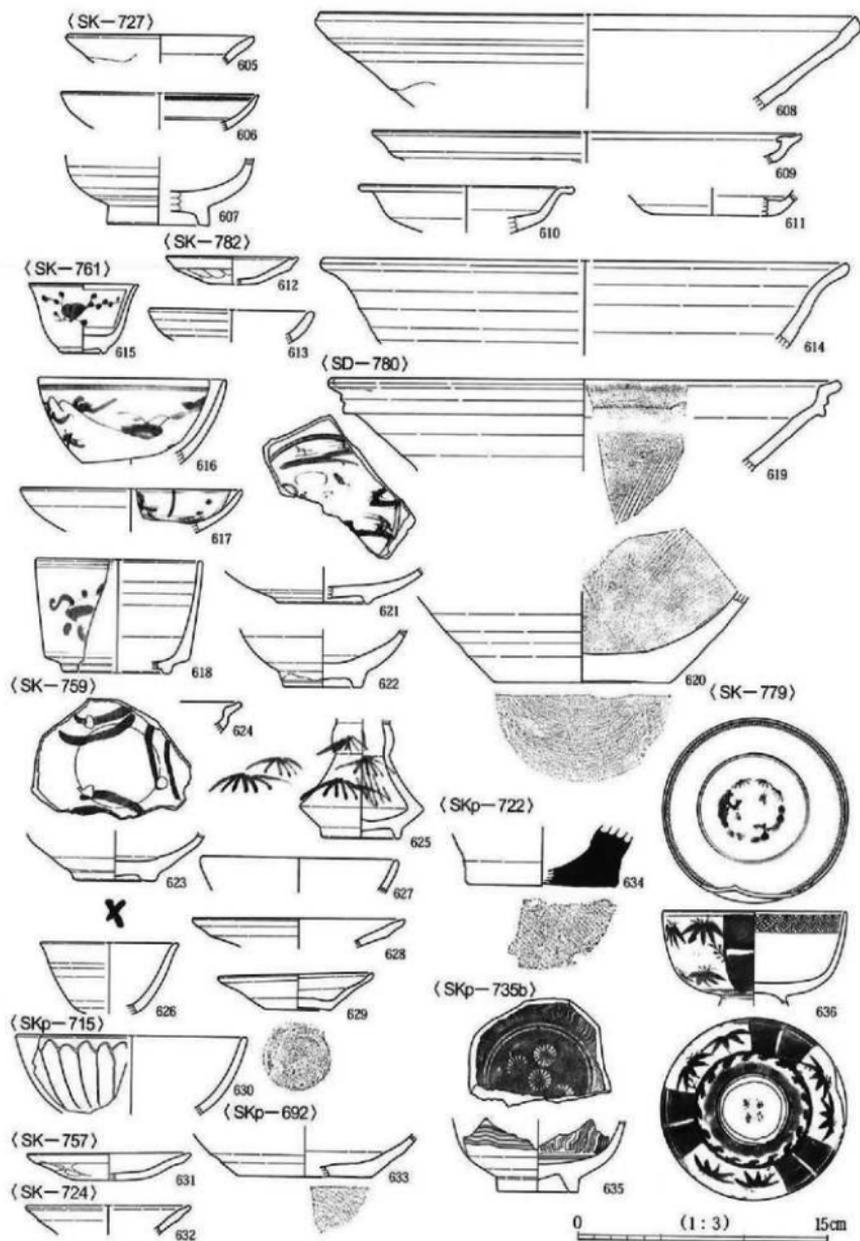
&lt;SKp-717&gt;



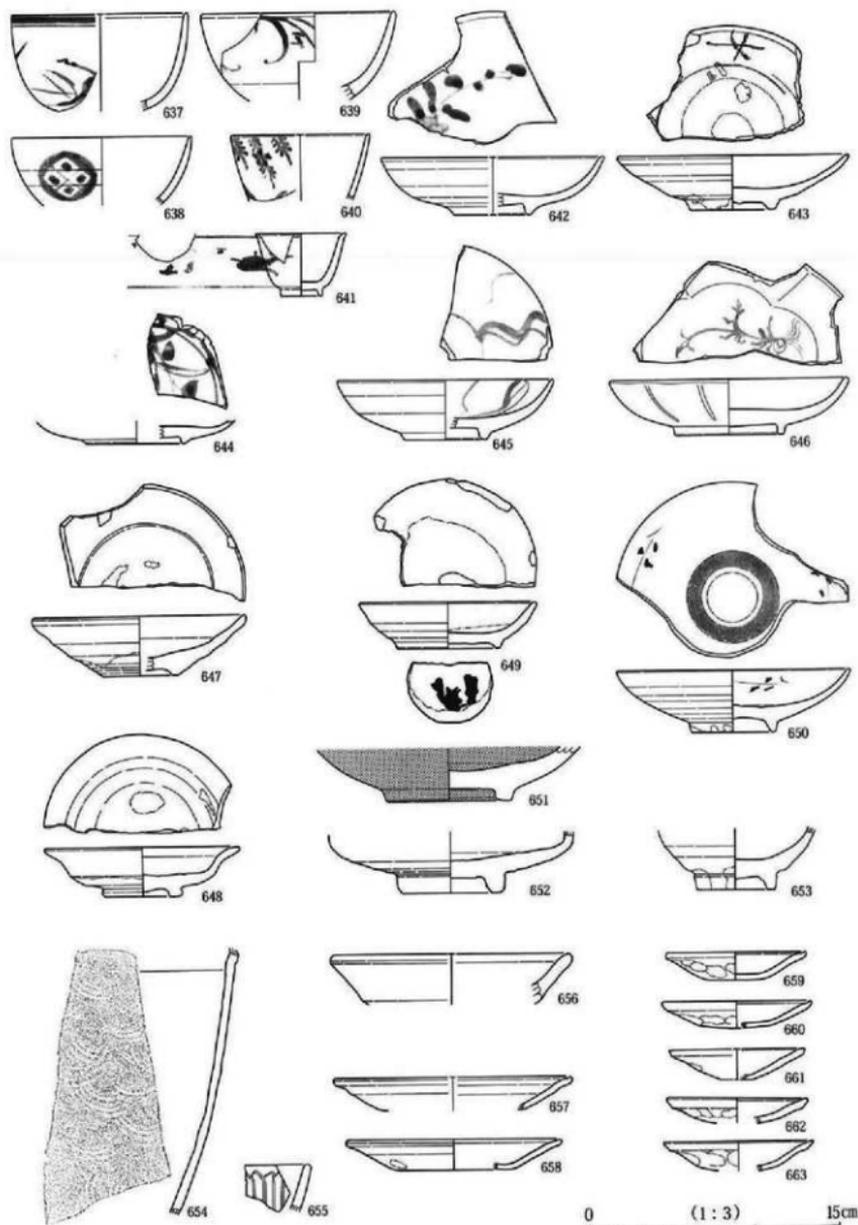
&lt;SKp-781&gt;



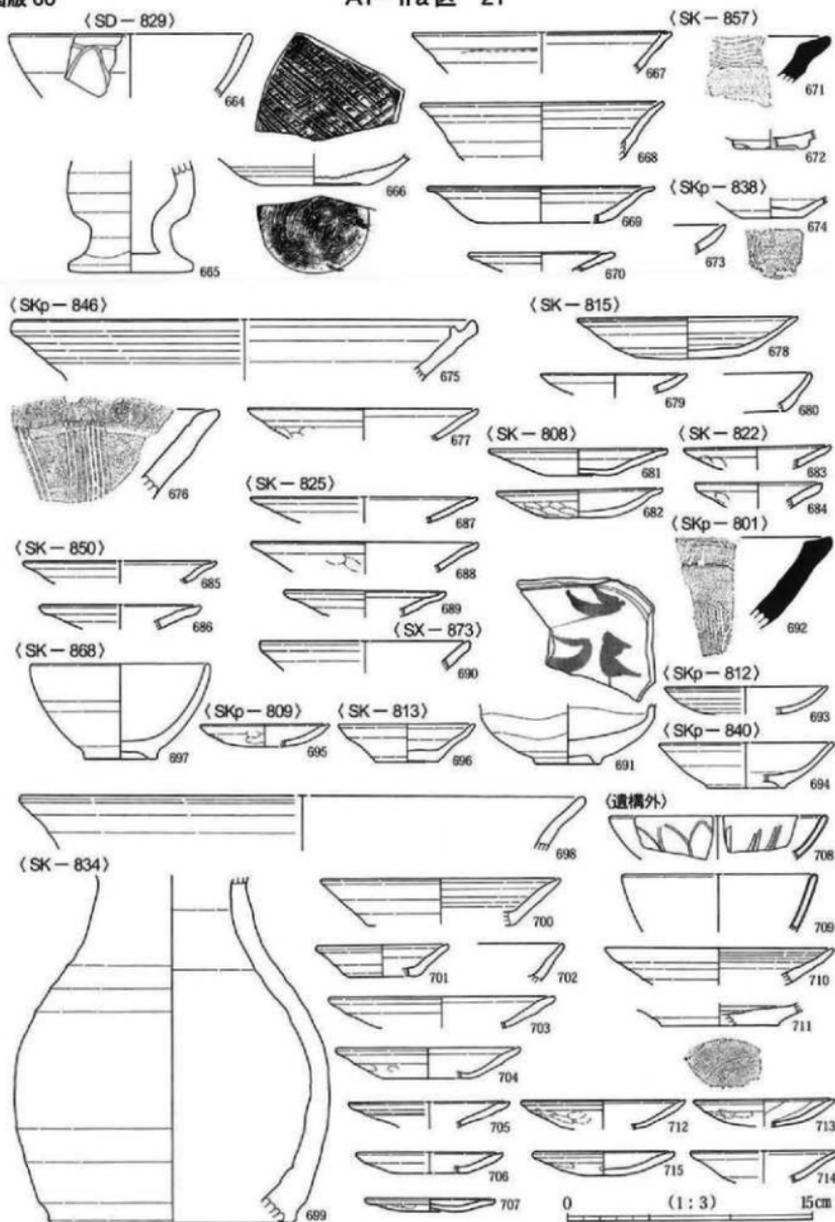
0 (1:3) 15cm



出土遺物 5 (第3面 2)



出土遺物 6 (第3面3)

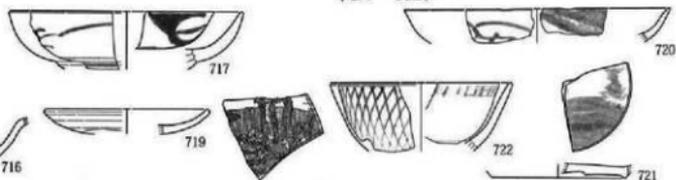


出土遺物 7 (第5面)

(SE-891)



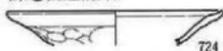
(SX-892)



(SK-901)



〈第⑥面遺構外〉



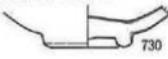
(SK-911)



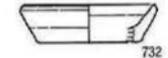
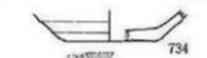
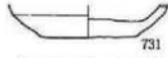
(SKp-976)



〈第⑥面下遺構外〉



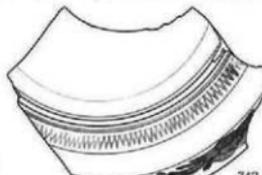
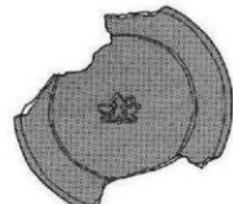
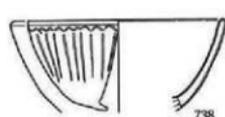
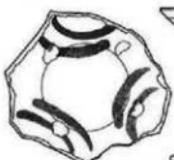
〈SKp-920〉



〈第⑦面遺構外〉

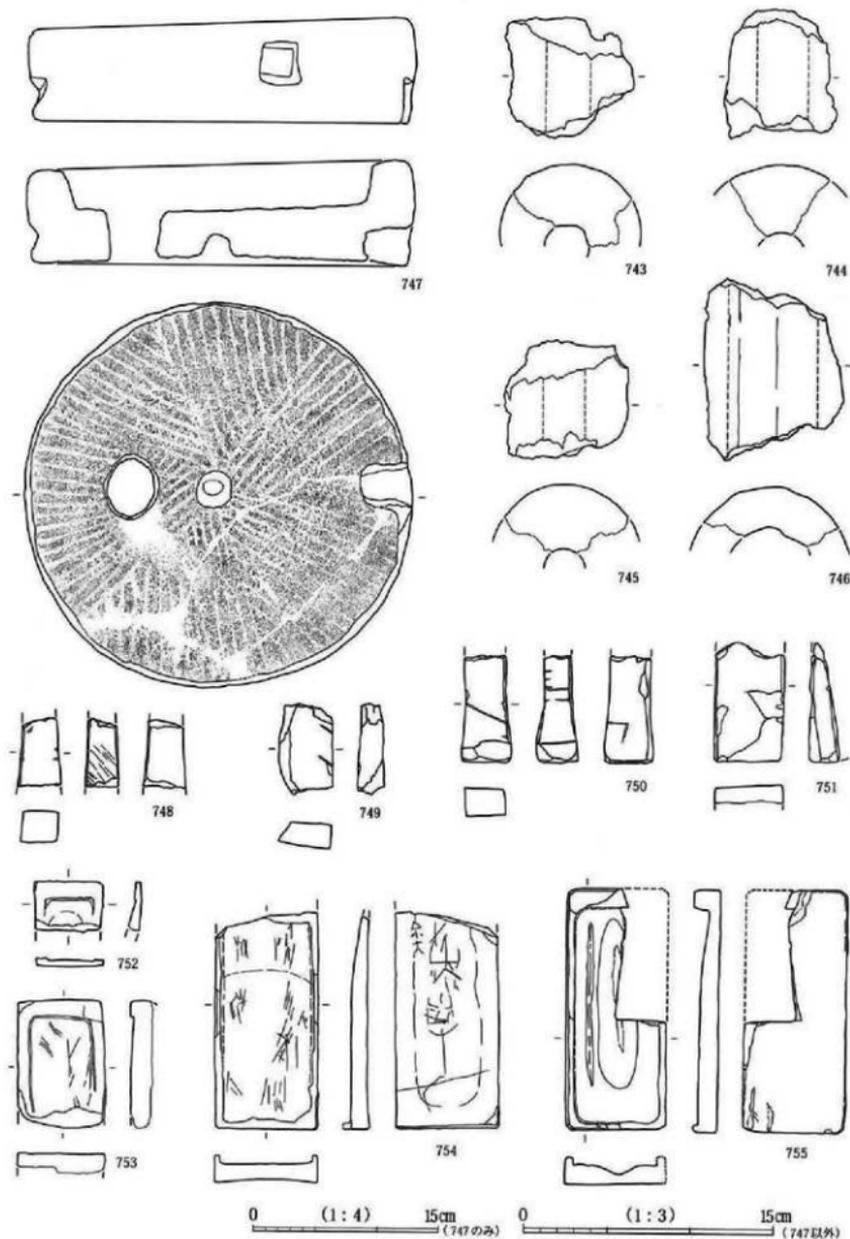


〈その他〉



0 (1:3) 15cm

出土遺物 8 (第⑥面・第⑦面ほか)



出土遺物 9 (石製品)



756



757



758



759



760



761



762



763



764



765



766



767



768



769



770



771



772



773



774



775



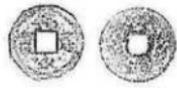
776



777



778



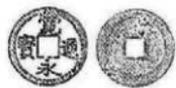
779



780



781



782



783



784



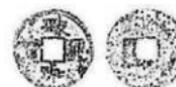
785



786



787



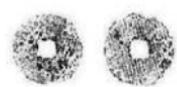
788



789



790



791

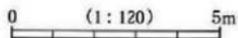
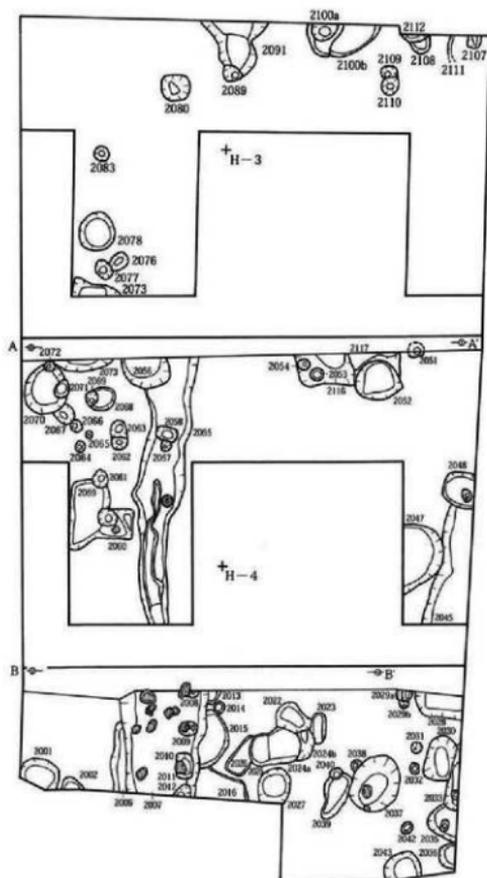


792





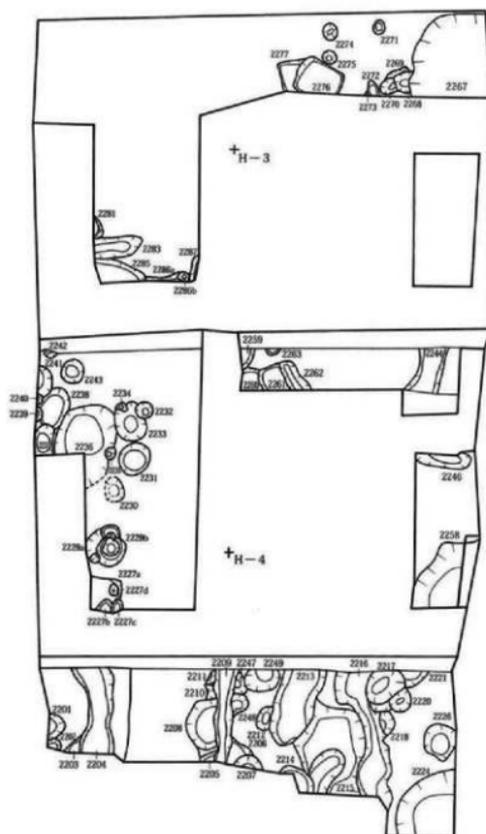
〈第③面〉



A1-IIb区全体図 1



〈第④面〉

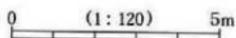
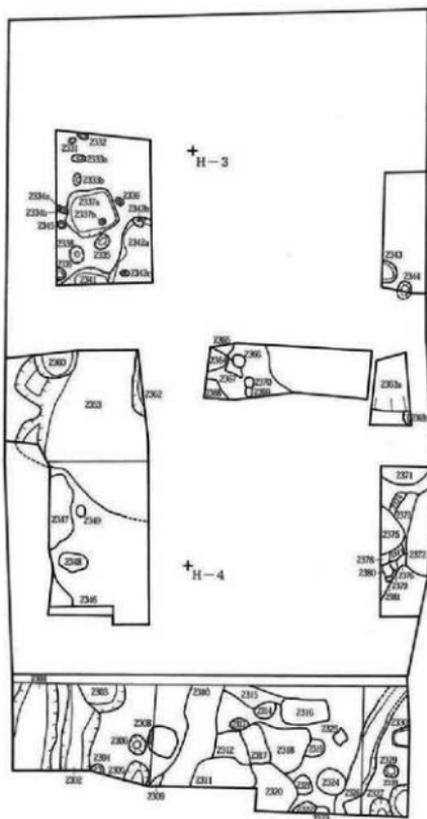


0 (1:120) 5m

A1-IIb区全体図 2



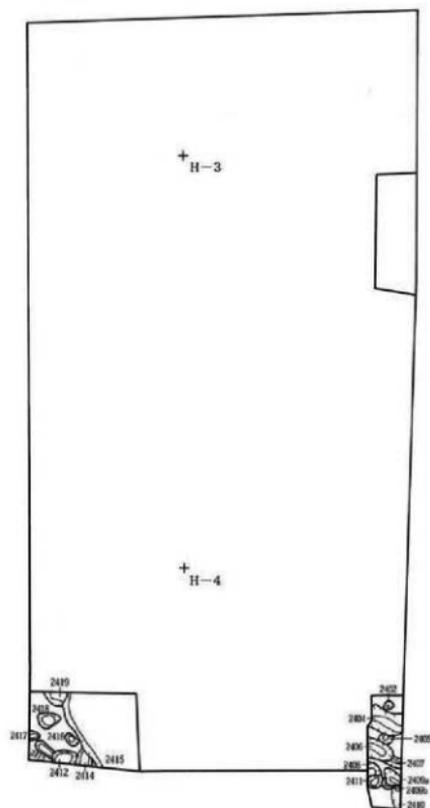
(第⑤面)



A1- IIb 区全体図 3



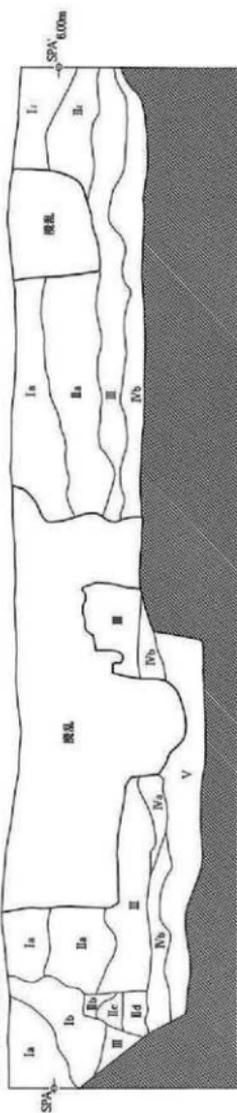
(第⑥面)



0 (1 : 120) 5m

A1- IIb区全体図 4

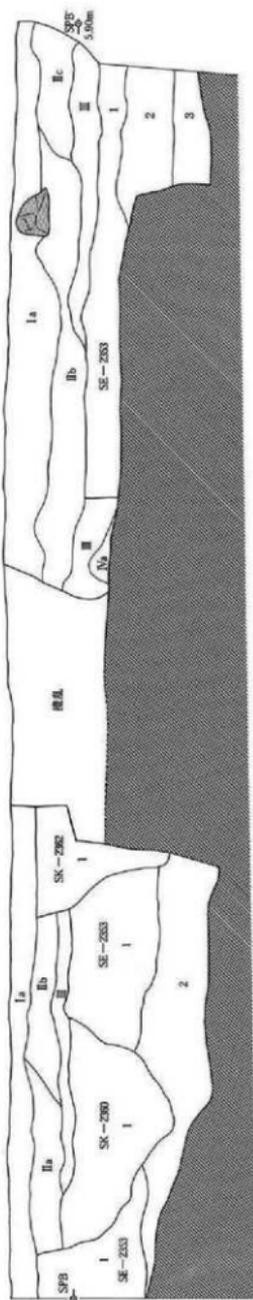
〈Aベルト南壁〉



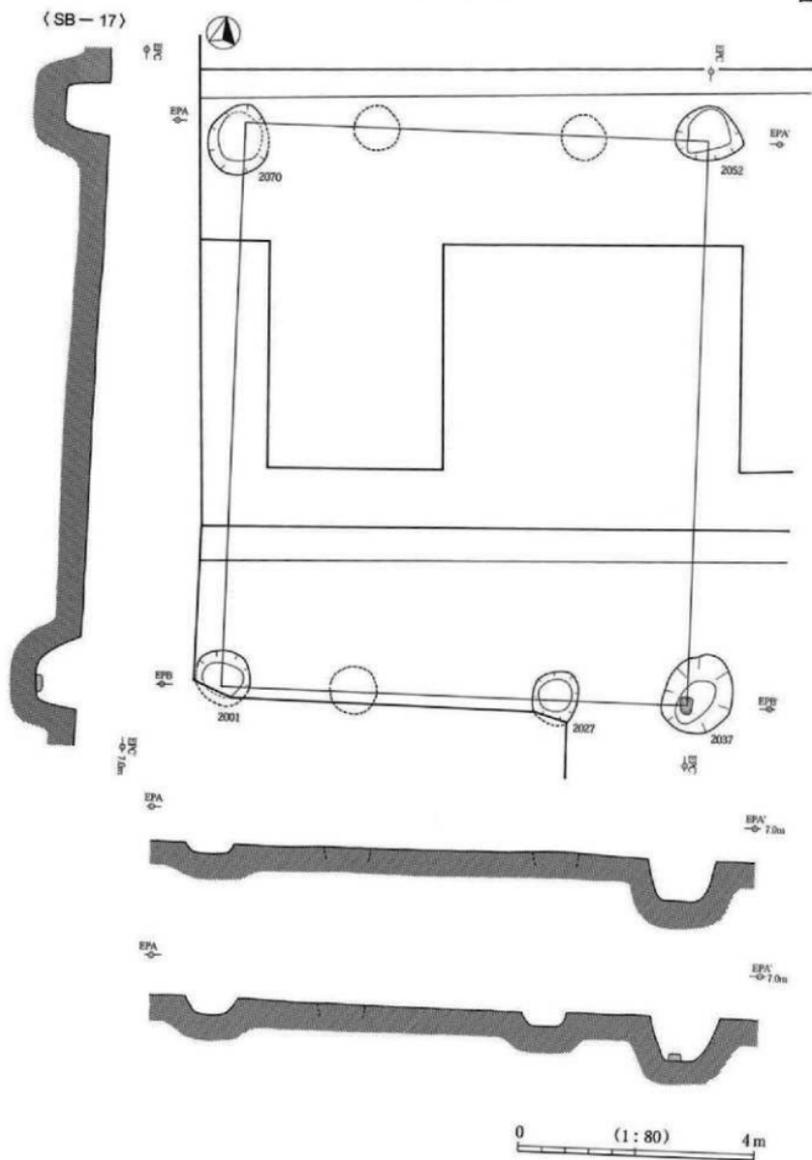
- Ia 暗褐色粘質砂
- Ib 暗褐色粘質砂
- IIa 暗灰色粘質砂
- IIb 暗褐色粘質砂
- IIc 黄褐色粘質砂
- IId 暗褐色粘質砂
- III 暗褐色粘質砂
- IVa 黄褐色粘質砂
- IVb 暗褐色粘質砂
- V 暗褐色粘質砂

- (SE-233)
- 1 暗褐色粘質砂
- 2 暗褐色粘質砂
- 3 暗褐色粘質砂
- (SK-230)
- 1 暗褐色粘質砂
- (SK-232)
- 1 暗褐色粘質砂

〈Bベルト南壁〉

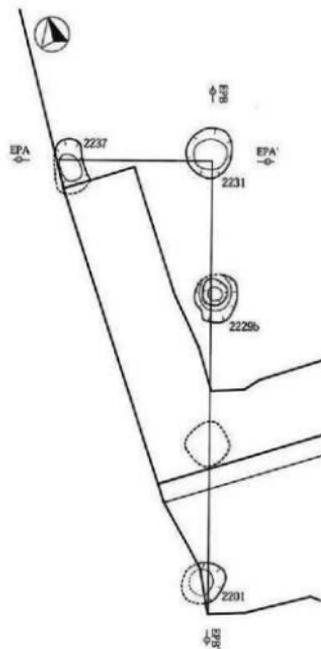


0 (1:40) 2m



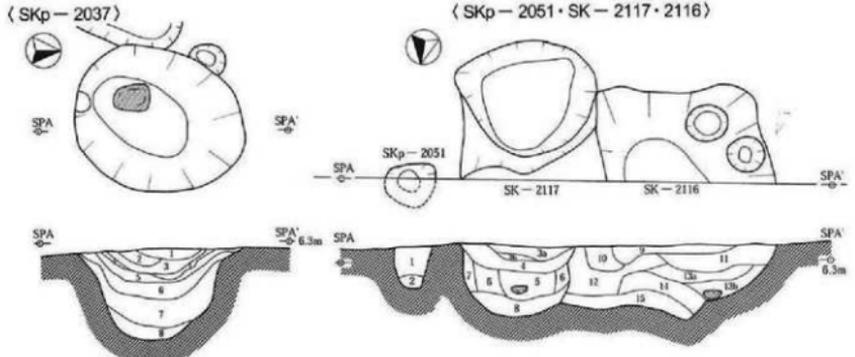
A1-IIb区建物跡個別図1

(SB-18)



0 (1:80) 4m

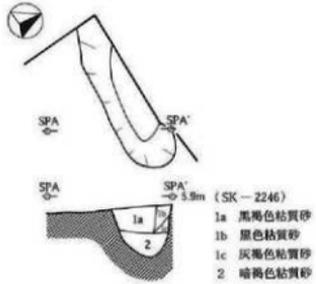
A1-IIb区建物跡個別図 2



- 1 暗黄褐色粘質土
- 2 暗灰色粘質砂
- 3 灰色粘質砂
- 4 明黄褐色粘質土
- 5 暗灰色粘質砂
- 6 暗灰色粘質砂
- 7 黒褐色粘質砂
- 8 黒色粘質砂

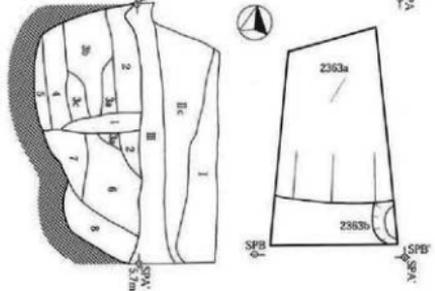
- |            |           |            |
|------------|-----------|------------|
| (SKp-2051) | (SK-2117) | (SK-2116)  |
| 1 褐色粘質砂    | 3a 褐色粘質砂  | 9 灰褐色粘質砂   |
| 2 暗灰色粘質    | 3b 褐色粘質砂  | 10 灰褐色粘質砂  |
|            | 4 黒色粘質砂   | 11 灰色粘質砂   |
|            | 5 暗灰色粘質砂  | 12 灰色粘質砂   |
|            | 6 灰褐色粘質砂  | 13a 暗灰色粘質砂 |
|            | 7 暗褐色粘質砂  | 13b 暗灰色粘質砂 |
|            | 8 暗灰色粘質砂  | 14 黒褐色粘質砂  |
|            |           | 15 暗灰色粘質砂  |

(SK-2246)



- 1a 黒褐色粘質砂
- 1b 黒色粘質砂
- 1c 灰褐色粘質砂
- 2 暗褐色粘質砂

(SE-2363)



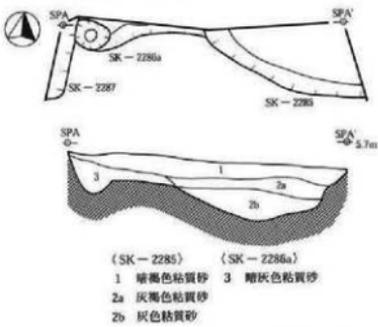
- (基本順序)
- I 暗褐色粘質砂
  - II 暗赤褐色粘質砂
  - III 暗褐色粘質砂

- (SE-2363a)
- 1 暗灰色粘質砂
  - 2 暗灰色粘質砂
  - 3a 灰色粘質砂
  - 3b 暗灰色粘質砂
  - 3c 灰色粘質砂
  - 4 暗灰色粘質砂
  - 5 褐色粘質砂
  - 6 灰褐色粘質砂
  - 7 黒褐色粘質砂

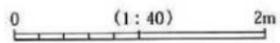
(SKp-2363b)

- 8 黒色粘質砂

(SK-2285・2286a)

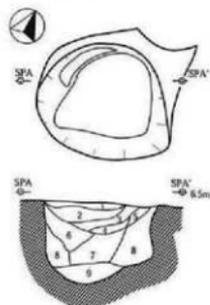


- |           |            |
|-----------|------------|
| (SK-2285) | (SK-2286a) |
| 1 暗褐色粘質砂  | 3 暗灰色粘質砂   |
| 2a 灰褐色粘質砂 |            |
| 2b 灰色粘質砂  |            |



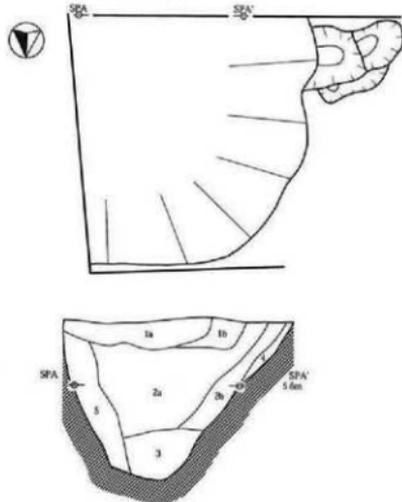
A1-IIb区遺構個別図1 (第3面・第3面 柱穴・ビット・土坑・井戸跡)

〈SKp-2052〉



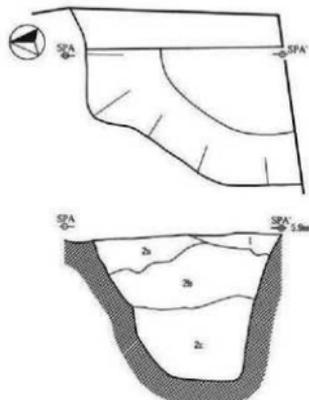
- 1 褐色粘質砂
- 2 明褐色粘質砂
- 3 褐色粘質砂
- 4 暗灰色粘質砂
- 5 褐色粘質砂
- 6 明褐色粘質砂
- 7 暗褐色粘質砂
- 8 褐色粘質砂
- 9 暗褐色粘質砂

〈SE-2267〉



- 1a 暗灰色粘質砂
- 1b 灰褐色粘質砂
- 2a 褐色粘質砂
- 2b 暗褐色粘質砂
- 3 暗灰色粘質砂
- 4 黒褐色粘質砂
- 5 暗灰色粘質砂

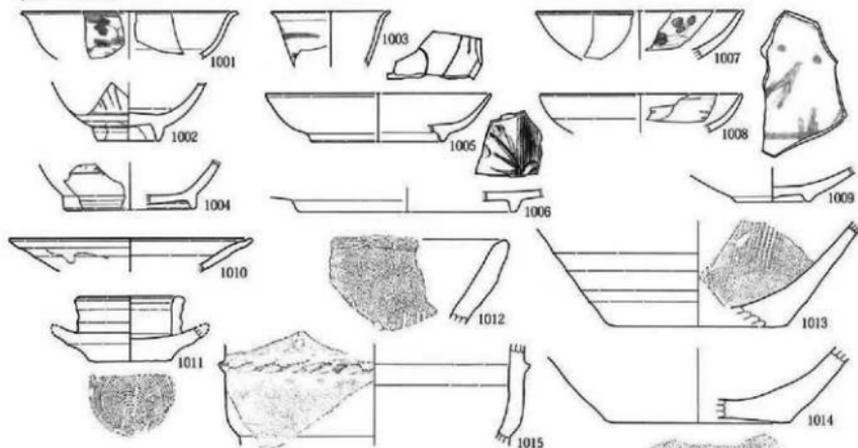
〈SE-2258〉



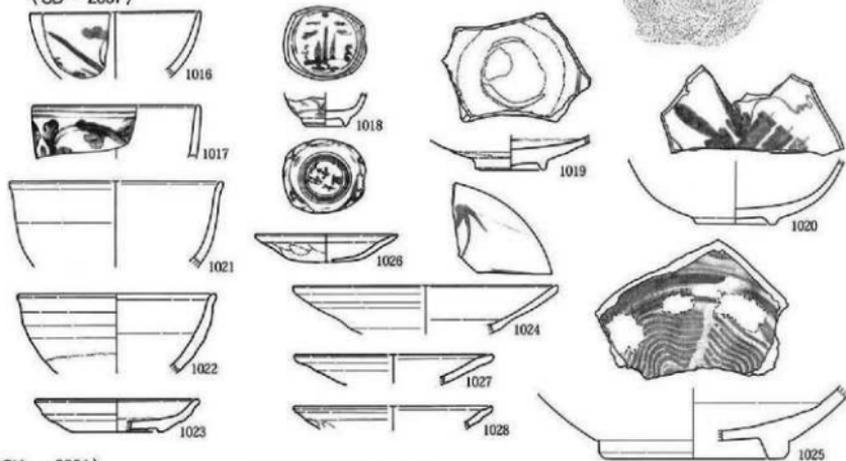
- 1 暗青灰色粘質土
- 2a 褐色粘質砂
- 2b 明褐色粘質砂
- 2c 暗褐色粘質砂

0 (1:40) 2m

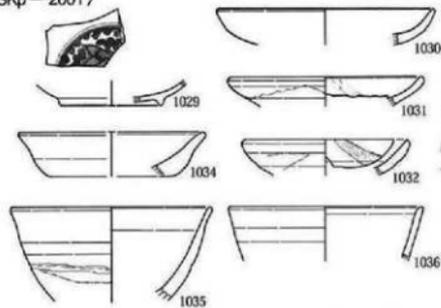
(SD-2055)



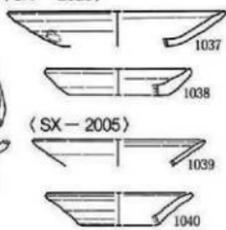
(SD-2007)



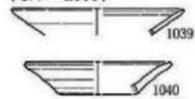
(SKp-2001)



(SK-2028)

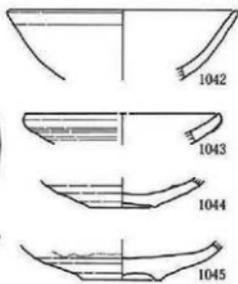


(SX-2005)

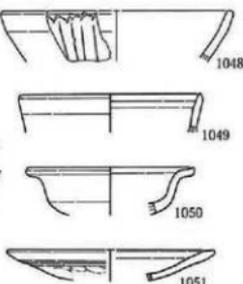
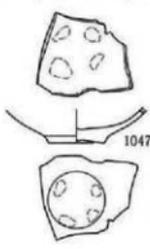


0 (1:3) 15cm

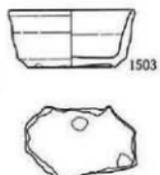
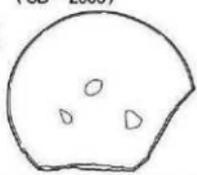
(SKp-2052)



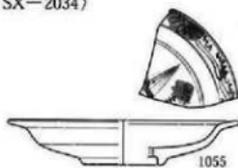
(SK-2116)



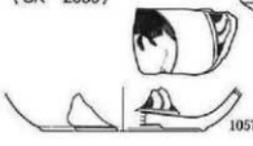
(SD-2006)



(SX-2034)



(SK-2059)



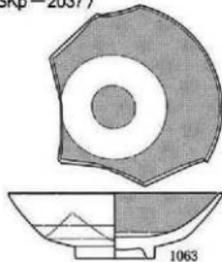
(SK-2060)



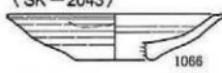
(SK-2111)



(SKp-2037)



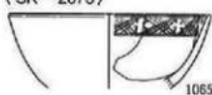
(SK-2043)



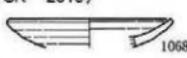
(SK-2117)



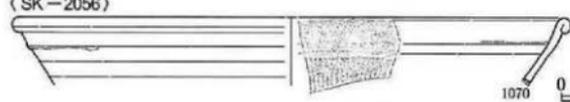
(SK-2073)



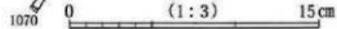
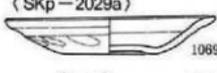
(SK-2016)

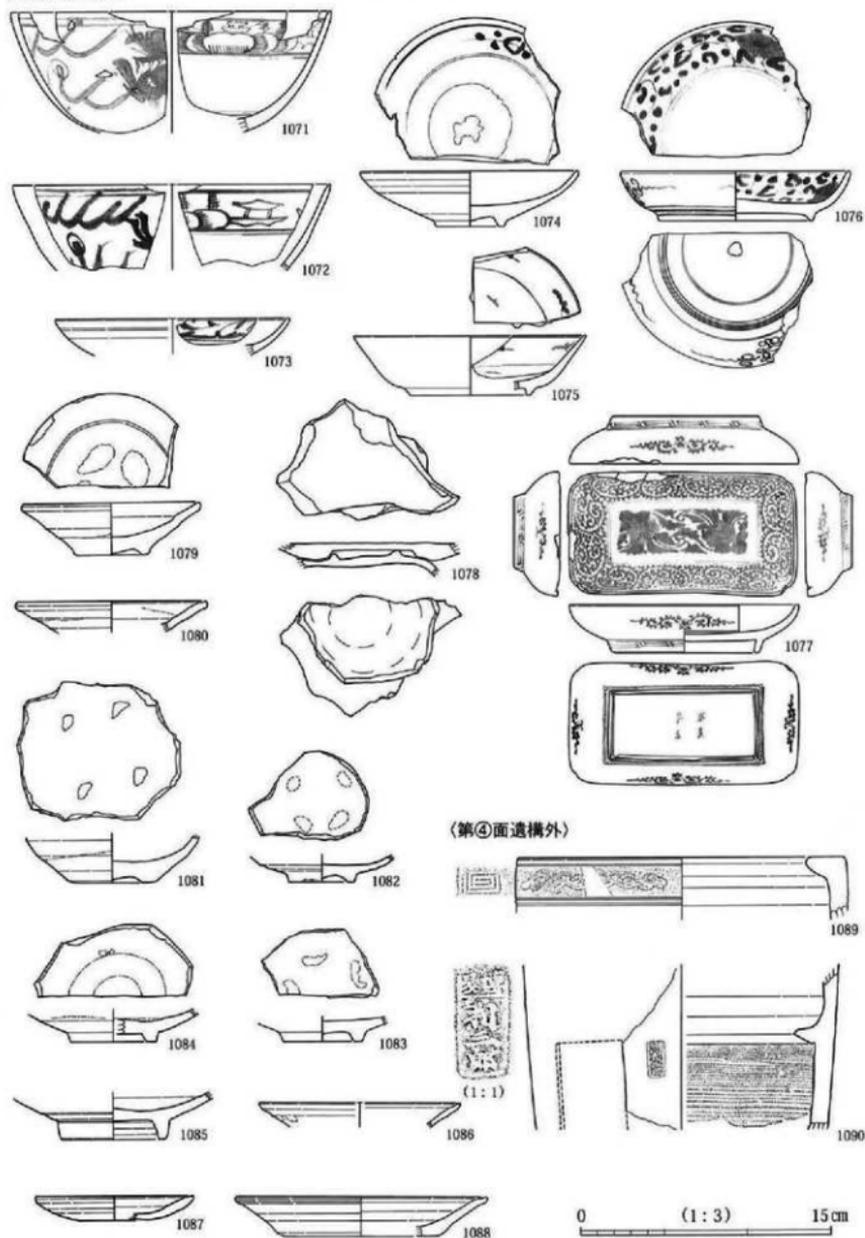


(SK-2056)



(SKp-2029a)





〈第④面遺構外〉

出土遺物 3 (第③面 3・第④面 1)

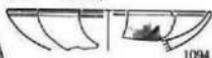
〈SE-2267〉



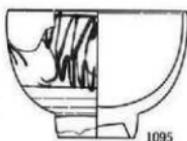
1091



〈SD-2204〉



1094



1095

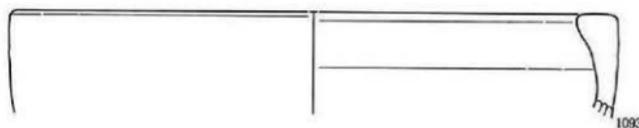
〈SE-2258〉



1096

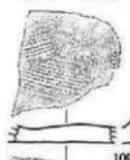


1097



1093

〈SK-2214〉



1068



1069



1089

〈SK-2208〉



1103



1106



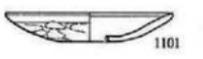
1100



1104



1107



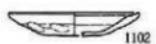
1101



1105

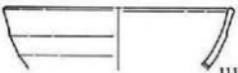


1108



1102

〈SD-2206〉

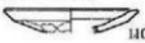


1112



1113

〈SX-2215〉



1409



1110

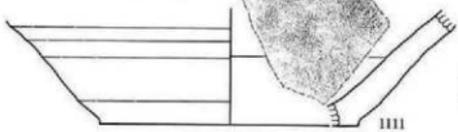
〈SK-2236〉



1114



1115



1111

〈SD-2216〉



1116



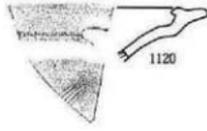
1117

〈SD-2209〉



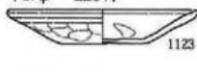
1118

〈SD-2204〉



1120

〈SKp-2231〉



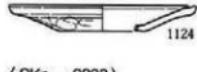
1123

〈SKp-2235〉



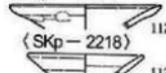
1119

〈SKp-2210〉



1124

〈SKp-2207〉



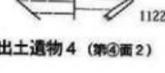
1121

〈SKp-2233〉



1125

〈SKp-2218〉

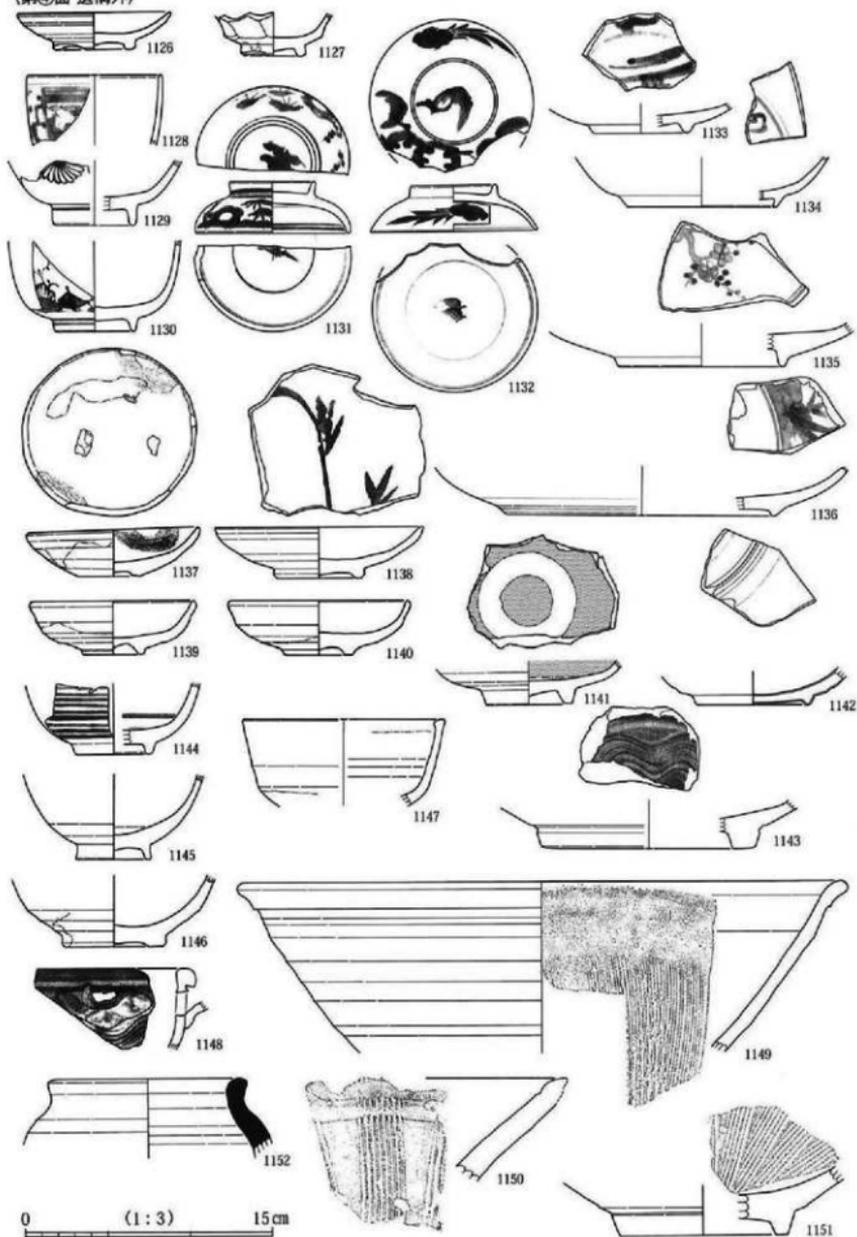


1122

0 (1:3) 15cm

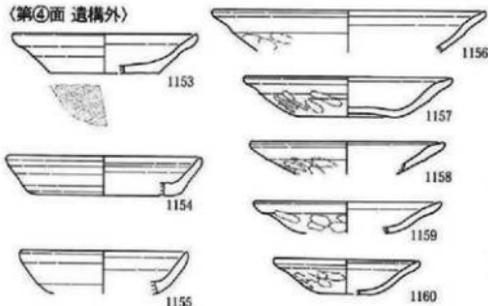
A1-IIb区 14

(第④面 遺構外)

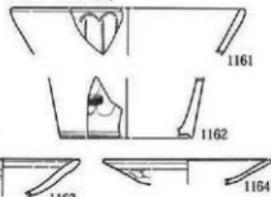


出土遺物 5 (第④面 3)

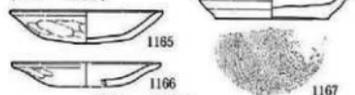
〈第④面 遺構外〉



〈SE-2363a〉



〈SK-2303〉



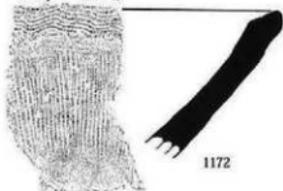
〈SE-2353〉



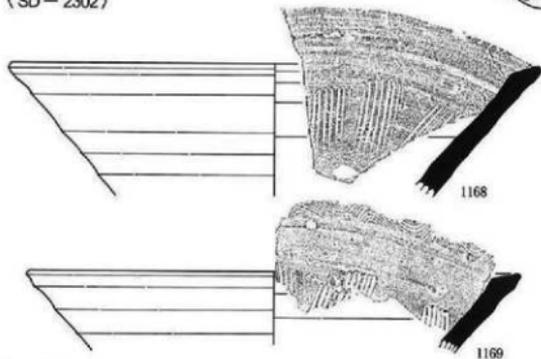
〈SD-2326〉



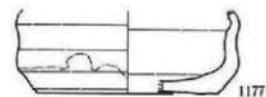
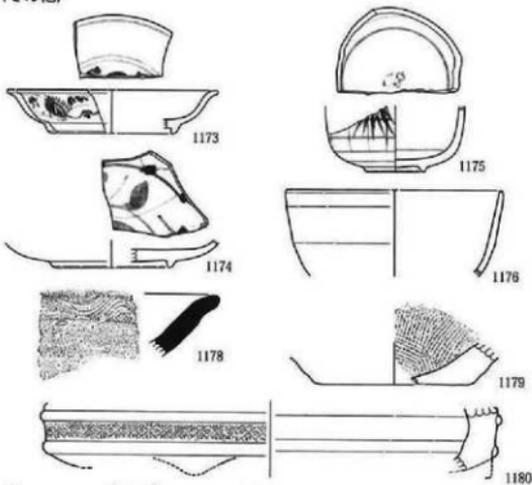
〈SKp-2304〉



〈SD-2302〉

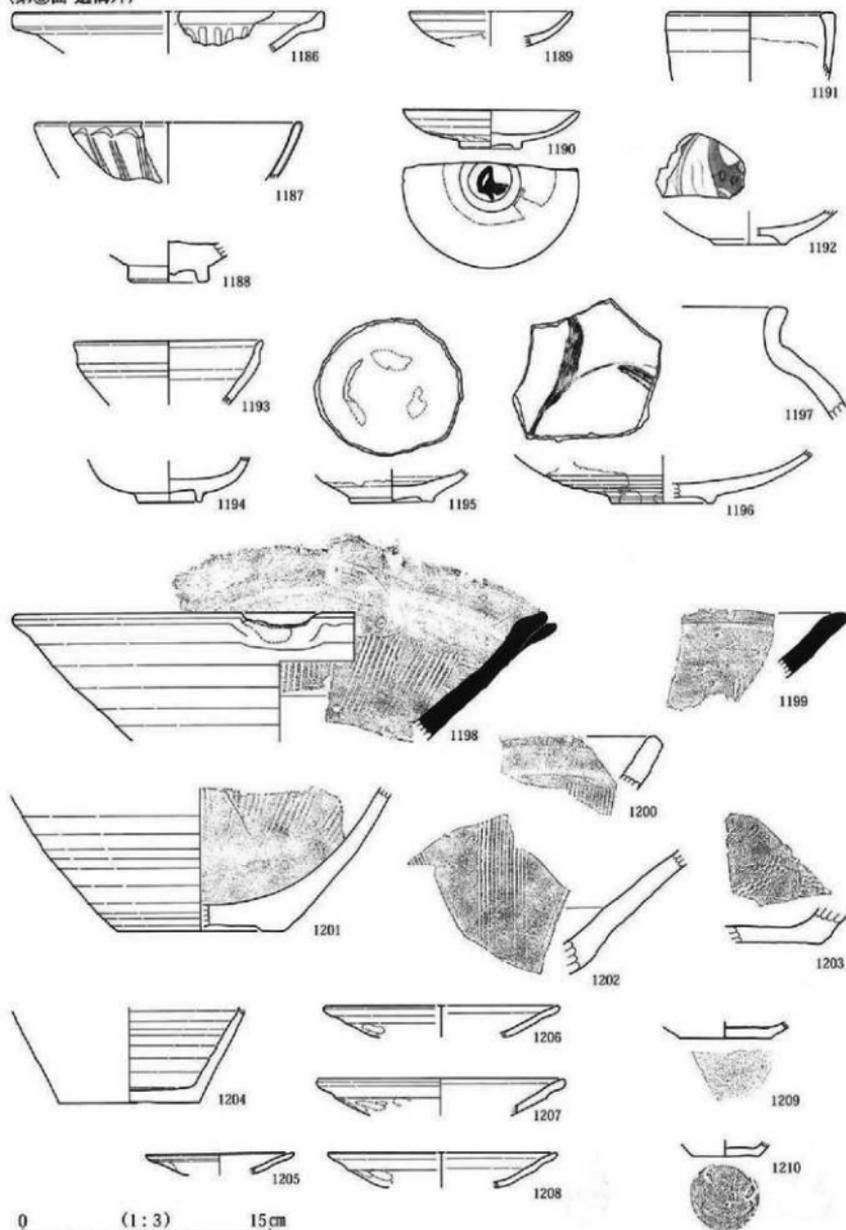


〈その他〉

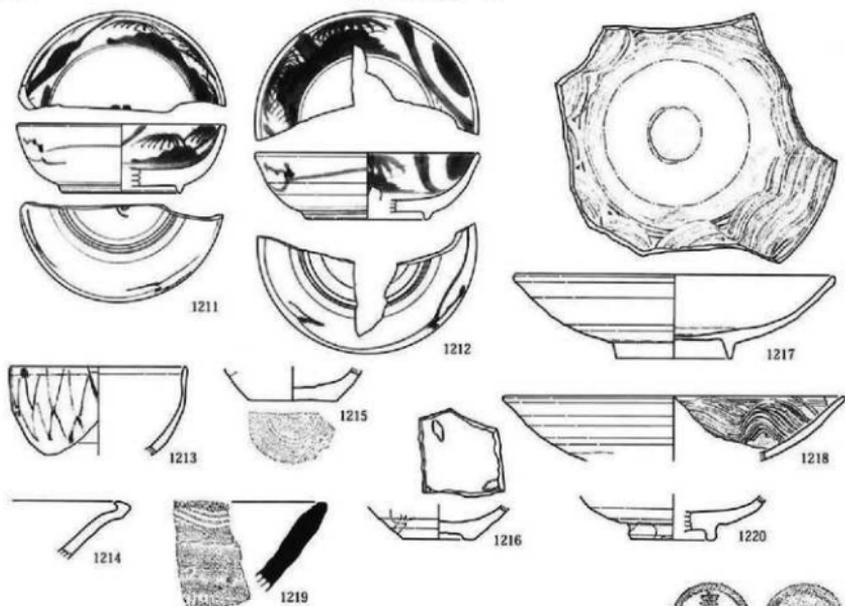


0 (1:3) 15cm

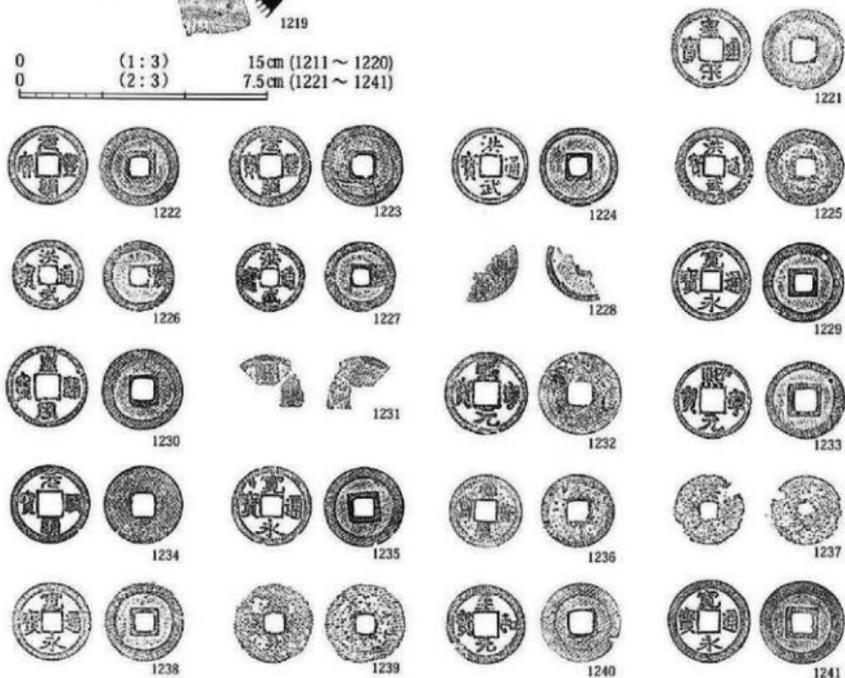
〈第⑤面 遺構外〉



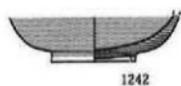
出土遺物 7 (第⑤面 2)



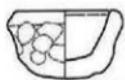
0 (1:3) 15cm (1211~1220)  
 0 (2:3) 7.5cm (1221~1241)



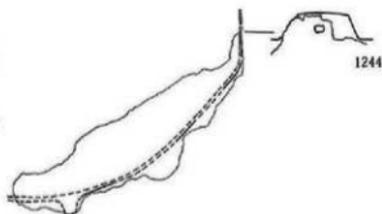
出土遺物 8 (その他 1)



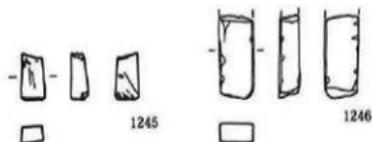
1242



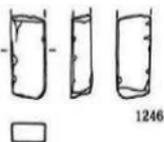
1243



1244



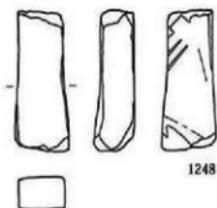
1245



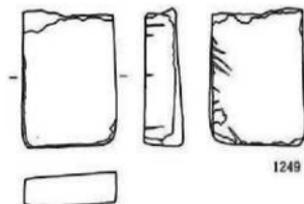
1246



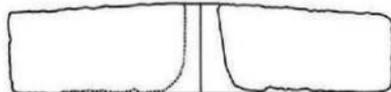
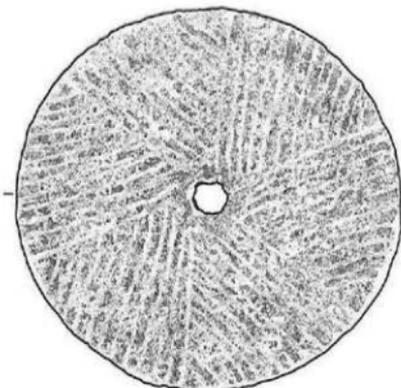
1247



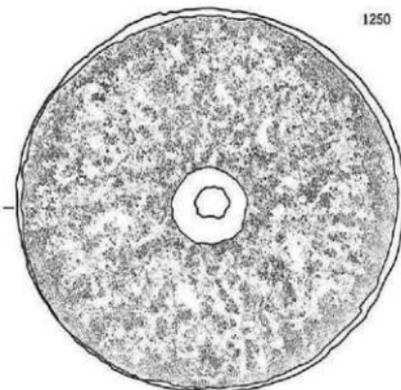
1248



1249



1250

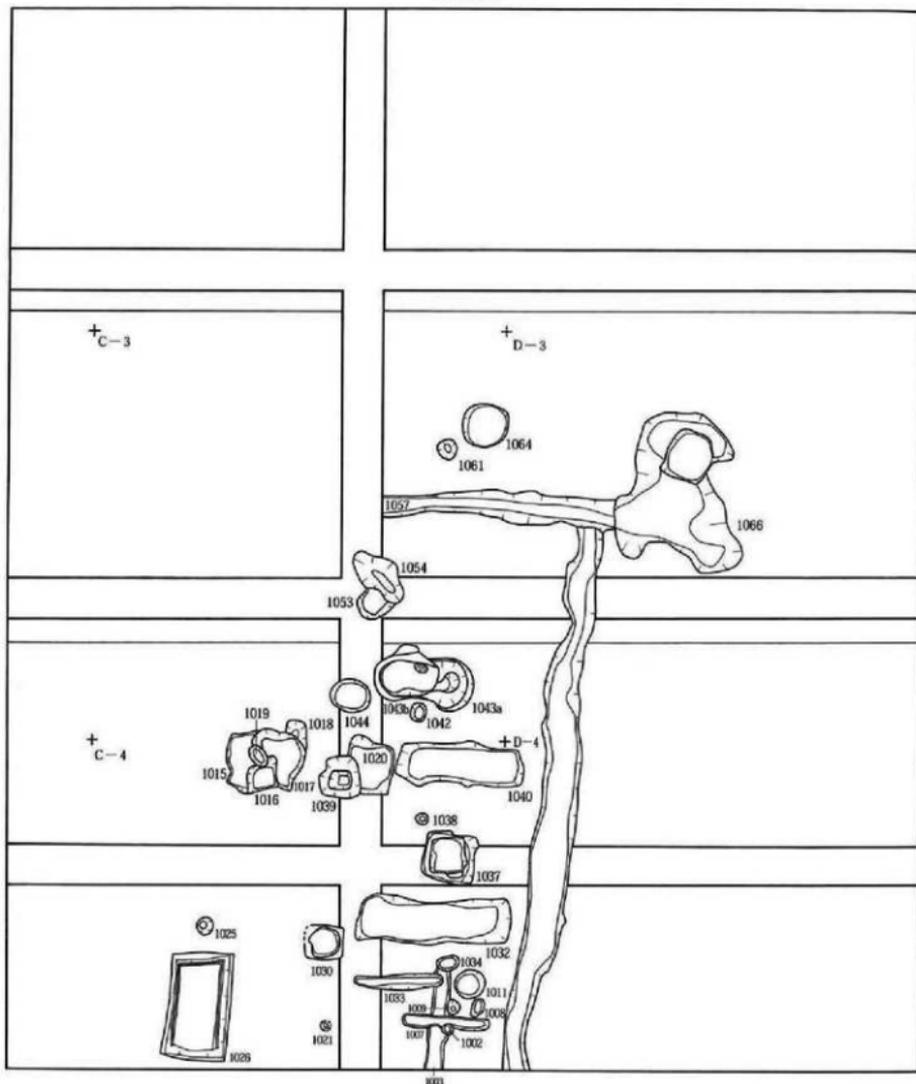


0 (1:4) 15cm (1250)

0 (1:3) 15cm (1250以外)

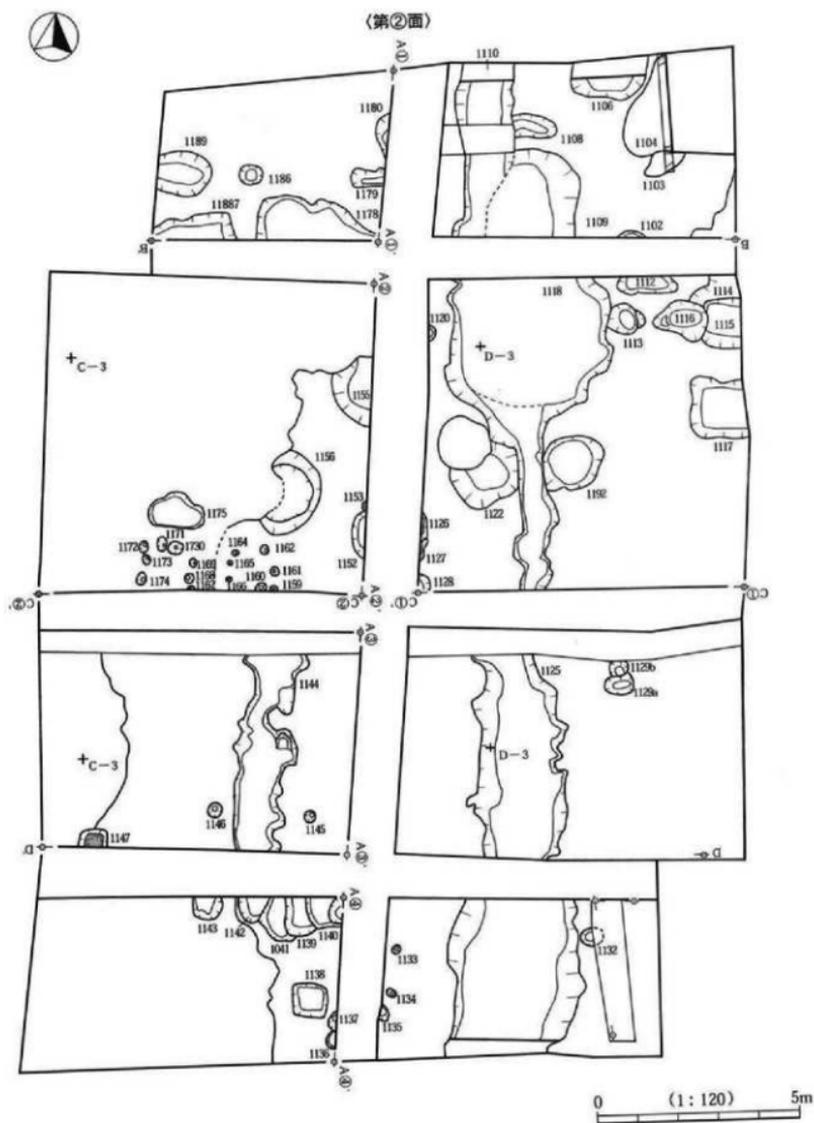


〈第①面〉



0 (1:120) 5m

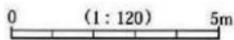
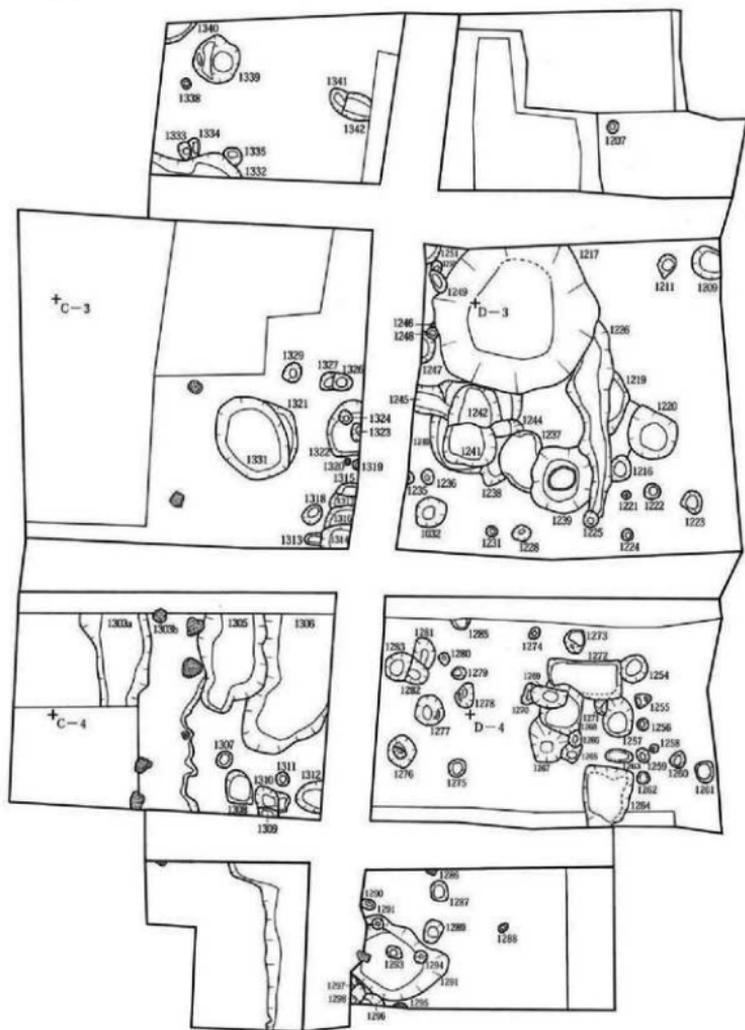
A1-III区全体图 1



A1-III区全体図2



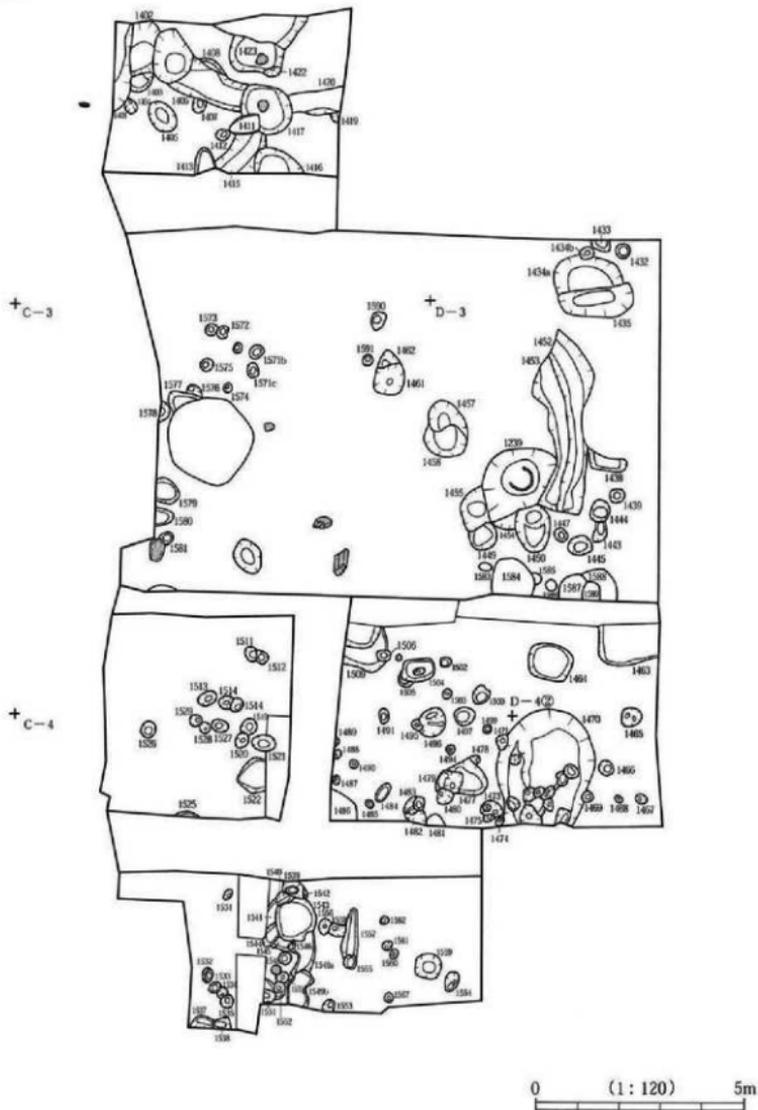
〈第③面〉



A1-III区全体图3



(第4面)

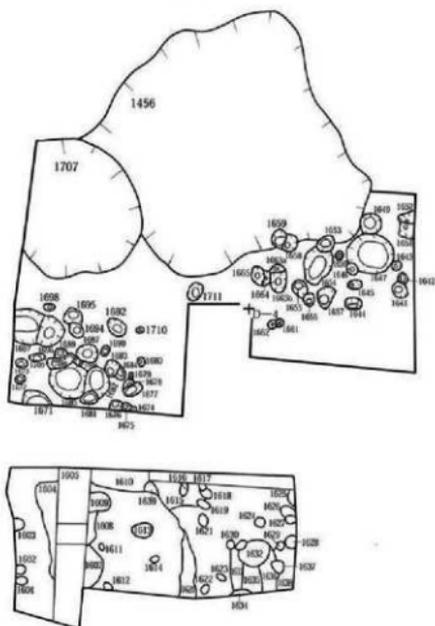


A1-III区全体図4



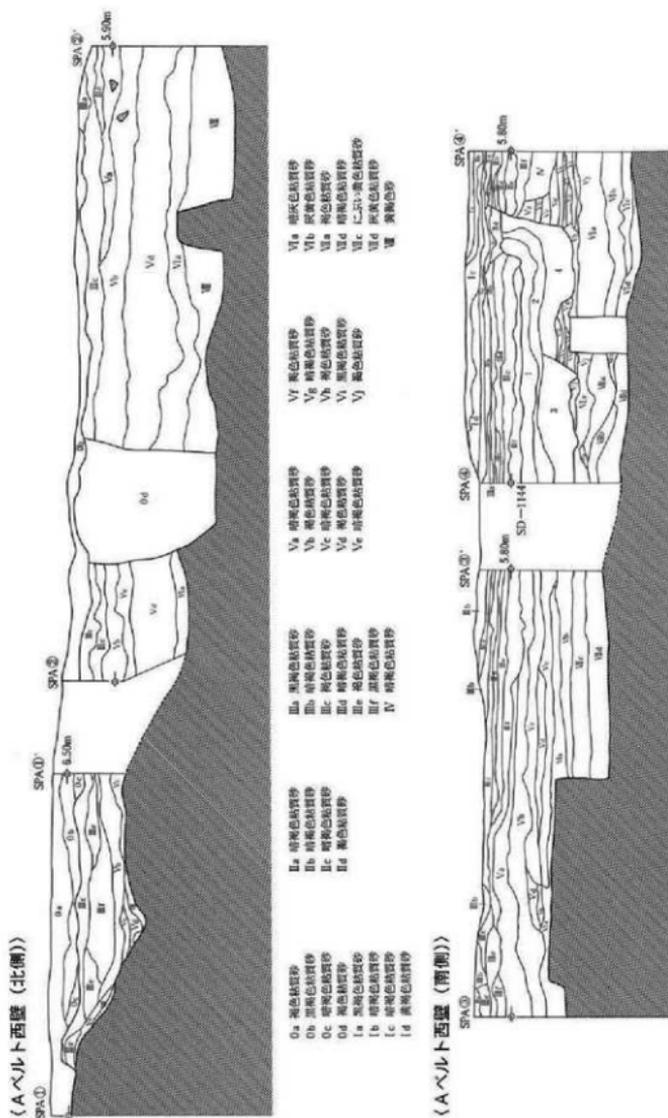
〈第⑤面〉

+C-4

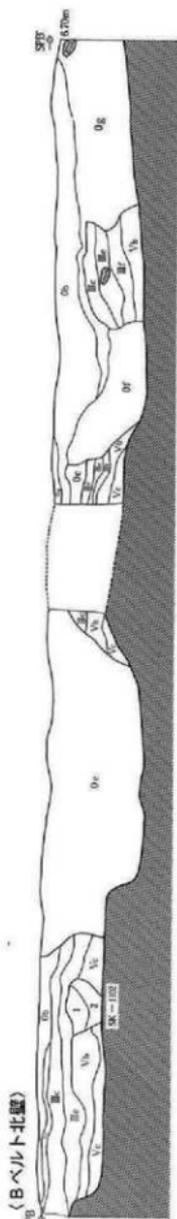


0 (1:120) 5m

A1-III区全体图5



A1-III区基本層序 1



(SK-1102)  
 1 暗灰色粘質砂  
 2 暗褐色粘質砂

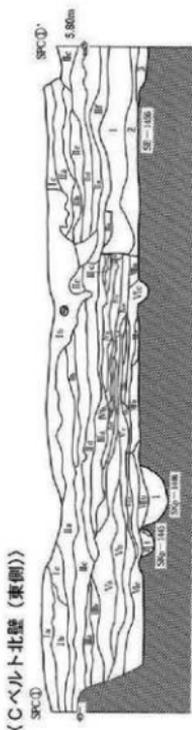
Ⅲc 褐色粘質砂  
 Ⅲb 暗灰色粘質砂  
 Ⅲa 暗褐色粘質砂  
 Vb 褐色粘質砂  
 Vc 暗褐色粘質砂

Oa 褐色粘質砂  
 Ob 暗灰色粘質砂  
 Oc 暗褐色粘質砂  
 Od 褐色粘質砂  
 Oe 暗褐色粘質砂  
 Of 暗褐色粘質砂  
 Og 暗褐色粘質砂

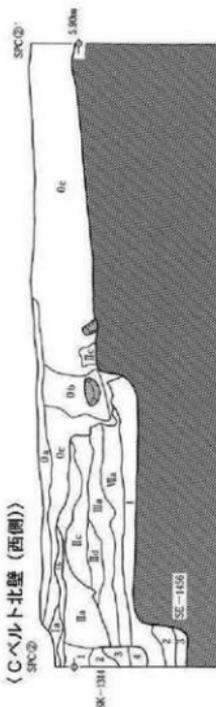
Va 暗褐色粘質砂  
 Vb 褐色粘質砂  
 Vc 暗褐色粘質砂  
 Va 暗褐色粘質砂  
 Vb 暗褐色粘質砂  
 Vc 暗褐色粘質砂  
 Va 暗褐色粘質砂  
 Vb 暗褐色粘質砂

Ⅲa 暗褐色粘質砂  
 Ⅲb 暗褐色粘質砂  
 Ⅲc 暗褐色粘質砂  
 Ⅲd 暗褐色粘質砂  
 Va 暗褐色粘質砂  
 Vb 暗褐色粘質砂  
 Vc 暗褐色粘質砂  
 Va 暗褐色粘質砂  
 Vb 暗褐色粘質砂

Oa 暗褐色粘質砂  
 Ob 暗褐色粘質砂  
 Oc 暗褐色粘質砂  
 Ia 暗褐色粘質砂  
 Ib 暗褐色粘質砂  
 Ic 暗褐色粘質砂  
 Id 暗褐色粘質砂  
 Ie 暗褐色粘質砂  
 If 暗褐色粘質砂



(C ベルト北壁 (東側))



(C ベルト北壁 (西側))

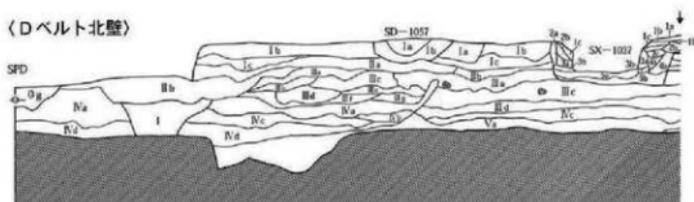
(SK-1314)  
 1 暗褐色粘質砂  
 2 暗褐色粘質砂  
 3 暗褐色粘質砂  
 4 暗褐色粘質砂

(SKp-1165)  
 1 暗褐色粘質砂  
 2 暗褐色粘質砂  
 (SKp-1166)  
 1 暗褐色粘質砂

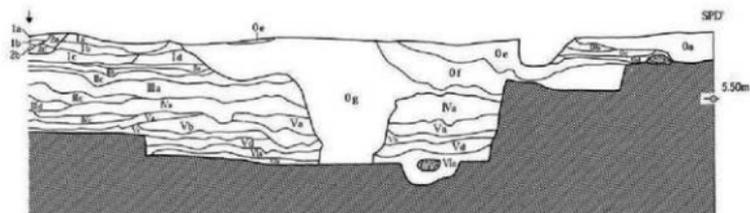
(SK-1456)  
 1 暗褐色粘質砂  
 2 暗褐色粘質砂  
 3 暗褐色粘質砂



(Dベルト北壁)

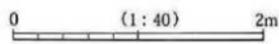
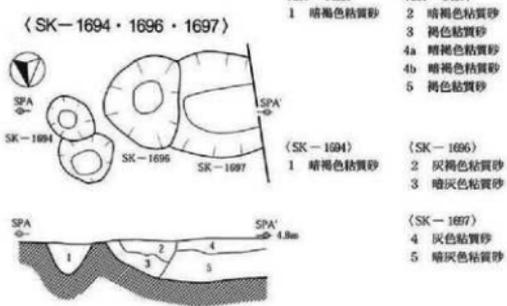
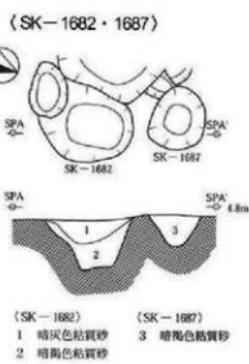
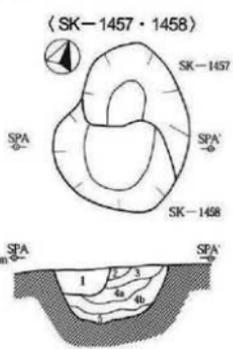
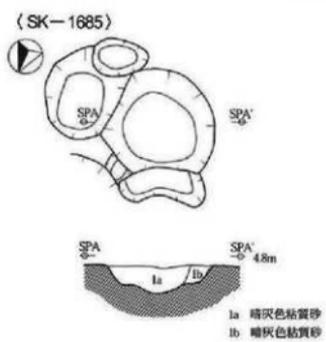
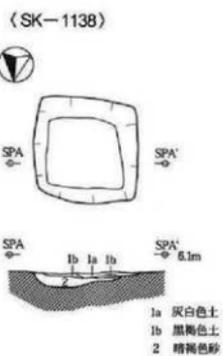
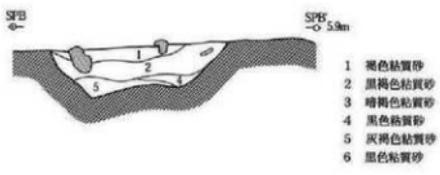
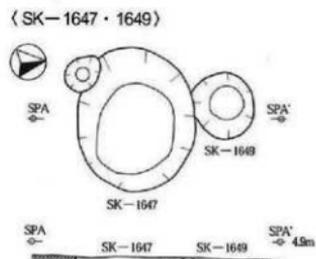
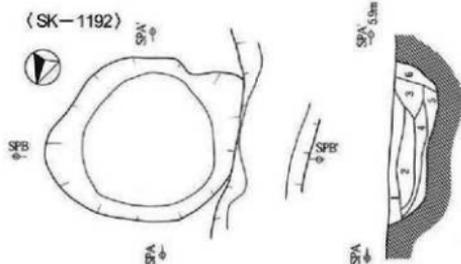


- |           |            |            |
|-----------|------------|------------|
| 0a 暗褐色粘質砂 | IIa 黒褐色粘質砂 | IVa 暗褐色粘質砂 |
| 0b 黒褐色粘質砂 | IIb 暗褐色粘質砂 | IVb 暗褐色粘質砂 |
| 0c 黄褐色粘質砂 | IIc 暗褐色粘質砂 | IVc 暗褐色粘質砂 |
| 0d 黒褐色粘質砂 | IIa 黄褐色粘質砂 | IVd 黒褐色粘質砂 |
| 0e 暗褐色粘質砂 | IIb 暗褐色粘質砂 | Va 暗褐色粘質砂  |
| 0f 黒色粘質砂  | IIc 暗褐色粘質砂 | Vb 暗褐色粘質砂  |
| 0g 暗褐色粘質砂 | IIa 暗褐色粘質砂 | Vc 暗褐色粘質砂  |
| 1a 暗褐色粘質砂 | IIa 暗褐色粘質砂 | VIa 暗灰色粘質砂 |
| 1b 暗褐色粘質砂 | IIb 暗褐色粘質砂 | VIb 褐色粘質砂  |
| 1c 暗褐色粘質砂 | IIc 暗褐色粘質砂 |            |
| 1d 暗褐色粘質砂 | IIa 暗褐色粘質砂 |            |



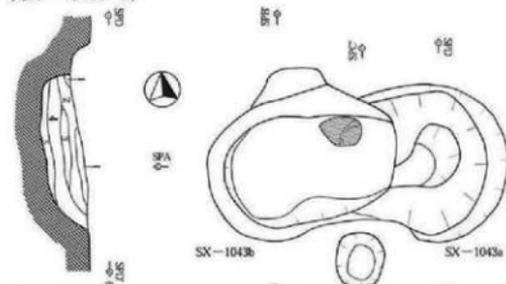
- |             |           |
|-------------|-----------|
| (SX-1037)   | (SD-1037) |
| 1a 黒褐色粘質砂   | 1a 黄褐色粘質砂 |
| 1b 黄褐色粘質砂   | 1b 暗褐色粘質砂 |
| 1c 黒褐色粘質砂   |           |
| 2a 暗褐色粘質砂   |           |
| 2b 暗褐色粘質砂   |           |
| 2c 暗褐色粘質砂   |           |
| 3a 淡黄色粘質砂   |           |
| 3b 棕色→黄色粘質砂 |           |
| 4a 暗褐色粘質砂   |           |
| 4b 暗褐色粘質砂   |           |
| 5a 暗褐色粘質砂   |           |
| 5b 暗褐色粘質砂   |           |

0 (1:60) 3m



A1-III区遺構個別図1 (第2面~第3面 土坑)

(SX-1043a-b)

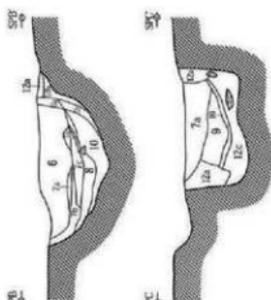
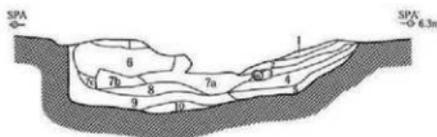


SX-1043b

SX-1043a

(SX-1043a)

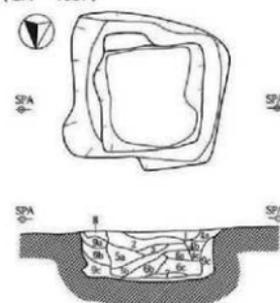
- 1 黑褐色粘质砂
- 2 暗褐色粘质砂
- 3 暗灰色粘质砂
- 4 黑褐色粘质砂
- 5 暗褐色粘质砂



(SX-1043c)

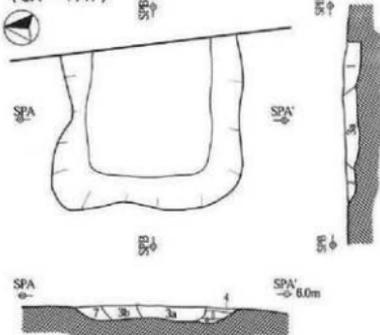
- 6 暗褐色砂
- 7a 浅黄褐色粘土
- 7b 赤褐色粘土
- 7c 暗褐色粘质土
- 8 黑褐色粘质砂
- 9 暗褐色粘质砂
- 10 黑褐色粘质砂
- 11a 赤褐色砂
- 11b 暗褐色砂
- 12a 浅黄褐色砂
- 12b 暗褐色砂
- 12c 红褐色砂

(SX-1037)

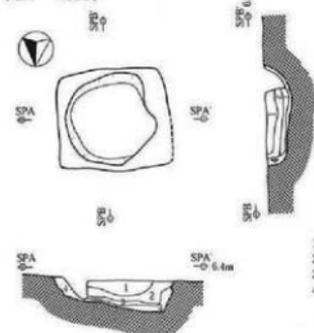


- 1 暗褐色砂
- 2 黑褐色砂
- 3 暗褐色砂
- 4a 黄褐色砂
- 4b 黄褐色砂
- 4c 黄褐色砂
- 5a 黑褐色砂
- 5b 黑褐色砂
- 6a 黑褐色砂
- 6b 黑褐色砂
- 6c 黑褐色砂
- 7 暗灰色砂
- 8 暗褐色砂
- 9a 黄褐色粘质土
- 9b 黄褐色粘质土
- 9c 黄褐色粘质土

(SX-1117)

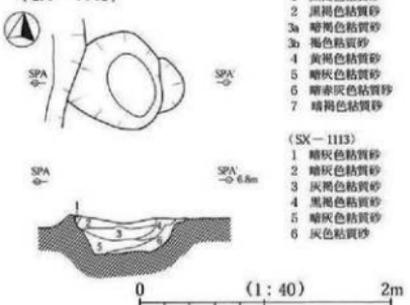


(SX-1030)



- 1 褐色砂
- 2 暗褐色砂
- 3 暗灰色粘质砂
- 4 淡黄褐色粘质砂

(SX-1113)



(SX-1117)

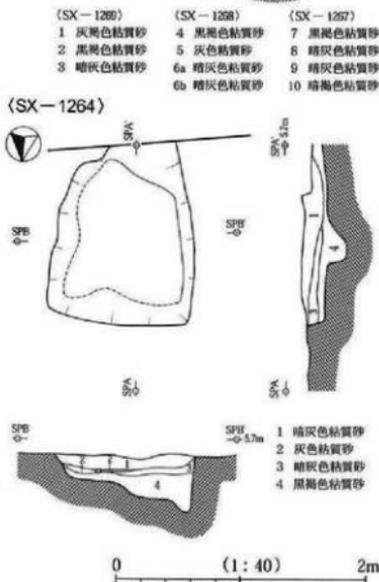
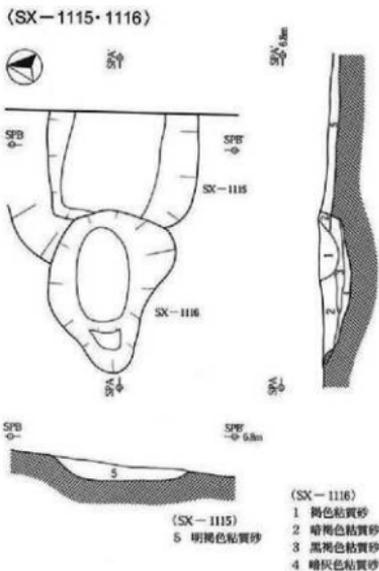
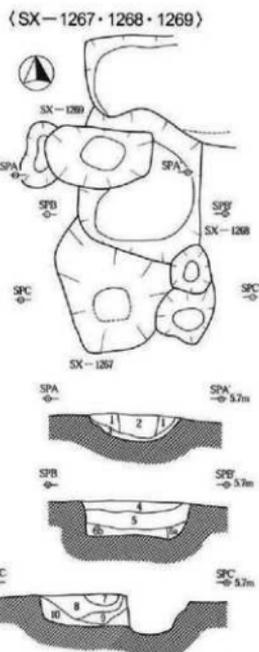
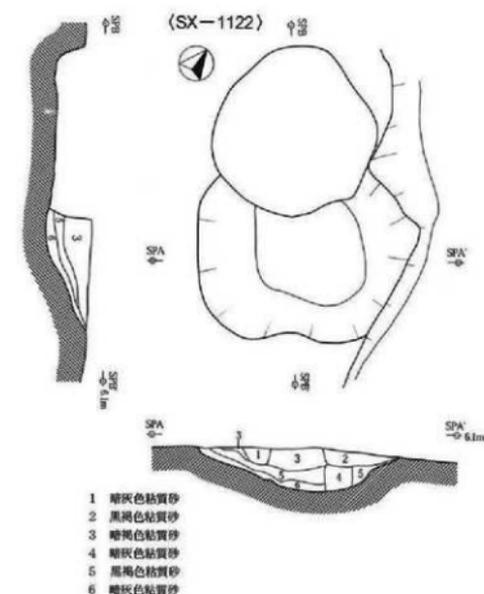
- 1 黑褐色粘质砂
- 2 黑褐色粘质砂
- 3a 暗褐色粘质砂
- 3b 褐色粘质砂
- 4 黄褐色粘质砂
- 5 暗灰色粘质砂
- 6 暗赤褐色粘质砂
- 7 暗褐色粘质砂

(SX-1113)

- 1 暗灰色粘质砂
- 2 暗灰色粘质砂
- 3 灰褐色粘质砂
- 4 黑褐色粘质砂
- 5 暗褐色粘质砂
- 6 灰色粘质砂

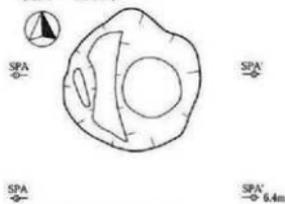
0 (1:40) 2m

A1-III区遺構個別図2 (第2面 掘治炉跡・SX)



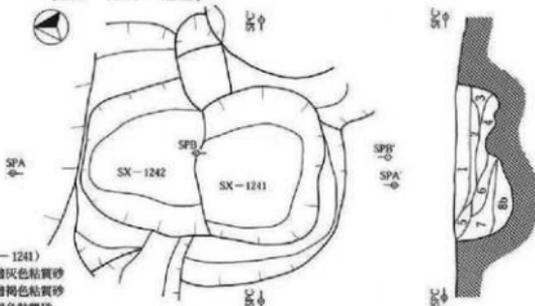
A1-III区遺構個別図3 (第2面・第3面・SX)

(SX-1339)



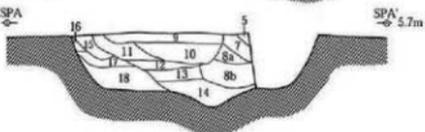
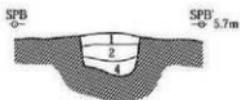
- 1 暗褐色粘质砂
- 2 黑褐色粘质砂
- 3 黑色粘质砂

(SX-1241 · 1242)



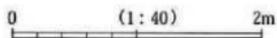
(SX-1241)

- 1 暗灰色粘质砂
- 2 暗褐色粘质砂
- 3 褐色粘质砂
- 4 黑褐色粘质砂
- 5 褐色粘质砂
- 6 黑褐色粘质砂
- 7 暗褐色粘质砂
- 8a 黑褐色粘质砂
- 8b 暗灰色粘质砂

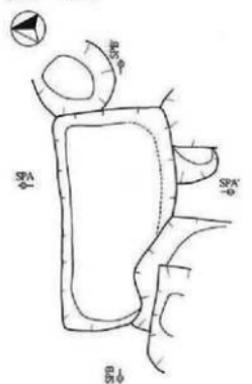


(SX-1242)

- 9 黑色粘质砂
- 10 黑褐色粘质砂
- 11 暗灰色粘质砂
- 12 暗褐色粘质砂
- 13 灰褐色粘质砂
- 14 暗褐色粘质砂
- 15 暗灰色粘质砂
- 16 暗褐色粘质砂
- 17 黑褐色粘质砂
- 18 褐色粘质砂

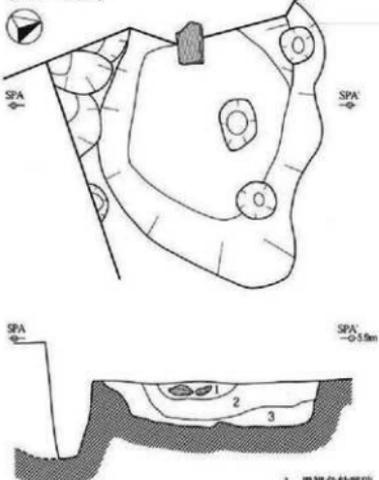


(SX-1272)



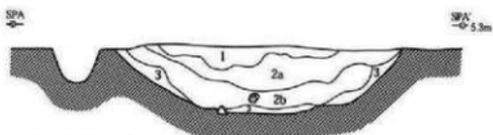
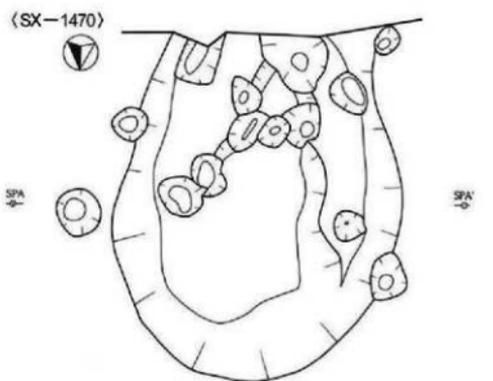
- 1a 暗褐色粘质砂
- 1b 灰褐色粘质砂
- 2a 灰色粘质砂
- 2b 褐色粘质砂

(SX-1291)

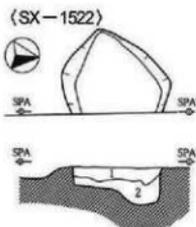


- 1 黑褐色粘质砂
- 2 黑褐色粘质砂
- 3 暗褐色粘质砂

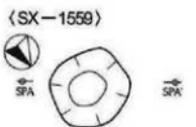
A1-III区遺構個別図4 (第3圖 龜治伊跡・SX)



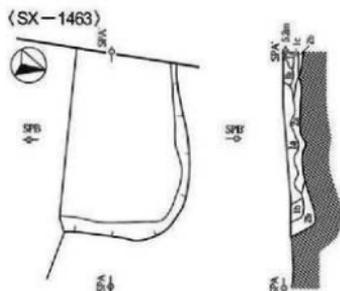
- 1 黄褐色粘质土
- 2a 暗褐色粘质砂
- 2b 暗褐色粘质砂
- 3 黄褐色粘质砂



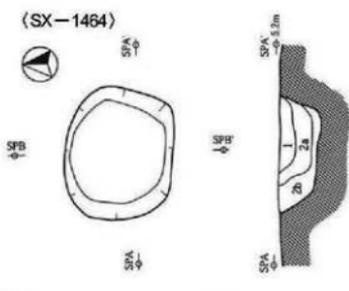
- 1 暗褐色砂质土
- 2 黑褐色砂质土



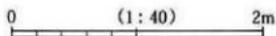
- 1 灰色粘质砂
- 2 灰褐色粘质砂
- 3 暗灰色粘质砂
- 4 褐色粘质砂



- 1a 黑褐色粘质砂
- 1b 暗褐色粘质砂
- 1c 暗褐色粘质砂
- 2a 褐色粘质砂
- 2b 黄褐色粘质砂

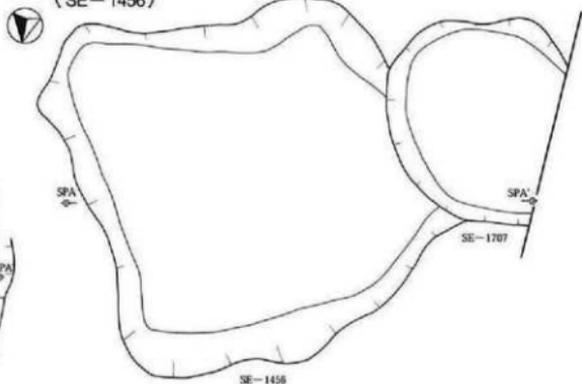


- 1 暗褐色粘质砂
- 2a 褐色粘质砂
- 2b 褐色粘质砂

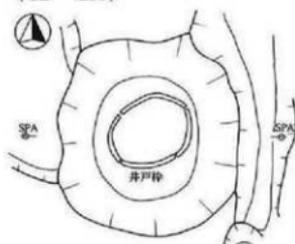


A1-III区遺構個別図5 (第④圖SX)

(SE-1456)



(SE-1239)



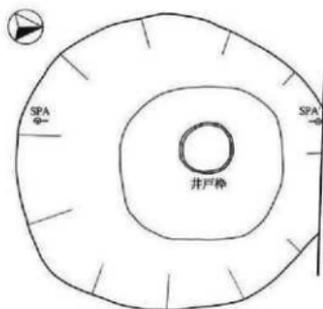
- 1 黒褐色粘質砂
- 2 褐色粘質砂
- 3 褐色砂
- 4 暗灰色粘質土
- 5 暗灰色粘質砂
- 6 褐色粘質砂



- (SE-1239)
- 1 黒褐色粘質砂
- 2 褐色粘質砂
- 3 褐色砂
- (SE-1456)
- 4 黒褐色粘質砂
- 5 暗褐色粘質砂
- 6 灰褐色粘質砂
- 7 黒色粘質土
- 8 暗灰色粘質砂
- 9 暗灰色粘質砂
- 10 灰褐色粘質砂
- 11 灰色粘質砂
- 12 灰褐色粘質砂
- 13 灰色粘質砂
- 14 灰褐色粘質砂
- 15 灰色粘質砂
- 16 暗灰色粘質砂

1239 0 (1:40) 2m  
1456 0 (1:80) 4m

(SE-1217)



(基本層序)

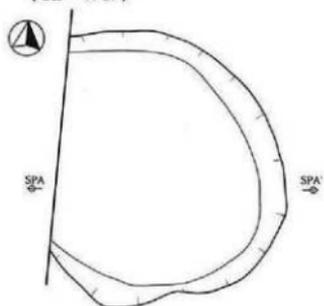
- 0c 暗褐色粘質砂
- IIIa 黒褐色粘質砂
- VIa 暗褐色粘質砂
- Ⅷ 黄褐色砂

(SE-1217)

- 1 Ⅱb 黄褐色粘質砂
- 2 黒褐色粘質砂
- 3 暗褐色粘質砂
- 4 黒色粘質砂
- 5 黒褐色粘質砂
- 6 明褐色粘質砂
- 7 暗灰色粘質砂
- 8 黒褐色粘質砂



(SE-1707)

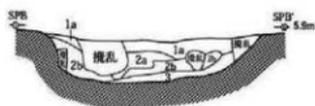
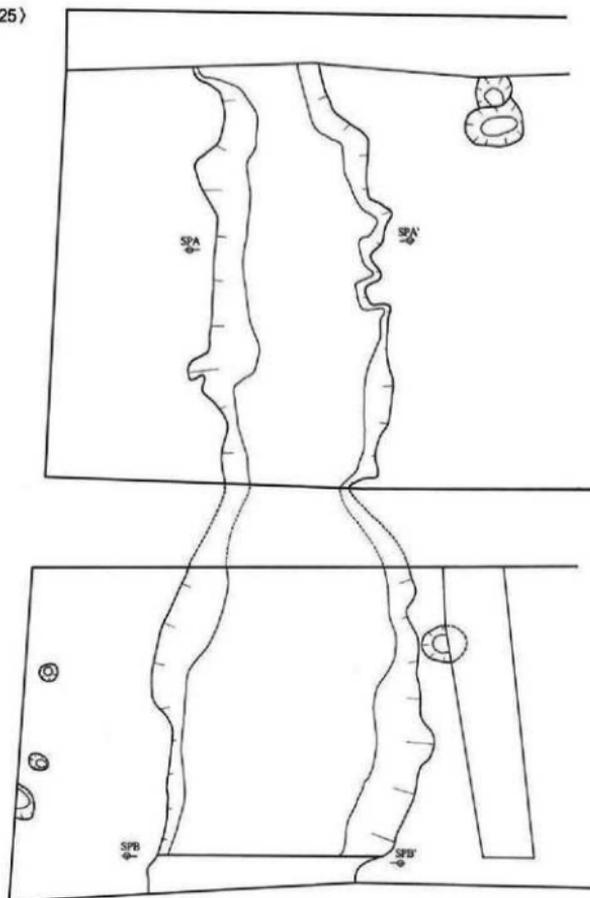


0 (1:60) 3m

A1-III区遺構個別図 6 (第③面~第⑤面 井戸跡)



(SD-1125)



(SD-1125)

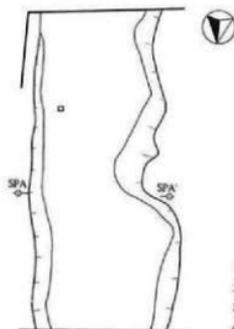
- 1a 褐色砂
- 1b 黄褐色砂
- 2a 暗褐色砂
- 2b 暗褐色砂
- 3 暗灰色砂

0 (1:60) 3m

A1-III区遺構個別図7 (第2面 溝跡)

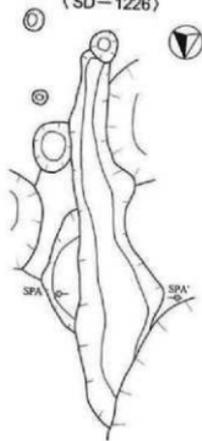
A1-III区 16

(SD-1144)



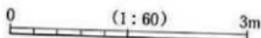
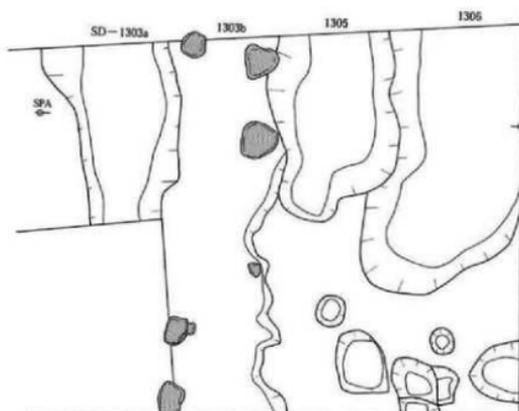
- 1 褐色粘質砂
- 2 明褐色砂
- 3 暗褐色粘質砂
- 4 黒褐色粘質砂
- 5 褐色砂
- 6 黒褐色粘質砂
- 7 黒色粘質砂
- 8 黒褐色粘質砂
- 9 暗灰色粘質砂
- 10 黒褐色粘質砂
- 11 黒色粘質砂
- 12 暗灰色粘質砂
- 13 暗灰色粘質砂
- 14 灰褐色粘質砂
- 15 暗灰色粘質砂

(SD-1226)



- 1 灰褐色粘質砂
- 2 暗褐色粘質砂
- 3 暗灰色粘質砂
- 4 暗褐色粘質砂
- 5 黒褐色粘質砂
- 6 褐色粘質砂
- 7 黒褐色粘質砂

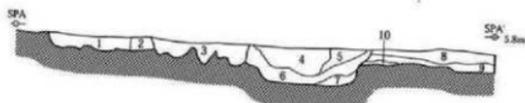
(SD-1303a, b · 1305 · 1306)



- (SD-1303a)
- 1 暗褐色粘質砂
  - 2 黒褐色粘質砂
- (SD-1303b)
- 3 灰色粘質砂

- (SD-1305)
- 4 暗褐色粘質砂
  - 5 褐色粘質砂
  - 6 灰白色粘質砂
  - 7 褐色粘質砂

- (SD-1306)
- 8 暗褐色粘質砂
  - 9 黒褐色粘質砂
  - 10 黄色粘質砂

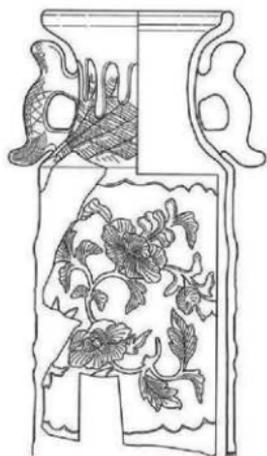


A1-III区遺構個別図 8 (第2面・第3面 清跡)

(SX-1032)



1501



1502

(SX-1037)

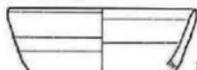


1503



1504

(SX-1046)



1505



1506

(SX-1039)



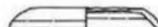
2258

(SX-1040)

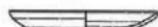


2259

(SX-1020 下層)



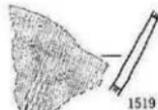
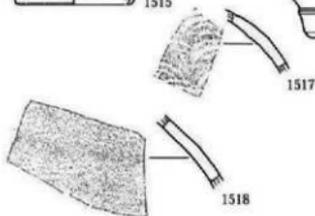
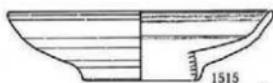
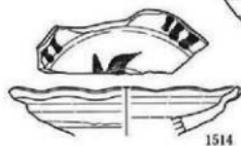
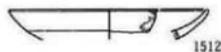
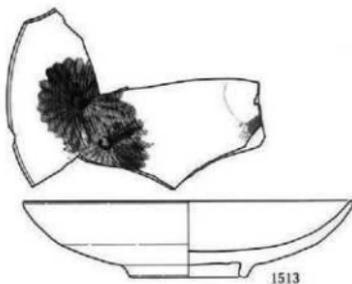
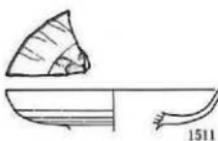
1507



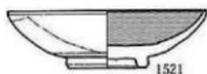
1508

0 (1:3) 15 cm

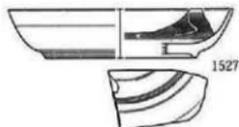
(SD-1001)



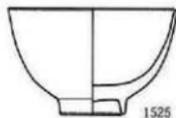
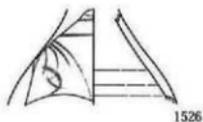
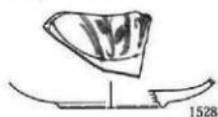
(SX-1043)



(C-4⑨ (SX-1006))



(SKp-1021)



(SK-1066)



(C-3⑨ (SX-1052))



(SD-1007)

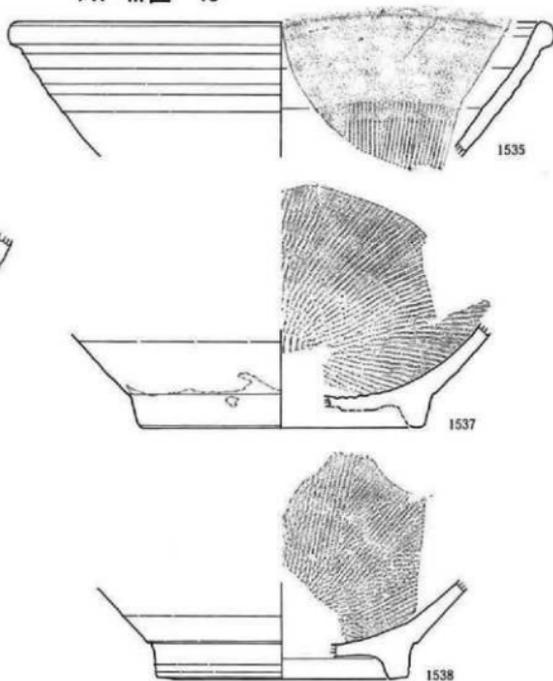
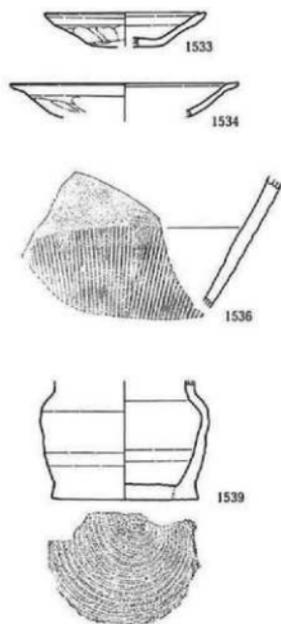


(SKp-1025)

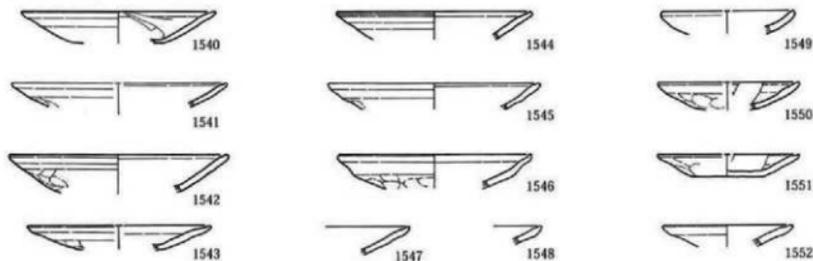


0 (1:3) 15cm

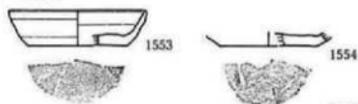
(SD-1110)



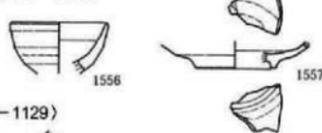
(SX-1116)



(SX-1117)



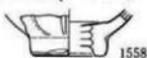
(SX-1122)



(SK-1108)

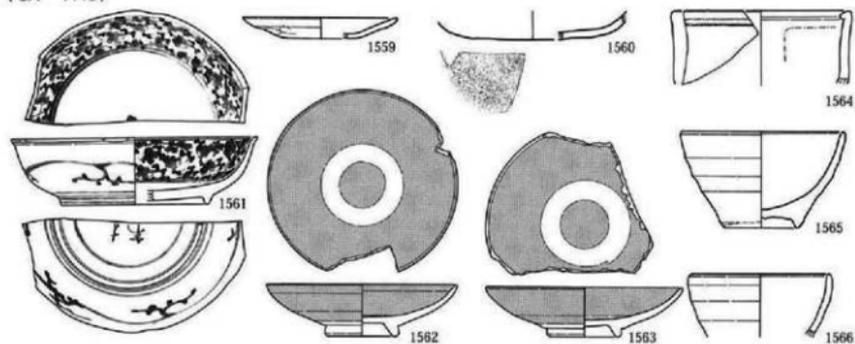


(SK·SKp-1129)

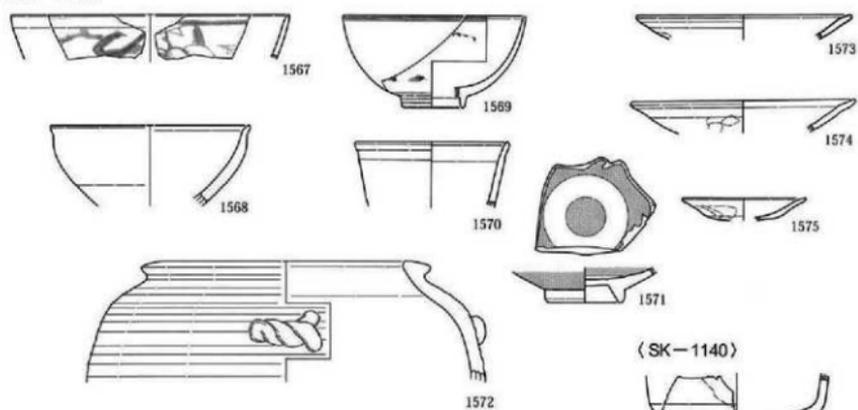


0 (1:3) 15 cm

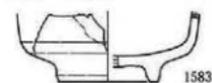
(SX-1115)



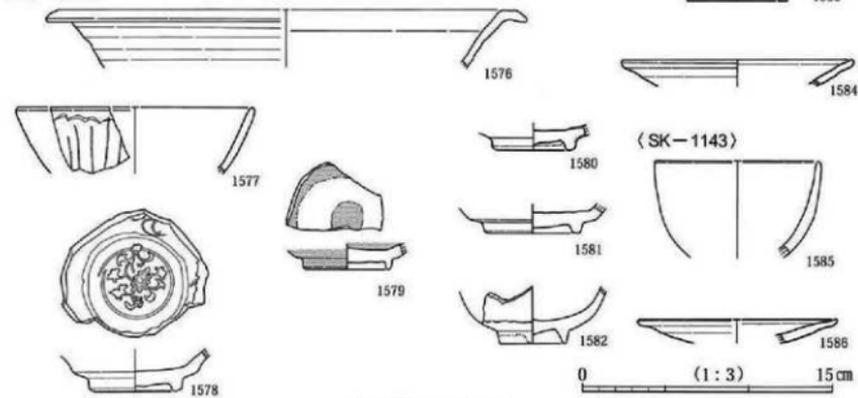
(SK-1118)



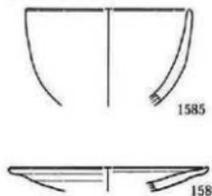
(SK-1140)



(SD-1125)



(SK-1143)



0 (1:3) 15cm

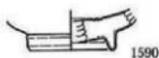
〈SD-1144〉



1587



1589



1590



1588



1591



1593



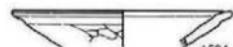
1595



1597



1592



1594



1596



1598



1599

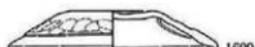
〈SX-1194 攪乱〉



1602



1604



1600



1603



1601

〈SK-1152〉



1605



1606

〈SKp-1170〉



1608

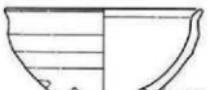


1607



1609

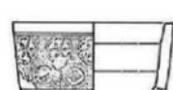
〈SK-1178の下〉



1610



1611



1617

〈SK-1187〉



1618

〈SK-1178〉



1612



1615



1619



1613



1616

〈SK-1189〉



1620



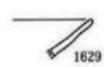
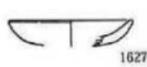
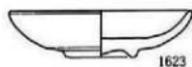
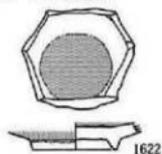
1621



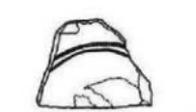
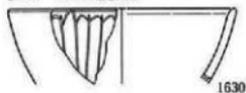
1614

0 (1:3) 15cm

(SX-1195 扰乱)



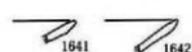
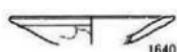
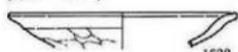
(SX-1196 扰乱)



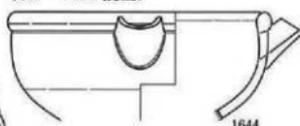
(SE-1217)



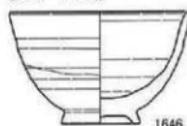
(SK-1192)



(SX-1193 扰乱)



(SK-1138)



(D-3②·D-4③ (SX-1130))



(SK-1189)



(SKp-1153)



(C-3④⑤ (SX-1157))



(C-3⑨ (SX-1151))



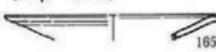
(SE-1156)



(SK-1179)



(SKp-1133)

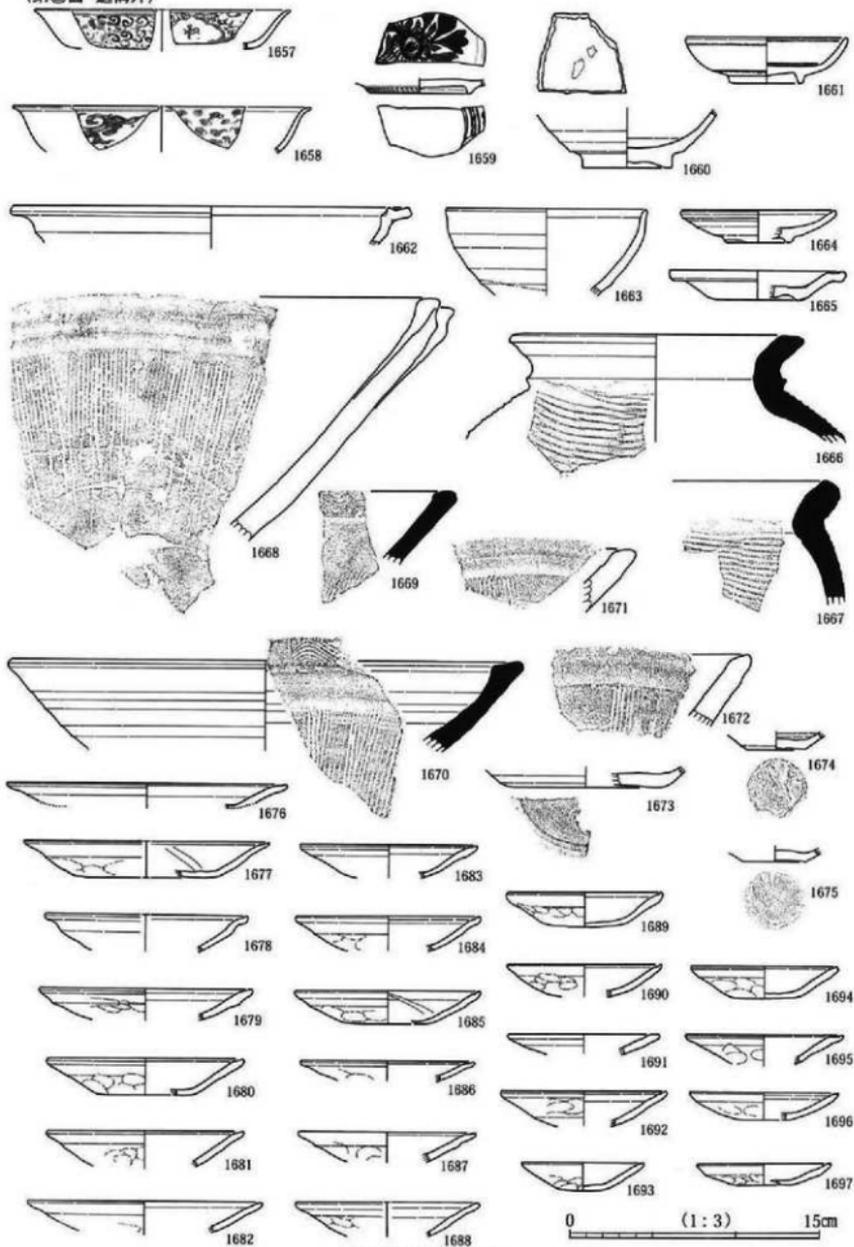


(C-2② (SX-1111))

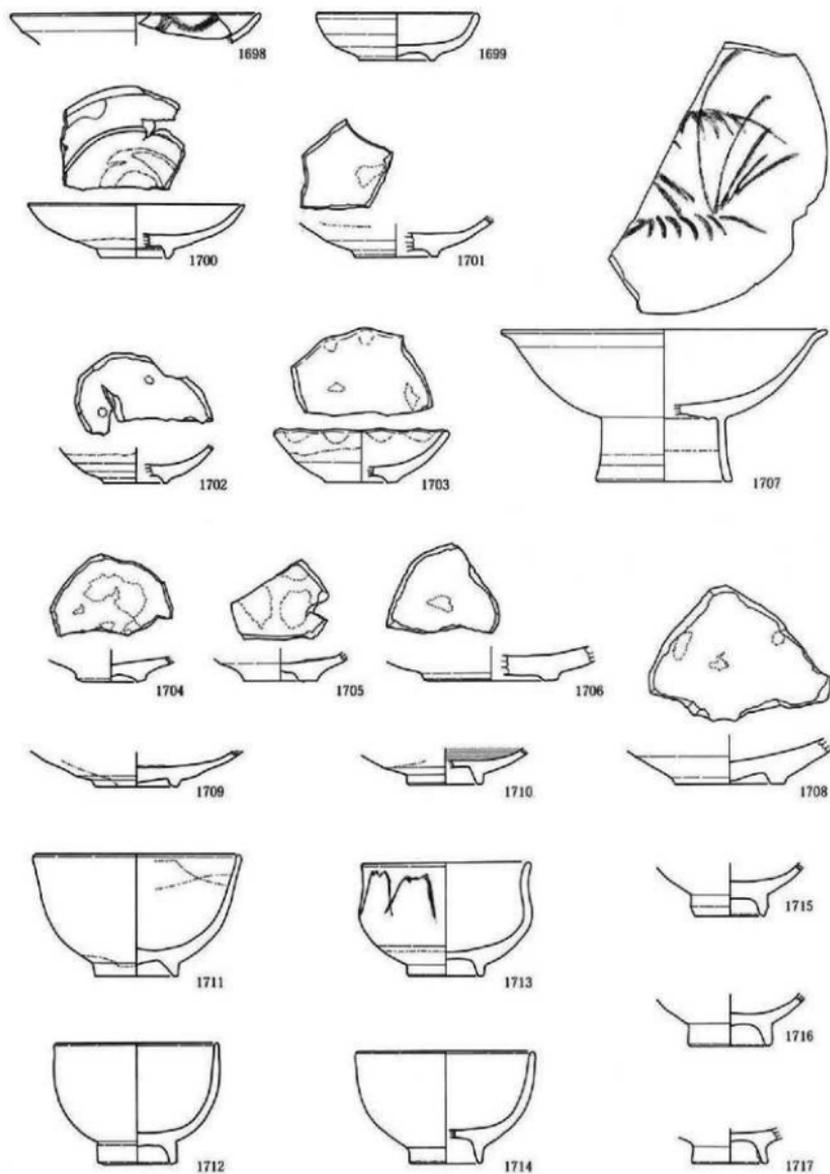


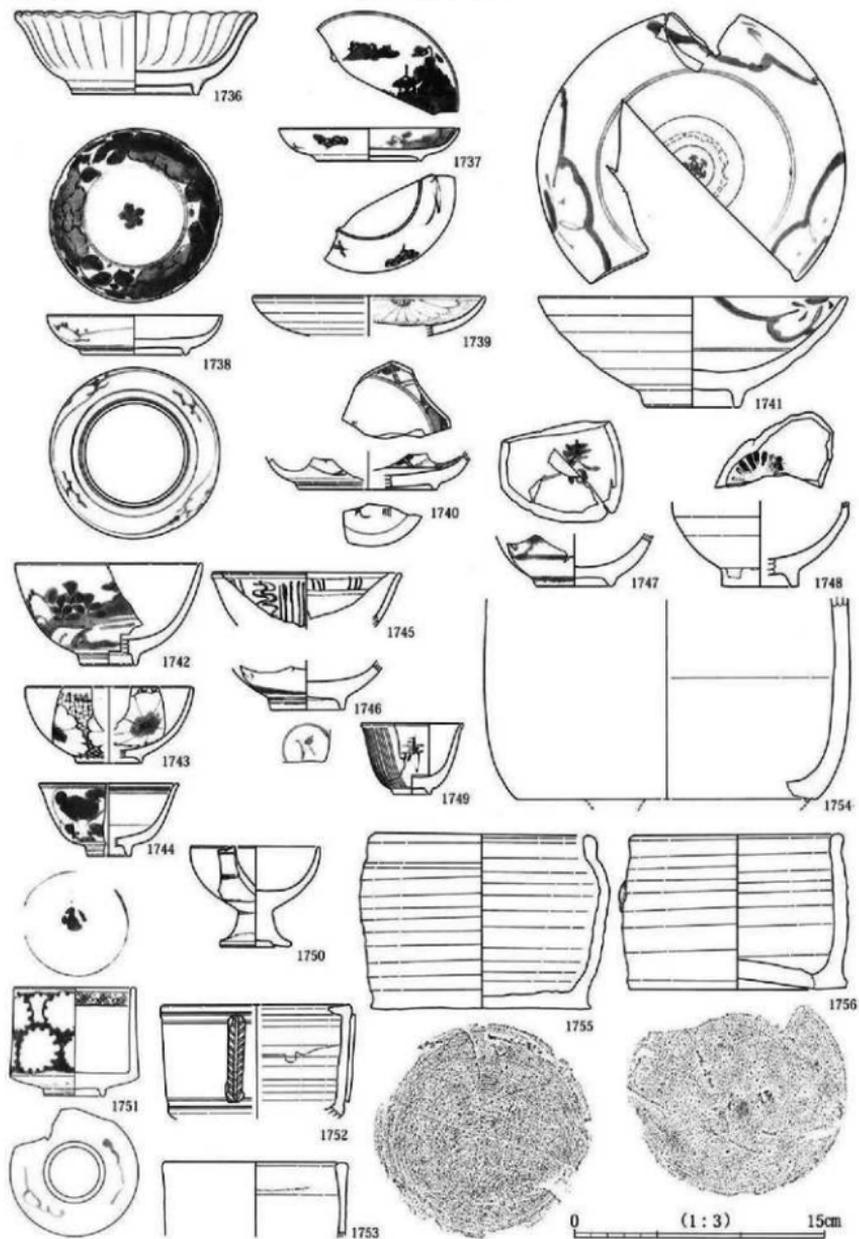
0 (1:3) 15cm

(第②面 遺構外)



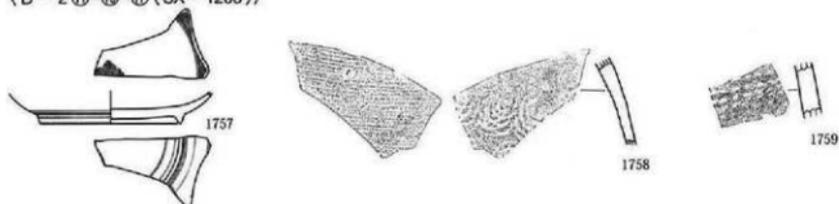
出土遺物 7 (第②面 5)



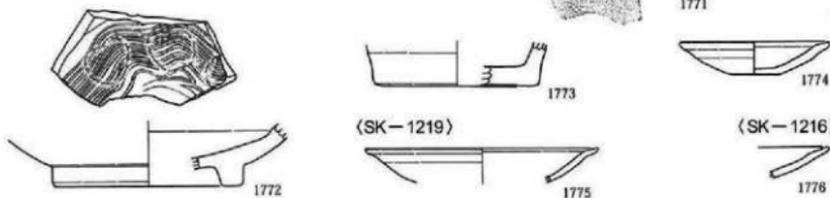
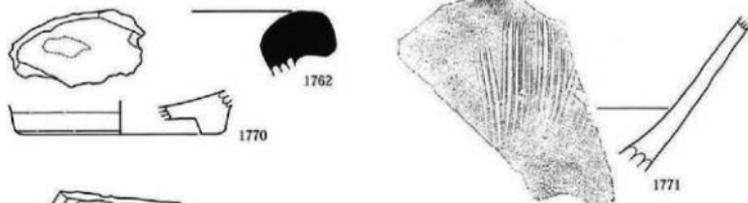
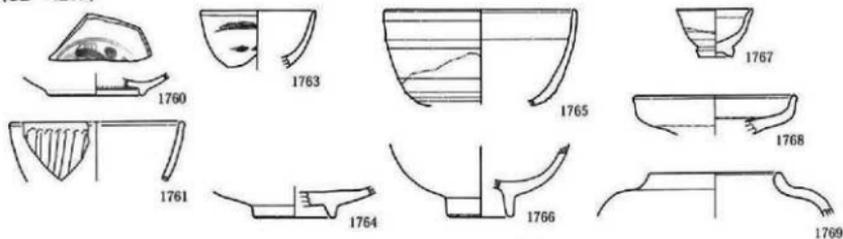


出土遺物 9 (第2面 7)

(D-2⑩·⑬·⑰(SX-1208))



(SE-1217)



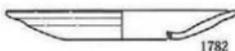
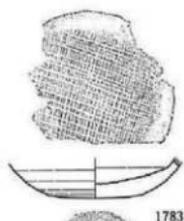
(SK-1219)



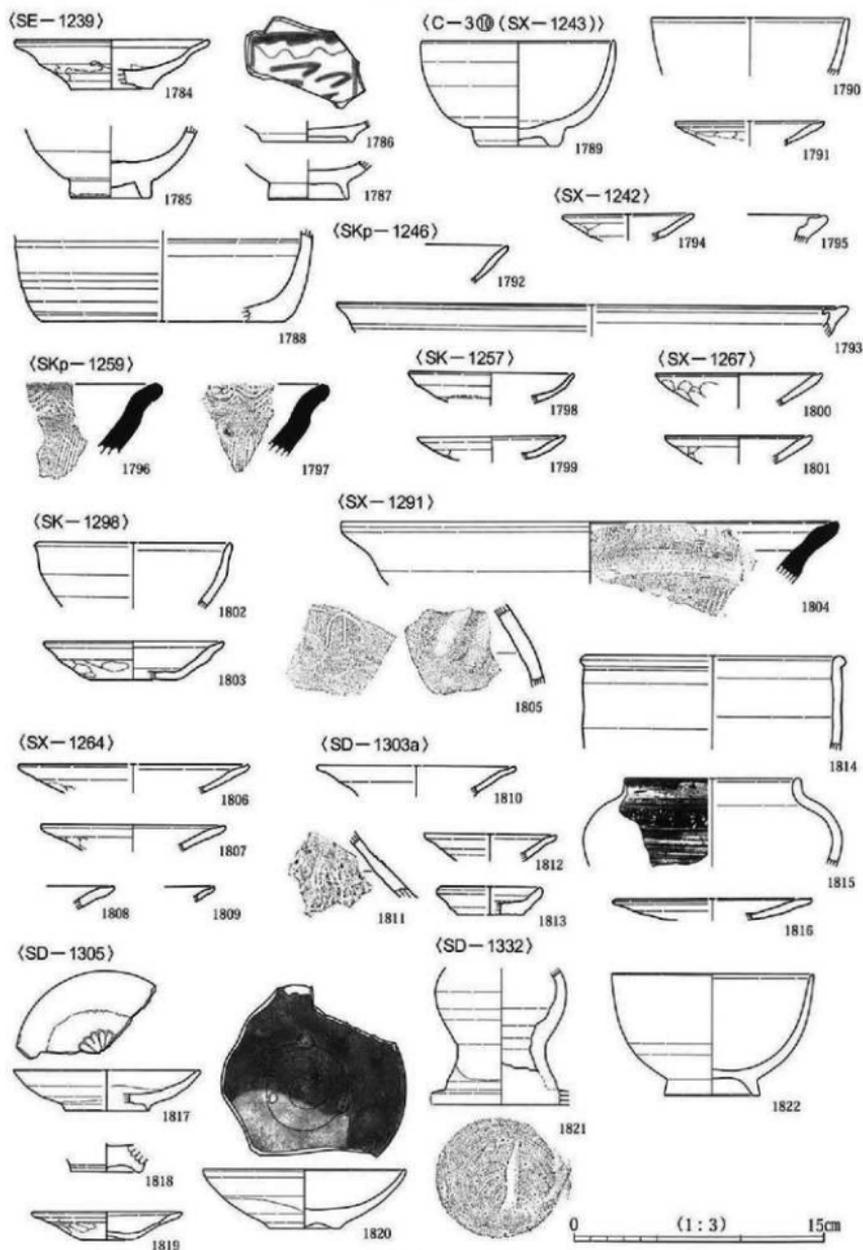
(SK-1216)



(SKp-1228)

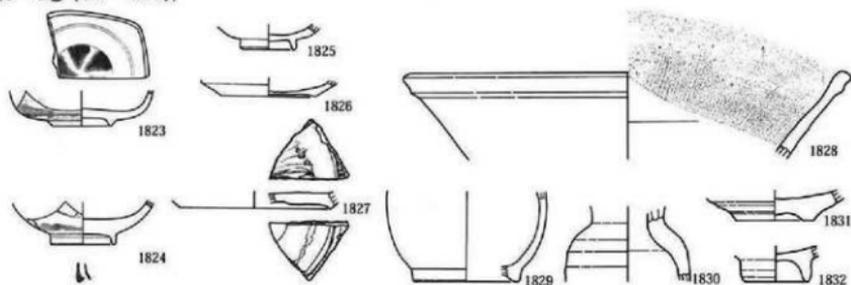


0 (1:3) 15cm

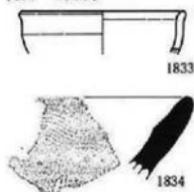


出土遺物 11 (第3面2)

(C-3④ (SK-1328))

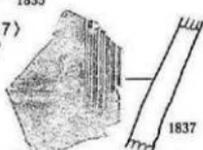


(SX-1339)



(SK-1317)

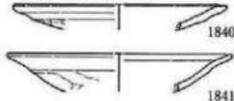
1836



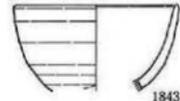
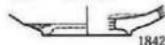
(SD-1306)



(SK-1316)



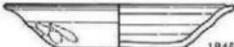
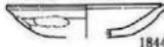
(SD-1303b)



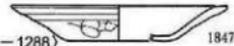
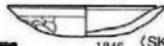
(SK-1285)

1843

(SK-1314)



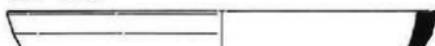
(SD-1313)



(SKp-1288)

1847

(SK-1310)



(D-3② (SX-1227))

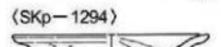


(SX-1271)

1850

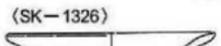


1851



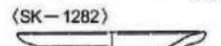
(SKp-1294)

1852



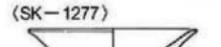
1853

(SK-1326)



1854

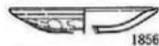
(SK-1282)



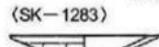
1855

(SK-1277)

(SX-1272)



1856



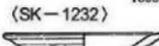
1857

(SK-1283)



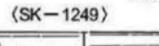
1858

(C-3③④ (SX-1330))



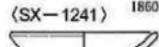
1859

(SK-1232)



1860

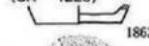
(SK-1249)



1861

(SX-1241)

(SX-1220)

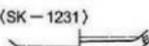


1862



1863

(SK-1231)



1864

(SKp-1258)



1865

(SKp-1293)



1866

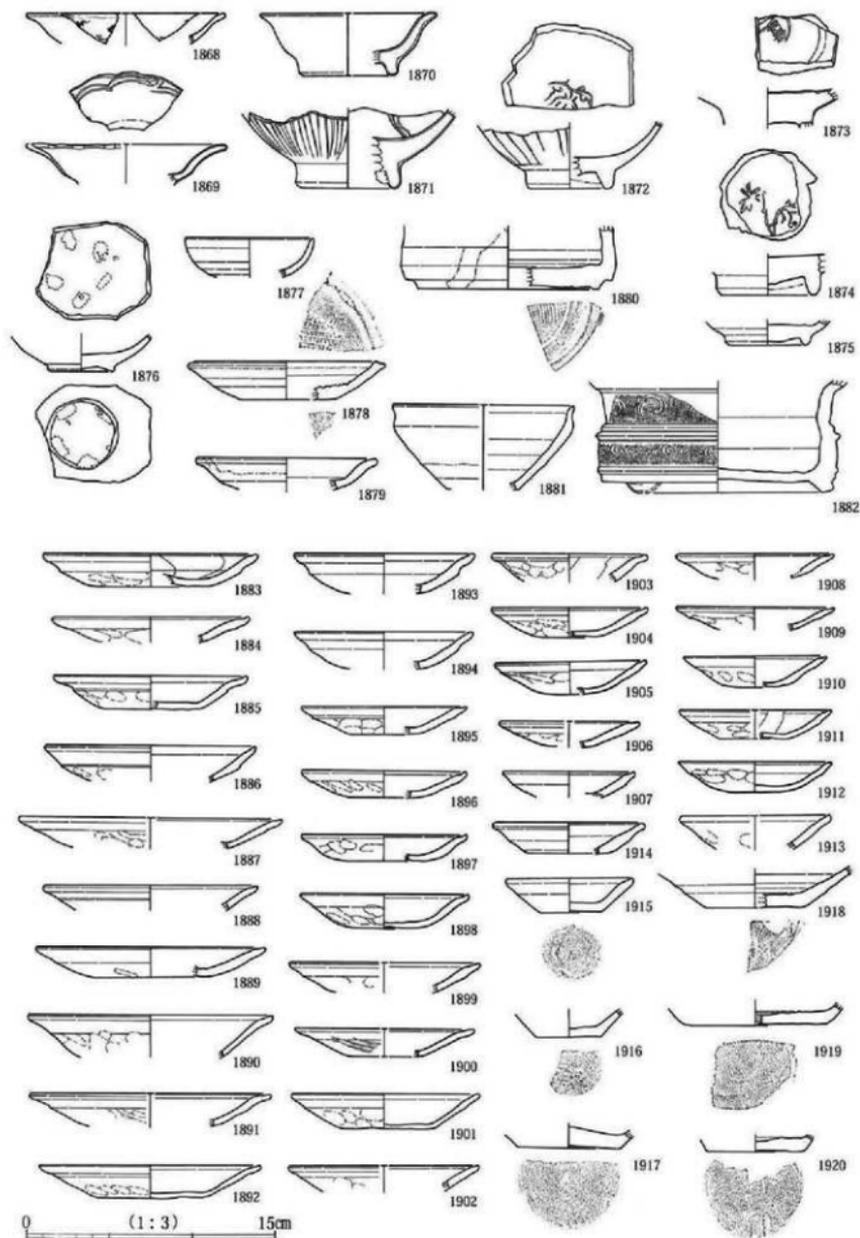
(SK-1268)



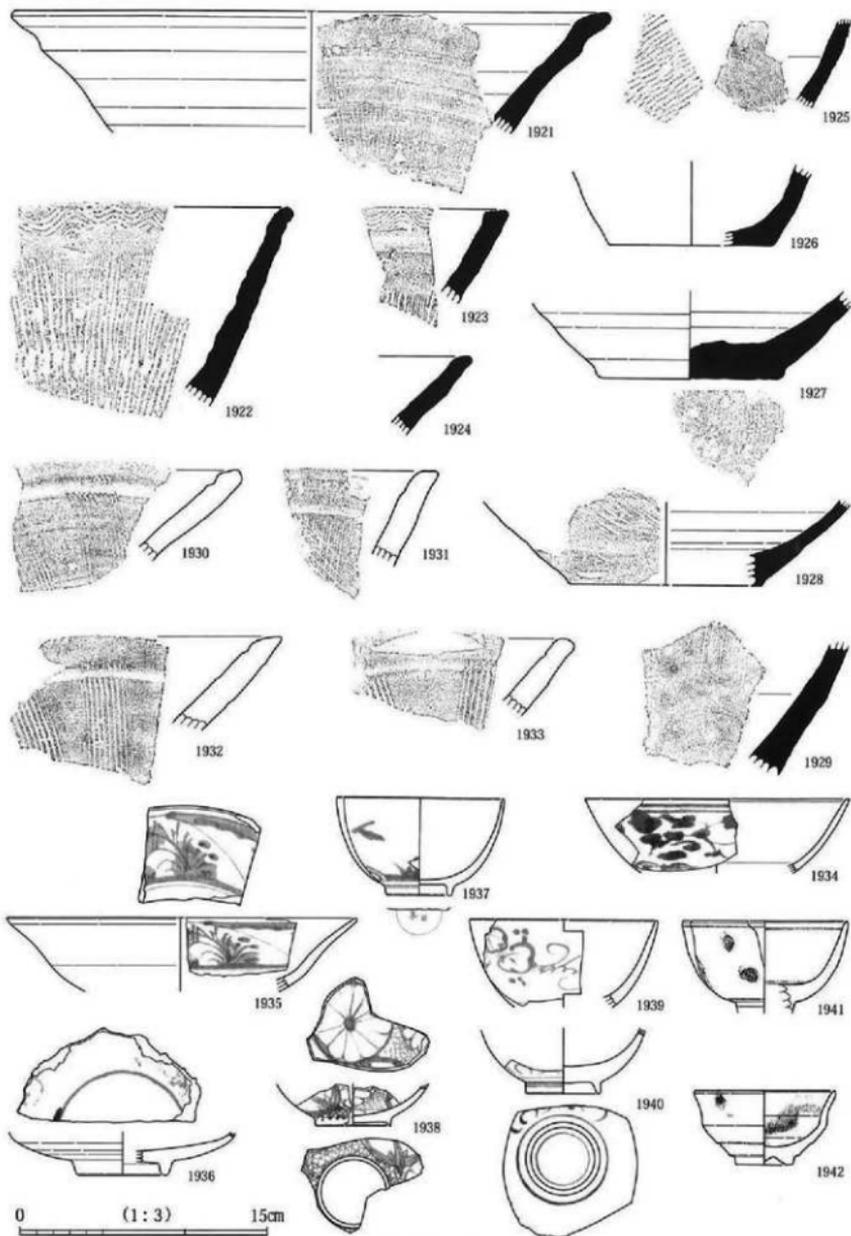
1867

(SK-1268)

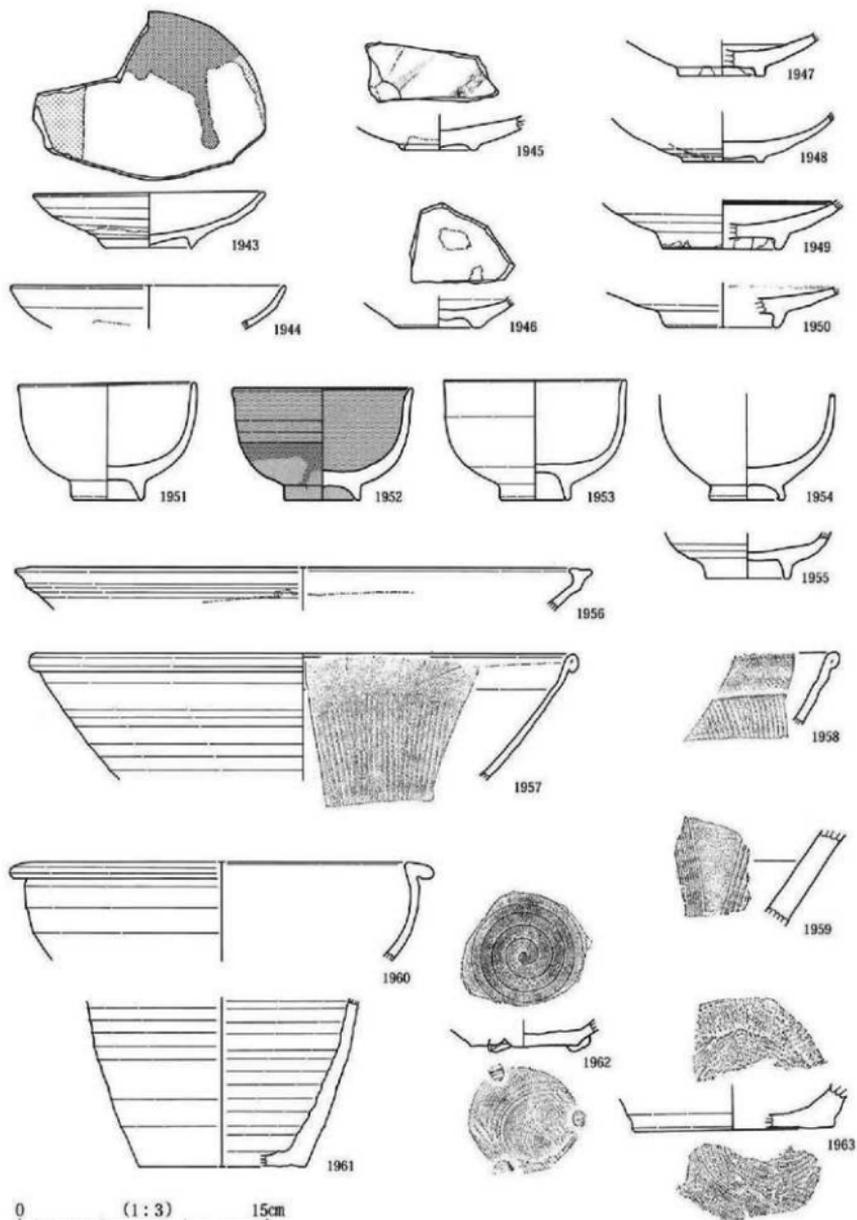
0 (1:3) 15cm



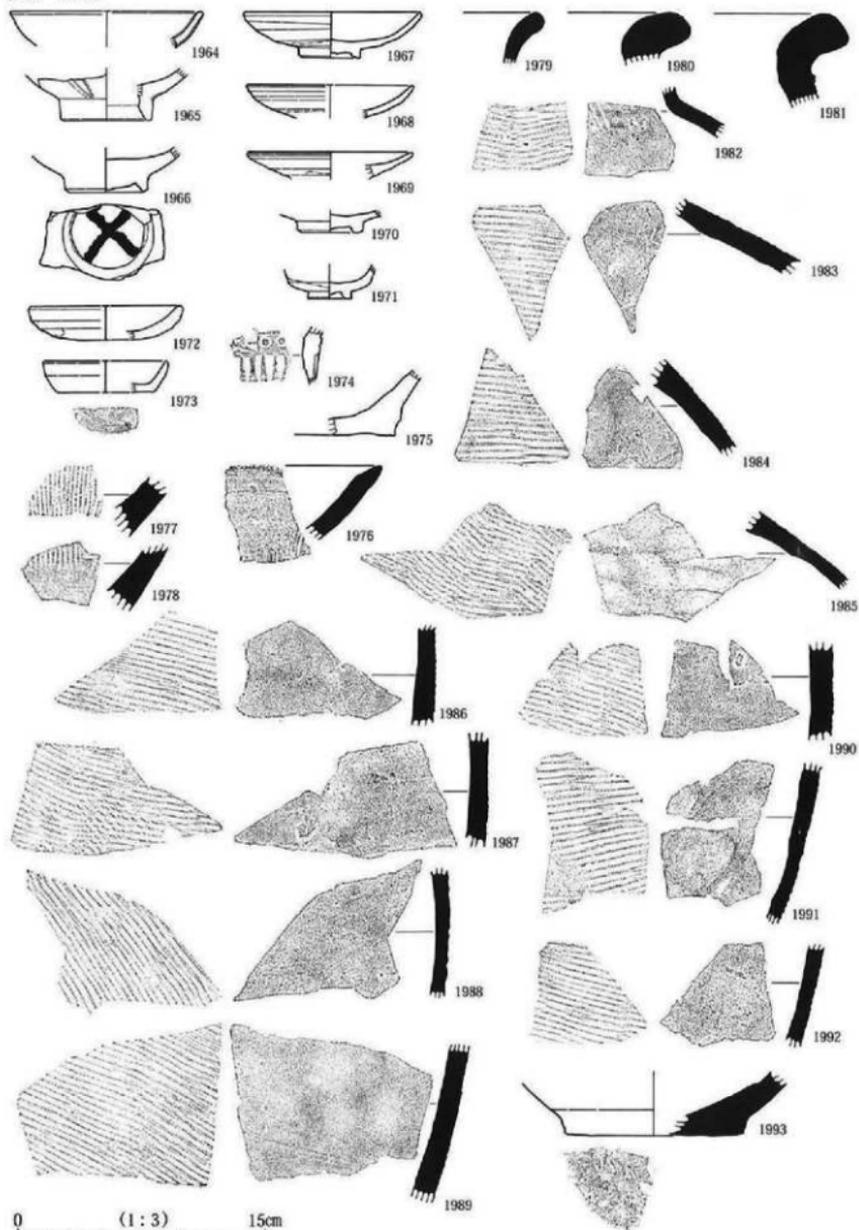
出土遺物 13 (第③圖4)



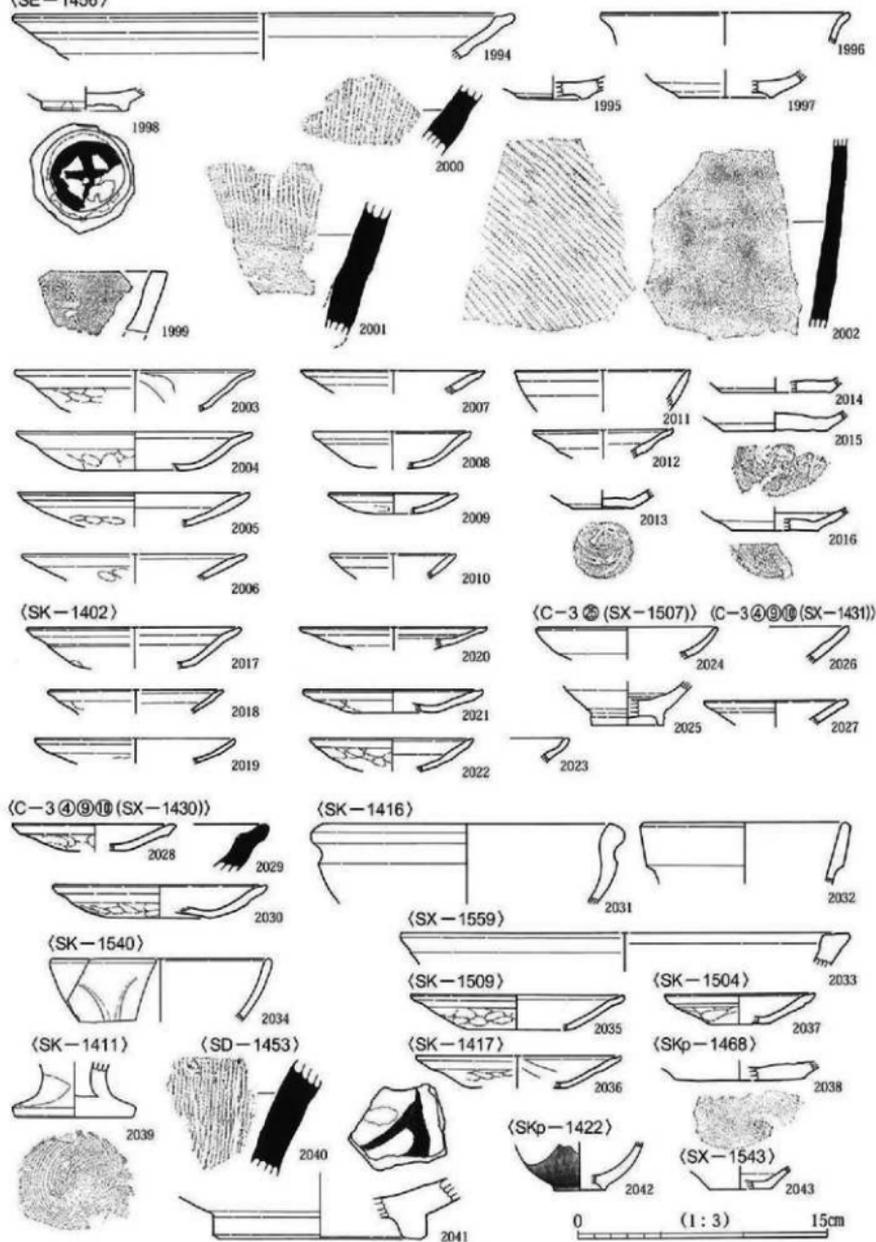
出土遺物 14 (第③面 5)



(SX-1470)

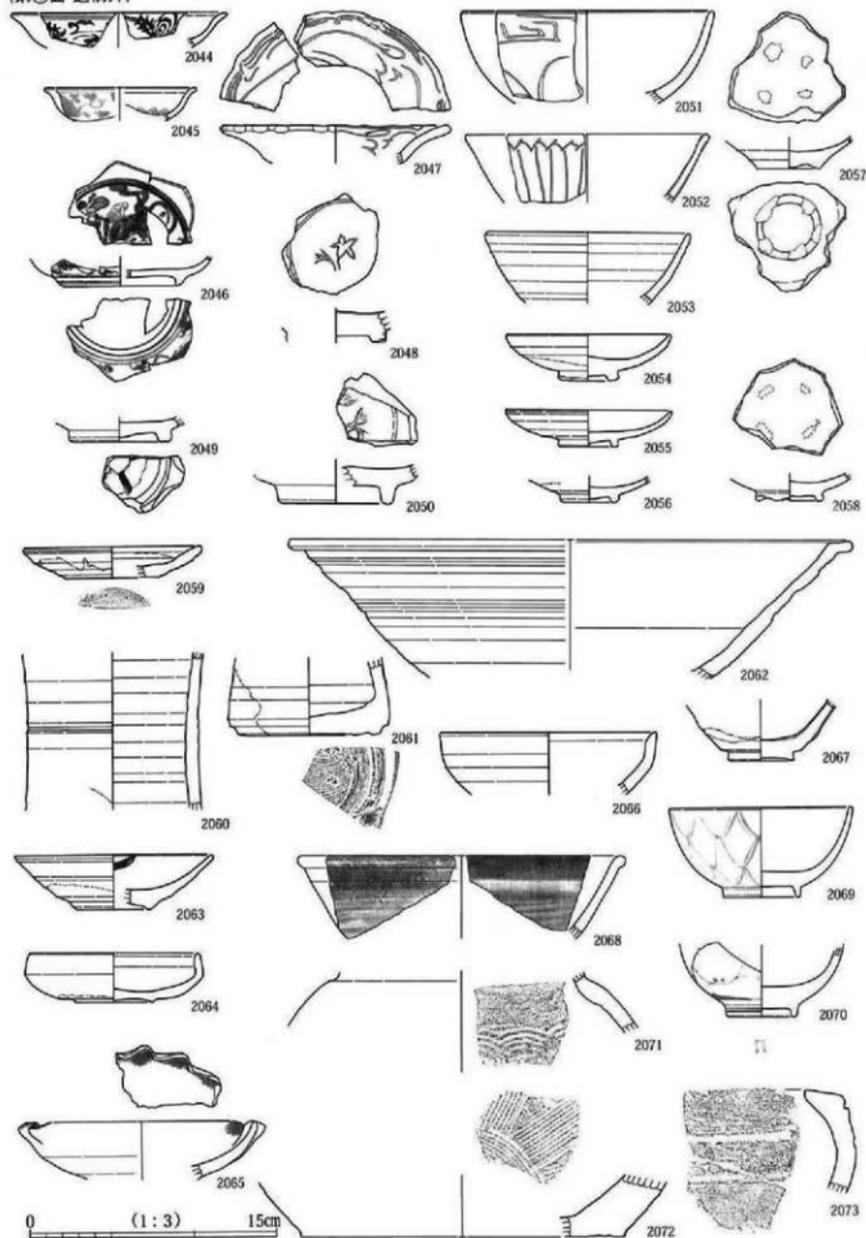


出土遺物 16 (第④面 1)

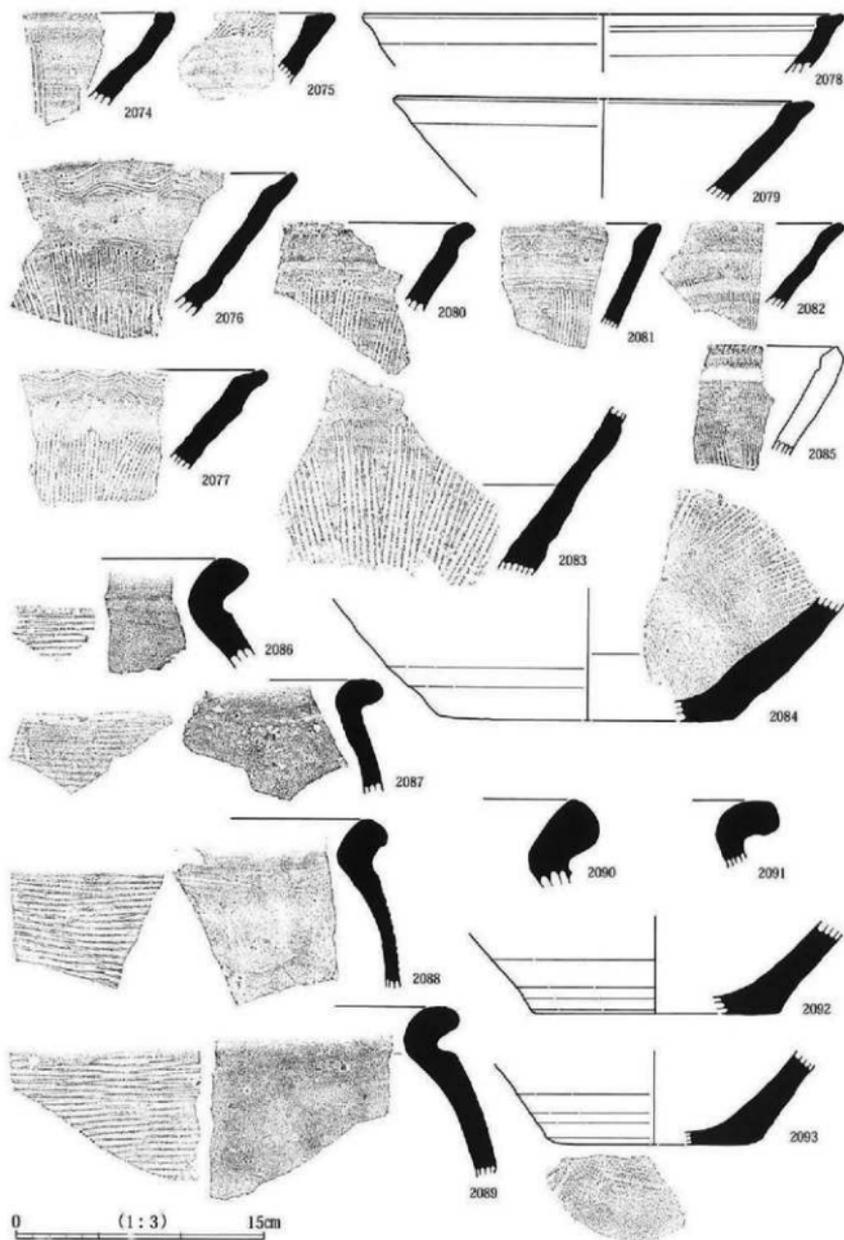


出土遺物 17 (第3圖2)

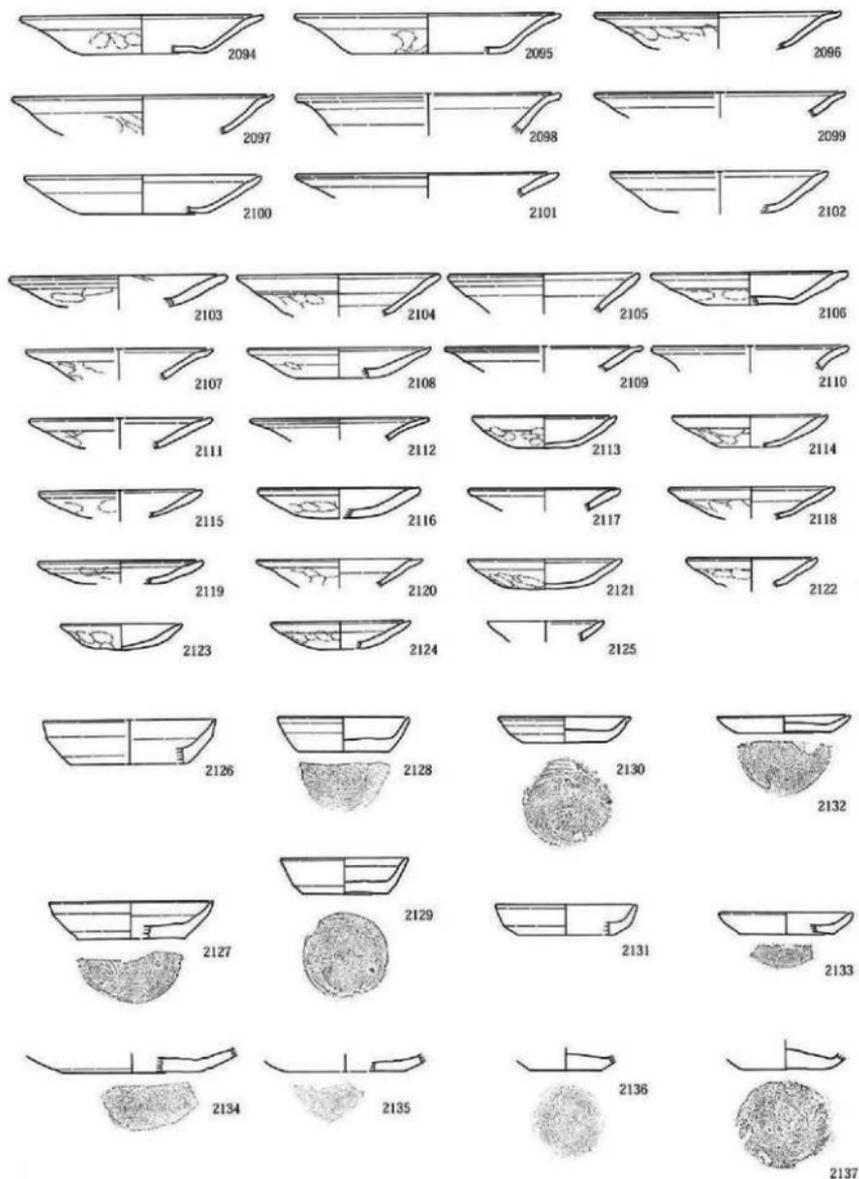
(第④面 遺構外)



出土遺物 18 (第④面 3)

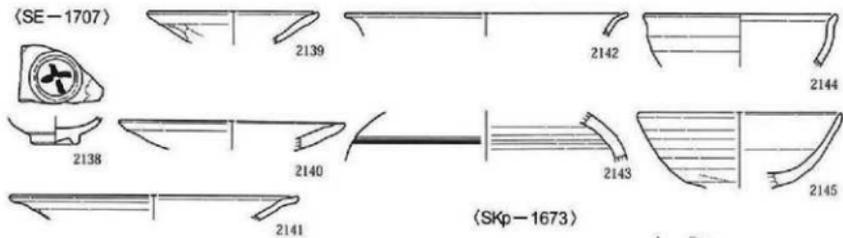


出土遺物 19 (第④面 4)

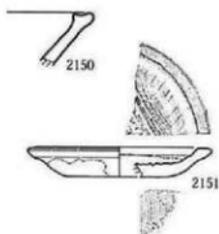
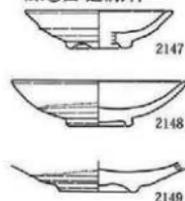


0 (1:3) 15cm

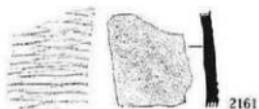
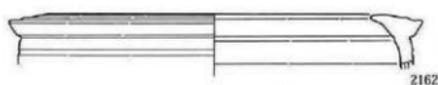
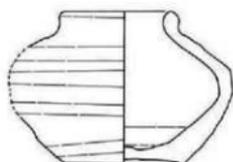
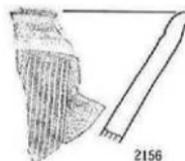
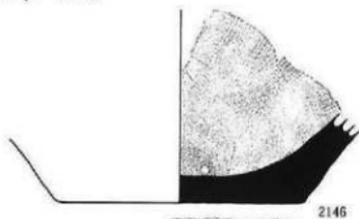
(SE-1707)



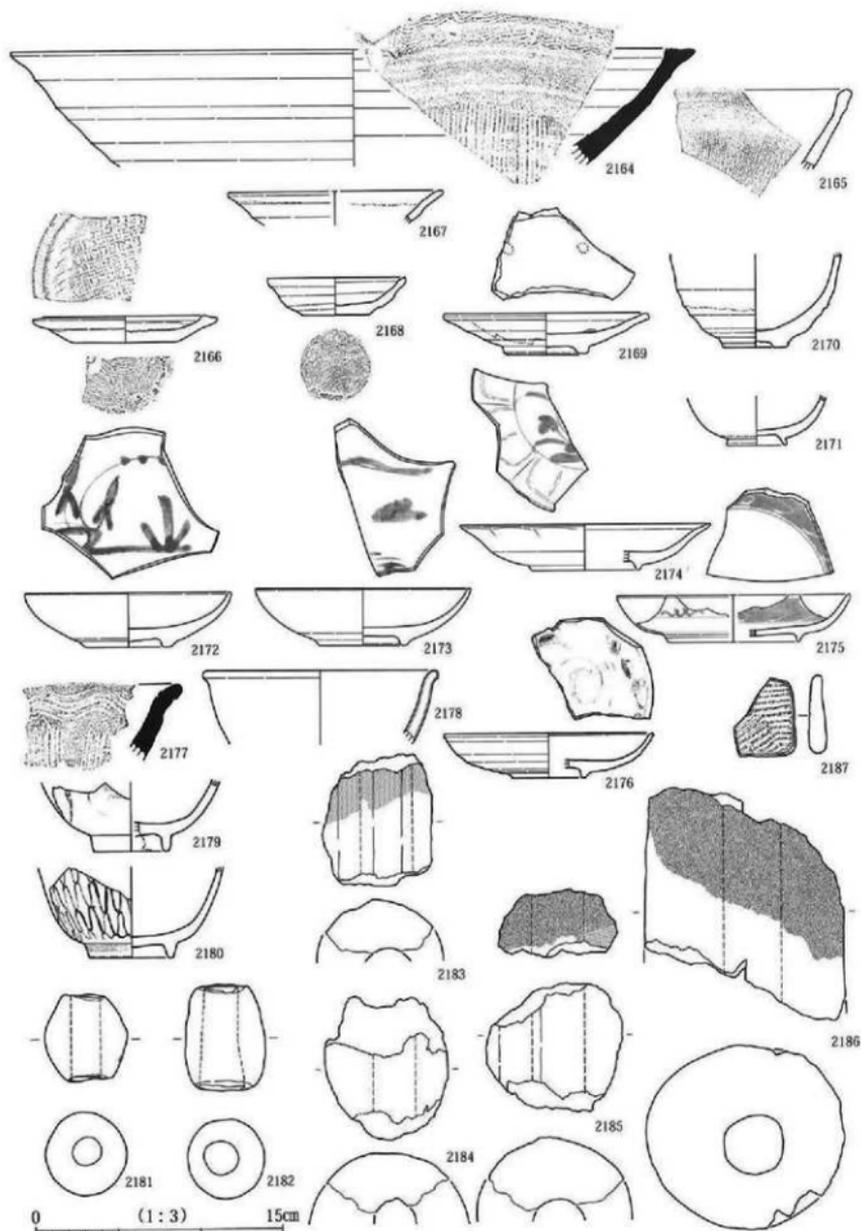
(第⑤面 遺構外)



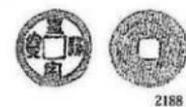
(SKp-1673)



0 (1:3) 15cm



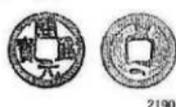
出土遺物 22 (その他)



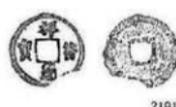
2188



2189



2190



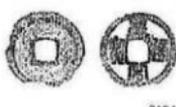
2191



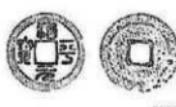
2192



2193



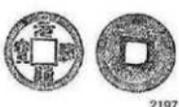
2194



2195



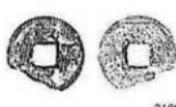
2196



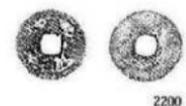
2197



2198



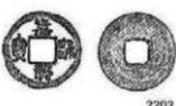
2199



2200



2201



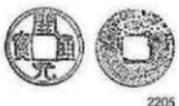
2202



2203



2204



2205



2206



2207



2208



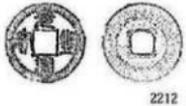
2209



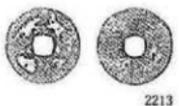
2210



2211



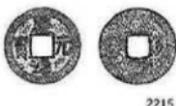
2212



2213



2214



2215



2216



2217



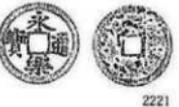
2218



2219



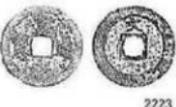
2220



2221



2222



2223

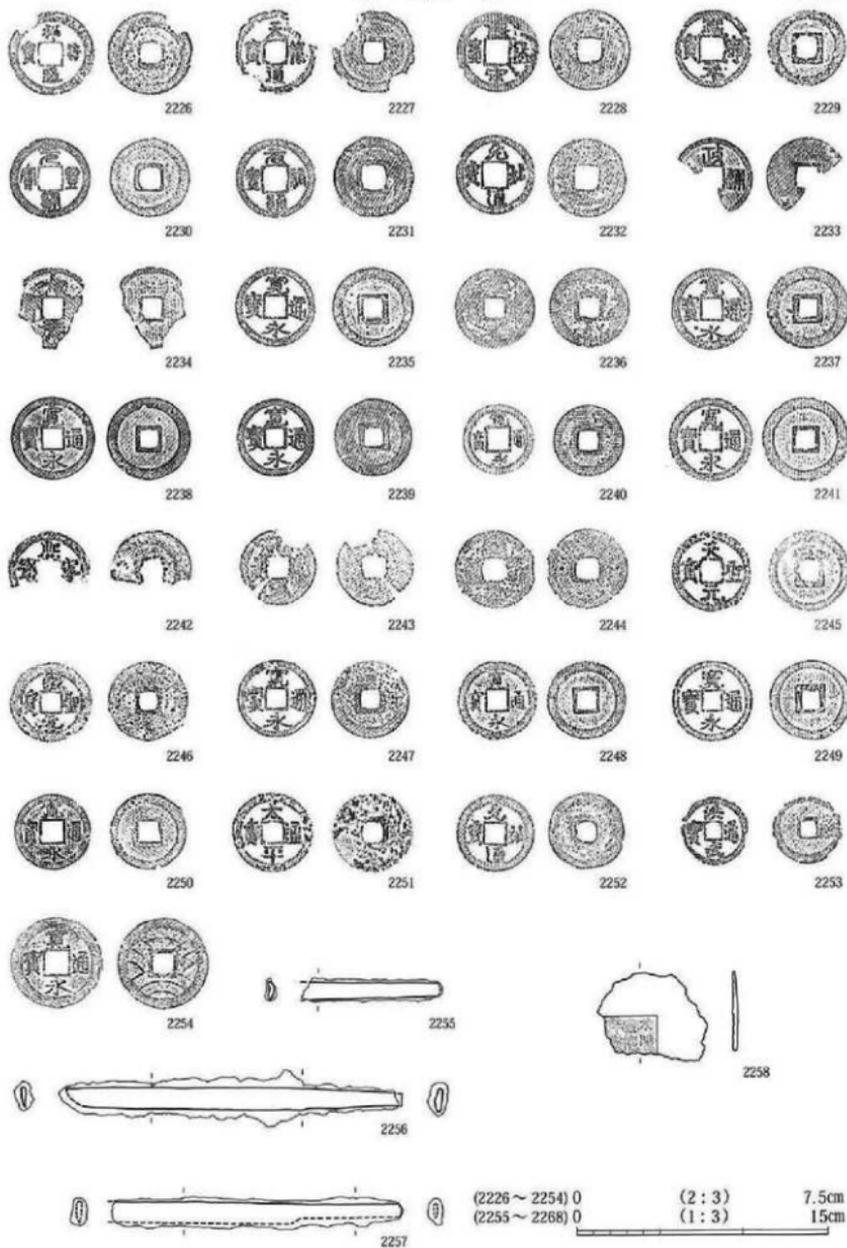


2224

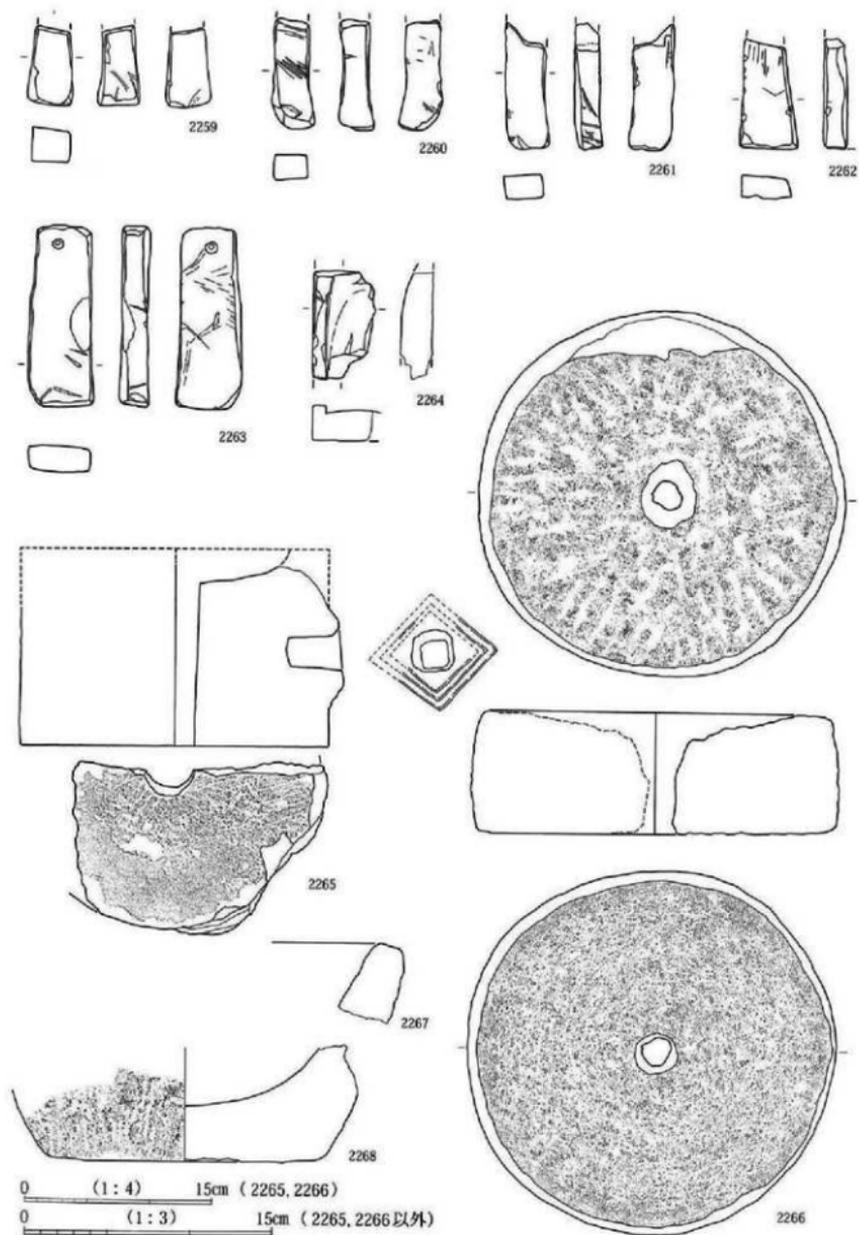


2225

0 (2:3) 7.5cm



出土遺物 24 (金屬製品 2)



出土遺物 25 (石製品)



柏崎町遺跡周辺航空写真

(1947年約 1 : 20,000左が北)

柏崎町遺跡 1



a. 遺跡遠景

(北西から)



b. 調査区遠景

(東から)



a. 南北ベルト層序

(北西から)



b. 表土割き開始

(北西から)



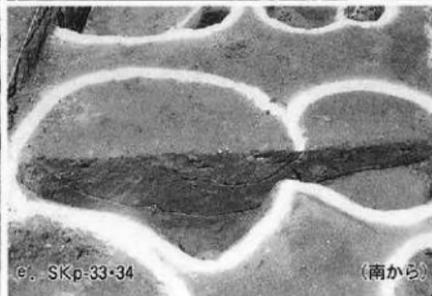
c. 作業風景

(北から)



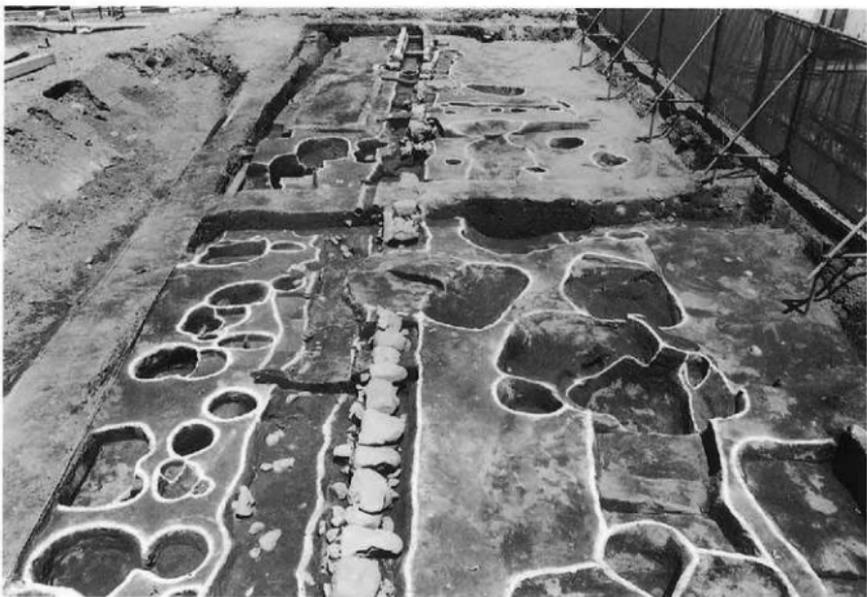
d. 石列組

(北西から)



e. SKD-33・34

(南から)





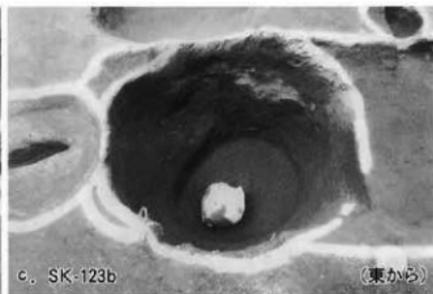
a. 第②下面完備状況

(南から)



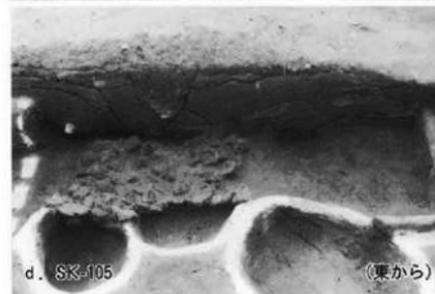
b. SK-117

(西から)



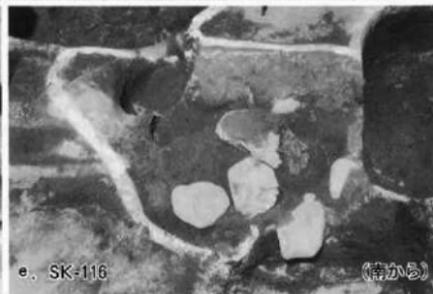
c. SK-123b

(東から)



d. SK-105

(東から)



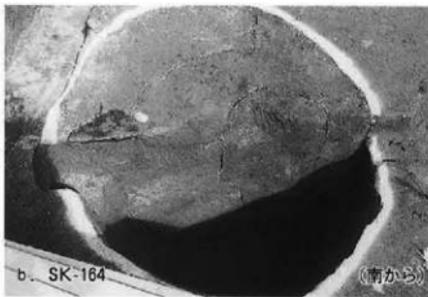
e. SK-116

(南から)

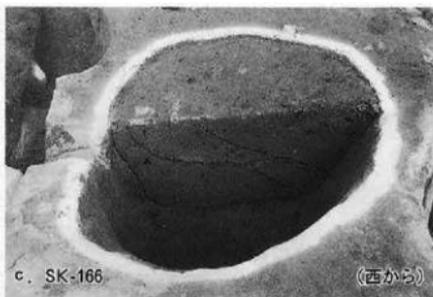


a. 第③面完掘状況

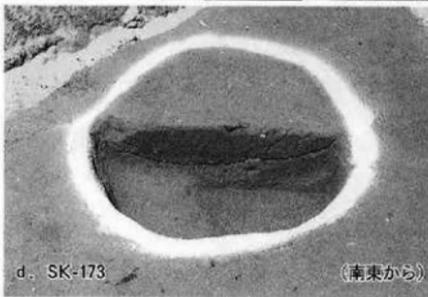
(北から)



(南から)



(西から)



(南東から)

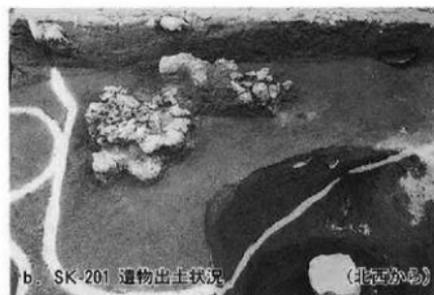


(北から)



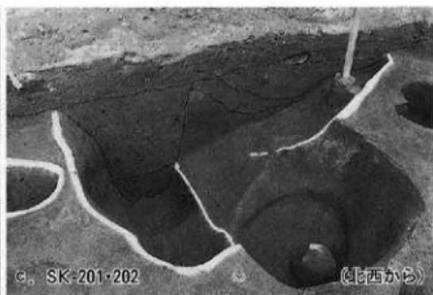
a. 第③上面完掘状況

(南から)



b. SK-201 遺物出土状況

(北西から)



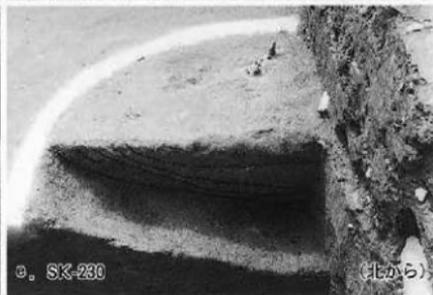
c. SK-201・202

(北西から)



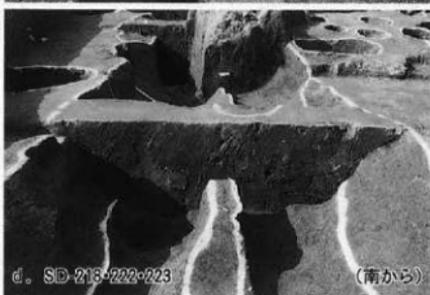
d. SK-217

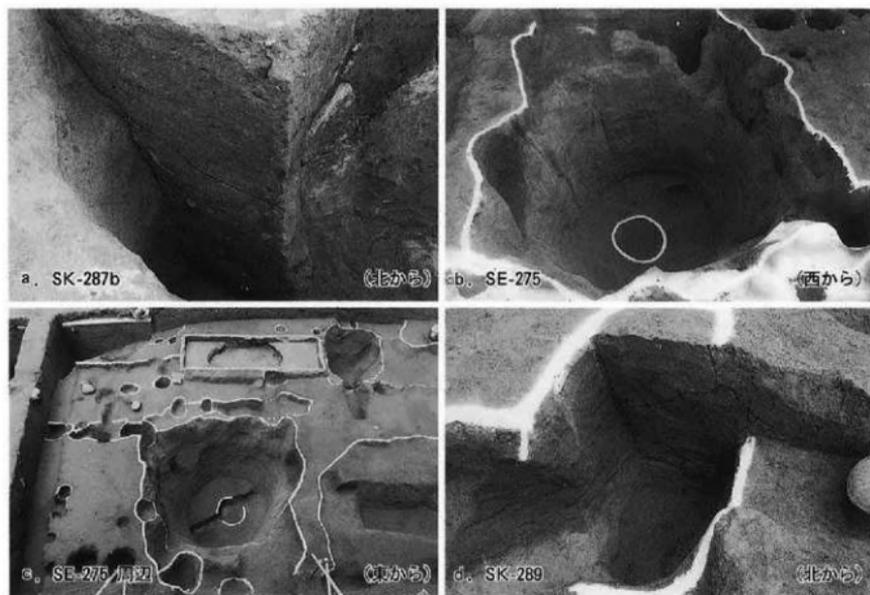
(南から)



e. SK-230

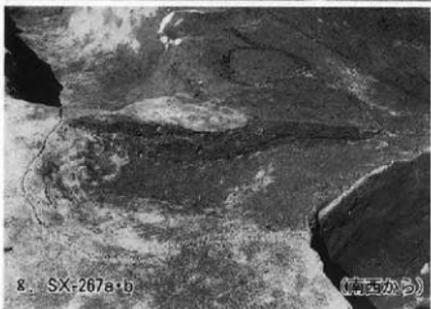
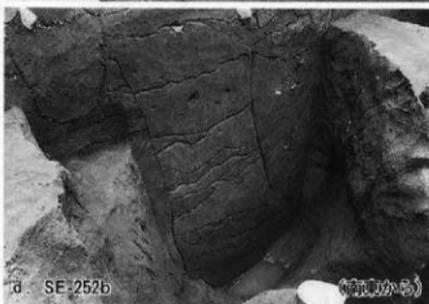
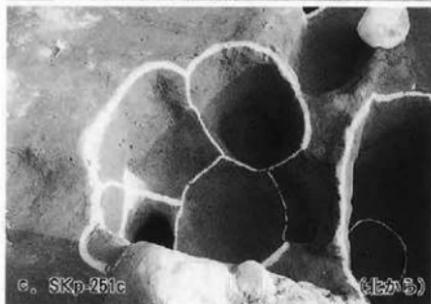
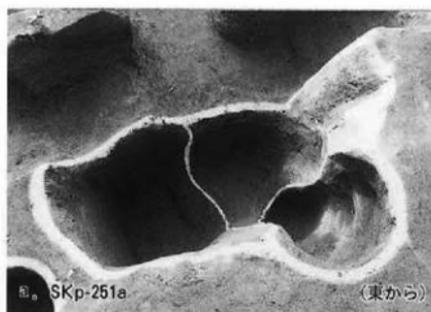
(北から)





e. 第③下面完掘状況

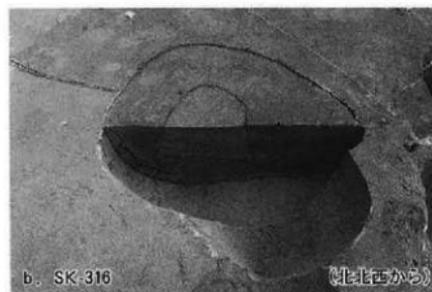
(南東から)





a. 第④面完掘状況

(北から)



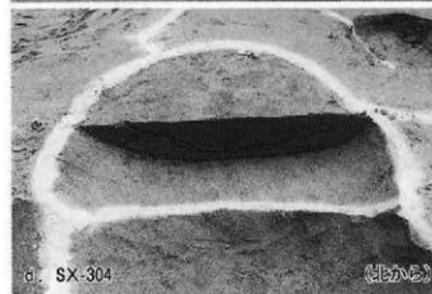
b. SK-316

(北北西から)



c. SX-303

(南から)



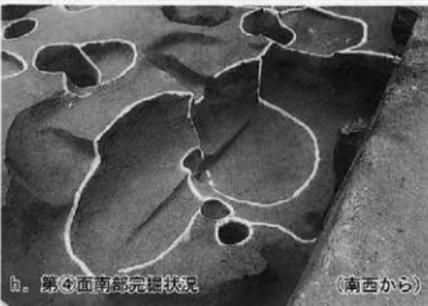
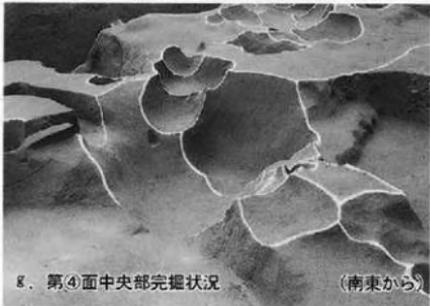
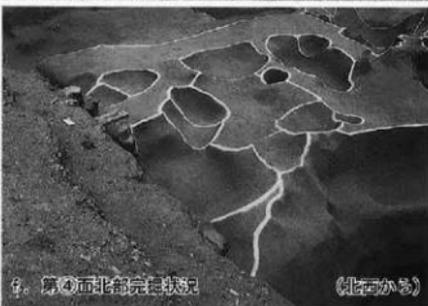
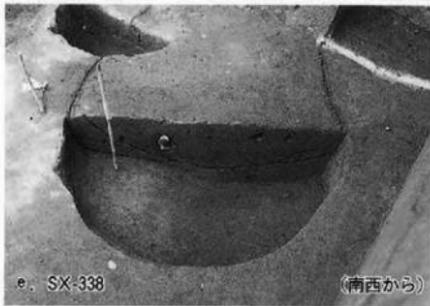
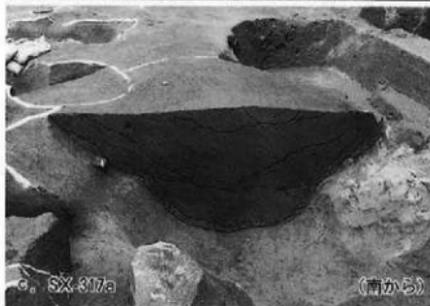
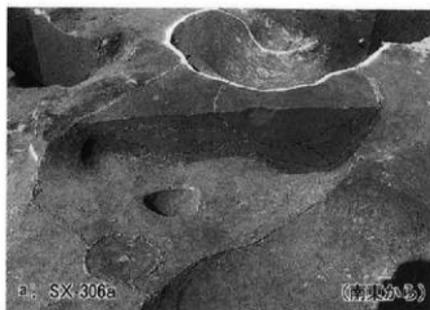
d. SX-304

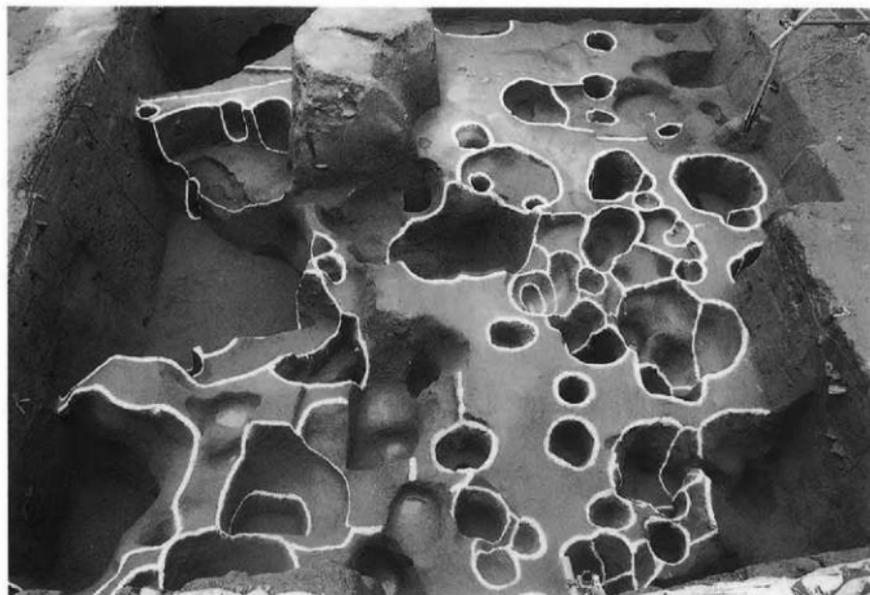
(北から)



e. SX-305

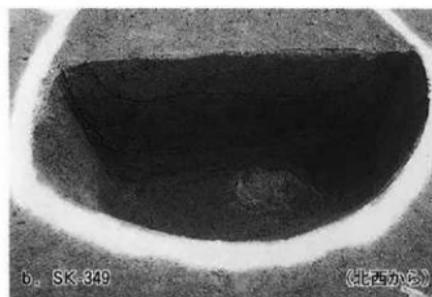
(南から)





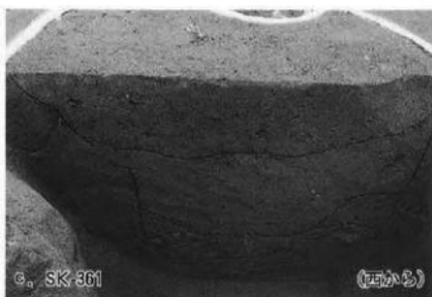
a. 第④上面完掘状況

(南から)



b. SK 349

(北西から)



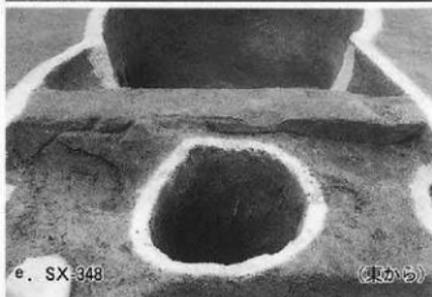
c. SK 361

(西から)



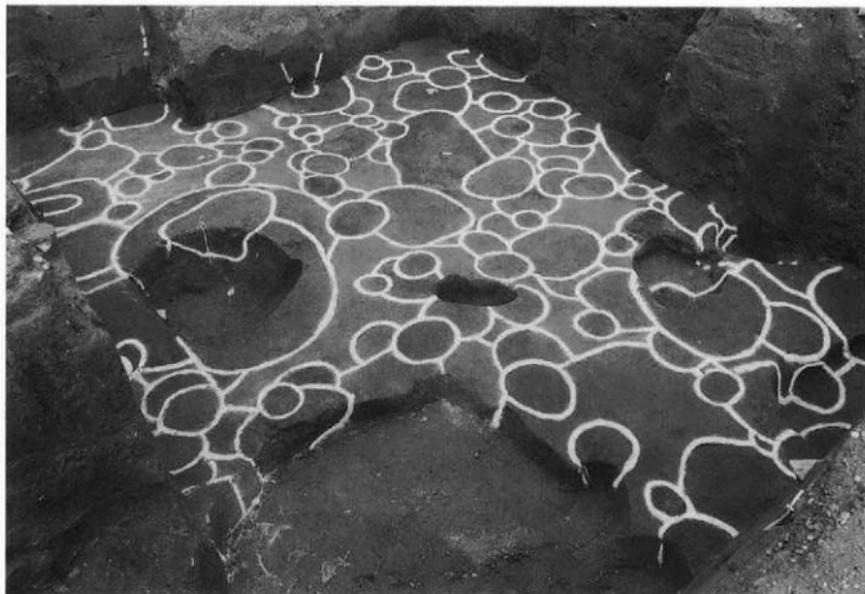
d. SK 411

(東から)



e. SX 348

(東から)



a. 第⑤～⑥面遺構検出状況

(北西から)



b. SX-500 遺物検出状況

(西から)



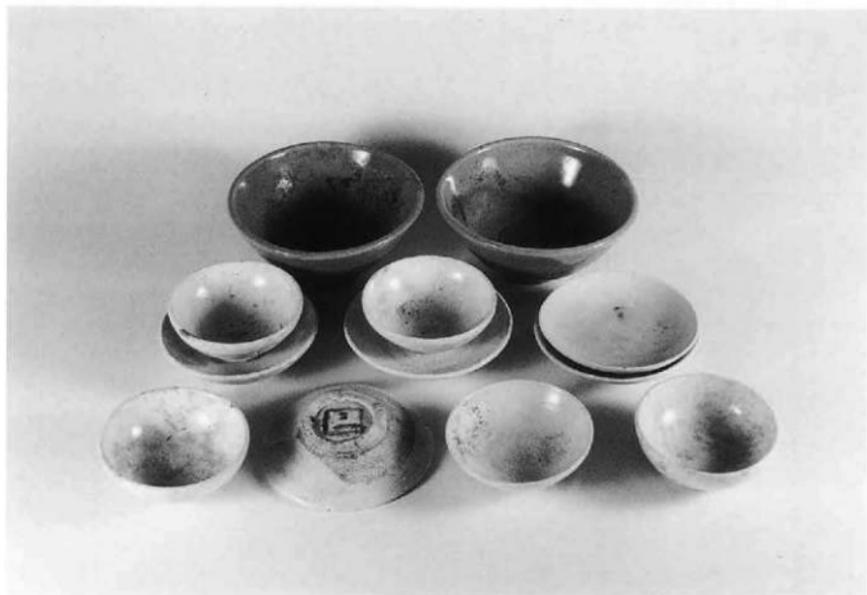
a. 第⑥面完掘状況

(北西から)

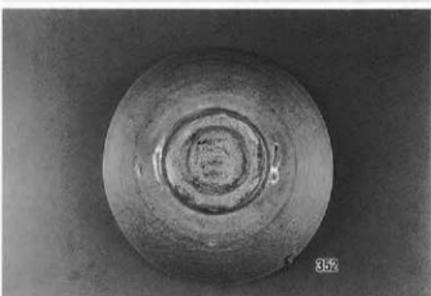
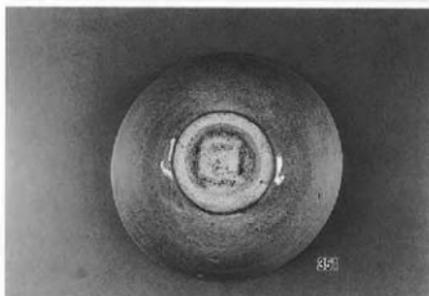


b. 南区西壁層序

(東から)

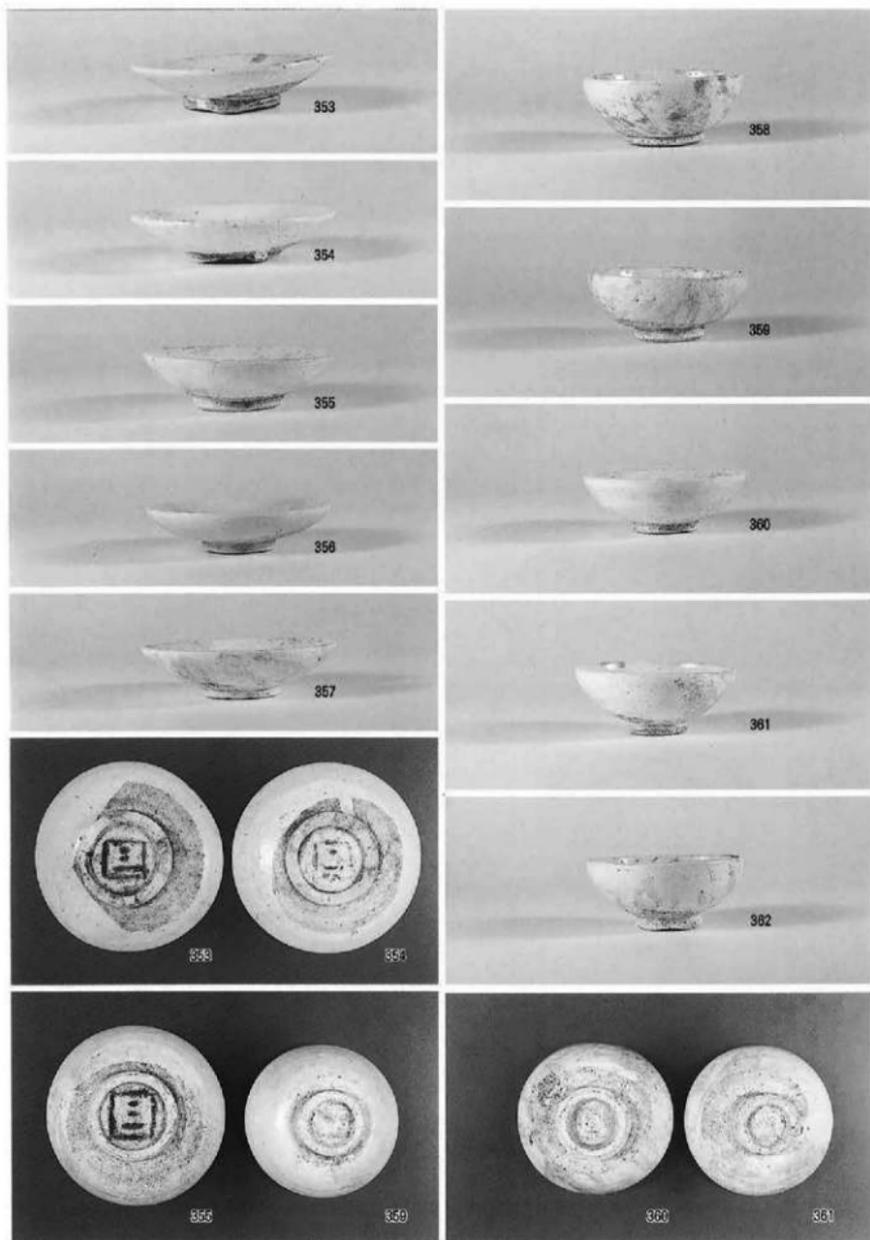


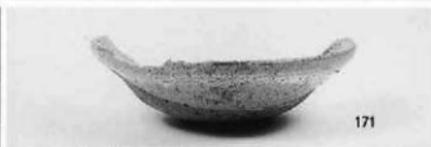
a. 土器・陶磁器類 1 (SX-500 1)

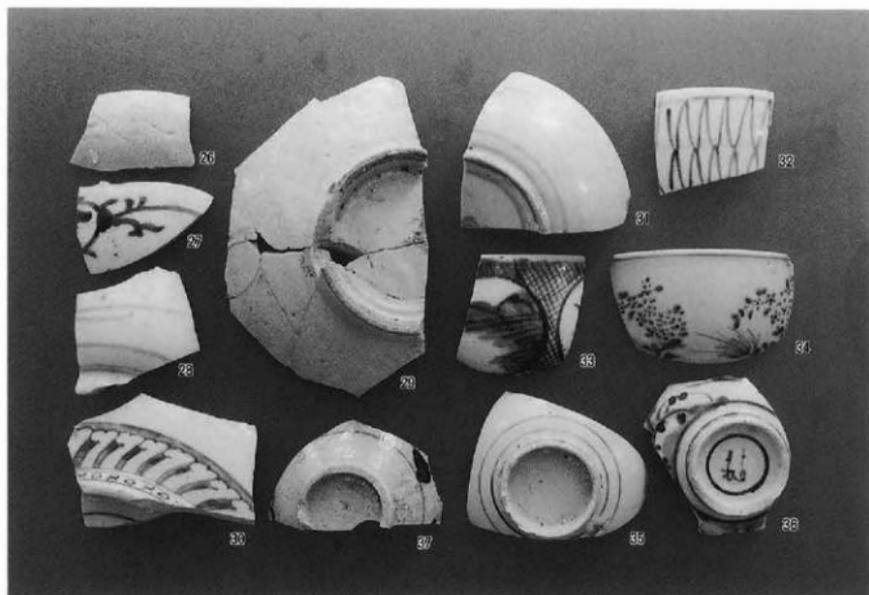


b. 土器・陶磁器類 2 (SK-500 2)

(約 1 : 3)







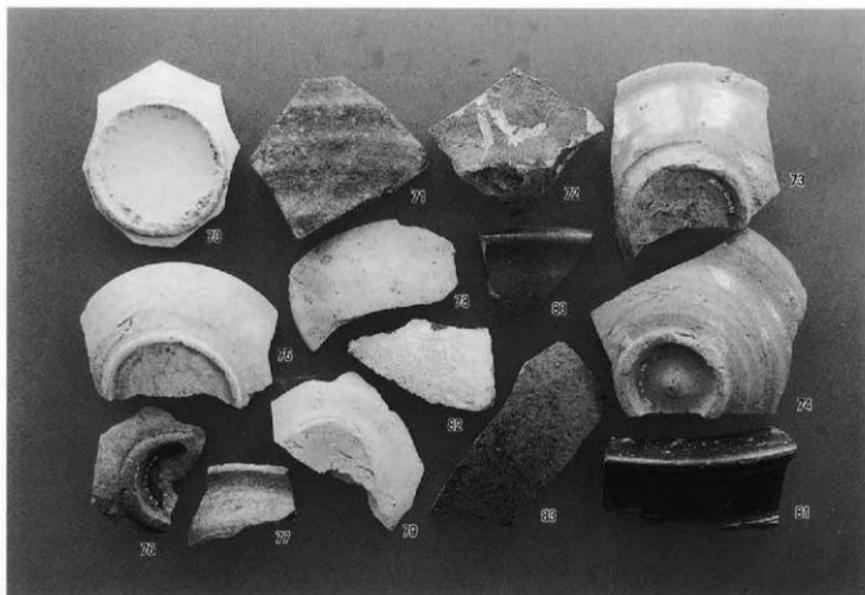
a. 土器・陶磁器類 5 [外面]

(約 1 : 2)



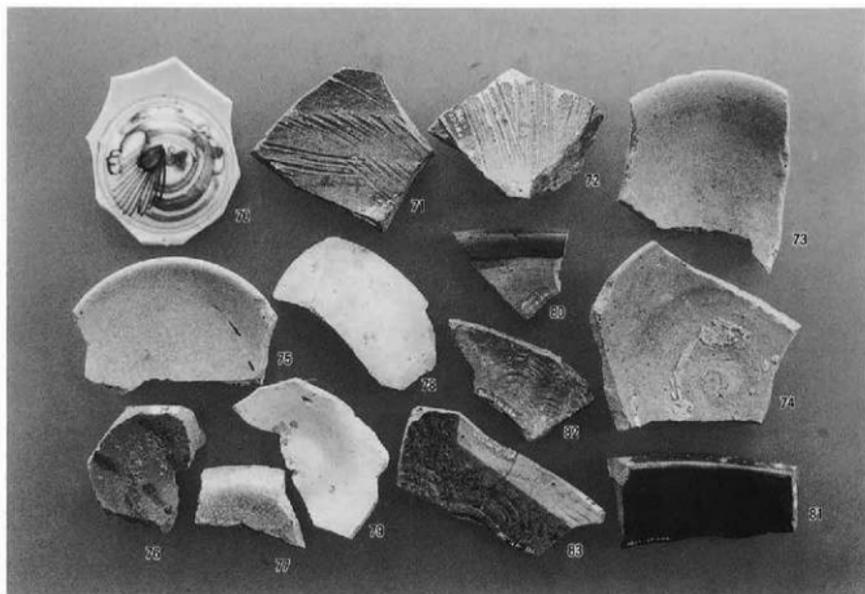
b. 土器・陶磁器類 5 [内面]

(約 1 : 2)



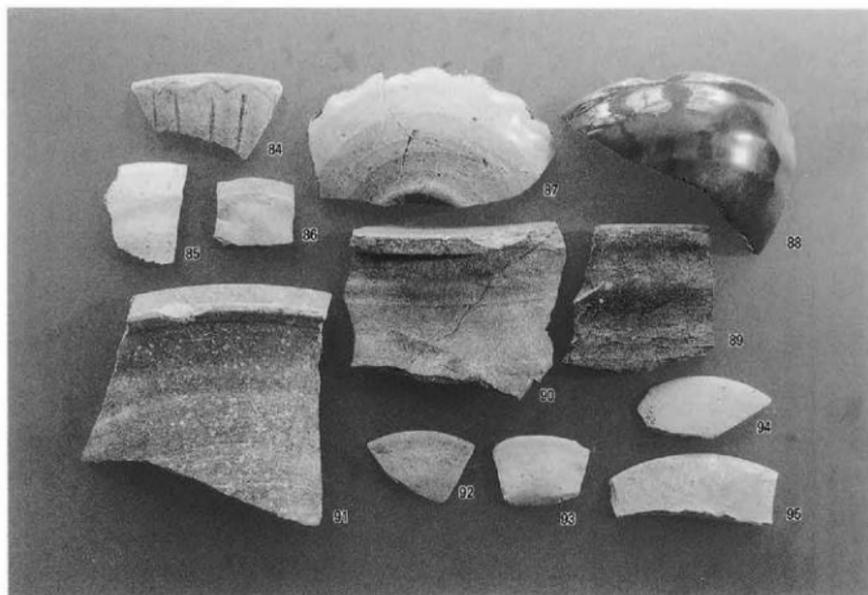
a. 土器・陶磁器類6 [外面]

(約1:2)



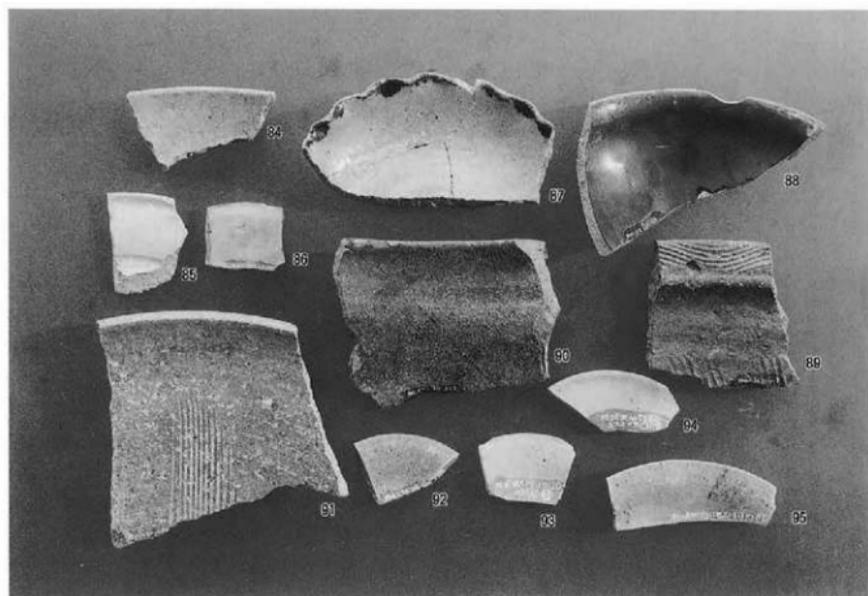
b. 土器・陶磁器類6 [内面]

(約1:2)



a. 土器・陶磁器類 7 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 7 [内面]

(約 1 : 2)



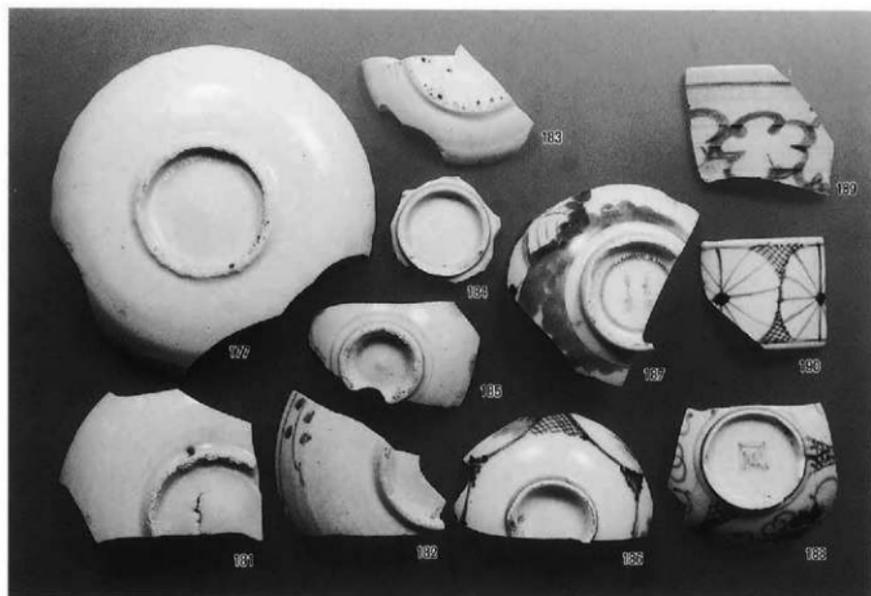
a. 土器・陶磁器類 8 [外面]

(約 1 : 2)



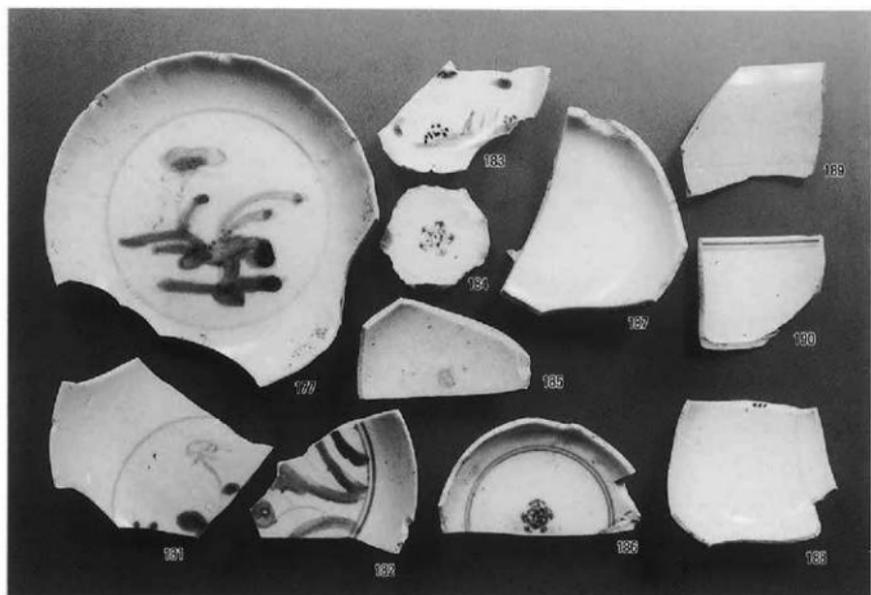
b. 土器・陶磁器類 8 [内面]

(約 1 : 2)



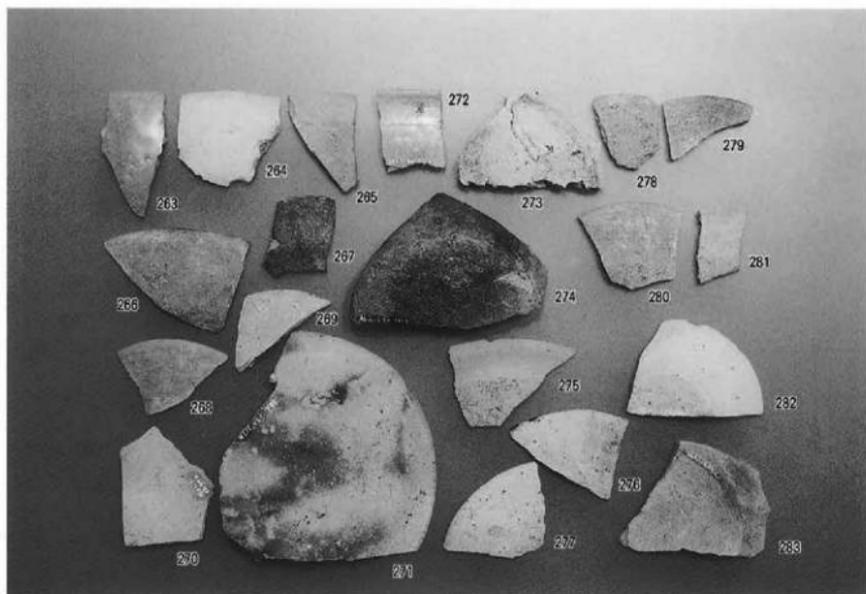
a. 土器・陶磁器類 9 [外面]

(約 1 : 2)



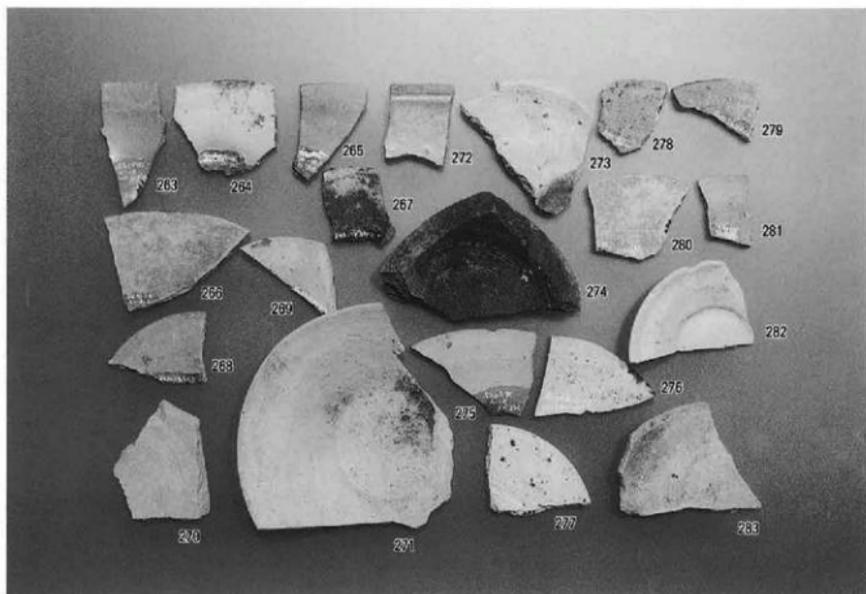
b. 土器・陶磁器類 9 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類10 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類10 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類11 [外面]

(約1:2)



b. 土器・陶磁器類11 [内面]

(約1:2)



a. 土器・陶磁器類12 [外面]

(約1:2)



b. 土器・陶磁器類12 [内面]

(約1:2)



a. 土器・陶磁器類13 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類13 [内面]

(約 1 : 2)



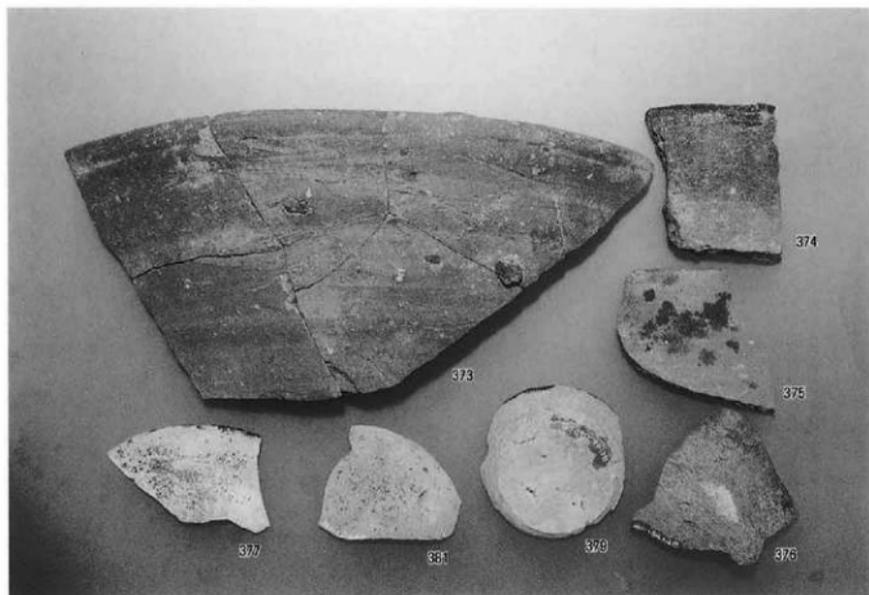
a. 土器・陶磁器類14 [外面]

(約 1 : 2)



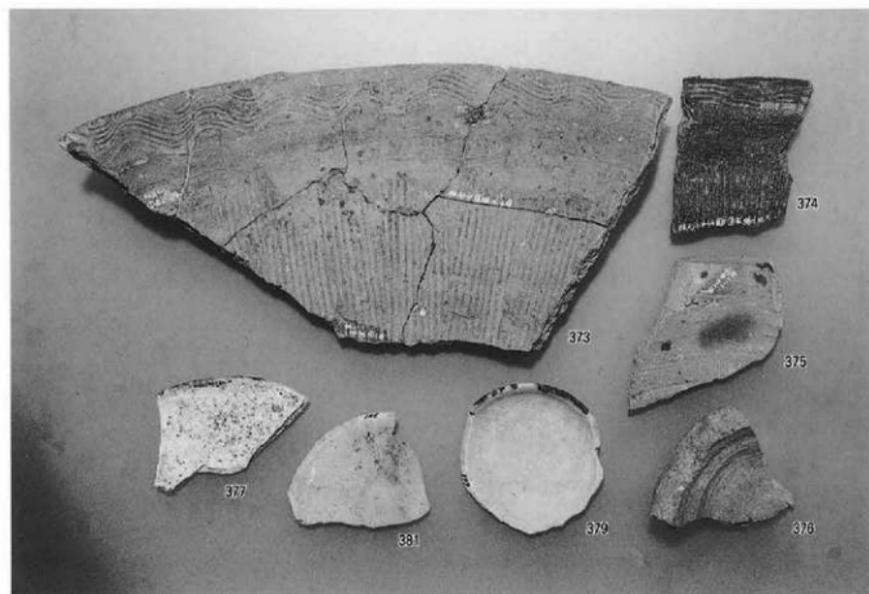
b. 土器・陶磁器類14 [内面]

(約 1 : 2)



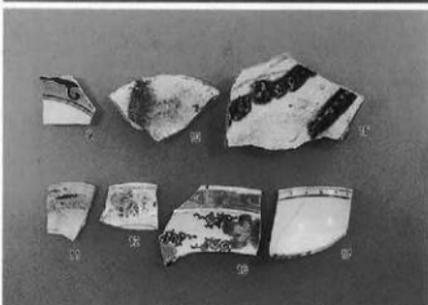
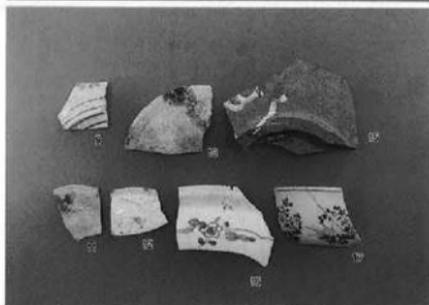
a. 土器・陶磁器類15 [外面]

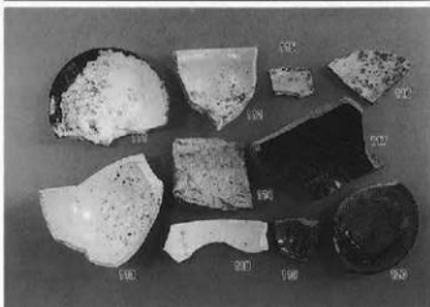
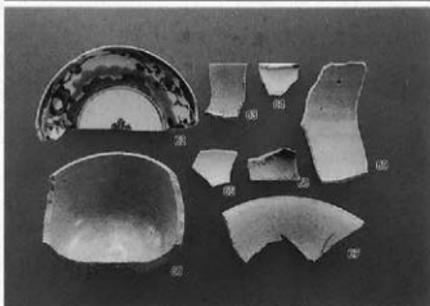
(約 1 : 2)

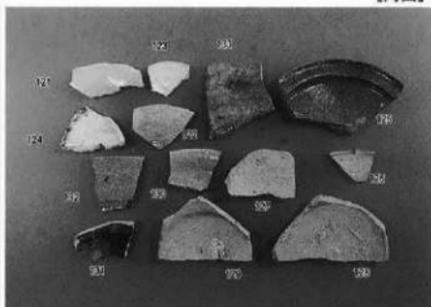
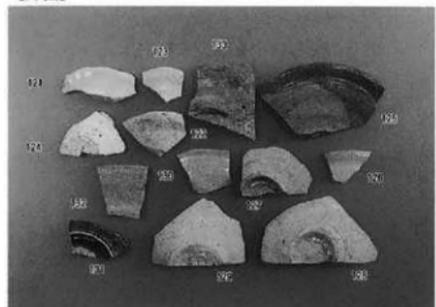


b. 土器・陶磁器類15 [内面]

(約 1 : 2)

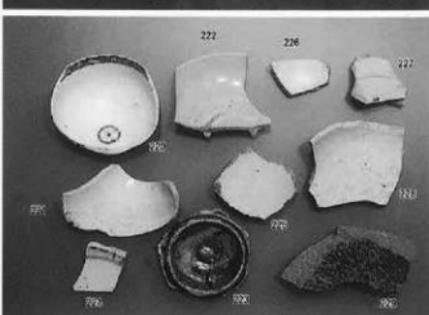
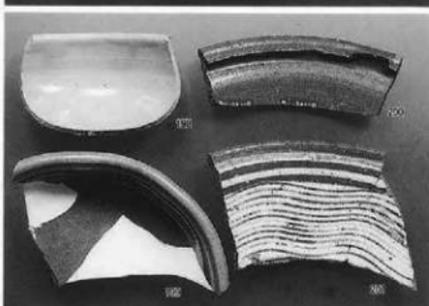
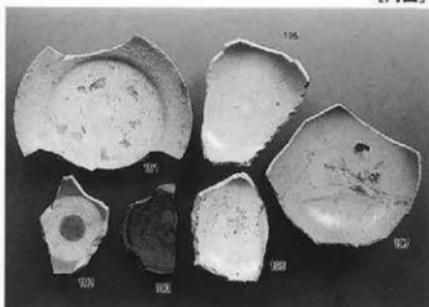
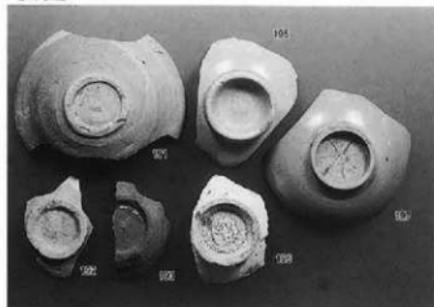






A 1 - I 区 31

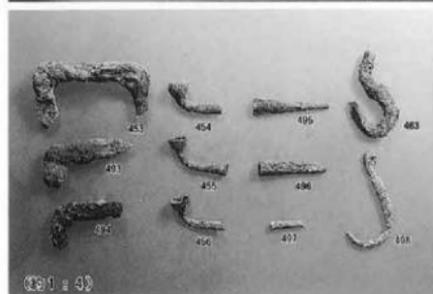
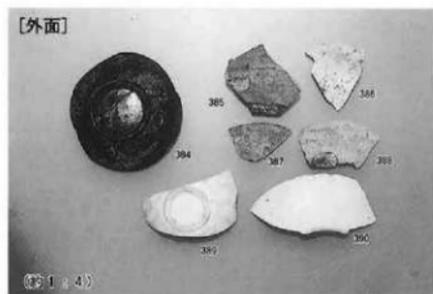
[外面]



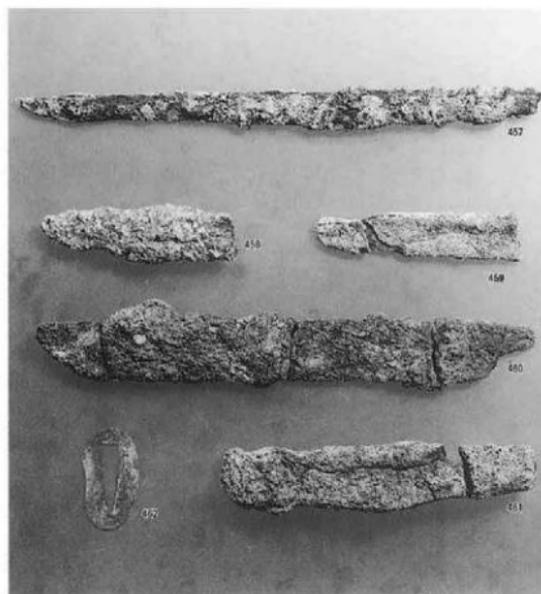
〔外面〕

〔内面〕



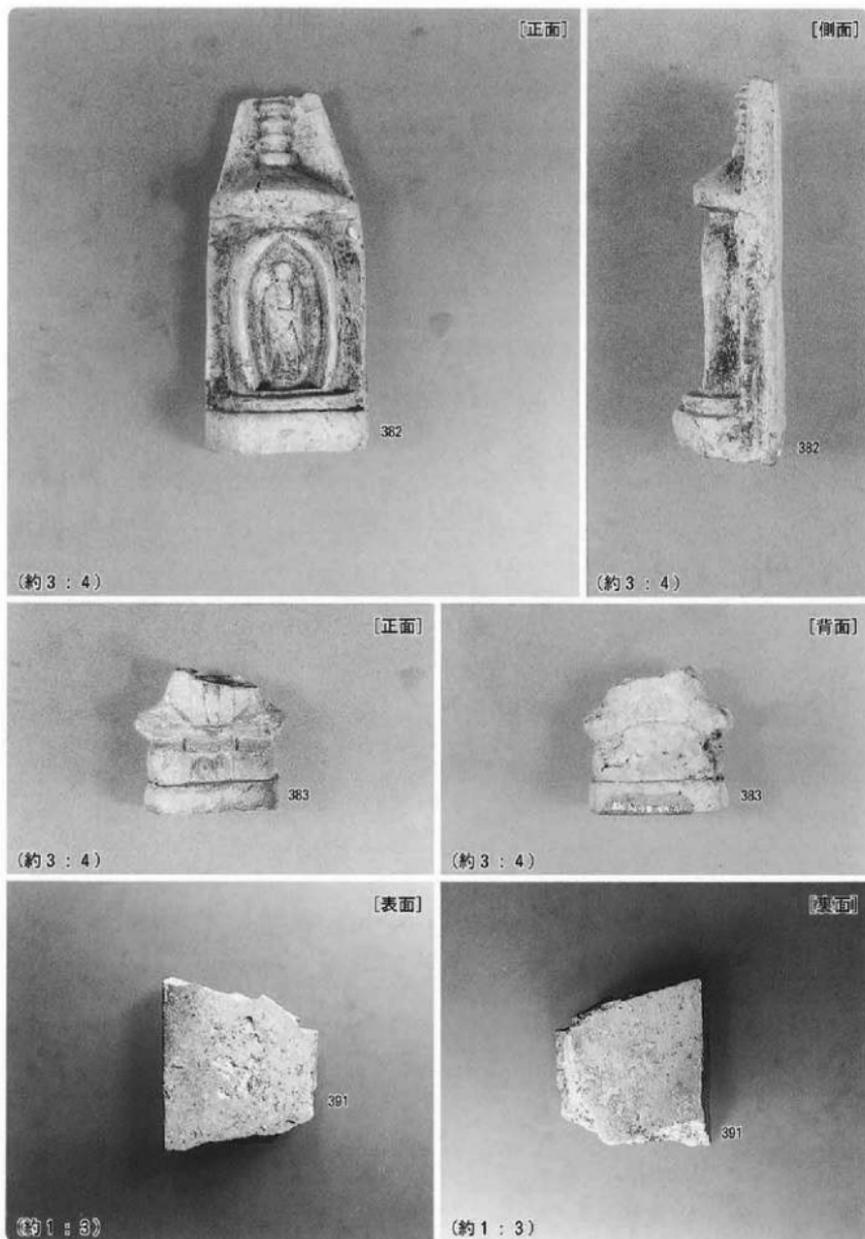


a. 土器・陶磁器類21 鏝・煙管・鉄釘ほか



b. 刀子・切刃

(約1 : 2) c. SX-116出土ムシロ(約1 : 1)





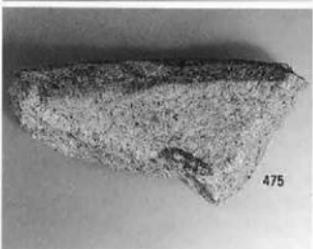
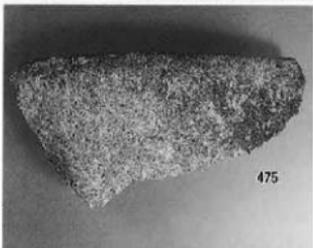
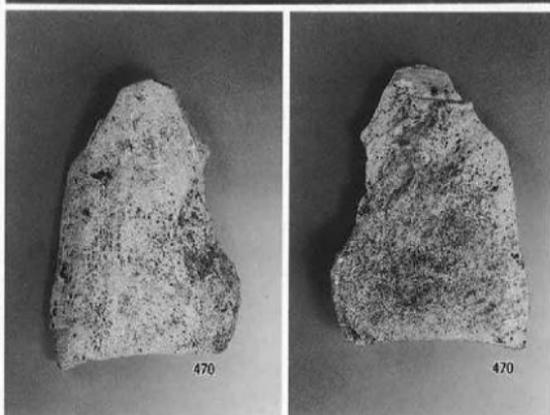
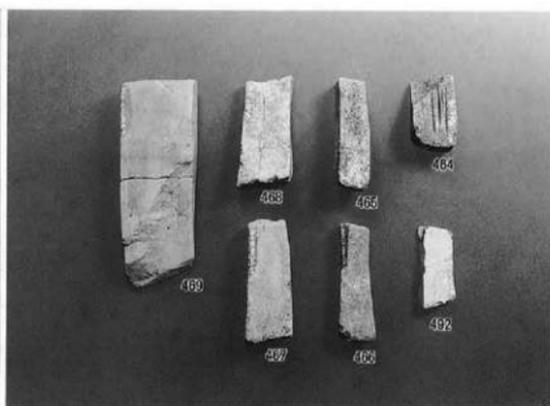
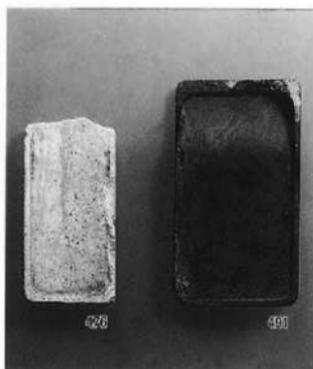
a. SX-3出土鉄文字德利(1)

(約1:3)



b. SX-198 (左)・SX-3 (右) 出土鉄文字德利(2)

(約1:3)



石製品・羽口

(約 1 : 3)

[上面]



472

[上面]



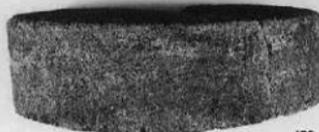
473

[側面]



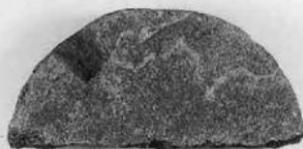
472

[側面]



473

[下面]



472

[下面]



473

[上面]



471

[下面]



471

[上面]

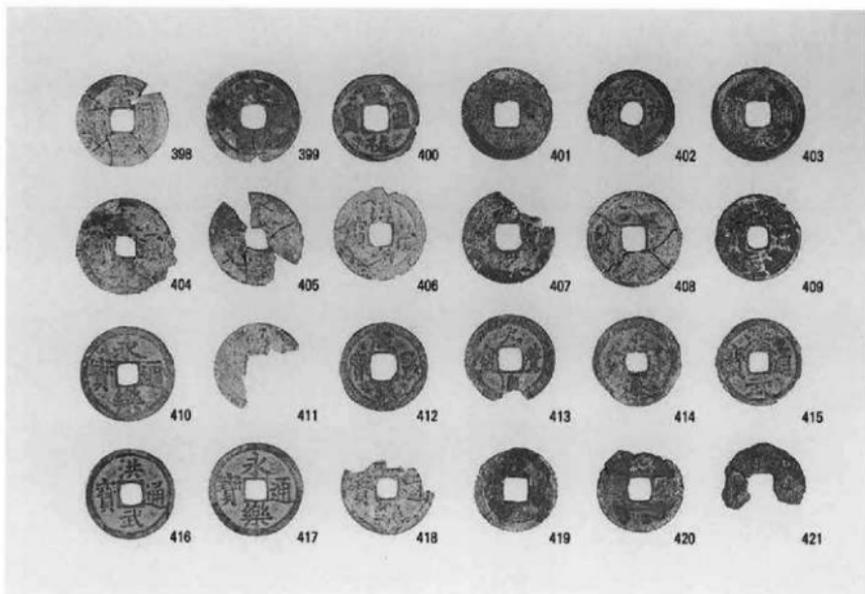


474

[下面]

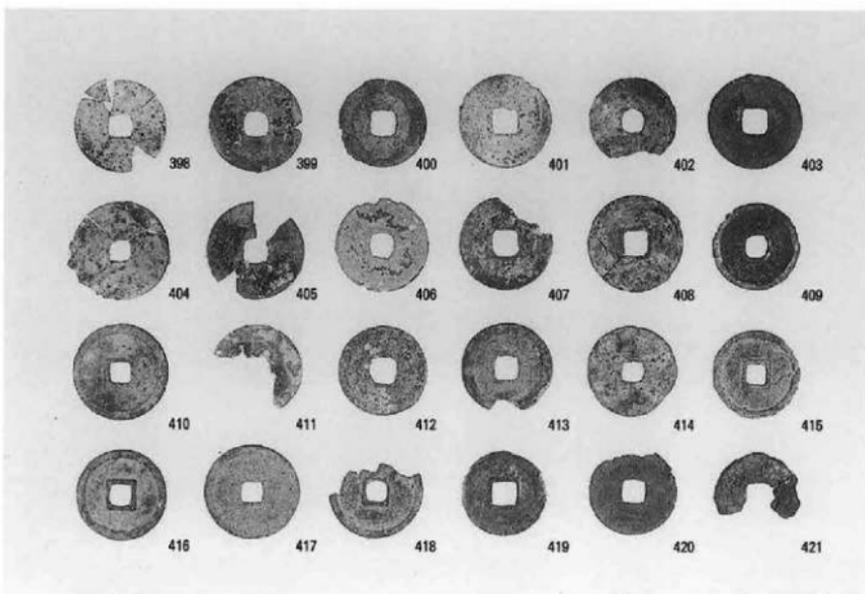


474



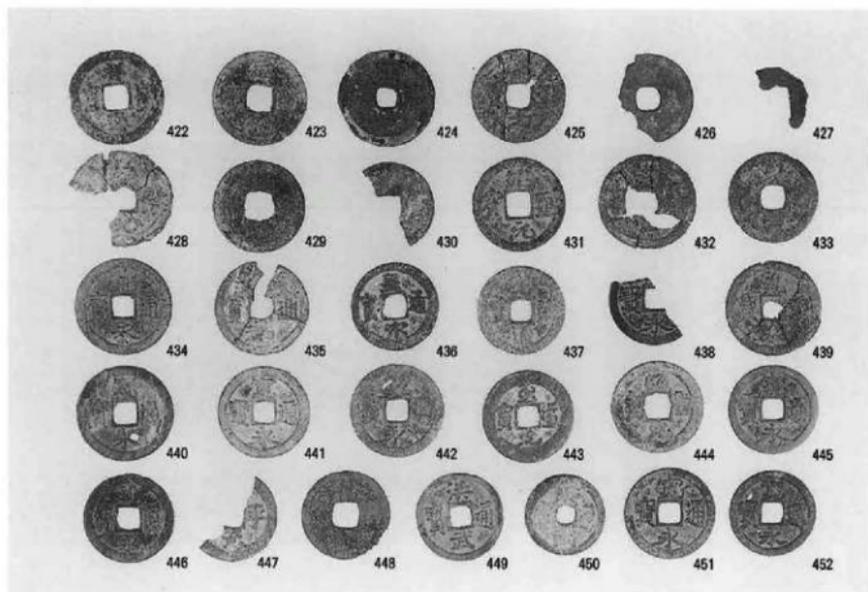
a. 錢 貨 1 [正面]

(約 4 : 5)



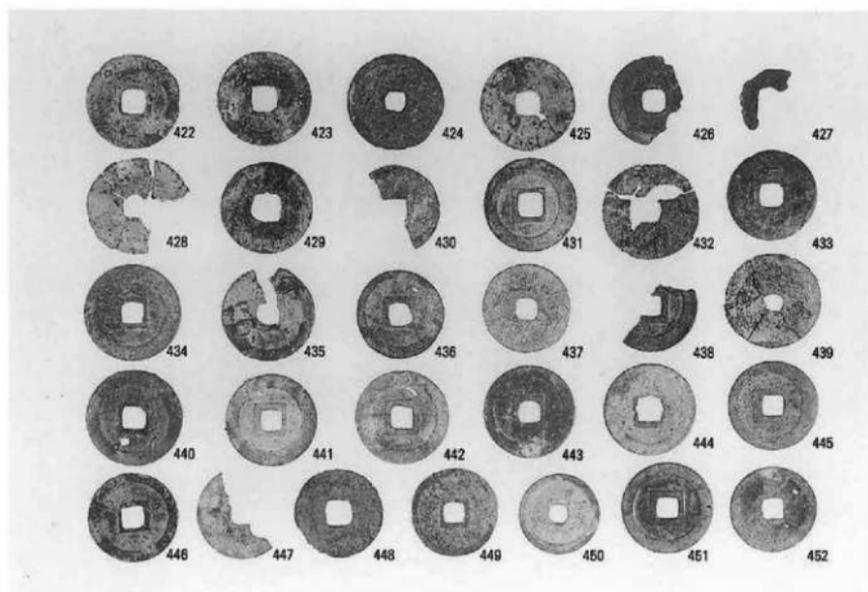
b. 錢 貨 1 [背面]

(約 4 : 5)



a. 錢 貨2 [正面]

(約 4 : 5)



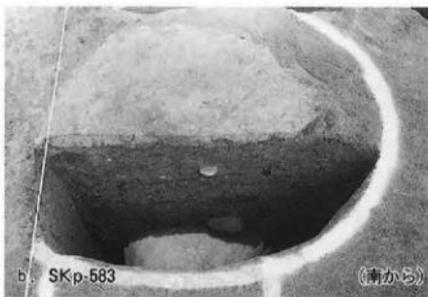
b. 錢 貨2 [背面]

(約 4 : 5)



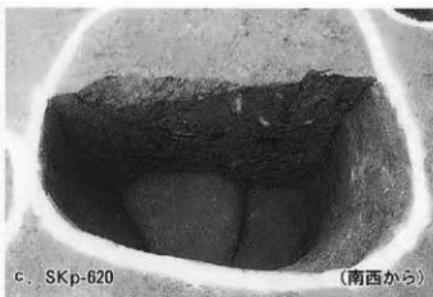
a. 第③面完掘状況

(南から)



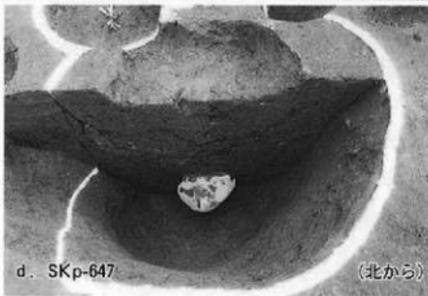
b. SKp-583

(南から)



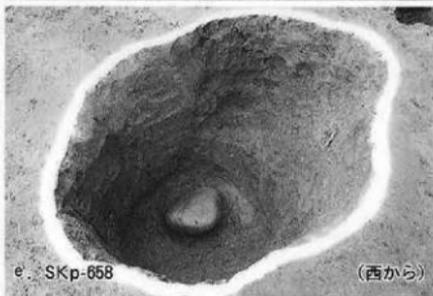
c. SKp-620

(南西から)



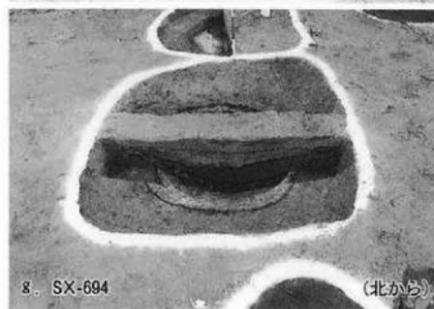
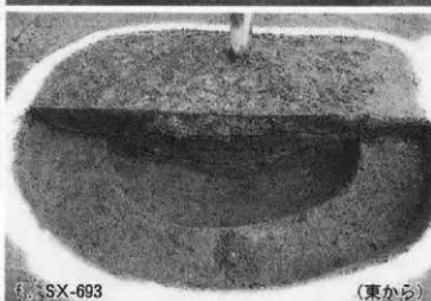
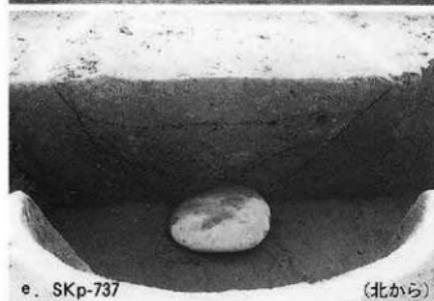
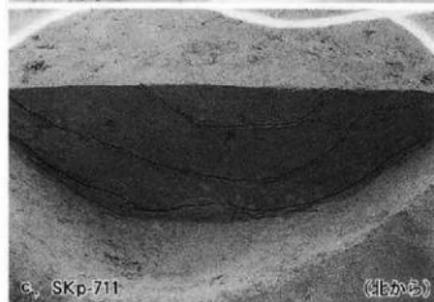
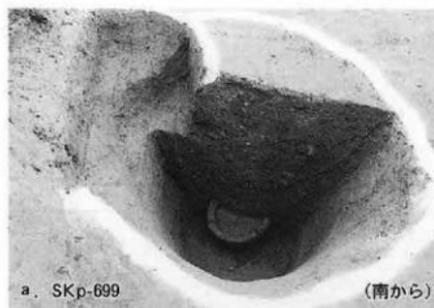
d. SKp-647

(北から)



e. SKp-658

(西から)





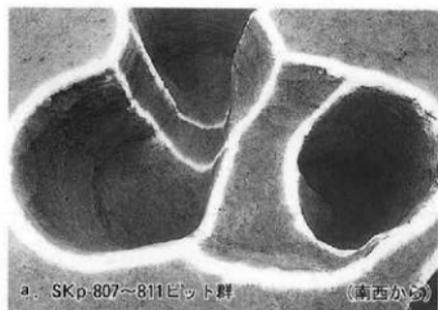
a. 第④面完無状況

(南から)

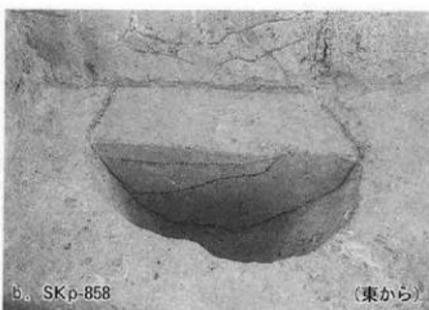


b. 第④面南区 (SB-11) 完掘状況

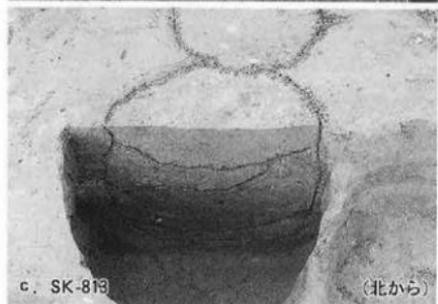
(西から)



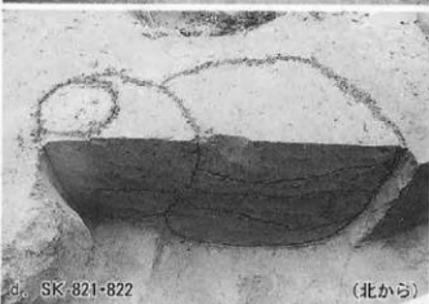
a. SKp-807~811ヒット群 (南西から)



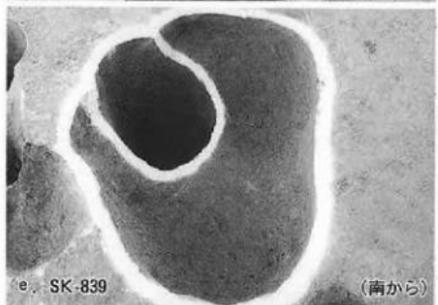
b. SKp-858 (東から)



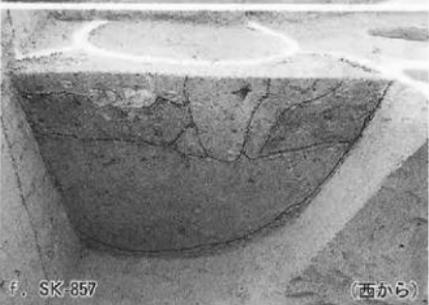
c. SK-813 (北から)



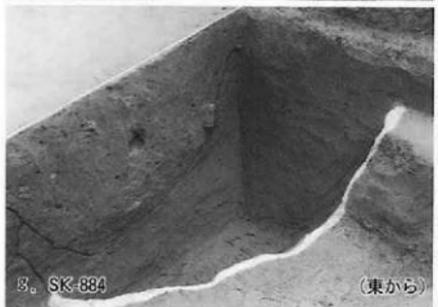
d. SK-821-822 (北から)



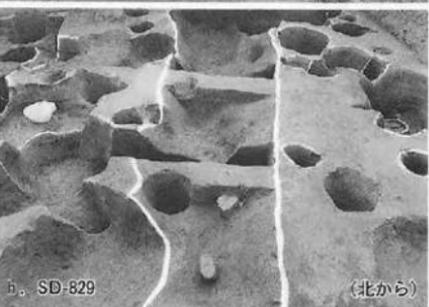
e. SK-839 (南から)



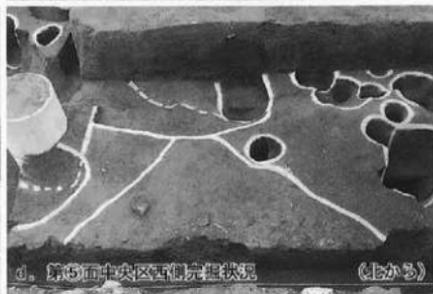
f. SK-857 (西から)



g. SK-884 (東から)

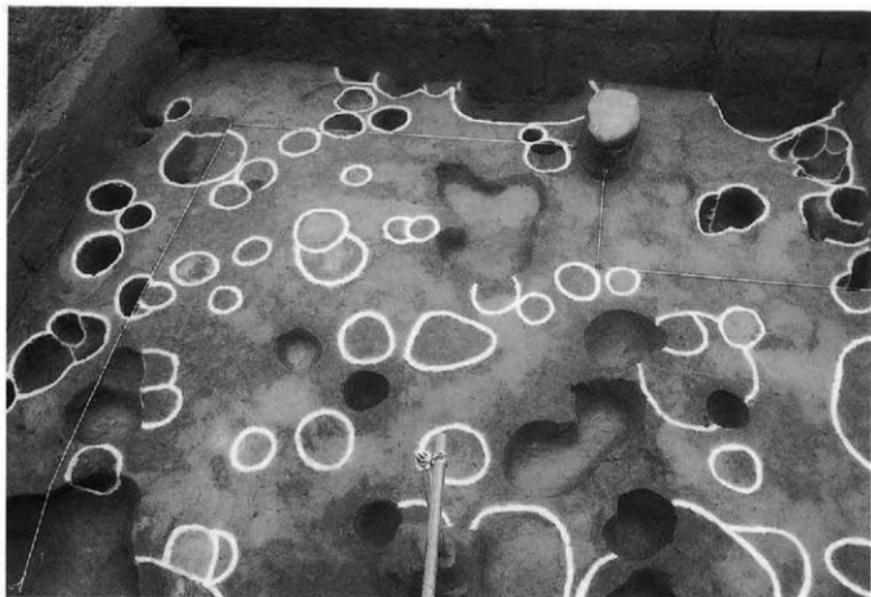


h. SD-829 (北から)



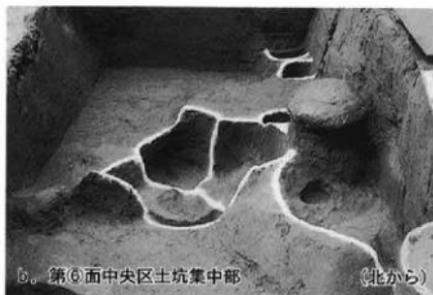
e. 第5面南区完掘状況

(南から)



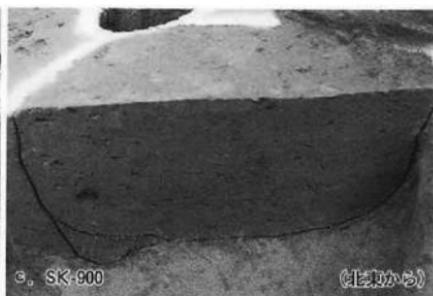
a. 第⑥面南区完掘状況

(南から)



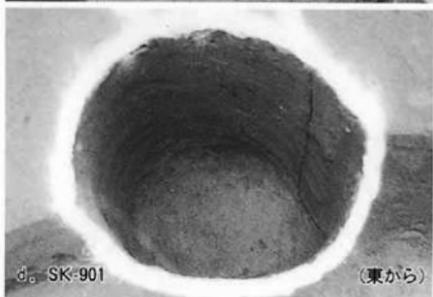
b. 第⑥面中央区土坑集中部

(北から)



c. SK-900

(北東から)



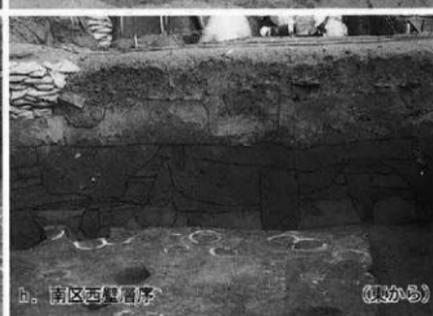
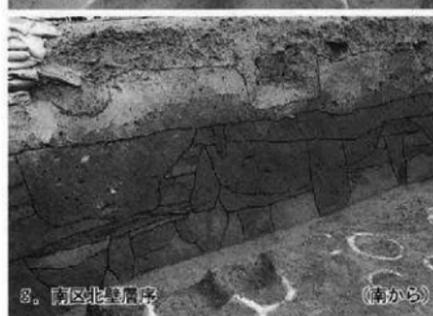
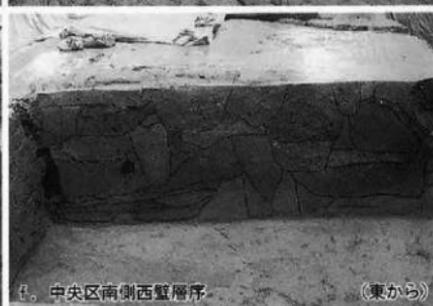
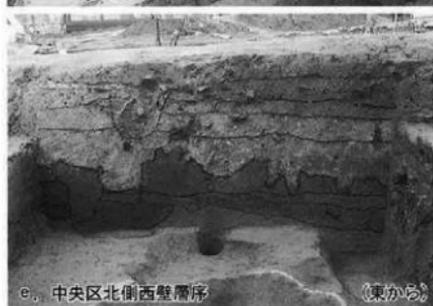
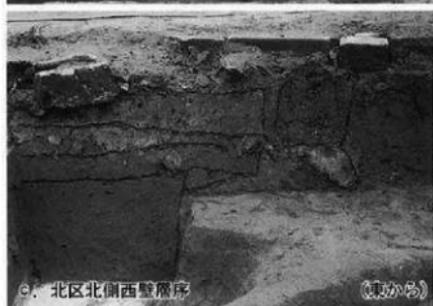
d. SK-901

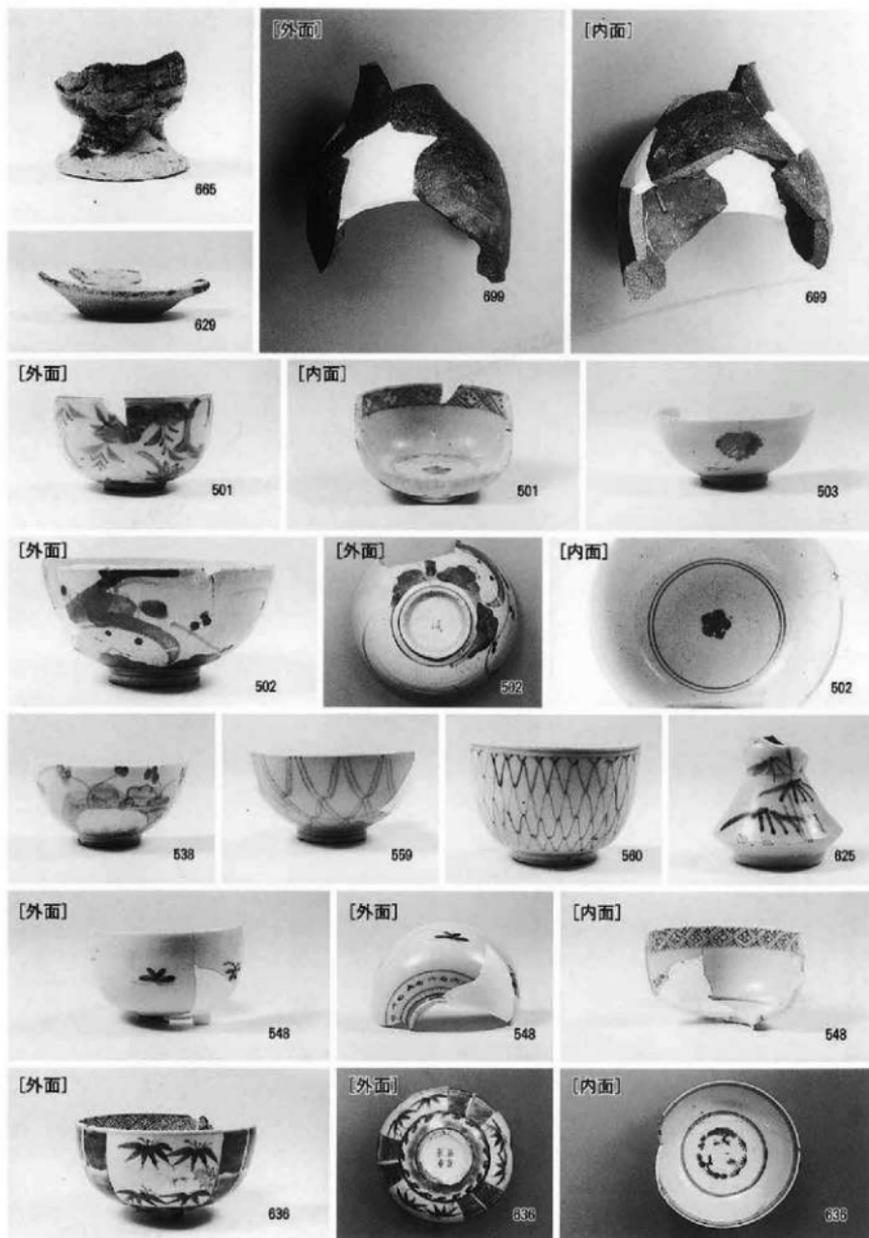
(東から)



e. SE-891・SK-893

(西から)

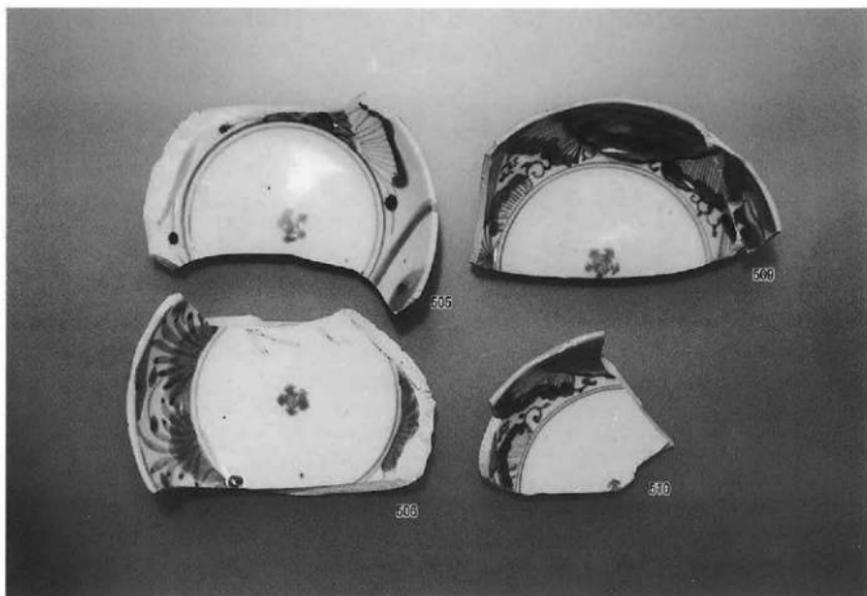






a. 土器・陶磁器類 2 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 2 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 3 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 3 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 4 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 4 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 5 [外面]

(約 1 : 2)



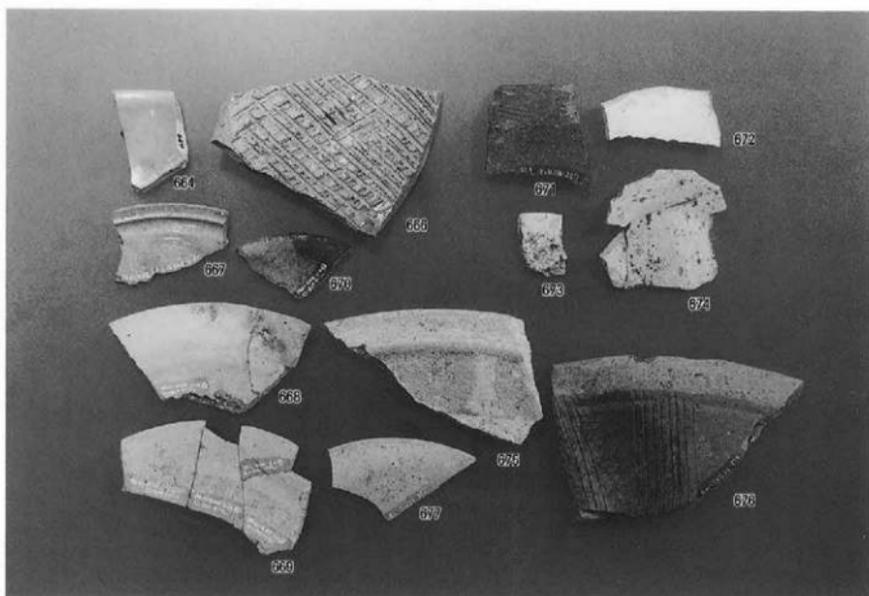
b. 土器・陶磁器類 5 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類6【外面】

(約1:2)



b. 土器・陶磁器類6【内面】

(約1:2)



a. 土器・陶磁器類 7 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 7 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 8 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 8 [内面]

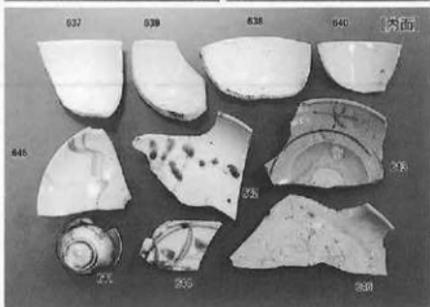
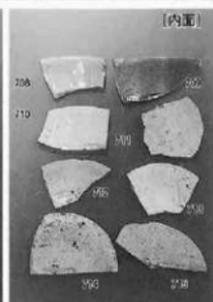
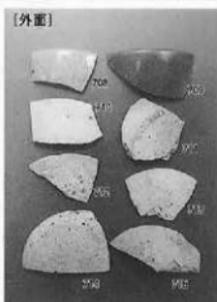
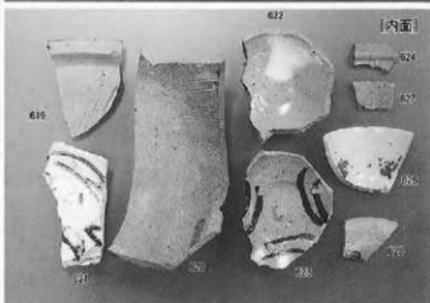
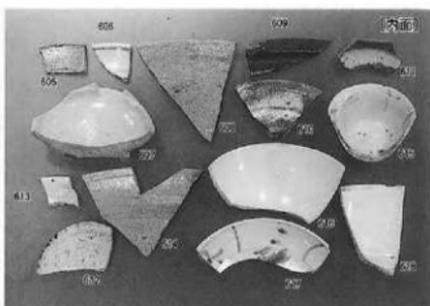
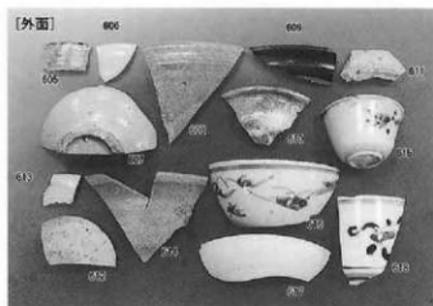
(約 1 : 2)

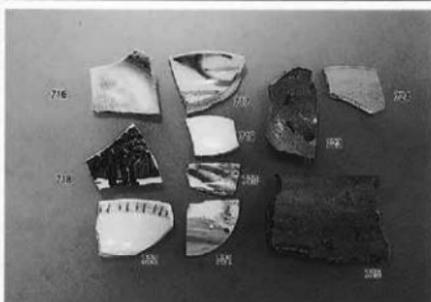
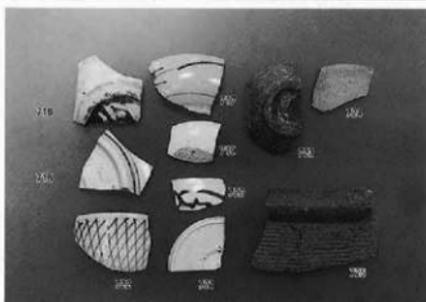
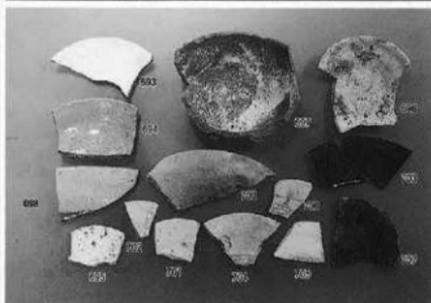
[外面]

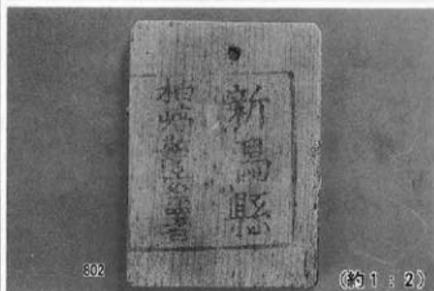
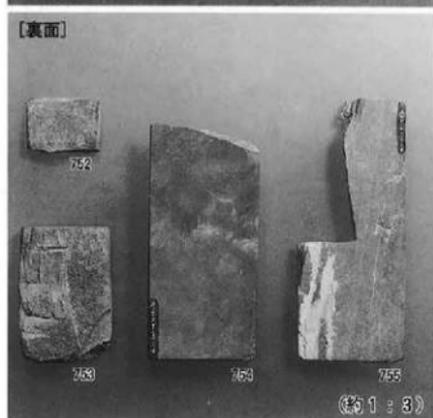
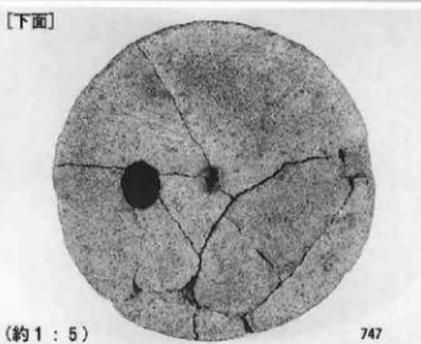
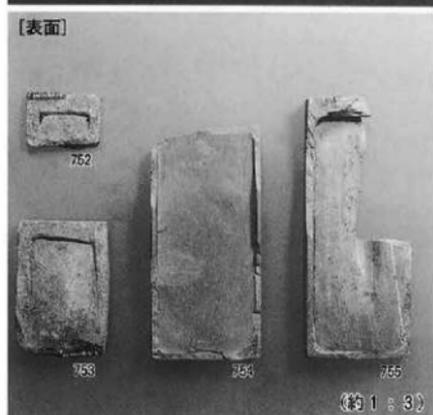
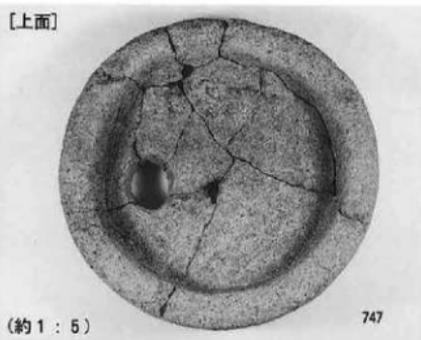
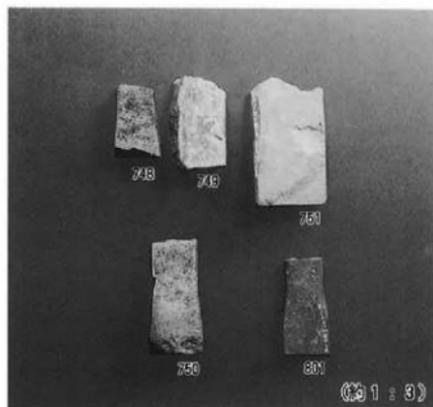
[内面]



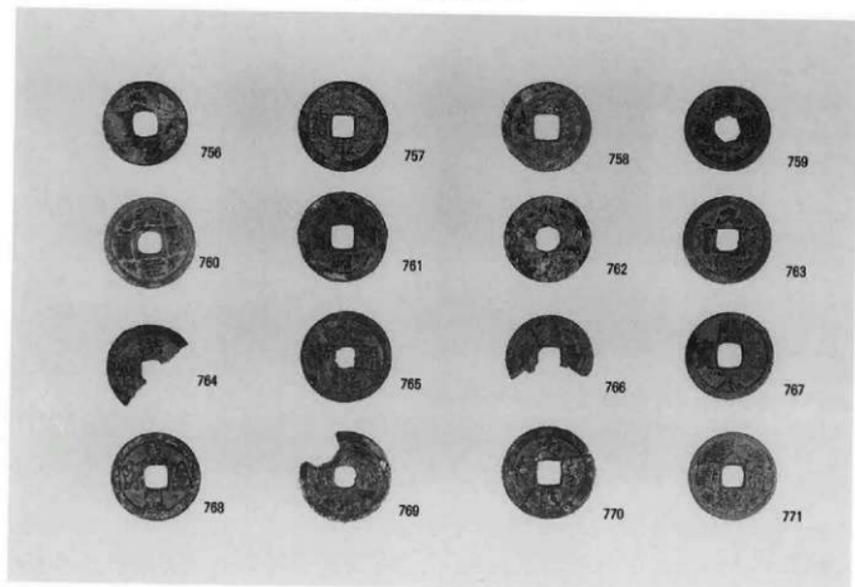






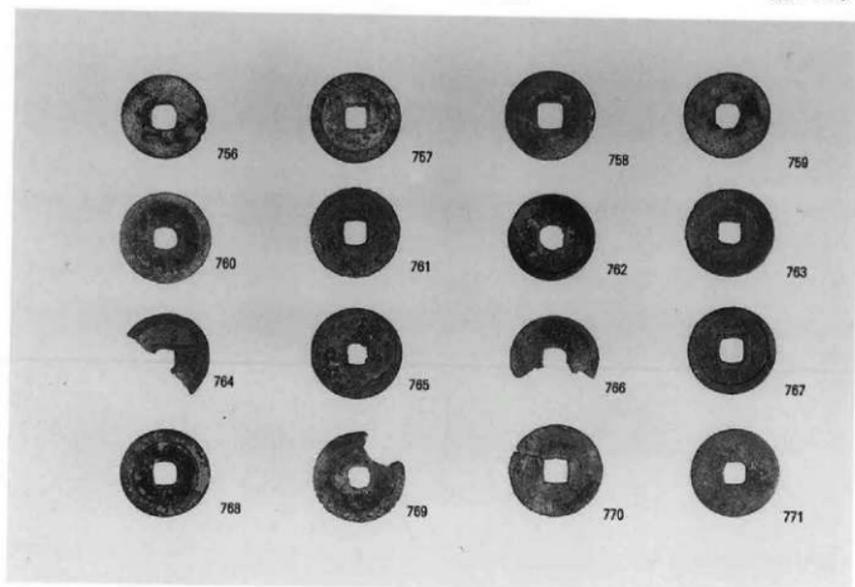


A 1 - II a 区 21



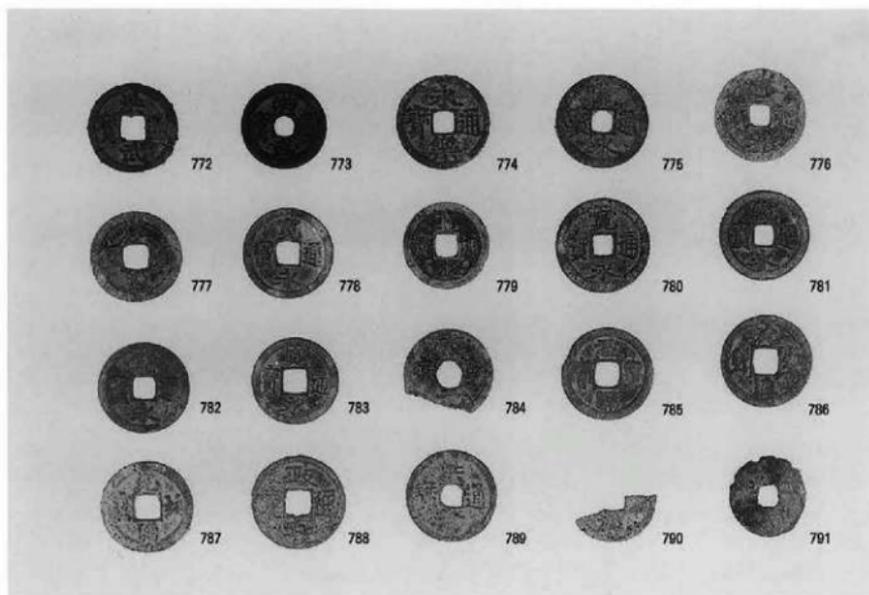
a. 錢 貨1 [正面]

(約4 : 5)



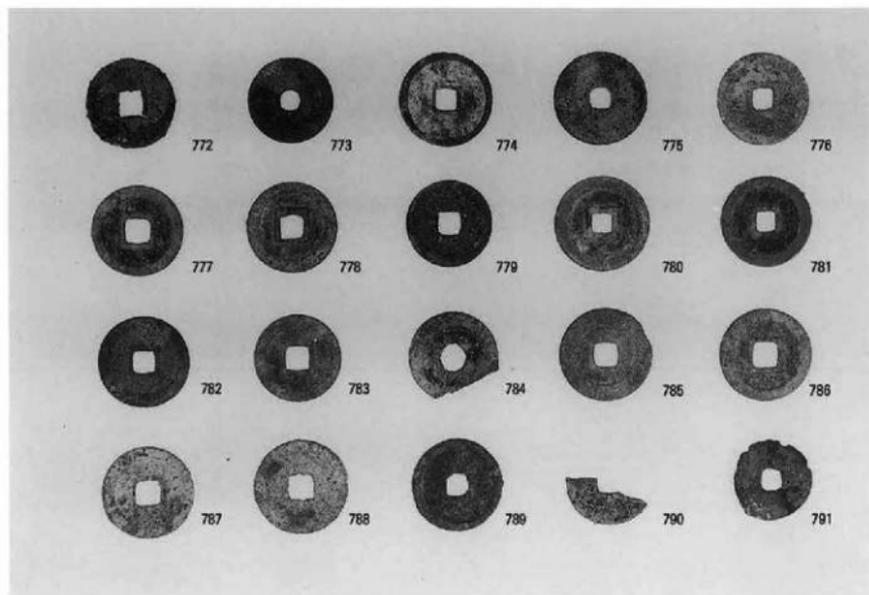
b. 錢 貨1 [背面]

(約4 : 5)



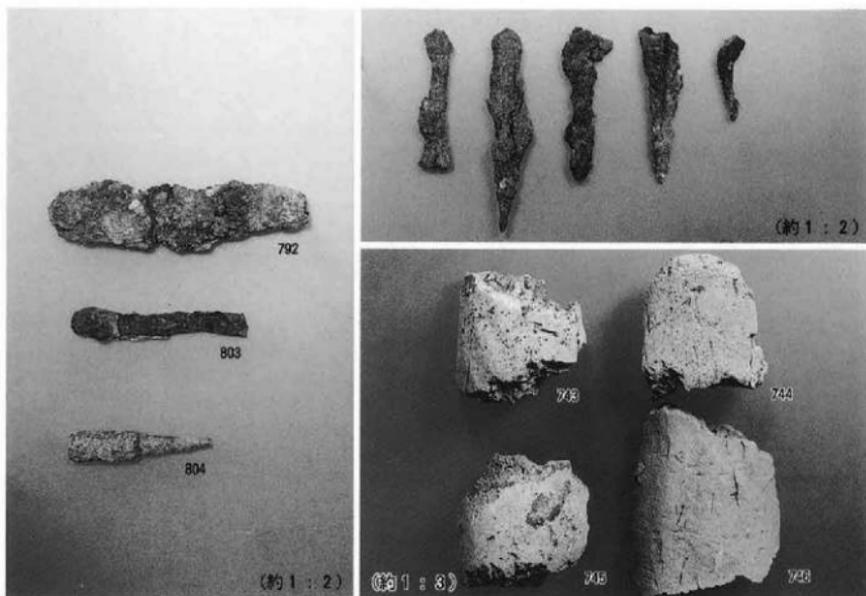
a. 錢 貨2 [正面]

(約4:5)



b. 錢 貨2 [背面]

(約4:5)



a. 金属製品(1)・羽口



b. 金属製品(2)



a. 第③面全景 (北側)

(北から)



b. 第③面全景 (中央付近)

(北西から)



a. 第③面全景 (南側)

(北西から)



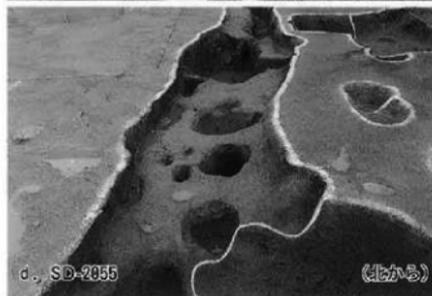
b. SKp-2037

(北西から)



c. SKp-2052

(北から)



d. SD-2055

(北から)



e. SD-2055 石器出土状況

(北西から)



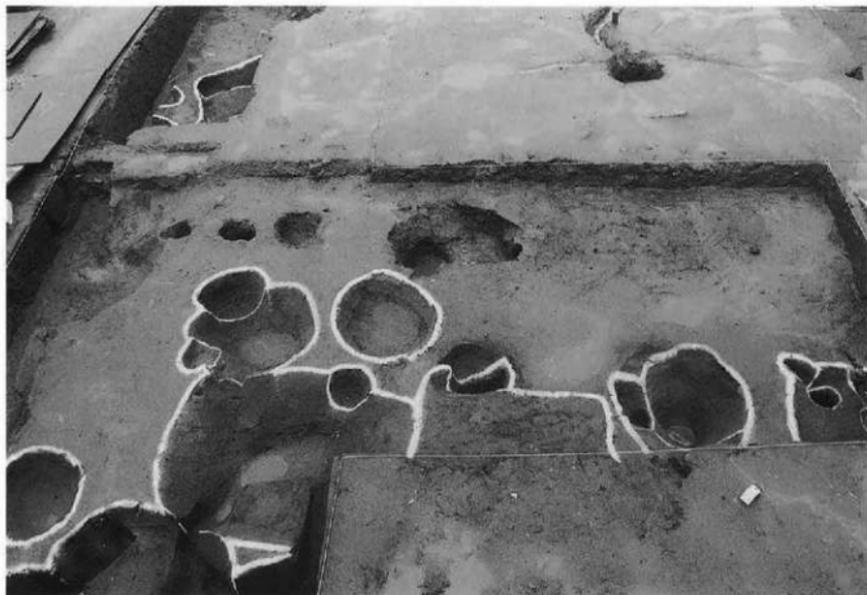
a. 第④面全景 (北側)

(東から)



b. 第④面全景 (南側)

(西から)



a. 第④面全景 (中央付近)

(西から)



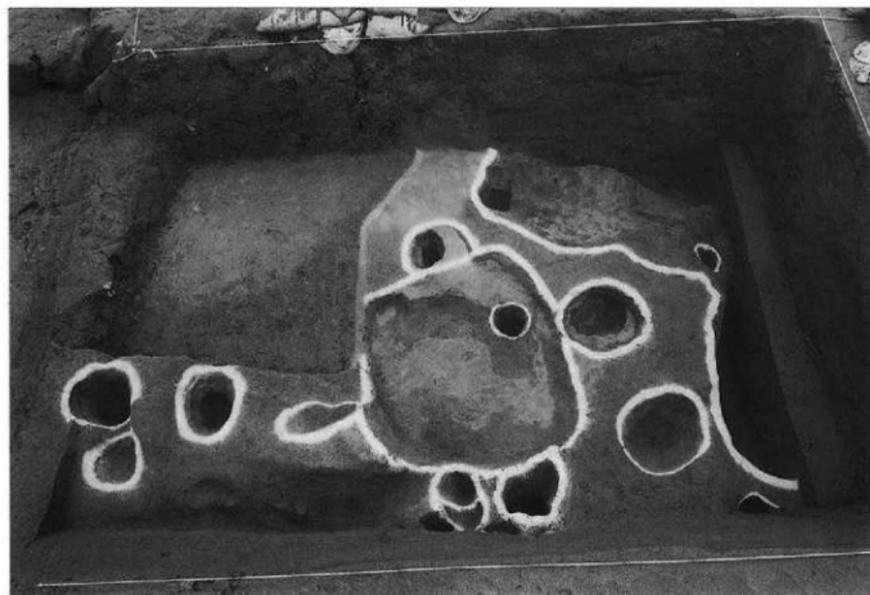
b. 第④面全景 (南側)

(東から)



a. 第⑤面全景 (北東側)

(東から)



b. 第⑤面全景 (北西側)

(西から)



a. 第⑤面全景 (中央付近)

(東から)



b. 第⑤面全景 (南側)

(西から)



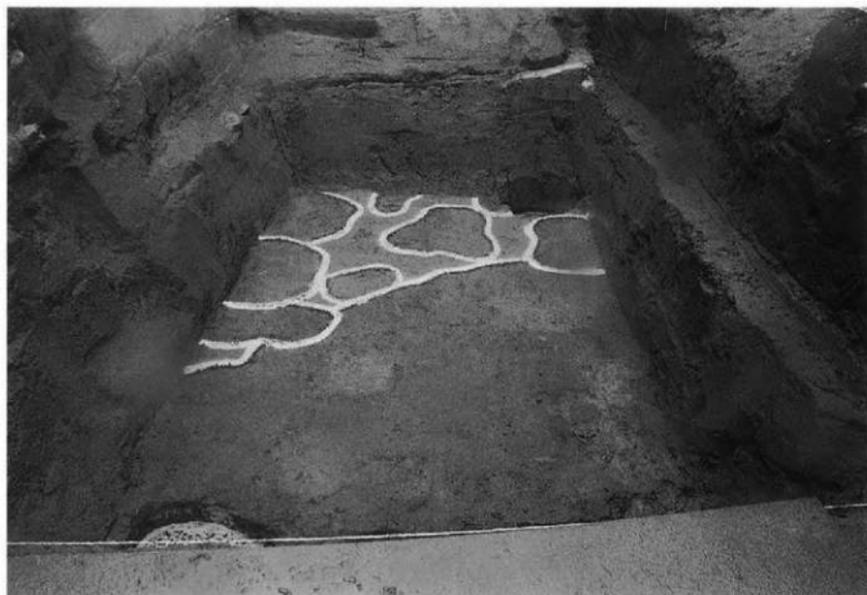
a. 第⑤面全景 (南側)

(東から)



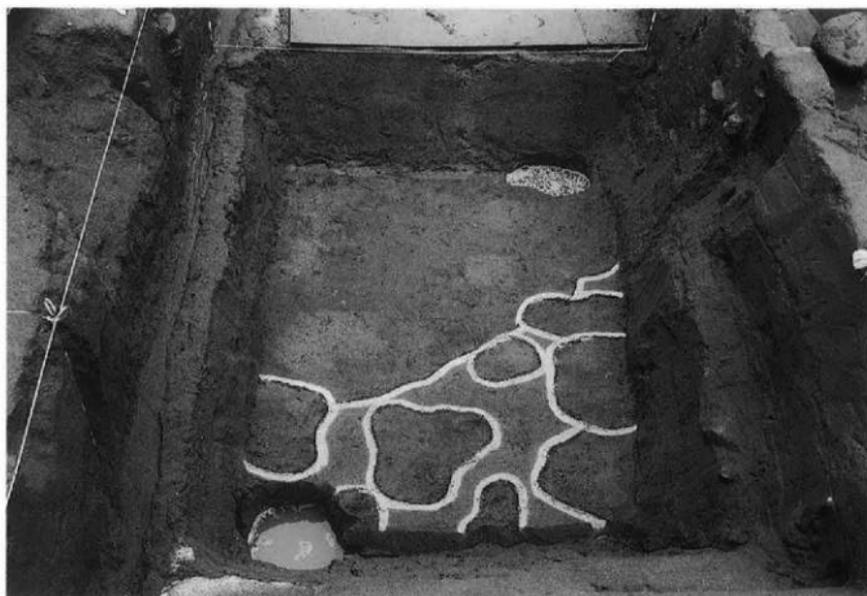
b. 第⑥面全景 (南東側)

(北から)



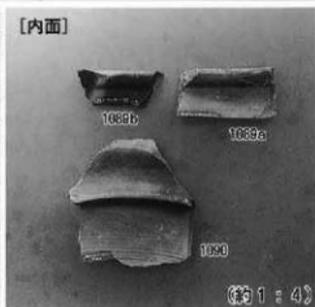
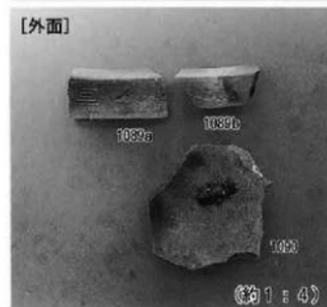
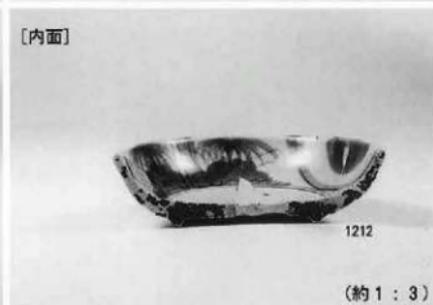
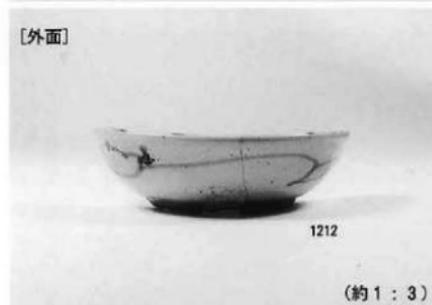
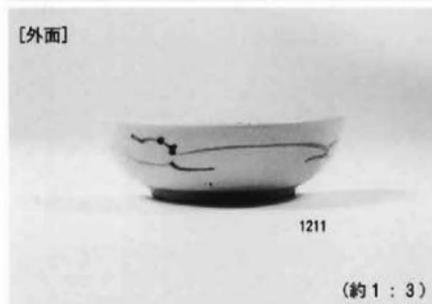
a. 第⑥面全景 (南西側)

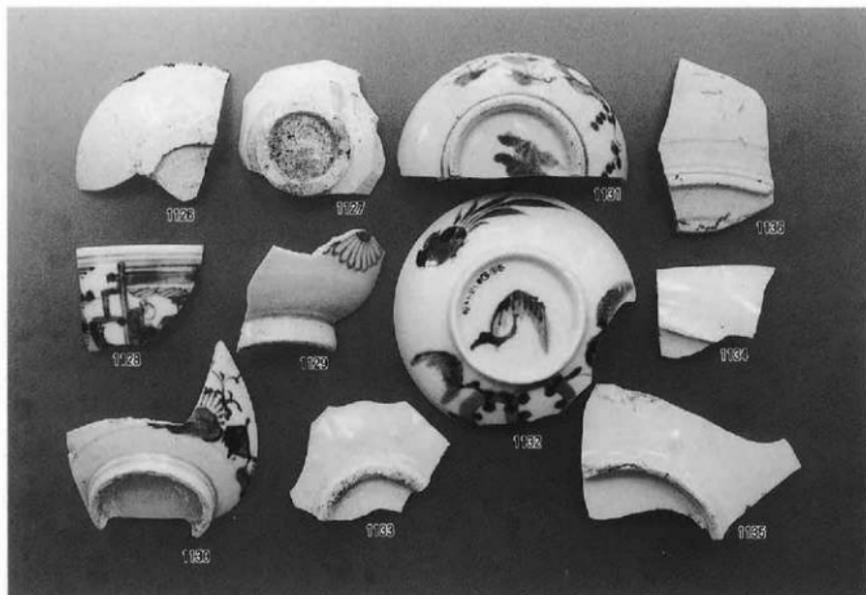
(東から)



b. 第⑥面全景 (南西側)

(西から)





a. 土器・陶磁器類 2 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 2 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 3 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 3 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 4 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 4 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 5 [外面]

(約 1 : 2)

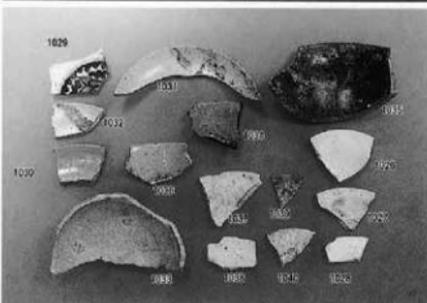
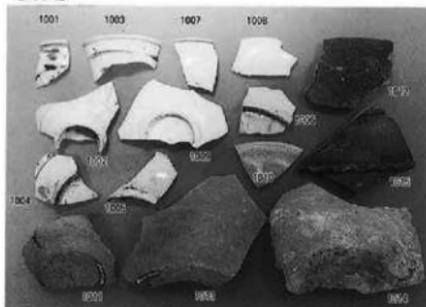


b. 土器・陶磁器類 5 [内面]

(約 1 : 2)

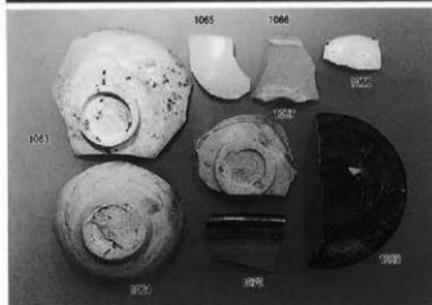
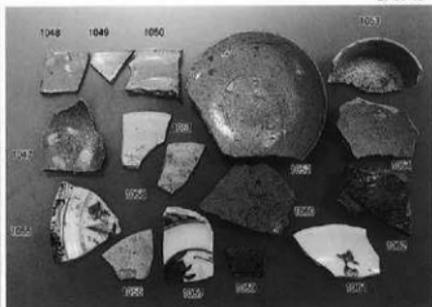
[外面]

[内面]



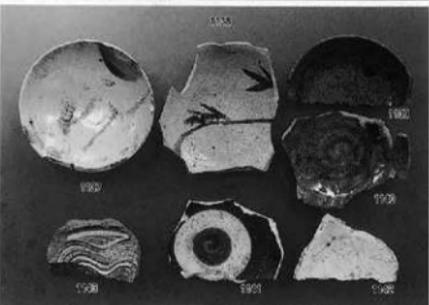
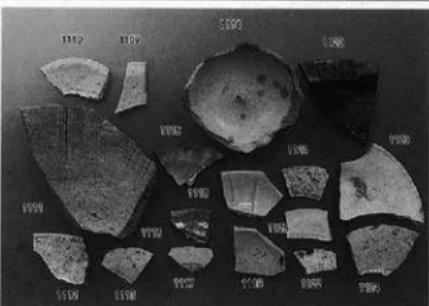
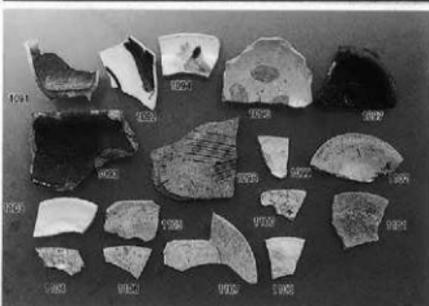
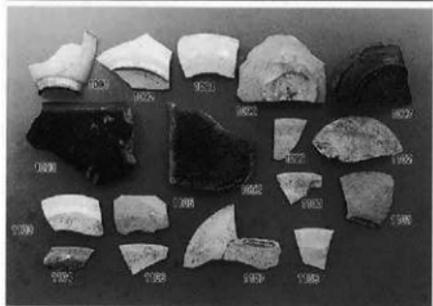
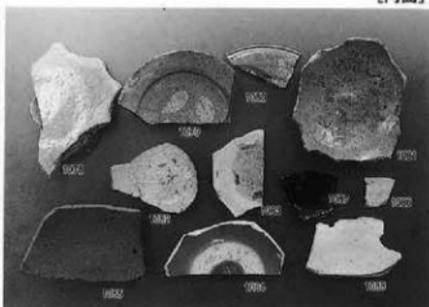
[外面]

[内面]



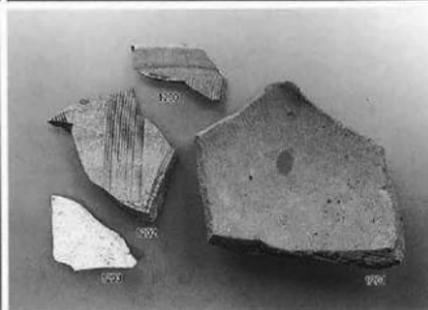
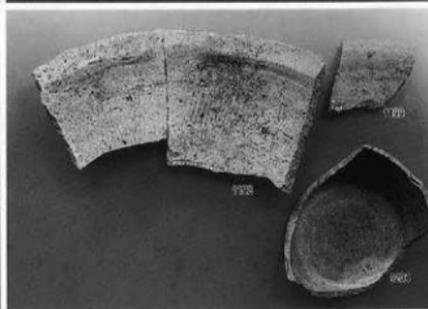
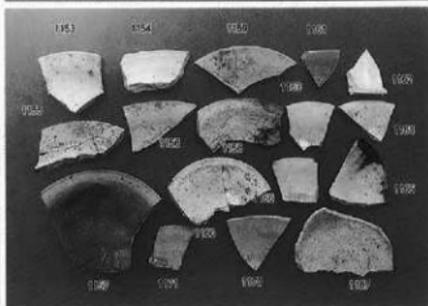
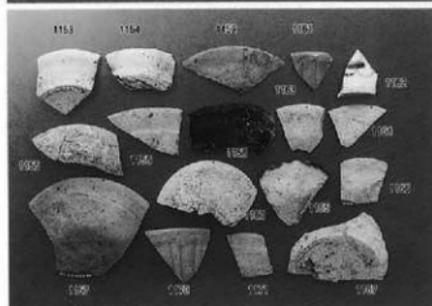
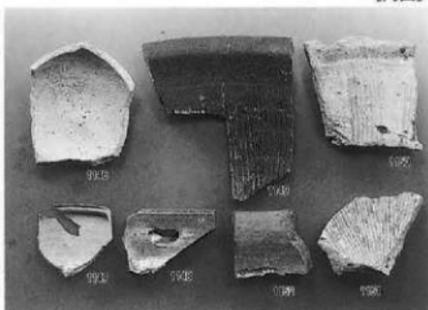
[外面]

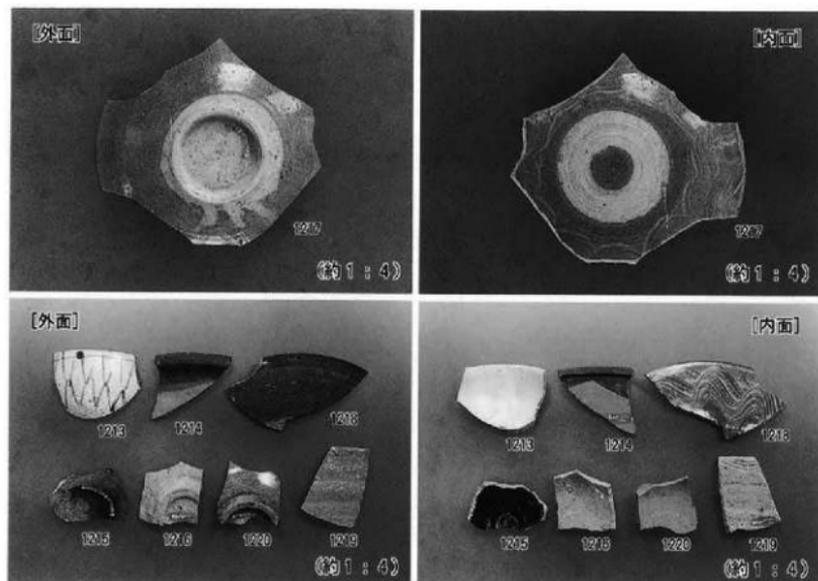
[内面]



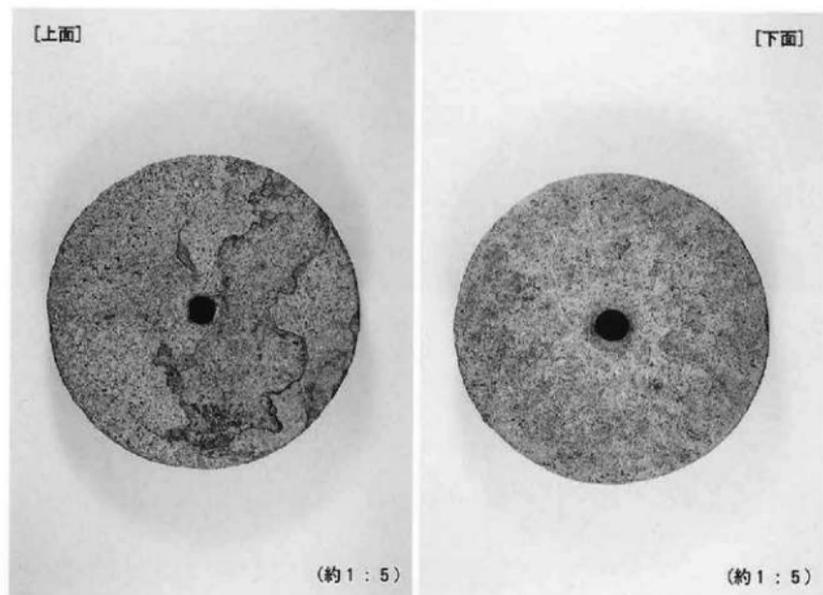
【外面】

【内面】

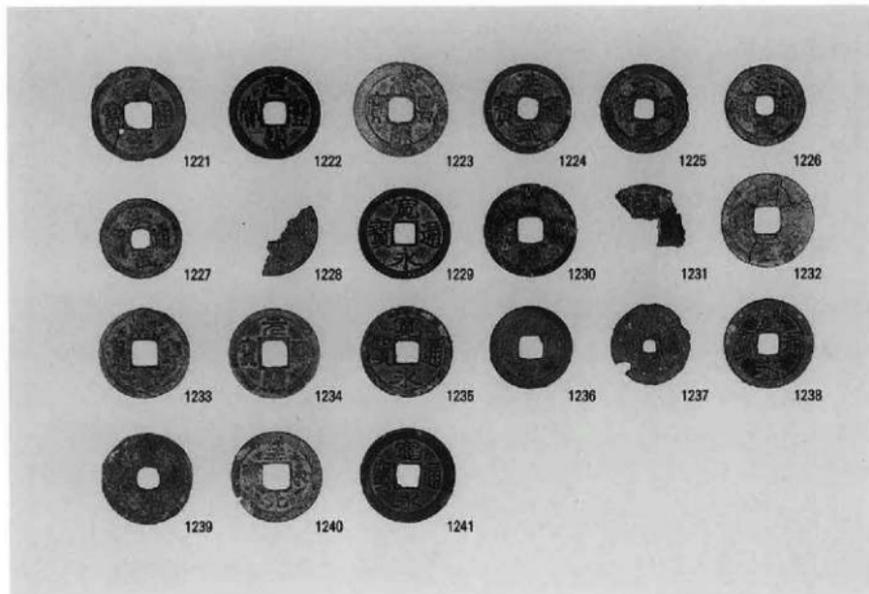




a. 土器・陶磁器類10

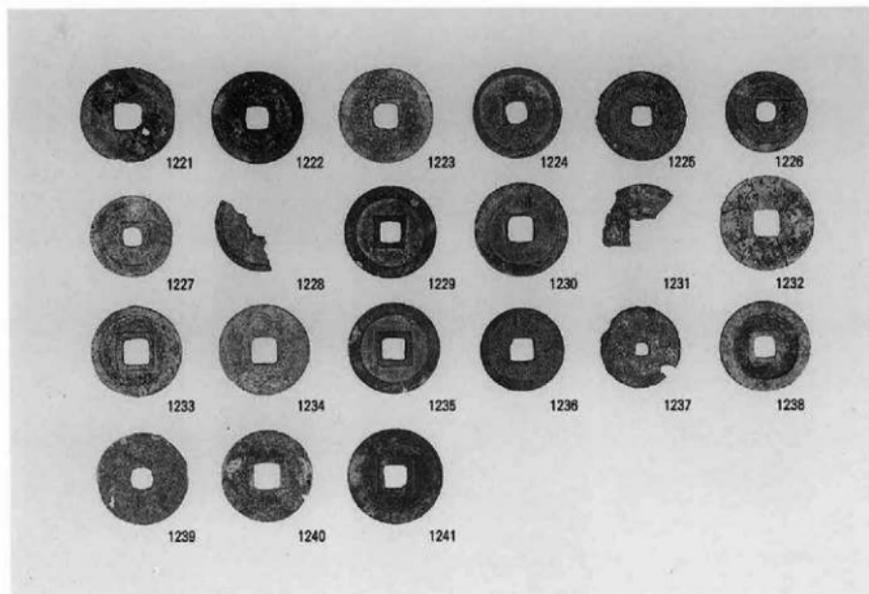


b. 石 白 (1250)



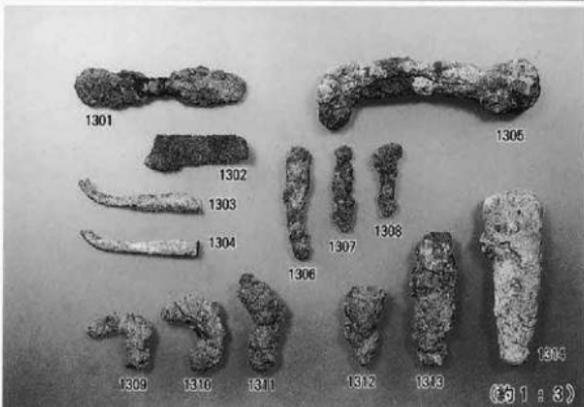
a. 錢 貨 [正面]

(約 4 : 5)



b. 錢 貨 [背面]

(約 4 : 5)



その他の遺物



a. 第①面調査区全景

(北東から)



b. 第①面調査区全景

(西から)



a. 作業風景

(南西から)



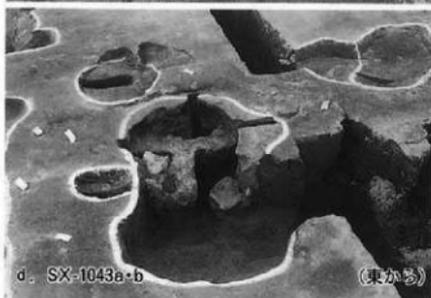
b. SX-1037

(東から)



c. SX-1038

(西から)



d. SX-1043a-b

(東から)



e. SD-1033

(東から)



a. 第②面調査区全景

(北から)



b. 第②面調査区全景

(北西から)





a. 第③面調査区全景

(南東から)



b. 第③面調査区全景

(北から)



a. 第③面調査区全景

(北西から)



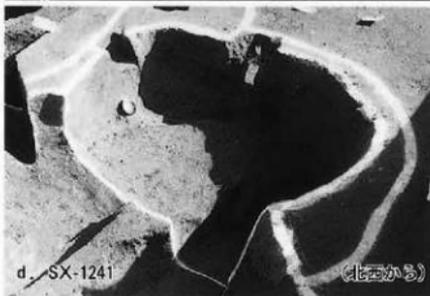
b. 第③面全景 (2F4)

(南から)



c. 第③面全景 (2F4)

(北から)



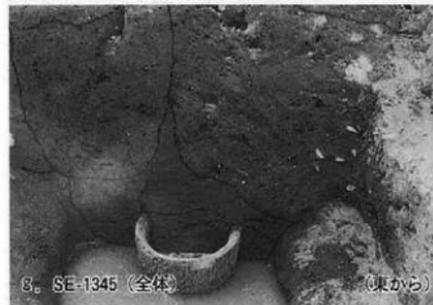
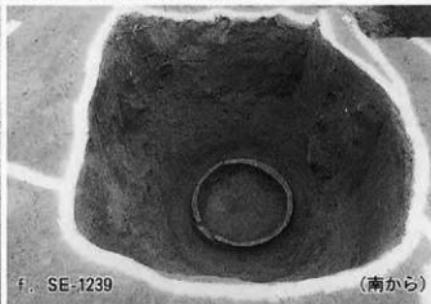
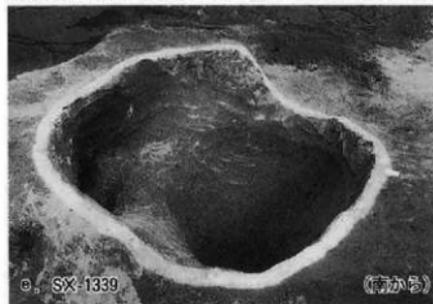
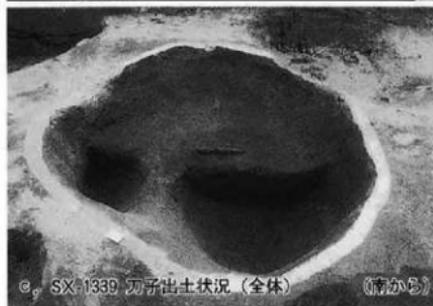
d. SX-1241

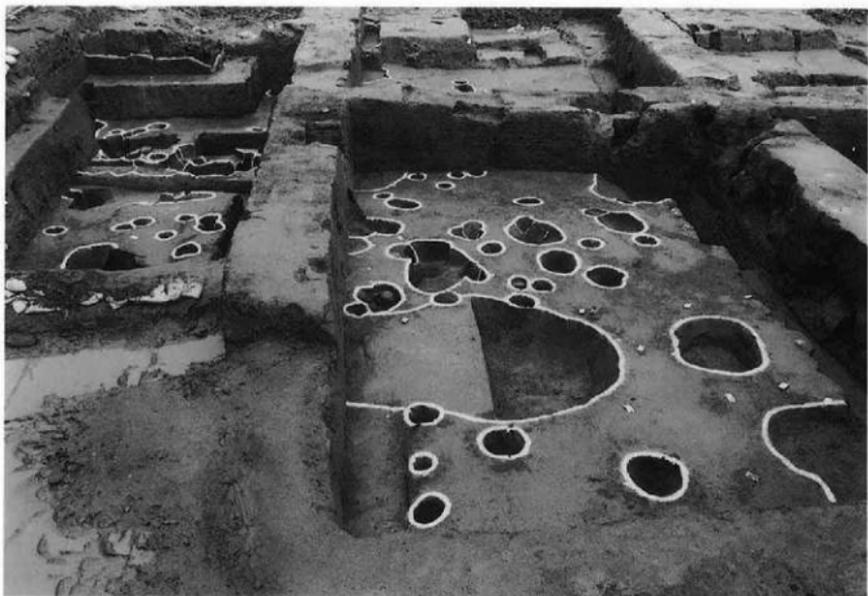
(北西から)



e. SX-1264

(西から)





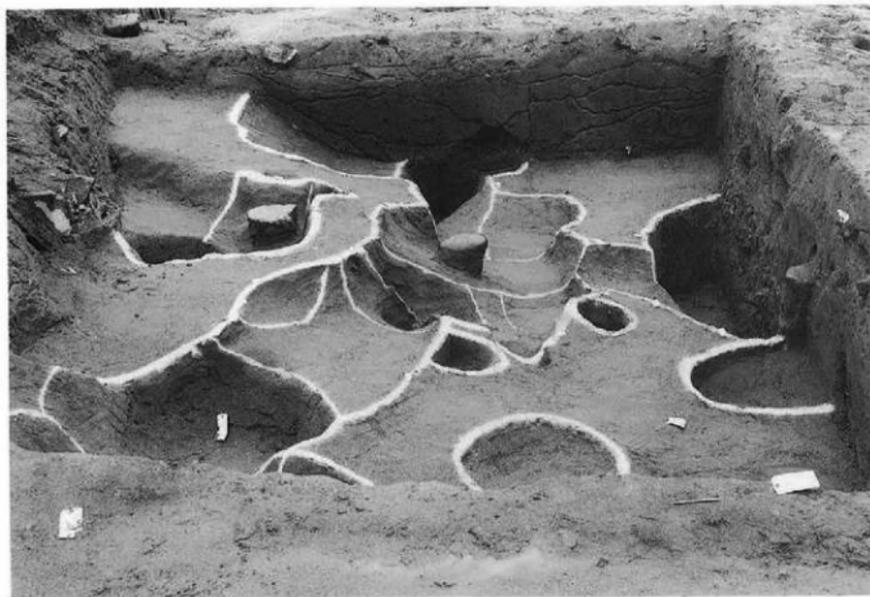
a. 第④面調査区全景 (南半)

(東から)



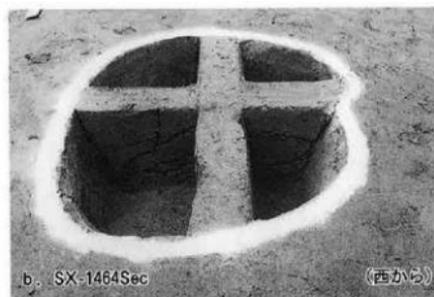
b. 第④面調査区全景 (南半)

(西から)



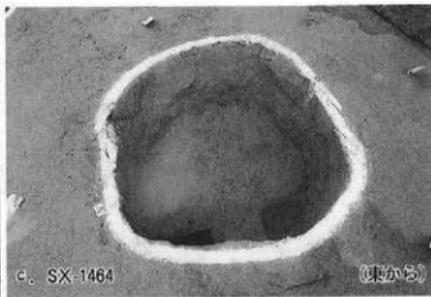
a. 第④面調査区全景（北側）

（西から）



b. SX-1464Sec

（西から）



c. SX-1464

（東から）



d. SX-1470Sec

（北から）



e. SX-1470

（北東から）



a. 第④面調査区全景

(北から)



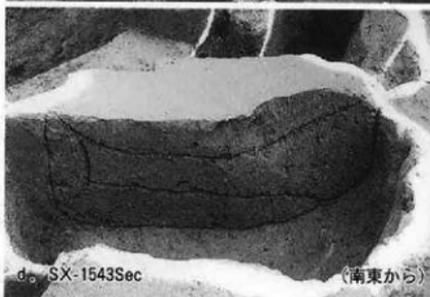
b. 作業風景

(東から)



c. SX-1559Sec

(北東から)



d. SX-1543Sec

(南東から)



e. SX-1543

(北から)



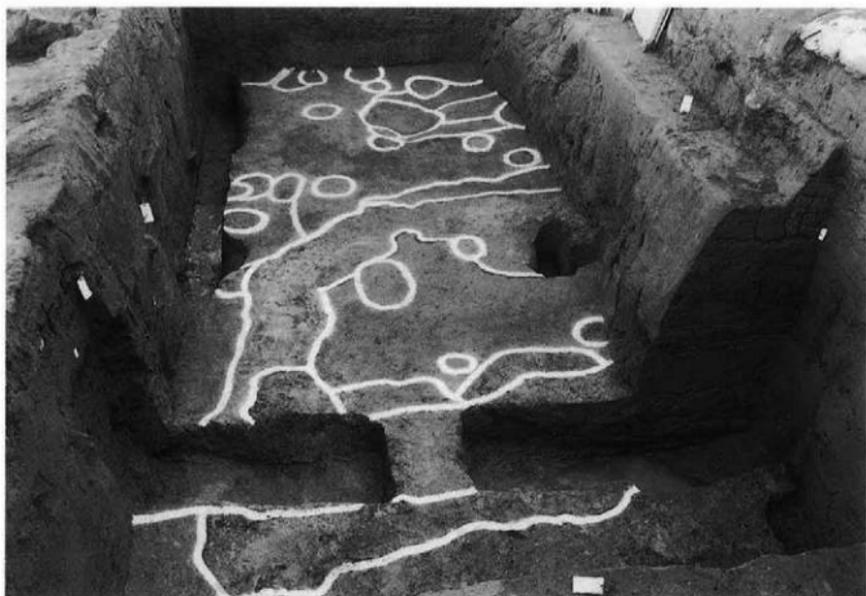
a. 第⑤面調査区全景

(北から)



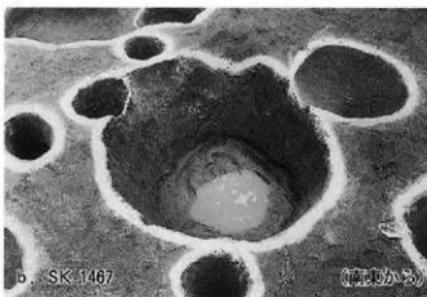
b. 第⑤面調査区全景 (北側)

(東から)



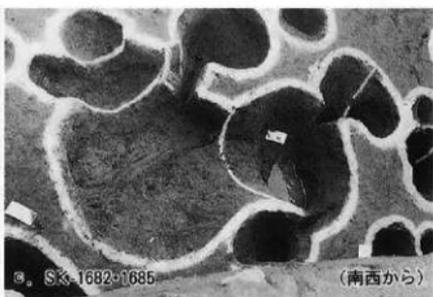
a. 第⑤面調査区全景 (南側)

(西から)



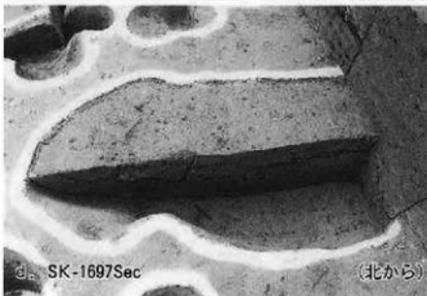
b. SK-1467

(南東から)



c. SK-1682・1685

(南西から)



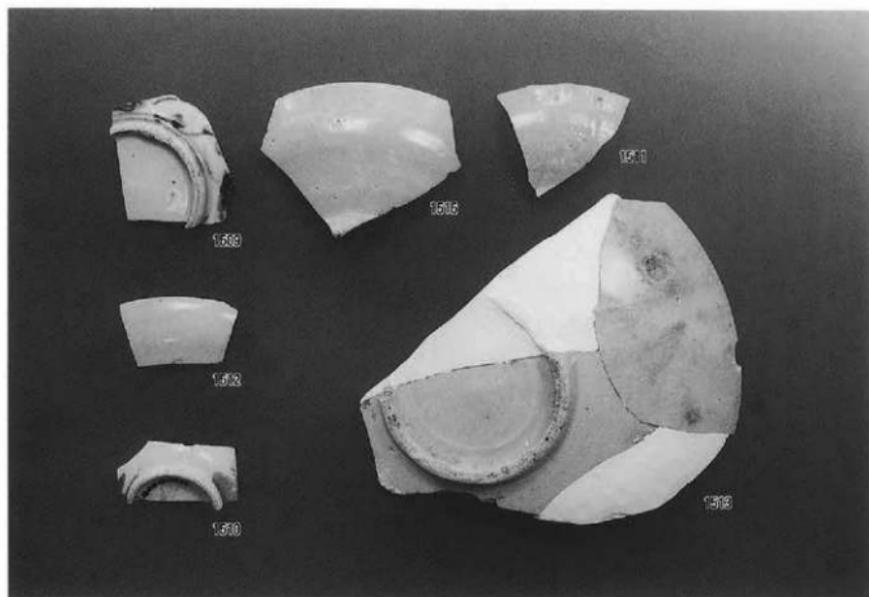
d. SK-1697Sec

(北から)



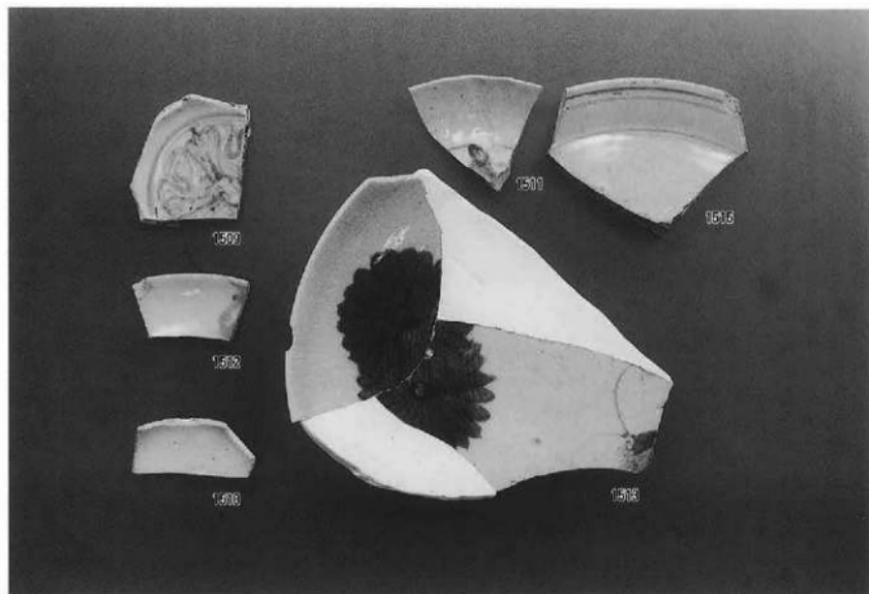
e. SE-1466・1707

(北東から)



a. 土器・陶磁器類 1 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 1 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 2 [外面]

(約 1 : 2)



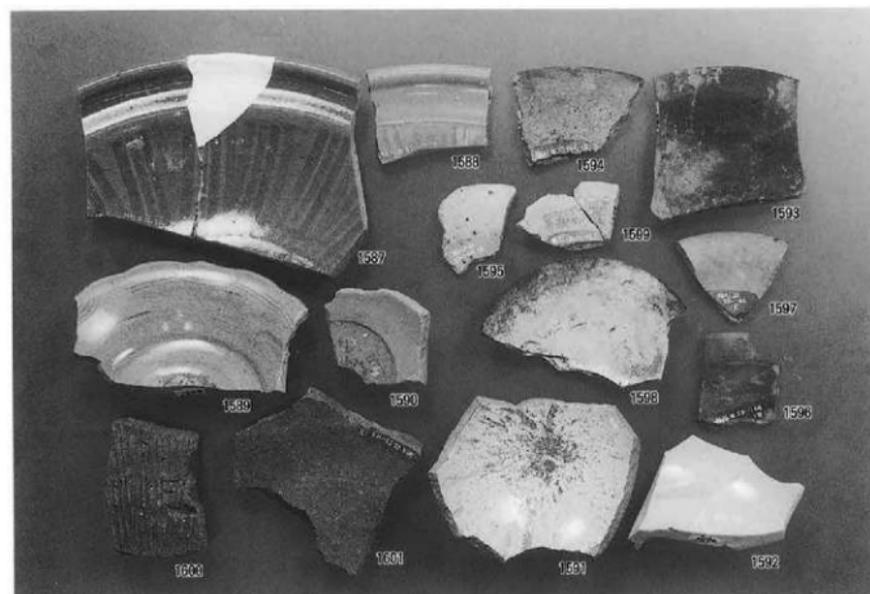
b. 土器・陶磁器類 2 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 3 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 3 [内面]

(約 1 : 2)



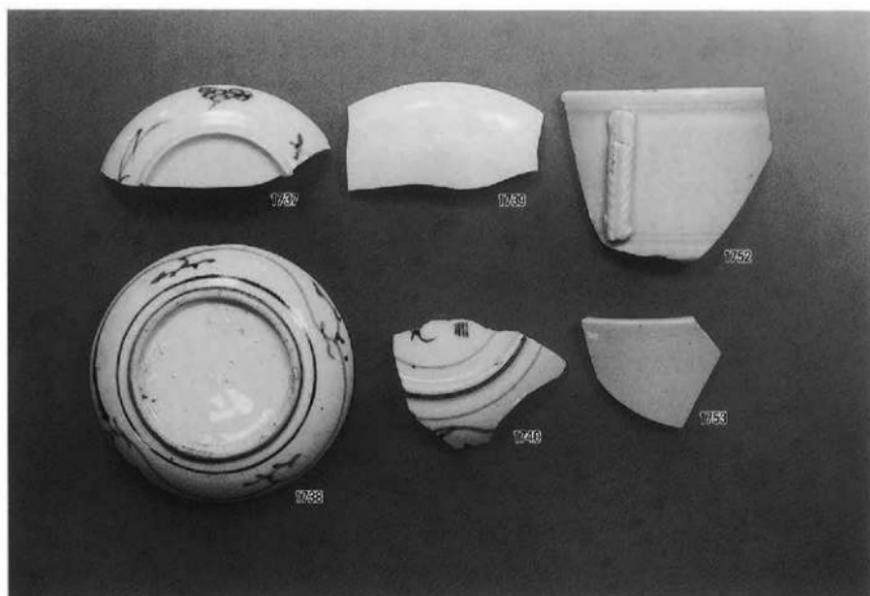
a. 土器・陶磁器類4 [外面]

(約 1 : 2)



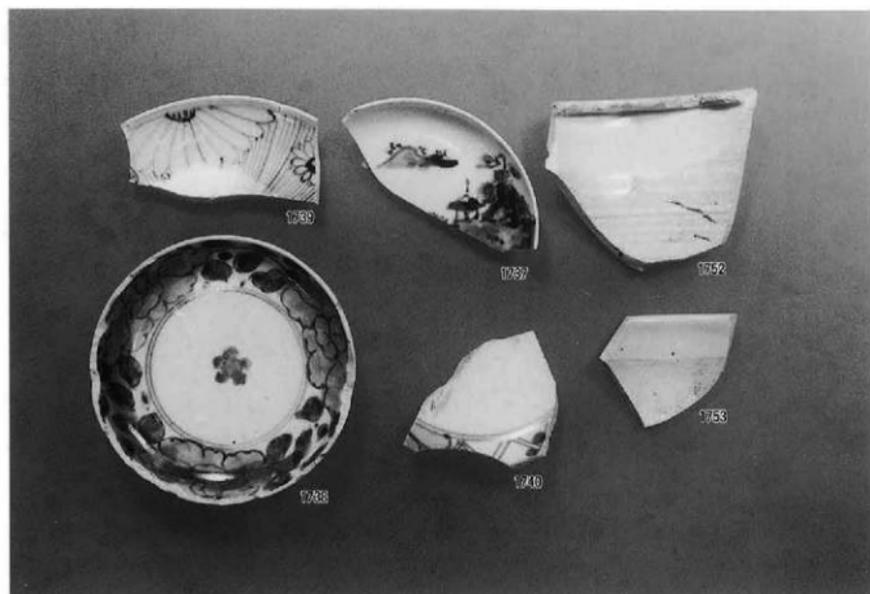
b. 土器・陶磁器類4 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 5 [外面]

(約 1 : 2)



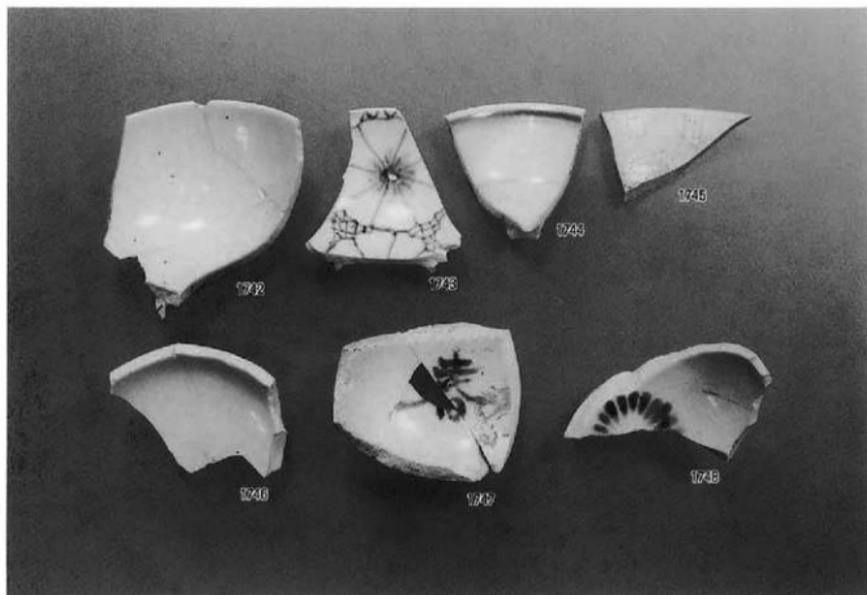
b. 土器・陶磁器類 5 [内面]

(約 1 : 2)



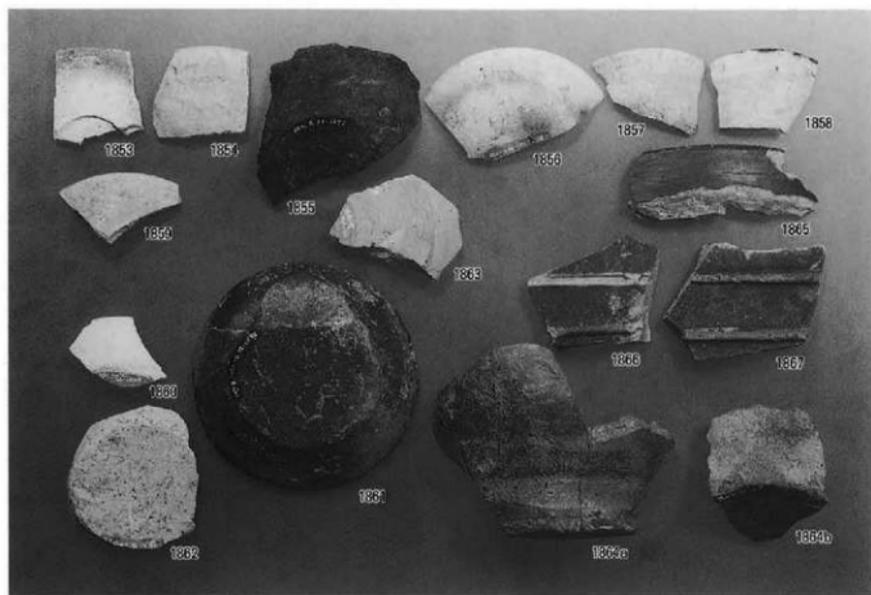
a. 土器・陶磁器類 6 [外面]

(約 1 : 2)



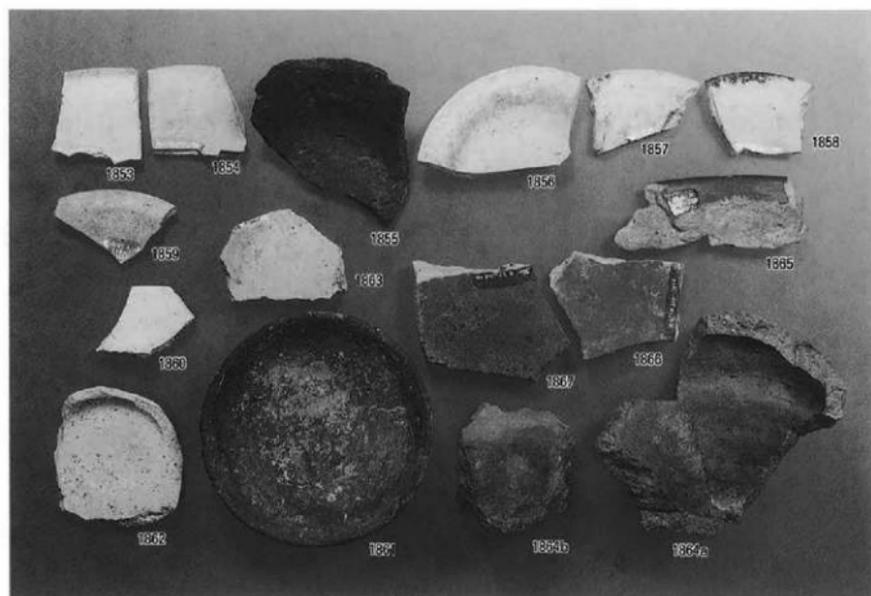
b. 土器・陶磁器類 6 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 7 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類 7 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類 8 [外面]

(約 1 : 2)



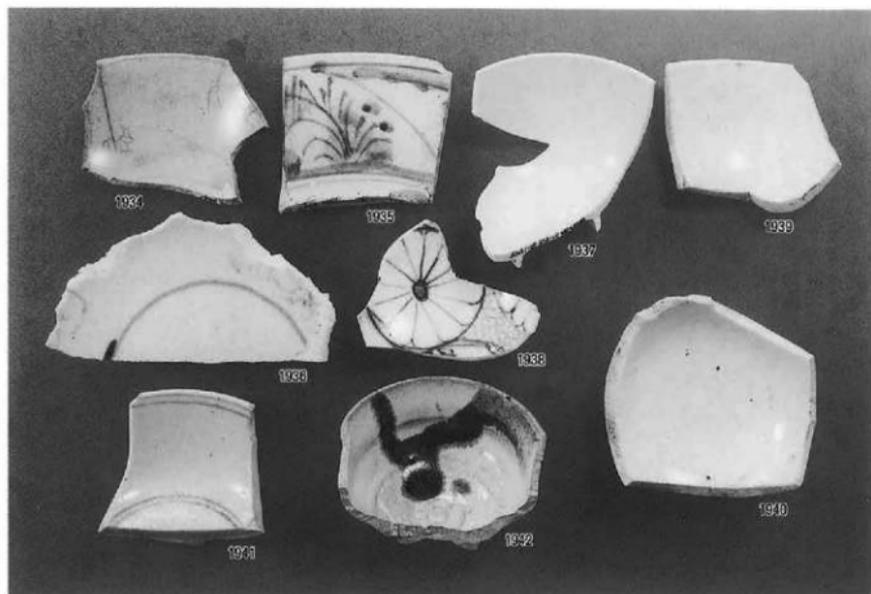
b. 土器・陶磁器類 8 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類9 [外面]

(約 1 : 2)



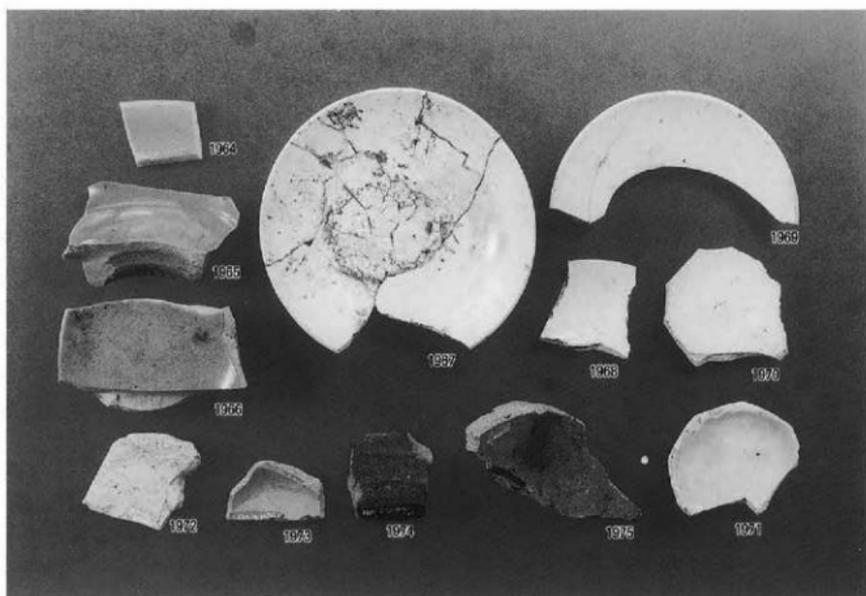
b. 土器・陶磁器類9 [内面]

(約 1 : 2)



a. 土器・陶磁器類10 [外面]

(約 1 : 2)



b. 土器・陶磁器類10 [内面]

(約 1 : 2)



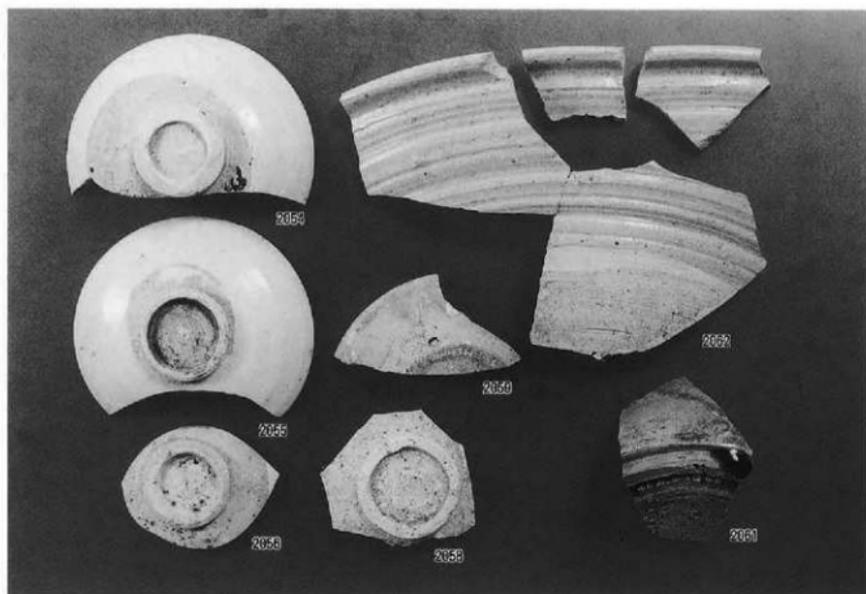
a. 土器・陶磁器類11 [外面]

(約 1 : 2)



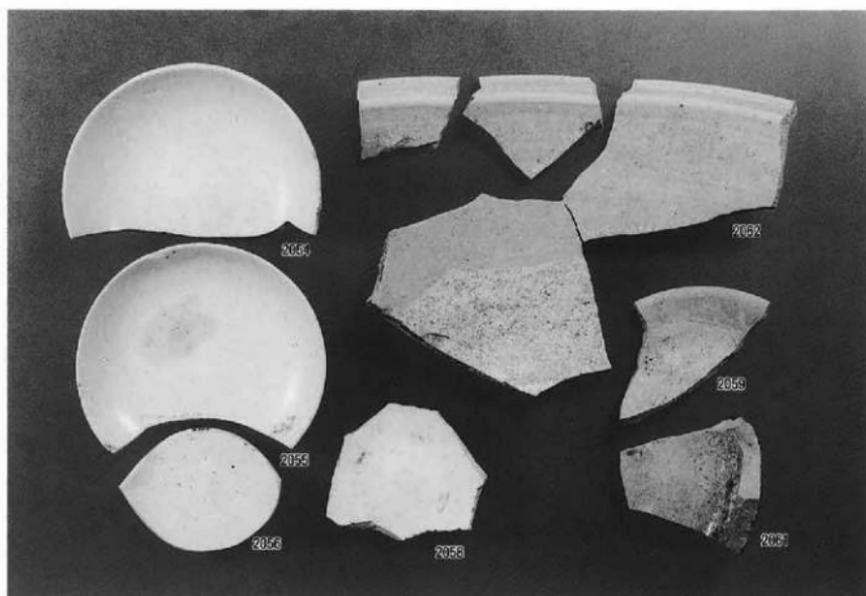
b. 土器・陶磁器類11 [内面]

(約 1 : 2)



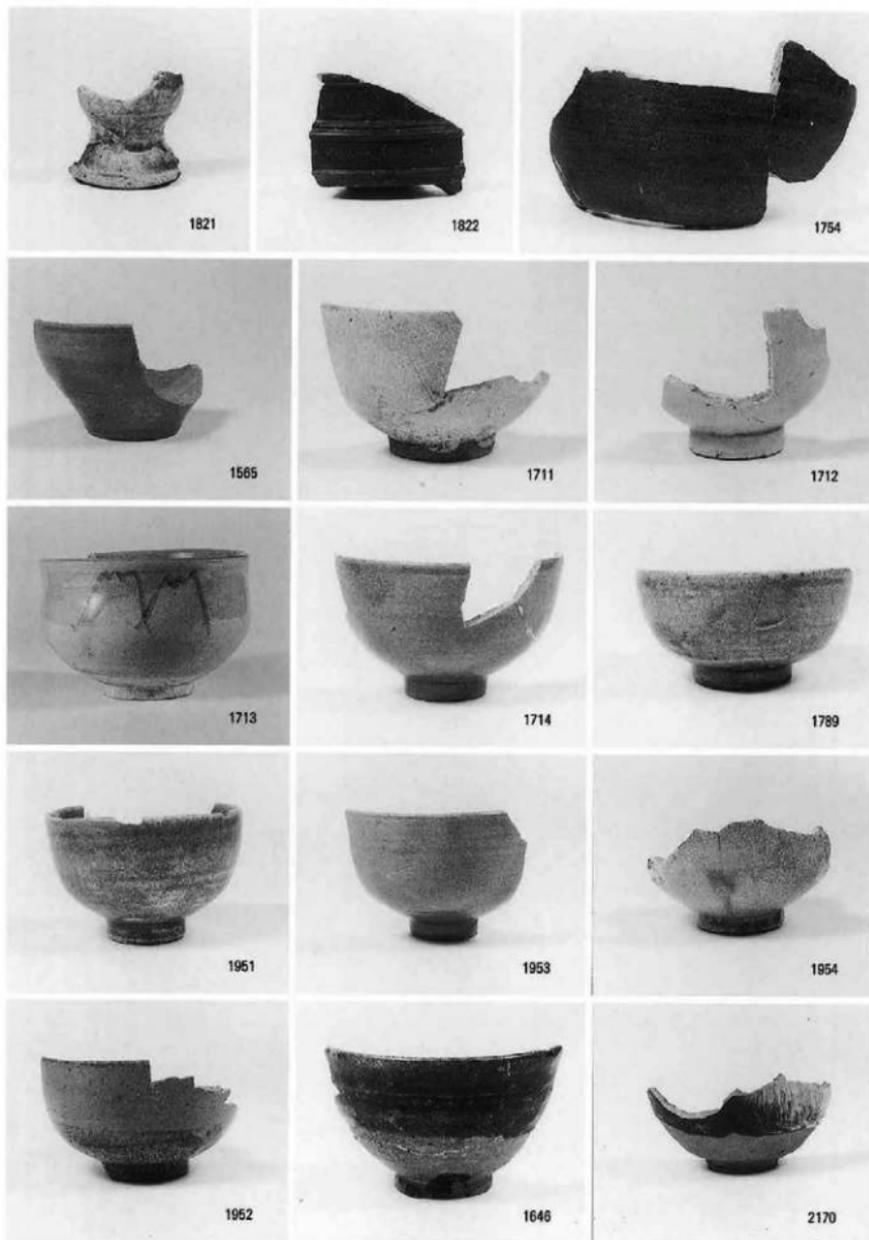
a. 土器・陶磁器類12 [外面]

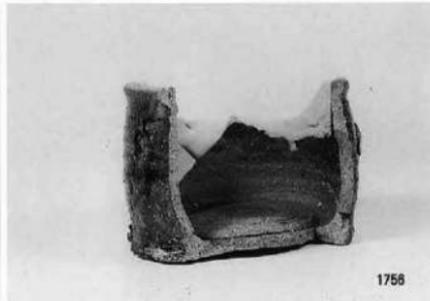
(約 1 : 2)

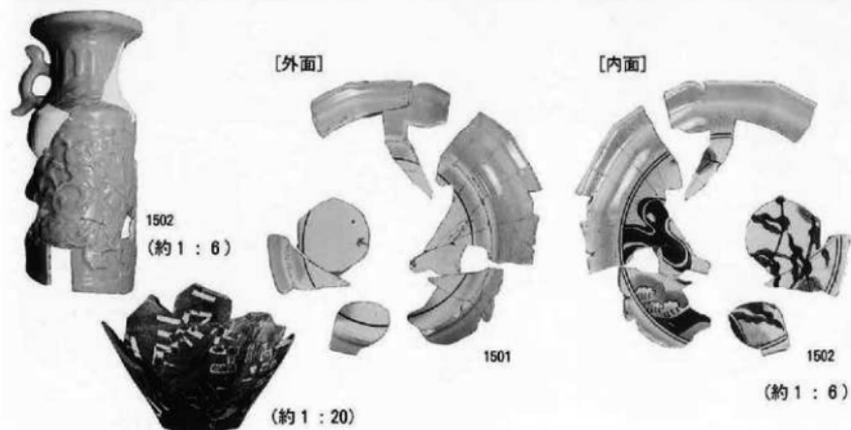
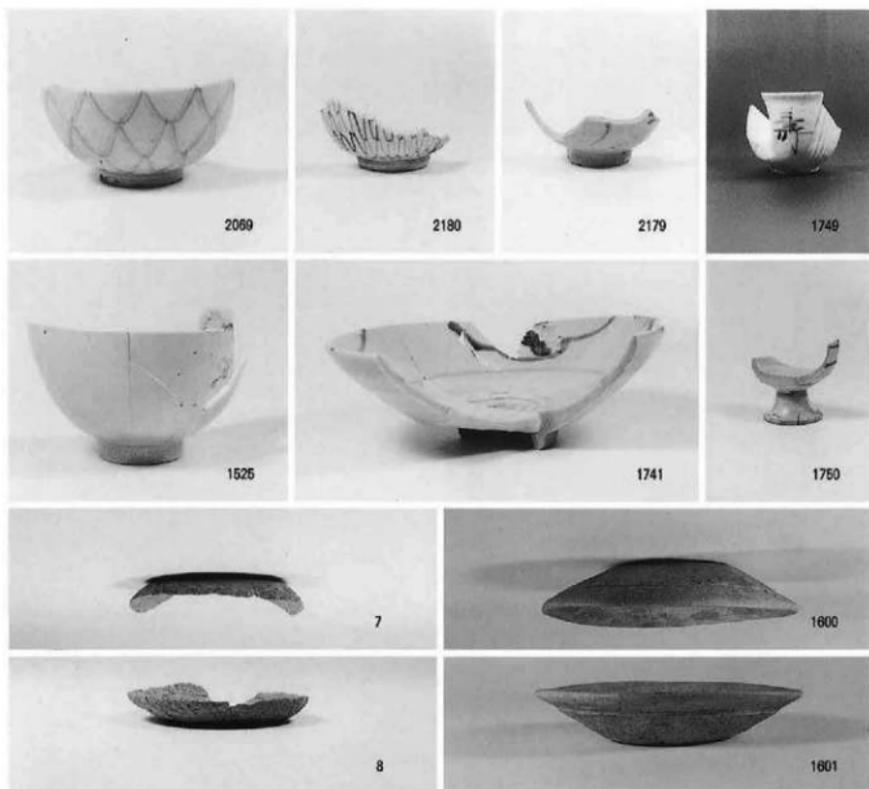


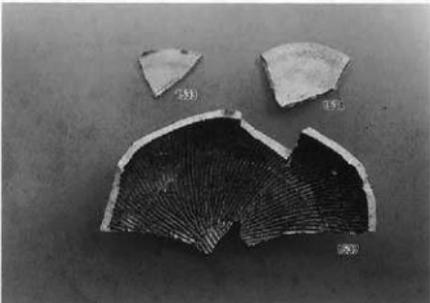
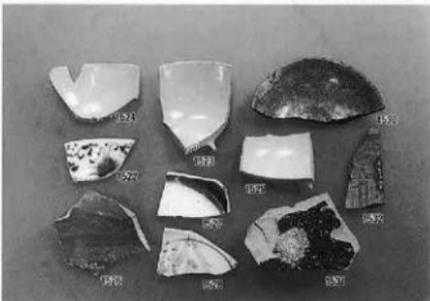
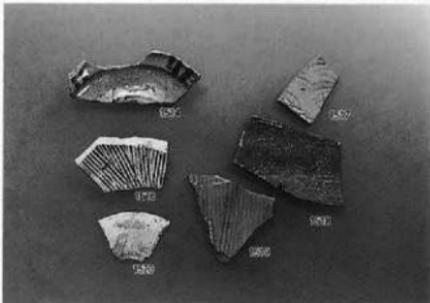
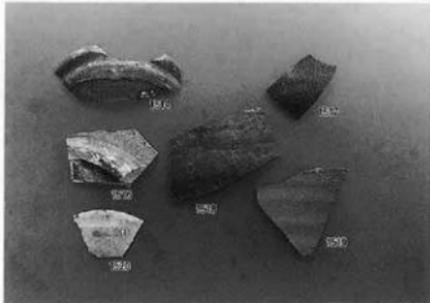
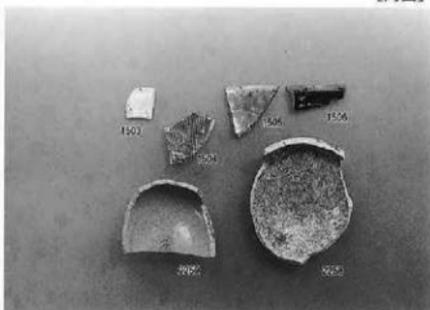
b. 土器・陶磁器類12 [内面]

(約 1 : 2)



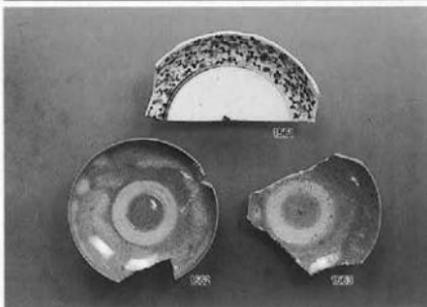
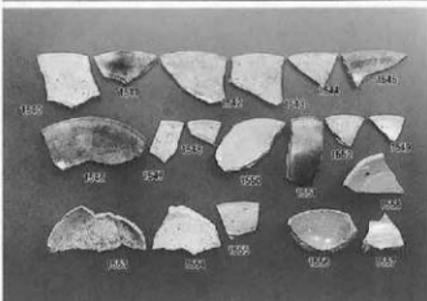
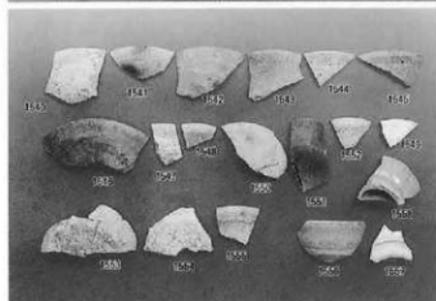
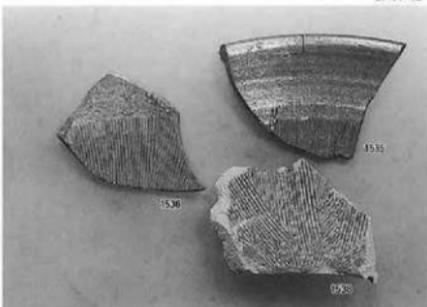






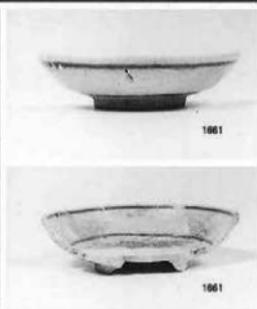
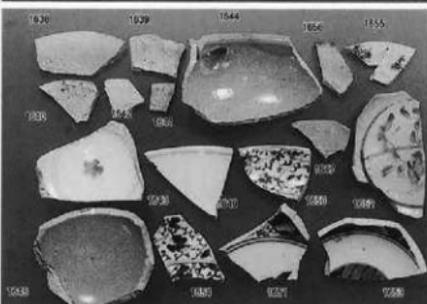
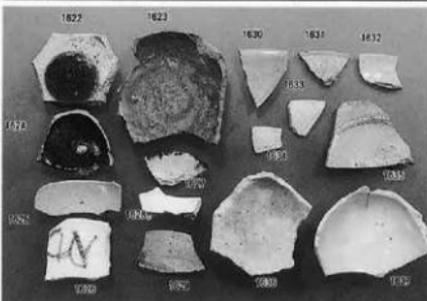
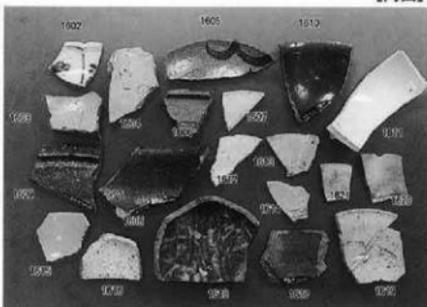
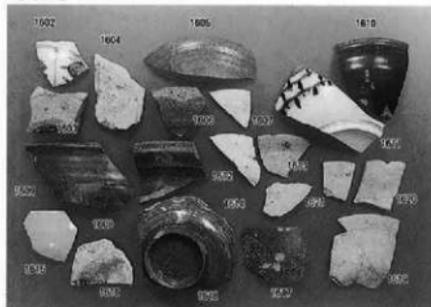
[外面]

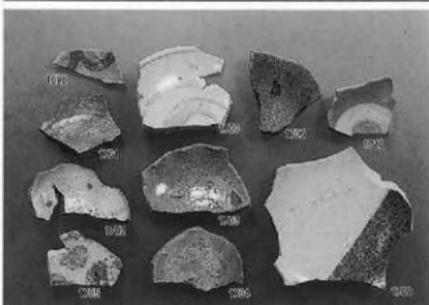
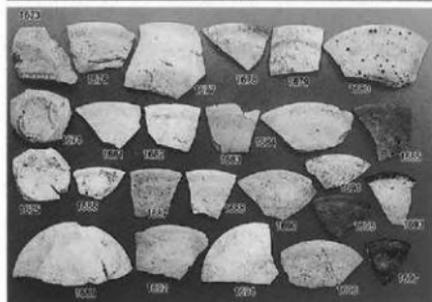
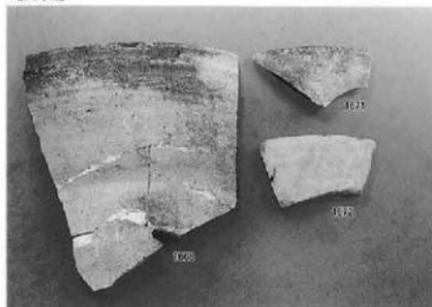
[内面]



[外面]

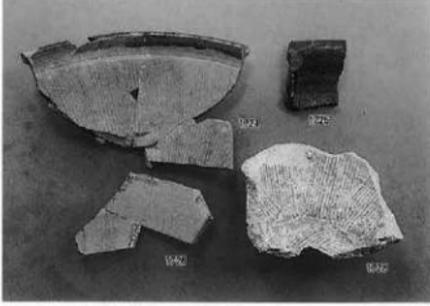
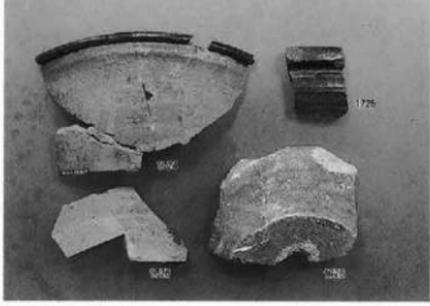
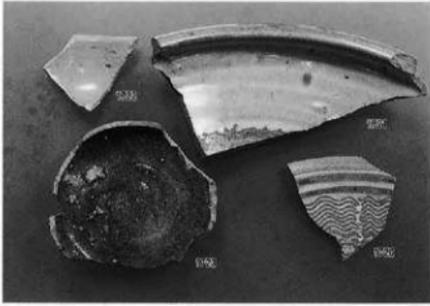
[内面]

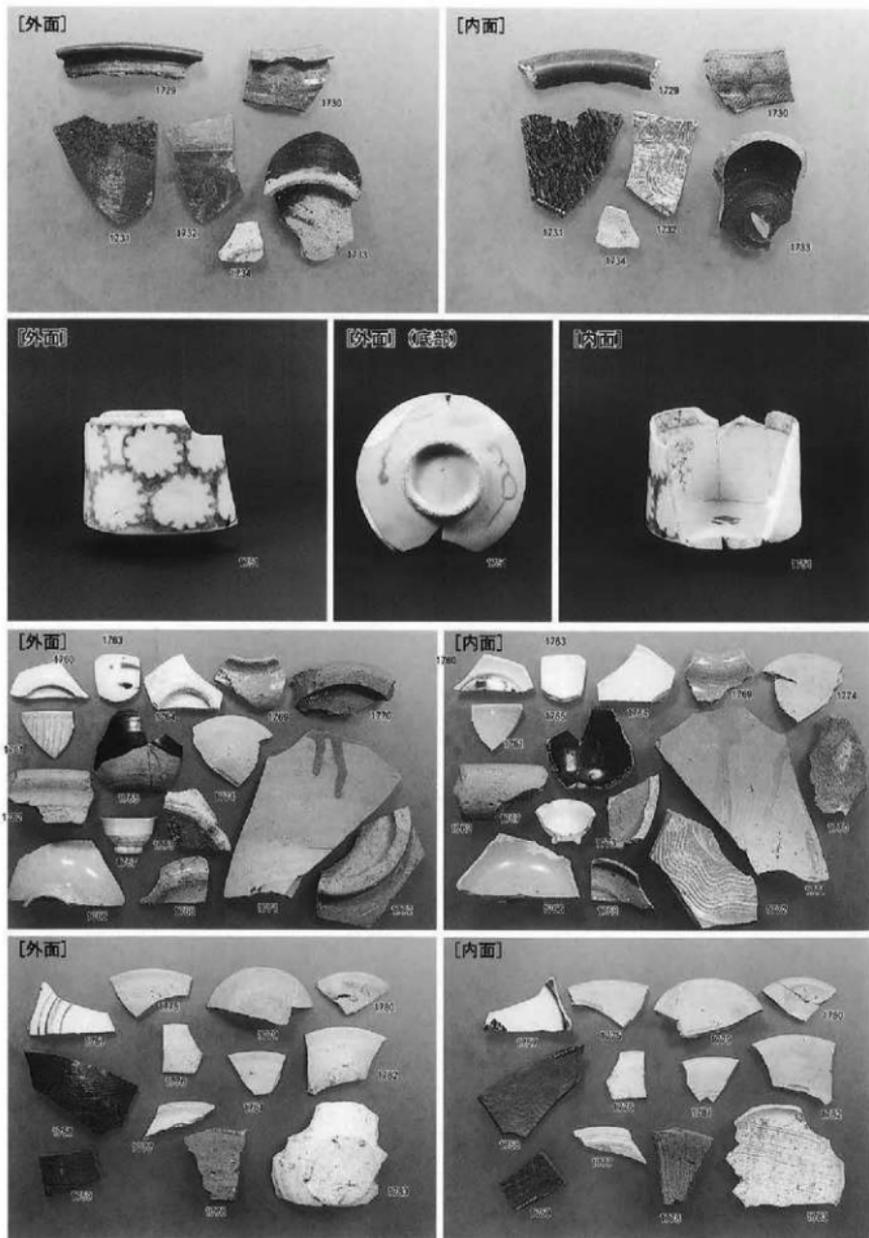




[外面]

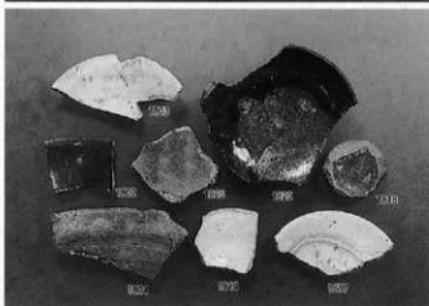
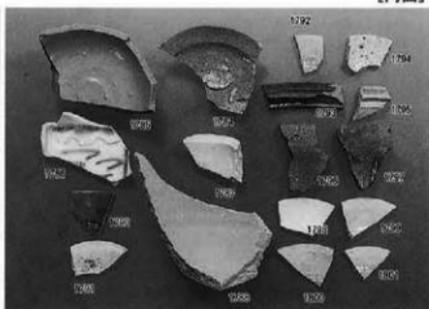
[内面]

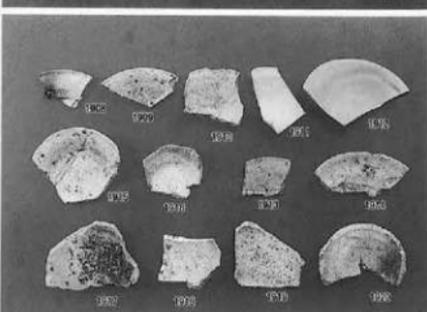
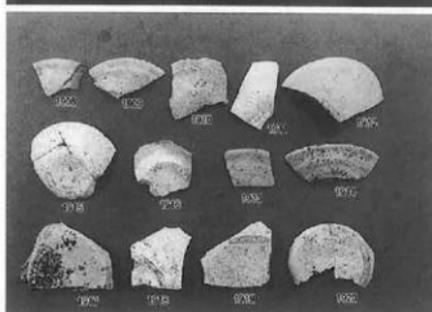
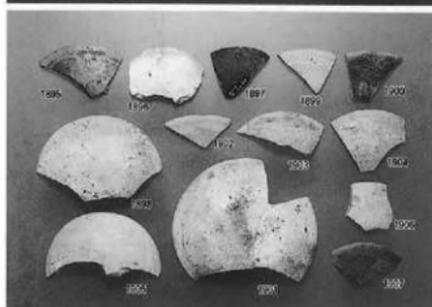
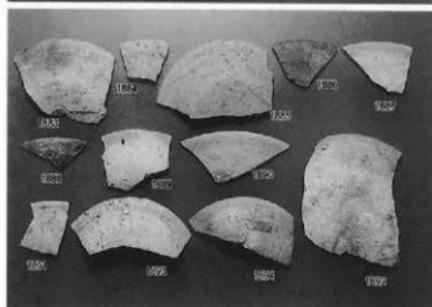
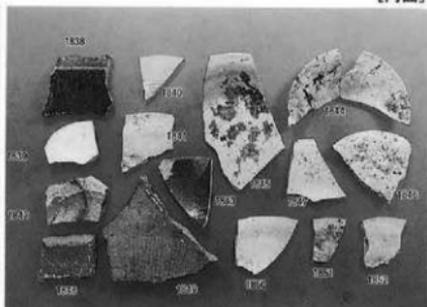




[外面]

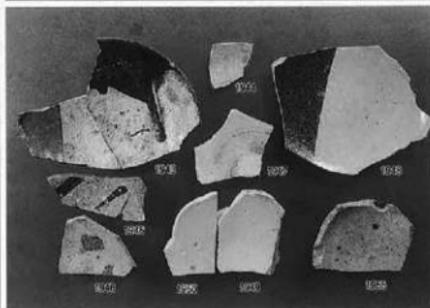
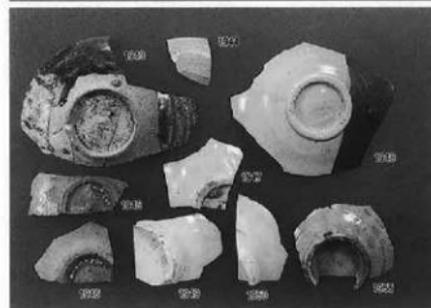
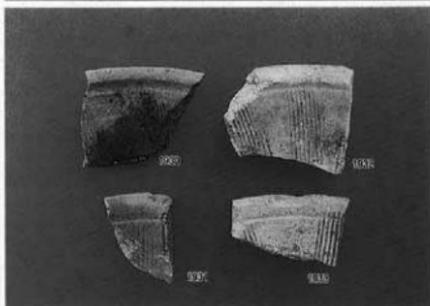
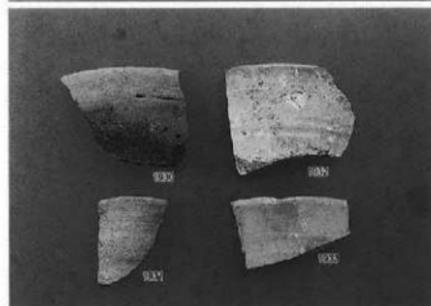
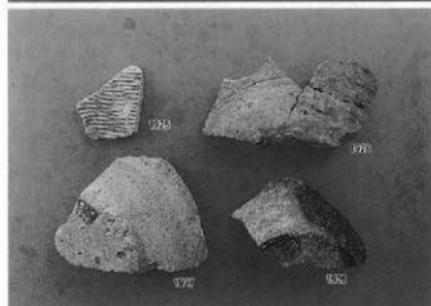
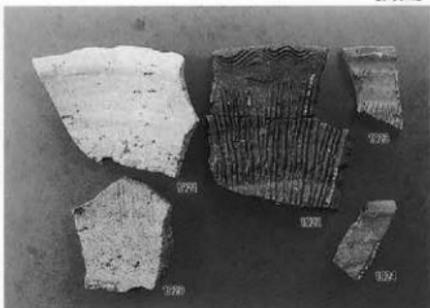
[内面]

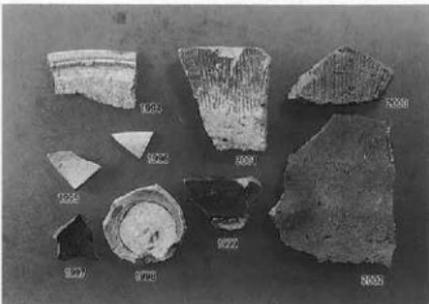
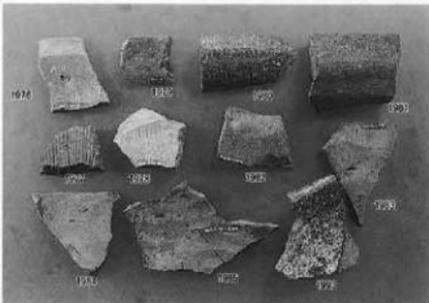
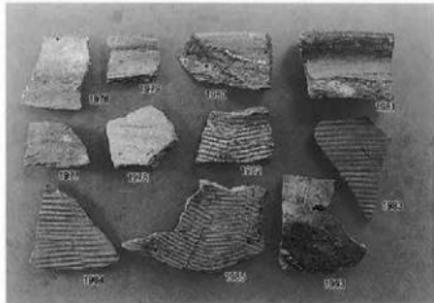
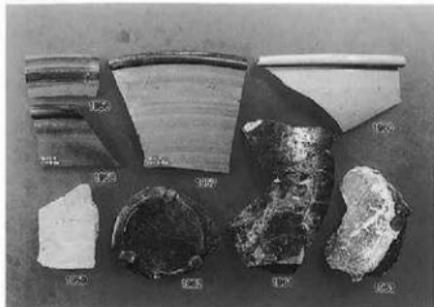


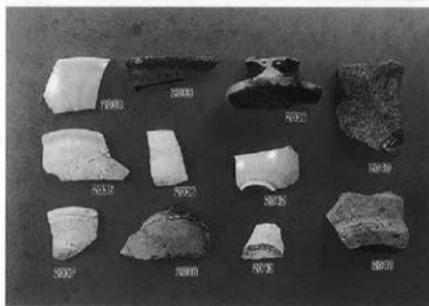
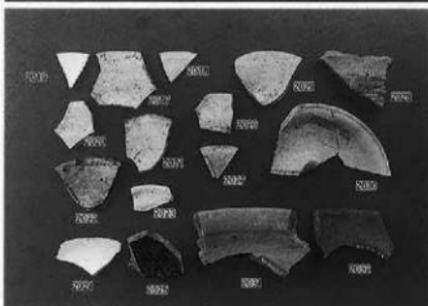
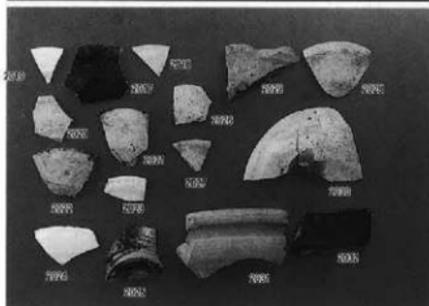
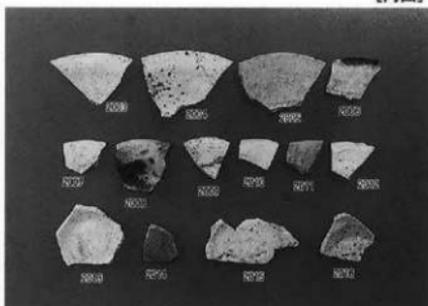
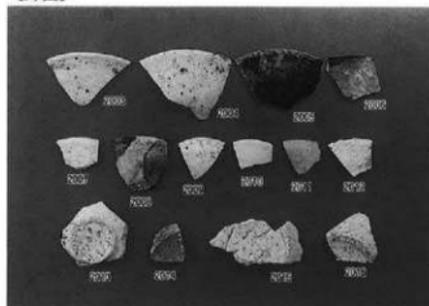


[外面]

[内面]







[外面]

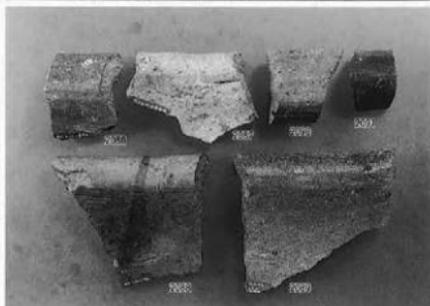
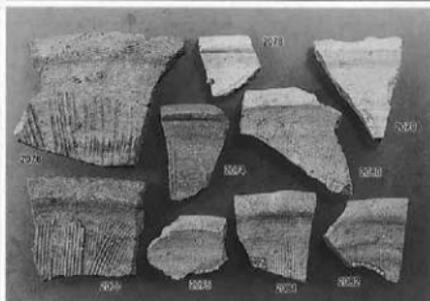
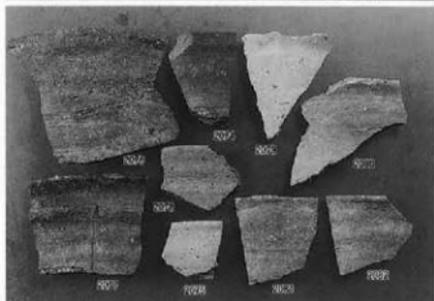
[内面]

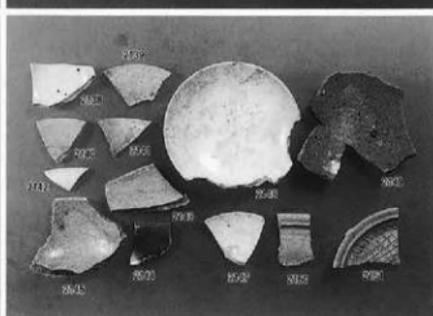
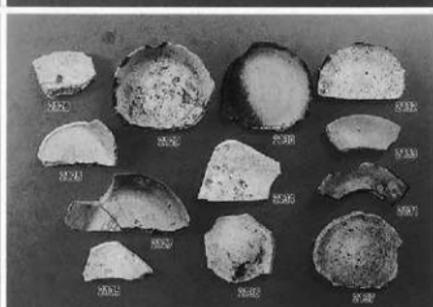
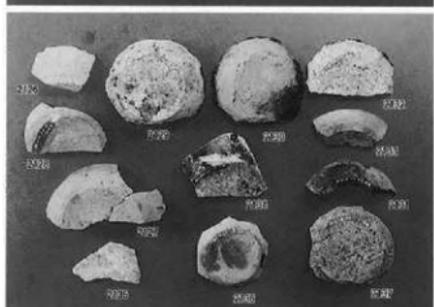
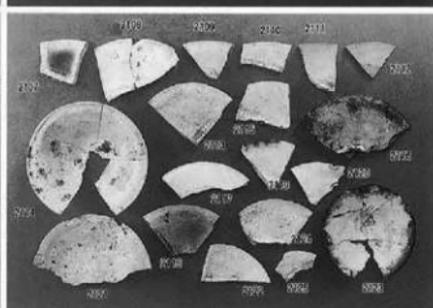
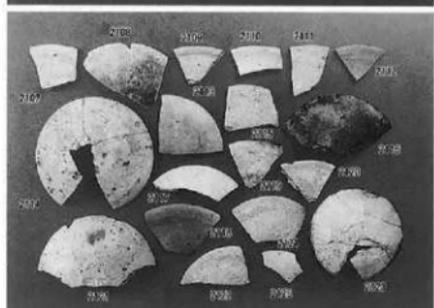
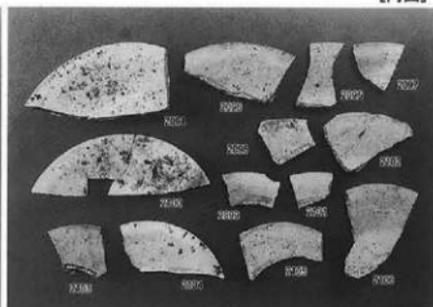


[外面]

[内面]

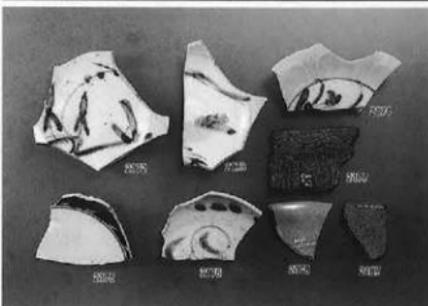
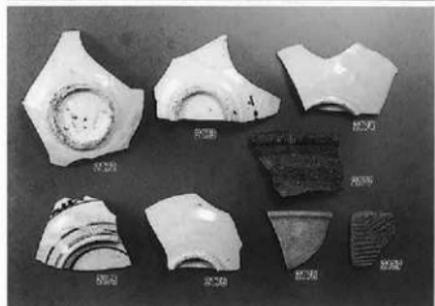
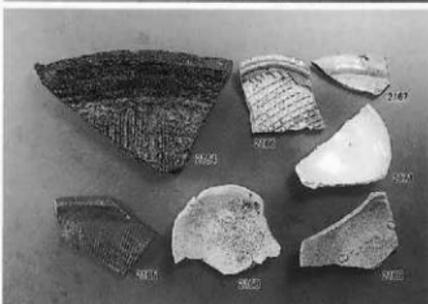
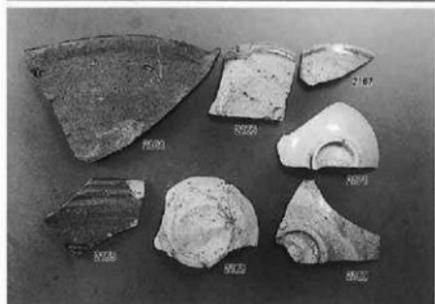
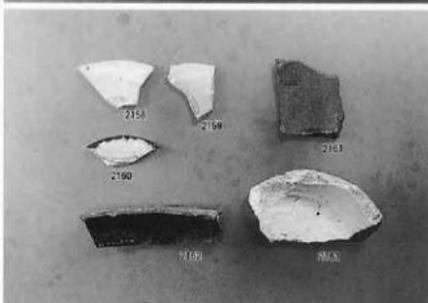
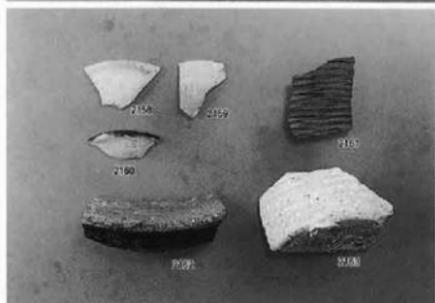


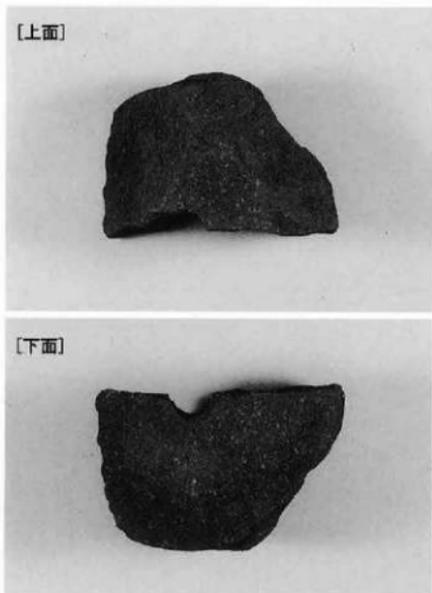




〔外面〕

〔内面〕

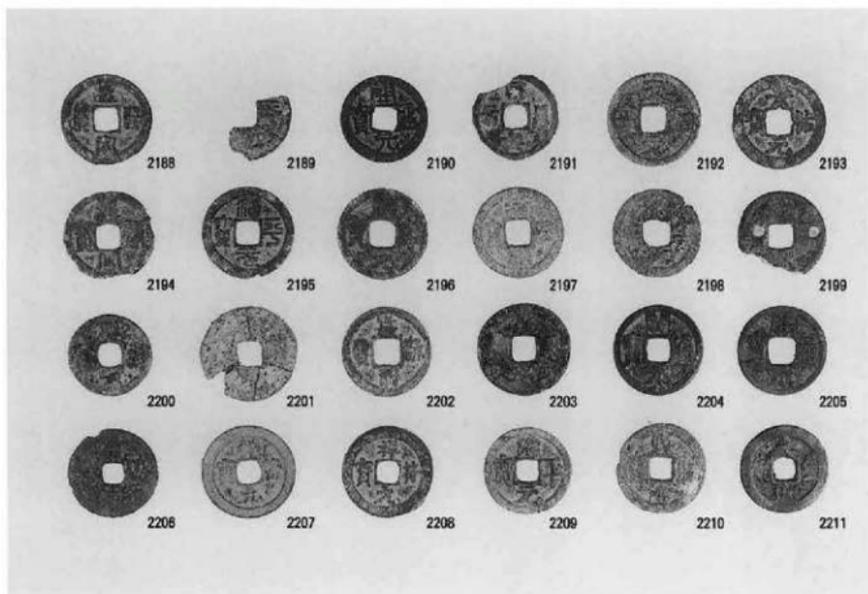




a. 茶 臼 (2265) (約 1 : 4)

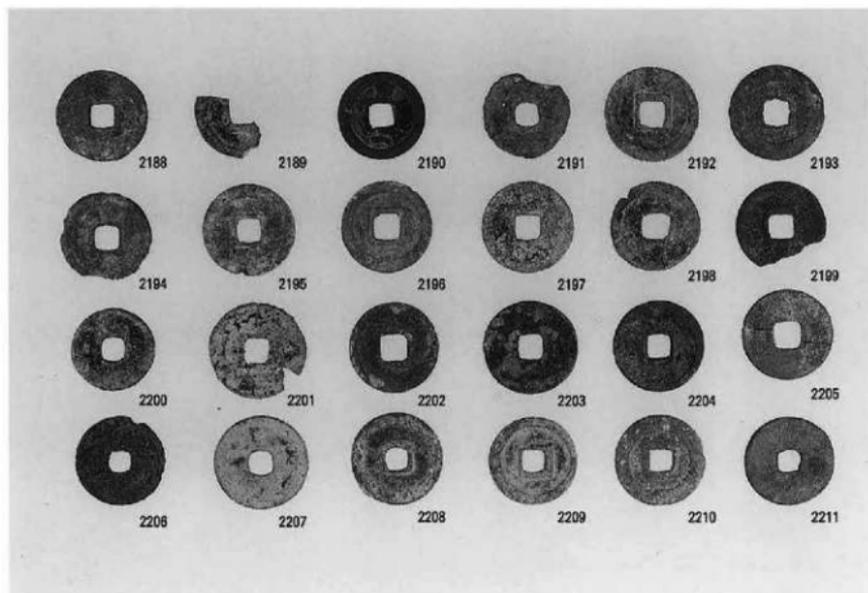


b. 石 臼 (2266) (約 1 : 5)



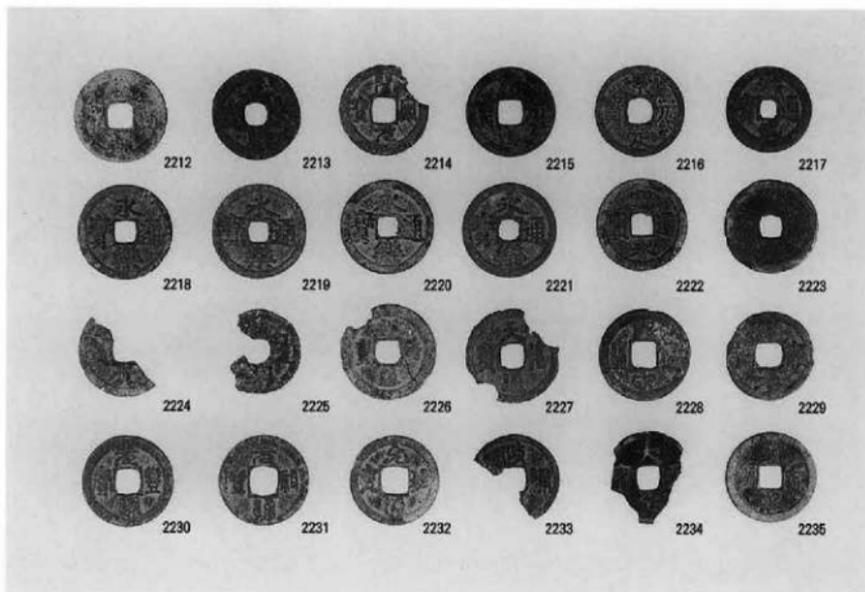
a. 錢 貨1 [正面]

(約4 : 5)



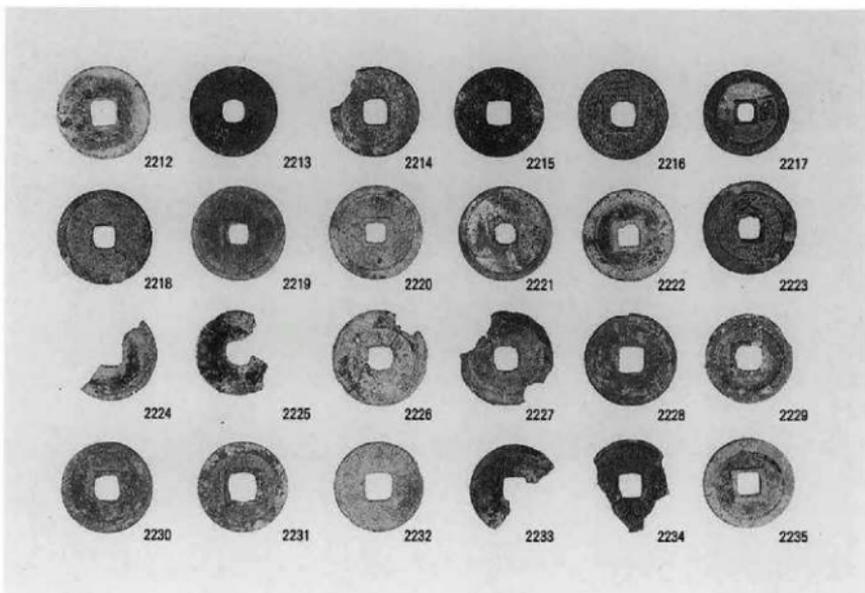
b. 錢 貨1 [背面]

(約4 : 5)



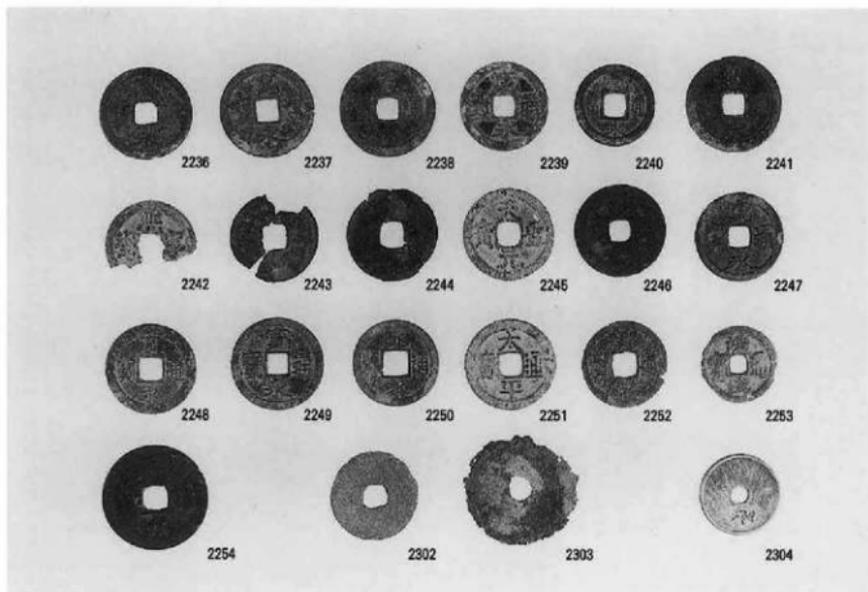
a. 錢 貨2 [正面]

(約 4 : 5)



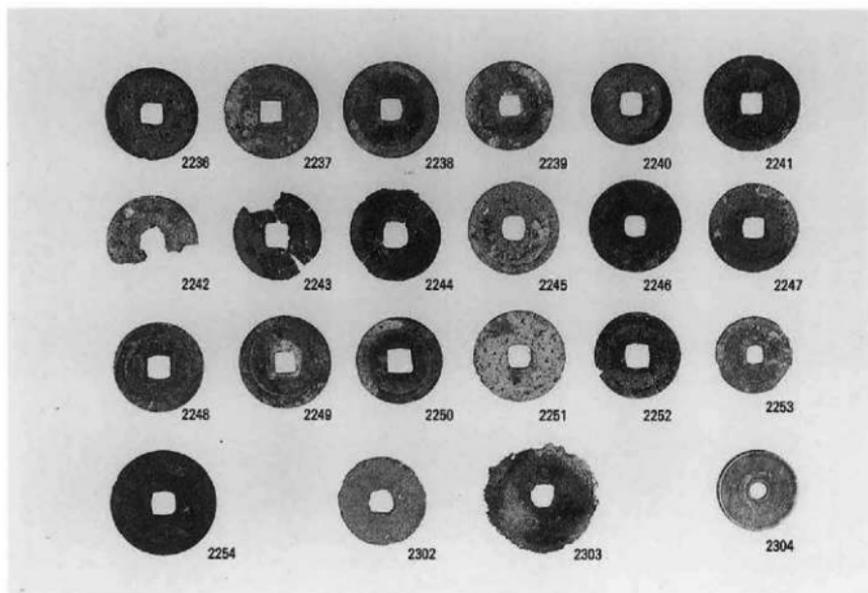
b. 錢 貨2 [背面]

(約 4 : 5)



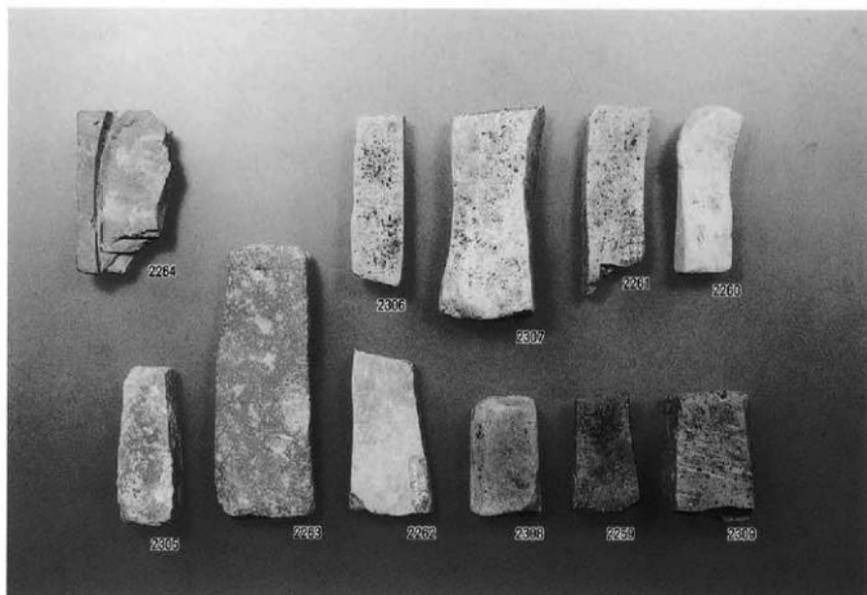
a. 銭 貨3 [正面]

(約4 : 5)



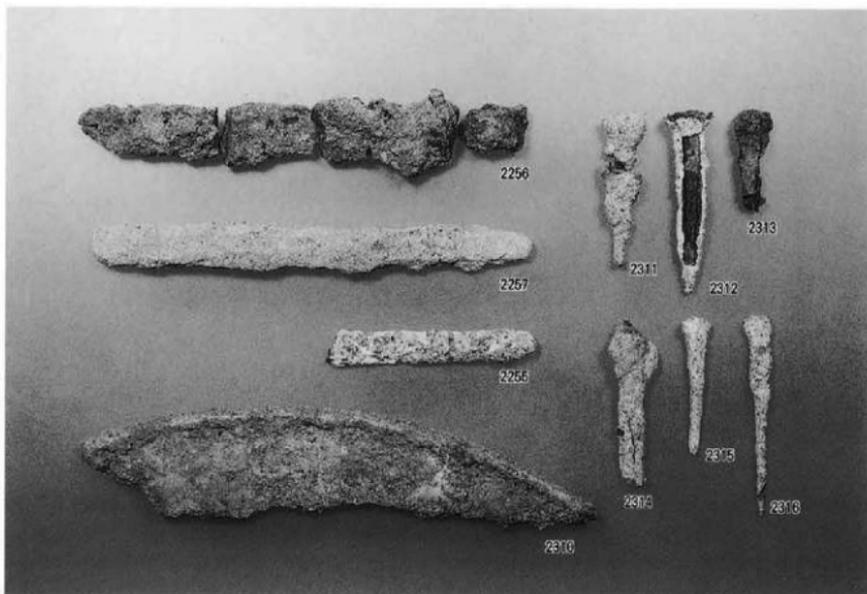
b. 銭 貨3 [背面]

(約4 : 5)



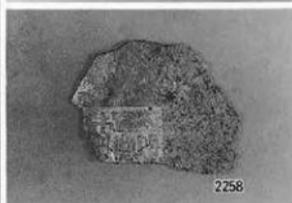
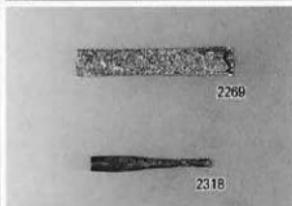
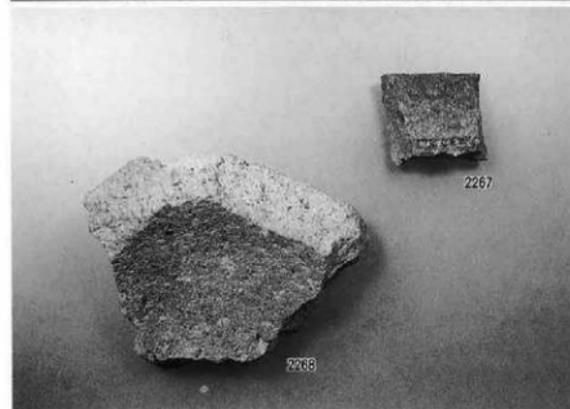
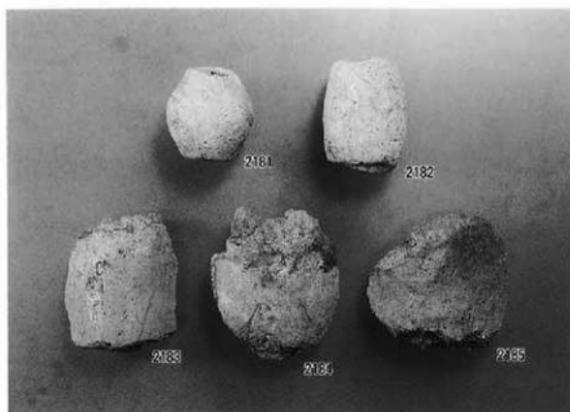
a. 硯・磁石

(約1:2)



b. 刀子・鉄釘ほか

(約1:2)



現場スタッフ



a. 現場作業風景



b. 現場スタッフ

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集

## 柏 崎 町

—新潟県柏崎市・柏崎町遺跡発掘調査報告書—

平成13年3月21日 印刷

平成13年3月30日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎第一印刷

